四神獣記

かふぇいん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四神獣記

【Ｎコード】
Ｎ２４１９Ｓ

【作者名】
かふぇいん

【あらすじ】
　天が見そなわし、四方を神獣に守られたその土地は、恒久の平和を手にし、まどかなる国、中つ国、と呼ばれた。
　神獣と心を通わす者が王として四方を治めるその国は、それを支える善き心を持つ獣人たちによって、万年の長きにわたって平和を保ってきた。
しかし、今、その均衡はゆるやかに崩れつつあった。

　己の出自を知らぬ少年、ファンはいつか獣人になるべく、旅を夢

見ながら、日々試行錯誤を繰り返していた。
　東都の獣人シンは、国の軋む音に心を決め、崩壊を止めるべく旅に出る。

四方をめぐる旅の中、二人が出会う人々、困難とは――

【長編】
※章ごとに、〇〇編、というように話がひと段落する形式です。五章分完結。
※１話は１０００弱～３０００字程度と比較的短めです。
※自サイト「鳶の旋回軌道上」より転載。

用語集（黄の地、御柱の章まで）（前書き）

注意！：大いにネタばれの可能性がありますので、章を終えた時など、必要になった時に見る程度をお勧めします。
※更新に合わせて、随時更新していきます。

本編は青の国の章より始まります。

用語集（黄の地、御柱の章まで）

始まりに、天へと続く御柱（みはしら）があった。そこは天が定めたすべての中央にして、礎となるための土地である。天は御柱の四方に四獣を配し、それらを世界の守護とした。天に守られたその土地にやがて人々が集まり、その中から四獣と心通わせる者が現れた。それが王である。四獣とそれと共に在る四人の王が治めしその地こそ、今日我らが生きる国である。

そして、いつしかその国は、その容（かたち）と天授の平和をもってこう呼ばれた。円（まどか）なる国、中つ国、と。

――――――冒頭より、国の興り。

――――――――――――――――――――――――――――――――

あ行

青の国：御柱の地の東側の国。東王と神獣青龍が治めている。首都は東都。春を司る国で、医療、薬学に秀でる地。国の色は青。豊かな緑に覆われ、低くなだらかな山が多い。北は黒の国、南は赤の国と接している。

赤の国：御柱の地の南側の国。南王と神獣朱雀が治めている。首都は南都。夏を司る国で、美術、芸術に秀でる地。国の色は赤（朱）。広い平原と、西に活火山、陽山を持っている。東を青の国と、西を白の国と接する。

王府：四方の国の行政組織。王を中心に、武官・文官で国を治めている。地方の町は、その町の者からの推薦を受けた人物、または王府から、王の任命を受けて長の任を負う。

か行

街道：大街道。円を成す中つ国を環状に巡る街道。陸路だけでなく、

途中に渡河や渡海を要する。街道沿いは物資や人が行き交うため、発展している。

麒麟：天を象徴する獣。殆ど姿を現したことが無く、よって獣人もいない。額に角を持つ、金色の獣。天社に神体として祭られている。救国の神獣。

金環山：御柱が降ってきた衝撃で出来た、環状の山脈。内側は黄の地とされ、御柱以外に人の住まうところはない。内側への道は元来なかったが、御柱への巡礼のために、現在は至黄の道という細い街道がつくられている。

化生：生まれた時よりその身に獣性を備える者。その多くは幻獣付きで、数が少ない。常人よりはるかに長い時を生き、歳を取りにくい。バクなど。

幻獣：滅多に現れず、人目に触れず、種というより個がその存在としているような、希少な獣。大抵が特殊な術を持ち、強い力を有している。神獣も幻獣の類。他の獣は家畜や野の獣のようなありふれた存在。これらの獣人は、獣と同時に存在しない。

黄の地：御柱のある中つ国の中心。中央に湖があり、その上に御柱が立っている。その地に町はなく、また御柱の力によって人の出生の起こらない場所。

五行：すべての物事を陰陽に分けた際に、そこからさらに分かれた五つの気。木火土金水の五つで、東が木行、南が火行、西が金行、北が水行、そして中央が土行を備えている。木火土金水の順に互いを生み強める流れを相生といい、木土水火金の順に互いを押さえその勢いを殺す流れを相剋という。この二つの流れによって国は均衡を保ち、安寧を作っている。

護虫：四方に巡らされた、力の総称。土地により異なり、そこで生まれるものに獣性をもたらし、認められたものと結びつく。東は鱗で鱗を持つ生き物、西は毛で四足の獣、南は羽で翼のあるもの、北は介で甲や殻を持つものをそれぞれ司る。また、四獣がそれらの長を務めている。

獄：中つ国の地下であり、異界。青龍となる前のシンを封じるために、四凶が作った広大な空間。建国後は蚩尤と四凶、魔の者が封じられている。咎を負った者は死後ここに送られ、虜囚の餌となり、そこに堕ちた魂は二度と出ることはない。中央に、影の王宮がある。

さ行

四凶：建国時に天と対立した蚩尤の擁する四柱の魔獣。天の勝利と同時に、それぞれ四方に封じられる。東に檮杌、南に窮奇、西に饕餮、北に渾沌。蚩尤は御柱の地下深くに封じられた。

至黄の道：四方から御柱のある黄の地へ向かう、細い街道。山を切り割って作られている。

四獣：四方を統べる神獣の総称。東は青龍、南は朱雀、西は白虎、北は玄武。天が国を分ける際に、各地の獣をそれに任じた。

蚩尤：建国の時、四凶を率い、天と対抗した魔の軍勢の王。天に封じられた後、太極を狙い復活したが、ファンの母に阻止され、バクによって再び眠りにつかされた。

獣人：自らの素養に沿う、獣の力を使役する人間。獣人は善き者、とされ、国の要職につく場合が多い。獣人は大まかに、昇化、化生、獣堕の三種がある。

獣堕：素養に沿いながらも、本人の意志に反して外野の獣の気が憑くと現れる。ごく稀に、素養を無視してとり憑く場合もある。大抵にして自制、理性を失い、暴れ出す。

昇化：獣人のほとんどがこの種。自らの素養を知り、四方への礼を行い認められると、土地にある獣の気が、その身を介して力を出現させる。

神魔大戦：建国の際、天と対立した魔との間で起きた戦い。天と人の混軍と、蚩尤の率いる魔獣の軍が戦った。建国神話のひとつ。

水盆鏡：深めの盆のような鏡。水を入れることで鏡となる。獣人はこれを用い、別の獣人と会話することが可能。熟練すると小さな物なら渡すこともできる。

朱雀：南の地を守護する神獣。火を纏い、五色の尾を持った火行の具現。羽虫（羽のある生物）を統べる。すべてを焼く火の力を持ち、同時に邪なるものを滅する浄化の力を持つ。陽山の火口より生まれたとする火の鳥。神獣同士での呼び名は、朱明。

聖獣：四方の神獣に次ぐ力を持ち、年月を重ねた獣。大抵が希少な幻獣で、遥か昔から生きている。それらの獣人となると更に稀少。

青龍：東の地を守護する神獣。青い龍で木行の具現。鱗虫（鱗のある生物）を統べる。回復の力を持ち、生ける者の気の流れを読み、春の目覚めの力をもって傷を癒す。また、木行の起こりとされる風の姿でもある。神獣同士での呼び名は、句芒。

仙人：獣人とは別に、特殊な術、技能を持った不老長寿の人間。大抵が浮世から離れて過ごすか、御柱に仕えている。自覚の有無はそれぞれ。

素養：すべての人間に備わるという獣の素質。しかし、定まる時期には個人差がある。

見立て：素養の内容を見定め知ること。御柱の社より遣わされた者によって行われる。

た行

太極：御柱のある中つ国中央、黄の地で生まれた人間。黄の地の特性の為、まず生まれないとされてきた。その素養は御柱や天の力に関わるため、天や獄への鍵となる可能性があるされる。

天社：天を祀る社。天の定めた理を説き、人々を導く。また、人に備わる獣性を素養として見立て、その身が善なるをはかる。御柱の天社が本拠で、各地に分祀を持ち、御柱から派遣されたものが官として任につく。

天社の官：四方に派遣された者は、分祀の管理や、天の理を説き、素養を身立てるのが主な仕事。本拠である御柱の天社に務める官は、中つ国全ての情報を管理し、必要ならば四方へそれらを発信する。ここに務める者は大抵が仙や化生の者で、長命不老の者が集まって、

長期的な視点で中つ国を見守っている。相応の力がなければ天意を預かれないため、大抵のものが強い力を持っている。それら全ての長が、神官長と呼ばれ、それを補佐する副官がついている。

な行

中つ国：物語の舞台となる世界。中央を除き、東西南北の四つの国を配している。御柱を中心に円をなす国。

は行

はじめの町：町の名は浅水。街道沿いにあり、比較的大きな町。

はじまりの王達：中つ国建国に際し、四方の国の祖となる王。魔の軍勢と戦い、平和を勝ち取った、善なる者。東西南北それぞれが後に、木王、金王、火王、水王とおくり名される。彼らの使っていたものが、神器となり四方に王権の証として残されている。

ま行

湖：御柱の周囲を覆う大きな湖。この湖を源流に、北東と南西へ二本の大河が走っている。御柱のある中島へは、日に数度道が現れる。

見立て：素養の内容を見定め知ること。御柱の社より遣わされた者によって行われる。

御柱：みはしら。中つ国の中央にある巨大な搭。空から降ってきた剣といわれ、天が住まうとされる。天を祀る社があり、各地に分祀を持つ。湖の中島にあり、一日に数度現れる道によってのみ渡れる。

や行

陽山：赤の国にある活火山。遥か昔から噴火と休息を繰り返している。今は活動期で、特に大きな噴火が予想されている。朱雀と鸞の誕生の地。

ら行

わ行

人物集（黄の地、御柱の章まで）（前書き）

注意！：大いにネタばれの可能性がありますので、必要になった時に、対応する章を読み終わった際に見る程度をお勧めします。
紹介というよりは、脳内整頓用の人物集です。
※連載に合わせて、随時更新していきます。

本編は青の国の章より始まります。

人物集（黄の地、御柱の章まで）

主人公（一と二がありますが、便宜上のもので優先度ではありません）

シン：主人公その一。東を統べる神獣の一、青龍。またの名を句芒（こうぼう）。本性は青い鱗を持つ壮麗たる龍だが、旅の間、人に姿を変えている。普段は長身の青年で、端整な面立ち。背の高さ故に細く見えるが、しっかりとした体つきをしている。左腕と額に青い巻き布をしていて、額の布は眉から広く前頭まで覆う。武芸の心得があり、使うことはないが帯刀している。多少頑固なところがあるが、許せるところはかなり融通。元が龍の為に、力の回復に食べ始めると、食堂が空になる。人よりは鼻が利く。

国と自身の異変を悟り、四方の王と神獣に礼を述べるため、旅に出た。

ファン：主人公その二。東の大きな街に住む十五歳の少年。伸び盛りだが、まだ比較的小柄。金色に近い明るい髪をひっ詰めて結んでいる。身軽で、体術等の物覚えはいい。反面、小難しい理屈は覚えるのが苦手。好奇心旺盛、根は素直で利発。育て親の意向で過保護に育てられたため、反発するのは不得意。また、一つに集中すると、他に気がいかない。

国の中枢、御柱で獣堕と化した母親から生まれ、中央の力を具現しうる特異な存在、太極となる。その身に災厄の及ぶのを危ぶんだ神官長に連れだされ、これまで育てられた。

青の国の章

バク：ファンの育て親で、東の町で小さな医院を営む男。幻獣、獏の化生で三十ほどの見た目だが、長命不老のため数千年を生きてきた。痩身の麗人で、長髪をひとつに結っている。物腰も柔らかいため、女と紛う者も多い。筋金入りの心配性で、親代わりとしてこれまで多少過保護にファンを育ててきた。優しいがしつけには厳しい。ファンにとってこれまで慈しんでくれた親であり、教え導かれた教師であるが、その実は御柱の神官長で、太極として生まれたファンを守るために、御柱を出た。獏という幻獣の特性から、夢や記憶を読み、操る術に長けている。

シー・イー兄弟：双子の男で、それぞれ蜥蜴の素養を持っていた。が、獅子に憧れる心を檮？に付け込まれ、仲間と共に太極の誘拐を企てる。

？

青の国の章２

リーユイ：東の関近隣で、官の配給を狙う盗賊の首領。潔癖で頑固だが、根のまっすぐな生真面目な男。志を同じくする、自分と同じような若者を集め、賊を結した。元々は役人を目指して獣人となり帰ってきたが、官の腐敗に憤りを覚え、王府を庇う父と仲たがいし、家を出た。鯉の昇化で、水を操る。獣化すれば、水中で呼吸できる。妹には弱い。

シュウ：東の関の衛士であり、それらの取り纏め。気のいい男で、また細かいところまで気が利く。普段は大扉の前で棍を携え、関を守る。檮？との戦いの際、部下の衛士への指示、町の守衛など、被害が出ないようにはかった。町人の信は厚いが、本人は重役を嫌い、衛士に甘んじている。

檮?（コツは木偏に兀）：とうこつ。四凶の一で、蚩尤（しゆう）の配下。東の地に封じられた、建国の魔獣。大戦ではシンと戦った。長い尾を持つ、トラや猪の巨大な混獣。人の姿は武骨な大男で、どちらの姿でも左肩から袈裟がけに大きな傷があり、左脇腹に蚩尤の眷族を示す刺青がある。尊大で好戦的、細々したことを嫌う。その頭に、撤退の二字はない。

ジンユイ：ニエンの娘で、リーユイの妹。病で亡くなった母の代わりに家事を切り盛りし、仲たがいしている兄と父の仲を何とか取り持とうとしている。しっかり者で、料理上手。

ニエン：南都との関の前にある山間の村長。リーユイ、ジンユイ兄妹の父親。盗賊となった息子に憤りを覚えている。王府を信じ、昔からの在り方を守る。

町長：東都への出向を望むあまり、檮?に付け入られる。強きになびき、檮?に言われるがままに動いた。その心の弱りや穢れにより、獣人としての力を失っている。檮?に見捨てられた後に、リーユイやシュウに叱責され、どこかへ消える。

?

赤の国の章

朱明（しゅめい）：南の地を統べる神獣、朱雀。火行の具現で、炎を纏った、朱の巨鳥。尾は五色に彩られ、鳴声は天上の調べに例えられる。人の姿は赤い衣をまとった十ほどの少年で、喜怒哀楽がはっきりとしている。一人称は余。美しいもの、楽しいものを好み、自ら楊琴を奏でることもある。隣国の神獣であるシンとは比較的仲が良い。

ランファ：現南王で、赤の国を治める、朱雀の獣人。艶やかな黒髪

の三十ほどの美しい女性。南の季候もあってか、普段は重い衣を避け、朱の吊帯長裙に薄紅の繻子の衣を羽織る。面倒見がよく、快活。「ふさわしい振る舞い」を重んじ、臣下や民の前では王らしく振る舞う。仲を違えた年の近い妹がいる。

ジェン：窮奇につき従う、幻獣鴆の獣人。光の加減で緑に艶めく黒い衣装を纏う、妖艶な踊り子。南部の酒場で舞い、集落に毒羽根をもたらした。本名はグイファで、南王の妹。一途で真面目な性格だったが、目標にしていた姉が王となることで、圧倒的な差を感じ、出奔の後、恨み妬みを募らせていた。窮奇を心より信奉している。

シャオファ：南都の外の“集落”に住む少女。花の細工や装飾品を売り、生活している。素養が知れないことや集落の生まれであることに、引け目を感じている。踊り子であるジェンに憧れ、心酔していた。

ダーシュ：シャオファの父で細工物の職人。長のいない集落で発言力を持つ。

ルーユウ：南王近衛の獣人。鴉の昇化。神域への立ち入りのできる数少ない人間。嘘も方便が信条の、世故ずれした男。

窮奇（きゅうき）：きゅうき。四凶の一で、蚩尤の配下。南の地に封じられた、建国の魔獣。大戦では朱明と対峙した。本性は翼のある黒豹。人の姿は細身の美しい男で、理知的な言動をする。左手の甲に蚩尤の徴を持つ。独特の美学を持ち、世にいう善を嫌い、悪行を行う者を好む。また、考えようとしない者も嫌う。黒い澱みを生じさせることで、自身の体の保護や移動を行う。

？

赤の国の章2

イェンジー：金環山の中腹に庵を建てて住む、絵描きの男。無自覚の仙人で、描いた絵を現実のものにする。気にいった絵が描けないとその間酒に酔い、気まぐれに過ごすが、絵に対してだけは非常に真摯。右目は視力を持たないが、代わりに気や物の真実が見える。

鸞（らん）：鸞という幻獣にして聖獣。朱雀の姉。フーという名前がある。自身の外見ゆえに人目につくのを恐れ、人と関わらないように過ごしている。が、人への興味はあり、また過去に親切にしてもらった人間を想い続けている。本来の姿は、朱雀を凌ぐほどに美しい五色の巨鳥で、火山の熱を司る。

？

黄の地、御柱の章

白澤（はくたく）：御柱の社の副神官長。聖獣、白澤の化生で長命不老の存在。眼鏡をかけた両目の他、額の中央、縦にもう一つの目を持つ。髪を後ろに撫でつけ、白と藤の上衣下裳を身につけている。生真面目で、天の理を守ることに忠実。それを破る者に対しては非常に厳しい。額の目によって見れば大抵の素養が知れる。分祀にいる見立ての官の総取締。バクが不在の間、天社をまとめ、その帰還を待っている。

金烏（きんう）・玉兎（ぎょくと）：御柱の案内や、御柱全体の管理を任された二人の童子。金と銀の違い眼をしていて、左目が金なのが金烏、銀が玉兎。太陽を示す金の鴉と月を示す輝く兎の化生。御柱の多くの官と同じく、長命不老の者。

リリ：御柱の幻影として現れたファンの母。四方いずれかの文官で仙女。長命だったことがうかがえる。腹の中の赤子を守るため、命

を賭して守りの術を張った。ファンを生んだ後、絶命する。芯の強い、快活な女性。

ウェイ：御柱の幻影として現れた、ファンの父。四方いずれかの武官で武術に優れた。身重の妻を連れ、御柱まで来たが、旅の間ずっと父になることの懊悩を抱えていた。蚩尤に取りつかれたリリの手によって一度は絶命し、ジュジによって錯乱状態のまま甦らされる。ファンに襲いかかるが、最後には自身の覚悟と意志を取り戻し、ファンへの愛情を伝え、消える。

ジュジ：ファンと共に御柱を巡った、正体不明の少年。白い肌に銀の髪、血のような緋色の瞳をしている。意味深な言動を繰り返すが、本質に迫ることは語らない。魔の者との繋がりを持ち、そこでは蚩尤の子息と名乗る。

はじまりの町

始まりに、天へと続く御柱（みはしら）があった。そこは天が定めたすべての中央にして、礎となるための土地である。天は御柱の四方に四獣を配し、それらを世界の守護とした。天に守られたその土地にやがて人々が集まり、その中から四獣と心通わせる者が現れた。それが王である。四獣とそれと共に在る四人の王が治めしその地こそ、今日我らが生きる国である。

そして、いつしかその国は、その容（かたち）と天授の平和をもってこう呼ばれた。円（まどか）なる国、中つ国、と。

これは、天の治が始まりてより、いよいよ万を数えたというころの話――

東の王都、東都から南へと向かう街道沿いに、旅客に賑わう一つの町がある。名は浅水。交通の要であるその町は、物と人とが忙しく行き交い、大通りからは人の声の絶えることがない。町の中央にある広場に続く大通りには様々な店が並び、行商たちが少しでも良い場所を得ようと、朝は開門の鐘からすぐ人の声が動き出す。

そこに並んだ店の中に、それほど大きくないが美味と知られた食堂があった。時刻は正午過ぎ、仕事に出かける者と合間に休む者とが忙しく出入りし、回りの早い時間帯だったが、今日は一席、いつまでも空かない席がある。

「お客さん、本当にちゃんと払えるんだろうね」

給仕では手に負えぬと出てきた店主は、訝りながらそう訊ねた。その問いの向かう先には、今にも倒れそうな食器の山。店の料理の大半のその後が積まれた中に、埋まるようにして座る青年がいる。あまりの量に、他の客が時々見に来る始末だ。勘定を受け取りに来るたびに次の料理を頼まれるから、とうとう給仕が店主に泣きつい

たのだった。
　青年は、歳の頃ならば二十代半ば。額と左の上腕に鮮やかな孔雀藍色の布を巻き、拵えの見事な一振りの剣を帯びている。額の布は眉から前頭まで、跳ねがちな黒い髪を押さえて巻かれている。鮮やかな青は東王府の色であるから、そこから来たのだろう。店主の声に、青年は最後の一口をかきこみ、傍にあった茶を飲み干した。
「ああ、大丈夫だ。今終わった」
　青年は懐から手のひらに半分ほどの金の板を取り出し、店主に差し出した。金は市場に出回る銀や銅とは違い、貨幣としては殆ど回らぬ代物だ。店主は延べ金と男を何度も見比べ、じっとそれを検分してから懐にしまった。
「ちょっと待っておくれ、お釣りを持ってくるよ」
「いや、重くなるからいい」
　事もなげにそう言って、青年は空の湯飲みを差し出した。それまで訝しげだった店主は、変わって顔をほころばせ、それに茶を注ぎ入れた。
「本当かい？　いやぁお兄さん、気前がいいね。そういや、その青。お兄さん、東都の国士さんか何かかい？」
　店主は問うた。青年の身なりを見てのことだろう。商人でもないし、他の旅人とも少し様子が違う。何より、それなりに良い身なりに見えるのに、連れも見当たらない。街道には時折、人を襲う獣が出るから、一人で旅する者はめずらしいのだ。注いでもらった茶をすすり、青年は笑う。
「いいや。確かに東王のもとから来たが、これは私用の旅だ」
　湯飲みを置き、青年は立ち上がる。とびぬけるほどではないが背は高く、そのせいか細く見えるが、しっかりとした体つきをしている。身のこなしからはどことなく、武術の心得が感じられる。
「ここから次の宿場まで、どのくらいかかるだろうか？」
　店を出ようとした青年は振り返り訊ねる。街道は整備されているとはいえ、町と町の間はそれぞれで、所によっては朝出なければ、

次の町につかないことがある。町は日没とともに門が閉まってしまい、朝まで開くことはない。野営するという手もあるが、夜は獣が動くからよほどのことでない限り、それは避けるべきだ。

「そうか、なら今日は出ぬほうがいいな」

「宿を紹介しようかね？」

店主のその申し出に、青年は首を振る。

「いや、それには及ばん。町を見て回りながら、自分で探そう」

そう言って、青年は店先に張られた日よけの布をくぐる。

「馳走になった、ありがとう。美味かった」

青年は礼をいい、大通りへと歩き出す。店主もそれに応えて、店先まで出てそれを見送った。

少年と保護者（1）

青年は店を出て、とりあえず広場に向かって歩き出した。これくらいの町になれば宿も数あろうが、数があればそれぞれなのが常だ。道を往くと、何やら広場が騒がしくなっていた。大抵の町がそうであるように、広場の中央には鐘楼があって、朝と夕、門の開閉を告げる鐘が鳴らされる。日の入りと日の出を告げる鐘だ。行き交う人の話を聞く限り、誰かがその鐘楼に上っているらしかった。昼下がりだ、鐘を撞く人間ではないのだろう。広場に入って見あげて見ると、そこにいたのは十五かそこらの少年だった。明るい色の髪をひっ詰めて後ろで結い、こちらを見下ろす目は挑戦的に輝いていた。

「おれは、鳥になる！」

少年は誰に向けてか、そう叫んだ。下に集まって来た野次馬は、心配半分面白半分でいるようで、鐘楼の真下で店を構えていた果物売りの行商も商いの手を止めて上を見あげている。

「今度は鳥か！　この間は魚だったな！」

野次馬の中からそう声が上がり、辺りに笑いが広がった。どうやら、町の者にとってはこれが初めてでないらしい。それが面白くないのか、少年は逆光でもわかるほど顔を赤くし、不機嫌に黙りこむ。ぎっと下の方を睨みつけると、見ていろ、と言わんばかりに後ろに下がった。ようやく野次馬の中にも、その意が汲めて慌てだすものが出たが、止める声は少年には届かない。

青年は野次馬の中へと割りいって入る。いくら鐘楼がそう高くないと言っても、石畳に落ちれば軽くは済むまい。落ちて来る少年を避けようとする者と、なんとか捕まえようとする者とで人の群れはざわざわと動く。不意に、差していた日光を影がおおう。少年が飛び出したのだ。

「うぅわっ？」

勢いよく飛び出した少年が、妙に上ずった声を上げる。撞き鐘の

縄に足を取られたらしい。飛びだそうとしていた広場の中央から、予定が鐘楼の真下になる。少年の悲鳴は人々のそれと交じってわからなくなる。

鐘楼の真下にあったのは、幸か不幸か騒ぎを見物していて空になっていた、果物売りの店だ。立ててあった日よけの天幕に、少年の身体は一度弾み、布に包まれるようにして地面に落ちた。その下にあった果物の籠が弾みで倒れ、赤い果物が広場のあちこちに転がっていく。一度天幕に落ちたせいか、少年自体に目立った怪我はないらしい。痛みに呻きながら、しばらくして少年は起き上がる。

「何事です！　ファン！」

広場の向こうから、厳しい声が聞こえて来る。青年が来た方とは別の通りだ。

「おい、ファン。バク先生だ」

少年に、町の者が声の正体を告げるが、言わずとも少年もそれに気付いたようだった。気まずげな顔でそちらを見やるが、どうやら逃げる気はないらしい。町の者の声を聞く限り、どうやらその者が少年の保護者であるらしかった。

広場に入って来たのは、白い上着の男。それを見る限り、どうやら医者であるらしい。男とはいえ、その者は女のようにも見えるほどに線が細く、臙脂の紐で一つに結われた長い髪は、走って来たせいか少し乱れている。

「せ、先生……」

少年は消え入りそうな声で、呟く。その場に座り直したところをみると、これから落ちる雷についても定例のことであるようだった。先生、と呼ばれた男が目の前に来ても、少年は視線を上げられずにいた。男が来たからか、野次馬が散り始める。

事態が収まって来たのを見て青年も去ろうかと思ったが、ふと思い出して立ち止まる。バクという名に覚えがあった。古い知り合いに、同じ名の者がいる。声や背格好も確かに似ていた。

声をかけて見るか。青年はまたそれぞれに戻る見物人を避けて、そ

の場に残ることにした。

少年と保護者（2）

「怪我は？」

何も言いだせずにいる少年に、バクはそう問うた。その問いかけが意外だったのか、ようやく少年――ファンは顔を上げる。ない、と首を振ってまた俯き加減になった少年は言葉を次ぐ。

「ごめんなさい、先生、おれ……」

「これで何度目ですか！　……とはいえ、お説教は後です。お店の方に謝らなければ」

バクはファンを立ち上がらせて、伴って行商に近づく。行商は布の落ちた天幕を張り直しているところだった。

「すみません、この度はうちの子が大変ご迷惑をおかけしました。ほら、ファン！　謝りなさい」

ファンが頭を下げるのに合わせ、バクも一緒に頭を下げる。

「どうお詫びしたらよいか……。傷ついたものがあれば、買い取ります」

行商は倒れた籠を起こし、にこやかに笑った。

「いやいや、天幕も破れていないし、今日は良く売れてね、もう籠には殆ど残って無かったんだよ。そう気にしなくていいんだよ、先生。……そうだな、坊ちゃん。辺りに転がったのを拾ってきてくれるかい」

ファンはしっかりと返事をすると、すぐに転がった果物を探しに駆けていった。

「しかし、そういうわけにもいきません」

「そう済まながらないでも、坊ちゃんに怪我がなくて何よりだ。あれくらいの歳は無茶をするからね、どの道お説教するつもりなら、こっちは何もさ。そうだ、先生。気になるなら買っていきませんか。今年のは特に美味しいですよ」

行商はそう言って、いくつか色の良いのを差し出す。

「申し訳ありません、戴きます」
バクは重ねて礼を言って、それを買い取った。腕も使っていくつか抱えて、露店から離れる。ファンはまだ転がっていったのを探して広場をあちこち走りまわっていた。もうしばらくかかるだろう。天幕があったとはいえ、擦り傷一つなかったのは、本当に運が良かった。近頃は、やたらこういう無理をするから、気が気でないのだ。彼の少年がこういうことをする理由もおおよそ解っているが、困ったことにわかっていてもどうにもならない理由なのだ。だからこそ、余計になんとかしてやりたいのだが。
「――やはり、そうか。久しいな、バク」
後ろから声を掛けられて、バクは振り返る。かつての自分を知るような口ぶりに、思わず身体がこわばるのを感じた。この街に旧知のものはいないはずだからだ。
「そう警戒しなくていい。俺だ、覚えているか」
そこにいたのは、額に青い巻き布をした精悍な若者。左腕のそれも、東王の臣下を示す孔雀藍のものだ。帯びた剣は、刀剣に疎いバクにもわかるほどの業物。なにより、その青年は旧知も旧知、忘れることすら許されない人物だった。それでも、こんな所にいるわけがない、と咄嗟に思ったせいで、応えるのに時間がかかってしまった。ようやく言葉を絞りだし、青年の名を呼ぶ。
「貴方は――シンさん、ですか？」
「ああ。バクも息災のようで何より」
青年は笑み、頷いて見せた。バクは、目の前の青年が思い至った人物に相違ないことに、より驚いて駆け寄る。旅装束でいることを除いて、その面立ちや声は記憶のそれと変わりがない。しかし、何故。当たり前のようにいるその青年は、本来ならばここにいるはずがないのだ。
「どうして、こんなところに貴方が」
訊ねかけた続きは、後ろからの大きな音と、ファンの叫ぶ声に遮られた。続いて、人々からもどよめきと悲鳴があがる。微かに漂う

邪気は、この場の怪異を告げている。
「後で答える。今は、そんな状況じゃあないようだ」
青年はこちらを背に、騒ぎの中心を見ながら応える。その青年を覆う気に清涼な変化を感じて、バクは息をのむ。人々は音の中心から逃れて、広場を離れて行く。青年は止める間もなく、その流れに逆らって駆けて行ってしまったのだった。

異変

その少し前。少年――ファンは転がって行った果物を、上着の前を袋の代わりに集めて回っていた。かなり隅にまで転がっていて、雑踏の中を探すのはなかなか大変だ。それでも、自分が掛けた迷惑に比べれば、これは随分とやさしい。もし、もう誰かに拾われていたら、買ったかどうか判断がつかない。急ごう。

怪我は、と問うた先生の顔。悲しげで切なそうで、それは怒鳴られるよりずっと堪えた。もちろん怒ってはいるだろう。でも、自分がこうやって騒ぎを起こす理由を先生は知っている。知っているから、思い切り叱ったりしないのだ。

これが初めてでないし、もう何度も反省した。自分でも嫌気がさしているけれども、それでも、繰り返してしまう。確かめずにはいられなくなるが、確かめたところでどうにもならない。有か無かわかったところで、その先には何もない。

――自分には素養が無い。でも、それを認めてしまったら、やはりその先には何も残っていないのだろう。抵抗してみせなければ。笑われてでもいい、抵抗していなければ憐れまれるだけだ。憐れみほど、辛いことはないのだから。

世の中には獣人と呼ばれる人達がいる。解りやすいのが、四方の王だ。王は四獣と心を通わし、その力を得て尊い治を行う。また、王のように何かの動物と心を通わし、その獣性を得ればやはり大きな力となる。獣人の多くが国の重職についているのは、善き人でなければ、獣人になれないからだ。獣人たることが善なる魂を持つことの証明であって、だからこそ、獣人は尊敬を集め、彼らは人々の為に良い世を作る。

ファンもそうなりたかった。バクから教わった通りなら、人には誰しも獣人となる素養があるはずだ。御柱の天社の、その分祀はこの町にもあって、人々はそこで自らの素養を知る。けれども、普通

ならとうにその素養が定まる歳になっても、自分の素養は知れなかった。天社にならぶ自分より幼い子の目、町の人の噂。それが辛くて、聞いた方法ならどれも試した。素養の欠片でも見つかれば、と危ないことから何もかも。結果はこの通りだ。獣人にならない人は多いが、素養のない人など聞いたためしがない。どこか暗いところに閉じ込められたようで、悔しくて、苦しくてたまらなかった。

全ての果物を拾い上げ、ファンは顔を上げた。見ると、先生は広場の隅の方で誰かと話していた。背の高い若い男の人だ、帯刀している。先生は驚いた顔をしていた、知り合いなのだろうか。

ともあれ、果物を上着の裾にくるんで、行商のもとに戻る。入口の籠に果物をうつし、そちらに向かって声をかける。行商は天幕の奥で、しゃがみ込んでいた。

「おじさん、全部拾ってきたよ。散らかしてしまって、ごめんなさい」

が、行商は振り向きもせず、店の隅に向かってしゃがみ込んでいた。聞こえなかったのだろうか。いや、本当は怒っているのかもしれない。申し訳なくなって、もう一度謝る。それでも、行商は返事もなかった。もしかしたら、具合が悪いのか。奇妙に思ったファンは、行商に近寄り、肩を叩こうと手を伸ばした。

「痛っ！」

突然の鋭い痛みに、ファンは出した手を引っ込めた。腕には赤い線が数本、獣の爪痕のように奔っている。昔、外で獣に襲われたときのような傷だ。見ているうちに線はじんわりと滲んで、血が流れ出した。痛みと同時に、心臓が早鐘のように鳴りだした。反対の腕で傷を押さえながら、行商を見やる。獣のような低い唸りと共に、振り返ったその目は既に正気のものではない。行商は獣のように四足で地を掴み、その身体はだんだんと、より動物じみて変化し始めた。ファンはじりじりと数歩下がる。本当はすぐにでも逃げ出したかったが、目を離せば跳びかかられそうで、逸らせなかったのだ。

唸り声はまさに獣になり、剥き出しになった歯は鋭さを増す。少

しずつ下がる足元に何かぶつかる。籠だ。蹲いた拍子に、その上を行商の腕が通り過ぎていった。もう、躊躇っている場合ではない。

ファンは声の限りに叫びながら、果物籠を押し倒して、外に飛び出した。あれは、獣人なのだろうか。ふとそう思ったが、それもすぐに恐怖と焦りの中に消えて行った。

龍の青年（1）

青年――シンは獣と化した行商を見据えて、距離を詰めた。少年に気を取られていて、向こうはこちらに気付いていないらしい。後ろからバクが声を張る。

「シンさん！　あれは」

「ああ、『獣堕』だ。あの行商に獣が憑いたか。祓えば戻るだろう」

シンは駆けだす。見れば、少年はもう広場の隅、近くの家の壁際まで追いやられている。獣堕は、人の体を元にしているとはいえ、襲われれば怪我どころの騒ぎではない。獣堕がその鋭い爪を振りかざした時、シンは少年と獣堕の間に割って入った。

「怪我は無いか、小僧！」

訊ねて、僅かに視線を後ろにやる。少年は真っ赤になった腕を押さえて応えるが、その目は別のものに奪われていた。

「ある、あるけど……お兄さん、その腕って」

袖の先から出ている、獣堕の攻撃を防ぐシンの腕は、人のものの格好をしていなかった。形こそ人に似てはいるが、鷹のような爪、腕を覆う魚や蛇のような鱗。鱗は、額の布と同じく、日に照らされて孔雀藍に輝く。

「龍……？」

後ろの声をあとにして、シンはその腕で獣堕の体を掴み、投げた。石畳の上を滑るその身体を追い、体勢を立て直す前に懐まで詰める。

「元あるべき姿に戻れ」

短い呪を呟いて、竜でない方の手を当てて、押し込むように獣堕の体を突く。確かな手ごたえを感じて、シンは腕を引いた。辺りには断末魔のような獣の咆哮が響き、獣堕だった行商の体から、暗い霧が抜けて行く。次第に、その姿は元の行商のものに戻り、遠巻きに見ていた群衆から、歓声と安堵の混じった声が漏れる。

バクが少年のもとに駆け寄り、上着を裂いてその腕の傷をきつく

締めた。血はいずれ止まろうが、ここでの手当はそれくらいだろう。それを手早く済ませると、バクは少年をそこに留め、こちらへ駆け寄る。

「シンさん、彼は」

「酷く打ったつもりはないから、気絶しているだけだと思うが……」

行商の横にしゃがみ込んだバクはその身体に触れる。その手は微かに光輝を発したが、見えたのはシンだけだろう。苦悶に満ちた行商の表情が和らぎ、寝起きのように呻く。

「これで大丈夫。心を病むことはないでしょう」

バクはそう言って、柔らかく笑んだ。やはり、この男は昔のままだ、変わりない。それを見て、シンはまだ遠巻きに見ている人々に向かって声を張る。

「誰か手伝ってくれないか！　この御仁をどこかで休ませてやってくれ」

駆け寄って来たのは、行商仲間だろうか。引き受ける、と申し出たから、シンは彼らに行商を預け、バクと共に少年のところに戻った。少年はこちらが歩み寄るのをまたずに、駆け寄って来る。見やると視線が合う。その目にあるのは、憧れか。

「お兄さん！」

歓喜そのものの顔で少年はこちらを見あげた。その目は先ほどの恐怖も痛みもすっかり忘れたようで、忙しくこちらの全身を眺めまわして言う。

「ありがとう、助けてくれて。それより、お兄さん、獣人だよね！　話が聞きたい！」

矢のように問いが飛び出しそうだったが、それを先にバクが制する。

「いいえ、ファン。それは家に戻ってからにしましょう。手当と……お説教が先です」

血のにじむ腕に構わず、飛び跳ねんばかりだった少年を、バクはたしなめた。思い出して苦い顔をした少年に凄味のある笑みで応え

て、バクはこちらを向いた。
「シンさん、宿はどこへ？」
「いや、まだ決めていない。探している途中でな」
「なら、私のところに泊まって行ってください。部屋もありますし、色々話もありましょう」
是非、と言うバクにシンは頷く。それを聞いて、横の少年も目を輝かせる。断る理由もないし、話があるのはおそらく向こうの方だろう。
「頼もう」
少年が喜ぶのに苦笑し、シンは案内を始めたバクについて行く。
広場から小路へ入ると、町の雰囲気は一変する。旅客向けの店が並ぶ大通りとは違い、小路は住居や、そこにすむ人間に向けた日用品店、小さな医院が建ち並んでいる。医者が多いのは、国柄ゆえだ。
東王が統治する東の、青の国は春を司る国だ。穏やかな気候に、広がる山林は薬種に富んでいるから、それらを使う術が進んで、医者や薬屋が多い。命の始まりと終わりを司る東の国は、青い風が吹く木行の国だ。
すぐに着いたバクの家も、医者の証である蛇の看板が立っていた。戸の上のそれを見あげていると、それに気付いたバクが面映(おもは)ゆげに微笑む。
「大したものではありません。相談役のようなものです」
その言葉は、それの主がシンの記憶の通りであるのなら、謙遜が過ぎるというものだ。

龍の青年（2）

奥の部屋からしばらく叱責の声が聞こえていたが、終わったのか幾分しゅんとした様子の少年――ファンと、バクが戻ってきた。バクは茶器をひとそろいと鉄瓶を卓子の上に置き、花茶で良いか問うた。

頷いたシンの、その前の席にファンが座り、好奇の目を向けている。バクとこちらが特にすぐ話す様子でもないのを見たのか、乗り出すように話しかけてきた。

「ねえ、お兄さん！　お兄さんの守護獣、龍だよね！」

ああ、と頷いて見せると、だいぶん興奮した様子でファンはさらにぐっと身を乗り出してきた。

「やっぱりだ、すごいや。幻獣付きなんてめったにいないんだよね？　いつから獣人に？　やっぱり修行とかいるのかなぁ」

矢継ぎ早に尋ねられて、シンは困ったように頭を掻く。今になって、うかつに頷くもんじゃないと思ったが、ともあれ、どうとも答えあぐねたから問いは問いで返す。

「お前は、獣人になりたいのか？」

ファンは大きく頷いて見せる。

「もう、素養くらいわかってもいいはずなんだけど。何度聞いても、神官様は、まだ定まらない、って。でも、おれよりもっと小さい子だって見立てが済んでるのに」

表情を曇らせ、ファンは椅子に再び、すとん、と腰を下ろした。

「だから、大人になるまで素養の定まらない人だっていると教えたでしょう。早く決まったから善い、偉いというのではありません。気にしてしまうことが良くないのです」

バクは三人分の茶碗に茶を注いで、それぞれのところに置いて言う。ファンは憮然として、卓子の木目を見つめていた。花茶は新しいものらしい、甘い香りが強く部屋に漂っている。冷めないうちに

どうぞ、とバクは言って続ける。
「人と違えば焦ったり不安になったりするのもわかります。ですが、人の生き方というのは素養で決まるものではありませんよ。善く生きなければ、それこそ素養が定まった時に、獣性に自分が追いつきません」
しゅんとした様子で、茶碗に手を掛けたままファンは俯く。花茶を一口含み飲んだシンは、湯気を立てる茶器を離して、ファンの方を見やる。消沈しているというより、辛さの滲む顔だった。シンは茶の香りにふうと息をつき、口を開く。
「素養のことはわからんが、俺が知る限りでいいなら、獣人について話そう」
ファンは弾かれるように顔を上げて、こちらを見る。バクの方にちらりと視線をやったが、問題ないようで静かな頷きだけが返る。
「獣人には大まかに三種あるのを知っているか」
問いに、ファンが首を振る。
「なら、お前が知り、言っている獣人ってのは、たぶん『昇化』だろう。これには、素養の見立てと、四方の王への謁見が要るからな。で、もう一つはさっき見たはずだ」
「もしかして、あの行商のおじさん……」
「ああ、そうだ。『獣堕』という。名というよりは、状態という方が正しいな。世に漂う獣の気の、中でも念の強いものが素養の合う者、心の弱った者に取りついたものだ。大体が憑かれるとかなりの負荷になるからな、祓わなくてはならない」
ファンは感心したような溜息をひとつついて、きらきらとした目でこちらを見ている。もっと、と言わんばかりに椅子を前にずりだしたファンに、バクは笑いながらも、咎めるような声音で言う。
「ファン。旅の人に話をせがみたいのはわかりますが、ゆっくり聞けばいいことです。シンさんに今必要なのは休息ですよ」
はい、と返事をして、ファンは微かに不満げな様子で黙る。しかし、それもしばらくすると、不満はぱっと引っ込んでしまったのか、

旅、と呟いた。その顔を見て、シンは、再びしまった、と思った。言いだす事が想像できたからだった。

「お兄さん、シンさんって言うんだね。――ねぇ、おれを弟子にしてよ！　旅の手伝いなら、荷物持ちでも何でもやるから！」

少年の口をついて出たのは、案の定。バクが驚いた顔で、反対の声を上げようとするのを、先にシンがそれを遮った。

「駄目だ。この旅は俺の目的のための旅だ、一人の連れとて持つつもりはない。弟子となれば、尚更だ」

「でも、おれ、ここにこのままいたんじゃ、きっと獣人になんかなれないんだ」

負けじとファンは食い下がる。頑なな目だ、ずっとこれまでその思いを胸に潜めてきたのだろう。しばらくじっと考えて、シンは口を開いた。

「さっき、獣人には三つの種類がある、と言ったな。その最後のひとつが『化生（けしょう）』。素養の見立てもなく、四方の王にも会わず、生まれおちたその時から、天に許され獣人として生きる者、それが化生だ。――俺は化生の者だ。獣人になるために、お前に教えられることは何もない」

がたん、と勢いよく椅子が鳴る。立ち上がったファンの、その頬は見てとれるほど紅潮している。自分でも思ったより冷たい口調だと感じたが、ファンは突き放され、馬鹿にされたと思ったのだろう。その表情を見ると、続けようと思う言葉が喉で滞るが、シンは捨てるように息をついて、続ける。

「それだけじゃあない。獣人になる者はそれを志した時、絶対の理由と自分の命（めい）を覚えて立つ。それこそ、命（いのち）を賭して成る覚悟と共にだ。お前には、それがあるか。ただ、憧れるだけではなれん。……どうだ、あるなら聞くぞ」

ファンの顔には、困惑と悔しさが混ざって映る。深く傷ついた色で全体を染めて、それが外に溢れだす前に、ファンは外へと飛び出していった。扉が乱暴に閉められ、余韻が部屋に残る。茶をすすり、

バクは静かに口を開いたが、言葉は微かに怒気を含んでいた。
「止まらせるためといえ、こうまで言う必要はなかったでしょうに。それに、貴方は『化生』ではない。――いえ、貴方は人間でもない」
とん、と湯飲みを置き、バクはその目をまっすぐにこちらへ向ける。
「そのように人型に身を寄せ、東王の元を離れてどこへ行こうと言うのです」
そして、机の上に手をつき、恭しく頭を下げる。
「今すぐお戻りください――青龍様」

龍の青年（3）

険しい顔でそれを見て、シンはバクが顔を上げるのを待ち、ゆるゆると頭を振った。

「それはできない。理由など、とうにわかっているだろう？　夢食い」

かつての通り名で呼び、シンは目の前の男の目をじっと見据える。久しく呼ばれなかったからだろうか、バクが僅かに怯んだのが見えた。

「しかし、貴方がいなければ、東だけでなく中つ国全体が揺らぎます。それこそ貴方が最も恐れたもののはず」

そうだ。青龍は東の鎮守。そのことはシンも重々承知している。そして、この国は四方の力の均衡に、細かに影響を受ける。和が保たれなければ、様々な理に歪みが生じてしまう。三方が健やかにあれど、どこか一方が病めば国は傾く。建国以来、その均衡と和を青龍は――自分はじっと、守り続けてきた。

「……今でなくてはなりませんか」

伏し目がちにバクは問う。曇るその顔は、こちらをどこまで見ているのだろう。

「建国から万の星霜を見送ってきたが、今になって昔の傷が疼く。由は知れないが、長く蝕まれれば、それだけ国に与える歪みも大きくなるだろう。だから、腹を決めてきた」

「貴方は天がお選びになった方、東の守は貴方にしか出来ません。この大役を務められるほど力を持つ者などおりません」

「そうは言っても、この身の力も元より天の力に依るもの。役を果たせぬのなら、天が与えた神獣たる力も徒になってしまうだろう。もう、俺が『青龍』ではならんのだ」

そう答えると、バクはまるで痛みをこらえるかのように顔を歪ませる。シンはそれに対して、つとめて明るい声で、笑って見せた。

「天がここまでの労をねぎらってくれるなら、暇くらいはくれるはずだ。命までは取るまいよ」

冷めていく湯飲みを手に、シンは息をつく。花茶の香りがこの身に収められないほどの記憶を撫でて、その眠りを覚ましていく。茶を飲み干すと、様々な思いが風のように身の中を吹き抜けていった。

千年も万年も、過ぎてしまえばそこに然したる違いは無い。だが、それこそ風のように過ぎゆく多くの人々のために存在できないならばその悠久たる命も無駄になろうものだ。永く善い世を布くことこそ、神獣の務めなのだから。全てが移ろいゆく中の、変わらぬものを守るために自分は生かされているのだ。

「……シンさん。これからどうするおつもりですか」

バクが代わりを注ぎながら、静かに問うた。こめかみの髪が、さらりとその手にかかる。

「まず、四方に礼を済ませようと思う。――俺はそのまま天のところへ行こうと思ったが、陛下がな。他の神獣と王に、その意をはかるようにおっしゃられた。それが、我が君が下された、この旅の条件だ。その後、天へと『青龍』を返そうと思う」

わかりました、とバクは小さく応え、再び頭を下げた。それより先を問うことは無い。夢食いは、この話からどこまで先を察したのだろう。東都を出る時に見送られた今上の顔と、今目の前の男の表情がよく似ていたから。

夢食いと少年

「俺の話はこれくらいだろう。バク、お前も本来このような所にいる人間ではないはずだ。……何故御柱を出た。天社の神官長を務めているはずの者が、その大任を投げて、小さな町に暮らしているとは」

応えたのは短いが確かな沈黙。バクはちらりと扉の方を見やって、一呼吸おき話始めた。

「呆れるかもしれませんが、一つは『夢食い』でいることに絶望したことにあります。夢とは記憶や思いそのもの。それらは自分で把握している以上に、情念が詰められて大きな力を持っているのです。それを食らって身の内に収め、その者が善く生きられるようにはかり、悪いものを取り去る。それが獏の、幻獣の力を得た私の責務です。しかし、私ひとりの身に収まる夢など、そうありはしません」

「食い切れなくなったか。無理もない。御柱には特に強いものが寄る」

バクは頷く。御柱は天への入り口。王権と共に四方に分かれる国をまとめる祭祀の中心だ。天の加護があっても様々なものが集まり、また天の力そのものも強大ならば、そこにいる者は並大抵ではならない。茶で口を緩め、バクは続ける。

「もう一つは、そうですね。……シンさん、貴方はファンを見て、どう思いましたか」

「お前が親代わりだからか、素直で聡い子に思ったが、無鉄砲というか必死というかな。色々敏感な年だろうが、素養はそう焦るものでもあるまい」

頷くバクに、シンは続ける。

「素養といえばな。確かに、俺の眷族ではない。あいつの生まれはどこだ、定まらずとも大体それで知れると思うが」

飛び出していった少年。獣人に執心していたのは、その素養が知

れないためか。シンは東の獣の気を率いる存在であるから、自身の眷族であるならわかるはずだが。

「あの子が、もう一つの理由です。……十五年ほど前でしょうか。天社の中に、獣堕が出ました。非常に強い気でした。憑かれたのは女性。もうすぐ子が生まれるという状態で、巡礼に来ていたのです」

「社の中で、御柱で獣堕が出たのか？」

強い驚きを込めて、問い返す。この世で一番に清いはずの場所で出た、邪なるもの。

「一言でいって異常です。御柱には結界がありますし、社は神域。限られたものしか入れないはずでした。他の巡礼者に被害はありませんでした。しかし、祓いはしたものの、その女性は子を産むとすぐに、そして、それを守っていた男性も命を落としました。その時の子供がファンです」

「それじゃあ、まさか、あいつは」

言葉の先を読み、バクは頷く。

「あの子は――ファンは太極です。陰と陽が混ざる、御柱の中で生まれた子。天の力も、それに封じられた者どもの力も強く受けてしまうでしょう。あの子の素養が定まるまで、私はそのどちらからも遠ざけておきたかったのです。万に一つ、獄に封じた者どもの力が及べば、その身を鍵として獄の者は中つ国中にあふれ出るでしょう。だから、私は御柱を離れました。……ファンには、私のことも、あの子自身や親のことも教えていません」

バクは再び扉の方を見やる。そういえば、飛び出したきりだ。迎えにやってやらねば帰りにくかろうし、迎えに行ったとしても相当になじられるだろう。

その生い立ちが、彼の少年の心を獣人へと惹きつけるのか。バクはその心の奥を、夢を通して見ているはずだ。

「夢に、何が巣食っている」

「母が獣堕となる姿、地から染み出す暗闇へと落ちていく恐怖。どれにも抗えぬ自分。強い記憶です。……私にはそれを見ても、取り

除いてやれません。ただ、その他に障るようなことを気休めのように取ってやれるだけなのです」

そうか、とシンは小さく応えた。獣人になれれば皆一様に力を得ることができる。身体的にもそうで、それ以上に心が強くなる。自分の手に負えないものが、来るかもしれぬ恐怖と焦燥に駆られて、それにもかかわらず定まらぬ素養がその若い心を追い詰めるのだ。

「少し、俺は口が過ぎたな。……迎えにいってこよう」

シンはそう言って、立ち上がった。陽も少し傾いてきたか、夜になるのはどちらにも良くない。町人がファンの顔を知っているなら、尋ねながら行けばそれほど苦はないはずだ。

「お願いできますか。私は、夕飯の支度をしていますから」

バクの言葉に了承し、シンは外へ出た。

捜し始めてどれだけ経ったのか。途中までは人の話を頼りに追えたのだが、その後ぱったりと足跡が途絶えてしまった。陽は少し前に落ち、閉門の鐘も鳴り終えた。残った明るさもじきに夜に呑まれていくだろう。こう見つからないとなると、もしかしたら入れ違いに戻っているかもしれない。町の端まで来ていたシンは、バクの家の方へと踵(きびす)を返した。

戻ると戸口のところでバクが辺りを心配そうに見回していた。こちらの姿を見つけると、慌てた様子でこちらに駆け寄ってくる。

「ファンは見つかりましたか」

「いや、もう戻ったと思ったが」

その応えにバクが顔を曇らせる。手には布の端切れが握られている。生成りの地に所々血で汚れた端切れ。微かに覚えのある布地だ。

「さっき人が来て、私にこれを渡していきました。ファンを捕えている、と。――私と、私と共にいる者に、外の二本杉に来るようにとあります」

「何者かわからんが、目的は何だ。金でないなら、俺にしろお前にしろ、知らずに呼び出す名ではあるまい」

端切れに墨で書かれたその文を撫で、バクは静かに目を閉じる。
「あまり、善い人々とは言えませんね」
「急いだ方が良さそうだな」
辺りはすでに薄暗く、人通りも減ってきた。
「一時的にも町の封を切ります、門番には私が話をつけましょう」
シンはそれに了承し、二人は町の大手門に向かって走り出した。

定めに沿わぬ者（1）

町を出て、街道から少し西に離れて林を抜けた丘に、杉の古木が二本立っている。それは二本杉と呼ばれ、日中は街道をゆく人々の歩みの目安になるが、今その一本はファンを繋ぐ楔になっていた。幹のところに縄で括られて、ファンはしばらく力の限り喚いて暴れたが、結局腕をぐるりと擦り向いただけで縄は切れなかった。杉の皮も剥がれて縄の上に垂れさがり、赤茶の裏側が見えている。

家を飛び出して外壁の傍を歩いていたら、見知らぬ男たちに声を掛けられた。身構えたファンに男たちは、バク、という男を知らないかと問うた。流石のファンも男たちの人相に危険を感じて、とっさに首を振った。これはきっと、先生にとっても自分にとっても良くないことになる。帰ろうとしたファンの前を、男の中でも特に屈強そうなのがにやりと嫌な笑みを浮かべて遮った。育ての親を知らねぇだなんて、冷たい野郎だ、と。逃げようと振り返ったのに、またその男に遮られたところまで覚えている。そして、気が付いたらここに縛り付けられていたのだった。周りには町で見かけた男たちがいる。

何かで頭を殴られたのだ。頭の左側が火のように熱くて、ずきずきと痛い。その上、口の中では血の味がしている。頬の内側を舌で探ると、小さく穴が開いていた。歯で切ってしまったのかもしれない。気がつくと、上着の裾のところが破り取られていた。

「来ねぇなぁ、お前の先生とやらは」

あの男の声に、ファンは急いでそちらを見やった。上着の裾と、自分の今の状況にようやく合点が言った。人質だ。それなら、きっと男たちの読み通りになるだろう。先生はきっと来るだろう。来てしまう。“親”として。血縁でないのは知っているが、自分にとっては、バクこそが唯一の寄る辺（べ）で親なのだ。助けてほしい、という思いと、来ないでほしい、という思いが交互に去来する。

「先生に何する気だ！」
「あ？　何にもしねぇさ。先生が大人しく、何もしなかったらなぁ」
男はにやり、と笑ってその手をこちらへと向けた。人の腕は獣のそれになり、砂色の体毛に鋭い爪が現れる。猫……じゃない、きっと獅子だ。
「お前、獣人なのか？」
問うと、男はさらに笑みを深めた。違う、こんなのは。
「違う、お前なんか獣人じゃない！　獣人はこんなことをしたりしない！　もしかして、獣堕なのか」
その言葉に、首領らしき男はぴくり、と眉を動かした。そして、取り巻く男たちと共に声を上げて笑った。
「獣堕みたいな獣憑きと一緒にすんじゃねぇよ、あんな自分の意思が無くなるような愚図とな。獣堕がそのぴーぴー言う生意気な口をほっとくと思うか？　――俺はちゃあんと与えられて獣人になったのさ」
「嘘だ。善人しか、獣人になれないんだ。命を賭して、人の為になろうとする、そう言う人間しかなれないんだ。四方の王様が、お前らみたいな奴を認めるわけない！」
叫ぶと、男たちから笑みが消え、苛立ちがその顔に浮かぶ。
「なぁ、こいつの口ふさいじまうか」
誰かがそう言いだすと、周りがそうだ、と同調する。が、あの獅子腕の男は首を振る。
「叫ばせておけ、声がすりゃあ、先生とやらも急ぐだろ」
男はファンの顔の横に獣化した腕をつく。爪を立てているのだろう、耳の横で杉の皮の軋む音がした。
「なぁ、小僧。おめぇはおかしいと思ったことねぇのか？　どんなに優れていて、どんなに望んでいても、認められなければ獣人になれないんだぞ？　しかも、なれたところで、生まれた場所で素養が決まっちまう」
ぱきぱき、と木の皮の剥がれる音がする。

「俺はな、この町の出だ。だがな、俺らは獅子になりたかったんだ。なのに、青の国で生まれりゃあ獅子の素養は出ねぇ。何だったと思う？　蜥蜴（とかげ）だぞ、ありえねぇ！」

男はぶん、ともう片方の手を振りまわすと、頭上に張り出していた太い枝が落ちる。鋭利なもので切ったような滑らかな切り口だ。

「そうさ、こんなに力ぁ得られるなら、素養なんて関係なく、望むまま得られるようにすりゃあいいんだ。それを覚悟だ善だと括るから、この国は何にも変わらねぇんだ。要は皆に力をやりたくねぇだけなのさ」

男はファンから離れ、鋭い爪を出し入れしてみせる。

「だが、あのお方は俺の望む力を下さった」

「あのお方？」

ファンが尋ね返すと、男はにやりと笑う。遠く、木々の揺れる音と微かに人の声。

「知りたいか？　だが、駄目だ。お前の先生がようやくのお付きだからな」

定めに沿わぬ者（2）

「ファンはどこです」

その声と姿に、ファンは複雑な気持ちを覚えた。親の姿に安堵している部分と、その身を危険にさらしてしまうことへの不安。これまでどんなに心配をかけても、バク自身の身を危険にさらす事はなかったのに。必死に走ってきたのだろう、息が上がっている。バクはこちらを向いて、ほっとその表情を緩めたがそれも一時、男たちに向けられたそれはいつもファンを叱るときの比でないほどの怒りが浮かんでいた。

シンも一緒にいて、男たちが何も言わないことを見ると、シンも呼び出されたのだろうか。

「私がバクです。こうして来たのですから、その子を離しなさい」

静かながらに強い憤りを込めて、先生は男たちを睨み据えた。その前にあの獅子の男が進み出る。

「そりゃあ出来ねぇよ、先生。俺達の望みはあんたじゃねぇ」

男の言葉に、バクがさらに顔を険しくした。

「なら、何を望みます」

「――鍵さ。お前が連れ出して隠した、太極って奴をこちらへ寄こせ」

バクの目が見開かれ、男は得意げに笑んだ。ファンはその聞き慣れない言葉と、深刻そうに青ざめたバクの顔に、これがただ自分の誘拐で済まない事態であることに気がついたのだった。

「太極をそちらに寄こしてやるとして、お前たちに扱える代物ではあるまい。まず、その名を知ることもな。一体、裏に誰がいる」

シンはバクの横に進み出て、周りの男に訊ねた。この男たちは、殆ど何も知らされていない。ただそれが、バクが連れる人間であるということだけで、まさか既に自分たちで捕えた少年がまさにそれ

であることは思いもしないようだ。おそらく大元はこの男たちを何とも思ってはいないのだ。

「天の者――もしくは、獄の者」

男の眉が僅かに動き、それを見逃さずシンは続ける。

「それも、かなりの高位の者。ならば、四凶だな？」

男の眉が今度は見てわかるだけ動く。そして、にやにやと笑みを浮かべながら、シンの方へとにじり寄った。

「そこまで解ってるなら、話が早い。てめぇが太極だな？　この餓鬼の命が惜しかったら、大人しく一緒に来てもらおうか」

足を踏み出そうとすると、シンが縄を身体に食い込ませながら、叫んだ。

「駄目だよ、シンさん！　おれには太極ってのは良くわからないけど、大事なものなんでしょ？　シンさんがそれなら、行っちゃ駄目だ！　……おれ、我慢できるよ。さっき、シンさんが言っていたこと、やっとわかったんだ」

本心は助けてほしいはずだ、目を見ればわかる。でも、それ以上に目に宿るのは、言葉通りの強い意志だった。覚悟を問うたときに不安げに揺れたあの瞳は、今はもう揺るがない。シンは笑んで見せる。

「それなら、尚更お前はそこにいるべきじゃない。心配しなくていい。じっとしていろ、ファン」

シンは躊躇わず前に進み出る。周りの男たちは警戒しながらも、周りににじり寄り、取り囲む。

「おっと、その刀は捨ててもらおうか」

腰の剣を指して、男は言う。

「いいだろう。だが、それならファンの縄を解け」

獅子の男が顎で、杉の近くの仲間に合図する。縄は解かれたが、ふらふらと立ち上がったファンの横にはまだ男たちがついているから、逃げられる様子ではない。縄が解けたのを見て、シンは刀を結わえていた紐を解き、後ろへと投げやった。がらん、と音を立て、

間合いの外に転がる。男は頷く。
「よし、そうしたら五歩前に出ろ。……おい、縄だ。解けねぇ様にな。あとは邪魔になる、餓鬼は放していい」
変わらぬ足取りでシンは前に出た。すぐさま丈夫な縄で腕や胴に縄が掛けられ、後ろ手に縛られる。乱暴に結ばれたせいか、指先にうまく血がいっていない。同時に、男たちから解放されたファンがバクの下へと駆けていく。バクはファンの身体を抱きとめ、こちらをじっと見つめていた。これまでずっと黙っていたが、目には心配と確かめるような色がある。シンはバクにだけわかるように、小さく唇を動かした。
完全に上体が拘束されると、それを見て獅子の男は得意げに頷いた。周りの男たちにも、引き上げるべく合図をする。
「太極が物わかりのいい奴で助かったな、先生よ。……これで檮？様も喜ばれるだろうぜ」
聞き覚えのある名で、遥か前に聞かなくなった名。シンは呟く。
「なるほど、やはり檮？か。思ったより事態は悪いようだ」
頬を微かな風がなぜる。少しばかり力を入れて、事もなげに幾重にも巻かれた縄を引きちぎる。驚く男たちの前に、シンはその常ならぬ腕を示してみせた。
袖から覗くのは青い鱗に覆われた龍の五指。爪は微かな月明かりにも艶やかに、その鋭さを映し輝く。
「バク！　町へ戻れ！」
再び取り押さえようとする男たちを一蹴し、シンはそう叫んだ。木立の中に二人が消えるのを確認して、シンは腕にぐっと力を込める。ものの数秒とかかるまい、傷をつけぬようにはかったとしてもだ。捕える動きが攻撃になっても、大した違いはない。しばらく後、一人残った獅子の男を見据え、シンは息をついた。
シンの腕に見とれる間もなく、ファンは襟を掴まれて、引きずられるように町への道を戻りだした。シンはあの大勢の中、一人残っ

た。ファンは体勢を立て直し、バクの横を走りながら問う。
「先生！　シンさんは……」
「あの方なら大丈夫です。それよりも、私たちがここに残ってしまうことが、全てを無にしてしまいます」
道の不確かな夜の林の中を、バクは必死に走っている。言葉の意味はわからなかったが、それを見るとファンはそれ以上問うことができなかった。
がさり、と微かな音と、獣の唸りのようなものが聞こえて、ファンは振り返る。
「お前は……！」
シンと対峙していたはずの獅子の男が後ろにいて、もうその鋭い爪と腕を振り下ろしている瞬間だった。風を切る音と、バクの声が遠く、鼓動の向こうに聞こえた。

定めに沿わぬ者（3）

仲間が全て倒されたのを見て、獅子の男が歯噛みした。死んだ者はいないはずだが、すぐさま起き上がれる者もいないだろう。男はこちらの青い腕を、憎悪のこもった目で睨んでいる。その目は山猫のような獣のものに変わっている。

「龍、だと？　ふざけるな、東都を出るはずのない幻獣付きが何故ここにいる！」

「素養の合わぬ獣を飼う者に、教えることなど無い。……その力、すぐに手放せ。大方、檮？に与えられたのだろう。身の丈に合わぬ力は身も心も喰うぞ」

みしみしと何かが軋む音がする。目の前の男からか。

「黙れ、黙れ黙れ！　お前にはわからねぇだろうよ！　素養なんつう下らんものに縛られて、身動きとれなくなった者の気持ちが！」

男は人から獣へとその身体を変貌させる。体は膨らむように大きくなり、体毛の生え揃う四肢は強く、爪はさらに鋭さを増す。牙がのぞく口からは呪詛が唸りとなって零れる。もはやどれも人のものではない。シンはそれを見つめ、静かに言う。

「解らん。己を失うほどに振り回されても、尚も力を望むのか。力は手段であって、目的ではない。いらぬ力は何もかもを傷つける」

哀れだ、とシンは目を伏せた。

「素養は、何も縛りはしない。その身に相応しく、その心を一番に生かせる獣性が素養となって身に着くものだ」

その言葉が男の怒りに油を注いだのか、男はその太い腕を振り上げる。飛びかかってくるその声は、もう言葉ではなかった。

「――放さぬなら、無理にでも剥がすぞ」

大ぶりな獅子の爪をかわし、その勢いでその巨体を地面に打ち据えた。強い力で叩きつけられた身体が地面で弾む。

「その力、天に返せ」

シンは小さく呪(じゅ)を呟き、獣堕の時にしたように、人に戻した掌を男の体に押し当てた。

「シンさん！」

逃げたはずの少年の声。後ろで空を切る音に、シンはとっさに龍化したままの腕で、身体をかばった。

獅子の双子

玻璃の散るような小さな音を立て、孔雀藍の鱗が散った。その下に及ぶ獣の爪が、肉を裂いた。骨まではいかないが深い。シンは傷を押さえ、数歩退く。

「おい、何寝っ転がってやがんだ、シー。人質逃げてたじゃねぇか」

「遅れてきて文句か、イー」

背後から来た男は、先ほどまでシンが相対していた男と鏡で映したようによく似ていた。すでに獣と化した姿も声も同じだ。ただ違うのは、その腕から滴るほどに血を流していることか。次いで林の中から、出てきたのは青ざめ、今にも泣き出しそうな顔のファンと、その背に負われぐったりとしたバクだった。

「シンさん！　先生が、バク先生が……！」

こちらの腕だけの血にしては、多い血の量だ。きっと二人目の獅子の男が滴らせているそれは、ほとんどがシンのものではない。

「バクに何をした」

声に怒気をのせ、シンは双子の獅子に訊ねる。

「なぁに、ちょっとばかり爪で掻いただけさ。人質を連れて行かれそうだったんでな」

生身にあの爪が触れれば容易に裂けてしまうだろう。バクは獣人ではあるが、進んで戦えるような手合いの者ではない。暗くて様子はよくわからないが、地に寝かされた彼の服が、白でなくなっているのはわかる。先から居た獅子の男が起き上がり、シンを睨む。

「それよりも、お前、太極じゃねぇな。そういや、檮?様は太極は定めを持たぬと言っていたしな。なら、御立派にも幻獣付きのお前が、太極なわけねぇ」

それに後から来た方が言葉を継ぐ。

「なら、太極はどこにいやがんだ?　おい、先生……ああ、駄目か。答えられねぇよな」

男たちは笑う。じり、と二人がバクに近寄ると、それを守るようにファンがバクの前で手を広げ、きっと獅子たちを睨む。
「やめろ！」
叫ぶと、男たちはさも面白そうに笑い、こちらを見た。
「まさか、この餓鬼が太極、なんてことはねぇよなぁ？　もしそうなら、お前らがこの餓鬼を助けに来なきゃ、俺達もさっさと事が済んで、大事な先生も怪我をしなかったわけだ」
ファンの目が見開かれる。男たちを睨んでいた目が下がり、ファンは閉口する。
「お？　図星か？　こりゃあとんだ番狂わせだ」
「ファン、真に受けるな、こいつらは」
「――シンさん！」
ファンの声に、シンは言いかけた言葉を飲み込んだ。ファンはなおも俯いたまま、呟く。
「おれは獣人になりたい。素養が定まらなくたって、力は必要だよ。どんな力だって、ないより苦しいことなんてない」
その言葉に、獅子男は猫なで声で賛同する。
「そうだよなぁ、餓鬼。俺達もその気持ちわかるぞ。一緒に来い、檮？様なら、お前にも望むように力をくれるぞ」
シーと呼ばれた男がそう言って腕を差し出す。止せ、と言った言葉に反し、ファンは垂らしていた手を持ち上げる。
「でも！」
ばしん、と小気味よい音を立て、ファンはその腕を払った。
「理由はあるよ。こんな奴らのせいで先生は酷い傷だし、シンさんだって怪我をしてる。なのに、おれは何もできない。だから、力が欲しいんだ。先生も、まず自分をちゃんと守れるだけの力が。そのためなら、ここで死んだっていい。こんな奴らをぶっ飛ばせるだけの力が欲しいんだ」
その言葉に、獅子男たちは顔を見合わせ、揃って腕を振り上げた。瞬間、シンは駆けだし、転がっていた剣を拾い、そちらへ走りだす。

距離にして数歩だが、この瞬間では酷く遠い数歩だ。
「五体満足じゃ連れてってやろうと思ったんだがな！」
爪が高い音を立てて、風を切る。ぎゅっと目を閉じ、身を固くしたファンの横を、風が抜けた。

青龍の力（1）

「それが一時のみの力になるとしても、構わないか」

ファンはゆっくりと目を開けると、まず目に飛び込んできたのは、青い鱗に覆われ、割り込むほどに地を踏みしめる龍の足だった。徐々に視点を上にあげると、鞘に収めたままの剣で、獅子男たちの攻撃を防ぐシンの姿だと気付いた。手足だけではない。襟から覗く首筋は青く艶めき、伸びて襟足を撫でる髪は月色に輝いて、天をつく枝のような二本の角を頭上に戴いている。覗き見えた双眸は青く炎を湛えている。鬼の、幽玄の世を見る、この世ならぬ瞳だ。

ファンはその言葉に何度も頷いて見せた。男たちはシンの瞳に、身体を強張らせている。二匹の獅子と押し合いになりながら、シンがこちらに向かって言葉を放つ。

「木行東方を預かりし青龍、鱗（リン）の眷族の長として、この者に我が力を分かつ！」

シンから溢れた青い光が、ファンの体を通り抜ける。風が吹き込んできて、体の中を洗ったようだった。身体の底から湧いてくる力にファンは驚きながらも、自分の体に目をやる。

月夜に映える爪、薄明かりを照り返す孔雀藍の鱗。隣に立つ青年と同じ姿で、ファンはきっと男たちを睨み据えた。

シンが二匹の獅子の体を押し返し、剣を手放す。双子の獅子は体の均衡を失って、後ろへと体勢を崩した。

「ファン！　思いっきりだ！」

シンの声に頷き、ファンはその腕にぐっと力を込めた。同じように、シンも腕の狙いを男たちに向ける。

「や、やめろ！」

「も、もうこんなことは！」

獅子の悲鳴が二重に響きわたる。二匹の青い竜はその拳を思い切り、男たちに打ちつけた。

青龍の力（2）

双子の獅子は二本杉にそれぞれ叩きつけられて、気を失った。その体から霧のような影が立ち上って、夜気の中で爆ぜて消えた。途端に、双子の体は急激に痩せ細り、先ほどの屈強さなど見る影もなくなってしまった。シンはそれを見て目を伏せ、小さく首を振った。

空を見ると、東がぼんやりと白んできていた。じきに陽が昇るだろう。咳きこむ音に、二人は急いで振り返る。

「先生！　バク先生！」

ファンが急いでバクに駆け寄る。その目にうっすらと涙を浮かべ、バクの手を取る。バクは弱々しく微笑み、それに応えた。

「青龍の力ですか、ファン。……その背丈では、龍も少々、可愛らしく見えてしまいますね」

町の方から開門の鐘が聞こえて来る。朝日が昇ったのだろう。二本杉のまわりにも朝日が差し込んでくる。ファンの体が朝日に照らされると、青い光がひときわ輝いて、次の瞬間にはふっと消えてしまった。そして、その姿は元にもどる。

「やはりそうでしたか。ファン、急ぐことは少しもありません、ゆっくりと自分の素養を見つめていきなさい」

「先生、わかった。わかったから、喋らないで！」

泣きそうな声でファンが叫ぶ。シンはその横に膝をつくと、ファンに離れるように言った。心配そうな顔で、ファンはこちらを見つめている。

「死ぬ気になるのは早いぞ、バク。お前にはまだ、天の命（めい）が残っているだろう。……木行の預かる力はわかるな？　じっとしていろ」

シンはバクの体に袈裟がけに入った傷の上をゆっくりとなぞるように撫でた。服の下、肉の見えていたところが、何事もなかったように元の皮膚で覆われていく。

「木行は、生命を巡る生を司る。木々を起こし往く春の目覚めの力

だ」

バクの体から手を離し、シンは立ち上がる。バクが体を起こすと、ファンが駆け寄ってその傷があったところを見て、息を飲んだ。自身にすがる少年を一旦放し、バクは座り、深々と叩頭した。

「有り難き恩情賜り、天の臣として心より感謝申し上げます」

そして、バクは顔を上げ、辺りを見回した。

「今日に関わった記憶は、寝ている間に私が食べてしまいましょう。残しておけば、どちらにも支障が出るでしょうから」

立ち上がったバクに、ファンはにっこりと笑い、先生、と声をかける。

「やっぱり先生も獣人だった。いつもおれの怖い夢も、そうやって食べてくれたんだよね。だから、おれは今までずっと元気でいられた」

はっとした顔で、バクはファンの方を見て、膝をつく。じわり、とその目が潤む。

「ありがとう、バク先生」

ファンが言い終わる前に、バクはその少年の体を引き寄せ、抱きしめた。その目からは涙があふれる。ファンは初めこそ照れたようにじっとしていなかったが、バクが同じようにありがとう、と呟くと、同じように涙を浮かべ、それをもう一度繰り返した。

シンは少し離れたところで、朝焼けの空を眺める。今日も良く晴れそうだ。雲ひとつない晴天。しばらく、雨の気配はないだろう。旅に向いた日和だ。

旅立ち

バクの家まで戻り、その日は三人ともが深く休養をとった。翌日シンが旅支度を整えていると、躊躇(ためら)いがちにファンが声をかけてきた。

「シンさん、おれ、やっぱりどうしてもシンさんの弟子になりたい。先生はゆっくりでいいって言うけれど、今回みたいなことがまたあった時、このままでいるのが怖いんだ」

自らの身ではなく、奥で朝餉の後片付けをする、仮親を想う心ありきの言葉だ。シンは了承の意を込めて、しっかりと頷いて返す。

「ちょうど俺も言おうと思っていたところだ。……バク！」

バクは前掛けで手を拭きながら、仕方なさそうに微笑んだ。

「もうこちらでは昨日の夜のうちに話が済んでますよ。私は構いません、貴方が一緒なら心配せずに済みます」

そうは言っても、心配に心配を重ねるのがバクの性分。きっと姿が見えなくなる前から、あれやこれやと心配するのだろう。互いにそれがわかって、二人は小さく笑った。

「よし、ファン。支度をして来い。荷物は出来るだけ少なくな」

「わかった！」

「師に対しては敬語を使え。俺を呼ぶ時は、師匠、だ。わかったな！」

駆けだしかけたファンが、その背をぴんと伸ばし、高らかに返事をした。そして、前にのめるようにして、奥へと荷物を取りに行った。ほほえましく見つめるバクは、こちらに向き直り、訊ねる。

「まずはどちらへ向かうのですか？」

シンは荷物を全て、身につけて答える。

「まずは南へ向かおうと思う。その道、他の四獣と王に会う。ファンも引き合わせてみよう。何か得るものがあるはずだ」

支度を終えたファンが戻ってくる。言われた通りに、きちんと旅

支度が出来ている。
こうも支度が早いということは、こうなる前からずっとそれは準備されていたのだろう。
外へ出て、二人になった旅人は振り返る。
「じゃあ、先生！　行ってきます！」
「ええ、ちゃんと戻ってきなさい。道中は重々気をつけて、シンさんの言うことはちゃんと聞くのですよ。しっかりとその目で世界を見て、きっと帰ってくること。私は、ここで待っていますから」
バクは頷くとすぐに門の方へ向かって駆けだした。その後ろ姿を見送りながら、バクは呆れたようにため息交じりに笑う。その目は僅かにうるんだように見える。
「素直な子ですけど、時々とんでもない無茶をするんです。しっかり見てやってください。――ファンをよろしく頼みます、青龍様」
「ああ。無理とは思うが、バクもあまり心配してやるな。子はおもうよりも、しっかりやれるものだぞ」
言葉なく頷くバクに、別れを告げ、シンも門へ向かって歩き出す。少し先で待っていたファンと合流する。目が少し赤いのに気がついたが、見なかったふりをして、次の町へと向かう。次の町も日没までに入らなければならないから、余裕があるとはいえ、広がる山野で道草は食えない。
見あげた空は快晴。東の国を象徴する、どこまでも澄んだ鮮やかな青である。

日暮れの山道（前書き）

青の国の章の続きです。

日暮れの山道

街道を歩いていた二人は山の向こうへ消えてしまった太陽を見送り、深くため息をついた。次の町が南都のある国の南、赤の国へと続く関所なのだが、今おそらく門が閉まってしまっただろう。よほどのことがない限り、町へは入れられない規則になっている。夜になると動き出す外野の獣を防ぐためであり、また獣堕の元になるそれらの死霊を入れないためでもあった。門を閉めると街全体が風水の力に守られ、外から完全に隔絶される。都や大きな町、街道沿いの宿場町はほとんどがその造りになっている。

「まいったな」

シンは呟いた。後ろをついてくるファンもその足を止めて、シンの方を見る。前の町に着くなり、町に閉じ込めるように大雨の日が続いた。その間はファンに護身のために体術の稽古をつけてやったりして時間を過ごしたのだが、いざ雨が上がって出発してみると、雨のせいで街道の途中の山道が崩れてしまっていたのだ。多くの旅人は元の町へと引き返し、幾人かはそのまま進んだようだったが、山の中の道だったせいか、今ここに居るのはシンとファンだけだ。他の旅人の安否も気になるが、とりあえず今は自分たちの心配をしなければならない。

「すみません、師匠」

ファンは俯いて、言う。

「いや、いい。あれはお前のせいじゃあない」

ファンの長袴（ちょうこ）の膝が擦れて、穴が開いている。ここまで来る道で獣に襲われたのだ。ファンはもちろんシンも突然のことに慌ててしまい、逃げつ追いかけつしている間にファンが崖から滑り落ちてしまった。幸い、大きな怪我もなく、すぐに獣も追い払えたので大丈夫だったが、滑り落ちた分、ずいぶんと遠回りになった。昼間に獣が出ることは滅多にないとはいえ、気を緩めすぎたか。

そして、陽も落ちた今、こうして山道をうろうろしているのは昼にまして危険である。風水の封のある町へは今からでは入れないが、それでも夜露を凌げる場所が必要だ。街道の中でも大きな町、ファンがバクによって育てられたあの町を出て数日。旅慣れないファンには野宿は辛かろう。もとより、シンも徒歩(かち)でこんなに遠出をしたのは久方ぶりだ。休めるところがあればいいが。

「ファン、お前、木に上るのは得意か？　何か見えれば教えてくれ」

シンは樹上を指して言った。ファンは頷き、靴を脱いですぐ横の木に器用に登り始めた。枝の少ない上まで行くのもすぐだろう。

ここまでの道すがら、色々話した。バクが親でないのは物心ついたころから知っていたそうだ。親がいないこともその時らしい。ずっと、先生、と呼んできたそうだ。父、と呼んでもよかったのではないか、と尋ねたら、母親と思しき人の顔が浮かんできて、できなかったという。でも、気持ちの上では間違いなく、そのようにバクを慕っているようだった。よく育てたと思う。獏として夢を喰うにも、悪夢を食らうのは辛いらしい。感情も記憶もすべての身の内に引き込むためだ。相当の覚悟をしただろう。

「師匠！　明かりが見えます！　たぶん、村です」

「そうか、気をつけて降りてこい！」

ファンの返事が聞こえる。置いていた荷物を持ち、そちらを見やる。流れの旅人をとめてくれるかどうかはわからないが、厩舎(きゅうしゃ)でも貸してもらえればいい方だろう。ファンが支度を整えたのを確かめて、ファンが明かりを見た方向へと歩き出す。山を越える街道から、少し谷へ下った辺りだ。

※長袴(ちょうこ)……ズボンのこと。

境近くの村

村の中へと入った二人は、とりあえず一番大きい家の戸を叩いた。おそらく、村長の家だろう。外に繋がれた犬が吠えている。しばらくして、戸の向こうから若い女の声がした。

「どちら様？」

「東都から旅をしている者だ。すまないが、どこか屋根を貸して貰えないだろうか」

ほんの少し扉を開き、年頃の女がこちらを覗きこむ。その人は眉を寄せ、顔に僅かに怪訝な色を見せたが、すぐに後ろを見やり、答えた。

「父に、話してみます」

戸は閉まり、しばらく中で声がした後、開いた。出てきたのは年配の男だった。

「ひとつ空いた部屋があります、お貸ししましょう。どうぞ中へ」

「急な申し出だというのに、申し訳ない。感謝します」

二人は一礼すると、その家に入った。中は物こそ少ないが、明かりはいくつかともされ、隅々まできれいにしてあるのがうかがえた。椅子をすすめられ、ファンとシンは座る。二人にお茶を出すと、娘はすぐに家の奥の方へ行ってしまった。よく見れば、二人の対面に座る男もその娘も暗い顔をしているのに気付く。突然の訪問者を警戒する以上の、後ろ暗い表情だ。男性は口を開く。

「お役人の方とお見受けします。こんな山里にいらっしゃるのも故あってのことでしょう。お聞かせいただけないだろうか」

シンの刀や左腕と額の青い巻き布を見てのことだろう。役人は大抵、属する国の色を腕に巻くなどして、身にまとう。青にも色々あろうが、シンの布の色を見てそう声をかけるということは、よほど見慣れているのだろう。

「いや、私たちは役人ではありませんよ。私用の旅で南都を目指し

ています。道が崩れて遠回りしているうちに日が暮れ、難儀していたところに、こちらの明かりを見つけたもので」

シンは、横でファンが茶に口をつけているのを見やり、また男へ視線を戻す。微かに、安堵したような表情が浮かぶ。

「そうですか。いや、最近、よく関の町から人が来るもので。失礼しました」

「いえ、こちらこそ突然お訪ねして申し訳ない」

男はようやく笑みを浮かべた。そして、シンにも茶を勧めた。

「あぁ、そうだ。申し遅れました、この村の長を務めております、ニエンと申します」

続いて、二人も名乗る。

「私はシン、隣は弟子でファンと言います」

ファンが頭を下げる。礼節に厳しいバクといたからだろう、ファンは大人しくきちんと座っている。男はその様子を見て、顔をほころばせた。

「いや、随分お若い方がいらっしゃると思いまして、お弟子さんでしたか。ここまで大変だったでしょう。食事はもうとられましたか？」

村長は問う。

「いえ、まだですが、さすがにそこまでお世話になるわけには……」

「久しぶりのお客様ですし、旅のお話をお聞かせいただきたいのですよ。大したものも出せませんが、是非」

そう言うと、ニエンは奥の方に呼びかけた。

「ジンユイ、こちらに来なさい」

奥から、初めに会った女が出てくる。二十歳を出るか出ないかくらいだろうか。生成りの上着には赤い金魚が刺繍されてあり、袖や襟の朱の縁取りと共によく似合っていた。ニエンは二人を紹介すると、彼女に食事の支度をするように言った。ジンユイと呼ばれた娘は一礼して、調理場の方へ歩いていく。それを見送りながら、ニエンは頭をかく。

「少し前に妻を亡くしましてね、娘が身の周りの世話をしてくれています」
「この大きな家をお二人でとはいろいろ大変でしょう」
「いや、まぁ……はい」
奇妙に言葉を濁しながら、ニエンは笑う。不思議に思ったが追求するのも礼を欠くと、シンは追わず、他の話を振った。しばらくして、いい香りが漂ってきた。

親子

夕食が終わり、食後の茶を飲みながら、シンとニエンは近頃の世相について話を始めた。長の娘が片付けに向かったのを見て、ファンはその後を追う。シンの話を聞けばおそらくかなりの勉強になるとは思うのだが、だんだんと難しい話になってきて、ちっともついていけなくなっていたのだ。外にある洗い場の方へ行くと、彼女は四人分の器を、水を張った桶の中に浸しているところだった。

「お姉さん、手伝います」

彼女は腕まくりしながら振り返りにっこりとほほ笑んだ。

「あ、ありがとう。えぇと、ファン君？」

「ファンでいいです」

「ふふ、なら私もジンユイ、でいいわ。お父さんったら、また難しい話を始めたのね。ここしばらく、あんなに話についてこられる人がいなかったから、張り切っちゃって」

ジンユイは困ったようにため息をつきながら、麻の端切れで皿の汚れをこそいだ。それをファンに手渡して、すすぐように頼んだ。

「師匠も難しい話をすることが多いよ。おれ、まだ全然わかんないんだ」

そう、と彼女は笑う。

「私もそうなの。全っ然、わかんない。あ、そうそう。料理はどうだった？」

「すごくうまかった！　料理上手だね」

その答えに彼女は頬を緩ませる。

「ああ、よかった。久しぶりに四人分も作ったから」

「久しぶり？」

「前は、お母さんと兄さんがいたから」

その答えにファンは躊躇（ためら）いがちにまた尋ねる。

「……死んじゃったの？」

彼女は顔を伏せる。
「お母さんはね。病気だったから」
そして、ジンユイは父親の話をした時のような、困ったような顔をした。
「兄さんは出ていったの、お父さんと喧嘩してね」
彼女は家の方を見やった。議論を白熱させているだろう父親を思っているのだろう。ふと、微かな音にファンは山の方を見つめる。それに気付いたジンユイも木々の間に耳をすませた。馬の蹄の音だ。一頭だけではない、十頭以上いるようだ。地鳴りのようなそれはだんだんと近づいてきて、村の中央の方へ行ったようだった。不意にジンユイがそちらへ駆けだす。ファンも慌ててその後を追った。

ジンユイを追ったファンは村の中心の開けた場所についた。二十頭ほどの馬とその乗り手がそこにいて、地面の上にたくさんの荷物を下ろしていた。袋には青い竜の判が捺してある。東王の印だ。東都から来た荷物のようだ。
「兄さん！」
ジンユイが騎乗している男たちの方へ声をかけた。男たちの中から、首領のような男が一人進み出る。しっかりとした鹿毛の馬に乗ったその男は、生成りに青い縁取りのある服を着ていた。どことなくジンユイに似た顔のその男は、馬から降りてジンユイの後ろにいるこちらを睨んできた。
「あいつは誰だ、ジンユイ」
「旅のお客様よ。それより、また東都からの荷物を奪ったのね」
ジンユイの兄はそれを聞いて、小馬鹿にしたように笑う。
「届けられるべき場所に届かずして、何が配給だ。心配するな、他の村や関の町にもきちんと配る」
「そうじゃない！　戻ってきて、兄さん。人の物を奪うのが兄さんの善なの？　父さんだって、ちゃんと話せば……」
「リーユイ！」

後ろから声がして、ファンは振り返る。声の主は、怒りを露わにしたニエンだった。ニエンが飛び出してきたからなのだろう、シンもそこについてきていた。その二人をジンユイの兄は忌々しげに見て、馬に乗った。

「力なく腐った官とも、それに頼り切る者とも、これ以上話すことはない！」

馬上から吐き捨てるようにそう言って、他の男たちに合図するとまた夜の闇の中に消えていった。気付けば、村人たちが心配そうにこちらを窺っていた。顔を赤くして怒っているニエンは積み上げられた荷物を見て、深くため息をつく。

「ご子息ですか」

シンの問いにニエンは何も答えず、俯いた。ジンユイの兄ならば間違いないのだが、怒りに震わせる肩はそれを認めたくないと言わんばかりだった。そろそろと村人が出てきて、ニエンに話しかける。

「村長、そろそろ彼を許してやったらどうだい。確かに善いとは言えないけれども、官人や役人に対抗するには、もうこういう方法しかないのかもしれないよ」

「王の治に反抗させるために、あやつを旅に出したのではない。昇化して戻ってきたと思えば、さも正しいように暴力で人の物を奪う！　何が義賊だ、盗賊となんらかわらん。自分の息子であろうとも、許せるものか。否、息子だからこそ許せんのだ」

村人はおびえたように、ニエンの肩に触れ掛けた手を引っ込め、恐る恐る言う。

「とはいっても、彼らが配給を無料で配り始めてからは、私たちの暮らしも楽になったじゃないか。彼は私たちのことを思ってやっているんだろうよ」

その言葉に、シンが怪訝そうに眉を寄せる。ファンはシンの元に駆け寄り、どうしたのか声をかけようとしたが、ジンユイがまた突然に洗い場の方へ駆けて行ってしまったので、ファンはその後を追いかけた。

水盆鏡（1）

ジンユイは洗い場でうずくまっていた。ファンが来たことに気付くと、水でさっと顔を洗った。前掛けでそれを拭(ぬぐ)いながら、うっすらと赤い目でジンユイは振り返る。彼女は笑顔だったが、笑顔ではなかった。

「まだ、仲直りさせるには時間がかかりそうね」

立ちあがって、ファンに洗い物の続きをしないかと言った。

「お兄さんは、どうして盗賊なんかになったの。昇化だって」

「兄さんはね、役人になって人々の役に立つんだって言って、旅に出たの。私は反対したのよ。母さんが病気なのに、どうして今旅立つんだって」

ファンに器を手渡しながら、ジンユイは続ける。

「今こそ出かけるしかないんだって。父さんも私も怒ったんだけど、母さんがどうしてもっていうから、父さんも許した。でも、兄さんが旅に出た後、母さんの病気はますます悪くなって、都からの薬に頼るしかなくなった。前も買ったりしてたんだけど、配給が始まった時から、薬の値段が高くなって。都に合わせた値段だから、変えられないって」

ジンユイの手元の水桶にいくつか小さな波紋が広がる。

「母さんの病気は悪くなる一方なのに、薬は買えなくなっていって。1年経って兄さんが帰ってきて、兄さんの顔をみて、安心したのかな。母さんは死んだの」

小さな音を立てて、桶の中に雫が落ちる。ジンユイはその細い背を震わせていた。

「それから、兄さんはあんなになりたがってたはずの役人が嫌いになったの。母さんが死んだのは、役人の、官のせいだって」

ファンはなだめるように、ジンユイの背をさする。ありがとう、と小さく応えて、ジンユイは指で眼の端を拭った。

「私も官や役人は嫌いになった。父さんみたいに、王様を心から信用することはできない。でも、兄さんのやり方はきっと間違ってる」
「――それについてなんだが、俺が知っている情報とずれがあるようだ」
後ろからの声に、ファンとジンユイは振り返る。シンとニエンだった。ニエンは畏まったような様子で、後ろに静かに控えていた。
シンは何らかのことをニエンに話したようだった。
「お嬢さん。どんなものでも構わないが、水盆鏡（すいぼんきょう）はあるか」
「母さんが嫁入りにと残してくれたものが。今持ってきます」
ファンはシンの元に駆け寄る。それがどんなものかはファンも知っているが、鏡など何に使うのだろうか。水盆鏡は金属でできた浅い盆のような物で、水を張ると鏡になる。普通の鏡とは違い曇らないので、高価だが重宝されていた。頭に疑問符を浮かべているのに気付いたのだろう。シンはファンの方を見た。
「ファン。獣人になると使えるようになる力があるのは教えたな？」
ファンは頷く。バクのように人の夢を食べる力や、シンの回復の力などだろう。獣人になると単純な力がつくと同時に、特殊なそれぞれに与えられた力がつくと教えられた。
「それともう一つ、特殊だが大凡の獣人に使えるようになる術がある。まぁ、流石に双方がよく知る者でなければならないが」
ジンユイが水盆鏡を持ってきた。皆で長の家に入り、机の周りに集まる。シンは椅子に座り、水差しの水を水盆鏡に注いだ。曇った一枚の金属の器が水を注がれた部分から、周囲の風景を移し始める。波立ちが止むとすっかりと一枚の鏡のように水盆は正面に座るシンを映した。
「配給が有料になっているなど、初めて聞いた。――東王府に確認をとる」
シンが龍化した腕で、水盆鏡の縁をそっと撫でた。澄んだ音と共に、微かに水面が波紋をうつ。縁から中心へ数回波紋が行き来すると、水盆はほのかに青い光を発して静かになった。

「貴方がこちらへ繋げるなんて、珍しいですね」

鈴を振るような声がして、皆は息を呑んだ。そこに映るのは藍の玉の良く似合う美しい少女。東を治める、青龍と心を通わす者、東王その人だった。

水盆鏡（2）

東に住む者ならば、東王がどのような人なのかは知っている。だが、その姿をこうしてしっかりと見るものは少ないだろう。王はほとんど王宮の外に出ることがない。昇化を望む者が謁見する他はそこまで人が入らないからだ。

「何か困りごとでもありましたか」

東王は水面の向こうからこちらを覗きこんでいる。春を司る東の王であり、春の化身のような人だった。ファンが顔を寄せると、その人は嬉しそうに微笑む。

「一人の旅と思っていましたが、友達ができたようですね。そこは……関の近くの村ですか」

何をもって判断しているかはわからないが、東王はこちらの水盆の周りを見回してそう言うと水盆の中心に自らを映すように座りなおした。ファンはシンの顔を横目で見た。僅かに悲しげに見えるほどに優しい表情だった。だが、それはすぐに引き締まったものに変わる。

「突然に申し訳ございません。急な用ですが、一つお尋ねしたいことがあります、東王陛下」

シンが訊ねると、東王はこちらを見つめた。

「なんでしょう」

「国中へと送ったはずの配給に対価をつけていらっしゃいましたか」

東王の表情に驚きが浮かぶ。そして、ゆるゆると首を振る。

「いいえ。貴方も知るように、配給は薬や食糧が回らぬことを憂いてのこと、見返りを求めてなどおりません。……そうですか。私には未だに至らぬことが多すぎますね」

東王は憂いをその瞳に泳がせた。シンは静かに答える。

「陛下。国のすべてを見そなわすには時間が掛ります。善き治を行おうするならば尚更でございましょう」

「そう、ですね」
そして、シンは水面に浮かぶ少女をしっかりと見つめた。
「私用の旅の上に更なる無礼を承知でお願いいたします。これより数日、東を出るまでの間、私は東王府から遣わされた者ということにしておいていただきたい」
「――いいでしょう。では、これを」
東王がそう言うと、水面が僅かに揺らいで、そこから一枚の書状が浮かび上がった。それをシンが受け取ると、水面はまた穏やかになる。
「ありがとうございます」
シンが深く礼をすると、東王は再び微笑んだ。
「貴方ほどの人に、私が言えることなどありませんが、道中無理はしないように。たまには、用が無くても顔を見せてくださいね」
シンは応えず、ただ申し訳なさそうに少し笑んだ。
水盆から光が消えると東王の姿も消え、そこには四人を映す静かな水面があった。シンは立ち上がり、それぞれを見回した。三人は圧倒されるばかりに、言葉を発せずにいた。
「確認が取れた。やはり配給の値など、王の望んだことではない。こちらへの配給の官、役人に何か裏があるな」
そして、シンはニエンの方を向く。
「村長殿。この辺りの配給に関わる人物で、移動している官人以外、この辺りに滞在してそれを管理している者に心当たりはないだろうか」
ニエンは少し考えて、答えた。
「東都から来た荷物は一度、関の町に運ばれます。荷は全てそこで確認されるといいますから、関の取りまとめである、あの町の町長ならば何か……」
「そうか。では明日、町に着き次第尋ねてみよう。――事が解決すれば、ご子息もここへ帰りやすくなるだろう」
「ありがとうございます」

ニエンとジンユイが頭を下げる。他にはバクがそうしたものしか見ていないが、こうしてシンが頭を下げられる場面を見ると、ファンは自分がとんでもない人の弟子になったのではないかと思うのだ。

不意にあくびが出たのを、ファンは噛み殺しそこねて皆の視線を引いてしまった。笑いがこぼれ、シンがファンの頭に手をやる。

「夜も更けてきた。流石に、山越えは応える。――すまないが、寝床をお借りする」

「お疲れの上に、ご迷惑をお掛けしてすみません。すぐにご案内いたします」

ニエンが奥へと案内する。おそらくジンユイの兄、あの若い盗賊頭の部屋なのだろう。きれいに掃除されていた。二人は横になるとすぐに眠りに着いた。

王威の書

翌朝、ニエンとジンユイにお礼を言うと、二人は関の町へと旅立った。巡礼は大抵右回りに回るために、南都への関は東都側に町があり、関が最も南にある。よって関を持つ町は四方の国ごとに一つになる。次の町は南都へ向かう東の関だ。早めに出発したおかげもあって、関へは正午には着いた。シンは書状を懐に収め、関の主である町長を尋ねた。関所に着く前に、ファンはシンに言う。

「師匠。おれにも何かできることはありませんか。何か手伝いたい」

シンは頷いて、王からの書状を取り出した。文字は少ないが、三つ折りの紙の中央にある青い竜の印こそが王の権威を示すものだ。指先でずらすと、紙は二枚あった。

「王が二枚くれている。一つをお前に預けておく。身を守ることにもなる、手放すなよ。……おそらく、町長の部屋にはお前は入れてくれないだろう。その間、うまく他の奴らから話を聞いてほしいんだ。できる限りでいい」

ファンは大きく頷いて、書状を一枚預かって懐に入れた。

「お前にしか聞けぬ話がある。王の身辺には耳にいれたくない話で、俺には聞けぬ、核心に迫る話だ。頼んだぞ」

ファンの表情がきりりと締まる。心なしか嬉しそうなのは、これまでの過保護な暮らしもあるからだろう。幼く見えてしまうのは、充分に仕事ができるにもかかわらず、バクがこういうことに巻き込ませなかったからだ。正しいが、ファンが焦れたのも納得がいく。だから、なるべく何でもやらせてやりたい。

おそらく、ここに来る配給役の官人よりも、シンの方が、一時的にでも位が高くなっているはずだ。ならば、都合の悪いことをわざわざこちらには漏らすまい。こういうときは上から流された仕事をしている人間の方が断片的にもより多くの情報と疑問を抱えているのだ。ファンが言いだしてくれて助かった。

シンは自分の分の書状を関所の衛士に見せ、長に会いたいという旨を伝えた。どこかから視線を感じるが、気付かぬ振りをして返事を待っている間、ファンに言う。

「くれぐれも無茶はするなよ。何かあれば、俺を呼べ」

ファンは頷いて、上着の胸のあたりを握りしめた。書状のある辺りだ。シンはそれを見て満足気に頷くと、顔色を変えて戻ってくる衛士を見つめた。ファンに頼んでよかった。読み通りのことになっているようだ。

関はそれ自身が役所になっていて、大門を挟むように高い建物が建っている。南都へ向かって左側の建物の一番上が町長であり関の主の部屋だった。

「お伴の方は、こちらでお待ち戴きたい。腰の物も、同様に願います」

衛士の言葉に頷き、ファンが部屋の手前で足を止め、シンは腰の刀をファンに預ける。案内をした衛士がそれを確認し、元の場所に戻っていくのを確かめて、二人は顔を見合わせて頷いた。関の中は意外と人が少なく、動くのは容易そうだ。シンは扉を叩き、返事があるのを待った。

東の禍霊（1）

「と、檮?殿！　私はいったいどうしたら……」

慌てた様子の関の主は窓の桟に腰かける男に問いかけた。その男は手にした果物をかじりながら、関の主である町長を一瞥した。下顎の大きな犬歯が、その口元からのぞく。フン、と一つ鼻を鳴らし、檮?はそこから降りる。立ち上がると、小柄な関の主とは対照的に、低い天井に届くような背だとわかった。丸太のような太い腕に見合う、体の隆々とした筋肉と晒された胸の大きな傷跡がひときわ目を引く。檮?は、焦りに任せて動き回る町長を大きな掌で掴むと、長の座るべき椅子に投げるようにして座らせた。

「うるせぇ。こういう時にどうするかは、俺はちゃあんと言ったはずだぜ」

呻きを漏らしながら、町長は怯えた目で檮?を見あげている。

「めんどくせぇ奴が来たら、盗賊の奴らをけしかけるか、てめぇで消しゃあいいじゃねぇか」

「し、しかし、盗賊達も殺しまではしない上に、民衆から義賊などと呼ばれ始めていて……」

それを聞いて、檮?はまた一つ鼻を鳴らす。

「なら、そいつらも消しちまえ。義賊？　奴らは盗賊だろ？　罪人じゃねぇか」

町長は言葉に詰まり、ただ檮?の表情を窺うしかできなかった。この粗暴な男の言うとおりにしてからというもの、確かに羽振りは良くなった。以前からの良い評判もあって、金を取り立てても別段反対の声はなかったのだ。いや、違う。それは王の権威のおかげなのだ。王の命、とあれば大抵の人間は疑わぬ。善い治を行うのが王ならば、王が行う治は善いものであると人々が信じているからだ。現に、もう二年以上もこの方法が続いている。当の王が気付いているかどうかはわからぬが、王や使者に差し出すための嘘も既に用意

してある。
　盗賊と手を組んでいるのは事実だ。首領がここにまで押し掛けてきた時に、官からの指示だと言うと、協力するように脅されたのだ。こちらは要求を飲まざるを得なかった。いや、もしかするとそうなることを望んでいたのかもしれない。官には官のための、盗賊には盗賊のための嘘をついた。そして、それを全て指示した男が、それを潰せというのなら、その時こそ潮時である。何も知らぬ官も盗賊を倒すようにとうるさくなってきている。ならば、盗賊退治の手柄を持って、自分はこれから東王府へと上り詰めれば、いいではないか。
「わかったな。まぁ、どうしても手に負えねぇってなら、この俺がちったぁ手ぇ貸してやろうじゃねぇか」
「そ、それはありがたい」
　檮？はかじっていた果物の芯をぽい、と外に放り投げる。
「ところで、その王印携えてきた野郎ってのはどんな奴だ？」
「子供を連れた、背の高い男だと……ああ、丁度窓の下に見えている者でしょうな」
　檮？は窓の下に視線をやって、にやりと笑んだ。鋭く天に向かう牙が剥き出しになって、関の主はたじろいだ。檮？は衛士がその男を門に入れたのを見て、町長に向き直る。
「面白ぇ奴が来てるじゃねぇか。おい、あいつと盗賊を当たらせろ。倒させるか、説得させるかは、勝手にやれ」
「は、はぁ……」
　檮？は窓の桟に足を掛け、半身だけ外に乗り出す。
「うまくいったら、これからも手助けしてやるよ」
　そう言って檮？は窓伝いに屋根の上へと跳び上がっていった。町長はため息をつきながら、再び椅子に座り直す。あんな男が中央から遣わされたとは思えないが、御柱の獣人との繋がりを作っておくのも悪くない。いつの間にやら昇化の力を失った自分が成りあがるには、いかなる者だとしても利用せねばなるまい。そこで部屋の戸

を叩く音がした。使者が来たのだろう。町長は乱れた服を直すと、入室の許可を出した。

失った男

シンが部屋に入ると、窓を背にした椅子に町長らしき男が座っていた。小柄な男で微かに褪せた青い帯を締めている。随分前に、王宮で見た男だった。姿が変わっている以上、向こうがこちらに気付くことはなさそうだが、向こうも前に見たときの印象はほとんど残っていない。獣人で無くなっている上に、目ばかりが疑い深さの影を湛え、せわしなく動いてこちらを見定めようとしていた。シンは書状を取り出し、町長に示した。

「突然の訪問で申し訳ない。私は東王府から遣わされた、シンという者だ。配給の件で二、三聞きたいことがある」

「そろそろいらっしゃる頃と思い、お待ちしておりました。どうぞ、お掛けください」

嘘だ、と思いながらも、シンは黙って勧められるまま椅子に座った。そうだろうと思っていなければわからぬほどだが、町長の表情には狼狽が浮かんでいた。それが、後ろめたいことがあるからか、不意の使者への驚きなのかはわからないが、シンは静かに町長に尋ねた。

「近頃、盗賊に配給を奪われることが多いと聞いたが、それは事実か」

その問いに、町長は何度も頭を下げながら応える。

「いやはや、お恥ずかしい話で。盗賊どもには私共も困り果てております。奴らの首領が獣人でして、捕えられずにいるのです。昇化の身ともあろうものが、盗みを働くなどと……」

「その盗賊なのだが」

目に微かな青い焔を宿らせて、シンは町長の眼を見据える。途端に、愛想よく笑っていた町長が体を強張らせる。

「配給を奪っては各所に配り直していると聞いた。なぜ、王の名の下に無償で配られるものを、手に入れるわけでもなく奪うのだ。心

して答えよ、町長。――何故に王の所有物(もの)に値がつけられている？」
　町長の顔から笑みが消え、椅子から滑り落ちんばかりに後ろに下がろうとした。そして、涙声のような裏返った声が返ってくる。
「私は、やめた方がいいと言ったのです……！　しかし、この関と町を預かる身とはいえ、私とてしがない町役人にしかすぎぬのです」
「上の指示か。配給役の官人は数日後には東都に着く。連絡をやれば、向こうも何らかの沙汰を受けよう。後にここにも王からの使いが来るだろう。処遇についてはその時に聞け」
　シンは瞳の火を抑える。ついに椅子から滑り落ちた町長は慌てて座りなおして、こちらを向いた。その顔は蒼く、冷や汗を流していた。
「何とあろうとも、すべて……王の命に従いましょう」
　シンは町長の呼吸が整うまで待ち、再び尋ねる。
「もう一つ、聞きたいことがある。盗賊達が根城にしている場所はわかるか」
　町長はハッとした顔で、こちらを見返す。
「存じておりますが、どうするおつもりで……」
「やはり通じていたか。ならば、話は早い。値が戻ったとて、奴らが知らねば話になるまい。すぐに使いを出せ」
　町長の顔が曇り、困惑の色を示す。そして、しばらく考えこんでいたようだが、ゆるゆるとかぶりを振った。
「……できません」
「何故だ」
「盗賊を見逃していたことは如何(いかよう)様にも処罰を受けましょう。しかし、私から彼らに連絡を取ったことはございません。多少の協力をしたとして、彼らは役人を信用しておりませぬ故に、こちらから人をやろうものなら追い返されるばかりでございます」
　そう言って、町長は深くため息をついた。シンはそれを見て、男が獣人で無くなった理由を悟った。半ば仕方がないとは思うが、保身ばかりに気を使ってきたこの男は天が授けた獣の魂に見放された

のだ。力は永遠ではない。見合わぬ力を持てば、心を喰われるが、それでなければ力そのものに見放されてそれを失う。ため息をつき返し、シンは言った。

「ならば、こちらで勝手に行かせてもらう。場所を教えて貰えるか」

その申し出に町長は少しうろたえて答える。

「いや、しかし、王の使者様となれば、奴らは余計に警戒するでしょう」

「この際、無理にでも話を聞かせるしかあるまい。流石に容易にはいかぬだろうが」

町長は驚いたような顔で、こちらを見ている。

「こちらも勝手で申し訳ないが、他にも用が控えているのだ。急いでもらえないか」

そう言うと、町長は机の上で何やら筆を走らせた。地図のようだった。そして、墨の乾かぬうちにそれをこちらに寄こすと、町長は静かに頭を垂れた。この部屋に入った時より、幾分か小さく見えた。

「……王は慈悲の御方だ。そこまで厳しい沙汰もあるまい。心を改め、職務に臨めよ」

シンはそう言って、部屋を出た。部屋の外にいたはずのファンが見当たらない。話を聞きに、動き回っているのだろう。戻る途中で会えればいいが。地図を眺めながら、シンは外に向かった。

東の禍霊（2）

部屋に一人残された町長はぐったりと椅子に腰を下ろした。檮？（とうこつ）の言うとおりの運びになったとはいえ、あのシンと名乗った男の眼に見据えられた瞬間に、自惚れや虚偽が全て体から抜け落ちていくのがわかった。それは恐怖にも近い感情だ。額の汗を拭っていると、窓から大きな影が入ってくる。檮？だった。下顎の歯をむき出しにしてにやにやと笑うと、大した加減もなさそうに町長の肩を叩いた。

「よぉ、迫真の演技だったじゃねぇか。これで奴は盗賊とやりあう羽目になるわけだ」

「しかし、王の直下の者に何かあれば……」

その言葉に檮？は声を上げて笑った。

「何か？　あの野郎にか？　あるわけねぇさ」

「しかし、唯一人で昇化のいる盗賊達を相手にするなど……」

檮？は下の牙を見せてにやりと笑うと、町長の方を見て言う。

「心配なら、関の兵を後からこっそりつけてやれ。いや、つけておけ。どの道、あの男が生きて戻りゃ、官にした話と食い違うんだ。残った方を始末させろ」

檮？の真意に町長は息を飲む。体の底から湧きあがるような悪心に耐えながら、目の前の大男を見る。ああ、この男は唯人ではないのだ。絞るように、町長は声をだす。

「そんなことをすれば……」

「うるせぇ！」

檮？の太い腕が唸りを上げて、振られる。人の腕ではなく、虎のような獣の腕だった。それをまともに食らった町長は椅子ごと後ろの壁に叩きつけられる。

「てめぇは黙って言うこと聞いてりゃいいんだよ！」

町長はその喉から呼吸と悲鳴がない交ぜになったものを吐き出しながら、机にうつ伏した。その心にはただひたすらに後悔が溢れだ

している。しかし、それはもうどうにもならぬ感情だ。ああ、目の前の男は――化物なのだ。後ろの窓に影が通る。鳥だろうか。失った獣人としての力が何だったのかすら、もはやおぼろげだ。そして、町長は気を失った。檮?はそれを見て、フン、と鼻を鳴らすとまた窓から外に出ていった。

関守りの衛士

シンが部屋に入ったのを見て、ファンは辺りを見回した。預かった荷物と刀を自分の荷物と一緒に背負いこむと、元来た道を戻り始める。来る途中の階や覗き見た部屋から考えるに、上の階はあまり人がいないようだった。どの道、話が終われればシンは下へ降りてくるだろう。これで役に立てたら、もっといろいろなことをシンは教えてくれるだろうか。旅を始めてからというもの、周りは目新しいものばかりが行き交っている。色々触れてみたいとは思うが、流石に教えを請う身である以上、あんまりうろちょろしてはいけない気がして、気が引けて手が出せずにいた。

下に降りると、案内をしてくれた若い衛士が棍を支えに、だるそうに立っていた。顔色が余り良くないようだったから、具合が悪いのかもしれない。近づくと、不思議そうな顔で話しかけてきた。

「お前さんは上で待ってなくて良かったのか？」

「部屋の外だと、中の話が聞こえてしまうから。大人の話に首を突っ込んだらいけないと習ったので」

そう言うと、衛士はそりゃあ立派なことだ、とファンを見て、うんうんと頷いた。そして、とうとう傍に置いてあった椅子に腰かけると、再び話しかける。

「あの人はどういう人なんだい？」

「師匠のことですか」

「ああ、君の御師匠さんなのか。何やら町長が顔色を変えてたから、相当偉い人なんだろう？」

答えようとしたが、どう答えればいいのかわからなかった。思えば、シンがどういう人間なのか、ファンはほとんど知らないのだ。幻獣付きは都を出ないという話を聞いたし、しかも青龍の国である東の、この青の国で竜をつけているということは相当の実力者には違いない。昨日のように王と会話できたなら、尚更そうなのだろう。

しかし、それは推測の域をでない。
「師匠は、あまり自分のことを話さないんです。でも、きっとすごい人なんだと思う。幻獣つきだから」
「そうか、そりゃすげぇ……」
そう言って、衛士は咳きこんだ。あまり良くない音だ。
「風邪ですか？」
「ああ、そうみたいだな。前の当番の日に雨に打たれたもんだから」
「薬を飲んでちゃんと休んだ方がいいですよ」
衛士は苦笑いをしながら、顔の前で手をひらひらやって見せた。
「俺の給料じゃ、薬は買えないよ。ま、寝れば治るさ」
そう言ってまた咳きこんだ衛士の背を、ファンはさすってやった。そう言えば、旅の荷物の中に薬も持ち出してきていたか。荷物をさっと下ろすと、小さな紙の包みを差し出した。
「使ってください。おれは丈夫だけが取り柄ですから」
衛士は最初こそ拒んでいたが、ファンはどうしても渡すつもりだったので、その後で申し訳なさそうにそれを受け取った。ちょうどいい、とファンは衛士に問いかけた。
「おれがいた町では配給の薬は普通に配られていたんですが、こっちは買わないと手に入らないんですか？」
ファンがそう言うと、衛士は途端に緊張した表情になって、ファンに黙るように合図した。周りをきょろきょろ見回すと、声を落として言う。
「そうなんだ。俺も最近知ったんだが、どうも町長と配給役の官人が仕組んでるみたいでな。しかも、中で掃除夫やってる友達がいうに、町長の部屋に頻繁に誰かいるらしいんだ」
「誰か？」
「窓から出入りする大男を見たってやつがいる。そいつもきっと何か関係してるんじゃないかっていう噂さ。あんまり他に言うなよ。お前さんだから言うんだ。お師匠さんに教えてやりな」
そう言うと、衛士は棍（こん）をつえ代わりに立ち上がり、再びいかにも

衛士だという風に立ち直した。そして、ファンから貰った薬を懐にしまいこむと、ファンに向かってにっこり笑った。

「ま、いずれ悪事は露呈するさ。何やら昇化の男が配給の配り直しやってるみたいだし、王様だって今にそいつらを罰してくれるに違いないってな」

「王様が？」

「そうさ、だって王様だぞ？」

衛士の顔を見れば、その言葉に何の皮肉も疑いもないことが容易にわかる。思えば、青の国に居ながら、ファンはあまり王のことについて知らなかった。姿すら昨日初めて知ったくらいだ。旅の途中、王に関わる話は度々耳にしたが、批判など一つも聞こえてこなかった。国中が信じる王、青龍の獣人。シンに聞けば教えて貰えるだろうか。その時にシンのことについても聞けたらいい。

「で、その王様の下で働く偉い人の、その弟子がお前さんなわけだ。なぁ、素養は定まっているか？」

ファンは首を振る。それを見ると、衛士はそうか、とほほ笑んだ。

「そうか。俺もな、素養が定まったのが遅かったんだ。それに、四方を回れるほど時間も余裕もなかったからな。でも、今こうやって衛士をしていると、これでも充分なんだって思うんだよ」

衛士はファンの頭にぽんと手をおいて、微笑む。

「だけど、お前さんはきっと、獣人になるんだ。だから、お師匠さんにも恵まれる」

「本当に？」

「ああ、きっとそうさ。お前さんはいい奴だからな。俺が保障する」

ファンは衛士に礼を言って頭を下げた。なんとなく、胸のつかえがとれた気がしたのだ。さて、と言って衛士は正面を向くと、関の大門を見回し始めた。配給の値についての話と変な男の話を聞くことができた。これだけでも、何か役に立つだろうか。そう言えば、衛士の仕事中に話しかけてしまったのか。慌てて立ち去ろうとすると、ファンは衛士に呼び止められた。

「そういえば、名前も聞いてなかったな」
振り返って、ファンは応える。
「ファンです。お兄さんの名前は？」
「シュウだ。お前さんの名前、覚えておくよ」
互いの手を握って、顔と名前を胸に焼き付けた。ふと気付くと、足元に一枚の紙が落ちていた。王からの書状だ。手を伸ばした時にでも懐からこぼれてしまったのだろう。慌ててファンが拾おうとすると、薄紙のそれは風に攫われて、空へと舞い上がっていってしまった。書状は青い竜の印を翻しながら、関所の屋根の上へと落ち着いた。
「あっ！　取りに行かないと！」
「おいおい、ありゃあ書状か！　関所の裏手に上にまで上がれる梯子がある、それを使え！　また飛ばされないうちにな」
ファンは頷き、シュウに背を向け走りだした。書状はちょうど町長の部屋の上辺りだろうか。建物の裏手に回りながら、ファンは風が書状を攫ってしまわないように祈った。

魔獣の徴

梯子（はしご）は地面から少し浮かせて壁に取り付けてあった。助走をつけて地を蹴って、梯子にしがみ付く。背負った荷物を落とさぬように姿勢を立て直しながら、上へと登り始める。今までの経験からいって下手な落ち方をしなければ死なないだろうが、やはり関の扉自体が大きいために建物自体も随分高さがある。怪我をすれば面倒だ。念のために陸棟（ろくむね）の部分に手を添えて、足元に注意を払いつつ、書状のところまで進む。書状は鉄紺（てっこん）の瓦の間に挟まる様にして引っかかっている。滑り落ちてしまわぬように気をつけながら、ぐっと手を伸ばして書状を掴んだ。屋根の上の土埃で少し汚れてしまっていたが、青い竜の印はきれいなままだ。ほっと息をつくと、ファンはそれを再び上着の内側にしまった。

「……しかし、王の直下の者に何かあれば……」

話声が聞こえて、ファンは耳をそばだてた。そういえば、すぐ下は町長の部屋だった。シンの声は聞こえないが、部屋にいるのは町長だけではないようだ。荷物が転がらないように足で押さえると、逆さに上半身だけ屋根から下にぶら下げた。手で屋根の縁を掴んで、なんとか落ちないように下の部屋を窺（うかが）う。さすがにこんな恰好で関所の屋根にしがみついていれば、誰かに見とがめられるだろう。だが、妙に下の様子が気になって、ファンは開いた窓から室内の様子を眺めた。

窓からは町長の姿がよく見える。そして、その横には部屋の大きさに不釣り合いなほど大柄な男が立っていた。シュウの言っていた大男に違いない。

風の音でとぎれとぎれだったとはいえ、大体のことが聞きとれた。シンに伝えなければ。どうしたらいいかはわからないが、シンなら何か良い対処を考えてくれるはずだ。上体を起こそうとして、急に背筋がぞわぞわとして、室内に視点を戻した。轟音がして、町長は

窓からの死角に消えてしまった。関所を震わすような振動に、ファンは屋根の縁を掴んでいる手に力を入れた。大男の姿がおかしい。腕は人間のものではなく、いつか見たような獣の腕だ。否、それよりもずっと凶悪で、体の芯から震えるような恐怖を与えた。怖い……怖い！

手が震える。指先にまで力が入らない。冷や汗が胴から首筋まで下がってくる。早く、シンのところへ戻らなければ。きっとあれは、今決して出会ってはならない。特に独りでは。

「うわっ！」

急いで戻ろうとして、屋根につき直した手が滑って空中へ泳ぐ。汗で滑ったのか。体重はその腕にかかっていて、ファンはそのまま落下した。荷物も弾みで一緒になる。

落ちる。荷物も。このままだといけない。ファンは夢中で宙を掻いた。伸ばした右手が届いた窓の桟を掴む。もう片方の手でシンの刀を掴み、荷物の袋を両足で捕える。とっさのこととはいえ、自分を含め下に落ちずに済んだようだ。

ファンはひとまずの無事に息をつこうとしたが、捕まる右手の横に踏み下ろされた足に、その息をまた飲みこむことになった。あの大男が窓から身を乗り出している。少しでも目線を下にやれば、向こうはこちらに気付くだろう。男の正体は知らないが、気付かれたら終わりだと、予感が体を駆け巡る。ファンは体の隅々まで硬直させた。一呼吸でも、心臓の音でさえも、気取られぬように。息を潜めつつ、間近にその男を見た。腕は人の腕に戻っていた。挑戦的に天に向かう下顎の牙と、羽織っただけの上着から除く大きな傷。そして、先ほどまで上着で隠れていた、わき腹の刺青。牛の角のような模様だった。

荒い呼吸のその男は窓を蹴ると屋根の上にあがった。男の気配が屋根の反対側に移動したのを感じて、ファンは左腕の刀をとりあえず室内に投げた。そして、両腕で窓の枠を掴んで、室内に転がりこんだ。足の荷物を確かめ、室内を見回した。町長らしき男は机に突

っ伏していた。ファンは慌てて近寄って息をしているか確かめた。どうやら気絶しているだけのようだ。町長が呻きながら身をよじったので、ファンは慌てて刀と荷物を持ち、部屋のドアから廊下へ出た。説明するのは、かえって騒ぎが大きくするだろうし、何よりあの男と話していた町長には信がない。

下まで降りて外に出るとシンが待っていた。シュウに何か話を聞いていたようだが、ファンの姿を見て、シュウがこちらを指差して何やら話したところをみると、行方を聞いていたようだった。

「ファン。どこまで行ってたんだ?」

「師匠……あの」

ファンの体に、先ほどの恐怖が戻ってくる。言葉が途切れ途切れにしか浮かんでこない。ファンのその様子を見て、奇妙に思ったのだろう。衛士も横で心配そうにこちらを見ていた。シンはファンの肩を抑え、静かに問う。

「ゆっくり話せばいい。何を見て、何を聞いた? とりあえず、しっかり息をしろ」

ファンは言われたように、深く空気を吸い、呼吸を整える。そして、シュウから聞いた話と、書状を追って上まで行ったところから順を追って、漏れのないようにと話し始めた。

話が終わると、シンは黙ったまま腕組みをした。

「だから、このまま盗賊達のところへ行ったら、大変なことになると思います」

ファンがそう言うと、シンはしばらく考えこみ、首を横に振った。

「いや、行こう。そういう話ならかえって奴らにも知らせてやるべきだ」

「でも、あの男の言うとおりにするのは……」

ああ、と頷き、シンはシュウの方に振り返った。

「シュウさん、だったか。頼みたいことがある」

「ああ、なんでも言ってくれ。できることなら手伝うぞ」

「すまない。俺達はここから盗賊達のところへ向かう。町長は俺達に兵をつけるだろう。あんたにはその兵たちに途中で引き返し、事が済むまで潜んでいるように伝えて欲しい。巻き込まれればことだ。必要なだけ、真実を伝えていい」

シュウは頷いて、すぐにでも、と関所の中に入っていった。シンは預けた刀を受け取ると、陽の高さを確かめる。

「急いだ方がいいな。陽が落ちれば門が閉まる。出られなくなれば厄介だ」

「師匠」

ファンの声に、シンがこちらを向く。

「おれもついていっていいですか。――足手まといになるなら、残ります。でも、出来る限り、力になりたいんです」

ファンがそう言うと、シンはしっかりと頷いた。

「当然だ、ちゃんとついて来い。俺はお前を足手まといに思ったことなど、この旅で一度もない。だから、出来る限り自分の身は自分で守れよ」

「はい！」

二人はまず街の外に出るために、街の入り口に向かって歩き出した。陽が落ちるまで時間がない。足早に門の外に出ると、村のあった峠の方へと進んだ。

世に潜む力

周りが木々ばかりになった頃、シンは辺りに人がいないのを確認して言った。

「お前が見たその男は、おそらくお前を見つければ、あの獅子の双子のように狙ってくるだろう。だが、力はあの男たちや獣堕(じゅうだ)など比較にならん。あの男に会ったら、俺から離れるな」

「はい。……あの男は、何者なんですか」

「おそらく、檮?(とうこつ)。遥か昔にこの地に封じられたはずの、魔獣の一人だ」

シンが刀の柄をぎりりと握る。その表情は険しい。それを見るに、ファンが感じた恐怖は間違いのないものなのだ。

「町長と話をしていたのなら、俺のことにも気付いているだろう。出会わずに済めばいいが、そうはいかないだろうな」

「……どうして、俺は狙われるんですか。太極とかいうのも、俺の……あの夢と何か関係があるんですか。教えてください、師匠。俺は自分のことも、師匠のことも何もわかりません」

御しきれぬ不安を声にのせながら、ファンは問うた。ちょうど峠の一番上まで来た頃、関の町からの鐘の音が細く聞こえてきた。見せて貰った地図によれば、盗賊達はここから道を逸れ、谷の底の方にいるはずだ。息をついてシンは足を止め、ファンの方へ振り返る。

「土地にはそれぞれ護虫(ごちゅう)という天が配した力の塊がある。東なら鱗虫、つまり、鱗のある生物の力、というようにな。誤解されがちだが、獣人が天や土地から力を得て使っているんじゃない。その土地の護虫が獣人を介して、その力を地上に具現させるんだ。そして、御柱の土地を具現しうるのが、太極」

「御柱の?」

シンは頷く。周りの木々の間を夜の影がだんだんと埋めていく。

「可能性がないんじゃない。四方を統べ、災い為す獄の力を抑え込

む御柱の力を受けて、あらゆる可能性を持つのが太極、つまり、ファン、お前だ。太極を得れば獄の連中はこの国を手中に収めようとするだろう。だから、お前を追う」

「さっきの檮杌（とうこつ）？っていう奴も」

「そうだ。だが、奴らからは俺がお前を守る。バクとそう約束したからな。それに、奴らがこうして地上に出てきたのは……おそらく、俺に原因がある」

シンは再び歩き出した。道のない暗い山道を谷に向かって下っていく。ファンはその背をしっかりと追いながら、シンの話の続きを待った。

「必死のことで覚えていないかもしれないが……あの獅子男共の件で、俺はお前に青龍の力を与えたな。この国で青龍の力を扱えるのは、東王とその守護獣――青龍そのものだけだ」

「じゃあ――」

ファンは駆けだして、シンの表情を窺おうとした。頭の中はまだ混乱したままだ。もっと聞かなければ、この頭の中の思考の渦はきっと止まらない。

が、シンの前に出ようとして、シンが出した腕に止められた。見れば、下の方に微かに明かりが見える。谷の底を流れる川の音と馬の嘶き（いなな）。

「黙っていて悪かったな。後で話すつもりだったんだが、かえって不安にさせたか」

そして、シンは谷の底の方を窺いながら、辺りを見回し、下へと降りられる道を探す。そして、ファンについてくるように言った。

「続きはこの件が終わったらきちんと話す。今は、盗賊達の相手が先だ。奴らが素直に話を聞いてくれればいいんだが」

ファンは静かに返事をして、後ろに下がった。そうだ。何にしろ、今自分は彼の弟子であり、彼は自分の師なのだ。今はそれだけを把握していれば充分だ。

崖のようになっている山肌を滑り降り、二人は盗賊達の根城へと

足を踏み入れた。

盗賊のねぐら

谷を流れる川は雨の影響もあって濁っていたが、水はだいぶ引いていた。川べりの平地に盗賊達はいくつか天幕を張って根城にしているようだ。日が暮れたのもあって、かがり火がたかれ、火の横に見張りが立っている。

「下手に小細工すれば面倒だな、行くぞ、ファン」

二人は一番近い見張りの男に歩み寄る。暗闇の中から突然出てきた二人に、見張りは腰の刀を抜いて、怒鳴った。

「誰だ、てめぇら！　何の用だ！」

刀の先が喉に向かっていても、シンは平然として応える。

「東王の臣下だ。話があってきた。リーユイという男を出せ、知らせたいことがある」

見張りの怒声を聞きつけて天幕から盗賊達が続々と出てくる。二十人くらいか。二人を囲むように集まってくると、警戒の目を向けてきた。見張りは刀を下ろさず、言った。

「頭領はいない。言伝があるなら伝えてやる、さっさと帰るんだな」

「ならば、待たせてもらう。嘘を伝えに来たのではないからな、信用してもらえるまではここから動かん」

そう言ってシンはその場に腰を下ろした。ファンも傍に腰を下ろし、周りを見回して周囲の出方を窺った。シンの態度に、見張りはたじろいでいた。

「立ち去れ。じゃねぇと痛い目みるぞ！」

そう言って、見張りは脅すように刀をシンに向かって振りおろした。寸でのところで止めるつもりのようだったが、肩に届く前にシンが竜化した腕でその刃を掴んだ。刀の腹に爪をたてると、刀に爪が食い込み、ひびが入った。次の瞬間には刀は中ほどで砕けて河原の石に当たり、音をたてて散らばった。

周りの男たちが息を飲む音が聞こえる。次第にそれはざわざわと

した話し声に変わり、中から声がひとつ飛び出した。
「頭領を呼んで来い！　こいつ獣人だ！」
「――その必要はない。もう来ている」
男たちの後ろから、静かな声が響いた。先ほどまでのざわつきは水を打ったように静かになり、天幕の方にいた男たちはその声の主に道をあけた。
「お前たちは、昨日村にいた奴らだな。私に何の用があって来た」
首領はシンの前に座ると、せせら笑うような笑みを浮かべてこちらを見た。
「東王の使いだったとはな。謝罪でもしに来たか？　それとも、荷を奪わぬようにとでも頼みに来たのか？」
「違う」
シンは真っすぐにリーユイを見据えた。
「お前に真実を伝えに来た」
「真実、だと？」
「簡潔に言おう。王からの配給に値がついているのは、ある者の指示によって、関の町の町長と配給役の官がやったこと。王も既にご存知である。官はすぐに処罰されよう。配給の値は取り消させた。よってこれ以上の略奪は無意味だ、すぐにやめろ」
「何を言うかと思えば、結局荷を奪うなということではないか。で、そのある者とは誰のことだ？」
「――檮（とうこつ）？」
シンがそう言うと、リーユイは目を丸くしたが、すぐに大きな声で笑い始めた。そして、笑みの中に怒気を含めて言う。
「東王府も堕ちたものだな。未だに神話のような作り話を信じているとは」
シンはリーユイから目を逸らさずに言い返す。
「堕ちたのはどちらか。東王府へ来た頃のお前はもっと志の高い人間に見えたが。己の眼で真実を見極めんとする、実にまっすぐな男だと思っていたが、今こうも猜疑にまみれていようとはな。そこま

で眼が曇れば何も見えまい」
「言わせておけば、好き勝手なことを。お前が何を知るというのだ。今頃になって来たかと思えば、虚言を並べるばかりだ。気に入らん。――このまま帰れると思うなよ」
リーユイは立ち上がるとこちらに背を向け、男たちに合図した。盗賊達はそれぞれに刀を抜き、二人に向かってじりじりと間合いを詰めた。シンはそれを見回しながら、立ち上がった。
「ファン、出来る限りでいい。刃物もある、無理になったらすぐ伏せろ」
ファンは黙って頷いた。シンは両腕を竜化させる。二人が背中合わせに構えを取ると、男たちは飛びかかって来た。

鯉魚の男（1）

数分も立たず、男たちは気絶するか戦意を失うかして、襲ってこなくなった。ファンは上着こそ僅かに切られていたが、立ちまわりながら二、三人倒したようだ。稽古をつけた時にも思ったが、バクが護身を身に着けさせたこともある上に、どうやら元からの筋がいいらしい。

「貴様ら……！」

天幕の横で成り行きを見ていたリーユイは怒りの形相でこちらを睨んだ。そして、露わになっている肌の部分が次第に錫色の鱗に覆われていく。それらはかがり火に照らされ、金属のように夜闇に映えた。途端に傍で緩やかに流れていたはずの川が波立ち始めた。リーユイがこちらに向かって掌（てのひら）を向ける。その掌には魚のひれのように水かきがついていた。

「ファン！　伏せていろ！」

ファンは急いで地面に伏せたその上を拳ほどの水の塊が過ぎていく。後ろの方で木の軋（きし）む音がした。水弾があたったのだろう。シンもしっかりと避けたようだが、川からはいくつも水の玉が浮かび上がってこちらへ飛んでくる。水弾を受けた木を見れば、人の身などひとたまりもないのがわかる。シンは水弾を避けながら、魚鱗を纏（まと）う男に向かって駆けだした。

「く、来るな！」

水弾の数と勢いが増す。シンは足をも竜化させると、一跳びで一気に間合いを詰める。つきだされていた腕を取り、力を入れて握った。リーユイが顔をゆがめ、痛みの呻くと同時に、水は全て地面に落ち、吸い込まれていった。リーユイはシンの顔とその龍化した腕とを見て、困惑と嘆きを浮かべて、呟いた。

「王の臣下よ。それほどの力を持ちながら、何故今になって現れたのだ……もっと早く、気付くことはできなかったのか。誰かが犠牲

になる前に！」
　シンは眼を伏して、掴んでいた腕を放した。腕は人の腕に戻っていた。リーユイはその場に座り込む。
「私はここから動かん。盗賊の罰は受けよう。だが、それは俺だけにしてほしい。他の者は故郷を想い、ただ私の泣き言についてきてくれただけなのだ」
　地面に伏されていた男たちから、すすり泣くような声が聞こえた。
　シンは首を振った。
「言ったはずだ。俺達は真実を伝えに来たのだと。国を憂いて立ちあがったものを罰して何になる。――王も、俺も万能ではない。だから、お前たちのような者の力が必要だ。それを見通したからこそ、お前に力を与えた」
　リーユイはハッと顔を上げた。シンの眼を見つめると、静かに叩頭した。そして、立ち上がる。
「略奪の徒は今を持って解散する。もとより、周辺の村の勇士だ。もしこれより困ったことがあれば、我々はすぐにでも駆けつけよう」
　感謝の言葉を述べて、シンが差し出された手を取ろうとした時、ファンの声がそれを止めた。
「師匠！　何かに囲まれています！」
　シンはかがり火から火のついた薪を取って投げると、それに照らされたいくつもの赤い双眸が周りを取り囲んでいるのが見えた。唸り声が地を這う。獣の群れだ。
「檮？め、やってくれる」
　生ぬるい風が獣の臭いを運んでくる。シンは再び構えを取り、腕を竜化させる。ファンは転がっていた棍を手にして、構えている。
　盗賊だった男たちもめいめいに武器を取ると、襲いかかって来た獣たちを迎え撃った。

鯉魚の男（2）

倒しても、獣たちはまるで増えているかのように次々に向かってきた。闇の中から湧くように襲い来る獣たちを、迎え撃つこちらは有限であるから皆の消耗が目立ってきた。恐らく朝になれば奴らは引くだろうが、陽が昇るまでこちらがもつとは思えない。

「きりがないな……！　ファン、大丈夫か！」

ファンから返事が返ってきたのを確かめたが、疲労が混じっているのはわかる。これ以上長引けば、誰が倒れてもおかしくない。

「東国の守護者よ！」

シンやファンから離れた場所でリーユイが叫ぶのが聞こえた。男たちに何か指示を回していたらしい。川の底が露わになるほどの水を獣の群れにぶつけ、波にさらわれた獣を川下へ押しやる。

「ここは皆に任せてくれ。獣を操る者を倒さねばならないのだろう？　関の町まで案内する！」

「門を開けさせられるのか」

「ここで説明している暇はない！」

尋ねたが、リーユイはただ、ついてくるようにとだけ言って走り出した。周りの男たちも追うように急かし、シンとファンは礼を言うと、リーユイを追って駆けだした。上流へと川沿いを走ると、石を積んだだけのような古井戸にたどり着いた。辺りに明かりはなく、水は光を吸い込んだように暗い。

「この川がもっと大きかった頃に、関の町が作った水路がある。今は遥か地下の空洞に地下水として流れるだけだが、遡れば関の町の井戸に出る。町長に会うために何度か使った道だ」

そう言うと、リーユイはその身を鈍色（にびいろ）の鱗で覆い始めた。足はひれのように薄く大きくなり、見る間に半魚の体を成して井戸の中に飛び込んだ。着水も静かに、リーユイは続けた。

「息が切れる前に、必ず向こうまで送り届ける。約束する。準備が

できたら、充分に息を吸い込んでから飛び込んでくれ」
　井戸の底から水音と声が響いてくる。井戸の底を覗き込むファンの顔には心配の二字がはっきりと浮かんでいる。おそらく、自分もそうだろう。しかし、行かねば道はない。そして、向こう側ではあの魔の者が手ぐすね引いて待っているだろう。
「行くぞ、ファン」
　シンは井戸の淵に手を掛け、呼吸を整えると、井戸の中に身を投げた。水は身を切るように冷たく、水底は獄へと続くかのようだった。上で水音がする。ファンが飛び込んだのだろう。刀が離れていないのを確かめ、体勢を立て直そうとすると、何者かが腕を掴んだ。人の掌ではない。恐らくリーユイだろう。次の瞬間には、水の圧に負けるような勢いで、二人は水のくる場所、関の町へと引っ張られていった。

宵闇の関

肺の空気に不安を覚える頃、頭上に月明かりが射した。リーユイに引かれるままに水面に上がると、二人は急いで空気を吸い込んだ。こちらの井戸は人が使っているようで、釣瓶（つるべ）がかけられている。服が水を吸っているとはいえ、一番身の軽いファンがまずそれを伝って上り、ファンが辺りに人を確認すると、シンも縄を伝い井戸から這い上がる。そして、井戸から一匹の大きな魚が飛び出して人の形を成す。完全に人の姿に戻ったリーユイはすぐに周りを見渡していた。

月明かりは束の間で、すぐに雲に覆われてしまった。リーユイは服以外余り濡れていないようだ。ファンは上着の裾を集めると、ぎゅっと水を絞った。髪を結っていた紐が流されてしまったようで、襟足に自分の髪が張り付くのを感じる。シンは額の布が緩んだのか、巻き直している最中だった。

「この通りをまっすぐ行けば、すぐ関に着くだろう。私は町長に用がある。同行させてくれ」

その申し出をシンは了承する。

「だが、檮？（とうこつ）が暴れだせば、かなりの範囲を巻き込む。その場合はできるだけ離れてほしい。この時間でも人がいればまずい」

リーユイが頷き、三人は関に向かって走り始めた。服はまだ水を吸っていてずっしりと重い。足をつく先から、びたびたと水の音がした。深夜とはいえ、人が見れば奇異に思うだろう。走りながら、シンは言う。

「ファン。お前は絶対に俺から離れるな。檮？だけだと思うが……念のためだ」

ファンは小さく返事をして、足を速めた。

関に着くと、やはり大門は閉じられていた。見張りの火だけが赤々と燃えて、辺りを明るく照らしている。建物の影から三人は様子

を窺うと、十人近くの見張りの衛士が辺りを動き回っていた。それらを見て、リーユイは声を落とし、言う。
「いつもより見張りが多い」
「参ったな、倒している時間はないんだが」
シンは応え、見張りの動きを一つ一つ眼で追っていた。ファンは頭上の月を見あげた。月は雲に隠れては、切れ間から顔を出すのを繰り返している。照ればそれなりに明るいが、隠れるとまったくの闇になるだろう。この場を照らすかがり火は、離れたこちらまでその熱を伝えるように燃え続けている。
「リーユイさん。おれたちの服から水は抜けますか？」
リーユイはこちらを向いて首を傾げた。そして、しばらく考えてから応える。
「溜まった水でないからわからないが、おそらくできるだろう。だが、服などに構っている暇は……」
「あの火を消せるくらいの水を、おれ達は持っていると思います。火が消えて、月が隠れれば、きっと見えない」
やってみよう、とリーユイはすぐに了承した。服から糸が抜けるように、水がリーユイの手元に集まっていく。ファンがそれを見ていると、シンに目の前を覆われた。
「いい案だ。なら、目を閉じておけ。俺達が闇に慣れて動けないと駄目だぞ」
「確かに、充分な量だ。すぐにでも消せるぞ、準備はいいか」
リーユイの声に、シンはああ、と返事をした。まぶたの向こうに感じられた光がふいに消える。目を開けると確かに暗かったが、扉の場所や衛士達の場所くらいはわかる。三人は衛士の眼が慣れてしまわぬうちに、と関所の建物の扉へ向かって走り出した。賊か、明かりを、と衛士達の声が響き渡る。衛士の間を縫って、扉を開け、屋内へと向かう。シン、リーユイが入り、ファンが入ろうとした時、ふと誰かに腕を掴まれた。
「誰だ！」

聞き覚えのある声がして、ファンは小声で返す。
「シュウさん！　おれです、ファンです」
「ファン？　なんでまたここに」
同じように小声で問う声が返ってきて、ファンは慌てながらも答えた。シンとリーユイも足を止めている。
「説明している時間がないんです、早く……」
一瞬間があって、シュウが言った。
「昼間の話のその後ってことだな、よし黙っててやる。早く行け」
「ありがとう、シュウさん」
掴まれていた手が振りほどかれる。先の二人も再び走り始めている。ファンも急いでそれについていこうとして、思い出したように振り返る。
「シュウさん。門の傍に居たら危ないです、逃げてください」
わかった、という声を背中で聞きながら、ファンは駆けだした。

倒壊

シンは乱暴に、町長の部屋の扉を開けた。開ける前から薄明かりが漏れていたから、中に人がいるのはわかっていた。扉をあける前から体の底を震わすような影の気配を感じていた。記憶の底にある傷の周りにできた錆が剥がれるような、心地悪さだ。

「やけに遅かったじゃねぇか、まさか獣にでも襲われたか？」

下顎の牙をむき出して、檮？（とうこつ）は笑った。部屋の隅には、町長が小さく縮こまって座っていた。目が合うと、ひっと小さく声を漏らして更に小さくなった。こちらにも目の前の大男にも同じ視線が向かっている。同類とされたくはないが、それが恐怖であるなら、あながち間違いでもないか。

「いいや、獣共の中に似た顔がいたもんで間違えたんだ。しかし、まぁ、奴らの方がいくぶん麗しいか」

平然とそう答え、シンは目の前の男を見据えた。ファンはすぐ後ろにいるのがわかる。リーユイはこちらまで踏み込もうとしなかった。昇化の身ゆえに檮？の気や力がわかってしまうからだろう。

檮？はファンの方に一瞥くれて、またシンを見る。

「その餓鬼が太極だな？　俺は欲しいとも思わねぇが、あの人が要るってんだ、寄こしてもらうおうか」

「断る。――あんなに広い獄をくれてやったんだ、これ以上くれてやるものなどない。あの人とやらと大人しく永久（とこしえ）に収まっていればいいものを」

シンは刀の柄に手を置いて、ため息をついて見せた。檮？はそれを見ると、鼻息荒く、怒気をその巨躯にめぐらせ始める。

「ああ、気にくわねぇな。気にいらねぇ。死ぬほど時間が過ぎたってのに、そのすかした態度も澄ました面（つら）もちっとも変わらねぇ！」

「こっちは一万も時が過ぎれば死んでくれると思ったんだがな。その傷でも懲りぬようなら、もうしばらく獄につないでおいてやる」

シンが両腕を竜化させると、檮?はそれを見て半ば嬉しそうに笑んだ。背後でファンが一歩退く。空気がびりびりと張り詰め、震えている。気や力まで感じ取れずとも、この場で立っているのは容易でないだろう。

「久しぶりに大暴れさせて貰うぜぇ！　この傷、そっくりてめぇに返してやらぁ！」

檮?が腕に唸りをつけて、壁に向かって振り切った。こちらに向けられたものではなかったが、巻き起こった風がこちらを巻き込んだ。直撃を食らった壁は粉々に砕け、振動は関の建物全体に広がっていく。檮?は窓から外へと飛び出していった。

「ファン、来い！　崩れるぞ」

シンはファンを呼び寄せ、崩れ始めた建物から外へ向かう。リーユイが後ろから叫ぶのを聞く。

「守護者！　この男のことは私が預かる！　構わないな?」

シンは一度振り返り、わかるように頷いて見せた。もとより小柄な町長の縮こまったのを抱えあげ、リーユイは別の道から外へ向かう。竜化した足で、崩れていく建物を蹴って、下へと駆け下る。シンは轟音を立てて降る瓦礫を避けながら、ファンを連れて、檮?の姿を捜した。関の片側は門とそれを支える柱を残して、完全に崩れてしまった。来る道で確認したはずだが、人がいれば無事では済むまい。

「師匠！」

ファンの声で檮?の場所を知る。関だった石の山の上に暗い影が一つ。人の姿をしていたそれは少しずつ膨らむようにして大きくなって、その端々から人ならぬものが現れ始める。現れては消える月明かりに照らされて、檮?の姿が明らかになる。この場を平らにした腕は太く大きく、その上体は人と虎とが混ざっている。地に叩きつけた長い尾は石を容易く割ってしまった。

「これで思いっきり力が出せるな」

シンはその声の主を睨みつける。体はシンの倍以上あろうか。下

顎の牙は鋭く天を突き、大猪のようなその顔で檮?はにやりと笑った。

「ファン、下がっていろ！」

シンは振り下ろされた腕を避け、叫んだ。部分的に竜化している余裕はないだろう。人の形を保ったまま、出来る限り力を引き出す。孔雀藍色の鱗で四肢を包み、青い火の点いた眼で檮?を見据えて、大きく踏み出した

「一万年ぶりの喧嘩だぁ！　楽しませてもらうぜ」

檮?はその腕に一層の力を込め、再びこちらへ振り下ろしてきた。

神話の神と魔

シンに言われたように、ファンは少し離れたところに下がったが、檮?(とうこつ)の振り回す腕を見ていると、昼間の恐怖がよみがえって来た。その足でもう少し下がったが、離れるな、とも言われたことを思い出して止まった。

目の前に広がる光景は既に人の業(わざ)ではなかった。いや、それを為している者達が人の枠に収まっていないのだから、当然なのかもしれない。暗闇の中、時々シンの鱗が月明かりに煌(きら)めいて、星の瞬くようだった。

そういえば、以前助けてもらった時も、シンのあの姿を見たのだったか。あの時はただただ必死でよく見ていなかったが、今なら暗い中でもよく見える。額に戴いた二本の角は牡鹿のように枝分かれし、銀に似たつやがある。髪も襟足くらいまでに伸びているだろうか。普段の姿よりずっと竜に近い。リーユイが守護者、と呼んだように、今の姿ならば東を護る青龍の姿だと確かに思う。

最初は眼でなんとか追えたが、しばらくするとお互いの攻撃が激しくなって、追いつかなくなった。檮?の腕が切る風の音と、金属のような何かがぶつかる音、二人が忙(せわ)しく運ぶ足音、そして、時折檮?とシンが戦う中で何か話す声がその場に響いていた。

シンの爪が光って見える、ということは、爪を攻撃の手段として使っているということか。帯刀しているが彼が刀を抜いたところを見たことはない。その上に、あんなに鋭い爪を持っていても、今見るまでそれを使ったところを見たことがなかった。それだけ、檮?は強い敵だということなのか。

一万年、と檮?は言った。それをシンも生きてきたのか。ファンは通常の人よりも長く生きる者がいるのは知っていた。バクがそうだったからだ。物心ついた時から少しも姿が変わらぬ仮親を見ながら育ったために、そういう者が存在していることにそう驚きはない。

しかし、そうといっても一万という年月は自分には想像も及ばない、途方もない時間だ。山のような檮?を軽々と飛び越え、次々に繰り出される攻撃を避けるシンが、また遠い存在に思える。そうして、比べられもしないのに、自分の無力さだけがひしひしと感じられて、胸が痛んだ。

永い時間

檮（とうこつ）？の攻撃は、直線的なために避けるのは容易（たやす）い。いくつかの打撃をやり取りして、数分たっただろうか。避けて、受けて、互いに有効な手を与えられずにいるが、こうして戦いに身を置くのは久方振りの割に体が動く。だが、何か胸の中に違和がある。過去の感覚と今の自分の手足にずれが生じてうまくかみ合わないのだ。鈍るというのは、こういう感覚なのか。何かを忘れている。昔あったものを欠いているような妙な感覚。

頭の上を通り過ぎた檮？の腕を見送り、懐へと回りこむ。檮？の体、左肩から右脇腹へ袈裟がけに奔る傷は以前シンが与えた傷だ。左脇腹から切り上げようとしたが、檮？が退いた為に当たらなかった。数歩引いた場所で、檮？はため息をついた。

「一万年は長かったなぁ。青龍さんよ」

「そうか？　こっちはあっという間だった。顔すら忘れる暇もない」

シンがそう言い返すと、檮？は憐れむような笑みを浮かべた。

「いいや、長かったさ。――今のてめぇとやってもつまんねぇ」

檮？はこちらに向かって空（くう）を掻くように腕を振った。間合いの外だったはずだ。なのに、気付けばシンは弾き飛ばされ、石屑の上にうちつけられていた。服はずたずたになっていたが、鱗に覆われた体に傷はない。傷はないが、シンは動けなかった。檮？は冷たい眼で、シンを見下ろしながら言った。

「すっかり弱くなっちまったなぁ、てめぇ。昔は向き合っただけで、塵にされそうなくらい、びりびりした空気を味わえたってのに。なぁ、なんだそのざまは」

シンは黙ったまま、檮？をにらみ返した。再び立ち上がり、構えを取って、地を蹴る。互いの間合いには差があるが、速さはこちらの方に歩がある。間合いに入って、シンは腕をぐっと振りかぶった。

「戦ってもつまんねぇ奴なんざ生かしておくつもりはねぇよ」

檮?は静かに言った。シンは真横から来た鋭い攻撃を受けて、関の大門に叩きつけられた。木の扉は鈍く大きな音を立てて響き、夜間は固く閉じてあるにも関わらず、衝撃で僅かに開いた。今度こそ、本当に体が動かない。見てみれば、攻撃を直に食らった脇腹から、血が溢(あふ)れていた。痛みはさほどない、いや、感じられない。ただ、鱗の剥がれた部分に風がひりひりと沁みた。咳きこむと口内に鉄の味が広がる。内臓も痛んでいるようだ。

自分が巻き上げた土煙が風にさらわれて、近づいてくる檮?が見えた。その尾の先から雫が滴っている。そこでようやく何に攻撃されたのかわかった。予想外の攻撃であったことには違いない。だが、その可能性には気付いていたはずだ。昔戦ったことがある時にも、確かにあの尾は使っていたのだから。一番の問題は、意識外の攻撃を避けられなくなっていることでない。予想外の範囲が広がっていることが問題だった。動きも感覚も何もかもが衰えている。記憶のどこかにしまい込んだのか、それとも本当に失ってしまったのか。檮?はすぐ目の前まで来ると、その太い腕でシンの首を掴み、持ち上げた。

「あー、もともと殺せって言われてたしな。幻滅させやがって。……こいつも返してやる」

再び扉に叩きつけられて、扉の中央から下に落ちる間もなく、檮?の持つ虎の爪がシンの体に食い込んだ。かつてシンが檮?に与えた傷のように、左肩から袈裟懸けに激痛が走る。悲鳴をあげる余裕もなかった。ただ、自分から噴き出す鮮血が、未だに信じられなかった。

――ここで死ぬわけにはいかない。今、この命は自分だけのものではない。

シンは地面に落ちてすぐに体を起こして、扉に上体を預けた。傷を直さなければ。シンは霞む眼で檮?を見あげる。やられるわけにはいかない。ほとんど無意識に傷を癒そうと、体中の力を集めていた。その様子を見て、檮?はため息をつく。

「まだ息があんのか。神獣ってのも厄介だな」
憐れみに近い目で檮?はシンを見下ろした。そして、シンの首元へ鋭い爪を向けた。

師弟

目の前に黒い影が差して、シンは閉じかけていた目を開けた。血が顔にかかる。シンは眼前の光景を見て、霞んでいた目が一気に冴えた。

「ファン……！」

血で詰まった喉から、控えさせておいたの弟子の名を絞り出す。こちらに向けられていた檮?（とうこつ）の手から血が滴る。腰に差しておいたはずの刀を手にして、ファンは檮?に向き合っていた。シンを背に、まるで庇うように。

「やめろ、さがれファン……」

ほとんど聞きとれないような声で、シンはそう言ったが、ファンは振り向かずに首を振った。檮?は驚いたが、その顔にはすでににやにやと笑みが浮かんでいた。

「師が弟子を護るなら、弟子が師を見殺しにするわけにはいかない」

ファンは自分に言い聞かせるような声色で、そう言った。檮?は自分の掌の傷を舐めとると、ファンを見下ろし、さも面白そうに尋ねる。

「へぇ、弟子なのか、てめぇは」

「そうだ！」

ファンは声を張り上げた。刀は檮?の方を向いているが、切っ先は見てわかるほどに震えていた。解けたままの金色の髪が汗で首筋に張り付いている。

「てめぇじゃ、俺は倒せねぇぞ？　それに見てわかんだろうが、俺は手加減ができねぇ」

檮?は長い尾を軽く振って、傍の石を割って見せる。

「悪いことは言わねぇ、大人しくどけよ。で、こっちに来い。てめぇを殺すわけにはいかねぇんだ。腕が一つ欠けただけだって、相当痛ぇぞ？」

繰り返される檮?の言葉にも、ファンは頑なに首を縦に振らなかった。

「おれがどけば、お前は師匠を殺すだろう?」

「んん? 当り前だろ? そいつが生きてりゃ、俺が殺されるんだ」

「なら、退かない!」

ファンは刀をしっかりと握り直し、そう言い返した。それを聞いて、檮?は高々と笑い声をあげた。そして、ファンを見据えると、再び尾を振るった。しっかりと握っていたはずの刀は宙に舞いあげられ、離れたところに転がる。

「聞き分けの悪い餓鬼は嫌いだが、俺はてめぇみたいな馬鹿は結構好きだぜ? ――もう一回だけ言うぞ。そこをどけ!」

「嫌だ!」

ファンがそう言うと、檮?は腕を振り上げた。

「これで死んでくれんなよ!」

東の守護者（1）

目の前で稲妻のような青い光が閃いた。檮?（とうこつ）の振り下ろした腕を防ぎ、押し返そうとする腕は、青い竜麟に覆われていた。檮?の巨軀（きょく）に対し、その影は小さい。

「この餓鬼……！」

シンは目を見開いた。ファンに青龍の力を貸し与えたのはほんの一時。その後、その力は消えたはずだった。だが、今目の前にいる弟子は、自分と同じように全身を孔雀藍に染めて立っている。檮?が力を込めて押す腕を止めて、思い切り押し返す。同時に、場を覆っていた空気が震え、檮?は離れたところまで弾き飛ばされた。

「ファン！」

シンが声をかけると、ファンの身を覆っていた青い光は爆ぜて消えた。そして、すべての力を出し尽くしたといわんばかりにその場に倒れこむ。檮?が向こうで起き上がるのが見える。ファンと檮?と、自分の体を見回して、シンは呟いた。

「俺は本当に、色んなものを軽く見過ぎたらしい」

壁を支えに立ち上がると、ファンを壁際に寝かせ、転がっていた刀を拾う。それをゆっくり鞘に収めると、シンは檮?に向き直った。

「お前が一万年前に見た俺はどんな男だった?」

シンの周りを風が巻き始める。裂けた上着の間に見えていた傷が拭きとられるように癒えていく。シンは青い焔を檮?に向ける。

「少なくとも、お前ほどの相手を侮ることはしなかったはずだ」

檮?はシンの様子を見て、再び牙を見せて笑った。油断や誤算などという言葉は使うべきでない。目の前のこの魔獣を、封印しかできなかった男が自分ではなかったか。

「俺は弱くなった。加減などしている場合ではない」

シンの周りの風が一層強くなる。檮?の顔に緊張が走る。だが、そこにあった笑みは更に深くなっていた。

「その刺すような眼、覇気。ああ、それだ……！　殺す気で来い！」

檮？は呟く。そして、その溢れる力をはち切れんばかりにいきわたらせると、空気を震わせて咆哮した。獣の聲（こえ）が夜を引き裂くように響き渡る。シンはそれに負けぬような声で叫んだ。

「東方の守護、青龍。ここに神獣としての姿を現す！」

シンの周りの風が全て光に変わる。再び夜がそこを包んだ時、そこには一匹の魔獣と、木行の具現である神獣が静かに対峙していた。

獣人の矜持

町長を連れたリーユイは関を離れ、町に侵入するために使った井戸に向かっていた。町長は連れて来る間、震えながら自分の身の心配ばかりを呟き続けた。走らせて、ちゃんと走るだけましだったが、井戸についたところでついに苛立ちが頂点まで来て、リーユイは町長の襟を掴んで止まらせた。

「貴様！　民を欺き、あれほどの魔を招いておきながら、まだ己の保身ばかりを考えているのか！　獣人としての矜持は、覚悟はどこへ行った！」

そう怒鳴りつけると、町長は身を竦ませながら、小声で返した。

「わ、私はもう獣人ではない……それに、私は脅されていたのだ。それに、あのような強大な力を前にしては、お前とて何も――」

町長が全て言い切る前に、リーユイは拳を振るった。

「なるほど、土地の気が貴様を見捨てる理由がわかったわ。お前は国の要職に獣人がつく理由を知っているか？」

町長は殴られた頬に手を当て、座り込んだまま、黙りこむ。

「魔が迫った時に、獣人ならば誰よりも早くそれに気付くことができるからだ！　確かな意思と力を以て、それに対応することができるからだ！　力を失ってなお権力にすがったお前など、魔獣に殺されていれば良かったのだ！」

リーユイは声を荒げた。その声に気がついたのだろう、散ったはずの関の衛士が明かりを手にその場に駆けつけてきた。リーユイは舌打ちする。この男はこれでも町長で、自分は賊である。何か言われれば、捕えられるだけの正当性をこの小男は持っている。そのことに町長も気付いているのか、安堵したような表情で衛士達に命令した。

「お前たち、この男を捕えろ、盗賊の頭だ！　捕えた者は特別に取り立ててやるぞ」

しかし、衛士達は冷ややかに町長を見下ろして、誰として動かなかった。少しして衛士の中央に立っていた男が静かにリーユイに歩み寄り、町長に告げた。

「俺達の中にはもう、あんたを町長っていって有り難がる人間はいないんだよ。俺達は東王の民であってあんたの駒じゃないんだ」

そして、その衛士はリーユイの方を向き、手を差し出してきた。

「あんたが、この辺で頑張っていた昇化の人だろう?」

リーユイは頷いたが、手を取らずに尋ね返した。

「私はあの男の言うとおり、賊の頭だ、捕えてなくていいのか?」

衛士は笑みを浮かべて首を横に振ると、リーユイの手をとってしっかり握った。

「俺は東の関の衛士取りまとめで、シュウってんだ。国のために働く男を捕えたら、俺が東王様、青龍様に怒られちまうよ」

その言葉に、リーユイも笑みをこぼし、故郷と自分の名を名乗った。その横で、落胆した表情の町長がぽつりと呟く。

「私とて、東王陛下と青龍様、そして、この国の民のために死のうと思っていた。しかし、結局人は不確かな存在より、目の前の力に引き寄せられてしまうのだ」

その時、町中に獣の吠え声が響き渡った。全員が関の方角を振り返ると、関は眩い光に包まれていた。そして、リーユイはそちらを凝視したまま、感動と驚きに満ちた声で言う。

「ならば、町長。今でもなお、あの存在を――あの御姿を不確かだと言うのか?」

全員が見あげるそこには、東を守護する仁の神獣、青龍が夜空にその身を翻していた。

東の守護者（2）

ファンは自分が気を失っていたことに気がついて、急いで飛び起きた。檮?（とうこつ）に立ち向かって、刀を弾き飛ばされたところまで覚えている。目の前にあの大きな腕が迫ってきていて――そこまで思い出したところで、辺りを包む光に気がついて、ファンは顔をあげた。そして、その光景に眼と心を奪われた。

巨大な檮?に対峙する、一柱の青龍。

自ら仄（ほの）かに光を放つ鱗は孔雀藍。檮?をも二重に巻けるような長い体はしなやかに宙に波打っている。月光色のたてがみの上には一対の角を戴き、鬼のものと言われる双眸（そうぼう）は春の山野の色を湛（たた）えていた。ファンはその姿に息を飲むような荘厳さを見ながら、檮?に向けられる鋭い気を感じていた。

檮?は言う。

「それがてめぇの本当の姿か」

「ああ。この姿はあまり動けんから、好まんのだが」

「おいおい、また弱くなったってんじゃねぇだろうな？　動けなきゃ話にならねぇぞ！」

そう言って、檮?は再びその剛腕を振るった。その大きさと勢いに、ファンはとっさに眼をつむる。

「ファン、大丈夫だ。俺より前に出るなよ」

恐る恐る眼を開けると、こちらに向けられた檮?の拳は青龍の鼻先で見えない壁に遮られていた。檮?は遮られた腕にいっそう力を込めたが、壁の上を滑るように逸らされ、少しも通りはしなかった。檮?はぎりと歯噛みする。

「てめぇ……！」

「動けなくてもさして問題はない。避けずとも済むからな。ただ」

言葉を止め、青龍が虫を追うように尾を振ると、檮?と青龍の間で強烈な風が巻き起こった。砂や小石を巻き上げる風は、眼に見え

るほどに凝縮され、一気に爆ぜた。突風。傍にあった大きな石ごと、檮?は再び吹き飛ばされる。

「お前と同じように加減がきかん!」

地面にたたきつけられる前に檮?は体制を立て直したが、蹄(ひづめ)で地面をえぐりながら、尚も後ろに押されていった。やがて、勢いが無くなって止まると、檮?は青龍の方を見て、口角をつり上げる。

「なんだ、こんなもんか……」

そう言いかけた瞬間、その体に朱の線が走る。かつての傷に交差したそれから、赤い霧が噴き出し、辺りに雨のように降りしきる。

「は、はは……ははは! そうだ、この感じだ、青龍! さぁ、やろうじゃねぇか!」

檮?は高く笑いながら、再び青龍の方へ向かってきた。その渾身の力は、先ほどの壁を突き通し、青龍の体に到達する。鱗が散り、青龍もそれに伴って、空に体を泳がせた。

そこから先に人の声はなかった。神獣と魔獣の戦い。この国の人間なら誰もが一度は耳にしている、遥か昔に起こったとされる戦いの一幕。絵巻でしかないようなその場面をファンはじっと見つめていた。

再び檮?の咆号(ほうごう)が響き渡り、辺りは静かになった。地に伏す檮?を見下ろし、青龍は静かに言う。

「今度ばかりは獄へも送らぬ」

その言葉に檮?は返す。

「そりゃそうだ。どっちか死ぬまで終わらねぇよ」

青龍――シンは人型に戻ると、腰の刀を抜き放った。刀は月明かりに照らされ、鋼とも陶ともつかない不思議な輝きを発している。

「……地の力に還れ」

シンは刀を振り上げ、檮?の喉に狙いを定めた。

魔の者

生ぬるい風と、後ろから放たれた殺気にシンはすぐさま檮?(とうこつ)から飛び退いた。その横を大きな影と陰の気が通り抜ける。

「――今回のところは、引かせてもらいますよ、青龍」

頭上からの声に、シンは声の主を探した。翼のある黒い豹が、暴れる檮?を掴み、こちらを見下ろしている。

「放しやがれ、窮奇(きゅうき)!」

檮?が吠える。それを無視しながら、窮奇と呼ばれたその黒豹は淡々と告げる。

「この借りはすぐにでも返しましょう。ただ、それまで太極は君に預けておくことにします」

「待て!」

追おうとしたシンの足元に、窮奇の羽根が矢のようにいくつも刺さる。それを避ける間に、二匹の魔獣の姿は暁近い夜空の、闇の濃い方へと溶けるように消えた。

「てめぇ、なんのつもりだ、窮奇!」

陽が昇るのを避けて山間を飛ぶ窮奇に、檮?は吠えたてた。

「何って、助けてあげたんですよ。不満ですか」

「余計なお世話だ! 俺に『撤退』なんざさせやがって!」

それを聞いて、窮奇は深くため息をつく。

「僕は君のような馬鹿は嫌いです」

地を撫でるように飛ぶ窮奇に、檮?は噛みつくように言い返す。

「だったら、俺なんか拾わねぇで、あの餓鬼拾ってくりゃあ良かったじゃねぇか」

その言葉に、しばらく返事はなかった。空が紫がかり、いよいよ夜明けが迫る頃、地上にただ一点残った影が浮かび上がる。窮奇は言う。

「……近く、蚩尤（しゆう）様がお目覚めになられます」
「そうか」
小さな影は近づくにつれて広がり、湖の様を呈する。
「我らが主君覚醒の折に、全員揃わぬなど恰好がつかないじゃありませんか」
窮奇の言葉に、檮？は小さく鼻を鳴らす。そして、二匹の魔獣は光すら逃さぬ暗い湖面に音もなく飛び込んだ。大きく広がった波紋がやがて穏やかになったとき、陽の光がその湖を照らした。その瞬間、湖はまるでそこに存在しなかったかのように、唯の草原に変わったのだった。

暁来て

逃げた魔獣の方角を確かめようとして、シンは不意に強烈な眩暈（めまい）に襲われた。傷はほとんど癒えているが、力を使いすぎたせいだろう。酷使した力はすぐには戻るまい。そこにファンが駆け寄ってくる。

「師匠！　大丈夫ですか！」

「ああ、大丈夫だ。傷はない」

疲労感で体中が浸かっている。刀を収め、そうシンが答えると、ファンはぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「また、俺、何もできなかった」

「そんなことはない。助かったよ、お前がいなければ、俺は死んでいただろう。こっちが師として情けないくらいだ。だから、あまり、自分を卑下するな」

そう言って、シンはファンの頭にぽんと軽く手を乗せると、そのまま力なく倒れた。

「師匠！」

ファンが慌てて、屈みこむ。今残っているのは、指一本動かせぬほどの疲労と――

「駄目だ……腹が減った。これ以上動けん」

猛烈な空腹。人型でいれば人並みの食事でも体力を補えるのだが、こうも力を使い、あまつさえ竜の姿になったのだから、体力などもう残ってはいまい。

「なんでもいい、なんか食べられる物を持ってきてくれ、ファン」

ファンは慌てた様子で涙を拭い、辺りを見回した。荷物、と言いかけて、ファンはハッとしてうなだれた。盗賊の根城に荷物を置いてきたのだったか。そして、すぐに顔をあげると、立ち上がった。

「何かないか探してきます」

辺りが薄紫に明けてきている。陽が昇れば早い飯屋は開くだろう

が、まだまだ朝と言うには早すぎる。短く返事をしてやると、ファンはどこかにかけていった。そういえば、夜だったとはいえ、町の中で騒いだのだから、町人の一人でも出てきておかしくない。静まりかえる町を不思議に思いながらも、だんだんと思考がぼやけてきた。ファンが来るまで眠ってしまおうか。頬を地面に付けたまま、シンはゆっくり眼を閉じた。

夜明けの笛

だんだんと明るくなる町をファンは走っていた。どこか開いている家でもあれば、何か食べるものを譲ってもらえるはずだ。町が門を閉ざすのと同じく、家々は夜の間しっかりと錠を下ろしている。静まりかえる通りを駆けながら、ファンは人の起きた気配を探した。

「ファン！」

誰かに呼び止められて、足を止める。振り返ると、リーユイとシュウ、他の衛士達が通り過ぎた十字路に集まっていた。

「お前、――ああ、えーと、お師匠さんはどうしたんだ？」

ファンはそちらに走り寄って、尋ねる。

「シュウさん！　何か食べる物持ってませんか？」

「食いもん？　どうすんだ」

「師匠、今動けなくて……」

簡単に状況を説明すると、シュウはなるほど、と頷いた。

「それなら知り合いの飯屋が早くから開くから、そっちに連れてったほうがいい。あと、今、町中の封を解く」

「封？」

「いや、面倒なことじゃない。単に、家に籠るように通達を出したんだ。門も開けるなってな。ちょっと待ってろ」

シュウは懐から小さな呼子を出すと、思い切り吹き鳴らした。高い音が朝霧の中を割って、町中に響き渡っていく。しばらくすると、町の入り口や色んな方から、それに応える太鼓の音が返ってきた。

「よし。俺はこの少年の手助けに動く。他の皆は町全体の見回りと、関の担当の奴は関の番に行ってくれ」

シュウは他の衛士に指示を出すと、ファンに向き直る。衛士達がそれぞれに散開していくと、リーユイが言い出る。

「すまないが、私は宿営に戻る。残してきた仲間が心配だ。……すぐに町をでるわけではないのだろう？」

ファンが考え込みながら、頷くとリーユイもそれに返した。
「礼を言いたい。そう伝えてくれ」
そう言うとリーユイは門の方へと駆けていった。それを見送り、シュウは言う。
「さて、ファン。さすがにお師匠さんをいつまでも寝っ転がしとく訳にはいかないだろ。どこにいる?」
「あ、関の方に!」
静かだった町に人の声が感じられる。野次馬が集まっても面倒だし、親切な人に連れていかれても、やはり面倒だ。急いだ方がいいだろう。二人はファンの元来た方へと朝焼けの町を走り出した。

シンはきちんと同じ場所にいて、幸い町人も関の方には来ていないようだった。関の衛士が先に見つけて様子を見ていたようで、仰向けに寝かし直してくれていた。シンは眠っていた。死んでいるのかと思ったと、苦笑いをして衛士達は配置に戻っていった。衛士に礼を言って、ファンはシンに声をかける。
「師匠、師匠! 今戻りました。大丈夫ですか?」
小さく呻いて、シンは眼を開けた。差し始めた陽が眩しいようで、腕で目を覆う。朝日が差し始めて、暗くてよく見えなかった周囲がよく見える。崩れてしまった建物の外は町の外で、新緑の森が広がっていた。ファンがシンの容体を窺っていると、そこにシュウが割り込んで、シンに話しかける。
「あんた、立てるかい?」
「ああ、なんとか。少し寝たら楽になった」
シンは応える。
「立てるなら肩を貸すから、近くの飯屋に行かないか? 知り合いがやってるんだ」
「是非頼もう。色々とすまない、礼を言う」
「町を救ってくれた人が何言ってんだい。それに、あんたほどの人の礼は俺の身に余っちまうよ」

シュウはそう言うと、シンに肩を貸して立ちあがらせた。ファンもシンが倒れないように、いつでも支えられる位置につく。肩が貸せればいいのに、と思ったが、それには頭一つ以上、今より背が伸びないと駄目だろう。

主として民として

シュウが飯屋といったその場所は宿も営んでいるしっかりとした楼だった。始めは三人で卓子を囲んでいたが、そのうちに食べているのはシンだけになった。ファンが手持ち無沙汰な様子でいて、シュウが案内してくれるというので、シンはファンに上着の替えと破れていた自身のズボンの替えを調達してくるように頼んだ。

しばらくして、シュウと髪を結い直したファンが戻ってきた。一向に食べ終わる気配のないシンにシュウは驚いたように問う。

「まだ食べてたのかい？　献立書きの端から端まで食べてるみたいじゃないか」

「いや、もう一巡してしまったから、今は気に入ったのをまた頼んでいるところだ」

シンの答えに、シュウは何も応えずに目を丸くした。そこにファンが包みから丁寧に畳まれた上着を取りだす。

「師匠、上着、これでいいですか？」

シンは箸を置き、差し出された上着を受け取る。前の質素なものより、多少優美な意匠になっていたが、しっかりとした造りのものだ。色は変わらず、暗めの灰色だ。

「ああ、上等すぎるくらいだ。ありがとう」

シンは礼を言うと、それを横に置き、再び箸を持ち直すと空になった皿を積みながら、ファンに言う。

「寝ずにあれだけ動いたんだ、疲れただろう。さっき上に部屋を借りておいた。湯屋も貸してくれるそうだ。先に休んでいていいぞ」

ファンは一瞬迷った顔をしたが、シンが気にするな、と言うと、一礼して店の奥へと駆けていった。

「素直な子だな」

シュウはそう言ってシンの斜め向かいに腰かける。

「俺があれくらいの時はもっと荒んでたなぁ。やっぱり、師が立派

なんだろうね」
　シュウは空いた皿を下げにきた女中に茶を頼む。シンは半ば照れたように笑いながら、それに応える。
「いや、育ての親がしっかりしていたおかげだろう。まぁ、少し従順すぎる気もしてたんだが、あまり心配はいらなそうだ」
　そうだね、とシュウも頷く。やってきた女中から茶を受け取り、シュウは尋ねる。
「えぇと、俺はあんたのことをなんて呼んだらいいかね。いや、あんたが誰だかは知っているんだけどさ」
　困ったように頭を掻いて、シンの方から目をそらす。
「いや、本当はこんな口のきき方をしたらいけないんだろうけど」
　シンは食べる手を止めて、微笑を浮かべつつ、首を横に振った。
「俺は今、ファンの師で、ただの旅人にすぎない。だから、そんなに畏まらなくていい。……申し遅れた、シンという」
「シンさん、か。わかった。……あんたが来てくれてよかったよ。これで、町も近隣の村も助かる」
「いや、むしろ、遅くなってすまなかった。皆、苦しい思いをしていただろう」
　シンは俯く。シュウは茶を口に含んで、ゆっくりと飲み下すと諭すように言う。
「あんたのその格好を見て責める奴なんて誰もいないよ。本当に困った時に、青龍様がちゃんと来て助けてくれた。それがわかっただけで皆充分に安心するさ」
　シュウは椅子にもたれ、腕組みをする。
「町長の不正も俺が皆をなだめるのも、どっちも東王様の名を借りていたんだよ。東王様が言うことだから、東王様はこういう人だ、ってな。本当なら、俺達はちゃんと考えなきゃならなかったんだ。王様が立派なら、民だってきちんと自立した民でなけりゃな。今回のので、よくわかった」
　シュウの言葉が胸に沁みて、シンは息をついた。

「シンさん、あんた厳しくするの、苦手だろう？」
シュウは意味ありげに笑みを浮かべて、そう言った。
「優しいばっかじゃあ駄目だ。たまには拳骨振るうくらいの気持ちじゃなきゃな！　俺は叩かれたおかげで育ったようなもんだ」
湯飲みに残っていた茶を飲み干し、シュウはからからと笑った。
立ち上がったシュウに合わせてシンも立ち上がる。
「シュウさん。今ばかりはこの国の守護として、心から感謝する。あなたの様な人がいた事を嬉しく思う。本当に有難う」
シュウは頭を下げられたことに驚きながらも、照れたように笑う。
「育った国がいいんだよ。――俺はそろそろ家に戻るよ。これ以上青龍様に頭を下げさせてたら、それこそ獄に落ちちまう」
シュウは店の外に足を向ける。
「あ、そうだ。これ拾ったんだが貰ってもいいかい？」
シュウは懐から、握りこぶしほどの薄い鱗を見せた。檮杌（とうこつ）？との戦いの時に剥がれたものだろう。傷は治っているから、その部分の鱗はもう揃っているはずだ。
「ああ、構わない」
「お守りにさせてもらうよ。青龍様の鱗っていったら、あんたがどう言おうとご利益あるだろうって。実際、あんたに会ってから、風邪がどっかに引っ込んじまったんだ」
その言葉に、シンは苦笑する。
「少なくとも厄をもたらさんように、こっちも気をつけるよ」
頼むよ、とシュウが笑い、シュウは店を出ていった。そう言えば、食べていた途中だったか。片付けたらいいのかと困り顔の女中に、まだだと告げて、シンはまた続きを食べ始めた。八分目でやめておこうか。

高潔の士

結局はきっちり胃が満たされるまで食べて、シンは食後の茶を飲みほした。厨房の奥から主人が来て、買い出しの小僧が今日はもう使い物にならない、と諦めたように言う。ただ、シンが美味かった、と言うと、それは良かった、と主人は笑った。食事の代金だけ先に支払ってしまって、シンは一息ついた。

「東都からの旅人がいると聞いたが」

シンが顔をあげると、リーユイが盗賊仲間を連れて、店の入り口に立っていた。

「皆無事だったか」

シンが尋ねると、皆しっかりと頷いた。

「我々が関に向かってすぐに、獣共は引いたそうだ。深手を負った者はいない」

「そうか、良かった。あの町長はどうした？」

「奴はこの町から追放した。どこへとも好きに行くがよいとな。奴に懺悔（ざんげ）の気持ちがあれば、東都へ向かうだろうが」

「そうか。それがいいだろう」

シンがそう言って頷くと、突然リーユイはその場で膝を折った。それを見て、シンは慌てて、リーユイにそれをやめるよう言う。

「俺は今、一介の旅人だ、叩頭（こうとう）するのはよしてくれ」

だが、リーユイは首を横に振った。

「貴公の正体を知って跪くのではない。この町や近隣の村々を救ってくれた恩人に対して、心からの謝意を述べるために私は膝をついているのだ」

リーユイはそのまま叩頭する。精悍な若者たちが皆額ずくのを見て、周りの人々の視線が、驚きを込めて彼らとシンとの間を往復する。

「此度の貴公の行いはまさに破邪顕正（はじゃけんしょう）。この町や村々を救っていた

だいたこと、この地に住む一人の人間として、誠に感謝する」
彼らが頭をあげるのを待って、シンは好い、とだけ言った。尚も膝をついたままの彼らにシンは言う。
「頼むから、立って同じ目線で話をしてくれ。この姿でまで人を見下ろすのはあまり好きでないんだ」
シンがそういうと、リーユイはようやく笑みをこぼし、失礼した、と言って立ちあがった。
「思えば、町長の不正から、我々の行ったこと、あの魔獣だけではない、この地には多くの魔が巣食っていた。それらを全て、貴公が打ち払ってくれた」
「なに、しなければならなかったことを、今更になってやっただけだ。だから、恨みごと言われても、礼まで言われることはしていない。それよりも、皆には多く助けられた、こちらこそ礼を言わねばなるまい」
シンは渋い顔をして、そう言った。それを聞いて、男たちは顔を見合わせて笑った。
「何かあったか？」
シンは不思議に思って問い返す。
「いや、ここに来る途中で、貴公が言いそうだと予想したことが見事に当たったものでな。ならば、これはやはり言わねばなるまい」
シンは首をかしげる。リーユイは笑んだまま告げた。
「貴公はおそらくこのまま我々のことを不問にするつもりだろう。今の貴公を見ていると、恩賞まで賜りそうだ。しかし、我々は我々の行ったことを許すことはできない。だから、貴公の気持ち如何ではなく、罪に対して相応の罰を下して欲しいのだ。もし、我々に何かしてくれようというのなら、これが我々の願いだ」
シンはしばらく何か考え込むように黙っていたが、しばらくしてため息をついた。
「東王陛下に、そう伝えておこう」
そして、シンは苦笑し独り言ちた。

「やはり、旅に出て良かった」
シンはふと思い出して、リーユイに言う。
「お父上や妹君が心配している。すぐには戻れぬとは思うが、たまには顔を見せてやった方がいいぞ」
今度はリーユイが苦笑いを浮かべる番だった。
「こういう時ばかり意気地がなくて困る。本当は、私は妹に頭が上がらんのだ」
周りの男たちが笑う。なんとなくわかる気がする、とシンは応え、彼らの笑いに加わることにした。

青の娘（1）

男たちは東王からの沙汰を待つ、とその後すぐに帰っていった。リーユイは宿営に置いてきていた荷物を持ってきてくれていた。それを預かって、シンはおもむろに立ち上がる。傷はないが、自分の血や檮？の血で随分汚れている。上着など、来ている意味がないほどに破れてしまっている。ファンから受け取った上着を取り、シンは奥の方にある湯屋に向かった。誰もいないようだから、ファンはもう部屋で休んでいるのだろう。

上着を脱いだところで、衣を置くための台の上にある水盆鏡に気がついた。湯あがりに身なりを整えるために置かれているのだろう。シンは思いついたように近くの椅子を引き寄せ、その前に座る。水を注いで、鏡の縁をすっと撫でる。鏡は淡い光を放って波立った。

「陛下、いらっしゃるか」

シンは水の向こうに呼びかける。少し間があって、水に一昨日と同じ少女が映る。青い玉が向こうの水盆鏡の明かりに照らされて、一層優美に少女を彩っている。それを確認して、シンは口を開く。

「こちらの件は片付いた。だが、南への関を壊してしまったから、再建資金と人員を手配して欲しい。町長はそちらに向かったようだ」

「わかりました。配給担当の官にはもう沙汰を申しつけて、次の官を充ててありますから、大丈夫でしょう。そちらにも新しく人を据えねばなりませんね」

「推薦したい奴がいたんだが……」

「断られましたか？」

シンは頷いてみせる。

「盗賊の話を聞いたか？」

「ええ。配給を奪っていたとか」

「奪って、無料で配り直していた。その首領なんだが、鯉の昇化の男を覚えているか。リーユイという男だ」

優美に首を傾げた東王は、しばらくして、その顔を明るくした。
「気難しそうな。そういえば、その近くの村の生まれだと言っていましたね。確かに、適任でしょう」
そうなんだが、とおいて、シンは続けた。
「やむにやまれず、とはいえ盗賊。しっかりと裁いてほしいと頼まれた。これで職など与えては、怒鳴られてしまうだろう」
うんうん、と頷きながら東王はシンの話を聞いている。
「あと――あ、いや、こちらはおそらく受け付けてもくれぬだろうが、関の衛士長のシュウという男。この一件で随分世話になったんだが、この者は町人からの信が厚く、守ることに長じているようだ。……この関は国の要衝だが、この二人ならば安心して任せられると感じた」
東王は考え込みながら黙りこみ、しばらくして口を開いた。
「それについては、私に任せてもらいましょう。考えておきます」
「ああ、頼む」
シンは応えるように頷いてみせると、向こうからも微笑が返ってきた。
ふと、むずがゆさを感じて、自分の脇腹に目をやる。檮?から傷を受けた場所だ。もうすっかり治っているのだが、急いで治したところはまだ神経が過敏になっているようだ。何気なく、掻いたつもりだったが、水の向こうのその人は、心配そうな顔をしていた。自分と力を共有するこの少女はおそらく遠い地にありながら、誰よりも近くそれを感じていただろう。何でもない、と言ったが、向こうの表情は曇ったままだった。

青の娘（2）

東王はこちらを推し量るように見つめている。
「随分悪いものがいたようですね」
シンは頷く。
「檮?（とうこつ）だった。追い詰めたが逃げられた。恐らく、他の四凶も目覚めているだろう。四方の王にもその旨（むね）を伝えておいて欲しい」
少女は頷く。そして、水面に顔を寄せ、こちらの顔を心配そうに覗き込む。
「傷は深かったのでしょう？　貴方が人前で龍になるなど、よほどのこと」
「俺は大丈夫だ。もう全て癒えている」
シンの言葉に少女はその表情を僅かに翳らせた。
「癒えればよいわけではありません。もっと、自分を大切にしてください」
「……すまない」
「いいえ、これが初めてではないでしょう？　ちゃんと実行するまで許しません」
シンは苦笑いをして、ただ、すまない、と繰り返した。
「あの少年はあなたの弟子、ですか」
「ああ、ファンという。旧友から預かった、太極だ。……どうした？」
王は小さく笑っていた。
「嬉しくて。貴方はいつも独りになろうとするから、心配だったのです」
「俺は心配されるほど、子供じゃあない」
いかにも不服といった声色でシンが返すと、彼女はさらに笑みを深める。
「ええ、貴方は子供じゃありませんよ。なのに、心配になるんです」

聞き覚えのあるその言葉に、シンはため息をつく。
「……随分昔にも、そう言われたよ。少しは成長していると思ったんだが。性分かな、何千年あろうと変らんようだ」
「同じ場所に籠っていれば、皆そうなります。きっと、その少年との旅は、貴方にも多くのことを与えてくれるでしょう」
「陛下。この旅は――」
シンが口を挟もうとすると、彼女は首を横に振った。その笑みに微かに悲しそうな表情が混ざる。
「知っています。それでも、私はこの旅があなたにとって良いものとなると信じているのです」
沈黙がその場を包む。水が微かに波打って、彼女の顔が揺らぐ。
「自己犠牲も度が過ぎると、かえって人を傷つけます」
怒ったふうに彼女は言ったが、その表情は子供を躾ける母親に似ていた。
「また連絡してくださいね。では、怪我をしないように」
「え、ああ！　いや、連絡するさ。南都に着いたときにでも」
「え？」
すぐに連絡を切るような素振りにシンは慌てて言葉を継ぐ。彼女は一瞬驚いたような表情を見せたが、今度は声を出して笑い始めた。その様子にシンは、ほんの少し腹が立って、不満げにこぼした。
「何がなくとも連絡しろと言ったのは、陛下だろう」
そうでしたね、と笑い声の中から絞り出すような返事が返ってくる。
「その時は、いくら私の前だと言っても、上着くらいは着ていてください」
シンがハッとして、慌てだしたのを見てだろう、彼女は哄笑し始めた。シンもつられて笑い、しばらくして息をついて、微笑んだ。
そして、その少女を見つめて、言う。
「――シェラン」
「なぁに？　シン」

彼女は優しい微笑みをもって、返す。
「いつも苦労掛ける。……じゃあ、またな」
彼女は言葉なく、確かに頷いた。
水面の光は消え、映すのはシンの顔ばかりになった。シンは立ち上がる。湯を沸かしてもらったのなら、温くなっては悪い。水盆の水を空けると、シンは湯気の立ちこめる湯屋の扉を開けた。

関の責

湯屋からあがり、シンが部屋に戻るとファンはすでに寝息を立てていた。まだ陽は高いものの、シンもすぐ床についたのだった。目が覚めると、翌日の朝だった。どちらも途中で目を覚ましていないようだから、疲れが相当だったのだろう。今はもうそれはない。充分に休めたようだ。シンが起きたのに気がついたのか、ファンが慌てた様子で跳ね起きる。

「おはようございます！　師匠」

「おはよう。疲れは取れたか？」

ファンはしっかりと頷き、寝台から降りる。

「昨日は起こさないでくれたんですか？」

髪を束ねながら、ファンが尋ねてくる。

「いや、俺も今起きたんだ。一食食べ損ねたな、下りて食べよう」

何か言いたげに、だが、支度をするファンにシンは笑って言う。

「普通の量で充分だ。龍にならなければ、人並みなんだ。それに、今日中に南の国の町に入らないとな」

それが充分に答えになったのだろう、ファンはほっとしたような、照れたような顔で笑った。

朝餉（あさげ）の後、楼の主人に礼を言って、二人は関に向かった。檮杌（とうこつ）？との戦いで、関は扉こそあれ、外壁を兼ねる片側の建物が全壊してしまっている。扉を支える柱は残っていたはずだが、そこには今人が集まり、扉の片側をゆっくりと外しているところだった。工事を見守る衛士の中に、シュウの姿があった。こちらがその姿を見つけると同時に、向こうもこちらに気がついたらしい。シュウはこちらに歩いてきた。

「大丈夫かと思ったんだが、柱の根元がやられててなぁ。危ないからいっそ外しちまおうって話になったんだ」

シュウは警護用の棍（こん）を支えに立ち、後ろにした扉を指す。

「やはり駄目だったか。すまないな。数日もすれば都から色々届くはずだが」
「ああ、向こうに連絡をしてくれたのか、そりゃあ助かる。手は足りてるんけど、物がなくて困ってたんだよ」
向こうでは扉を横に寝かせた後、太い柱に縄をかけ、ゆっくりと横にしているところだった。傍らでは石の山になってしまった外壁と建物の片付けが始まっている。
「その間の風水はどうする？　外壁と門がなくなれば、結界を張れないだろう」
「あぁ、それは大丈夫だろうって。新しい町長殿がどうにかしてくれるさ」
シュウは通りの方を指さして、意味ありげに笑んだ。シンとファンが振り返ると、リーユイが血相を変えて、こちらに走ってきていた。
「間に合ったか。守護者よ、これはどういうことだ！」
その手に握られた紙には、東王を示す印が押してある。リーユイは狼狽と怒りをないまぜしたような表情をしている。
「貴公にはちゃんと伝えたはずだぞ、処罰以外は受けぬ、と！」
リーユイは手にした紙を叩きつけるように広げてみせる。書面には、関の町の長を務めるように、と滑らかな文字で書いてあった。シンはその書面をじっくり読むと、シュウの方を見やり、解かったような顔をして頷いた。
「もちろんだ、陛下にはそれ相応のきつい処遇を与えるようにと奏上した。――ところで、今回のことで関の外壁と、町長の収まるべき町舎が崩れてしまってな」
「それがどうしたと――」
リーユイの言葉を遮り、シュウが続けた。
「いやぁ、その上、指示を出す人間がいなくてね。その上、結界が張れないとなっちゃあ、夜の獣共もおっかない。誰か、力のある人がいないかって捜してるんだよ」

その後に、ファンも語調を揃えて、続けた。
「あんな風におっかない化物が出るところを護れ、なんて大変だなぁ。おれは褒美貰ったってやらないよ。どっかに、辛いことを引きうけてくれる人がいればいいのに」
三人はリーユイをじっと見て、ニッと笑う。三人の視線が集まるその青年は、何かを言おうとして、口をぱくぱくと動かしていたが、結局声にならずにそれを飲みこんだ。そして、赤い顔のままこちらを睨み、そして、笑った。
「なるほど、確かにかなりの重責。陛下がこの責(せき)を賜(たまわ)るなら、青の国の昇化として、鋭意務めさせて戴こう！」

南へ

リーユイはシュウの方に向き直った。
「衛士長。私は貴公がふさわしいと思ったんだが。こちらは、この町から見れば、新参者だ。頼ることになろう」
こちらこそ頼むよ、とシュウは笑った。リーユイはこちらに頭を下げると、関の工事をする人々の方へ歩いていった。改めて見直すと、人足の中に、盗賊だった者が混ざって仕事をしていた。
「じゃあ、俺も仕事に入るかね」
そう言って、シュウは体重をかけていた棍を肩に担ぎ直す。関へ向かおうとしたのをシンは呼びとめる。
「陛下はあなたにも書を送っているだろう？」
シュウは足を止めて、振り返る。照れくさそうに頬を掻き、懐から王印を取りだして見せた。
「今朝これが届いてさ。あの兄ちゃんが断ったら、俺に頼むって」
「適役だとは思ったんだが、やはり断るか」
気付いてたか、とシュウは苦笑し、その書状を再び懐にしまった。
「俺はそんな柄じゃあない。こうして、町や空を眺めながら、のんびり関の番をしているのが性にあってんのさ」
南へ向かう二人も、関の警護に戻るシュウと共に関に向かう。開いた状態のまま、片側だけ残る扉を通り過ぎ、二人は外壁を跨いだ。修復に指示を出していたリーユイもそれに気付いて、見送りに来た。
「そちらはもう、赤の国か。朱雀の守護する国だな」
リーユイの言葉にシンは頷く。
「神獣が国を空けるとなると、皆が不安になるだろう。だから、黙っておいてくれ」
二人は頷く。
「神様が少し出掛ける間くらい、留守番できなきゃあな。大丈夫さ」
そして、シュウはファンの頭に手を乗せて、言った。

「ファン、早く素養が見つかるといいな。頑張れよ」
「うん！　ありがとう」
ファンは満面に笑みを浮かべて頷いた。
旅の無事を、と送りだしてくれた二人に手を振り、シンとファンは歩き出した。歩き始めてしばらく、シンは思いだして、ファンに尋ねる。
「檮?（とうこつ）と戦ったあの夜、自分がしたことを覚えているか？」
突然の問いに、ファンは戸惑いながらも答える。
「気を失うまでは覚えてます。師匠の剣を借りて……」
あとは、と言ってファンは首を振った。そうか、と相槌を打ち、シンは続ける。
「なら、教えたいことが増えた。あとは、道すがら前の話の続きをしよう」
「はい！」
ファンは顔を輝かせる。それを満足気に見て、シンは足を止めた。
「これ以上進めば、あの町は見えなくなる。しばらく、東には戻らないからな。目に焼き付けておくといい」
二人は振り返り、東の関を見やる。町はすでに小さくなっていた。
――東の国は青い春の地。その境を担う関の周りには緑豊かな山野が広がっている。そして、そこを吹き抜ける風も同じ色。
それは二人の旅立ちを送る、始まりの色だった。

朱雀の地（前書き）

青の国の章2の続きです

朱雀の地

山がちだった青の国を離れ、大きな町を三つ、宿場を四つ通り過ぎるとそこには風の吹きわたる平原が広がっていた。一度に開けた視界にファンは感嘆の声を漏らす。見渡す限りの草原と遥か彼方に蒼い峰々が横たわり、一番目を引く大きな山は赤く燃えていた。平原の中央に向かって筋のように街道が伸び、その先には赤の国の都、南都があった。

「陽山（ようざん）が火を噴いているのか。風は向こうに吹いているが、どうかな」

シンは遥か向こうの霊峰を見つめ、心配そうに呟いた。

「山が銅色（あかがね）だ」

その一方でファンは目を輝かせて、辺りを見回している。他の国の様子は、各地を回る通商の者か、昇化を目指して旅する者くらいしか知らない。他に漏れずファンも初めてみる他国の様子に、感動が止まらないのだろう。シンも実際に赤の国を見るのは前を思い出せないほどに久方振りだ。国の象徴である陽山の焔（ほのお）も改めて鮮やかに見える。火の臭いは後ろから吹いてくる風のおかげか、殆どない。煙は山の向こうへと空の高いところを流れていく。

青の国を出る前に雨季をやり過ごしたおかげで、ここしばらくは足を止めるような雨にあっていない。この地も雨雲に通られたのか、草はずいぶんと丈があるようだ。

「少し休むか。水を飲んでおいたほうがいい」

シンはファンにそう告げて、道端の草を払って横に倒すと、その上に腰を下ろした。その隣にファンも荷物を下ろして、水の入った筒を取り出す。

「ずいぶん暑いですね」

ファンは額に浮いていた汗を拭い、水を飲む。

「四方それぞれ気候が違うからな。南は一年を通して他国よりも日

が強い。それに、今は陽山が動いているから余計にな。流石は火の鳥が統べる地だ」
「火の鳥……」
ファンが小さく繰り返して、シンは頷いた。
「俺も久しく会ってないが、まぁ、おそらくあちらは変わられんだろう」
「朱雀様は、その、どんな人ですか？　師匠のような？」
ファンの問いに、シンはちょっと間をおいて、あぁ、と笑んだ。
「神獣は普段、人の形をとらないんだ。あの姿の方が力を使いやすいしな。もとより神獣は王宮の奥より動かない。会う者といえば王と、昇化の為にやってくる過客がどうしてもという時だけだ」
「えぇと、東王様は師匠がこっちにいることを知っていて、でも、昇化したい人はそれでも会いに来るわけで……」
シンは笑う。
「陛下には、俺は今機嫌が悪いから近寄らん方がいいと脅して貰っている。――ん？」
シンが辺りを見回してすぐ、人が伸びをする時のように地面が震えた。陽山からひと際火が噴きあがる。揺れは大きくはなかったが、ファンは思わず水筒を取り落としそうになる。
「陽山から岩でも飛んできたら厄介だな。そろそろ都に向かおうか」
シンは立ちあがり、都と火山とを見てそう言った。ファンも下穿きについた草を払い落して、荷物を持つ。まだ頭の中が揺れているような気がするのか、少し不安定な足取りだった。

祓いの火

その後も、微かな揺れが何度かあったが、特に障りなく進むことができた。草原は風に煽られて川のような音を立てて揺れる。南都から見える範囲の土地は全て、青草の原になっているようだ。

「都についたらすぐ王宮に行きますか？」

歩き出してしばらく、草原の中を進みながら、ファンがそう尋ねた。都は遠くから眺めた時こそすぐそこに見えたが、草の中の道を歩き始めると見た目以上に距離を感じた。照りつける日差しのせいもあるかもしれない。

「いや、先にどこかで湯屋を借りて、服を改めた方がいいな」

「服もですか？」

「入ればわかると思うが、まぁ、王に会うんだ。身なりは整えておいた方がいい」

ファンは返事をして、荷物を担ぎ直した。着替えはいくつかあるものの、山歩きをしてきたのもあって、いくつかはかなり傷んでいる。そろそろ替え時だろうか。なんとなく気のりはしないのだが、今必要な以上、この国で買うしかあるまい。

「なんだか……お祭りみたいですね」

だんだんと細部まで見えてきた街の様子を見て、ファンは呆気にとられたように呟いた。様々な物と色に溢れたその南の都は、国境を越えてから感じていたものが凝縮されていた。

東を医の国とすれば、南は美の国である。あらゆる芸術が生まれ、育まれ、そして、広がっていく中心地である。更に近づくと、楽の音、香木の焚ける香りがしてくる。

気付けば二人とも手前で足が止まっていた。丁度、南都へ入る大門の前、少し開けた場所だ。丹に塗られた門の上には朱雀門、と金字が記されていた。脇には弓を持った衛士が一人と、入口には棍を持った衛士が二人立っている。二人組の片方は片手にまな板ほどの

大きさの金属板を持っていた。衛士達はこちらに気がついたようだ。
シンは小さく、行くぞ、と言って、門へと踏み出した。ファンもそれについて、門の傍まで進んだ。
二人が門の前に立つと、衛士が二人の前に立ちふさがる。
「旅の者か」
衛士の問いに、シンは答える。
「ああ。東から来た」
「目的は」
「弟子の昇化の為だ。王に見えたい」
衛士はちらりとファンの方を見ると、そうか、と頷いた。金属板を持っている方の衛士がその板を二人の方に差しだした。それは水盆鏡によく似てこちらを映しているが、夕日のような色をしており、紅玉と鳥の尾羽根の彫金が為されていた。四隅には何かまじないのような文字が刻まれている。
「この上に手を乗せて貰いたい。灼厄盤と言う。祓いと検問を兼ねたものだ、ご協力願う」
「手が載ると火が出るが、熱はないので害はない。少しひりりとするかもしれないが、なにぶん規則なのだ」
衛士達の言葉にシンは、構わないと答える。そして、差しだされた灼厄盤に両掌を載せる。普通の火よりも紅い焔が手をついた盤の表面から燃え上がり、盤全体が焔に包まれる。火は衛士やシンを撫でるように踊り、すぐに音もなく消えた。この火の大きさは衛士も考えていなかったのだろうか。盤を取り落としそうになった衛士は持ち直しながら、ファンの方にも盤を差し出した。
まさかあんなに大きな火が出るとは思わなかった。こちらが灼けることはないと言われてもやはりしり込みしてしまう。しかし、これに手をつかないと門の中に入れて貰えないのだろうから、手を載せざるを得ない。恐る恐る手を差し出して、ファンは盤に触れた。
熱の無い焔は奇妙な感触だった。確かに火傷したときのような痛みが微かに掌の上を走ったが、火が静まると同時にそれも無くなっ

てしまった。焔自体もシンの時ほど広がらず、掌の周りをなぞるように燃えただけだった。終わってみると、なんとなく気分がよかった。体の中の細かな埃のようなものが、火に呑まれて浚われたような。祓いと言うのは本当だったらしい。

「……師の方、済まないが名前を教えて貰えないだろうか」

衛士が門をくぐろうとしたシンを呼び止め、問う。シンも何を言わんとしているかがわかっているようだった。

「シンという。東都から来た者だ。――ここをくぐらないほうがいいか」

問い返されて衛士は、いや、と言葉を濁し、通ってよい、と中を指し示した。もう片方の衛士が、注意されよ、と続ける。

「今、この町に奇病が流行っている。何が原因かはわからぬ故、注意されよ」

わかった、と応え、二人は街の中へ踏み出した。朱雀門を抜けると、鮮やかな街が目の前に広がっていた。物だけでなく人までもその彩りの一部になっている。衛士の言うとおり、町は活気こそあるがところどころに暗い表情の者がいる。口に覆いをしている者もいる。うつるのだろうか、とファンは思ったが、これといって病気もしたことはないから、すぐに倒れてしまうようなことはないだろう。丈夫なのだけは自慢できるのだ。

門の所での衛士とシンの会話。ファンには何があったのかわからなかった。尋ねようとシンの横に駆け寄ったが、先にシンのほうから声を掛けられた。

「そうだ、ファン。あれはできるようになったか？」

青の国を出てから、新たにシンに習ったことがある。体術を習うのは引き続いていて、組み手をそれなりには続けられるようになった。だが、シンにはまだまだ敵わない。そう言うと、シンは笑った。一万年もやってきたのをそう追いこされてはたまらない、と。新しく習ったのは、獣人だけが扱える特殊な術だ。

とはいっても、ファンは昇化などしていないし、当然ながら化生の者でないから、獣人ではない。シンも、特異な例なのだろう、と言っていた。どうやらシンから一時的に預けられた青龍の力がその後もファンの中に残っていて、それを再び引き出すことができるようなのだ。檮？（とうこつ）に対峙した時がそうだった。だが、ファン自体は後からそれを聞いただけで、その時の記憶はない。だから、本当にあるのかもわからない力を、手の届かない自分の内側に探しながらの訓練が続いたのだった。

「まだ、思い通りにはちょっと……」

ファンは申し訳なさそうに応えた。落ち着いたときに、神経を集中させて、それで十秒も保てば調子のいい方。数時間粘っても出来ないこともあったし、すっと出来た事もあった。檮？と対峙した時の感覚が解ればいいのだが、何せあの時は必死で殆ど記憶に残ってない。シンのように部分的に操るのもまだよくわからないままだ。

「いや、それでいい。まず俺の力がお前に残っているだけでも特別なんだ。……そうだな、もう少しもつようになったら、水盆鏡の使い方を教えてやる」

「どうした？」

少し考え込んで、ファンが照れ臭そうに顔を上げる。
「バク先生の所にも、つながりますか」
その応えにシンは微笑む。
「ああ、きっと喜ぶだろう。なら、最低でも三分は持たせなければな」
しばらくすると、宿屋の看板が目に入った。荷物を預けてから、またすぐ街に出るという。色々と新調しなければいけないらしい。旅人とはいえ、異国の服は目立つのだろうか。時々注がれる視線にファンも気付いていた。汚れているせいかとも思ったが、それだけでもないらしい。
路銀の入った袋だけ持って、外に出る。家々の奥、町の中央に見える王宮を見つめて、シンが呟く。
「朱雀にもこの話をしてみよう。俺よりも何か知っているかもしれん」

服屋を見つけるのはそう難しいことではない。五件も渡れば、そのうち一件は服を扱っているからだ。だが、意に沿うものとなると途端に難しくなる。何も、二人が意匠に拘ったからではない。いや、拘ったといえば拘ったのか。この国の服は少し賑やかすぎる。
「お似合いですよ、本当に。お客様は格好が好くていらっしゃるから」
「だが、派手すぎるな。それに動きづらい。旅歩くので、動けなくては困る」
服屋の店主はあれこれと出してくれて、それはそれで助かるのだが、出て来るものはどれもシンには派手に思えるのだ。国が変われば、そこの風に沿わねばならないとは思うのだが、似合う、と言って出される服をどうにも着る気にはなれない。かといってむげにもできなくて、どうにも困ったシンはファンの方を見る。ファンには他の店員がついて同じように色々と合わせているようだが、同じような表情をしていた。青の国はものの外観を質素にしておく向きが

あるから、そこにずっといるシンはやはり馴染みがたく思える。とうとう我慢が出来なくなって、シンは半ば叫ぶように言ったのだった。

「頼むから、この店で一番地味な服を持ってきてくれ！」

謁見

「やはり慣れないな」

おれもです、とファンが相槌を打ち、髪を結び直している。結い紐（ひも）は、帰ろうとした二人に店主がせめてこの国の色だけは、と付けてくれたもので、さすがにこれまでは断れずに、そのまま貰って来たのだ。金に近いファンの髪に朱の紐は鮮やかだ。

服を買った後一度宿に戻り、二人は今度こそ王宮に向かって歩き出した。改めて歩くと顔色の悪い者をところどころで見かける。年寄りや子供に流行るならわかるのだが、見る限りその者達に共通性は見当たらない。

「妙な空気だな」

シンは呟く。街を吹き抜ける風は初夏のもの、心地よいくらいだ。だが、その中に瘴気（しょうき）のような、微かな毒気が混じっている。

「悪い物でも出回ったんでしょうか」

「のようだな。だが、食べ物ならこうも広がる前に誰かが気付くと思うが……」

二人は奇異に思いながらも、通りを歩き抜けた。朱雀門からのびる大通りを行けばすぐに王宮へとたどり着く。王宮の門を見張る衛士に、シンは名を名乗る。

「昇化の為、王にお目通り願いたい。名はシンという。青の国より来る」

それにファンも続く。

「その弟子、ファン。同じく東より」

「朱雀様にもお伝え願えるか。東野（あずまの）の足のある蛇だと」

シンは続けてそう言った。衛士は少し待つように、と言って中へ入っていった。

王宮は都の中央に据えられている。嫌みのない絢爛（けんらん）な王宮は確かに美を司る国にふさわしい。衛士はすぐに戻ってきて、二人を王宮

の奥まで案内してくれた。中の細工は更に細かく施され、建国の神話が謁見の間までの廊下に天井画として描かれていた。金で描かれた人物を先頭に、四方の色を纏った人物と神獣が魔を討つ場面だ。ファンがそれを見あげているのに気付いたのか、シンは小声で注意する。

「あまりきょろきょろするな。余所見していると躓くぞ」

ファンはっとして前に向き直す。目に入れないようにしても天井画はやはり気になる。あの青い服を着た人物は、シンだろうか。いや、神獣が描かれているならば、人物達は初代の王たちということになるだろう。一万年も前の王、神獣たちに選ばれた最初の人間。どんな人たちだったのだろう。

「ファン！」

また小さく注意されてファンは顔を上げた。目の前はすでに謁見の間だった。螺鈿の細工がついた引き手が引かれ、扉が開かれた。

まず目を引いたのが王自身。国号の色に身を包み、艶な様子で座るその女性こそが、赤の国を治める南王その人。紅の口元を鮮やかにたわめ、彼女は微笑んだ。

南の王、南の守護者（1）

「ようこそ、旅の者よ」

南王は明るい声でそう言うと、優雅に足を組み替えた。シンとファンは前へ進み出ると、その場で膝を折り、一礼する。顔を上げるように言われて、ファンは顔を上げた。女王は豊満な女性だった。人によって美しい人という評価は変わるだろう。だが、この人についていえば、誰からもその評価を得られるように思えた。朱を基調とした服は薄絹、装具の玉は煌びやかに、だが、嫌みなく王を彩っている。東王もそうであったから、王は国の色を纏うのが決まりなのかも知れない。南王ならば、赤。それがよく似合っていた。年はどうだろう、見た目だけならばシンよりやや上だろうか。

「朱雀門の衛士から報告があった。灼厄盤で大火を出した者がいると聞いたが、そなたのことか」

南王はシンの方を見つめて、不敵に笑む。シンも同じように笑んで返すと、堂々とした声でそれに応える。

「当方、青の国に仕える者、木行の気を持っていますから、火行の気を強めてしまったのかもしれませぬ」

「ほう」

南王は帯に差していた扇を広げて、自身を扇ぐ。

「ならば、そなたはもう獣人なのか。何のだ」

「国の始めより生きる、青き鱗の者にございます。赤き翼の王よ」

シンはニッと笑う。南王は扇いでいた扇を止め、口元を隠して、目線をこちらへ送る。黙って見合うこと数瞬。二人は笑いだした。

「あまりこれ以上からかわれても困ります」

シンは言った。ファンは何が何なのかよくわからないまま、その成り行きを見る。

「ふふっ、ごめんなさい。あの子が、来るわけないと言うものだから。でも、確かなようね」

南王はぱしん、と扇を閉じ、玉座の裏へと声をかけた。
「やっぱりあなたのお友達じゃない。出てきてちょうだい」
南王の声の後、玉座の後ろから少年が飛び出してきた。年の頃なら十かそこら。少年は赤い裳を身につけ、露わになっている上半身には右肩からたすきのように同じ色の布がかけてある。かなりの軽装だが、この国では丁度いいのだろうか。首と腕には、五色の玉の飾りを身につけている。南王の子供だろうか。少年はシンを見て、その顔を輝かせた。
「あいや、久しぶりだの、句芒！」
少年はシンに駆け寄ると嬉しそうにその肩を叩いた。シンを句芒、と呼んだその少年はまるで長きに渡る友であるように、シンに語りかける。
「まさか来るとは思わなんだぞ。来る前に連絡の一つでも寄こせばいいのに」
「朱明も元気そうで何より。ただの旅人として回っているから、あれこれと準備させるのも悪いと思ったんだ」
シンは立ちあがってそう答えると、こちらの方を示して、朱明と呼ばれた少年に紹介する。ファンも同じように立ち上がり、そちらへ一礼する。
「この年になって、弟子を取ることになった。バクという男を覚えているか？」
「神官長だったものか？」
「その者が今まで親となり育てた少年だ。この度預かることとなった。太極だ」
シンはそう言って、ファンと朱明を引き合わせる。朱明の目にまっすぐ見据えられて、僅かに怖じながらも、名を名乗る。
「初めまして、ファンと言います」
「なるほど、良い名だの。……ふむ、善い子であるようだ」
品定めをするような目で、朱明はこちらを見ながらそう言った。
自分より幼い者に「よいこ」と言われるのは、なんだか奇妙な感じ

だ。あまりに視線が近いので、えぇと、とファンは僅かに後ろに身を逸らす。そうして、ようやくこちらの困惑が伝わったのだろう、朱明はぽん、と手を打った。

「おっと、そうであった。こちらも名乗らねばならぬの」

そして、王の傍らに下がり、にこりと笑った。そして、その瞬間、朱明の体を鮮紅色の焔（ほのお）が包みこんだ。

「句芒が人の姿で来たと聞いたのでの。だが、こちらのほうが解り易いか」

火焔が形となり、鈴のような音を立てて広げた翼からは、散った羽根が火となって宙に舞う。そこに現れたのは火から生まれたとされる神性の鳥。

「――余は朱雀。この中つ国において南方火行を預かり、南の地を守護する者ぞ」

一枚の大きな羽根がファンの手元に舞い落ちる。ファンがそれを手に取って見あげると、朱雀はあの少年の瞳でこちらを見つめていた。

南の王、南の守護者（2）

朱雀は陽山の火口より生まれたとされる。自らの体を焼き、その身を清く保つその神獣は穢なきもの、と呼ばれた。汚れを払う、という浄の意がいつしか美を示すものとなり、今の赤の国の文化が拓かれた。

焔色の翼に、五色が加わる長い尾羽。金属のような嘴と蹴爪はつややかに鋭く光っている。灼厄盤の模様は朱雀の身を描いた物らしい。ファンが今までに見たどの鳥よりも大きく優美で、翼は玉座ごと王をゆるりと覆ってもまだ余りある。

「句芒も、小さき身に収まっていては苦しかろ。人払いしてあるゆえ、ぬしも戻るとよい」

句芒、と呼ばれたシンはゆるゆるとかぶりを振ると、その勧めを辞した。

「旅の間はよほどのことがない限り、龍には戻らぬと決めてきた」

「また、どうして」

「願掛けのようなものだ。それに、この身ならそれほど物を喰わずに済む」

朱雀の問いにシンは笑みをこぼしながら応えた。そういえば、フアンもシンが完全に龍になった姿を見たのは一度きり。それも、檮杌との戦いの中でだ。王宮では神獣は元の姿だと言うから、ずっと化けた状態で旅をしているということか。

「ふむ、ならば余も人になっていようかの。大きさは近い方が話しやすかろ」

朱雀は頷いて翼を羽ばたかせた。光とともに、朱雀の姿が先ほどまでの少年の姿に変わる。

「余もこの姿の方が好きだ。愛き姿であろ？」

白磁のような腕を広げて見せて、朱雀――朱明は言った。そうね、と笑みを浮かべ、南王が頷く。南王はこちらと目が合うと更に楽し

そうな笑みを浮かべる。
「朱明の友達なら、無理して偉そうにしてなくていいわね？」
「余は別に偉そうにしろなどと言わぬぞ？」
南王の問いに朱明は小首を傾げる。
「王様は偉そうにしているのが、相応しいし、美しいのよ」
そう言って、南王は立ち上がり、玉座のある一段上からこちらと同じ床に降りた。シンと握手を交わし、ファンにも同じように手を差し出す。
「私はランファ。今の赤の国の王よ。ファン君、だったかしら」
ファンは頷いて、そっと手を差し出した。王と手を握るというのは、本当ならありえないのではないか、と思う。畏れ多くて、さっきからずっと早鐘のように打ち続けている鼓動がさらに早くなった気がした。そして、南王はシンの方に向き直り、尋ねる。

町の奇異

「さて、あなたは何て呼べばいいのかしら。シン、と名乗っていたようだけど」
「なら、そのままシンと呼んでくれればいい」
「師匠、さっきの名前は……」
ファンが尋ねると、その問いには朱明が応える。
「あだ名よ、あだ名。天と我らの間の呼び名ぞ、我らにはそもそも名などないからの。少年は『人間』とでも呼ばれんであろ？」
ファンは頷いたが、それがとりあえず頷いただけだとわかったのだろう、シンがそれに続ける。
「青龍も朱雀も、その存在の名だからな。俺という意思を示すものじゃない。今、俺を示すのは『句芒』であり、『シン』という名だ」
「私が南王であって、ランファであるように、というわけね」
南王が言葉を継いで、ひらひらと扇で自身を扇ぎながら、再び玉座に戻る。そして、扇の先でこちらを差し、真剣な面持ちでシンに言った。
「あなたが今神獣でなく、東都の獣人であるシンという男として振る舞うのなら、私にもひとつ、南王として頼みたいことがあるの。いいかしら？」
「構わない。――街の瘴気のことか」
南王は頷いた。
「少し前から、街に奇病が広がってきているの。もともと、雨期明けのこの時期は病気が流行り易かったのだけれど、今年のは何かおかしいのよ」
「紫色の斑点に高熱をともなっての、死ぬ者まででてきた。もとが解れば、余の力で邪なものなど消すことができるのだが」
朱明が掌の上に小さな火をともしてみせる。灼厄盤で見た火と同じ色をしていた。

「こちらでもいろいろ調べては見たのだけれど、何せ都は広くて入り組んでいるし、人が多いから」
南王はその秀麗な顔を曇らせて、ため息をつく。
「こちらで引き続き、原因は探るわ。だから、シン。あなたには、重傷者の治癒をお願いしたいの。これ以上の死者を出すわけにはいかない」
「余からも頼もう、句芒。東王からの話もあった、ぬしが徒事(ただごと)でここを訪れたのでないのはわかっておる。だが、今しばし、ぬしのその力を貸してくれぬか」
神獣と王の頼みにシンは暫時(ざんじ)沈黙し、二人の方を見つめる。そして、言った。
「断る道理もない、俺でよければ力を貸そう。死が近い者がいるのなら、早くした方がいい」
そして、シンはこちらを向いて、頷いて見せた。
「ファン。すまないがお前の手も借りたい。関でやったようなことだが、頼めるか」
こういう話なら、ファンにもわかる。大丈夫です、とファンは応え、しっかりと頷いて見せた。

火托

話が決まると、南王は王宮内に部屋を用意してくれた。宿屋に連絡してくれたらしく、荷物はすでに部屋に運び込まれていた。シンは病人のいる場所と状態について、南王と朱明にさらに話を聞いているようだった。ファンは部屋について、ぐっと伸びをした。師と王の話はまだ時間がかかるように思えた。一人で獣化できるだろうか。一人でできるようになりたい。そうすれば、旅においても獣に追われて師の手を煩わせることもないし、また戻ってきた悪夢の残滓に怯えずに済むと思うのだ。誰のともわからぬ悲鳴で目を覚まさずに済むだろう。

本来、獣化は練習してできるようになるものではないそうだ。獣堕なら、気がつけば獣化しているし、化生の者は息をするのと同じように獣化できる。昇化の者も、四方の王に会い、再び自分の生国の王に見えた時、自ずと獣化できるようになるのだそうだ。だから、シンは獣化の仕方は教えにくいのだと言った。ファン自身なるほどそうだと思ったし、何よりわが師は龍になるのを戻ると言わねばならぬひとなのだから。

息を整えて、その場で楽な姿勢を取る。目を閉じ、なるべく心を清閑に保つ。そして、シンに言われたことを頭の中で復唱した。体に残った青龍の気。今はただこの体の中で揺蕩(たゆた)っているそれが、隅々まで行きわたり、緩やかに回り、だが徐々に加速していく心象を思い浮かべる。それが、体の外に溢れるように思ったとき、力は具現する。

窓が開いたのか、風が吹き込んだ感覚を覚えて、ファンはそっと目を空けた。

「できてる……！」

袖口の下から見える、青い鱗に覆われた腕と鋭い爪をもった指。どこまで龍化できているのだろう。急いで部屋の隅の姿見に走り寄

る。自分の目には青く明かりがともったように見え、額の上には一対の角が揃っていた。腕はさっき見たとおり、足も龍化していて、駆けるのがすごく軽い。上着をめくると、腹は白い腹板が覆っていた。龍化した今は、シンが言っていた青龍の気というものがよくわかる。体の中を風が吹くように巡っている。

「なかなかうまくできたようだな」

「句芒が二人になったかと思えば、そういうことか」

声がして振り返ると、シンと朱明が満足気な顔をして立っていた。

「ほう、太極とはこういうものなのかの。王以外に神獣の力を得るとは」

朱明はこちらの姿を上から下から眺めると、関心深そうにため息をついた。ファンがようやく興奮からさめて一息つくと、その拍子に青い光が爆ぜてファンは元の姿に戻った。朱明はこちらの目をじっと見つめている。ファンがその瞳を見つめ返すと、赤い火がちらちらと燃えているのが見えた。

「ふむ、余はこういう者を初めてみたが、そうだの。ならば。……じっとしておれ、ファン少年」

朱明は細い腕を伸ばして、ファンの額に人差し指をつけた。朱明の指が触れた部分がぽっと熱くなり、目の前が明るくなる。小さな火がともったようだ。

「さて、どうか」

「えぇと、何がどうなって……」

尋ねようと口を開いたとたんに、額の火は大きく燃え広がってファンの全身を包んだ。驚きに悲鳴を上げて、火を消そうと体を叩く。

「ファン、落ち着け、大丈夫だ」

シンに腕を取られて、ファンは改めて体を見た。まだ火は残っているが熱くない。そして、ひと際火が強く、眩しく燃えた次の瞬間、ファンは姿見に映った自分の姿に瞠目した。

「ほう、出来るものだの。驚いたぞ」

姿見に映るのは、青から一転、背に大きな紅い翼を生やし、同じ

色の羽毛に身を包んだ自分の姿だった。五色の尾と赤銅色の足は先ほど見た朱雀の姿によく似ていた。体の中を青い風の代わりに、真っ赤な火が駆けているように感じる。ファンは姿見からシンに目をやった。シンは呟くように言う。

「やはり、そうか。ファン、その状態で青龍の気は感じられるか？」

ファンは体の中に意識をやる。今全身を巡る火の気とは別に、静かではあるが青龍の気があるのを感じる。

「あります。……静かですけど。わっ」

再び火が全身を包み、それが消えると姿は元に戻っていた。今のは朱雀の力なのだろうか。静かになったが、二柱の神獣に力を分けて貰ったおかげだろうか、今は自分の体の中に青と赤、二色の力が揺蕩っているのがわかる。嬉しさというよりは純粋に感動を覚える。

「なるほど。朱明、どう思う」

「不思議だの。しかし、余はこういう例を知らぬ。御柱の者なら何かわかろうが」

二人の話をよそに、ファンは自分の掌を見つめる。結んで開いて、を繰り返していると、心の中にほっと安堵が湧いたのがわかった。表情にまで出ていたのかもしれない、シンが言う。

「素養が決まるまでの間は、その力がお前を守ってくれる」

「はい！」

これで夢の中のあの人も怯えずに済むだろうか。ファンは朱明の方を向いて、頭を下げる。

「ありがとうございます、朱雀様」

「ん？　朱明さん、でよいぞ？　それに、面白い物を見せて貰った。礼を言われるまでもない」

朱明は少女のような笑みで笑った。そして、言う。

「ところで、余の力は強いぞ。ぬしにうまく使えるかの」

確かに。自分でもそう思う。第一、青龍の力もまだ、使える、という段階にないのだ。具現化できるようになった、というだけの話だ。

「あの、朱明さん」
「なんだ？」
「さっきのでも、かなり怖かったんですけど、その、火ってどうやったら慣れますか」
朱明は意外、といった顔をした後、真剣な顔で考え込んだ。
「どうやったらと言われても難しいの。余にとって火など周りの空気と同じなのだ」
そう言われればそうだ。シンが獣化を教えるのが難しい、といったのと同じこと。ならば、どうすればいいかは決まっている。それを代弁するかのように、シンが言う。
「慣れ、だ。練習はちゃんと見てやる、鍛練を続けないとな」
体の中に漂う二つの気を確かに感じつつ、ファンは確かに頷いた。

「もう、話の途中でどこかへ行かないでちょうだい、二人とも」
南王が部屋に入ってきて、子を叱る母親のような口調でそう言った。そして、シンに紙を二枚渡して、説明する。
「こっちは患者のいる家の場所を描いたもの。面倒だから地図にしてもらったわ。あと、こっちは身分証明だと思って」
三つ折りの紙に、赤い朱雀の印が捺してある。
「南王の印。各家にこれを見せれば間違いなく通してくれるはずよ」
「確かに。では、すぐにでも行こう」
シンはこちらを見て、行くぞ、と目配せしてみせた。ファンもそれについて、簡単な荷物だけ持って、入口へ向かう。
「あ、ちょっと待って」
南王に呼び止められ、ファンは立ち止まって振り返る。
「なんですか？」
「これを」
南王はファンの荷物にあった朱雀の羽根を取りあげると、ファンにじっとしているように言った。南王の手が首の後ろに周り、ファンはどきりとして、体を硬直させる。
「はい、できた。朱雀の加護があるでしょうから、身につけておくといいわ」
そう言って、南王は離れた。自分では見えないが髪の辺りに違和感がある。朱雀の羽根を結い紐の間に挿してくれたらしい。慣れなさそうに首を傾げるファンを見て、南王は微笑む。
「……大丈夫、女々しく見えたりはしないから。それを持っていれば、下手な扱いは受けたりしないでしょうし」
いってらっしゃい、と南王は手を振る。朱明も気をつけるのだぞ、と大きく手を振って見せる。ファンは二人に一礼すると、先に歩いているシンの方へと駆けだした。

二人を見送り、南王――ランファはふふ、と小さく笑った。
「ねぇ、朱明。さっきあの子に朱雀の力上げたでしょう。次の王？」
「ん？　違うぞ。王ではないのに神獣の力を使えるというのでの」
朱明はひらひらと手を振って見せて、玉座の方へと足を向ける。
「今、この中つ国すべて探しても、余の王はぬしだけぞ」
「あら、そうなの。また、ただの踊り子に戻るってのも面白いと思ったのだけど」
扇を広げ、一節舞うようにその場で回ると、ランファも朱明について戻る。その言動に朱明は渋い顔で呟く。
「ううむ。余が選ぶ王はいつもそうだ。王座に興味がない」
「あら、別に王様やるのは嫌いじゃないわ。ただ、私はいつも楽しいようにやりたいのよ」
そう言って、赤い衣でくるくると回って見せる。踊り子の時に人を楽しませたように、王の時も直接楽しませられずとも、「楽」は与えられるはず。それが自分の生き方であり、指針である。
先に歩いていた朱明が足を止め、小さな声で問う。
「悔いておるか」
少年の悲しげな声にランファは朱明の後ろへ回って、その小さな体をそっと抱き締める。今、自分の体の中に流れる赤の気がこの背を通し、伝わってくる。
「いいえ、まったく。――神獣の人達って不思議ね。一万年も生きているのに、中身は見たまま」
「どうせ余は子供だ」
拗ねたような口ぶりで、朱明は言う。
「でも、その格好の方が私は好きよ。赤の国代々の王は美しいものが好き。で、あなたは美しい。あなたと一緒にいられるなら、私はずっと王様でいるわ」
「そうか！」
嬉しそうな声を聞き、こちらの顔も緩む。ランファは身を放して、

玉座へ進んだ。何百とこの国の王たちが座ってきた豪奢（ごうしゃ）な作りの王座を撫で、そこに座る。

「さて。仕事をしなくちゃね。この国の人々すべてが笑顔になるように」

満足そうな顔で朱明が同意する。東国の彼らは、そろそろ一件目の家に着くころだろうか。ランファは人払いを解き、調査にやっていた家臣を呼んだ。

死病

地図を頼りに街へと出た二人は、王宮に近い大きな家の門を叩いた。しばらくして、門は僅かに開き、中から男がこちらを覗き込んできた。こちらを見て、男は眉を寄せた。

「何か御用でしょうか」

「青の国の獣人だが、こちらに重病人がいると聞いて来た。容体を窺わせてほしい」

シンはそう言ったが、扉はそれ以上開かず、門の向こうの男は後ろに控えているファンにもじろりと目をやる。

「本当に医者か？」

男はそう、短く尋ねた。ふぅ、と小さくため息をつき、シンは懐に収めていた紙を取りだす。

「南王から御印を戴いている。治療の術を心得ているが、医師でなければいけないか」

男は南王印をじっと見つめ、それが本物であることを認めると、扉を大きく開いた。

「大変失礼いたしました。治療と言って金ばかりたかる者が絶えぬものですから」

男は深々と頭を下げ、二人は中へ通された。外の敷石は磨かれ、辿りついた扉には金の引き手がついていた。客間で椅子をすすめられ、男は再び一礼する。

「主人に話をしてまいります。しばしお待ちください」

侍女をひとりつかまえると、男は客人にお茶を、と言いつけ、奥の方へと消えていった。侍女もこちらに軽く会釈すると、こちらは厨房の方だろう、別の方へと言ってしまった。

「静かな家ですね。人はいっぱいいるみたいですけど」

黒檀の肘掛がついた椅子に落ち着かない様子で、ファンが辺りを見回して言う。確かに、広い邸内は所々に働く使用人の姿を見かけ

たが、話声は聞こえてこなかった。仕事の音すらかなり気を使っているようで、どこかで水を使う音だけが、シンの耳に微かに届く程度だ。

「病人がいるためだろう。――どうやら患っているのはこの家の主人らしい」

「それならきっともうたくさん医師を呼んだんでしょうね」

「だろうな。……ああ、そうだ、ファン。俺が龍を使えることは黙っておいてくれ」

はい、と返事をし、ファンは頷いた。

やがて侍女が茶を持ってきたが、それに殆ど手をつけない間に、先ほどの男が戻ってきて、奥に招いた。

「従者の方はこちらでお待ち戴きたいと……」

「すまないが、この少年は従者ではなく私の弟子だ。助手でもある、一緒に入らせてもらう」

「そうでしたか。それならば構いません」

男は表情を崩さずに小さく礼をすると、二人とも奥の部屋へと招き入れた。奥の部屋は一段と豪奢（ごうしゃ）な物ばかりが揃っていたが、帳（とばり）の下ろされた寝台の周りはひっそりとしていた。帳の向こうで影が動き、薄絹が揺れる。

「東国からわざわざお越しくださるとは、誠にありがたい。しばらく伏していたもので、無礼な身なりであるが許されよ」

帳の一部が持ち上がり、奥からこの家の主人であろう、恰幅（かっぷく）のいい男が現れた。先ほどの従者に肩を借りてよろよろと歩き、大椅子に腰かけた。主人は体格こそいいものの、肌は土気色でつやがなく、いたるところに紫色の斑点が浮かんでいた。目は落ちくぼみ衰弱の色だけがそこに浮かんでいる。健康ならば頬にはもっと肉があったのだろうが、今は老犬のように皮膚が垂れ下がっていた。痛むのか、ほぼ紫色に染まった手を額にやり、重たく息をつく。その指には黒緑の石のついた指輪が光る。

「医者ではなく、治癒の術が使える獣人だと聞いたが」
主人はシンの顔をじっと見つめ、そう尋ねた。
「心配ならば」
医者を置いてもらっても、と言いかけたところで、主人自身がそれを遮って言った。
「いや、いいのだ。失礼した。もう、むしろ医者のほうが信じられぬ」
水を、と従者の男に言いつけると、主人は大きく息をついた。シンは都に入ってからの瘴気を、確かにこの男から感じた。

向けられた毒

互いに名乗ったところで、主人が尋ねる。
「ところで、失礼だが、貴殿は何の獣人なのだ？　治癒の術とは初めて聞く」
「蛟（みずち）という幻獣のひとつだ」
シンは右手を龍化させながら言った。事前に言った通りに、ファンも然（しか）り、といった顔で澄まして聞いている。なるほど、と主人は頷いたが、よくわかっていなさそうだった。まぁ、それはこちらとしても都合がいい。龍の腕を主人の体の前にかざし、少しずつ力を与える。腕の周りを薄青い光が包む。かざした手で拭うように、主人の体に浮かんでいた斑点を消した。
「ほう！　素晴らしい、こうも治るものか！」
主人が歓声を上げて、自分の腕を見る。水を持ってきた従者もその様子を見て、水を差し出すのを忘れて、見入っている。
「すまないが、完全に治ったわけではない」
「なんと」
水を差すような気もしたが、さすがに伝えねばならぬだろう。
「私の力では、病んだ体を癒すことはできるが、体が持つ力で直せぬ根源は断つことができないのだ。病を完全に断つには、その元そのものを消してしまわねばならない」
「では、どうしたら完全に治るのだ？　そもそも、根源は何と見る」
「……毒だ。根本的な対処については、陛下自ら動かれているようだ」
そう言った途端に、主人と従者の顔色が変わった。
「やはり、何者かが毒を……」
「違いない！」
二人は口をそろえて、毒の存在を肯定する。
「何か思い当たることがおありのようだが」

シンが尋ねると、二人は顔を見合わせた。
「いや、誰と決まったわけではない。だが、この暮らしぶりだ、察していただけるだろう」
なるほど、とシンは小さく応えた。毒を受ける覚えはあるが、誰がやったかは知らぬ。否、誰がやったとしてもおかしくない、か。
そうなると、ここからだけでは手掛かりは得られなさそうだ。
「同じ病は都中に広がっていると聞いたが」
地図に落とされた朱墨の数は多く、都の隅々に広がっている。
「旦那様、やはり壁の……」
「これ、この方は青の国の方だぞ」
従者が言いかけたのを、主人がたしなめる。何やら不都合があるらしいが、おそらく教えてはくれないだろう。身分の高い者や富める者に多いが、この手の隠し事は正面切って聞いても何も出てこない。ならば、これ以上の詮索は時間の無駄だ。

黒緑の石

屋敷を出ようとファンの方を向くと、ファンは眉根を寄せて、主人の腕を凝視していた。シンもあらためて主人の腕に目をやると、指の周りだけ、まだうっすらと紫がかった斑(はん)が残っていた。

「師匠」

ファンが小さく呟く。本当に、よく見ていると思う。シンは頷き、口を開いた。

「ならば、我々はこれでおいとまする」

「おお、もう行かれるのか。ならば、こちらをお納めいただこう」

従者の男が盆の上の布を払うと、そこには金の一枚板がつややかに収まっている。礼金としては相場を外れた金額だ。どうぞ、とすすめて来る従者を止め、シンはそれを辞する。

「南王陛下の命に従っているまで。受け取れないのだ」

困ったように笑んで見せた横から、ファンが唐突に口を挟む。

「もし差し支えなければ、旦那様！　あなた様のその黒緑色の指輪、それを頂戴したく思います」

「こら、ファン！」

口で叱ってはみても、元よりシンも言おうと思っていたところ、よくやったと頬が緩みそうになる。

「何、この指輪か」

怪訝そうな顔をした主人にファンは愛想よく笑む。

「不思議な色をした石だと思いまして、国の父に持ち帰りたくなったのです。旦那様によくお似合いなので、心苦しく思うのですが……」

「大変申し訳ない。弟子が過ぎたことを」

しおらしげに肩を落とすファンを見た主人は、しばらく考えこんだ後、にっこりとほほ笑んだ。こういう時に、ファンの少年らしさは大人の好意を寄せるに向いている、と思う。主人は指輪をはずし、

ファンの手に握らせた。
「正直で孝行の子だ、やはり子供は無垢なのがいい」
ありがとうございます、とファンは頭を下げる。持っていた白布にそれをしっかりと包むと、ファンは再び、シンの後ろに下がった。下がる時の顔に冷や汗が浮かんでいたのをみて、シンは頷いた。後でちゃんと褒めてやらなくては。何より、握らされた手を診てやらねばなるまい。
「礼金を要らぬと言っておきながら申し訳ない。体には重々気をつけられるよう」
「南王陛下によろしくお伝えいただこう」
主人の声を後に、シンは頭を下げると、ファンを連れてすぐ屋敷を出た。屋敷が見えなくなる辺りで、シンはファンの方を振り返る。
「よくやった！　ファン。手を見せてみろ、あの指輪に触れただろう」
ファンは石の触れた手をこちらに差し出す。僅かに赤斑が浮かんでいたのを見て、シンは急いで腕を龍化させ、かざす。
「触れていた時間が短い、おそらくこれで大丈夫なはずだ」
ファンは大きく息をつく。かなり気を張っていたようで、膝の力まで抜けそうになっているのがわかる。ファンは懐に収めていた包みを解いて、石を取りだす。石はどこまでも黒く艶（つや）のある石で、光の加減で緑色に光る。
「やっぱりこの石なんでしょうか」
「たぶんな」
ファンから石を預かり、シンは荷物の中にそれを治めた。
「宝飾品か。道理でこの街で広がる」
南王より預かった地図を広げ、今の家の位置に印をつける。数は多いが、日が暮れる頃には回れるだろうか。シンは顔をあげ、街の空気に意識をやる。宝飾品だけ、と仮定するならば、地図上の印が富裕層に集中しているのはわかる。が、先ほどの石の瘴気と街に漂（ただよ）う空気をみれば、どうもそれだけには思えないのだ。

「ファン。この地図にある患者は俺がひとりで回ろう。お前には、この街の全体を見て回ってきてほしい」
「患者と、あの黒い石を探せばいいんですね」
ファンは動き回れるようにと、僅かばかりの荷物をすべて背負い込んだ。髪に挿した赤い羽根が揺れる。楽しそうにすら見える。
「あぁ、肌に触れるようなものをよく見て回って欲しい。日没までに城に戻って、そこで話を聞かせてくれ。あと、それと――」
「無理はするな、ですよね。師匠！」
わかってます、とファンは続けて、確かに頷いて見せた。
「なら、また城でだ。お前が持ってる路銀は使っていい」
既に駆けだしているファンに届くよう、そう声を張る。その姿が小さくなってから、シンも再び地図を開いた。さて、調子よく回らねば、日没までには終わるまい。少し急ぐとしよう。

分祀（1）

シンと別れて、ファンは広い都の中を歩いた。王の地図にあった赤丸の少ない、町の外側を目指して進む。今、あらためて周りを見回してみると、黒緑色は流行っているのか、やたらと目につく。流行っているのだろうか。ただ、具合が悪いのかどうかはわからないから、一概にすべてが病原とはいえないだろう。今はそれらを見ておいて、シンや王に伝えなくては。

おおよその目的があるとはいえ、ファンは殆どあてもなく、都の中を歩いていた。途中で喉が渇いたが、なんとなく気が引けたので果物を一つ買って、齧（かじ）りながら歩いた。再び大通りに出ると、見覚えのある印を見つけてファンは足を止めた。東王が青龍印を、南王が朱雀印を用いるように、それはある土地の力を示す印だ。金色の獣が描かれたそれは麒麟印（きりんいん）と呼ばれ、御柱と天を意味する。国にいくつも点在する御柱の天社の分祀（ぶんし）には、決まって麒麟印が描かれている。

ファンはその印を見て、胸の内に何か苦いものを感じた。分祀には良い思い出がないからだ。東の国、育った町にいた頃に毎日通った場所で、毎日肩を落として後にした場所だ。いつも落胆して帰っては、バクに励ましてもらっていた。彼の獣人としての力だけでなく、存在そのものがファンにとってありがたかった。家に帰れば、帰り道の惨（みじ）めさをそのたびに忘れることができた。

そういえば、バクはここに描かれる瑞獣に会ったことがあったのだろうか。少し懐かしくなって、ファンは麒麟印を見つめた。帰ったらまた、獣化の練習をしよう。

ひたひたと社（やしろ）に近寄って見ると、入口に子供たちが集まって、列をなしている。神官による見立てを待つ列だ。本当に小さな子から、ファンよりも大きい者もいる。今、改めて見れば、確かにずいぶんと成長している者もいる。前までは小さい子しか目につかずに、こ

の年で列に並ぶ自分を恥ずかしく思っていた。いや、シンに出会わなければ、今もそうだったはずだ。

もう一度、入って見ようか。ファンは社への列に並ぶ。今は確かに、自分の中を二つの力が巡っているが、この力はシンや朱明が貸し与えてくれたもの。自分の力ではない。だから、二神の力に甘えないようにしなければいけないと思うのだ。

分祀（2）

並んでからしばらくで、順番が回ってきた。講堂の手前にある見立ての間の戸を押し開ける。講堂の方からは建国神話らしき話が聞こえた。眼鏡をかけた神官長はファンに近くに来るように言った。

「ん？　君は……この町の子ではないね」

眼鏡をかけた神官は、ファンの顔を見るなり首を傾げた。とりあえず、と神官は部屋の中央の椅子を勧めて、座るように言う。

「東から来ました、ファンと言います」

「そうか。では、ファン君。君は私をからかいに来たのかね」

難しい顔をして、神官はそう言った。

「君にはもう、獣の気が備わっているだろう」

「いえ、あの。これは、師とその御友人から、貸していただいた力です。自分のものでないんです。……自分の素養は定まっていませんん」

神官の表情は訝るようなものに変わり、ファンの目をじっと見据えた。

「そのような話は聞いたことがないが、まぁいい。見てみればわかることだ」

神官は眼鏡をあげて、その手をファンの額にかざした。ばさり、と風をきる音がして、神官は獣化する。猛禽（もうきん）のような爪と大きな翼、ふくろうのようだった。しばらく、じっとファンの様子を見ていた神官は驚いたような顔をして、その手を引いた。

「君は、本当にその力を貸していただいたのかね？　いや、その飾り羽根は間違いなく、あの方のものだ。ただ、しかし、こんなこともあるものなのか……」

「師からは、変った体質だと言われました。――ところで、あの、素養は」

「おっと、そうだった」

神官は姿を元に戻し、ファンから離れる。
「うむ、君がいうその二つの力以外を別にして、素養という面では、君の力はまだ定まっていない、としか言いようがない」
「そう、ですか」
「そう気を落とすことでもあるまい、大きな力の加護がある。君の素養はおそらく、今守り育てられているのだ」
神官は興味深げにファンの顔を覗き込む。
「不思議に思えて仕方ないが、その羽根の御方に関わることだろう、聞かないでおく」
「ありがとうございました、神官様」
ファンは頭を下げると、見立ての間を出た。やはり、まだ自分の素養は定まらない。神官が、守り育てられていると言った自分の力は、いつかちゃんと芽吹くだろうか。二神の力はきっと、自分が太極であるから、それを守るためにこの身に宿ったのだ。しかし、本来ならば来自分で守るべきものを、神獣が力を貸してくれているのだろう。それならば、この状態に安住するわけにはいかない。いつか、きちんと返せるように、もっと人間そのものを磨かなければ。
ファンは部屋の前に並んでいる子供たちを避け、社の外に出た。大きな通りはおおよそ見て回ったから、今度は細い道や、人通りの少ない場所を見て回ろう。日は頭の上にあり、じりじりと肌を焼くように照っている。小路なら日陰も多いだろうか。社を立とうとして、また麒麟印に目がいった。近くまで行って、壁の印を撫でてみる。
「君も見立てに来たの？」
突然に声を掛けられて、ファンは振り返る。そこには花籠を手にした、ファンと同じくらいの少女が立っていた。

小花の少女

「うん、今終わったんだけど。君も？」
ファンはその少女に尋ね返す。袖の無い薄紅色の旗袍は少し褪せているが、裾には小さな花の模様が見て取れた。髪は耳の後ろで二つに結ってあって動き易そうな格好だった。少女は言う。
「そう。でも、また来なきゃ。まだ素養が定まらないとか、人に笑われてばっかりだし」
彼女はため息交じりに、そう答えるとファンのほうをじっと見つめてきた。
「この町の子じゃ……ないよね？」
「うん、青の国から来たんだ。俺はファン、君は？」
「シャオファ。シャオでいいよ。この町に住んでるの」
シャオはそう言ってにっこりと笑った。彼女が持っている花はよく見れば、丁寧に作られた造花で、髪飾りになっているようだった。手作りのようだが、ひとつひとつが丁寧に作られているのがわかった。
「どうして、この町に来たの？」
シャオが尋ねる。
「素養が定まらないから、師匠について旅に出たんだ。中つ国を一周するんだって」
ファンがそう言うと、彼女は感心したように息をついた。
「素養が定まったからじゃないんだね、不思議。でも、いいなぁ。私、この町くらいしか知らないから」
「俺もそうだったよ。師匠が俺のいた町に来なかったら、旅どころじゃなかった」
「会ってみたいなぁ、そのお師匠さん。今は別々なの？」
「うん、今病気の治療で別の所で、俺はその間――あ」
そうだ、自分は今、その病原を探すように言われていたのだった。

夕刻までには王宮へ行かなければ。
「ごめん、シャオ。俺、町を見て回るように言われたんだった。行かなきゃ」
「あ、それなら私が町を案内してあげる！　結構詳しいよ」
シャオはそう言って、花籠の中身を零れないように敷布でくるんだ。
「最近花飾りもぜんぜん売れないから、暇してたんだ」
邪魔？　と尋ねられて、ファンは首を振った。
「いや、すごく助かる！　お願いするよ、シャオ。あとは小路だけなんだ」
シャオがにっこりと頷いて、先へと歩き出す。ファンはそのうしろについて、御柱の分祀をあとにした。

※旗袍……ワンピースのようなもの。

黒羽根の踊り子

シャオに連れられ、ファンは細い裏路地を歩いていた。思っていたよりも道は複雑に入り組んでいて、これはシャオがいなければおそらく迷っていただろう。案内のおかげもあって、町の七割はもう回ったらしい。

「黒緑色の装飾品？」

こちらの言葉を復唱して、シャオが振り向いた。

「うん、妙に流行ってるみたいだから。不思議な色だし、なんかきっかけとかあったのかなってさ」

細かい部分は隠しつつ、ファンはそう尋ねた。さすがに病の元になっているといえば、驚くだけでは済まないだろう。知れ渡れば、きっと病以上に町を混乱させる。

「あー、あれはね。ジェンさんって人がいるんだけど……知らないよね？」

ファンは頷く。

「ジェンさんは最近人気の踊り子なんだよ。もう、すっごく美人で！　すっごく踊りが上手いの！　ちょうど通り道だし、見に行こう！」

シャオは俄然（がぜん）はりきって、楽の音の聞こえる方へと走り出した。

「ち、ちょっと待って、シャオ！　その人がさっきの話と何か……」

「見ればわかるから！」

ファンはシャオの後を追いかけ、道に置いてあった木箱を飛び越えた。住居と住居の間の細い道を抜けると、外にまで列の出来た酒場が目に入った。人だかりをくぐり、小さい窓から中を覗き込んだ。席はすべて埋まっていて、踊り子の人気ぶりを思わせる。店内の明かりは少ないが、奥の舞台はかがり火が近いのもあって、外から見ても充分に照らし出されていた。

「あ、来た！」

隣で窓の桟を掴んでいるシャオが、舞台袖を見て小さく歓声をあげる。それと同時に舞台脇に控えていた楽人が演奏を始める。軽快な調べだった。そして、舞台の上に、踊り子が進み出て、踊り始めた。豊かな黒髪に、黒い羽根を飾りにしたつやのある衣装。そして、身に付けた宝石も同じ色。ただ、肌の色だけが対をなしてより白く見えた。舞台を照らす火にその踊り子の装身具が、きらりと緑色の光を返している。妖艶な、という言葉がぴったりだった。

「綺麗でしょ。ジェンさんがあの色を着て踊ってから、もう大流行」

シャオが小声で言う。なるほど、と応えて、目を凝らした。美人だけれど、誰かに似ている。踊り子がくるりと回って、客席に向かって艶やかに笑むと、ようやくそれが誰だかわかった。曲が一層盛り上がると窓にも席の一部になったようで、後ろから押されて、二人は通りの方へ押し出された。

「ね、流行の理由わかったでしょ？　憧れちゃうよね、誰だって」

シャオファは興奮冷めやらぬ、といった様子で言う。

「うん。そういえば、あの人、王様に似てるね」

「王様……って、王様？　ジェンさんが？」

「うん、南王様に似てるなって思って」

ファンがそう言うと、意外そうな声をあげてシャオはもう見えない踊り子のほうを見やった。

「そうなんだー。私、遠くからしか王様見たことないから、わからなかったよ。ファンは会ったことがあるの？」

「うん、まぁ……」

言わないほうがよかったかもしれないと、ファンははぐらかして答えた。けれどもいろいろ聞かれるかと思ったのに反して、シャオはただ感心したように酒場のほうを見ていた。

ほころび

「あのジェンって人は前から人気があったんだ？」
ファンは歩き出しながら尋ねた。日はそろそろ傾きだして、建物の影がのびてきている。残っているのは少ないらしいが、そろそろ急がないといけない気がする。
「ううん、ジェンさんが来たのはふた月くらい前かな。そんなに前じゃなかったはずだけど」
「じゃあ、あの色が流行ってきたのも最近か」
記憶にしっかりと留めながら、頭の中で、ふた月前、と復唱する。
「うん、あの色もジェンさんが持ってきたようなものだし」
「どういうこと？」
「あの色を作る染料もジェンさんが持って来たんだって」
「じゃあ、あの装飾品は町のどこかで作ってるってこと？　シャオ！　作ってる場所知ってたら教えてくれない？」
ファンがそう言うと、途端にシャオの表情が曇った。夕方前の雑踏を抜けて、二人は再び、細いわき道に入る。言い躊躇（ためら）うような間があって、シャオは口を開く。
「場所は知ってるよ。……確かにこの町だけど、でも」
言いよどんだシャオは、突然、逃げるように駆けだした。ファンは驚きながらも、それを追う。細い道は土地勘のあるシャオの方が早い。何回か角を曲がったところで、完全に見失ってしまった。あの色は、今のところ謎の病に繋がる唯一の手がかりだ。シャオが何か知っているなら、なんとかしても聞きたい。逃げるような理由があるなら。
「シャオ！」
大きな声でシャオを呼んでみる。が、やはり返事はなかった。もう一度、辺りを回ってみようか。日が長いとはいえ、暮れ始めてから落ちるのは早い。

もう一度、と思いながらも数巡したとき、建物の向こうから、怒鳴るような声が聞こえた。一方的だったが、微かにそれに返る声は間違いなくシャオの声だった。ファンは急いで、建物の裏手へ出る。人垣の向こうを見ると、少年たちに追いやられる形で、身を小さくしているシャオがいた。殆ど反射的に、ファンはシャオの前に躍り出る。背後からも正面からも、驚きと好奇の視線を感じながら、ファンは真ん中にいる少年を見据えた。

「見たことない奴だな。何だ、その能なしの味方するのか？」

意地の悪い笑みを浮かべて、目の前の少年は言う。シャオの身なりに比べて、少なからず裕福そうに見える。町の中心部のほうの子供だろうか。同じ年くらいに見える。睨み据えた視線を外し、ファンは後ろにいるシャオに声をかけた。

「シャオ、大丈夫？」

シャオは俯きながら、かすれた声で答える。

「か、籠（かご）を……」

花籠か。再び回りの少年に視線をやれば、シャオの持っていた花籠を見せびらかすように、こちらに掲げて見せていた。ファンは少年の方へ手を伸ばして、行う。

「返せよ」

「そいつが先にぶつかってきたんだ。お詫びくらいは貰わないとな」

「謝れば充分だろ？」

ファンの言葉に、中央の少年は声をあげて笑う。

「充分なわけねぇじゃん。だって、そいつ外の奴だぜ」

少年は花籠を取り上げて中の布包みを払って覗き込んだ。

「……なんだよ、これ。髪飾りかぁ？」

当てが外れたと言わんばかりに、少年は不機嫌そうな顔をする。

「違ったでしょ？　返して！」

シャオは泣きそうな声で叫んだ。少年は舌打ちし、乱暴に花籠を投げつけてきた。地面に向けて投げられたのを、ファンがぎりぎり

の所で籠を掴む。が、包みの解けていた中身が零れて、道に花が散らばる。

「黒羽根の何かでも持ってると思ったのによ。今時花飾りなんて、はやんねぇよ！　だっせぇ。そんなのもわかんねぇから、未だに素養がはっきりしねぇんだろ」

シャオは傷ついたような顔をして、きつい目で少年を睨んだ。ファンも少年に一瞥をくれる。だが、もう相手にしている時間がもったいない。ファンは道に散らばった花飾りを拾い集めて、すべて籠に収めて、言う。

「気がすんだろ？　帰れよ。こっちだって急いでるんだ。……行こう、シャオ」

ファンはへたり込んでいるシャオの手を取って立ちあがらせた。そして、少年たちの間を割って、表通りへ足を向ける。待て、という声を無視して、ファンは歩を進める。腹は充分に立っていた。それでも、体の中を巡る二色のふつふつと煮えるような熱さがかえって、頭を冷やしていた。

「すかした顔してんじゃねぇよ！　よそ者のくせに！」

周りを囲んでいたひとりが、棒きれを拾い上げて、振りかぶる。同じ年頃の子どもの振るものだ、今まで相手にした者達ほど速くはなかった。ファンは振り返って、苛立ちを込めて思い切りその棒を払った。

悲鳴が聞こえて、ようやくファンは気付いた。気付いたときには解けていたが、瞬間的にもどうやら龍化していたらしい。払ったはずの棒が朽木のようにばらばらと砕けて散らかる。思ったよりも頭は冷えていなかったのだ。しまった、と思った瞬間、体の中の青色が奥の方へと引っ込んでいってしまった。

殴ってきた少年は腰が抜けたのか、思い切り尻もちをついていた。辺りはしんと静まりかえり、息を飲む音が聞こえるようだった。少年たちの内のまた一人が、ファンの方を見てはっと顔色を変えて、首領格の少年に耳打ちする。ぎりり、と歯噛みをして見せて、少年

は怒鳴った。
「朱雀羽を貰ってるくせに！　なんで！　なんで壁の外の奴になんか肩入れしてんだ！」
シャオは隣で切なそうな顔をしていた。あの金持ちの家での会話を思い出して、ファンはなんとなく、だが、おおよそを察した。ファンは少年に向かって小さく答える。
「俺はよそ者だから。壁とかそんなもの知らない」
そして、シャオを先に歩かせて、ファンは振り返った。
「……驚かせた、ごめん」
少年たちから返る声はなかった。

わかる

シャオはもう、走って逃げたりはしなかった。ただ、残った路地を案内する間、しばらくずっと口を開かなかった。全部回った、と言うまで、シャオは気まずそうに俯いていた。町が橙(だいだい)に染まる頃に、シャオはようやく言葉を発した。

「この町には、よそから来る人に秘密にしていることがあるの。ううん、別に秘密なんかじゃないけど、誰も言わない」

シャオが町の外側に向かって歩き出し、ファンもそれに続く。

「この町の賑わいを求めて、あちこちから人が集まってできた場所があるんだ。町を覆う城壁の外に、しがみついているような小さな集落。私の家もそこにある」

シャオがふいに足を止め、旗袍(きほう)の裾をぎゅっと握りしめる。

「壁の外だって、私はこの町で生まれたから。ここより辛いところがあるって言われたら、貧しいところがあるって言われたら、そうなんだって納得してきたよ。でも！　本当にそうなのかな、この町しか知らない私は、この町がすべて」

その頬を涙がつたって落ちる。わかるよ、と言いかけて、ファンはそれを飲みこんだ。こういうことは解ってほしいと思う反面、容易に解ってもらいたくないから。そこまで解るから、なおのこと言えなかった。

「……あのさ、この力、俺のじゃないんだ」

シャオが振り返る。結った髪がりんと揺れる。ファンは続けた。

「師匠に貸し与えてもらったものなんだよ。俺のものって言えるものはすごく少ないし、足りないものはいっぱいある。けど、俺はもらったものだっていっぱいあるのを知ってるよ」

この命ですら、拾い上げてもらったものだから。上も下も見ればきりがないし、自分が不幸だというのは楽だ。不幸の数を数えれば際限なく出てくる。けれども、幸運の数だって決して少なくないこ

とも、今だからわかる。
「俺は、やらなきゃいけないことがいっぱいあるよ。やりたいことも。シャオは？」
ファンはシャオをじっと見る。涙の跡が夕日に照らされて、光っている。
「うん。……そうだね」
シャオがぐいと涙を拭う。そして、花籠（はなかご）を持ち直し、また歩き出した。
「私の家を紹介するね、ファン。ついてきて」
町を覆う壁には開けられたような穴があって、その向こうにも町が続いていた。だが、きちんと建てられた家は少なく、幌（ほろ）をつないだようなものもいくつかあった。城の周りの家から見れば、随分な違いだ。
「ここが壁の外。みんな、宝飾品を作る下請けで生活してるの。売れるならなんでも作ってきたけど、今はみんなが一つのものを作ってるんだ」
「それって……」
「うん。あの色の宝飾品は、みんなここで作ってる。今、この集落は、あの宝飾品のおかげで、ようやくちゃんとお金が入るようになったんだ」
壁の裂け目をくぐって、ファンは町の外に出た。目につくのは、落陽に照らされながらも、艶やかな緑色を返す、様々な宝飾品だ。そして、それ以上に目立つのは、紫色の斑紋（はんもん）を浮かべた、そこの住人達だった。

外の者（1）

壁の外を歩くと、いくつもの視線がファンに刺さるように注いだ。王に会うからと改めた服は、ここからすれば大層なものに見えるだろう。お守り代わりの朱雀羽（すざくばね）もそうだ。気にしないで、とシャオはどんどん進み、ある家の入口に掛けられた布を払って中に入る。

「あの色は黒羽根（くろばね）色っていってね。鳥の羽根から染み出す汁を染付に使ってるんだ」

ただいま、とシャオは中へ声をかけた。

「ずいぶん遅かったな」

暗い室内から返ってきた声は中年の男のもの。奥から出てきた男の顔を見て、ファンははっと息をのんだ。紫色の斑点。男はこちらを訝しげに見て、額の汗を拭った。

「この子は友達、さっき助けてもらったの」

「また何かあったのか」

「ううん、大丈夫。お父さんは休んでて」

尋ねられる前に、シャオはファンを紹介する。シャオの父親はあまり良い顔をしなかったが、追いだすことはしなかった。周りの物に気をつけるようにだけ言って、また奥に戻っていった。姿が完全に見えなくなるのを待って、ファンは問う。

「お父さん、具合が悪いの？」

「うん。でも、流行り病ならしょうがないよ。結構かかってる人いるみたいだし」

そうは言っても、ざっと見ただけでもここの病人の割合は町の中の比ではない。中の人間からこちらに触れることはなかっただろうから、誰も気付かなかったのだ。

「色がつくから触っちゃ駄目だよ」

そういって、シャオは大きなかめの蓋（ふた）をとった。部屋の隅にあった明かりをとって、シャオは中を照らしてみせる。暗い水の底であ

の色が煌めく。
「ジェンさんは私たちの生活を知って、何か役に立てないかってこの羽根をくれたの。自分はこの色が人気になるように踊るからって。ジェンさんは恩人なんだ」
シャオはふたを閉じながら、夢を見るような目をして言う。
「私も早く、手伝えたらいいのにね。難しいからって、まだ染色やらせてもらえないんだ」
相槌を打って、ファンはそっと辺りを見回した。染めつけられたであろう糸や飾り玉が置いてある他にはあたりは日用のものばかりが並んでいた。他に目につくものはない。
病の元凶はおそらくこの羽根なのだ。確かとはいえないが、少なくともシャオは、父親が手伝わせない理由を知らないでいるのだ。ファンを見るあの目は、部外者を疎むものではない、何かを恐れるような暗さを湛えていた。それが死なのか、露見することなのかはわからないが、彼らが事実に気付いていてもいなくても、今自分に言えることはない。言うべきはこの場所ではない。
「シャオ、俺そろそろ返らないと。師匠が心配するだろうし」
「あ、そうだっけ！　じゃあ、そこまで……」
「ううん、大丈夫。走って帰るし、シャオはお父さんの看病してあげて」
ファンは入り口の布をくぐり、陽山の向こうへとその身を沈めゆく太陽を見た。急いで帰れば、なんとか間に合う。それに、すぐにでもこのことを伝えなければ。振り返ると、シャオは心配そうにこちらを見ていた。じゃあ、と言って、少し考える。
「うん、また明日」
そういうと、シャオの顔が少し明るくなった。そして、シャオが手を振る。それに手を振り返し、ファンは歩き出した。布張りの家々の間を抜けたら、走って王宮へ向かおう。そして、この町の人を助けて貰えるように、シンや王に頼むのだ。

外の者（2）

町とその外を隔てる壁をくぐろうとした時、後ろから声を掛けられた。シャオの父親だった。走ってきたのだろうか、息を切らしている。

「無理したら駄目ですよ！　走ってきたんですか？」

その顔色は薄暗い中でも充分に具合が悪いのが見て取れた。駆け寄ると、父親はファンを見据えて、喘鳴混じりに口を開いた。

「君は何か知っているんだな。――あの羽根は、やはり悪いものなのか」

「……確かではないですが」

そうか、と言って父親はその表情を一層険しくした。

「あの……」

「黙っていてくれないか。いや、もし、これで死ぬ人間が出るなら――我々以外に死者がでるなら、すぐにでもやめよう。だが、原因が羽根だと言うのなら、それだけでも黙っていてほしい。あの踊り子がどういう意図だったかは知らないが……我々には、もうこの場所しかないのだ」

大きく咳きこみ、父親は懇願の瞳を向けてきた。

「あの羽根に触れた者、皆で決めた。何度も天秤にかけて出した答えだ、王に伝えていただきたい。――我々も都の民なのだと」

返すべき言葉が見つからず、ファンは立ちすくんだままその瞳を見つめる。家族が、子が富めるなら、自らの死すら厭わぬ彼らが、恐れるのは全てを奪われることだった。

「病を広げた罪は、我々の死で償おう。どうか、どうか宜しく頼みたい」

白髪の交じる頭を下げて、父親は言った。その姿と、昼間のシャオの言葉が重なって、ファンは声を張った。

「死んだら駄目だ！　それじゃあシャオもあなたも救われない、助

からないじゃないですか。　必ず伝えます、できるだけのことをしますから」

父親は驚いたような顔をして、こちらを見た。そして、その表情をふっと崩す。

「その年で朱雀羽を貰うだけはある。……持っていくと良い。きちんと包んだがくれぐれも触れないように。あの踊り子が持ってきた羽根だ」

油紙にしっかりと幾重にも包まれたそれを受け取って、ファンは荷物の中にそれを収めた。向こうのほうでシャオの声がするのが聞こえる。父親を探す声だ。よろしく頼む、と父親が背を向ける。同時に、閉門を告げる鐘の音が聞こえて、ファンは急いで壁の裂け目をくぐった。裂け目の向こうに、重たい足取りで帰る父親とシャオの姿を見る。娘を見るのは優しいが昏(くら)い目だった。

鐘が鳴り終えると、裂け目の向こうがぼんやりと霞(かす)んで見えた。風水の護りの外にある集落の向こうに陽が落ちる。日没に城で。師との約束を思い出し、ファンは慌てて駆けだした。養父と同じように心配する彼の姿が目に浮かんで、ファンは一層その足を速めた。

南の禍霊（1）

日に何度かある舞台を終えた踊り子が、店の奥の小部屋へ戻って、椅子にどさりと腰を下ろした。舞のための扇を煙管（きせる）に持ち変えて、その先にそっと火をつける。酒場の店主がその日の給金を持ってこちらにやってきたが、踊り子は不機嫌そうに煙を吐き出して、すぐにそれを追い返した。扉の閉まる勢いで、部屋の明かりがゆらりと揺れる。同じく揺らいだ影の中から人の姿が浮かびあがると、踊り子は再びため息交じりに煙を吐いた。

「機嫌が悪そうですね、ジェン」

暗がりの中、その人影が優しい声音で言う。影が踊り子の方に近づくと、薄明かりにその姿が照らされた。すらっとした痩身の若い男の姿だ。薄明かりにもその端整（たんせい）な顔立ちが映える。

「私はいつまで踊っていればいいのかしら。もうふた月。病も思ったほど広がらないじゃない」

「もうそろそろですよ」

「もうそろそろ、がひと月続いてるじゃない。あなたの言うその時は一体いつなの？」

煙草盆（たばこぼん）に高く音を立てて煙管を打って、踊り子は言った。転がった灰からあっという間に火が引いていく。男は優しげに微笑み、繰り返した。

「だから、ようやく今その時が来たんですよ。僕の望んだもののがやっと」

「本当に？」

踊り子は立ち上がり、男の瞳をじっと見つめる。毒々しいほどに赤い紅が、嬉しそうに艶（つや）めく。

「本当ですよ。僕の踊り子」

男はそう言って、踊り子に唇を重ねた。踊り子は慌ててその身を離し、頬を赤らめながら、倒れるように椅子に座る。

「いつか死んだって知らないから！」
甲高い声で、踊り子はそう言うとまた不機嫌そうな顔で煙管に煙草をつめた。
「生娘（きむすめ）でもないでしょうに。可愛い人だ」
男は悪びれもせず、そう言って笑う。
「あなたの舞も近く最後になるでしょうね。その時は一層美しく舞ってください」
「ちゃんと言われた通りにやるわ、あなたのおかげでここまでこれたんですもの」
踊り子の顔の先で、落日のような火が灯る。よろしい、と男は微笑み、また元の影の中にゆらりと溶けた。煙管と、自らの望みに夢中になっている踊り子に、見えないように口元を拭いながら。
「窮奇（きゅうき）様……」
踊り子は唇に触れて、切なそうに紫煙を燻らせた。そして、数服して、また盆の上に灰を叩きだして立ちあがった。その唇は、その時にはもう別の者への呪詛（じゅそ）を呟いていた。

報告

暮れてしまうと、暗くなるのは早かった。夜店に向かう人と家路につく人の間をすり抜けながら、ファンは急いで城に向かった。シンは心配しているだろうか。城で龍化した時にもシンや朱明は真っ先に気付いて来たのだから、おそらくさっき竜化したことにも気付いているだろう。なら、きっと心配している。

ようやく王宮が見えてくると、シンらしき人影も門の傍に見つけた。隣にいる赤い服の女性は南王だろう。慌てて門の間を走りぬけようとしたら衛士に止められたが、すぐに南王が中に通してくれた。

「今、使いを出そうかと言っていたところ」

南王はよかった、と笑みを浮かべると、奥へと歩いていった。ファンは上がった息を整えながら、背負っていた荷物を下ろす。

「すみません、師匠！　遅くなりました！」

「……無事ならいい。とはいえ、何があった？　さっき一度龍化しただろう」

ファンが下げた頭をぽんと軽く叩き、シンが問う。顔をあげると、シンは安堵（あんど）の表情を浮かべていた。仮親のそれに似ていて、ファンは懐かしい感覚を覚えた。

「龍化は、俺もまさかするとは思わなくて、町でちょっと同じ年くらいの子達に絡まれたときに、不意に……」

「そうか。とりあえず中へ入ろう。南王と朱明に、わかったことを話さないとな」

歩き出したシンの後について、ファンも王宮の中へ入る。廊下にはすでに明かりが入っていて、天井画がさらに鮮やかに照らされていた。歩きながら、シンが言う。

「勝手に力が出て来るとなると、今度は抑える術も必要か」

「あ、でも、今は何か龍化しようとしても、出来なくて……」

引っ込んだきりの青龍の力は、まだ前のように体の中を吹き回る

様子がない。
「不意に出たのを無意識に押さえたからだろうな。安定しないとどちらも無理か」
玉座の間に着くと、南王がすぐ人払いをした。玉座の後ろから朱明が出てきて、玉座の横の床に胡坐(あぐら)をかいて座った。部屋の中を照らす明かりに、自分の焔を足して明るさをあげて、満足気に頷く。全員が揃ったのを確認し、南王は二人に座るように言った。玉座に対しておかれた円座に腰を下ろし、シンは自分の荷物から、一つの包みをおく。包みはざらりと音を立てる。
「記されていた家の治療はすべて終えてきた。――やはり毒だ」
シンが包みを解くと、中身がざらざら音を立てて広がった。貴金属、装飾品の類がほとんどで、色は黒に緑が混じる独特のものだった。
「ファンが見つけた。どうやらこの色の装飾品から出た毒が肌に沁みて、病を起こさせていたようだ。病人の周りにあったこれらを出来る限り集めてきた。どうだ、朱明」
朱明は立ち上がり、広げられた中から指輪を一つ拾い上げる。
「確かに、瘴気はこれらからでておるの。どれ」
朱明はふっと息をその指輪に吹きかける。淡紅色の火がその指輪を包み、消えると指輪の石は灰のような塊になりさらさらと崩れてしまった。
「間違いないの。ただの毒ではない、邪(よこしま)なる者が関わっておる」
「そういえば、その色。この間、献上品の中にあったけれど、なんだか気に入らなくてしまったままだわ」
南王はそう言って装飾品の前まで来て、それらをじっと見つめる。
「これだけの種類で流行れば、広がるわけね。食べ物よりもこの町には効くわ。……珍しい色ではあるけど、どうしてこれが？」
「それなんですが、あの……」
自分の番だ、とファンは荷物を下ろし、油紙にくるまれたあの羽根を装飾品の横に置いた。

「町に出て、色々わかったことがあります」
ファンは三人の顔を見回す。一様に頷きが返ってきて、南王がどうぞ、と話の先を促す。ファンは息を整えると、口を開いた。

鴆の羽根

「町で、俺と同じくらいの女の子に会いました。道に詳しいというので、案内してもらったんです。この装飾品の色は黒羽根色と言います。ふた月ほど前に来た、ある踊り子が身に着けて舞って、流行しているそうです。」

「ふた月前……は時期があうわね。踊り子？」

南王の問いにファンは答える。

「ジェン、という踊り子だそうです。そして、その踊り子が持ってきた羽根を染料に、この装飾品が作られていました。その紙の中に」

朱明が油紙の中身を改めて、なるほど、と呟いた。そして、それをシンに渡す。

「覚えがあるか、句芒」

「ああ。……随分昔のことだが」

朱明はまた羽根を受け取って、こちらを見て言った。

「少年、これは鴆という鳥の羽根だ。羽根の根元に毒があってな、これ一枚でも相当人を殺せるものぞ」

でも、と南王が言葉を継ぐ。

「この鳥はもう存在しないの。神話の時代に絶滅しているから」

ファンが判じかねていると、シンがそれに応えるように言う。

「幻獣、妖獣に属するものは、自然にはもう存在しないだろう。だが、地上から滅びた種でも、獣人としては存在しうる」

「獣としての容を失っても、地の力にはちゃんと存在しておるからの」

「じゃあ、その鴆って鳥の獣人がいるってことですか？」

ファンはなるほど、と思って尋ねたが、朱明と南王が顔を見合わせ、答える。

「でも、今はいないはずなのよ。昇化ならここに来るはずだし」

「化生の者が生まれれば御柱から触れが出るが、余はここ数百年聞

いておらぬ」
今度はシンとファンが顔を見合わせる番だった。はじめの町で出会ったあの二人組を思い出す。素養とは違うものをその身に棲ます者。シンが頷く。
「獣堕の行動にしたら周到だ。……ここにも来てるぞ、朱明」
「窮奇か」
深くため息をついて、朱明はその場に座る。
「あやつが鴆の昇化のまがいものを作ったか。――あやつは嫌いだ。余と似ておる」
「何にせよ、その“もどき”を捕まえなきゃね。ファン君、町を見てきて、何か心当たりはある？　そうね、その踊り子についての話とか」
ファンは頷く。すこし言いだしづらく思うが、話しておかなければ。
「友達に連れられて、その踊り子を見ました。遠めでしたけど……南王様に似ていたように思います」
そう言うと、南王ははっと顔色を変え、口元に指をさして問う。
「ここにほくろがあったりしなかった？」
「ごめんなさい、そこまでは」
今改めて見ると、南王には左に泣きぼくろがある。細かいところまでは見ていなかったが、見れば見るほど、やはり似ていたように思う。ファンの答えを聞いて、南王はその整った眉を曇らせた。
「嫌な予感がするわね」
「知り合いか」
シンが問う。
「たぶんね。よく似た妹がいるのよ。しかも、私を嫌ってる」
南王はため息をつき、疲れたように玉座に座りこんだ。
「杞憂であればいいんだけれど。魔の者と一緒にいれば厄介だわ」
全員が黙りこんで、夜風が明かりを揺らす。しばしの沈黙を破り、シンが口を切る。

「ともあれ、窮奇のことだ。策を練っているのなら、こちらの動きも見ているはずだ。対して、こちらは向こうが動くまではろくな手は打てない」

「ならば、急務はばらまかれた毒をどうするか、だの」

朱明は散らばる黒羽根色をいくつか拾い上げると掌で包んで、赤い火で焼いた。毒の染みた部分だけが焼け、他は焦げ一つなく残った。それを見て南王は焼け残ったものを手にとって言う。

「見つけ次第焼けばいいのでしょうけど、出所が知れないうちはいたちごっこになるわね。とりあえず、都すべてに通達を……」

「待ってください！」

南王の言葉を制止して、ファンは息を整えた。三人からの視線が注ぐ。

「南王様、朱雀様、そして、師匠。その装飾品の出所を知っています。――でも、それに関して、お願いがあるんです。聞いてもらえますか？」

頷きが返ってきたのを確認して、ファンは口を開いた。

壁

「南王様は、壁の向こうの集落を知っていらっしゃいますか？」
そう尋ねると南王はその表情を曇らせた。そして、頷く。
「知っているわ。私もこの町の生まれだから」
「この色の装飾品は今、あの集落で作られていました。この羽根のことを教えてくれた友達は、そこの子です。あの場所は町よりも大勢の人が病んでいます」
ファンは集落の光景を思い出す。寝込んでいてもおかしくないような状態で、なおも毒羽根に手を染めて働く人々。
「そこの人々はそれが毒だと知っているのか」
シンの問いに、頷いて答える。
「今は。でも、少なくとも最初は知らなかったはずです。その子のお父さんから聞きました。お金が入るようになった半面、自分たちの中から病が広がり始めて、ようやく気付いたと」
ファンは南王を見つめて座り直し、頭を下げた。あの父親がやったのと同じように。
「頼まれました。原因が羽根であることは黙っていて欲しい、と。羽根はすぐにでも手放すそうです。毒を広げた罪は死を以て償う、ただ、毒に関わらなかった者、子供たちだけでもこのまま都で暮らしていけるようにして欲しい、それが彼らの願いです」
でも、とファンは下げた頭を更に下げて、額づく。
「おれは彼らも死なせたくありません。どうすれば皆が救えるのか、俺にはわからないんです。魔獣が関わっているのなら、尚更俺一人ではどうにもできないでしょう。……言われたように働きます。だから、あなた方の力を貸してください」
床の敷布を額で感じながら、ファンは請い願う。
「頭をあげなさい」
南王の声に、ファンは顔をあげた。

「出来る限り力を尽くしましょう。ただ、どこまでやれるかはわからないわ。壁の向こうはただでさえ危うい立場にある。少しでもその話が漏れれば、暴動になるでしょうね」
「もともと両者とも不満を抱えておったのだが、きっかけがなかっただけだしの」
朱明が窓の方へ歩いて行って、外を見やる。あの集落の方向か、城は高いからよく見えるのだろう。
「ついこの間出来たように思っておったが、随分経つのか。我らは時間に疎くて困る」
「嘆いてる暇はないわ。とりあえず、やらなきゃいけないことを考えましょう。まずは、あの集落にある羽根と飾りは全部焼いてしまわないと。広がってしまった物は、後々口実をつけて集めていけばいいわね。とはいえ、私たちは王宮を離れられないから……」
南王が朱明に目配せし、朱明はそれに頷く。
「少年、その羽根を借りよう」
朱明がファンの髪に挿してあった羽根を取り、何ごとか呟くとそれをまたこちらへ寄こした。
「毒羽根を集めたら、そこに投げればよい。毒を焼き切る」
ファンは羽根を預かり、再び髪に挿した。その様子を見て、シンが申し出る。
「ならば、病んだ民については俺が預かろう。ファン、案内してくれ」
「はい！」
ファンは王と二柱の神獣に向き直り、また頭を下げた。
「ありがとうございます！　俺、頑張ります」
顔をあげると三者の笑みが返る。
「よし、そうと決まれば、あとは明日を持つのみよの」
「夕餉も用意してあるわ。ゆっくり休んでちょうだいね」
「はい！」
夕餉、の言葉にさっきと同じような返事をしてしまって、くす、

と南王が笑う。それを皮切りに他の二人も笑い、結局はファンも含めて、皆で声をあげて笑ったのだった。

神域（1）

ファンが寝入ったのを確かめて、シンはそっと寝台から降りた。この旅の理由でもある話だが、ファンにはまだどう伝えたらいいのかわからなかったのだ。四方の王と神獣に会うのは、目的ではなくて過程のひとつにすぎない。目的を果たした時に訪れる事象について知れば、この優しい少年はおそらく傷つくだろう。ファンには、自分が今まで守ってきたこの世界を、ちゃんとみせてやりたいのだ。その目に余計な歪みを与えたくはない。

夜番の衛士に案内を頼み、王宮の最深部へと向かう。衛士は二人、王宮の重要な場所に踏み入ろうとするのだから、この護は当然だ。王宮の一番奥に作られた部屋は神獣が座し、安らうための場所だ。御柱からの力を受け取り、国に広げる要所でもある。部屋の前まで来ると、片方の衛士は足を止めて部屋に背を向けた。扉からは薄く、だが、強い光があふれていて、直接それを見てしまうと常人の目は焼けてしまう。人が来ぬように背を向けた方は常人で、もう一人は獣人なのだろう。獣人なら気で体を覆い、身を守ることができる。獣性の衛士はシンと同じように気で体を守り、問う。

「これより朱雀の間への扉を開けるが、よろしいか？」

「ああ、頼む」

力の元を辿れば御柱に続く部屋だ、扉を開ける文言を知る者は少ない。青の国でも、東王とシンが許した者が二、三人ほどいるだけだ。衛士は扉の前で静かにそれを呟くと、扉の引き手を引いた。

夜目には辛いほどの光が前室にあふれ、御柱から届く天の気が即座に体に満ちる。外で過ごすにはかなりの量を口にせねばならないが、この部屋にいるとそれは全く必要なくなるのだ。神獣はほぼ力の塊であるから、ここにいれば死ぬことはない。それは神獣と力を共有する王もだ。だから、王と神獣は王宮を離れられない。死なぬことこそ、国を守る王の勤めだ。

シンがその部屋に入ると、後ろで静かに扉はしまった。

部屋はあふれる光に白く照らされて、限りなく凹凸を失っているように見える。起伏を失っているから、部屋は外から見たよりも広く見える。中央には煌々（こうこう）と燃える炎がある。これが赤の国を支える聖火だ。南王は扉から向かって右手、聖火台の端に腰かけ、朱明は朱雀本来の姿に戻って聖火台の縁にとまっていた。

「適当に座すがよい、句芒」

朱雀が言う。子供の姿でいる時はこちらの方が大きいが、やはり元の姿は雄大である。もとより、朱雀はこちらよりも神獣になったのが早い。それでいえば、朱雀はシンにとって先達、兄にあたるのだ。聖火の前、二人からよく見える場所に座ると、シンは口を開いた。

「本来なら休まれる頃合い、時間をとってすまない」

「よい。こちらとしても聞かねばならぬ」

朱雀が尾羽を動かして、聖火の中をゆるりとかき回した。

「よほどのことがなければ、国を離れぬ決まりだったはずぞ、句芒。――否、青龍」

「少し前に東王から、四凶復活の兆し有り、と親書が届いたわ。そこにはあなたのことは書かれていなかった。東王陛下もご存じなのね？」

シンは静かに頷いた。全て話して、半ば無理やり納得させて東都を離れた。

「陛下も御承知の上だ。だが、俺自身、今も神獣が土地を離れて起こりうる事象を危ぶんでいる。四方の均衡を崩すわけにはいかぬ。だから、こうして貴公を尋ねたのだ、朱雀」

静かに息をつき、白い床に目を落とす。浮かぶのは自己の内面、眼前の火のように留まらず揺らぐそれ。そして、また朱雀の方へ目を戻し、口を開いた。

「――俺にはもう、青龍としての力はない。全て失う前に、この力

を天に返す」
「青龍！」
朱雀が驚き、聖火が不安定に揺れる。南王はただその表情を曇らせて、悲しげな目をこちらに向けていた。

神域（2）

「青龍、それが何を意味するか、よもや解らぬわけではあるまい」
朱雀が語気を強めて、言う。朱雀の感情の上下に傍(かたわ)らの聖火もゆらゆらと揺れる。
「ちょっと待って頂戴。まず、力を失ったってどういうこと？　青龍の力は確かに、あなたから感じ取れるわ」
「ああ、力は“ここ”にある。だが、神獣というものは天から巡る力を、与えられた地に配し、土地の気を治めるのが役目。だが近頃、天から俺に力が回っても、俺から土地にうまく力が回らなくなった。ほんの僅(わず)かずつだが確かに、土地が弱りつつある」
「ならば今、東の地はどうなっておるのだ？　ぬしが土地を離れれば、余計に力は回るまいよ」
朱雀の問いに、シンは懐(ふところ)から一枚の鏡を取りだした。裏に瑠璃(るり)の玉のはめ込まれた細工物で、二枚一対の宝物だ。
「俺がいることで土地の力を奪ってしまうなら、そこから離れてしまえば東王宮の聖樹の、その根を通して土地には力が巡る。今は聖樹に掛けられた鏡から、この鏡を通してそれを看(み)て、抜かりのないように回している。土地の護りは、王と臣下の蛟(みずち)に委ねてきた」
ふむ、と朱雀が相槌を打つ。南王は難しげな顔をして、口を開いた。
「何か、原因に心当たりは？」
「わからん。だが、何かあるとしたら、俺にあるんだろう。神獣の力は四方均等でなければならないから、土地を弱めながらも尚、俺に力が回るということは俺そのものが弱りつつあるのだと思う。土地の力をその埋め合わせにしている」
「傷、ではなかろ。回復の力を持つぬしがそれまでに弱るとしたら何か他のことであろうの」
「ああ。――ところで、南王。貴方には“太祖の記憶”があるか」

「もちろん。この国の始祖、火王（かおう）の記憶は代々の王に受け継がれるもの、私にも神魔大戦（しんま）の戦いの記憶がある」
「……今の東王陛下には、それがない」
シンの言葉に、二人の顔が驚きを示した。始まりの王たちの記憶は、繁栄への願いと自戒の意をもって、代々の王に継がれゆくものだ。
「ならば、東王は」
朱雀の言葉を制し、シンは首を振った。
「いや、陛下が王であるのは間違いない。東の、俺の王は間違いなく陛下だ。だが、太祖の記憶を持たずに在位した例は今までにない。もし、それが何らかの意を示すというのなら、あの戦いとこの現状はおそらく関係していると思う」
それぞれがそれぞれ、一万年前のあの戦乱を思い出す。勝ちはしたが、どの国も深く傷を負った。
「俺はあのとき、王を守れなかった。それが今度は国を危ぶめている。ならば、俺がとれることは一つ」
過去の記憶から顔をあげて、シンは再び繰り返した。
「俺がこのままいれば、土地は死に絶え、王を失い、守るもののない獣が残るだけだ。そうなる前に俺は天に力を返し、新たな青龍を据えるように天に奏上する。もとより、天に任ぜられねば、土地に住むただの獣だ、難もあるまい」
言いきると、その場を再び沈黙が覆った。聖火の燃える音が微かに楽の音のように聞こえるばかりだ。

神域（3）

「それではまるで暇乞いではないか、青龍」

静寂からしばらく、羽根の焔を褪せさせて、朱雀は言った。同じように顔を暗くした南王は先ほどと同じ問いを繰り返す。

「それを、本当にあの子が、東王陛下が承知したの？」

同じ問いなのに、今度は何故か答えかねた。東王宮を出る時の彼女の悲しげな笑みは、なぜか太祖のそれとよく似ていて、殊更に応えた。シンはただ、ああ、と頷いてだけみせた。

「なら、私にはそれを止めることはできないわね。貴方と、東王陛下が覚悟の上なら、私はそれが好い方へと向かうように祈るだけ。東王陛下には、何かあればこちらを頼るように、貴方から伝えて頂戴」

ため息交じりに、南王はそう言った。句芒、と朱雀が呼びかける。神獣としてより、友としての声音に近かった。

「御柱へ向かうがよかろ。天はすべてを正しく治める、きっと道を示してくれよう」

「……そうしよう。すまないな、朱明」

朱雀は首を振る。

「よい。なにより今は陽山の気が揺らいでおる、西へ行くに陽山越えの道は使えぬ」

「そうか。なら、ファンのこともある。一度、御柱に向かおう」

二者の頷きを受けて、シンは立ち上がった。

「助言、感謝する。遅くまで済まなかった」

「構わぬ、ぬしと余の仲だ、国にも関われば当然のことよ」

朱雀の応えに、シンは笑む。

「話せて良かった。朱明、南王、貴方らの益々の息災を願う。――では、失礼する」

踵を返し、シンは廊下へと続く扉を叩いた。外に誰もいないのを

確かめ、扉を押し開く。
「では、また明朝に」
神獣と王に静かに頭を下げ、シンは扉を閉めた。明かりも既に落とされた廊下を、部屋に向かって歩く。そういえば、都に着いたら連絡すると王と約束したのだったか。この件が終わったらまた繋ごう。御柱に向かうことになったと、伝えておかねば。

「青龍の癒(ゆ)の力は、心には届かぬものなのか」
閉まった扉を見つめて、朱雀は呟いた。
「余とてあの戦(いくさ)の後、大いに悔いた。だが、長き時を経てそれも癒える。だのに、句芒はまだ、否、今になって更に病んでいるように見える」
「朱明、貴方は東王の顔を見た事がある？」
ランファは傍らの神獣に問いかけた。あれは自分の中にある火王の記憶が勝手に脳裏に煌めくほどの驚きだった。首を横に振った朱雀に、ランファは答える。
「今の東王は東の太祖、木王(もくおう)に生き写しなのよ。きっとそれが余計に、彼の中の戦いを呼び起こしている」
そうか、と小さく応え、朱雀は深くうなだれた。
「ここしばらく色々なところで気の歪みが起こるの。西の凶荒(きょうこう)、陽山の火……」
朱雀はゆるゆるとかぶりを振る。
「天が全てを知っておられるなら、何故にこのようなことが続くのだ」
ランファはその鳥の朱の羽毛をそっと撫で、静かに応えた。
「それこそ、天のみぞ知ること。私たちはやれることをしましょう、そして、それがいつも最善であるように」

あけの音

明け鳥の声で目を覚ましたファンは、寝台の上でゆっくりと伸びをした。シンはまだ眠っている。外も薄暗く、東の空だけがうっすらと赤みを帯びているようだ。夜の間に冷えた空気が心地よかった。充分に眠れたようだ。

シンを起こさないように静かに寝台をおりて、さらにしっかりと体を伸ばす。息を整えながら、自分の内側へ意識を巡らせた。木々を揺らす風のような青の力も、体に熱を与える赤い力も、眠ったように静かだ。起きる気配もない。もう一度深く息を吸って、来た時のように力を揺り起そうとしたが、何も変わる様子はなかった。元より、手掛かりのないものだから、起こすにも何かきっかけ必要なのかもしれない。ファンは姿見の前まで行って、朱(あけ)の紐で髪を結った。

玻璃(はり)の張られた窓を開けて外の空気をいれると、寝汗をかいていた肌がひやりと風に撫でられた。鳥の声が少し近くなる。すると、それに交じって微かに、楽の音が聞こえてきた。外からのようだったが、町ほどには遠くない。竪琴のような、弾み流れる音だ。王宮で誰かが弾いているのだろう。今までにファンが聞いたことのないような澄んだ音色だった。

「綺麗な音だ……」

ほう、と息をつくと、後ろで身じろぐ音がした。

「ん、何だ……もう起きてたのか、ファン」

シンが寝台の上で上体を起こし、こちらへと視線を向ける。返事をして、ファンは寝台の方へと戻る。

「外から、何か綺麗な音が」

尋ねると、シンも外の音に意識を向ける。そして、しばらくしてシンは微笑して応えた。

「朱明だろう。あれはこの国の初代が持っていた竪琴の音だ」

「初代の……一万年も前の、ですか？」
「ああ、神器として太祖が残したんだ。相変わらず、良い音だな」
「はい、なんかこう、心が洗われるみたいな」
相槌を打って、シンが立ちあがる。額に眉まで覆うように孔雀藍の布を締めて、荷物を改めながら言う。
「昨日言っていた壁の外の集落にどのくらい病人がいたかわかるか？」
「正確な数はわからないですけど、見ただけでも三十人はいました。家の中で寝ている人もいると思います」
「そうか。なら、早めに出よう。朝の内ならそう人目にもつかないだろうし、羽根のことが外に漏れたら面倒だ」
外から聞こえていた琴の音が止むと、続いて開門を告げる鐘の音が響き渡った。朝焼けの空が薄紅に広がって、鳥の声と琴の音だけだった町に、人の動く音が徐々に混じっていく。
「朝餉（あさげ）を終えたら出発するぞ。支度を済ませておいてくれ」
ファンは頷き、まとめておいた荷を解いた。朱雀羽を忘れないようにしなければ。

集落

確認を兼ねて、と朝餉は南王に招かれた。南は採れるものが多いのだろう、食事すら色とりどりに見える。これこれが体にいい、薬効があると聞きながら食事をしてきたファンにとっては、見た目に華のある膳は新しかった。

その後、すぐに二人は僅かな荷だけをもって、壁の裂け目の方へ向かった。

「シャオに――友達に会えれば一番早いと思うんですけど……」

「その子は羽根のことについて知ってるのか？　もし知らないなら、身内から知らせてやったほうがいい、命のためとはいえ財を奪うようなものだからな、外の者から言われれば少なからず恨む」

「そうですね。……あの踊り子を恩人だと言ってましたから、知れば辛いと思います」

どこかで会うだろうか、と見回しながら歩いたが、外の集落に向かう道の間ではシャオの姿を見かけなかった。またどこかに花飾りを売りに行っているのだろう。壁の裂け目をくぐると、シンが表情を険しくした。

「ここまで酷いとは。……ファン、昨日話していたその子の父親のところへ案内してくれ、なるべく広く話を通せる者と話がしたい」

「はい！　確か、こっちのほうに」

布張りの家の続く中、昨日シャオに案内された道を辿る。その家が見えるところまで来ると、中から水桶（みずおけ）を抱えたシャオの父親が出てきた。額に浮かぶ汗は、この暑さのせいではないだろう。染めをやっているだろう腕は元の肌の色が解らぬほどに毒の色をしていた。

「おじさん！　おれです、昨日の――シャオの友達です！」

シャオの父親はこちらに振り返って、僅かにその表情を緩ませた。

「ああ、君か。そちらの方は？」

「この子の師で、シンという。南王陛下の命で、この集落の病人の

治癒にあたるよう言い付かってきた。病の深浅に関わらず、羽根に触れた者を集めて貰えないだろうか」

シャオの父はこちらに歩み寄って、深々と一礼した。

「ありがとうございます。私は、シャオファの父で、ダーシュと言います。……やはりあの羽根が毒ですか」

「ああ、間違いなく。南王もこの羽根については広く知られぬようにと計らってくださるそうだ。ここの人々には、速やかに治療を受けたうえで、毒羽根を全て処分していただきたい。ここの長の方に、そう話を通してもらえないか」

その言葉に、シャオの父、ダーシュは表情を険しくして応えた。

「ここに長は居りません。元より力なき民の集まり、この羽根のことについても意見が割れておるのです。ですが、南王様が取り計らってくださると言うならば、私が皆を説得いたしましょう。一日、一日待ってくださいませんか。明日には羽根を処分できるよう、支度を整えておきます」

対して、シンも厳しい顔をして、応える。

「しかし、病については一刻を争う。病人だけは今日中に見せて貰えないだろうか」

「ならば、そちらはすぐに話を回しましょう。うちを使ってください、狭いですがここのほぼ真ん中にあります、人は集めやすいでしょう」

「感謝する。それにはまず、ダーシュさん、貴方から治さなければ。ファン、病人を集めるのを手伝ってくれ。既に動けない者はこちらから向かう」

ダーシュの治療が終わるのを待って、ファンはダーシュについて家を出た。腕から完全に紫斑が消えると、彼はすっかりと調子を取り戻したようだった。

「そういえば、君に名前を聞いていなかった」

「ファンと言います。病気、治ってよかったですね」

「君のおかげだ。しかも、昨日はシャオが世話になったようだね、

ありがとう。礼を言うよ」
　ダーシュは嬉しそうに笑い、健康そうに変わった右手を差し出す。ファンもその手を取って、しっかりと握手した。彼とともに家々を見回っていると、重病人は多く広がっているが、大体が一つの家で一人に収まっているようだった。染めが難しかったせいだ、とダーシュは言った。その後、倒れる者が出て、広がらぬようにさらに他の者を遠ざけたのだ。
　歩いてしばらくして、ファンはシャオのことを思い出した。今日も社へ行っているのだろうか。
「おじさん、シャオは今日も社ですか？」
「ん？　シャオなら、いつも通り飾りを売りに行っているはずだよ。……そうか、社（やしろ）に通っていたのか、気にするなと言ってあるんだが」
「定まらないとすごく不安になるんです、おれもそうですから。だから、帰ったらシャオを励ましてやってください。きっと、助かると思うんです」
　そう言うと、ダーシュはわかった、と何度も頷いた。
「そういえば、あの子はあの羽根の踊り子を気に入っていたが……ちゃんと言い聞かせないといけないな」
　ダーシュが呟くのを、ファンは昨日のシャオの様子を思い出しながら聞いた。まだ踊り子がどこまで関係しているのかは知らないが、シャオはきっと少なからず傷つくだろう。
　集落全ての家を巡り、動けない者の治療が終わると、辺りは暮れかけていた。また陽山の向こうへと太陽が落ちていく。
「羽根の件、よろしく頼む」
「羽根を手放せない染め手も、今回の治療を思えば断れんでしょう。明日の朝までにどこかに穴を掘って集めておきます」
　ダーシュとはそこで別れたが、都の風水が為される前に、とファンとシンが王宮へ戻る頃になっても、シャオは集落に帰ってこなかった。

毒は踊る（1）

シャオファは辺りを見回しながら、分祀（ぶんし）を出た。昨日の子たちに会わないかどうか不安だった。ひとりでいるのを見つけられたら、また何かにつけて意地悪をされるだろう。ファンに会えればよかったのに。ファンがまた明日、と言って安心してしまったから、どこで会うか約束してなかった。ここにいれば会えるかと思っていたけれど、列に並んで見立てが終わっても、その姿はどこにも見当たらなかった。彼も素養が決まっていないと言ったけれど、もしかすると彼はそこまで焦っていないのかもしれない。彼はもう力を持っていたから。

力を貸してもらえるなんて知らなかった。素養が定まる前に旅をすることも、連れ出してくれる師がいることも、ああやって自分の意志をはっきり言えることも、全部がうらやましい。今の自分が言ったって、誰も耳を貸さない。聞いてくれたって馬鹿にされるだけだと思う。シャオファは朝から一つも減っていない花飾りを見て、ため息をついた。

もし、もう素養が定まっていたら？　もし壁の内側で生まれていたら？　考えるだけ無駄だとはわかっている。現実は何も変わらないから。でも、そのままを受け入れられるだけの、力が自分にはない。こんな現実、見ているだけでも辛いのに、夢を見る間も与えられない。

（そうだ、ジェンさんのところ……）

彼女の踊りを見に行こう。彼女の踊りは綺麗だ。でも、それだけじゃない。何か、彼女が持っている意志を感じる。この国の火のように激しい感情を。どうしたらあれだけの強さを持っていられるのだろう。そして、どうしたら見捨てられかけた私たちを助けようとする優しさをも持っていられるのだろう。

花籠（はなかご）を持ち直し、シャオファは酒場のある通りの方へと足を向け

た。もう何度も通っているから、陽の高さを見れば彼女の踊る時間がわかる。

「……なあ、聞いたか。あの踊り子、何でももうすぐやめるそうだぞ」

道行く人の声が耳に入って、シャオファは驚いてそちらを振り返った。その会話は気付かず道を歩いていってしまうから、追いかけるようにそっとその後についていく。

「ああ、聞いた。何でも別の夢が叶うからだそうだ、いい人でもいたのか」

「さぁなぁ。しっかし、いるとしたらうらやましいよ、あんな美人。王様は手が出せないけど、踊り子ならあるいは、ってな」

「ははは、おい、罰(ばち)あたりだぞ。そんなこと言う前に鏡見て来いってんだ――」

会話がただの笑い声になるまで聞いて、シャオファは急いで駆けだした。

そんな、まさか。彼女の踊りが見られなくなったら、自分はもう何を支えにしたらいいのだろう。私の声なんかはきっと届かないけれど、届いたところで何も変えられやしないけれど、伝えたい。いや、もう他に声が届いていなくたって、ジェンさんにだけでも、伝えないと。やめないで、と、ただそれだけ。

酒場に着くと、彼女がよく踊る曲が最後の一節が流れていた。少しでも見えれば、と体を滑り込ませて、窓の枠にしがみ付く。

白い肌にあの羽根を身につけて、彼女は舞う。最後の節はより優美に、大きく、艶(つや)やかに四肢を躍(おど)らせて、腕輪と足輪を鈴のように鳴らす。演奏が止まった後に残る飾りの音が心地よい余韻を残すのだ。シャオファはため息をついた。これがもう見られなくなってしまうなんて。踊りが終わって彼女が舞台から降りると、窓から見ていた客も散り始める。シャオファはそれでも彼女から目が離せなかった。どこへ行ったら、彼女に伝えられるだろう。じりじりとした焦りを感じながら、シャオファはまだ窓にしがみついていた。

ふと、彼女が舞台袖からこちらを見る。遠いけれども、確かにこちらと目があっている。——綺麗なひと。思わずこちらの顔が火照ってしまう。目があっている、と思うと心臓がどきどきして堪らなかった。彼女はやはりこちらをみて、微笑を投げかける。心臓がひと際、どきり、と鳴った。その後すぐに彼女は向こうを向いてしまったけれども、それでもまだどきどきが収まらなかった。

毒は踊る（2）

結局、伝えられなかった。でも、仕方のないことかもしれない。私は酒場にすら入っていけないから、声の届くような近くには寄られない。シャオファはためいきをついて、踵（きびす）を返した。陽がそろそろ暮れかけている。早く戻らないと、町の風水が掛ってしまったら、外に出られなくなってしまう。裏道を駆けていけば、まだ日暮れまで多少の余裕はある。

「待って」

つやのある声に呼びとめられて、シャオファは小道で後ろへ振り向いた。そして、目をみはった。あの踊り子その人が、こちらへ手を伸ばして声をかけている。その手の飾り環（わ）がしゃらしゃらと涼しい音を立てている。

「お嬢ちゃん、あの集落の子よね」

とっさに首を振ってしまって、しまった、と思う。何か言おうと思うほど、言葉に詰まってしまう。

「いいのよ、隠さなくても。頼みたいことがあるのよ、聞いてちょうだい」

おいで、と言われると、自然と足が出ていた。近くまで寄ると、何か香のような不思議な香りがした。

「急いで集落の人に伝えてほしいの」

ジェンさんはその表情を曇らせた。

「はい！　なんですか？」

「今すぐに、あの羽根を手放して頂戴」

「え、なんて……？」

聞きとれてはいたけれど、信じられなくて、呟くように問い返す。ジェンさんは悲しそうな顔をして、続けた。

「知らなかったの、毒があるなんて。そうでなければ……私、ひどいことを」

瞳を潤ませて、ジェンさんがこちらの肩に手を添えた。毒。そういえば、父さんはあの染めを始めてから病気に――。

「お願いよ、すぐに伝えて。お願い……」

紅のささされたその白い頬に涙が伝う。

「は、はい！　伝えます、私。今すぐに！」

そういうと、ジェンさんは指で涙を拭うと、ようやく安堵したように微笑んだ。

「ありがとう。――そうだわ、あなたにお守りを。私の思いが込めてあるの」

彼女は腕輪の中からひとつ、シャオファの右手に付けると、お願いね、と繰り返した。

「急ぎます、きっと伝えますから！　……だから」

彼女はこちらをじっと見る。

「踊り、やめないでください」

彼女は微笑む。

「――もし私の願いがかなったら、もう一度逢いましょう」

シャオファはしっかりと頷いて、急いで駆けだした。今度こそ急がないと、町の外に出られないだけじゃない、ジェンさんの思いを無にしてしまう。

日暮れ間近になると、赤い日に照らされて建物の影はぐっと伸びる。少女の姿を見送って、ジェンはふう、と息を突く。

「さあ、あなたの言うことはすべてやったわ」

よろしい、と声が影の中から、姿なく響く。そして、小道に陽が入らなくなると、その声は告げる。

「さあ、仕上げです。期待していますよ、ジェン」

火、熾きる

東の空が紺色に変わりつつあるのを見て、シャオは今までにないくらい足を急がせた。もう少しで集落へ続く壁の切れ目だと言うところで、日没と閉門を告げる鐘の音が鳴り始める。これが鳴り終えれば、風水は完全にかかり、壁に隙間があろうとも、見えない壁が外と内とを隔ててしまう。

前に帰るのが遅くなった時は中に閉じ込められてしまって、壁に寄り添って朝が来るのをじっと待った。夜露が降るのがわかって、震えながら早く陽が昇らないかと膝を抱えていたのだった。あの不安な夜はもう二度と過ごしたくない。

それに今は、一晩過ごすほどの時間もないのだ。朝になれば、自分の家だけじゃない、集落全体があの羽根を使って、染付を始めるだろう。お金よりも命が大事。ジェンさんだって、きっとそう思ったから私に伝えてくれたのだ。生きていくのにはお金がいるけど、あの集落のみんながまずあの場所で生きているのが大事。今までも、みんなで肩を寄せ合って生きてこれたのだから、また前の生活に戻るだけ。きっとみんなもわかってくれる。鐘の音が終わろうとしている、切れ目はもうすぐ、あと少し。

わき目も振らずに走ったから、横から人が出て来るのに気付かなかった。

「おい、ちょっと待て！」

誰かにぶつかってしまったらしい。すぐに謝って、シャオファは壁の切れ目に向かってまた駆けだす。が、すぐに相手に腕を取られて、引きとめられてしまった。

「すいません！　でも、急いでいるんです、私帰らないと――」

掴まれた右手を振り払おうとしたとき、相手の顔色が変わるのがわかった。恐怖の形相。腕を見てようやく、シャオはそのわけを知った。掴んだ相手の腕に、徐々に広がる紫斑。掴んだ男は悲鳴を上

げながら、シャオファの腕を振り払う。
「こいつ！　この娘だ、俺にうつしやがった！」
辺りに人が集まって、人だかりの円の中にシャオファは閉じ込められてしまった。最後の鐘の音が、人々のどよめきの中に呑まれて消えていく。シャオファは自分の手を見て、そんなはずはない、と首を振った。私は羽根には触れてない。それに、人にうつすほどなら、私が倒れていないとおかしい。
「違う……！」
この娘まさか、と誰ともなくシャオの素姓に気付いて、それを口にする。違う、そうじゃない、違わないだろうけれど、違う。
「外の奴らだ、奴らがこの病を広げてるんだ！」
鐘の余韻が消え、怒号が飛び始める。
「違う、違うの、私たちは――」
シャオファの声をかき消して、誰かの声が辺りに響いた。
「風水を解かせろ！　武器を持って壁の外へ！」
私の声はやはり届かない。涙が落ちた音が、自分にさえ聞こえなかったのだから。

夜の始まり

二人が王宮に帰り、事の次第を伝えると、南王はその労をねぎらった。夕餉（ゆうげ）まで部屋で休むように勧められ、二人は荷物を下ろし、息をついた。夕飯までのつなぎにと、出された果物をつまみながら、シンが尋ねる。

「羽根は落としてないか？」

「はい、大丈夫です。今日は身につけないでいましたから」

「それならいい。明日必要になるぞ、朝一番に行って焼いてしまおう」

ファンは頷き、荷物の中の羽根を確かめた。油紙にくるんだら燃えてしまう気がして、別の端切（はぎ）れに包んでおいたのだった。動いたりしたので、傷んでないか心配だったが、少しの破れもなく羽根はつやつやとしていた。

「シャオ、戻って来なかったな……」

無事に帰れていればいいのだけれど。そう思って窓の方を見やると、夕日の名残に残った赤みが西の空から消えるところだった。上の空は、街の明かりに照らされて他に比べて白く照らされている。それを眺めていると、寝台に腰かけていたシンが突然、何かに気付いたように立ち上がる。

「何か、焼けた臭いがしないか？　ファン」

「夕餉の匂いとかじゃなくてですか？」

「ああ。木や何かが焼ける臭いだ、火事か？」

シンも窓の方へやってきて、身を乗り出して町を見る。ファンも窓に腰かけるようにして、同じ方を見やって、同時に驚愕した。

町の向こう、あの集落のあたりで大きく火の手が上がっている。次いで、廊下の方から誰かがこちらへ駆けて来て、扉の前で足音は止まった。扉を叩く音は無く、緊張した声が張られる。

「東都よりの御客人は、御在室だろうか！」

「ああ！」
シンがそう答えて返すと、勢いよく扉が開き、慌てた様子の王の従者が一人立っていた。息を切らし、こちらを見て一礼する。
「お休みのところ失礼する。南王様が、至急玉座の方へお越しくださるようにとのこと！」
「何があった？」
「まだ混乱していて何も。とにかくお早くお越し願う！　我々も何が起こったのか分からぬのだ」
従者は再び一礼すると、また元来た方へと走っていってしまった。
二人は顔を見合わせ、頷く。
「行くぞ、ファン！」
シンが先に駆けだし、ファンは手にしていた朱雀羽根を急いで懐（ふところ）にしまいこむと、その後を追った。

王命

玉座の間には多くの衛士と従者たちが集まっていた。見てみるに、全員が獣人のようだ。玉座には南王が厳しい顔をして座っていて、集まった者から話を聞いていた。そして、それを聞き終わると皆を見回し、初めて会ったときのような口調で、話しはじめる。

「皆の者、聞け」

王の御前に控えて座した者達を前に、王は静かに立ち上がる。

「この状況、内々に事を進めるわけにいかなくなった。……この騒動は先ごろより流行った奇病に端を発するもの。それも、何者かが鴆（ちん）という毒鳥の羽根を、壁向こうの集落に持ちこんだことが始まりである」

南王は鴆の羽根を掲げて見せる。ざわ、と静かなどよめきが走り、南王は続ける。

「とはいえ、集落の者は毒があることすら知らず、貧するが故（ゆえ）に広げたのだ。また、美しき羽色、広がってしまったのはこの町においてはもはや詮無きこと。もとより、壁一枚とはいえ、集落と都の人々の間にはずっと不信不満が募ってきていたのだから」

扇で掌を打ち、南王は言う。

「そもそもが政の、王の怠業（たいぎょう）。ならば、この騒動に犠牲を出すわけにはいかぬ。都の内外問わず、彼らは私の民である」

それに、と王は再び皆を見回す。

「この件には――建国の魔の影が差しているようだ」

王の言葉に、ひと際大きく辺りがざわめく。

「この国に封じられた魔が蘇ったとの報があった。狂気を好む魔だ、騒動に乗じて現れるやもしれぬ。よって、各人、各々の獣人としての力を存分に奮い、護るために戦ってほしい。私とこの地を守るそなたらに、火の温かな加護があるように」

は、と了の意を告げる声があがり、南王は頷いた。ルーユウ、と

名前を呼ぶと、昨日シンを案内したあの衛士が前へ進み出る。
「そなたなら、夜闇に紛れてあの集落へ向かえるだろう。集落の者に、私の意を伝え、導くように」
「御意に。近衛の、王の護はどうなされます」
「王宮にいる王は死なぬ。朱雀様もいらっしゃる故、心配ない」
ならば、とその衛士はすぐに玉座の間を出て言った。続いて王はまた別の者の名前を呼ぶ。
「フェンジン。そなたは平時のように分祀の護と、そこへ逃げ込んだ者を守ってほしい」
朱雀印と麒麟印を並べ携えた男が、その命を受けて、すぐに場を立った。そして、残った者に南王は凛と声を張る。
「戦えるものはすぐに飛び、暴れている者を止めておくれ。そうでないものは、この騒ぎに惑い怯える民を保護するように。上から見ればわかるはず。――そなたたちも、私の民。重々気をつけるように」
衛士、文官、獣化できる者すべてが、一斉に玉座の間を出ていった。玉座の間には南王と、異国からの客であるシンとファンが残るだけだ。
「出せる兵はすべて出したわ。あとは、窮奇や鴆の獣人を探さなきゃ」
南王は力が抜けたように、玉座にすとん、と腰を下ろした。
「戦いとなると、駄目ね、頭が止まってしまう」
「まだどうなるかわからん、気を緩めるな、南王」
シンの言葉に、南王は静かに、そうね、と答えた。古代の記憶があっても、実際に戦った王など建国の王たち以外にはいないのだ。むしろ、臆して当然。
「朱明はどうしている？」
シンは辺りを見回し、その姿を探す。
「聖火のところで、もう一度風水を張り直してるはず」
「駄目だ」

ゆるゆるとかぶりをふりながら、朱明が人の姿でやってきた。
「どうも普通に解いたようではないの。町にある羅盤（らばん）そのものを壊したのかもしれぬ」
「それでは、今外から獣でも妖獣でもくればひとたまりもないということか」
朱明は黙って頷いた。国中から集めれば、獣人はそれなりに集まるだろう、しかし、今この急場をしのぐためには絶対的に手が足りない。

軍なき

建国以後、中つ国の四方の国には軍というものが存在しない。それは、獄の者達を封じた後、天が恒久（こうきゅう）の平和を約束したからだ。攻めることもなければ、攻められることもない。獣人で作られた太古の軍も、その通りに平和になると無用のものとなり、それに伴って獣人になる者も減っていったのだ。

「ならば、俺も手を貸そう。あの集落には一度行っているから、向こうの者も俺がわかるはずだ」

「有り難いが、句芒（こうぼう）。確かに手が足りぬ、足りぬが、東国の守護をここで戦わせるわけにはいかぬ。ぬしが出るならば、まず余が出る」

朱明の言葉に、シンはすぐさま反論する。

「だが、朱明。この場において、貴公と王は将だ、将が兵のように前に出て、大事あればそれこそ崩れるぞ」

「しかし……」

「窮奇（きゅうき）が来ていて、人を殺せる毒を持つ者がいる。それだけの手札を持っていて、何故、大きく動かぬのか。それは、こちらから手を出すのを待っているのだろう。この国の王や神獣が王宮を離れ、護りが無くなるのを待っているのだ。何より、窮奇は力づくで打ってこない代わりに、一番痛いところを突いてくる奴。易々（やすやす）と手を出すな、朱明」

朱明はただ黙りこみ、その細い腕を胸の前で組んだ。じっとそれを聞いていた南王が口を開きかけた時、玉座の間の扉が勢いよく開く。先ほど一斉に出ていった中の獣人の一人、文官のようだった。

「陛下！」

「どうした」

朱明はさっと玉座の裏に隠れ、シンとファンは脇に下がる。

「集落に向かったルーユウ殿より、言伝を頼まれました」

「ルーユウが？　申してみよ」

はい、とその文官は畏まり、一度口をつぐむと静かに、先ほどとは別の声で話し始めた。あのルーユウと呼ばれた近衛の声だった。

「集落の人々は集まり、病と羽根を盾に耐えております。怪我人はいますが、死者はおりません。が、それも時間の問題、荒ぶる町人を止めるため、一つお願いがございます」

そこまでしゃべると、その文官はどうされます、と元の声で尋ねた。

「よい、続けよ」

南王が促し、その男は続きをしゃべる。

「この場を守るため、案がございます。報告は必ずいたしますので、今この場の御無礼は許されよ」

とのことでございます、と文官は元の声で締めた。

「考えるまでもない。無礼で王は死なぬ、とだけ伝えよ」

文官はさっと頭を下げ、了の意を示した。そして、再び、顔を上げると続けた。

「あと、もう一つ、ルーユウ殿からなのですが」

「なんだ？」

「集落の者が、朝から出ている娘が一人、戻らないままでいる、と申しているそうですが……」

そこまで話した時、静かに隣で俯いていたファンがさっと顔を上げるのが、シンにはわかった。止める間もなく、走りだしたその腕を掴む前に、ファンは玉座の間の扉を押していた。

「待て、ファン！」

文官は何ごとかと驚いた顔をしていたが、南王にルーユウへの言葉は急ぎ伝えよ、と言われ、立ち上がる。もしあの少年見たら、戻るように言います、と告げて、彼もすぐに出て言った。

「句芒！」

「ああ、すぐ追う！　窮奇はファンの事を知っている。ファンがもし戻ったら、そちらに任せる、朱明、貴公の元を離れぬよう言ってくれ」

シンも続いて、玉座の間を飛び出し、すぐさま足を龍化させた。
ただ走っていったのなら、すぐに追いつくはずだ。

分岐

初めに異変に気付いたのは、妻だった。娘を迎えに出ていた妻が血相を変えて帰ってきて、都の人々の様子がおかしいと告げた。その言葉に、集落の男たちで都の壁まで出て見ると、風水の薄く強靭（きょうじん）な壁を武器で打ち続ける、町人達が見えた。その怒りの形相に自分も皆も、すぐに何が起こったのかをおおよそ理解したのだった。恐れていたことが起こってしまった。すぐに女子供に支度をさせて集落の一番奥に集め、若い者達にそこを守らせた。その一方で男たちを集め、事態の把握を始めたのだった。まず上がったのは、昼間の客人への疑惑だった。

「やはり、あの男の仕業ではないのか」

そうはっきりと口にしたのは、隣家の主人だった。

「何を言う！　羽根を持ち込んだのは踊り子だ、それどころか彼は我らすべてを治療してくれたではないか」

そう答えると、それに応じて同じく治療を受けた者が言う。

「それに王の御印を持っていたじゃないか。そんな立場の人が、こんな騒ぎを起こすだろうかね」

それでも、頷く顔は少なかった。

「王とて、我らを守るとは限らん。この集落は何代もの王を見送ったというのに、何一つ変わってやしない」

「むしろ、現王はこれを機にここを失くしてしまうつもりなのかもしれんぞ。下手をすると、あの羽根の出所すら……」

そこまで話すと、年寄りの声がそれを咎めた。

「確かに、我々は王の庇護（ひご）をうけずに今までやってきたが、かといって王への不信は罪だぞ」

ぽつりぽつりと交わされていた会話は次第に、相談になり、議論になり、最後には喧嘩のようになり始めた。ダーシュはそれらをじっと黙って聞きながら、壁の向こうにかすか屋根の見える王宮を見

やった。確かに、王を信じろ、と言われたとして、それをすぐに承知できる心は自分にもない。壁の向こうから、ひと際大きくざわめきが聞こえて、すぐに会話の中に視線を戻して、口を開いた。

「この事態が王の知るところであろうとなかろうと、今はそれについてとやかく言うべきではない。万が一、都の風水が切れた時、我々はどうするかだ」

辺りが一度、しんと静まり、唸(うな)るような声だけが残る。

「我々は一度、病に死する覚悟を決めた。だが、それは我々が死んでも他の者がここで生きていけると踏んだからだ。しかし、この事態ではそうもいくまい」

そう言うと、数人から同意の声が聞こえた。壁の方から様子見に行かせていた若者が戻ってきて、やはり病のことだ、と告げる。隣人は不安そうにこちらを見つめる。

「どうする、ダーシュ。このままでは集落の者みな、殺されてしまうぞ。今や誰一人病んでいないと言っても、信じるはずもない」

「この地を離れなければならんか」

「ここを離れたところで、どこへ行けというんだ」

また論議が始まり、だんだんとそれは諍(いさか)いじみて来る。が、それを掻き消すような声が壁の方から聞こえてくると、瞬間的にそれは静かになった。都の壁を抜けて、火矢が地面に刺さり、塗られた油を伝って、地面を焦がす。都の方から、あるはずの風水壁を越えて火矢が飛んできた。雨をしのぐために油をぬった天幕はすぐに燃え広がり、集落の殆どに火が回るまで時間はかからなかった。もう、時間は無い。

覚悟

「死ぬよりはましだ、死にたくないものは女子供を連れて、都を離れろ」

「ダーシュ！　しかし、そう簡単にここを手放しても、我々には先などないぞ」

都人の声がだんだんと近づいてくる。鬨（とき）の声にしては、それは狂気に満ちていた。ダーシュは瞬間的に腕を見つめる。ほんの今朝まではこの腕はその場で腐り落ちようかと言うほど、死に満ちていた。心を埋めるほどの死だ。そう、昨日までなど、死すら望ましく思えていたのに。何の他意もなく向けられた、あの言葉に自分は救われていたのだ。

「我々に死ぬなと言ってくれた者がいるのだ、道はある」

そして、家に駆けこむと、染めに使っていた毒羽根の入っていた壺を外に運び出す。

「何をする気だダーシュ！　そんなものを出しては」

「真偽がどうあれ、町人は我らを病の淵源（えんげん）だと思っているのだろう。ならば、もう隠すことに意味はない」

しかし、と戸惑う声をかき消すように話し続ける。

「とはいえ、ただでこの地から離れはせん。ここの者を守ると言ってくれた者がいる。王の顔すら知らぬ私も、顔を合わせ、話した者ならば信じられる。私はその者に賭けたい」

飛んでくる火矢が増え、辺りは瞬く間に炎に包まれる。

「私はここに残り、その者が来るのを待つ。その間に、他の者は逃げてくれ。ここが守られていれば、ここに戻れる。守られていなければ、新たな土地を皆で探せばいい」

急げ！　と声を張ると、少しずつ皆が逃げ始める。同時に、怒り狂う町人がこの場を見つけて、迫ってきた。

「それに私は娘を待たねばならない。風水が切れていれば、戻って

くるだろうから」

ダーシュは一つ、息をついて心を決めた。これは問いだ。おそらく娘が抱えていた問いであって、集落の皆が抱えていた闇だ。

――我々は、本当に見捨てられた民なのか。何者にも求められず、求めることも許されぬ民なのか。都の人間と異なる、人ならぬ民なのか。きっとこの身が、そしてこの先起こることが我々への答えになるのだ。

武器を持った町人がこちらに気付いたのを見て、ダーシュは袖をまくりあげた。そして、声を張る。

「止まれ、町人よ！」

そして、勢いよく壺の中に手を差し入れた。壺の底にたまっていた羽根を掴みあげ、わかるように掲げて見せる。

「これが見えるか！　これこそが、病の原因となりし毒だ！　近づけば病むぞ、被れば、明日の朝日を拝むことなく、苦痛のうちに死ぬぞ！」

町人の足が止まり、聞きとれぬほどの怒号が響きわたる。片方の手で毒液をすくい、振りまいて見せると、町人は互いを押しのけるようにして後ろに下がった。羽根から希釈のない毒液が垂れ、被った腕を見る間に紫色に染める。毒を繰り返し浴びてきた体は、再びの毒をよく回した。吐き気と眩暈がたちどころに押し寄せる。堪え切れず、その場で嘔吐する。顔を上げると、様々な負の感情を混ぜた顔がいくつもいくつもこちらを見返していた。きっと自分も昨日まで同じような目をしていたはずなのだ。

これは問いだ。彼らと我々の間に、真の恨みがどれだけあったのか。何がこの間を隔てているのか。こうして顔を合わせた者同士、何の違いがあるというのか。

骨にしみるような痛みが、両腕に走る。ダーシュは壺を支えに立ち、口を拭うとさらに声を張り上げた。

「下がれ下がれ！　下がらねば、この苦しみをその身で味わうことになるぞ！」

近づけぬ、と察した向こうから、石が投げられる。石が体を打ち、頭をかすめて、なおも飛んでくる。視界が霞み、飛んでくる石さえまともに見えなくなった時、後ろから声が張られた。

「下がれ、町人！　それ以上勝手な真似をするなら、毒をもってこちらからうって出るぞ！」

幾人かの集落の男たちが戻ってきたようだった。柄杓を手に、壺の中から毒液を汲みあげて、吼えている。肩を叩かれて、振り返ると隣家の主人だった。

「ダーシュ。町の者は信じられぬが、ここで苦楽を共にした仲間を俺たちは信じている。お前が言う助けがくるまで、俺達もここに残ろう」

声がかすれて出なかったが、必要なかった。ダーシュは額の汗を拭い、ただ頷いた。

夜鴉

王の命を受け、ルーユウはその黒い翼を広げて、火の手の上がる集落の方へと向かった。本来ならば、このような時は王の傍を離れてはいけない。近衛とはそういうものだ。だが、その王が護衛を断って、こちらへ送ったのだ。民を護れと、自分に命じた。

それでもやはり、不安な気持ちになるのは、王が魔の者の話をしたからだろうか。いや、違う。自分より民を、という王だからこそ不安なのだ。民がいてこその王だと、王は日ごろ繰り返していたが、王はただ一人しかいないのだ。どんな命にも代わりは無いが、王と言う存在の代わりはそれこそ数十年に一度出るかどうかなのだ。王の代わりはいない。頭が取れれば体も死ぬように、王がいなくなれば国は間もなく倒れる。日ごろの言い分からすれば、何かあればあのお方は出てきてしまうだろう。だから、心配なのだ。大事があっては困る。やはり、意見してでも残るべきだったのか。

とはいえ、王の意を伝えよ、と陛下は言った。まずはそれを伝えねばならない。今、自分に任された仕事はそれだ。しかし、伝えたところで、あの集落の者はそれを必要としているのだろうか。王への不満を抱えていてもおかしくはない。王の言葉を受ける者がいるのだろうか。当たり前のように庇護（ひご）を受けてきた我々には、それを推し量ることはできない。

夜と同じ色の翼をはばたかせ、風水の無くなった城壁を飛び越える。壁に殺到する人々。すでに一部が壁を乗り越え、集落に松明を持って押し寄せていた。集落は火の海だった。夜ではさすがに遠くまでは見通せないが、都を離れていく明かりがいくつか見える。集落の者達だろうか。しかし、逃げているならば、集落に集まる人だかりに説明がつかない。ルーユウは一度それを飛び越してから、都の人々に向かう形で集落の中に降り立った。

「誰だ！　都の人間か？」

誰何（すいか）の声が聞こえて、ルーユウは獣化を解く。身なりを見るに、集落の者のようだった。ルーユウは答える。腕に巻いた朱の布を示してそれに答える。

「南王の近衛を務める者だ。こちらの状況を確かめに来た」

「王府の……？」

見ると、集落の男たちが都の人々と睨みあいを続けていた。手に柄杓（ひしゃく）を持ち、大きな壺を盾に、武器を持つ町人と対面している。あの壺の中身が、王が言っていた病の元凶たる毒なのだろう。応対した男が、睨みあいの場に向かって、誰かを呼ぶ。そして、しばらくしてその男に助けられながら、一人の男がこちらにやってきた。

「王府からの使者がきたと聞いたのだが」

「鴉（からす）の昇化で、ルーユウと言う。この場の状況を確かめ、集落の者に王意を伝えるように、言い付かってきた。何故、お前たちは逃げなかったのだ？」

男は失礼、といって、その場に崩れるように座り込む。そして、憔悴しきった表情で、こちらを見あげて言った。

「我々を護ってくれると、死ぬなと言った者がいたからだ。彼らがそう言ってくれるのなら、この火が収まるまでここに留まり、この毒と向き合う義務がある。だから、すべてに見捨てられた我々を護ると言ってくれたその者が、ここに再び現れるのを待っている」

「その者が現れなければどうする。毒を広げたのは事実、町人の怒りは当然だろう」

ルーユウは問い返す。しかし、その男は僅かに笑みを浮かべて、それに応えた。

「現れなければ、やはり我々は見捨てられた民だったということだ。これで死に、この場を追われようとも、それが我々に対する罰だ。それには死で償うか、生きて償うかの違いしかない。我々は元より死で償うつもりだったのだ、何も変わらない」

しかし、と男は言葉を止める。そして、一つ息をついて、答える。

「しかし、我々に生きろと言ってくれる者がいるならば。我々にも

人と同じ価値を認めてくれる者がいるならば、我々は生きてこの罪に立ち向かわなければならない。そして、この地の民として、精一杯に生きなければならない。我らを護ると言ってくれた者を信じ、それに報いなければいけない」

男はそこまで行って咳きこんだ。飛んできた火矢が傍らの家を燃やし、男の姿を照らし出す。ルーユウはそれを見て、息を飲んだ。

「その腕……！　毒か！」

「せっかく東国の御仁が治してくれたのだが、町人を止めるにはこうするのが一番だったのだ。何より、先ほどの誓いに対して私には覚悟が必要だった。私の生死如何が、我々の求めてきた問いと答えそのものになる」

額の汗が頬を伝い、顎（あご）から地面へ滴り落ちる。ルーユウはそれをじっと見つめ、王の言葉を頭の中で反芻する。そして、理解した。この現状を知れば、王は間違いなく、この場に出ようとするだろう。しかし、王は王宮を離れてはならない。だが、彼らに自分の言葉を伝えなければならない。だから、自分にそれを任せてくださったのだ。自らの代わりにと、自分をここに送ったのだ。他でもなく、自分に。男は言う。

「――現状と、我々の思いはこの通りだ。南王陛下はなんとおっしゃっていたのだろうか。お聞かせ願いたい」

「陛下はただ一言、彼らは私の民だ、とおっしゃられた。この度の争いに内外の区別なく、すべて南王府の民として護るよう私は命じられた」

男はそれを聞いて、はっと顔を上げるとすぐに俯いた。

「ならば、我々は民として、人として、彼らと同じように生きてもよいのだろうか」

男は再び繰り返し、しばらくして、良かった、と一言、落涙した。

ルーユウは心を決めた。そして、喉を押さえ、鴉の声で空に向かって鳴く。同じような声が遠くから返るのを聞いて、ルーユウは頷いた。

「お前たち――いや、失礼した。貴公らの言葉は私から確かに王に届けよう。そして、私は南王府の獣人として、貴公らを護ろう。少し待ってくれ」

「ありがとうございます。……あの、都の中に、娘が一人でいるのをみませんでしたか。赤い服を着ていたのですが」

首を振ると、男は頭を垂れた。

「私の娘が朝から戻らぬのです、この集落の娘ですからもしや、と」

しばらくする鸚鵡（おうむ）の獣人である文官が、都の中の方から飛んできて降り立った。そして、王に言伝を頼み、それが返るのを再び待った。

「息女のことも伝えるよう頼んでおいた。――さて、これらか私の言うことは、黙って聞いていて欲しい。問われてもこちらに合わせるように。たとえ事実と違っても」

ルーユウは腕の朱布を外し、内側に刺繍された南王印を見えるように、身につける。帯びていた剣を鞘ごと外して持つと、町人と集落の者の間、町人に対するように立ち、刀を杖のように中央に据える。

「武器を下ろせ！　眼前の、王の御印が見えぬか！」

辺りに響き渡る声で、ルーユウは吠えた。あまりの音量に、ひるんだ町人は石を投げたりしていた手を止め、ルーユウに視線を映す。

「何故に、この集落の者に、そのように乱暴をはたらくのか！　否、答えなど知っている。死に至る病を都に流行らせたのが、彼らだと言うのだろう」

頷く顔がいくつか見え、ルーユウは続ける。

「誰か、その真偽を確かめた者がいるのか！」

怒号の飛んでいた辺りが、瞬間的に静まる。追って微かにざわめきが聞こえて、声が二つ三つ返る。

「この集落の人間が病をうつしたのを見た者がいるぞ！」

そうだそうだ、とそれを押す声が聞こえる。ルーユウは頷き、再び問う。

「ならば、誰かこの病の原因を知っていた者はいるか？」

またも辺りは水を打ったように静かになり、今度は返る声がなかった。

「聞け！　今回の奇病にいち早く気付き、その原因を突き止めたのがこの集落の者だ。しかし、広くそれを知らせれば混乱になると危ぶんだ陛下が、ここの者たちに病の原因を集めるように言ったのだ。ここの者は都を救うために、危険を顧みず毒を集めていたのだぞ」

町人の中にどよめきが広がり、それぞれが向かい合わせる顔が増えた。

「それでもまだここの集落を襲おうというのなら、いいだろう。善なる民を護るため、私が相手になる。前へ進み出るがいい」

武器を下ろす者が出始めたのを見て、ルーユウは続けた。

「詳しい話は追って王府から通達が出よう。この場は下がり、都の中に戻れ。風水が切れているのだ、獣が出ぬとも限らんぞ」

慌てた様子の町人が城壁の方へとそれぞれ足を向ける。帰っていく町人達をみて、集落の男たちがルーユウのもとへと駆け寄る。

「ありがとうございます、しかし、あのようなことで、町人は信じるでしょうか」

不安げな男たちに、さらり、とルーユウは返す。

「あのような嘘、今夜持てばいいくらいだろう。しかし、今はこの場が収まればいいのだ。正気でない者に、真実を言っても伝わらぬ。何、陛下の御名を出したことならば、私が償えばいい。責務を為すための罰なら、いくらでも受けよう。――貴公らと同じだ」

ありがとうございます、と男たちは頭を下げる。ルーユウは剣を再び腰に挿すと、息をついた。今夜はここに留まっているべきか。戻ってくる者がいても厄介だ。燃え残った木箱に腰を下ろし、陛下がいるであろう王宮の方を見やった。彼らが言う者とはおそらく、あの東都からの客人だろう。何の気負いもなく、朱雀の間に入っていった人間だ、正体はおおよそわかっている。

ふと、夜空が揺れた気がして、ルーユウは目を凝らした。こちらを見返す獣の目。それはすぐに闇に溶け、壁の向こうへ戻ったはずの町人たちの中から、狂気に満ちた声があがる。それは空気を震わし、ルーユウの背筋を強張らせるような暗い気を含んでいた。

「まさか、魔の者……」

今度は町の中から、剣戟が聞こえてきた。その狂気はもはや相手を選んでいないのだ。空へ飛べば、その正体もわかるだろう。しかし、足が、翼が、押しつけられたように動かないのだった。そして、

それが恐怖によるものだとわかったとき、ルーユウは頭を振って、呟いた。

「このような時にこそ、私は動かねばならぬのに。陛下――」

暗渠へ

ファンは衛士の横を通り抜けて、集落に向かって町へ飛び出した。戻らない娘とはきっとシャオの事だ。きっとこの騒ぎに巻き込まれたに違いない。風水が切れても戻らないということは、その上に何かあったのだ。あの羽根を身に着けていた踊り子がこの騒ぎに何らかの関係を持っているとしたら、今シャオはきっと良くないことに巻き込まれている、そんな気がしてやまなかった。シャオはあの踊り子に心酔していたから。何度も、あの踊り子を見に行ったなら、向こうがシャオに気付いていた可能性がある。どう転んでも、シャオは傷つくだろう。何と声をかけるかはわからないけれど、早く見つけてあげないといけない。

龍化できればもっと早く走れるとは思うが、気持ちばかりが急いて、足がそれに追いついていない。それでも、精一杯足を急がせた。師匠にはきっと後で叱られるだろう。部屋を出る時に、師匠が止めるのはちゃんと聞こえていた。でも、止まるわけにはいかなかった。あの状況を見ていれば、シャオを探すための手をさく余裕がないのはわかる。きっと騒ぎが収まってくるまで他の人は動けないだろう。自分がいかないと。それに、もし逃げているのなら、居る場所はなんとなくわかる。だから、どうしても自分がいかなければいけないような、そんな気がしたのだ。

町は混乱していた。荷物を持って右往左往している人や、武器をとって集落の方へ向かう人、集落の方から逃げて来る人。それぞれの方向へ向かう人々はあちこちでぶつかり、転び、怒声が飛び、悲鳴が上がり、大通りはとても通れるような状況じゃなかった。集落の方の空が火で赤く照らされている。ファンは足を止め、辺りを見回した。小路（こうじ）の方なら通れるかもしれない。

踵（きびす）を返し、暗い小路に向かって駆けだした。走り抜けられない大（お）路（じ）よりもこちらの方がきっと早いだろう。暗い小路を、時々飛び出

してくる人を避けながら進む。

「急がないと……！」

いくつか角を曲がって、あの麒麟印が見えようかというとき、急に足元がぬかるんだ。水たまりを踏んだように、飛沫が跳ねる。ファンは驚いて、足元を見る。――ただの水じゃない。一切の光を返さぬ、滔々と暗い黒い澱み。突っ込んでしまった左足から、沼にはまったときのようにずぶずぶと体がその中に呑みこまれていく。ファンは前のめりになって、それから這い出そうともがいた。

「誰か！」

叫んだが、小路の間を響いただけでファンの声は大路の雑踏に掻き消されてしまった。そうこうしている間に、黒い水たまりは波打ちながら腹の下から胸の方へと次第に広がって、とうとうファンが手をついていたところまで黒い沼になる。ファンは這い出ようとかけた力の勢いで、その中へ呑みこまれていった。

その遥か上で、翼のある黒豹が羽音もなく羽ばたいた。黒豹――窮奇は一部始終を眺めて満足気に微笑んだ。そして、王宮の入り口から出て来る龍の男を見つけて、よりその笑みを深めたのだった。

南の禍霊（2）

「どこだ！　ファン！」

人混みを抜けながら、シンは叫んだ。町は混迷を極めていた。怪我をしている者も多い。油や生木や、獣の皮の焼ける臭いが町のはずれからここまで届いている。それに混ざる微かな血の臭いを振り払うように、シンは頭を振った。あの時代の風によく似た臭い。

「……嫌な臭いだ」

少しでも静かなところを探して、もう一度声を張る。ファンはおそらく集落に向かったはずだ。ならば、すぐにでも追いつくはずなのだが。

「ファン！　いたら返事をしろ！」

くす、と笑い声が聞こえた気がして、シンは辺りを見回す。人々を包む混乱と狂気に交じる、心地悪い気配。背中を這うようなじっとりとした、不快。間違いなく、いる。見あげると、夜空の中に、星とは違う小さな光がこちらを見返した。

「窮奇（きゅうき）！」

風を切る音とともに、黒豹がシンの目の前に降り立つ。羽根を一つ羽ばたかせ、窮奇は人の姿をとる。窮奇はその端整な顔に不敵な笑みを浮かべた。

「久しぶりですね、青龍。あの大戦以来……いや、この間も会いましたか」

「――狙いは何だ」

手足に気を巡らせ、龍化させながらシンは問う。

「挨拶も出来ないとは、東の神獣様は相変わらず無作法でいらっしゃる」

くすくすと笑いながら、窮奇はこちらの様子を楽しむかのように眺めている。左手の甲には、檮杌（とうこつ）？の脇腹にあったものと同じ刺青（いれずみ）が見える。蚩尤（しゆう）の眷族（けんぞく）を示す印だ。窮奇は言う。

「目的など、知れた事でしょうに。あのお馬鹿さんがやり損ねた仕事が回ってきただけのこと」
「やはり太極か。ファンはどこだ、言え。言わねば」
「殺しますか？　あの時のように」
その言葉に、びくり、と体が震える。屋外で鳴る風のように、何かが一枚隔てたところで、ざわついているような感覚。大戦の時の記憶か。あの時――？　こちらの動作が止まるのを見て、窮奇はさも面白そうに、笑みを深めた。
「忘れてしまったのですか？　これは面白い」
記憶を手繰(たぐ)ろうとして、シンははっとしてそれを止めた。謀略と幻惑は窮奇の得意だったではないか。のせられれば、窮奇の良いように心は揺らぐ。町の狂気もおそらく窮奇の仕業だろう。シンは窮奇を睨み据える。
「そうだな、まったくおかしな話だ。血の穢れを被った獣が神獣などになる前に、鎖が解けた時にでも、お前らなど喰い殺しておけばよかった」
地の底に繋がれていたあの久遠の時に、積もった恨みのそのままに。ざわざわと波立つ心情と気を抑えつつ、シンは再び問う。
「もう一度だけ訊く。ファンはどこだ、窮奇！　答えろ！」
「おお怖い。そう凶暴でなければあの時だって放っておいたのですけどね。太極はこの街にいますよ。彼が探していた女の子のところに送ってあげましたから」
そう言って、窮奇は自分の足元に黒い澱(よど)みを出現させる。
「今頃会っているころでしょうね、その娘のお気に入りの踊り子とも。……ああ、心配せずとも、太極を痛めたりはしませんよ。ちゃんと彼女には言い聞かせてあります」
ファンの言っていた踊り子か。あの集落に鴆(ちん)の羽根をもたらした者だろう。そして、おそらく鴆の獣人。
「鴆などを憑かせるとは。あのような強い力を与えれば、元の身が持たぬぞ！」

「それは、素養の違うものをつけた時だけですよ、知っているでしょう？」

「素養のある者に力を与えたのか。しかし……！」

四方への礼を無しに力を与えれば、素養が揃おうとも獣堕のように心を喰われるのが関の山だ。よほどの気力がなければ耐えられまい。窮奇はただにやりと笑み、足元の澱みを波立たせた。

「さて。僕はまた待つことにしますよ。太極がこちらの要求に承諾してくれるまで。ああ、そうだ。町の狂気はもう少し煽っておきましょうか」

暗い気を含んだ風が窮奇の周りで渦巻く。町に響いていた怒号と悲鳴がひと際大きくなり、窮奇は足首まで澱みに沈んだ。舌打ちをして、シンは窮奇の方へ振りかぶる。窮奇は足元の黒い澱みにとぷんと沈んで、少し離れたところにまた澱みを生じさせて浮かび上がる。

「戦うのは苦手なのですよ。君がひどく痛めつけた彼とは違って、僕は非力ですから」

手の甲を翻し、窮奇は小路全体に澱みを生じさせる。シンは龍化した足で、大路の方へと飛び退き、吼える。

「お前たちは、今更何をするつもりだ！」

「聞いてばかりいないで、少しは自分で考えたらどうです？　時間はたくさんあったでしょう」

再び、窮奇は澱みに沈み、声だけがそこに残る。

「忘却さえ許されない、長い長い時間が」

小路の澱みは残響とともに消え、血とものの焼ける臭いばかりが強くなる。辺りから聞こえてくる羽音は、南王の臣下の者達のものだ。この狂気は、窮奇をどうにかしなければ晴れないだろう。そして、奴は、このまま目論見通りに進めば、もう姿を現さないつもりだ。早くファンを見つけ出さねば。

窮奇のことだ、きっとファンの心を屈させるために、まだ何か仕掛けているのだろう。集落の娘を含めて、向こうの手は多い。

「俺は馬鹿か」

気付けば、もう既に良いように足止めされ、時間を喰わされている。ぎり、と歯噛みして、シンは屋根の上へと蹴上がる。飛びまわっていた獣人を見つけ、状況を聞く。やはり、芳しくない。暴動を止めに入っている衛士、武官も、人の保護にあたっている文官も、翼があればこそ間に合っているような状態だ。いずれにせよ、時間は無い。

空から見つけられぬということは、屋内か。だが、見当なしに探るにはこの都は広すぎる。ファンが青龍の力を使えば、少しはわかるだろうが、それに期待していては間に合わなくなる。

「心当たりがあればいいんだが……！」

先に、集落の方へ。もはや道など通っている余裕はない。シンは屋根の上をまっすぐ、混乱を極める集落の方へ駆けた。

真実

黒い水の中から這い上がると、そこは元の小路ではなかった。浮かび上がったところは板間で、どうやら屋内のようだった。黒い水を飲んでしまった気がして、ファンは咳きこんだ。

「ファン！」

顔をあげると、シャオが心配そうにこちらを覗きこんでいた。ファンは急いで起き上がり、その様子を確かめる。

「シャオ！　無事だったの？」

「うん、ジェンさんが助けてくれて……」

ファンはシャオの後ろの気配に気がついて、そちらを見やる。夜に紛れる黒色、そして、微かに返る緑色の光。あの羽根と同じ、悪意の潜む色。

「あなたが、シャオちゃんのお友達なのね」

鈴を振るような声がこちらに返り、ファンは体を強張らせた。その声の主は小さな灯りをもって、傍らの小さな篝籠に火種を移した。火はすぐに大きくなり、辺りを照らした。踊り子はこちらを見て、優美に微笑む。美しいのに、空恐ろしい笑みだった。ファンは冷や汗が滲むのを感じた。

「ねぇ、ファン、どうしよう。この暴動、私のせいなの。あの羽根、毒があるんだって。集落のみんなは、無事なのかな。どうしよう、早く伝えないと……」

シャオが涙声で言う。それでも、ファンは踊り子の方から目が離せなかった。火に照らされたその顔は、南王によく似て、しかし、南王の持つ快活な美しさとはまた違うものを持っていた。見れば、口元に一つほくろがある。間違いなく。

「集落は無事だよ、シャオ。王宮の人が言ってた。それに」

ファンは踊り子を睨む。

「違う。この暴動はシャオのせいなんかじゃない。仕組まれてたん

だ、みんなは利用されたんだよ」
「え……？」
シャオがこちらの顔と踊り子の顔を見比べて、困惑の表情を浮かべた。
「あんたが鴆の獣人だったんだ。毒と知ってて、あの羽根を渡したんだろう？」
踊り子は微かに表情を歪めて、小さくため息をつく。
「それが、どうしたというの？」
シャオの目が見開いて、踊り子を見つめる。それに一瞥もなく、踊り子は続ける。
「あの集落にはお金が入って、迫害していた都の人々にはそれ相応の報いを与えられた。それに、あなた達が騒ぎ立てたりしなければ、ばれもせずに、今こうなることもなかったわ。私はあの集落のことを思ってやったのに、それを台無しにしたのはあなた達」
「毒を渡せば集落の人達だって死んじゃうだろ！　それに、集落の人達は都の人達に復讐しようなんてちっとも思っちゃいなかった。毒を広めた事を知って、後悔してた。死のうとしてた！」
「なら、それでいいじゃない。あのまま惨めに生きるよりはいいでしょ」
踊り子は羽根のついた扇で口元を隠し、さも鬱陶しげにそう言った。シャオファはその細い肩を震わせて、呟くように問う。
「どういうこと？　ジェンさんもファンもみんな……あの羽根に毒があるってはじめから知ってたの？　ジェンさん、私たちを助けたいって、そう言って……」
シャオの目から涙がこぼれおちる。座り込んだまま傷ついた顔をして、床を見つめている。できれば、こんな形で知らせたくはなかったのに。
「はじめから知ってたのは、この人だけだよ。集落のため、なんて嘘だ。――何のために、こんなことをしたんだ！」
ファンは声をあげた。

「私は私の目的のため。そして、私を助けてくれるあの人のため」
「目的……？」
問い返すと、踊り子はぱしんと扇を閉じ、また妖しく笑んだ。
「そんなこと今はどうでもいいの。現にこうして、すべてがあの人の言うとおりに回っているのだから。私はただ、私の役目を果たすだけよ」
ぞくり、と嫌な心地がして、ファンは思わず構えを取って、後ろに下がった。目の前の踊り子から生ぬるい風と羽ばたきがこちらに届き、傍らの火が踊るように揺れる。黒緑の翼を備えて、踊り子は言った。
「大人しくあの人に協力しなさい、坊や。その子の命が惜しかったらね」
「……ジェンさん、どうして――」
ファンがはっとして振り向くと、傍らで座り込んでいたシャオが苦しげに呻き、その場に倒れた。
「シャオ！」
「早くしないと死んじゃうわよ、その子。さぁ、こちらに来なさい。そして、働くの。すべては窮奇様のために」
不敵な笑みを浮かべ、踊り子は笑んだ。

選択

傍らで、シャオが体をぎゅっと縮こまらせて震え始めた。額には玉の汗が浮いている。

「寒い、寒いよ……」

「シャオ、しっかり！」

シャオの体を抱きかかえて、声をかける。見覚えのない腕輪をしている。あの色のものではないが、おそらく踊り子が与えたのだ。ファンはそれを外し、床へと投げる。からからと音をたて、腕は舞台の上を転がって、客席の方へと落ちていった。

「そんなに揺すって。毒のまわりが早くなるわよ。どう？　大人しく従えば、その子の毒を抜いてあげるわ」

踊り子がその口元に嘲笑（ちょうしょう）を浮かべて、こちらを見下ろす。

「シャオは関係ない、毒を抜いてくれよ！」

「あら、関係ないなら放っておけばいいじゃないの。……違うでしょう？　私は抜いてあげようって言ってるのよ、あとはあなたが条件を飲むかどうか」

ぎり、とファンは歯噛みする。

「そっちについていったとして、おれなんかがそっちの役に立つとは思えないけど。お前らの言うことなんか絶対聞かないし、まず魔獣の手先になんかなりたくない」

「生意気な子。あなたが役に立とうと立たなかろうと関係ないわ。私は“太極の少年”に“同行することを承諾させる”ように言われてるの」

「どこへ連れてく気なんだよ」

踊り子はふわり、と飛び上がり、舞台から客席のほうへと降りて、椅子に座る。

「さあね。もたもたしてると、本当に死んじゃうわよ。それとも、死んでしまった方が、かえってあなたは動けるのかしら。いつだっ

て力のない者は足手まといだものね」
その言葉に、体を丸めるシャオが僅かに身じろぎする。
「ファン……もう、いいよ。もう、私、生きてく意味がわからないの……だから、せめて邪魔にならないように」
「弱気になったら駄目だよ、絶対に助ける！」
踊り子はため息をついて、羽根のついた扇で自身をあおぐ。
「助ける、でも、こちらの要求はのまない。何もかも得ようとする、得られると思っているなんて傲慢じゃない？　それとも、神獣に選ばれた人間はそういうものなのかしらね」
その言葉に、ファンはじっと踊り子を見据え、言う。
「少しでもいい方法があるなら、傲慢だとしたってそっちを選ぶ。何者に選ばれていてもいなくても、この意思はおれのものだから」
ファンは踊り子の方から顔をそむけ、シャオの方を見やった。焦燥に胸を焼きながら、シャオの額の汗をぬぐおうと懐に手をやって、気がついた。
朱雀羽根。包みを取り出して、開くと朱の羽根が傍らの篝火（かがりび）より明るく赤く輝いた。
「これは……」
邪を焼き払う神鳥の羽根は、鴆の毒気を含んだ空気から澱みを払って、掌の中で微かに温かくなる。毒消しの羽根だ。ファンは羽根を握り、シャオファの方を見やる。これを使えば助かるかもしれない。
羽根を手にするファンを見て、舞台の下で踊り子が立ちあがり、気色ばんだ声をあげた。
「朱雀羽根！　なんでそんなものを……寄こしなさい！」
ばさり、と羽音を立てて、踊り子が舞台へと躍り上がる。毒羽根が辺りに散り、羽ばたきに舞いあげられる。踊り子の白い手がこちらにのびてきて、ファンは朱雀羽根をもった手を振り上げた。毒を焼き切る羽根。昨日の夜、謁見の間での朱明がふと頭によぎった。毒を焼き切る羽根、毒の染みた石を毒もろとも焼き切った浄化の炎

を。シャオ自身を焼かないと言えるだろうか――

振り上げた手をぎゅっと握り固めて、ファンは踊り子を睨み据える。そして、ファンはその羽根の根元を、向かってくる踊り子に向かって振り下ろした。

「何を――」

問いの続きは悲鳴となってかき消えた。踊り子に触れた羽根の根元から鮮紅色の炎が広がり、それは瞬く間に踊り子を包みこんで燃え上がった。握っていた羽根から出た火はファンの体にも移り、掌から全身へ走る。

「忌々しい！」

踊り子は火を振り落とそうと羽根と手足をばたつかせていたが、消えないことがわかると酒場の扉から、外へ向かって飛び出していった。

ファンについた火は消えなかったが、ファンは羽根を離さず、立ち上がった。体の外に走る火に応えるように、同じ色の気が起き上がって内側を巡る。それを促すように青い風も応えて吹く。

火は体を覆う朱の羽毛になり、焔の煌めきは尾羽の彩る五色に変わる。脚は赤銅色の蹴爪をもって、火の輝きを照り返している。ファンは揺れる扉を見て、またシャオを見やる。

「シャオ、絶対に戻ってくるから」

汗を滲ませた顔でシャオが僅かに微笑み、頷いた。

「頑張って」

二人の声が重なって、ファンは踊り子を追って外に飛び出した。

再び、町へ

屋根から屋根へ渡り、シンは都を囲う城壁を踏み越えた。辺りは相手を構わず、誰彼なく都の人々が争っていた。獣のような吼え声を上げ、口から血の泡を出しながらも、さらに戦い続ける。濃い血の臭いが鼻をついた。

集落の前で狂い暴れる町人を一手に止める者を見て、シンはその人だかりの中に飛び込んだ。黒い羽根こそ見て驚いたが、寄って見れば王の近衛の獣人だった。

「王の御客人か！」

尋ねる声に応えて、シンは腕を龍化こそすれ、傷つけぬように町人を数人気絶させる。その横で近衛の者も目の前の者を黒い鱗のある脚で蹴り飛ばす。

「守るのと倒すのを両方やれとは、王も酷なことをおっしゃるものだ！」

そう言って、近衛はこちらに近づくと後ろの方を指して言う。

「集落の者が一人、毒にやられている」

「ここの者は治したはずだが」

「町人を止めるために、自ら再び被ったのだ。貴公を待っている、行ってやってほしい」

シンは頷き、再び戻る、と告げて、踵（きびす）を返した。奥へと走っていくと、地面に寝かされる者とそれを介抱する者を見つけた。少女の父親だ。

「ダーシュさんか！」

傍に駆け寄ると、紫斑は既に全身にわたっていた。すぐに龍化した腕をかざし、体を回復させる。

「どうしてまた、こんなことを。毒の威力はご存知のはずだ」

「私は知っていても、武器をとった者達の多くは知らなかったはずでしょう。それにここを守らねば、ここの者は帰る場所を失い、都

の人々に何の弁明も償いもないまま、国を彷徨(さまよ)います。――きっと戻って来られると信じておりました」

幾分かよくなった顔色に、笑みを混ぜてダーシュは言う。シンは言葉に出来ず、ただ息をつき応えた。

「この治癒はあなたの体の力を使う、今はゆっくり休まれるように」

小さく礼を言い、ダーシュが頷いた。シンは続けて問う。

「ご息女は帰られただろうか。弟子が、ファンが一緒にいるそうなんだが、心当たりがないだろうか」

「……あの子が行くとしたら分祀(ぶんし)か、あの踊り子がいるという酒場だと思うのですが、詳しい場所までは」

ダーシュがゆるゆると首を振った。やはり、町の中をしらみつぶしに探さねばならないのか。窮奇(きゅうき)は都の地下に潜んでいるのだろう。空にあった邪気は今、町の狂気に混じってわかりにくくなってしまった。

「ならば、私は戻ろう。この騒ぎだ、探さねば」

シンは立ち上がり、都の方を向く。ダーシュは体力がつきかけているのだろう、閉じかけた目で、頼みます、と呟いた。そのまま意識が閉じたのか、静かになった。介抱していた者にその場を任せ、シンは近衛のところへ戻る。

「やはり、貴公はただ人じゃあないようだ」

空中から数人を押さえ倒して、近衛が近くに着地する。応えるように、確かに、と頷いて見せ、シンは言う。

「弟子を探さねばならん、魔の者が狙っている。ここを任せていいか」

「大いに任せられよ、東の守(もり)よ！　これでも、王の近衛を任せられた者。これしきできねばお傍になど帰れん！」

ならば、とシンは手足を龍化させ、ぐっと地を踏みこむ。強く蹴って、渦巻いた風で人だかりを巻き込み押し返すと、そのまま都の方へと駆けこんだ。

再会

酒場は大通りに面しているが、都を囲う城壁にもほど近い。飛びだした先は無差別な騒乱で溢れていて、剣戟の音が建物の間をこだましていた。ファンはすぐに上を見あげ、町の上空へと火の粉を落とす鴆の獣人を捉えた。まっすぐにそちらへ飛びあがる。飛び方など知らないが、ただそちらへと向かう意思だけは確かに持って、強く地面を蹴った。

踊り子は火を払い落し、煤のついた顔でこちらを見た。髪も息も乱れ、睨む目だけが鋭く、こちらに輝いた。羽根の色と同じように妖しく、だが、怒りに満ちた目だ。

「その輝く羽根も、何でも掴む腕も、曲がらない意志も何もかもが厭わしかった……」

上空で対峙した踊り子は目こそこちらを向いていたが、彼女が見ているのは自分ではなかった。この朱雀の羽根を通して、別のものを見ている。

「その手が掴むものは、すべて私が得ようとしていたものなのに。いつも横から攫い、得るのはあっち」

ファンは眉を寄せて、怪訝に踊り子を見る。ぶつぶつと呟きながら、彼女は一度羽ばたき、焼けて減った毒羽根を元通りに揃えた。

「あんたさえいなければ、私はもっと愛された。半分ずつ与えられるものまであんたが全部持っていった。あんたがいなければ、いなくなれば、いなくなれば……」

踊り子の羽音に交じって、呪いの言葉がこちらに届く。

「いなくなれ、いなくなれ、いなくなれ」

伏せられた視線が、再びこちらに戻る。押し寄せる怨嗟に、背筋が強張る。

「死ね」

毒羽根が矢のようにこちらにいくつも向かってくる。ファンは振

り払うように、火の残る腕で必死にそれを払う。羽根は羽毛を通らず、落ちる途中で燃えつきた。踊り子に視線を戻し、凍りついた。宙を舞う、無数の毒羽根。それは雨のように、広く下で暴れ、惑う人々に無差別に降り注ぐ。

「やめろ！」

ファンは火を体の周りに広げる。演舞のように空を踏み回り、ファンは届く範囲の毒羽根を焼くが、舞に関しては毒羽根の主の方がうわてだ。下を見れば惨憺（さんたん）たる場景。足元で広がる叫喚（きょうかん）に、ファンは宙で立ち尽くす。

「やめろよ！」

その叫びと同時、空を切る音とともに閃光が尾を引いて、踊り子の片方の翼を貫いた。射ぬかれた傷からは紅炎があがり、踊り子の体が傾ぐ。突き刺さる矢羽が炎と同じく赤く輝き、踊り子は射られた遥（はる）か後方を憎悪のこもった目で睨んだ。王宮のある方角。

「南王様？」

その人はまるで火の玉のように明るく鮮やかに、そして、まっすぐこちらへくる。とたんに、ファンの体の周りの火は小さくなり、花火のように瞬いた。体の内の朱雀の力が不安定に揺れる。

（落ちる！）

体の火は翼や朱雀たるそれらを伴って消えた。ファンは足場を失って、ばたばたともがきながら下に落下する。幸い、翼のあるうちに少し降りていたおかげで、落ちたところはそれほど高い場所ではない。家の屋根の上を転がって、瓦の上で踏ん張って止まる。顔を上げると、そこには弓を手に矢を携える、南王その人の姿があった。

「ファン君、ここは任せて、その子のところへ行ってあげなさい」

武具を纏い、朱雀の力を具現させた南王は、勇ましく鮮麗に鴆の昇化に対峙している。毅然（きぜん）とした表情に、どこか悲しげな色を混ぜて、南王は踊り子に語りかける。

「やっぱり、あなただったのね、グィファ」

「その名前で呼ぶな！」

踊り子は叫び、無造作に翼に刺さる弓を抜いた。ファンは上空の二人を見あげ、見比べる。よく似た顔の二人だ。やはり、踊り子は王が言っていた彼女の妹なのだろう。

「早く行きなさい」

南王の言葉に、ファンは屋根から飛び降り、再び酒場の中へと駆けこんだ。

蘭花、桂花

久しぶりに見た姉妹は、少しも変わりなくそこにいた。真反対の様で、磨き上げた鏡のように正しく、お互いが存在しているのをあらためて認識した。

「その名前は捨てたの。あんたの妹の名前で私を呼ばないで」

ゆらりとその影を揺らして、ジェンは言った。

「あなたが、毒を広げたのね。……いなくなる前はそんな力なんてなかったから」

ランファは右手に新たな矢ををつがえず、静かに弓を下ろしていた。

二人が離れたのは、お互いの素養が定まった日、十五歳のある日のことだった。

物心ついた時から、自分によく似た姉はすべてを備えていた。今思えば、姿かたちは同じといっていいくらいだから、その点に関しては自分にもあったのだろう。しかし、姉――ランファは人が愛で、羨むものを持っていた。

最初はただ、憧れていた。ランファが褒められれば、自分が褒められた時のように姉の栄誉を喜んだ。自慢の姉だった。習いに行った踊りも、揃いであつらえられた服も、一緒であることが嬉しかった。どこに行くにも姉の後ろについて歩いた。

だが、少し経って、直接自分に向けられていないような、周りの言葉が聞こえるようになった。そして、ようやく自分の姿が見えたのだ。見えてしまった。

自分の姿は、姉と似ているはずだった。だから、姉の姿こそが自分の姿だと、そのときまで信じていたのだ。なのに、見えた姿は。すべての称賛を得た姉と、それに比べてみすぼらしくすら見える自分。光のあたる姉の後ろにのびる、影のような自分を。それからは、

今まで良しと思えた事がすべて悪しものになった。

同じように習い、同じように舞った舞も褒められるのは姉だけだ。自分への称賛は姉との対比であり、その添え物として贈られるばかりのものだった。気付いてしまってからは、毎日が苦痛で仕方がなかった。どんなに頑張っても、努力しても、姉を凌ぐことも、並ぶこともできないのだ。自慢の姉は越えられぬ壁になり、自分を影に落とす日覆になった。

何でも持っていた姉が、唯一持たないものがあった。素養の見立てだ。それは同じく自分にも定まっていなかったが、姉の持たぬものを先に手にできる可能性を持っていた。十を超えても互いの素養は定まることがなく、姉に隠れては毎日分祀に通ってはそれが定まるのを待った。姉より先に、少しでも優れた素養を。

そして、その日は来た。

分祀の神官は、少し驚いたような素振りを見せて、「鴆」の素養を持っている、と告げた。そして、大変に力のある気だから、それに見合う心を得なさいと言葉をかけられた。力のある気、それだけで充分だった。礼もそぞろに分祀を飛び出し、姉のいる家へと駆けた。

「姉さん！　私」

姉を呼びながら家に飛び込むと、その言葉の先は弾けて消えた。

「おかえり、グィファ。私ね……」

姉の前には朱布を身につけた大人がいて、その手には朱雀印の押された紙とそれに添えられた朱雀の羽根。

優れたる者に与えられる羽根が、素養の定まらない、ただの踊り子である姉に与えられるわけがない。朱雀が姉を次の王と見染めたのだ。昇化は四方の王に礼を捧げ、乞い願って、初めて力を得る。玉座に座る姉に、跪いて――

姉の言葉はもう何も聞こえなかった。聞こえずともそれだけ理解してしまったのだ。私は、姉に敵うことがない。この人の次に生まれてしまったときに、それはもう決まっていたのだ。

ならば、目の前に広がるのは、獄のごとき暗闇。

気がつけば、家も都も飛びだしていた。一番に望ましかったのが、死だ。目の前に広がる闇に比べれば、死すら明るく見えた。都を包む草原を抜け、駆けて駆けて、陽山のふもとに広がる樹海に来ていた。暗く澱んだ黒い沼に辿りついた時には、何もかも自分に残っていなかった。姉と同じく与えられた容姿さえも。倒れこむように、その沼に飛び込んだ。溶けてなくなればよかった。

「――これは珍しい力を持っていますね。来なさい、必要としてあげましょう。毒の娘よ」

自分が欲しかったものは、暗い澱みの中でようやく得られたのだ。その声に、恐ろしくも美しい声に、ようやく私だけが必要とされたのだ。私だけが持つ力に、彼が気付いてくれた。私が願うことを彼はわかってくれた。

「王になびかずとも、力など手に入ります。怒りなさい、憎しみなさい、そのひた向きな思いこそ、何より強く美しい」

淀みから述べられた白い手に引かれ、そこから上がると自分は毒の羽根を纏っていた。目の前の男が何者でも構わない。悪鬼であろうと魔であろうと、この人こそが私を導く光だ。目の前の壁を払う、私の主人――

グイファ――ジェンは羽ばたき、辺りに毒羽根を飛び散らせた。目に見える羽根だけでなく、この周りの空気を一吸いでもすれば、王とて殺せる。私はそれだけの力を得たのだ。安易に神獣から離れ、王宮を出た王を屠れる力を。

火の王

「どうしても、戦うというの」
「お前がいなくなるか、私がいなくなるか、どちらかしかありえない」
妹の周りに漂う瘴気を羽ばたきで散らし、南王――ランファは問いの答えにうなだれた。事の顛末を知るには、もう遅過ぎた。そして、静かに妹を見すえる。
近すぎたのだ、私たちは。そして、似ているばかりに、片方より優れることでしか個を保てなかったのだ。一として生まれるべきだったのに、二つに分かれて生まれてきてしまった。姉は姉として、妹に越えられぬように。妹は妹で姉を凌ぐように、一つのものを二人で取り合ってしまったから、二人は離れざるを得なかった。
すべての経緯を飲みこみ、ランファは静かに弓に矢をつがえた。
「あなたがもう私の妹でないのなら、私ももう姉ではない。赤の国の王として天より預かりし火行の力をもって、この国に害をなす魔を滅する」
ぎりり、と弓を引き絞り、朱雀の羽根を矢羽にした破魔矢を向けた。
「これが最後よ。退きなさい、グイファ！」
「その名を呼ぶなああ！」
叫び声とともに、無数の毒羽根がランファに向かって飛んでくる。大軍の射た矢のように、雨のごとく襲い来る毒矢だ。ランファは矢を放った。弓は古の火王のもの、紅焔と名付けられた長弓だ。高い音をたてて矢は空を切り、向かい来る毒羽根を焼き払いながら、飛んだ。
次の瞬間には、矢は鳩の獣人の羽根を射ぬき、炎に変わった。傷口の血は滴る前に乾き焼ける。悲鳴上げながらも、踊り子は羽ばたいて火を消し、翼をくすぶらせながら叫んだ。

「私はジェン！　鳩の獣人として、積年の恨みと、何より窮奇様の為、南王ランファ！　お前を殺す！」

先ほどを遥かに上回る数の毒羽根と目に見えぬ毒霧を辺りに漂わせる。

「南王、お前が再び矢を放てば、私はこの体にある毒をすべて四方に降らせてやる。先に撒いた毒とは比べ物にならない毒だ。この都の民すべてを苦しめたうえで殺す」

二の矢をつがえていたランファはじっと“ジェン”を睨んだ。毒の威力に偽りはないだろう。こちらが国を守るためなら妹を射ることすら躊躇わないならば、向こうも姉を殺すために他を巻き込むことを厭わない。一枚の毒羽根が、まっすぐ顔を狙って飛んでくる。羽ばたき以外に身じろがぬよう、眼前に迫った羽根は身にまとう気を使って焼き消す。

「強い力ね。その毒があれば、どんな妖魔も倒せるわよね。人を守るためにだって使えたでしょうに」

ランファの言葉に、ジェンは応えない。少しでもこちらに動きがあれば、毒を四散させる気なのだろう。一挙手一投足も逃さぬといった目で、ジェンはこちらを睨んでいる。当たりに漂う暗い気に、顔をこわばらせて、ランファも向こうの隙を待つ。

執念がここまでの力を育てたのだろう、それだけの意志を彼女は持っていたから。でも、それ以上に、この力を強めているのは――

動けば民へ毒が降る。足元から湧くような邪の気に、ランファは気付いていながらも、そこを動かなかった。

「――愚問ですね、南王。毒とは殺すためにあるのです。何より、駆け引きをするのに、有効な武器になる」

毒羽根とは違う黒い羽根が足元の影から吹きあがり、ランファの体を射た。よろめきながらも、ジェンの方から目を離さず、影に紛れた澱みの主に応える。

「四凶、窮奇。それこそ考え方次第。武器というものは使い手によっていくらでも変わるものよ」

「武器とは常に害するために使うもの。守るというのは愚者の言うことですよ」

窮奇はジェンの横に飛びあがると、笑みを浮かべた。

「まぁ、不死の力を手放して王宮を出た王ならば、愚者といっても過ぎないでしょうね。――ジェン、王にとどめを」

“妹”が毒羽根をこちらに向けるのが見える。ランファは体中に刺さった羽根を振り落としもせず、よろめきながらも窮奇を見据えた。羽根ひとつはそれほどの威力でもないが、数は多い。それでも、その目に負を宿すことなく、毅然とランファは応えた。

「確かに、私は王以前に人として愚かよ。大切な妹一人の気持ちすら知らずにいたのだから。こちらはもう、取り返しがつかなくなってしまった」

びくり、とジェンの動きが止まる。でも、と置き、ランファは体に火を纏って、体に刺さる窮奇の羽根を焼き払う。

「王としてはまだ間に合う。――王宮を離れる愚かな王も考え方次第よ、敵する者を一番に引きつけるいい囮になる」

狂気と窮奇の邪気の漂う都の空に、妙なる音声が響き渡った。天上の音色にかなう朱雀の声だった。都の中央に据えられた王宮のその上空に火を纏った神鳥が飛びあがる。

「見つけたぞ、窮奇。余の王を愚弄し、民を苦しめた罪、その身で償え」

くっ、と窮奇は再び地上に、暗い澱みを生じさせる。

「逃がしはせぬぞ、四方随一の攻を誇る朱雀の火だ！」

地上を、空を、朱の炎が同心円に駆け抜ける。風より速く、波のように広く大きく、炎はうねり、都の空に広がった。逃れられぬ、と見たのだろう、火がその場に届く瞬間、窮奇は自身とジェンを、澱みに似た球体で覆う。

「窮奇！」

ランファは上空から、つがえていた矢を渾身の力で引き絞り、その球に放つ。火炎は辺りの毒羽根を焼失させ、火の波となって、ど

っとその黒い球体を呑みこんだ。

終焉

黒い球を覆った炎は空を赤く染めるほど輝き、朱雀が再び大きく羽ばたくと消えた。黒い球は泡が爆ぜるように消え、中から翼のある黒い豹が現れる。その胴に朱雀の矢を受け、黒く血を流しながらこちらを睨んだ。

「窮奇様！　なぜ、なぜ……！」

妹はうろたえた様子で、その黒豹にすがっている。ランファははっと息を飲む。球体に向けて射た矢は、妹をも射る覚悟で放ったものだ。矢を受けた窮奇とその後ろで傷を気にする妹、これではまるで――。人型を保てぬその魔獣は、離れた王宮上空の朱雀とこちらを順に、忌々しげに見て口を開いた。

「南王。国を盗るのは、今回は諦めましょう。退かせてもらいます」

矢を口で引き抜き、窮奇はジェンの方を見て、再びこちらを見た。まじろがずに見返して数瞬、窮奇の方が視線を外した。

「飛べますね、ジェン。行きましょう」

「でも、追手が……」

「大丈夫です」

羽音は二つ、窮奇とジェンは飛びあがり、未だ暗い西の空の方へまっすぐ飛んで行った。夜闇にだんだんと消えていく黒い翼をランファはじっと見送った。それを追うように、鈴のような音をさせて朱雀が後ろの宮殿からこちらへ急ぎ飛んでくる。

「逃げるぞ。追わぬのか、ランファ。あやつはこれしきのことでは手を引かぬぞ」

朱雀の言葉に俯き、ランファはゆるりと首を振る。去来する思いも考えもすべて振り払うかのように。

「いいのよ。王がこれ以上、都を離れてはいけない。――それに、きっとしばらく来ることはないわ」

そうか、と小さく応え、朱雀は羽根の回りの炎を小さくした。鈴

の転がるような音で喉を鳴らし、朱雀は問う。
「……妹を取り戻さなくてよいのか」
「いいの、あの子は誰のものでもない」
ランファは弓を背負い、王宮へと向かって足元の屋根を蹴った。
そして、振り返り、国の守護神に向かって小さく笑む。
「それより、都の復興の方が先。でしょう？　朱明」
朱雀は小さく頷き、その翼に朱の炎を纏った。ランファは扇を取り出して、くるり、と回る。
「舞うわ。手伝って頂戴」

「シャオ！」
酒場に飛びこんだファンは舞台へと駆け上がった。シャオは声に反応しなかったが、近くまで行くとまだ微かに息をしているのがわかった。外は王の火に照らされて微かに明るいが、先ほど自分がいた時よりずっと濃く毒気が漂っているのがわかった。
ファンは焦る心を落ち着かせて、息を整える。先ほど息を吹き返した朱雀と青龍の気に意識をやって、青い力に集中する。この身に、その力を具現するのだ。木行の力で、友人を救うために。
辺りを巻くように、清い風が吹く。見える手足に、孔雀藍色の鱗があるのを確かめ、ファンは掌をシャオに向けてつきだす。見よう見まねでも、やるしかない。
「治れ！」
どうやって力を使うのかは知らない。その能力を引き出せるかと、体中の青龍の力をめいっぱいに活動させて見る。体の中ばかりがざわついて、外にそれが出てこない。
体の力を強めると、対して窓の外の鳩の力と朱雀の力をはっきりと感じられる。ちっとも現れない木行の力に、焦燥がつのる。師が使っているときのような、大きく明瞭な力を。清澄で躍動的な力を。
不意に寒気がしてファンは窓の外を見やる。外の二人の気に、別の気が増えたのだ。その邪気は、自分をここへと運んだあの黒い水

たまりと同じ力なのだろう。この恐怖は青の国で檮?(とうこつ)と対峙した時によく似ている。きっと、ここにも神話の魔獣がいるのだ。指先が微かに震えているのに気付いて、ファンは自分で両頬を張った。今は目の前の友を助けることだけに集中するのだ。

「もう少し頑張って、シャオ……」

絶対に助ける。希望があることを教えてあげなくては。

決着

額の汗を拭い、ファンは再びシャオの体に手をかざす。
「――そのまま、力を安定させろ」
後ろからの声に、ファンは驚きながらも安堵した。青き清涼なる力の主――青龍その人。
「お前が力を使って良かった。……体の中の力を相手に流して、それが自分と相手とで循環する様子を思い描くといい」
肩に置かれたシンの手から、青龍の力が伝わってくる。それに従って、ファンも自分の力を徐々にシャオに送る。暗い酒場の舞台上がぼんやりと青白く照らされる。
しばらくして、シャオはつかえがとれたように、深く呼吸した。
「シャオ！　大丈夫？」
声をかけると、シャオはゆっくりと目を開けた。
「ファン……？」
応えが返ってきて、ファンは全身から力が抜けるのを感じた。
「良かった、本当に良かった……。シャオ、ごめん」
「どうして謝るの？　私が謝るならともかく」
「俺のせいでシャオは巻きこまれて、死にそうな目に合ったわけだから」
答えると、シャオはぷっと吹き出した。
「集落が狙われてたなら私はとっくに巻き込まれてたわけだし、ファンに会ってなかったら死んでと思うよ、今。生きてるのはファンのおかげ。そして、シャオはシンのほうに向きなおる。
「ファンのお師匠さんですか？」
「ああ、シンと言う。だが、今はあとにしよう。外の決着がまだついてない」
その時、楽の音のような音が窓の外から微かに届いた。動いたか、

とシンが言う。ファンはシャオとともに声をひそめ、窓の向こうを注視した。外はまだ闇。綺麗な声、とシャオが呟く。

そして、再び朱雀の声が聞こえると窓の外は紅蓮に染められた。窓の外を舐めるように炎が浚っていく。

「外の人達は……！」

外に走りだそうとして、シンに腕を掴まれた。

「あの火は浄化の火だ、人に害はない。――決着がついたな」

火が消え、シンは待つように言って窓の外を窺いに行った。その顔から緊張が消えたのを見て、ファンはシャオの手を引いて、舞台から降りた。

「師匠、魔獣は……」

「逃げたようだ。誰か連れていた、踊り子だろう」

シンがこちらに歩み寄る。そして、ファンの前に来るなり、大きな声で怒鳴った。

「奴らはお前を狙っていると、俺は何度も言ったはずだぞ、ファン！　飛びだす前に考えろ！」

空気を震わすほどの叱声。

「もし、窮奇が直接お前を獄に引きずりこんだらどうするつもりだったんだ」

酒場いっぱいに響き渡るような大音声に、ファンは縮こまりながらも、急いで頭を下げた。

「すみません、師匠。おれ……」

「お前が太極だからというだけではない。俺はバクからお前の身を預かっているんだぞ。間接的に、俺はお前の両親から預かっていることにもなる。その身を粗末にするな」

優しくなった声にもう一度、すみません、と返す。シンは続ける。

「無事でよかった。今度は、飛びだす前に俺に言え。俺はお前の師だ、お前が守りたいものくらい一緒に守ってやる。俺だって、それくらいはできるんだぞ」

今度は応えることができずに、ただ静かに俯くしかなかった。そ

こにシャオが申し訳なさそうな声で、あの、と声をかける。
「あまり叱らないでください。ファンは私を助けようとしてくれたんです。私がジェンさんに騙されたりしたから。彼は命がけで、私を守ってくれた」
わかっている、とシンは微笑む。
「俺が貸した力はそうそう容易く使えるものではないからな。力を使わねば俺もここを知ることはなかったし、王も踊り子の居場所を掴むことはなかっただろう。……君もよく耐えた。集落まで送ろう、お父上が心配している」
「父さんが？」
「ああ、お父上は集落を、君の帰る場所を守るために随分と無理をされた。帰って安心させてあげるといい」
シンを先頭に、三人は酒場を出た。都を覆っていた狂気は払われていたが、町には怪我人で溢れ、混乱は収まっていなかった。空は深夜の黒から明け方の紫紺に染まりつつある。狂気が晴れたからだろう、辺りから聞こえていた怒号は聞こえなくなっている。
「集落はどうなっているのかな。……場所があっても、都の人達も、王様も私たちを許してくれるのかな」
シャオファの呟きに応えるように、王宮の方から微かな琴の音が響いて来た。ファンとシンは顔を見合わせ、頷く。王宮の上に赤い火と共に舞う人影。
「シャオ、屋根の上に行こう！」
驚き、戸惑うシャオにファンは笑いかける。シャオが答える間もなく、シンが二人の腕を掴み、龍化した足で軽々と屋根の上に飛びあがる。
「見るといい。君の問いに、陛下が答えをくれる」

こたえ

宮殿の上空でランファは扇を広げた。建国の王が残した琴の軽やかな音に乗って、空に足を踏み出す。こうして踊るなど、いつぶりのことだろう。きっと、王になってからはきちんと舞うことなどなかったはずだ。人より修練に長じていた妹に負けぬように、一番心血を注いだ舞。好きだった舞を踊れなくなったあの日ほど妹を羨んだ日はなかった。それは二人を決定的に分けてしまったけれど、これは天の定めたことだったのだろうか。判然としない思いを抱えたまま、ランファは王宮の周りをぐるりと回り、朱雀の力を解放した。

「この都にあるすべての穢れを、心のくもりを、体を蝕む毒を焼き、その温もりを持って人々を守りたまえ、朱雀の火よ」

ランファを中心に、この国を示す明るい焔が広がる。それは花が咲き広がるように、何を傷つけることなく、いつくしむように都の外へと広がっていく。それを確かめながら、ランファは再び舞う。

そして、王宮の屋根の上で琴を弾く朱明と顔を見合わせる。

「朱明、私ね、この美しい都に気に入らなかったものがたった一つあったの」

「奇遇だの。余もそうだ。いつ消してやろうかと思っていたのだが」

二人は頷きあい、ランファはぱちん、と扇を閉じ、都の外の方を指し示す。

「人を守れない時点で、城壁はもう役立たず。心を隔てる壁なんていらないわ。――焼けよ、城壁！」

都を囲っていた城壁が瞬く間に炎に包まれる。ランファがくるくると回るのに合わせて、火は強くなり、都を覆っていた、集落と都を隔てていた壁は跡かたもなく焼き払われてしまった。

「ここから見える人はすべて赤の国の民――王たる私が守るべき、安寧を供すべき人々」

朱明が満足気に微笑むのが見える。もう少し踊ろう。届けられな

かったあの子の分も、人々にこの思いが届くように。もう失わずに済むように。

南王が舞う間、十重二十重（とえはたえ）にも温かな火の輪が広がって町を包んだ。それを見ながら、シンは下に降りた。しゃがみ込み、掌を地に伏せる。この広がりにのせれば、火の届くところに、治癒の力を届けられるはずだ。

「少し土地の力を借りるぞ、朱明」

体に青い光を纏い、シンは呟く。朱雀の浄化の火にのせ、シンは青龍の力を委ねた。

この世のものとは思えない美しい琴の音に、空を舞い踊る朱の踊り子。踊りはもしかしたら、ジェンさんの方が上手かったかもしれない。ずっと見ていたから、その違いを確かに感じる。でも、舞と共に届いた温かな火とそこに載せられた想いは、ジェンさんのものよりもしっかりと届いた。優しくて、温かくて——そして、切ない願いがのせられた舞だった。ずっと見ていたから、それが何なのか気付いた。これは都の人々に向けられた、ジェンさん宛ての舞。それは懺悔にも似て、覚悟を示した舞。気付けば、声を上げて泣いていた。

「シャオ、見て」

ファンに声をかけられて、涙を拭って顔を上げる。都の内外を隔てていたあの壁が、炎に包まれていた。炎が消えると、あの壁はすっかりなくなっていた。集落が見える。煙が見えていたけれど、集落はちゃんと、あの場所にあった。

「これで壁の中も外もあるまい。とはいえ、すぐにすべてが変わるわけではないが」

一度下に降りていたファンの師匠だという人がそれを眺めて言い、ファンも続ける。

「でも、遮るものがなくなれば、王様の目は届くよ。きっと大丈夫」

二人の言葉に、何度も頷いて返し、シャオはしっかりと涙を拭った。

「うん。王様が答えをくれたから、私たちは大丈夫。ううん、これからが大変だよね。頑張らないと」

頷きが返り、シャオは微笑む。南王様の舞と琴の音はしばらく、東の空から日が見えるまで続いていた。

微毒

都から離れゆく二つの影は、飛びだしたほどの勢いもなく、陽山のふもとの方へと向かっていた。ひとつは女の姿、もうひとつは翼ある獣の姿だ。

「窮奇様、傷にさわります。一度降りて手当てを！」

ジェンは悲鳴にも似た声で、なおも飛び続ける窮奇を引きとめるようにすがりついた。窮奇の脇腹の血は止まっていない。ゆるゆると下の草地に降り、窮奇は静かに着地した。

「窮奇様！」

「静かになさい、ジェン。大した傷じゃありません。私とて四凶の一人、他の者より多少、軟いとて人間などに殺されはしない」

窮奇は息をつき、少し目を閉じると人型に姿を戻した。そして、掌で矢傷を撫でると、そこに黒い澱みが張り付いて血を止める。

「それよりも、随分しおらしいではありませんか、ジェン。王に向けていたあの刺々しさはどこです」

ジェンは俯き、静かに尋ねた。

「窮奇様」

「何でしょう」

「何故、私なんかを連れて……庇ったりなんか。こんな単なる逆恨みでに夢中になっているような人間なんか、用が済めば囮にもできたのに」

「そうですね、それも手のひとつでした」

窮奇は静かに、微かに笑みを湛えて答える。

「けれど、王ごときを討つためだけに、気に入った駒を手放すのは面白くない。それに、私は悪事と知りながら悪事を働く人間が特に好きなのです。逆恨みと知りながら、無関係の者を巻き込み、身内を害そうする。そして、それを悪びれもせず、ただひた向きに行う。美しいじゃありませんか」

顔を赤らめるジェンを横目に、窮奇は立ち上がり、血を流すように頂から赤く火を吹く陽山を見やる。

「ついでの用事はともかくとして、今回の目的は果たしましたから問題はありませんよ。“毒”は効いています、この私が予想した以上に」

「毒が？」

「力を持つ獣に、力への疑心が生まれた。天を信ずる王に、天への疑心が生まれた。これ以上の毒がありますか」

窮奇はその端整な顔に深い笑みを浮かべ、続ける。

「あとは機を待つだけでいい。毒は勝手に回ります」

さて、と窮奇はジェンに振り返る。

「あの沼から私は獄に戻ります。――さらに堕ちる覚悟があるのなら」

ジェンは真摯（しんし）な目で窮奇を見つめ返し、答える。

「お供します。あなたとならどこへでも」

窮奇は再びその背に翼を現す。

「そろそろ行きましょうか。日が昇っては、影が消えてしまいますから」

草原をなびかせて、微かに紫がかる空から逃げるように、二人の姿は陽山の裾野へと消えた。

朝は来る

夜が明け、シャオファを集落に送り届けると、都の外へと逃げていた人々が戻ってくるところに立ち会った。明るくなって見ると、布張りばかりの家屋の多くが住めぬほどになっていたが、人に欠けたものはいないと彼らは笑う。あの毒が入っていた大きなかめは、まったくのからになっていた。

「父さん！」

シャオファが駆け寄ると、寝かされていたダーシュは横たえていた体を起こし、その身を抱きとめた。目じり涙を浮かべて、無事で良かった、とだけ言った。辺りは、都を離れていた家族と残った者との無事を喜ぶ声で溢れている。

聞くに、町の外の草原の中に、年寄りと女子供、それを守る若手でじっとうずくまっていたのだそうだ。待っていれば、何かしらの知らせがあるだろうと都を見ていると、草原を火が走ってきた。都から咎(とが)めの火が追ってきたのだと慌てて逃げようとしたが、逃げる間もなくそれに呑まれて、それが懲罰のためでないことに気付いた。風に吹かれて草の鳴る音の中に交じる琴の音を聞き、引き返して来たのだという。

壁が無くなっただけで、問題もすべきことも山積しているが、彼らの顔は晴れやかに見えた。そこを守ったルーユウも疲れ切った顔をしていたが満足気だった。都の人々と睨みあいになっていた場に集落の者全員が集まった。そこで、ルーユウとシンを立ち会いとして、ダーシュを当分のここの代表として据え、町人と王と集落とで話し合いを行うことを決めた。

「対等になるならば、我々も真っ向からその関係に立ち向き、正直に話そうと思う。毒のことは我々の口から直接言うと、奏上願いたい」

ダーシュの言葉に他の者達も頷く。ルーユウが、確かに、とそれ

に応え、王印を見せて身に着けていた朱布を腕に巻き直した。
「私も同席させてくれ、あれは嘘だと言わねばならん。まあ、ああもはっきり魔獣の姿を見たのだ、多少の言い訳くらいは許されるだろう」
ルーユウは獣化し、鴉の翼を翻(ひるがえ)して言う。
「さて、陛下のところへ戻ろう。すっかり明け鴉(がらす)になってしまったが」
ルーユウはそう冗談めかして笑うと、先に王宮へと戻っていった。シンとファンも同じように戻ることになり、ダーシュがそれを引きとめて言った。
「あなた方のおかげです。私たちは都の民として、再び生きることができます。ここの者の代表として、あなた方にお礼を言いたい」
ありがとうございます、とダーシュは深々と頭を下げる。が、シンはファンと顔を見合わせる。そして、同じように困り顔に笑みを浮かべた。
「今回、私は何もしていない。何かしたと言えば、それは南王陛下の命によるものだ、礼なら陛下に言われるといい」
そう言うと、ファンがそれを次いで言う。
「おれも、やらなきゃ、やりたい、と思ったことをやっただけです。シャオもダーシュさんも、みんなも無事でよかった。ただそれがすごく嬉しい」
ダーシュは顔をあげ、言葉なく首を横に振った。そして、再び礼を繰り返した。
町の方も人々が落ち着きを取り戻し始めたのだろう、聞こえ来る賑わいには昨夜のような怒号はなかった。王府もそろそろ今回の件に関して布達(ふたつ)を出す頃だろう。集落を離れることになり、ただ焦げ跡になっている、かつての都との境を踏む。
「ファン！」
話の間、母のもとへ行っていたシャオがこちらに走ってくるのが見える。息を切らし、こちらを見て背を正す。そして、ファンに言

う。
「ねぇ、すぐに出て言ったりしないよね？」
ファンはこちらを見あげる。陽山を迂回するなら、道をまた確かめねばならないだろうし、支度もいる。やることはいくつかあるし、ファンには休みが必要だ。頷き、二人に向かって答える。
「あまり長居もできないが、今日明日に出たりはしない。出る時が決まれば伝えよう」
二人の顔がぱっと明るくなる。何やら話したそうな様子を見て、先に行く、と告げ、歩き出す。町にいた獣人たちが揃って王宮へ戻るのが見える。
「じゃあ、また明日！」
話し終えたファンが、大きく手を振りながら、シャオに別れを告げている。
「約束をしてきたのか」
問うと嬉しそうな顔で、ファンは頷く。
「集落の手伝いをしようと思って。大丈夫ですか？」
「ああ、いいだろう。俺は次の道を決めておこうと思う。朱明とも話があるしな」
戻る道、町の人々を観察していたが、怪我をしているものは見当たらなかった。きちんと力が回ったようだ。土地を離れているから幾分か心配だったが、自分にある力を使う分には支障はないようだ。朱明の力を借りたのもあるだろう。
「疲れただろう、ファン。戻ったら少し休むと良い」
心もちゆったりとした歩みのファンに、声をかける。そう動いてはいない自分にもそれなりに疲れがきている。慣れないファンはこちらにましてそれを感じているはずだ。
「でも、手伝うことがあるなら、おれ、まだ動けます」
「力を使うとな、自分で思っているより体に負担をかけるんだ。…大丈夫だ、話をするにも王宮は今ばたばたしているはず。俺達にかまけている暇はないだろうから、部屋に引っ込んでいるのがいい」

俺も少し疲れた、と笑うとファンも安心したように笑った。家へ戻り、人々の声の上で、明け鳥が出遅れたように鳴いている。王宮から巻き紙を携えた官吏（かんり）が走り出ていく。さしあたっての布達のようだ。

やはりな、と呟くと、ファンも、忙しそうですね、と応える。王宮に足を踏み入れ、まっすぐ部屋に向かう。王や朱雀ならば、こちらが帰ったことに気付いているはずだ。

「水盆鏡だけ借りて、部屋に下がろう」

「水盆鏡を？」

不思議そうな顔に、笑んで返す。

「力が残ってればだが。バクと話がしたいだろう？　教えてやる」

「はい！」

ファンは目を輝かせて、返事をした。そして、少し歩調を早める。ファンが終わったら、こちらの番だ。まだ南都につかぬのかと、心配している者がいるはずだ。

これから

夕刻になると忙しさも一段落したようで、日の暮れる頃に南王に夕餉に呼ばれた。都内外の被害は軽微で、明日には集落と都の代表者と、王を交えて話し合いが持たれるという。

「人々の数に比べて、城壁が小さいのが問題だったのよ。何せ、もう何代も前の王が造らせた城壁なのだし」

食卓を前にくつろぎ、南王は言う。疲れた様子ではあったが、表情にはようやく安堵が見えた。開け放たれた窓からは宵の風が吹き込んで、青草の匂いを運んでいる。昨日のような災禍（さいか）の臭いはない。

「あの、集落の人達はどうなるんですか？」

隣に座るファンが心配そうに尋ねる。先ほどまで仮眠をとっていたからか、急いで結い直した髪には癖がついている。

「話し合いにもよるけれど、しばらくは城壁を新設する手を頼むつもりなの。都の人々と交じって。それが終わるころにはそれぞれに道が見えると思うわ。彼らの中には腕のいい細工師がいるようだし」

「毒があるとはいえ、見事な細工物だったの」

南王の隣の席には朱雀が座っている。奥の神域にいれば使った力もすぐに戻ろうが、何か食べたいと出てきたらしい。椅子に座り足を揺らしているその様子を見ると、昔のような苛烈（かれつ）さはなく、ただ見た目通りの子供らしさを感じる。

南王の答えを聞いて、ファンは安堵したのだろう。乗り出していた身を引いて、椅子に座り直した。全員が座ったのを見て、南王が微笑む。

「じゃあ、食べましょう。久しぶりに飲もうと思うけれど、シン、貴方は？」

「良いものがあるなら、そうしよう」

応えると、朱明が椅子を揺すりながら言う。

「余と少年にも良いものをくれぬか。ああ、酒は困るぞ」

ひとしきり笑い、南王は盃を差し上げる。
「朱なるこの地と、中つ国一円の平和を願って」
乾杯の声に唱和し、シンは杯をあけた。

御柱の地

「やはり、御柱に行くしかないか」
一息つき、茶が出された頃にシンは切り出した。
「陽山がまた騒ぎ始めたからの。しばらくはあの辺りは通れまい」
朱明が言う。騒ぎが収まって見ると、来た時のような微かな揺れが何度も続いているのがわかった。使いの話を聞いた南王によれば、噴火はいつ起こってもおかしくはないと言う。
「金環山を越える道が、今一番安全よ。そして、中央から西へ抜けるのがいいと思うの。山の周りの民も今避難しているから、あの辺りでは宿もとれないでしょうし」
「陽山にいる姉上から、しばらく塒をあけると使いの鳥が来た。姉上が山を離れるということは、此度は相当荒れるに違いなかろ」
「鸞殿が？　そうか。ならば、仕方ないな」
山の主が離れるとなれば、普段ならば安全で穏やかな道も、ただ長く危険な道になる。だが、それを避けて進む道も、中央を守る天嶮、金環山を越えるものだ。多少の心配や不安は付きまとう。話しあいを聞いていたファンが、ふと口をひらく。
「御柱は、その……怖いところなんでしょうか」
不安げな顔だった。ファンにしてみれば、ただ御柱と言っても自分が生まれた場所である。バクは生まれたばかりのファンを連れて、逃げるようにそこを離れた。それを知るがゆえの問いだろう。
昼間、久しぶりに仮親と顔を合わせて安心したからだろう、ファンは話している途中で倒れるように寝入ってしまい、シンが途中でそれを引き継いだ。バクは呆れ笑いしていたが、嬉しそうだった。向こうも向こうで心配し通しの上に、ずっと傍にいた子がいないとやはり寂しいと言う。ファンと神獣の力の件を話すと、少し驚いた顔をしたが、さもありなん、といった様子で頷いた。中央は四つに分かれた四方の力が集い、その調和をとる場所、中央の気はどこの

力とも馴染みうる。
　経路の都合、御柱に連れていく、と言うとバクは顔を曇らせた。あの場所は聖域であって、様々なものが集まる場所。神官だったバクには四凶の復活が気がかりなのだろう。
「気を付けてください。あの場所ほど、天意に左右される場所はありません。ファンをお願いします」
　もちろんだ、と応えると、ファン宛ての言伝をいくつか聞いて、繋がりを切った。バクの心配する少年はそれを知ってか知らずか、御柱に向かうことを聞いてからか心なしか表情がこわばっている。
　ファンの問いに、心もち頬の赤い南王が、微かに笑みを湛えて答える。
「御柱は聖地よ、中つ国の人間ならば、一度は訪れたいと思う場所。かつて混沌に覆われて強大な魔が支配していたこの国を、光を持って治めた天のおわす場所。恐ろしいことなどありはしないわ」
「そう、ですか」
　答える声に元気はない。何か言いたげな表情で、こちらの顔を見回す。
「どうした。バクの話が気になるのか？」
　ファンは少し俯き、口を開く。
「それもあります」
　そして、少し言い澱みながら続ける。
「気のせいかもしれないですけど、師匠も先生も、南王様も朱明さんも、御柱の話をする時、ちょっとだけ険しい顔になるんです。ただ、畏まるっていうよりは……だから」
「我らが天を怖がっているのではないか、と」
　朱明がファンの後を取って続ける。南王、朱明と視線が合って、シンはため息をつく。ここまでくると、覚られるにもほどがあると言えるが、それだけファンはこちらを見ていたのだろう。漂う沈黙に、ファンは慌てた様子で頭を下げた。
「すいません！　こんなことを言ったら罰（ばち）があたるってわかってま

す。いや、きっと気のせいだって――」
「それは気のせいではないぞ、少年。のう、句芒（こうぼう）」
ファンの言葉を制して、朱明がこちらに語りかける。頷いて返すと、ファンが驚いた顔でこちらを見る。
「ただ、怖いかどうかは俺でもわからん。ただ、天の意は俺達ですら未だに計れん。ただわからんだけならどうにでもなるが、天には俺達にくれてやるほどの力がある」
「信用しておるが、付き合い方が未だにわからぬ友人、という感じかの」
朱明がそう言うと、南王が口を開く。
「まぁ、人間の方からすれば、わからないだけで充分怖いものよね。私も、火王もそう思っていたようだし。でも、天は暗い世を照らして、平和な世界を望んだ。充分、“善い人”だって思わない？」
南王がファンの方に目配せし、ファンは幾分か明るい顔で応えた。
「それなら、ずっと前から御柱は見てみたいって思ってたんです。天まで届いているって本当ですか？」
ああ、と答えると、ファンは目を輝かせた。それに朱明が説明を足す。
「天へと続く地ゆえに、人はあの場所に答えを求めに行くというな。答えが返ってくることもあるというぞ。ならば、少年、そなたの抱える疑問もあるいは解を得られるやもしれぬ」
「楽しみにしているといい、あの光景は壮観だ」
御柱は暗き地にたてられた光の剣だ。そう言ってやると、ファンは嬉しそうな顔をした。これなら、バクの心配も杞憂（きゆう）で済むだろう。
「なら、充分に体を休ませておかないとな。御柱までの道は険しいんだ。明日中には用意を終わらせておくぞ」
頷くファンを見て、こちらも充分に満ちたような気持ちになる。話しながらでは冷めがちになる茶を急いですすり、シンもようやく息をついた。

火の守り

次の日、しっかりと準備をして、翌朝南都を出発することになった。ファンは自分の分の準備を終えて、あとは集落の人達の手伝いに行った。家が燃えた人達もいたが、心配には及ばないよ、と彼らは笑う。シャオに次の日の朝には旅立つことを告げると、必ず見送りに行くから待ってて、と言われた。翌日こうして出て見ると、待つどころか日の出前から待っていたのか、ダーシュやシャオ、集落の人達が何人か待っていた。

そこで、同じく見送りに出ていた近衛(このえ)連れの南王と、侍従(じじゅう)の少年に扮(ふん)した朱明とはち合わせた集落の人達が一斉に叩頭(こうとう)してしまう騒ぎになってしまったが、南王が止めなければ罰する、と言うと皆が頭を上げた。

「これじゃあ見送りにならないじゃないの」

と小さな声で言うのが案外に響いてしまって、みんなは笑いながら服の砂を払ったのだった。

師匠は王宮に預けていた剣を帯び直していて、朱明さん間、集落の人達と話した。シャオは見送りが終わったら、また花飾りを売りに行くと籠を持っていた。シャオの近くに行くと、シャオはその籠の中から玉の首飾りをひとつ出して言う。

「これ、お守りにして。細工はあんまり上手じゃないけど、頑張って探したの」

「すごい！　これ、シャオが作ったの？」

首にかけて貰って、ファンはその石をじっと眺める。小刀の形に削られた玉は、火を固めたような朱色で、朝日に照らされて今にも燃え上がりそうに見えた。

「南を出る旅人がお守りにする石だが、最近はあまり大きいものがなくてね」

ダーシュさんが満足気に微笑み、シャオの肩に手をやる。

「集落の皆で祈らせてもらった。我々の恩人である、君とお師匠さんの旅の無事を願って」
「ありがとうございます！」
微かに熱を持ったようなその石を胸に、ファンは頭を下げた。そこで、ふとシャオとあった時のことを思い出す。落としてしまわぬようにしっかりとしまわれた花飾り。
「そうだ、シャオ、一つ花飾り貸して」
不思議そうなシャオから花飾りをひとつ借りると、飾りを二つに結ってあるシャオの髪の、片方に差してみる。
「せっかく髪飾り売るなら見本がないと！　ね、シャオ」
シャオは、でも、と少し照れた様子で辺りを見回したが、父親が頷くのを見て、にこりと笑む。
「そっか。うん、そうする！　良い見本になれてる？」
何度も頷くと、シャオは飾りの花に負けない明るさで笑った。
師に呼ばれているのに気付いて、ファンはそちらへ向かう。揃って都の北にある門を出ると、朱明がこちらに駆け寄ってきて、辺りに気取られぬように、二人の胸に小さな火をともした。火はすっと体の中に吸い込まれていき、朱明は言う。
「火の護りを貴公らに。息災であれ、句芒（こうぼう）、ファン少年」
シンが礼を言うと、朱明は南王の横にさっと下がる。別れを告げて、後ろに向かってファンは大きく手を振りながら、進む。
「ファン！」
シャオの声に、前を向きかけていたファンは足を止め、振り返る。
「また……またきっと会えるよね？」
届いた涙交じりの声に、ファンは息をいっぱい吸って、声を張る。
「きっと！　また会いに来る！」
返事は無くても約束を交わしたのは確か。素養が定まった時でも、そうで無くても、きっとまた会えるだろう。ファンはシンに促されながら、陽に照らされ金色に輝く遠くの山を目指し、力強く歩き出した。

町と王府、集落三方を交えた話し合いの後、その報告と民に対する自分の意志を表明するため、南王は都の人々の前に現れた。国の象徴たる美しき王の、その身を飾っていた花飾りが噂になるのはそのもう少し後の話だが、その場における南王の朗らかな声とその言葉は、都だけでなく、広く赤の国の民を鼓舞した。

国主たる朱の衣は南の人の心を示す温かな火を表す。それはまた、旅立った二人を見送った朝日の、道を明るく照らす色だった。

赤の国の章、了。

至黄の道（前書き）

赤の国の章の続きです

至黄の道

四方の国から御柱へ向かう道は、すべてが山を越える険しい道である。それは中央の黄の地が、御柱を中心に円を描く山脈、金環山に囲まれているからだ。金環山は御柱が天より降りたる時に衝撃で生まれた山で、黄の地を守る自然の塁壁となっている。

四方を巡る環状の大街道に比べ、四方から御柱へ向かう道はそれほど整備されていない。それは他でもなく、黄の地が降神の地であり、天の在す地であるからだ。人の出入りは周囲の国に比べれば無いに等しい。

しかし、少ないといえども、人々は御柱に憧れ、悩み行き詰る時そこへ向かう。そのために、先人たちは四方からそれぞれ天嶮を切り崩し、現在、至黄の道と呼ばれる細い街道を得た。

赤の国の首都南都を出て、シンとファンは南からの至黄の道を北上していた。人通りは少なく、見える人も旅人ではなく、野良へ仕事にでる里村の人々のようだ。街道と違い、過客を寄せる宿はないが、それでもここまでは野宿の憂き目には遭っていない。幸いにして、立ち寄る村々で宿を得ることができたからだ。

いよいよ金環山に入ろうかとする、山裾から数里離れた村で二人は身支度を整えた。山の向こうに町は無いため、ここからは一気に峠を越えなければならない。

「支度は済んだか、ファン」

まだ少し眠そうだが、はっきりした声でファンが返事をする。シンは空の様子を確かめる。西の空はまだ薄暗いが、雲の影は無い。その内にファンが隣にきて、大丈夫だと頷いて見せた。

「旅人さん達や、朝だ……あれ、もう起きていたのかい」

二人が納屋を貸してくれた農家の主人が、納屋の戸を開け放ちながらやってきた。

「今日中に峠を越えようと思いますので。お世話になりました」

路銀から寄っておいた銀を数枚、懐から取り出し、シンは主人に礼を言う。農家の主人は握らされた銀をまじまじ見ながら、はぁ、と驚きの息をついた。

「こっちは何にも構いやしないのに。屋根を載せておくのにこんなにかかるもんかね」

「いいえ、どこの宿にも劣りません。突然の申し出にも関わらず、こうして体を休めることができました。気持ちだと思っていただきたい」

「そうかね。なんだか、悪いね」

懐に銀をしまった主人はふと視線をファンにうつし、心配そうに問う。

「坊っちゃんも山へ入るのかい？」

「はい、師匠と一緒に。御柱が見られると思えば、山道もきっと頑張れます！」

そうかそうか、と主人は笑ったが、心配そうな表情は消えなかった。ファンもそれが気になったらしく、さっと不安げな顔になりながら、尋ね返す。

「あの、何かあるんですか？」

主人は、なんともないと思うがねぇ、と前置きしながら、山への道を見ながら言う。

「最近、山に見たこともないような大きな鳥が出たって話でね、それこそ子供くらいなら呑んじまうような大きさだってきいたもんでさ。いや、坊ちゃんはもう子供って歳じゃないだろうけど、近頃獣も騒いでいるようだからね」

ファンの不安がはっきりしたのに対して、シンは把握した、といった顔で、笑みを浮かべた。

「心配いりません、ある程度の心得はあります」

主人もシンがそういうなら、とその顔を明るくして、気をつけてな、と二人に声をかけた。外では鶏が放されていて、一生懸命に餌をついばんでいるところだった。厩舎の方からは微かに、馬が餌を

ねだる蹄（ひづめ）の音がする。前にそびえる金環山にはうっすらと霧がかかり、朝日に照らされて金に輝いている。ファンは本当に大丈夫だろうか、と何やら考えている様子だったが、数歩歩き出して振り返り、主人に深く礼をした。

二人がさて、歩き出そうか、と農家に背を向けたところで、再びそこの主人に呼び止められた。主人は歩いてくると、そういえば、と話し始める。

「峠の入り口に、イェンジーっつう変な男がいるんだが、まぁ、危ないわけじゃないんだけど、本当に変わりもんだからね。念のために教えておくよ」

「男……？　わかりました、御忠告感謝します」

シンは改めて、主人に礼を述べて、踵（きびす）を返す。更に心配ごとが増えて浮かない顔のファンを促し、御柱へ向かい、そびえる天嶮へと踏み出した。

神性の獣

「師匠、大きい鳥って、やっぱり肉を食べたりするんでしょうか」
先ほどの村から離れて少し、ファンはそう訊ねてきた。そうだった、とシンは表情を緩め、心配ない、と笑う。
「朱明が、陽山の主が山を空けていると言っていた。村人が見たのはおそらく彼女のことだろう」
「朱明さんの、お姉さんですか？」
「ああ。鸞（らん）という聖獣だ。俺もあまりお会いしたことはないが、こちらに来られたようだな」
勾配はだんだんと急になり、いくつも上り下りが続いた。陽が高くなり、空気が熱を持ち始めた頃、二人は休憩を取ることにした。ファンは水の音を聞きつけて、水筒の水を飲み干すと、二人分、新たに水を汲みにいった。山頂まで行かずに山を越えられるのは大いに先人に感謝するところだが、それでも御柱までの道は険しい。衿（えり）元（もと）を広く開けて空気を入れながら、浮いた汗を拭いた。木立からの風がひやりと肌を撫でる。
沢から戻ってきたファンはシンの分の水筒を手渡し、横に座る。もらった水を口に含み、ファンは、そういえば、と尋ねて来る。
「師匠、神獣と聖獣ってどう違うんですか？　外の獣とか、魔獣とは違うのはわかるんですが」
そうだな、と一呼吸おいて、シンは答える。
「随分昔の話になるが、建国の頃、天が世を五つに分けると言いだした。中央は天だが、残りの四方とそこにやった力を統べる者が必要になったんだ」
建国の頃、と聞いてファンは身を乗り出すようにして、それに相槌を打った。
「だが、天の力は強大だからな、人間がそれにあてられれば、下手をすると死にかねん。そこで、天はもともと四方に在した獣のうち、

より力の強いものを選び、守護として据えたんだ。元々の力に天の力を合わせ、他の獣と気を治める。それが、四方一柱の神獣で、東の地は俺が選ばれた。南は朱明だ」

シンはそこで一度水を含み飲み、ふう、と息をつく。

「天の意に沿い、強い力を持ちつつも使命を得なかったもの、使命を辞したものがいる。それが聖獣だ。今は野の獣が長く生きたり、生まれついたりして強い力をもつと、それを聖獣というようだ。あぁ、霊獣ともいうか。ともかく、神獣以外の力ある獣が聖獣だと思えばいい」

なるほど、というようにファンは感嘆のため息を漏らす。

「俺もはじめはただの獣だった。天が出て来るまでは、今こうしていることなど、考えもしなかっただろうな」

「なんだか、師匠が獣だなんて、おれには考えられないです」

ファンが首を傾げながらそう呟き、応えてシンは微笑む。

「俺はずっと人の傍にいて、人と共に過ごしてきたからな」

山に向かってざあっと風が吹き抜ける。南都の方の青草の匂いが微かに交じる、夏の風だ。体の汗が引いたのを感じてシンは立ち上がり、ファンを見下ろして言う。

「そろそろ行くか。それとも、もう少し休んでいくか？」

「大丈夫です、行けます！」

ファンは弾かれるように立ちあがり、荷物を背負いこんだ。それでもここまでかなりの距離を上ってきたはずだ。切り割りを抜ければ、御柱が見えるだろう。

そう思って歩き出して、しばらく。切り割りまで続くはずの林は突然にして途切れ、目の前に開けた場所が現れた。そして、二人は呆然として立ちつくす。そこには、険しい山中とは思えぬほどの、息をのむような花畑が広がっていたのだ。

桃源郷

「師匠、これって……」

ファンがこちらに尋ねて来るが、シンとしても答えようがなかった。一面に広がる花はすべて咲き誇り、様々な鳥が頭上で歌う。水の流れる沢は陽に照らされてきらきらと、底の玉石は白く輝く。近くに果樹があるのか、花の香に混じり水菓子の匂いがする。そして、その奥、山の岩肌が深灰色にあらわになっている手前には小さな庵が建てられていた。

頂上まではまだ遠いとしても勾配の厳しくなってきた中腹に、このような開けたところがあるはずはない。その上、金環山は天の傍(そば)元(もと)。山の中に家を建てようとすることは不届き、とされてきたのだ。ならば、この光景は異常。

「少しここで待て、ファン」

林の切れ目から、花の上へ足を踏み出す。四凶の気配はないが、踏みこんでみるとやはり外とは異なる気が漂っていた。花の香も沢の水も、シンにとってはやや強すぎるほど香を立てている。そして、踏みこんでから微かに漂う酒のにおい。

「――異界か」

そこにあって、そこにない空間。繋がりながらも、閉ざされ隔絶された場所だ。しゃがみ込み、掌を地に伏せる。この場を覆う気を手繰る。あたかも、当たり前のように存在する、当たり前でないこの絶景には、目的や手段ならば持つ積極性を欠いていた。拒絶や排除のような害意も、歓待する意志もない。ただ、存在しているだけの霊(くし)び。

「ファン、注意して入って来い。大丈夫だ」

ファンが恐る恐る前に踏み出し、確かなのを確認して、シンの隣に寄る。

「師匠、ここっておかしいですよね」

ファンはしゃがみ込み、足元に咲く白く小さい花に触れながら、こちらを見あげて言う。
「この花、確か今の時期は咲かないんです。この時期は若芽を薬にするんだって、先生が」
「ああ。それ以外にもおかしいところがある。気の流れもな。ファン、桃源郷というのを聞いたことがないか？」
ファンは立ち上がり、頷く。
「たしか、昔話に、仙人の住む、憂(うれ)いのない国だって」
「そうだ。もとは天に仕える仙が、外に干渉を受けずに業を行うために作り出す異界だった。おそらく、ここもそうだろう」
何のためにかはわからないが、シンが知る限りここまでの異界はそうお目にかかれるものではない。天から誰か遣わされているのか。
「仙人がいるってことですか？」
「たぶんな。だが、誰が出て来るというわけでもないようだ」
こちらに用があってのことではなさそうだ。シンは辺りを見回す。庵の中か、どこかに主がいるのだろうが、出て来る気配もない。
「行こう。用のない者があまり異界に留まってもな。抜ければ、峠だ」
花の上を突っ切って、再び林の中に入る。異界で見えていた岩壁は外に続いている。辿れば黄の地に抜ける切り割りがあるはずだ。
少し歩いて、再び足を止める羽目になった。目の前にはずっと続いていた岩壁。黄の地まで続くはずの道は、そこで途切れていた。否、途切れされられた、というのに近いか。ファンもそれが尋常でないのがわかるのだろう。走り出て、ぺたぺたと岩壁に触れる。
「普通の岩、みたいですけど……」
シンも岩壁に手を触れる。岩はひやりと冷たく、紛うことなき本物の質感。だが、微かに。
「ファン、龍化してここに触れてみろ。大丈夫だ、集中すればできる」
ファンは静かに頷き、深く呼吸する。ざわ、と風が騒ぎ、その周

りで吹くと、次の瞬間にファンは龍化していた。毎日の練のおかげか、随分滑らかにできるようになった。充分。そう頷いて見せるとファンはほっとしたように笑った。道から外れた岩壁の部分と、道があったはずの岩壁に触れさせる。

「その状態なら、わかるな？」

ファンは順々に岩に触れ、正面の岩に触れてはっとした表情で振り返った。シンはそれに応えて頷く。

「ここからは、あの異界と同じ気を感じる。それに、酒と……微かだが墨のにおいだ」

「字を書く、墨ですか？」

「ああ。戻ろう。あの異界の主に話を聞かなければな」

はい、と返事をして、ファンは龍化を解く。岩壁を後にしようと、二人が踵を返すと、その上をさっと影が覆った。続いて、大きな羽音。麓（ふもと）で聞いた鳥だろう。ファンが隣で体を強張らせたのに気付き、シンは降り立ったであろう林の方に目を凝らした。

陽山の主

ファンはシンの見た方を、同じようにじっと見つめた。とりあえず、シンが身構えないから、襲われる心配はないのだろう。

「懐かしい顔。しかも、子供連れ」

聞こえてきたのは、女の子の声だった。子供、と言われてちょっとむっとしたが、シンを懐かしいというのなら、当然自分は子供に見えるとは思う。確かに、大人ではない。やはり、とシンが呟くのが聞こえた。

「鸞(らん)殿か。陽山を離れたと聞いていたが、こちらにいらっしゃったとは」

シンが声のした方に話しかける。

「別にあそこにいなきゃいけない理由もないし。あんたや弟と違ってね。ま、龍がここにいるってことは、とうとう龍も気が変わって、自分の国をほっぽり出したってわけ？」

まだ姿を見せない声の主は、木立の向こうから素っ気なく言う。

「いえ、国を離れてはいますが、少し空けただけでいずれ戻ります。今は用があって、御柱に」

「あー、理由までは別に言わなくていいわ、興味ないから。で、その子何？」

こっちからは見えないが、視線を向けられているのに気付いて、ファンはそちらに向かって答える。

「ファンといいます！　師匠の弟子です」

「ふーん、弟子、ねぇ。相変わらず、人間ごっこが好きなんだ」

こちらへの返事、というよりは、シンに対しての会話の続きといった感じで、声が返る。それにしても突き放したような言い方で、なんだかもやもやした。嫌な感じだ。神獣、聖獣の間の話に自分が割って入ったのが悪いのかもしれないが、それ以上に、シンに対する答えにしても、嫌な言い方じゃないのか。

「相変わらずの御様子。姿も見せずに会話をなさるのは構わないが、いささか礼儀に欠くようだ。それしきのこと、人里離れて忘れられたか」

微かに、シンの声から自分と同じような感情を感じて、ファンはシンの方を見る。怒っているのかもしれない。そう思っていると、向こうからもわずかに身じろぐ音が聞こえた。

「……悪かったわ。でも、このままでいさせて。理由はわかるでしょ」

返ってきたばつの悪そうな声音に、シンが語調を戻し、応える。

「ええ、そのままで結構。多少急ぎの道で、こちらも気を立てていて申し訳ない。ただ、鸞殿、ここにあった道が消えた原因を知りたいのだが、貴女（あなた）は何か知らないか。陽山が通れぬ今、ここを通れねば困るのだ」

間があって、林の中から声が返る。

「異界を見たでしょ。あそこの人間に聞けばわかるんじゃないの。一日中、お酒飲んで寝てるばっかりで、起きたといえば――」

「鸞殿？」

シンが意外そうな声で呼びかけると、鸞は慌てて口をつぐんだ。そして、まごついた声が返ってくる。いかにも、女の子、といった感じの声だった。つっけんどんな言い方でなく、照れたような、少女の声にあった言い方で。

「とにかく！　それはあたしがやったんじゃないの！　さっさと行って！　醜い奴！」

喚くような返事だ。見ると、シンは意味ありげに笑っていた。

「ありがとう、そうします。さて、行くぞ、ファン」

下の方へと歩き出したシンについていくが、ファンはやはり気になって鸞がいるであろう木立を見やる。まだ木立の奥にいるようだった。じっと見ていたら気付いたのか、少女の声に早く！　と急かされた。なんだか最初と随分雰囲気が違うように思う。

二人は急ぎ足で山道を下りたが、シンは始終笑みを浮かべていた。

「何か面白いことがあったんですか」
「いや、ずっと見ていたらしいからな。珍しいこともある、と思ったんだ」
「あのひとは、人間が嫌いなんですか？」
シンはいいや、と首を振る。
「興味がない、としていたいだけなんだろう。それに、彼女にも色々思う所はある。途中の言動もあまり気にするなよ、ファン。ああいう人だ」
それでも、変な人だ、と思う。早足で道を下ると、すぐにあの異界に辿りついた。ファンには花の匂いしかしなかったが、横でシンが、間違いないな、と呟く。
「ここを作り出した大元（おおもと）がいるはずだ。道を戻してもらわなければ」
再度花畑の上へ踏み出して、ファンはせせらぎと鳥の声以外の音に気がついた。小さな地鳴りのような、繰り返される低い音。
「師匠、なんか……いびきが聞こえるんですが、主でしょうか」
「さっきは聞こえかったな。庵か」
無為の風景の中に、人為のものであるのに滑らかに溶け込み、馴染み、その庵は建っている。そして、ここの主のものであろう高いびきは、開け放たれた窓や簾（す）の上げられた入り口から、遠慮なしに響いていた。

酔いどれ絵師

庵（いおり）に近づくと、ファンの鼻にも酒のにおいがわかったようだった。顔をしかめ、怪訝（けげん）そうに庵の方を注視している。酒のにおい、というよりは、酔っ払いの臭いだ。この何もかも均整のとれた場所で、そのいびきと酒臭さはいやに浮いている。

「失礼する。旅の者だが、どなたかいらっしゃるか」

巻き上げられた簾（す）をくぐり、シンは中に向かって声をかける。返事はない。もう一歩踏み込んで、二人は庵の中へ入る。明媚な外とは一転、そこはむっとするような酒の臭いが漂う、狭くごちゃごちゃと散らかった部屋だった。卓子（たくす）の上下を問わず食べかけの食べ物が転がり、その間を埋めるように無数の紙が散らばっていた。奥には酒、と大書された甕（かめ）が置いてあった。中は充分にあるようだ。酒の臭いに紛れて、墨のにおいもしている。そして。

「お休みのところ失礼する、この異界の主殿だろうか」

寝台の上に寝転がる姿を見て、シンは声をかける。男のようだった。風体をいえば、この庵の中にふさわしく、外の景色には似つかわしくない格好。ごろり、と寝返りをうち、大口を開けて眠るその顔には不精髭がある。起こすつもりで声をかけたが、男は起きる様子がなかった。

「師匠、これって」

ふいに袖を引かれて振り返ると、ファンは散らかった紙の一枚を拾い上げているところだった。

「ここの絵、ですよね」

紙上に描かれていたのは、二人がこの異界に来て初めて見た光景そのものだった。咲く花や小川の流れに、僅かな狂いもない。シンは、卓子の上で果物の下になっていた紙を取り上げる。描かれるのはただの岩壁だが、おそらく切り割りのあった場所だ。シンは辺りを見回し、散らかる絵を見る。食べ物や外に咲く花、酒の入った甕

が描かれている。これらは手近なものを描いた、というよりはむしろ――

「……そういうことか」

男は今度はこちらと逆方向に寝返っている。シンは紙を置き、寝台に近寄り、多少力を入れて肩を叩いて男を揺り起す。再び体をこちらに向けられると、男はようやく起き上がった。

「何だ小娘……ん？　誰だ、てめぇら」

「起こして済まない。旅の者だが、黄の国に入る道について、お尋ねしたい」

「ああ？　道？」

男はぼりぼりと懐を掻き、ちょっと待ってな、と言って立ち上がった。よたよたと庵の中を歩き、酒の甕のところまでいくと柄杓で何倍も酒を飲んだ。大きく酒臭い息をつくと、男は再び寝台に座る。

「山越える道っつったら、一本道だろうが。まっすぐ行きゃあいいんだ」

「その一本しかない道が消えてなくなってしまっていたのだ。――この絵は貴公が書かれたのか」

切り割りがあるはずの場所にあった岩壁と違わぬ絵を、目の前につきだす。男は首をひねりながら、それをじっと見つめて、しばらくして、ああ、と声を上げた。

「そういや、そんなもんも描いたっけな」

「この異界も貴公が描いたのだろう？　さぞかし名のある仙とお見受けするが……」

シンは辺りの物を見回して尋ねる。仙の中でも絵を描き、その力を具現させる者がいると聞いていたが、おそらく目の前の男がそうなのだろう。だが、そう言うと男は首を傾げ、わからぬといったふうに応える。

「仙？　おれぁただの絵描きだ。まぁ、描くとそうなるってのは随分前に気付いたけどな」

「描くもの全部がそうなるんですか？」

ファンが絵を数枚取り上げ、男に問う。ここの食べ物もおそらくそうなのだろう。しかし、食べても消えぬ果物も摘んでも消えぬ花も、幻でないものを描き出すとなるとよほどの力がいるはずだ。男に自覚は無いようだが、間違いなく仙。それもそうそう現れるような者ではない。

「いや、気が乗った時のだけだ。描きてぇと思ったもんだけな」

男はそう言って、寝台の横に転がっていた果物を拾い、かじった。当たり前のようにそれらを食べながら、男は再びごろり、と横になる。

「まあ、そういうこった。道は諦めな」

こちらの驚くのに反して、男は物を食(は)みながら、当然と言わんばかりに応える。

「おれぁ今、そんな道なんざ描く気がねぇんだ。描いたところで、たぶん何にもならねぇだろうしな」

その答えに、ファンが窺(うかが)うように尋ねる。

「絵を破ったら……」

「ああ、そりゃ駄目だぞ、鹿みてぇな小僧。一度出たもんは戻らねぇ。――まぁ、どうしてもってんなら、俺の気が向くのを待ちゃあいい。屋根もあるし、冷えねぇし、食うもんにも困らねぇだろ」

その答えに、シンはファンと顔を見合わせた。確かに、男がどのくらいで描き終えるのかはしらないが、今すぐ絵を描いてもらったところで、越える前に日が暮れてしまうだろう。とりあえず、この男の気を向けることが今一番の早道か。

「……では、すまないが宿をお借りする。もし何かあればすぐ言ってもらって構わない」

「おう、そうか。勝手にしてくれ。……ああ、そうだ。おれぁイェンジーっつうんだ。ま、これから精々(せいぜい)、辛抱強く待つんだな」

そう言ってすぐ、再び寝息を立て始めた絵師の男に、二人は改めて嘆息した。

習作の少女

寝息は瞬く間にいびきに戻り、二人はとりあえず、といった感じで辺りを見回した。イェンジーと名乗ったこの男は、鸞(らん)が言ったように過ごしているのなら、起きては酒を飲み、気が向けば描き、そして、こうして眠っているのだろう。

「参ったな。どうやらこの御仁が絵を描くまでは、先に進めん」

仙人は得てして変わり者だと聞くし、知る限りの仙も確かにそうだと言えたが、よりによって今回もそういう偏屈者にあたってしまったようだ。この異界ですら、イェンジーが頓着せず、居座ることを許したからここに居られるが、もし敵とでも邪魔者とでも思えば、すぐにでもはじき出されるだろう。残れただけでもよかったのか。

「他に方法はないんでしょうか」

ファンは床に落ちている絵を見て、一枚一枚拾い集めながら、そう訊ねた。

「あるんだろうが……仙の術となると、俺は門外漢だ。だから、本人が解ければ一番早いんだが、無自覚に術を使っているのならそのすべも知るまい」

「やっぱり上書きしてもらうしかないんですかね」

ファンは床に落ちていた絵を集め終わり、卓子の上でとんとんと打ち揃えた。

「でも、こんなに綺麗な絵を、この人が描いてるってなんだか信じられませんね」

「人は見かけによらんということだな。……ちょっと待て、それを貸してくれ」

シンはファンから絵の束を受け取り、凝視する。花鳥(かちょう)の絵の中に数枚、人を描いた作品がある。筆遊(すさ)びに描いたようなものだが、どうも見覚えのある顔。十五、六の少女の、座り込んだ絵だ。どれも後ろ姿や横顔ばかりで、人物画にしては良い向きではない。

「ファン、まだ山歩きできるか？」
シンは卓子の上に紙を置き、尋ねる。こちらを気にしながらも、食べ物を拾い集めていたファンは、果物を抱えて頷いた。が、小動物の無くような音がして、ファンはさっとその顔を赤らめる。
「す、すいません」
腹の虫を上から押さえつけて、ファンはこちらを見上げ謝る。それに応えて、シンは笑って首を振る。
「食べても構わんらしい、少し頂戴して腹に入れたらまた山に戻ろう。次は少し林の中に入る」
「林に、絵の人に関わるものがあるんですか？」
「絵の雛型に覚えがあってな。それと、ひょっとすると仙の術を解く方法が得られるかもしれん」
そこまで言うとファンも、合点がいった、という顔で頷いた。絵の主は当分起きる気配がない。二人はとりあえず庵（いおり）の床に腰かけ、男が描いたという食べものに、おずおず口をつけたのだった。
腹ごしらえを済ませ、異界から出ると日は真上から照らしていた。山の上とはいえ流石に暑さを感じるが、山の上へと吹きあがる風のおかげでそれほど酷に思わず済む。
「とりあえず、また切り割りの方へと向かうか」
「その、鸞という人を探しに行くんですよね？」
ああ、と頷いて返し、その表情を険しくする。
「逃げられなければよいのだが。あの人は姿を見られるのを極端に嫌う」
鸞ほどの聖獣なら同じ場所にいれば場所も知れるが、それは向こうにとっても同じだろう。顔見知りということで、向こうがあまり警戒していなければいい。とりあえず、先ほどのように藪の向こうでもいいのだが。

噴煙の色

シンについて、再び山を登る。旅を始めてしばらく経つから、歩くのは得意になったし、元から動くのが好きだけれど、山登りはやはりそれらとは少し勝手が違うようだ。じわじわ汗が滲むから、ファンは途中で何度も水を飲んだ。

「大丈夫か？」

シンがこちらに振り返って尋ねて来る。

「大丈夫です！　町の周りってあんまり高い山ってなかったんで、まだちょっと慣れないですけど」

「歩くのが辛いと思ったら、龍化する時の、気を巡らせている状態を思い描くといい。少しは楽になるはずだ」

言われた通り少し足を止め、息を整える。朱雀の力を得て、それが対比するからか龍化は確実にできるようになった。朱雀化はやっぱり慣れなくて、まだ上手くできない。青龍の気を少し巡らせると、少し体が軽くなったような気がした。

「気の巡りと体の調子は繋がっているからな。あとは歩きながらできればいい」

そう言って、シンは笑う。楽になった足を踏み出し、切り割りの前で、シンが林の中へと入っていった。ファンもそれについて入る。林の中は多少日陰になっているからか、ぐっと涼しく感じられる。入りこんでしばらく、微かに沢の音が聞こえるから、さっき水を汲んだ場所が近いのかもしれない

「さてな、近くにいるはずなんだがな」

シンが足を止めて、辺りを見回す。

足が止まったついでに、ファンは水筒を取りだした。が、逆さにしても、水は一滴滴（したた）っただけで、それっきり落ちてこなかった。さっき汲んだばかりだが、道中で飲み過ぎたのか。もしまだ歩くなら、また汲んでおいたほうがいいかもしれない。

「師匠、ちょっと沢に行ってきます。水筒、もう空になってしまって」

「わかった。気をつけて行って来い。……少し降りたところに水場があるようだな、水の匂いがする。汲むのはそちらの方が楽なんじゃないか」

「そうします！　すぐ戻りますね」

シンが示した方向に向けて、林の中を駆け下る。水の音はだんだんと大きくなり、ちかちかと光が照るのが見えた。水場は近く、それなりに広いのかもしれない。水があると思うと喉が渇いてきて、ファンは駆けこむように林から沢へと飛びだした。

「誰！」

誰何（すいか）の声がして、ファンは目線を落としていた水場から顔を上げた。そして、ぎょっとして体を硬直させる。小さな滝の手前、水の深くたまった場所に、慌てた様子で沈む込む肢体（したい）。水面を通して見える肌は白いが、所々煤（すす）けたように黒く見えた。長く、水に浸された髪は煙色で――歳の頃十六、七の少女。

「うわあぁ！　ごめんなさい！」

元の藪（やぶ）に駆け戻って、水場を背に再び謝る。

「ごめんなさい、見るつもりはなくて！　というか、人がいると思わなくて！」

「どっか行ってよ！　早く！」

すぐに、と戻ろうとして、水筒を水場に置いてきてしまったことに気がついた。立ち去るのがすじだろうと思うが、あれを置いていくわけにはいかない。

「どうした、ファン！」

そうこうしているうちに、シンの声がこちらに近づいてくる。大声を上げたのがまずかったか、ここにさらに人を呼んでは――

「師匠、おれは大丈夫です、来ないでください！」

「そうは言っても、お前、何があったのか……」

藪を分け入る音が近くなり、ファンがシンのほうへ駆け寄ろうと

すると、水場から声が返ってきた。
「龍！　それ以上近寄ったらただじゃおかない。あと、小さい人間、あんたも振り返ったら殺すから」
　ファンは頭を抱えていたのを解いて、声に驚く。あの切り割りの傍で聞いた、少女の声だった。では、あの少女が鸞（らん）だというのか。ファンから辛うじて見える場所で、足を止めたシンも、成程（なるほど）、と渋い顔で頷いた。
「あたし、姿を見られるのは嫌だって、そう言ったわよね、龍。この姿。ばさばさの髪も、煤（すす）けた手足も、醜いこの姿は何もかも」
　水場の少女――鸞が叫ぶように言う。それに応えて、シンが声を張る。
「何か失礼があったなら、謝ろう。鸞殿。ただ、我々は山を越える方法を探していて」
「そんなに山を越えたいなら、龍になればいいでしょ！　巻き込まないでって言ってるのに！」
　背後の水場から、大きな羽音と水の音がする。上空に影が差したのが見えて、ファンはふと上を見あげる。通り過ぎる巨大な鳥。砂と煙と、炭の色の翼は羽音をと立てながら遠ざかっていった。シンが駆け寄ってきて、ファンはうなだれる。
「すいません、師匠。おれのせいで……」
「いや、仕方がないだろう。俺も考えが足りなかった。まさかあの場所にいらっしゃったとはな。それにしても……まだ気にしてらっしゃったのか」
　シンは鸞の飛んで行った方を見て、残念そうに呟いた。
「鸞殿の姿をどう見た」
「えっ、いや、あのまじまじと見るわけにはいかなくて……」
「国を護する朱雀の、姉として見てどう思った」
　シンが再び尋ねて、ファンは改めて考えた。鳥の、朱雀と鸞の姿は。
「朱雀の姉だってきいて、おれもっと派手な感じだと思ってました」

「それを、彼女は気にしている。神鳥朱雀の姉であり、時を同じくして生まれた自分が、朱雀に対してあまりにも醜いと嘆き、ずっと人目を断ってこられたのだ」

シンの言葉に、ファンは俯く。陽山の焔（ほむら）のような弟と、陽山の荒々しい岩や吹きあがる煙のような姉。たしかに、そう言われれば、そう思うこともあるのかもしれない。

「でも、師匠」

そう口を開くと、シンはこちらを見る。

「遠目だったし、一瞬だけでしたけど、綺麗だって思ったんです」

「……そうだろう。俺もかつて会ったときもそう思ったが、彼女自身がそれを聞こうとしないのだ」

シンはため息をつき、道の方へと歩き出す。

「しかし、仙の術のことを聞きそびれた。やはり、あの御仁に絵を描くのを待つしかないか。戻ろう、ファン」

二人は言葉少なに道に戻り、再びあの異界に向かって歩き出した。ファンが心もち気落ちしたように見えるのは、やはり鸞の機嫌を損ねたのを気にしているのだろう。

「あの、鸞さん、やっぱり怒っていますよね……」

「あまり気にするな。怒っていようといまいと、お前個人に対して腹を立てているわけじゃあない。それに、駄目で元々の話だったんだ、この広い山から見つかっただけでも良しとしないとな。――謝るのなら、俺も謝らなければならんから、それは今、一旦置いておこう」

南からの至黄の道に垂直に、日は天頂を過ぎ、地平へと向かう。まだ殆ど真上から照っているが、ここまでくればもう、今日越えることは諦めた方がいいだろう。

「そういえば、鸞さんが『山を越えたいなら龍になれ』って言ってましたけど……」

「ああ、それか。この事態だからな、飛んで入れるなら龍になっても構わないが、この山に関しては意味がない。山の頂には結界があってな。天の創った防壁は力を持つものを通してくれん」

「逆じゃないんですか？」

「いや、いいんだ。天は神獣を中継に、四方均等に力を配した。天の力は配された後、一度神獣に集まるんだ。俺は今この体で移動しているし、別の物にその役を任せているからいいが、それでも龍になるとあるべき様に、俺に力が来てしまう。分かたれた大きな力を持って移動すれば、均衡は崩れる」

「四方の均衡を保つために、神獣を中に入れないということですか？」

「ああ、そうだ」

応えてやると、ファンはまた考え込み始めた。そして、しばらく

して再び口を開く。
「じゃあ、もし御柱で何かが起こったら、神獣は天を助けに行けないんですね」
思いもつかないことで、シンは思わず笑みをこぼしていた。
「天を助けに、か。天に助けられたことはあったが、そうか。それは考えたこともなかったな。確かに、そういうことがあればこのままではきっと困るだろう。機会があれば奏上しておく」
そう答えると、ファンは嬉しそうに頷いた。
「師匠。聞いちゃいけなかったら、いいんですけど……天はどんな方なんですか？　この国を作って、魔と戦って、それでもまだ力があって」
どんな、と聞かれて、シンもあらためて考え込んだ。知っているとはいえ、それこそ万も昔の話だ。ファンや今生きる人間にとっては、絵巻に描かれた神の姿が天で、シンに取っては、どうだろう。
「俺も最後に参上して一万年経つからな。今はどうだかわからんが、姿も人柄もよくわからん、といった感じだった。姿も一定でなく、見るたびに違ったし、人の格好をすることもあった。人柄を言えば、もっとわからん。ただ、こちらに対して、興味を持っていたのはわかった。――思い出そうとすると、思い出せん。天自身、そういうようにしているのかもしれないな」
初めて会った時も、天がそこに存在していることを当たり前のように思った。その上で圧倒された。そして、この関係が生じたのだ。外に出て思い出そうとすると、即座に薄れてしまうその肖像と、確固と揺るがぬその存在。こればかりは形容しようのない感覚だ。
「御柱に行ったら会えるんでしょうか」
ファンが隣で呟く。
「どうかな。ここ数千年、姿を見たと言う者を聞かん。いや、見ているのかもしれないが、天だと認識した者はいないらしいぞ。傍仕えの仙や神官がわかる程度だ。……あえていうなら、あの空間にいる誰もが天でありうる」

「誰もが？」
「天はたまに人に化けて遊ぶんだそうだ。会えるといいな」
「はい！」
異界の花の香が微かにして、あの庵が近づいてきたのがわかる。
イェンジーは起きただろうか。御柱の外で生きる、はぐれ仙の男に再び話を聞かねばならない。
「そういえば、師匠」
下り道を先に歩くファンが、ふと足を止めて振り返る。
「どうした」
「先生も、天に会ったことがあるはずですよね。――天も夢を見るのでしょうか」
「かもしれないな。推し量れんような、大きな夢だろう」
きっと天が見る夢は、それこそ夢と現とつかぬようなものに違いない。

真の眼、虹の筆

庵（いおり）に戻ると、イェンジーが床に這いつくばっていた。寝台から転げ落ちたのかと思ったが、下には白い紙が引いてあり、手には筆を持っていた。

「何か描くんですか？」

ファンが進み出ると、イェンジーは筆を持った手でそれを制した。

「おっと、こっちに来んなよ。……そのとおりだが、壁のじゃねぇぞ、残念だったな。見る分には構わねぇが、紙を踏まれたらたまらねぇ。外にいてくれ」

イェンジーは振り返りもせず、蠅を追うように乾いた筆を振って見せた。言われた通り、二人は庵から足を引く。戸の外から、イェンジーを見た。壁を描く気がない、というより、これはつまり、壁以外に何か描きたいものがあるらしい。そして、それは考えた通りであるなら――

「あの、師匠……」

「待て、見ていろ」

ファンが何か言いかけたのを制止して、シンはイェンジーを見つめる。イェンジーは震えだした手を、ぐいと水差しの酒を飲んで止め、筆を振り上げた。その表情は、先ほどまでの大いびきの男のものではない。神懸かりの、才人の顔だった。傍らのファンが息を飲み、それを見る。イェンジーの手にした乾いた筆の先は、ひとりでにじわりと水気を帯びて、その先を虹に染めた。そこから紙上へと走る筆は、道を知るように滑らかに進む。

どれくらい経っただろうか、イェンジーは絵を描き終え、どっと床の上に倒れ込んだ。そして、ため息をつく。

「これも駄目か……」

終わったのを確かめて、庵の中に足を踏み入れた。

「見ても構わないか？」

「あー、別にいいぞ」
問うと、気が抜けたような声が返ってきた。イェンジーは億劫そうに、体を起こすと水差しの残りを飲み干し、再び寝台に倒れ込む。絵を手に取ると描かれたばかりだというのに、墨はもう乾いている。風景をそのまま閉じ込めたかのようで、筆ひとつで、細部に至るまで色を含めて再現されていた。絵の題材は、やはり。横から覗きこんだファンも、それに気付いたらしかった。
「師匠、この人……」
「ああ、間違いない。鸞殿(らん)か」
煙色の髪に、煤けた手足。端切れを接いだような粗末な服。不服そうに結ばれた薄い唇。シンがかつて見た姿のままで、ファンが先ほど見た姿であるらしかった。
二人が心当たりの声を上げると、それまで気だるげにこちらに背を向けていたイェンジーが、驚いたようにこちらに振り返る。
「あんたら、そいつを知ってるのか」
「……古い知り合いだが」
イェンジーは弾みをつけて起き上がり、寝台に座り直した。
「そいつ、よく来るんだよ。でも、決まっておれが寝てるときにしかきやがらねぇ。どこの小娘かしらねぇが、俺が倒れてると世話して、起き上がると逃げてく」
よこせ、とイェンジーはさっき描いた絵に手を伸ばした。渡してやると、今度はその絵の上を撫でる。
「変な奴でな、描こうとすると姿がぼやけて描けねぇんだ。無理して描くと、やっぱりこの恰好になる。見た通りに描けねぇ。向こうが見せているもんと、俺が見てるもんとばらばらでよ。——そうだな。おい、龍の兄(あん)ちゃん」
「……貴公にはそう見えるか。成程、その眼は」
龍、と呼ばれて、シンは改めて男の顔をじっと見る。ファンもこちらを一度見て、イェンジーを見て眼を見開いた。イェンジーの右目は白濁し、見つめても焦点が合わなかった。

「ああ、そうだ。こっちは見えちゃいねぇ。でも、人に見えるもんは見えねぇが、人に見えねぇ『本当』が見える。普通は、右も左も一緒に見えんだけどな。兄ちゃんは多少の違いしかねぇが、あの小娘は右と左が全然に違いやがる。その上、右に見えるように描けねぇと来たもんだ」

小僧、酒を、とイェンジーは水差しと甕を順に指して、言う。

「しっかり見て描きゃあ描けると思うが、逃げられちゃかなわねぇ。ま、見られたくねぇってんなら、これまで通りに盗み見て、きっちり描けんのを待つさ」

なら、とファンが何か言いかけて、こちらと顔を見合わせた。

「もし、その少女を連れてきたら、その後で切り割りを元通りに描き直してもらえるか？」

「ん？　いいぞ。連れてこれて、描き終わったらな」

ファンから受け取った酒を一気に飲み干し、男は立ち上がってよたよたと歩き出す。

「言い出したんなら、きっちり頼むぞ。さて、おれぁちょっと水でも……」

歩いて数歩、庵から出たすぐそこで、男は花の上に倒れ伏した。

慌てて駆け寄ったが、次いで聞こえてきたのは、またあの高いびき。

「参ったな。ファン！　手を貸してくれ」

シンは完全に脱力しているイェンジーの体を起こし、寝台の上へ転がした。

「これじゃあ、約束覚えているかわかりませんね」

ファンの言葉に合わせて、シンもため息をつく。とりあえず、今日はここで明日の陽を待とう。幸い鸞はまだこの辺りにいるようだから、説得は明日だ。

明け鳥を追う

鳥の鳴く声に目が覚めたファンは、ゆっくりと体を起こした。今回ばかりは疲れていてよかったと思う。酒酔いには多いと聞いたが、イェンジーがひっきりなしにいびきをかいていたせいで、寝付けないかと思ったのだ。それでも、荷物と腕で頭を覆ったおかげで、窓の月を見ているうちに、いつの間にか眠れたようだった。当のイェンジーは深い眠りに入ったのか、今は静かに呼吸していた。だらしなく開いた口からは、涎が垂れそうになっていた。そっと外に出て、体を伸ばす。深呼吸すると、朝の匂いに花の香が舞っているのがわかった。近くの小川で顔を洗い、手ぬぐいで開けた襟元をぐいと拭った。今は涼しいが、きっと今日も暑くなるだろう。

獣化の練習は、朝の日課だ。まだこうやって落ち着いた時にしか上手くいかないが、いつか意のままに使える日がくるように、今日も体中の気から、明けていく世界に意識を巡らせる。

しばらくして、シンが眠たそうに目を擦りながら起きてきた。

「早いな、ファン。よく眠れたか」

「はい、なんとか。師匠は？」

「少しだけな。あれのおかげで、寝付くのに時間がかかった」

シンは背にした庵を指して、ほんの少し口をとがらせた。その後、同じように小川に向かったシンを見送り、ファンは修練を続ける。しばらくして帰ってきたシンに組手の相手を頼んで、眠気飛ばしに体を動かした後、二人は再び庵に戻った。庵の中ではまだイェンジーが高いびきをかいている。起こさないよう静かに、卓子の上にまとめておいた食べ物から必要な分だけとる。食料の大半は、果物や菓子、市で売っているような小腹ふさぎの蒸し物で、持ち出すのはたやすかった。家主を起こさぬよう、外で手早く朝食を済ませて、ファンは服の上の食べくずを払った。絵に描いたものがこうして現実に腹を膨らませているのだから、驚くほかない。

「こんな力があったら、お金をどんどん描き続けたりしそうなものですけど」

そう呟くと、シンがそれに応えて笑う。

「それもそうだが、そういう人間が仙になったのをあまり見たことがないな。どこか人より鋭くて、どこか抜けているような、そういう人間が仙になる」

「なるってことは、仙も獣人みたいなものなんですか」

「近いものではあるんだろう、あまり詳しくはないが」

食事を終えて、先にシンが立ち上がる。

「よし。彼女はあまり動いていないようだ。探そう。荷物はここに置いていていい。どうあれどの道ここに戻る」

「まだ、この辺りにいらっしゃるんですか」

追って立ち上がりながら問うと、シンは頷きながらも、難しそうな顔をした。

「人と交わりを断った聖獣は難しいな。なまじ力があるから、下手にでると恐ろしい。……まだ、鸞殿は温厚な方だがな」

シンは何かを探るように辺りを見回し、その後、今度は山道を下るほうへと歩き出した。翼がある者を追うのだから、こちらにも翼があればいいと思う。先んじたシンに駆け寄って、ファンは問う。

「怒らないで聞いてくれるでしょうか」

「言ったろう。彼女は優しい。だから、人の言葉を無視できずに傷つきやすい。その点で言えば、朱明のほうが怒らせると怖いんだ」

異界を出ると、微かに大鳥の羽音が聞こえてきた。それについて、他の鳥の声が移動する。

「移動したみたいです、ええと」

空を見あげて、方向を確かめる。それはこちらを避けるように別の方へと移動していく。

「西に、少し登った方に」

「こちらに気付いておられるようだ。仕方ない。追うぞ、ファン！」

駆けだしたシンを追いかけ、ファンも走り出す。が、それは少し

ずつ遠ざかり、微かに聞こえていた羽音も心もとなくなってくる。
やはり、飛んでいるものを人の足で捉えるには限界がある。ファンはだんだんと遠のく音を聴いて、シンに向かって声を張った。
「師匠、このままじゃ追いつきません。おれも必ず後から追い付きますから、先に行ってください！」
暫時間があって、シンの声が帰ってきた。
「……わかった。済まないな、先で待つ！」
その両脚に青の気を纏い、滾(たぎ)らせて、シンが龍の足で地面を蹴る。あっと言う間に木立に消えたシンを追って、ファンも足を急がせた。

鸞（1）

ファンをおいて、先行したシンは一度見失った鸞の気配を辿るために足を止めた。こちらに気付いているのなら、今それを追っているのにも向こうは気付いているはずだ。高く飛ばれなければ追いつくことはできるが、何と言って説得したらいいのか。力づくでどうにかできる相手でも要件でもない。やはり、正直に話すのがいいか。

気配を見つけて、木々の間を抜ける。微かに鼻にかすめる火の匂いと煤のにおい。それを辿って、シンの足ならあと数跳びというほどに近づくと、鸞は再び飛び立った。一度掴んだ気配だ、逃がすことはないが、また手前まで迫るとまた気配が移動する。向こうもこちらが近づいてくるのがわかって、その都度移動しているのだろう。つかず離れずなのは計りかねるが、遠くへ逃げないのは好都合。それに、こちらは二人だ。追い掛ける道を僅かに逸らし、囲うように追いかける。シンはわざと気取られるように青龍の力を強めた。ファンはまっすぐこちらを追っているはずだ。

追いついて離されて、を繰り返して数回。追いたてた先に、鸞の羽音とファンの声が重なった。さらに足を急がせると、煙の匂いを纏う鳥とそれを前にするファンに落ちあった。辺りには鸞につきそう小鳥の声が忙しく聞こえた。

「いい加減にして！　そんなにあたしを怒らせたいの？」

樹上の大鳥はその嘴から火の粉を発しながら、少女の声で問うた。かぎづめと嘴は油煙の色を纏い、尾羽は石の粉を撒いたようだ。煙や炭の色に斑の翼は遠い陽山を思わせた。

「怒らせるつもりはない、鸞殿。しかし、貴女の言うように龍にもなれぬ。それに、今回ばかりはどうしても貴女に頼らざるを得ないのだ。話を聞いてほしい」

「嫌。ちゃんと頭があるんだから、他の方法を探しなさいよ」

ばさり、と再び、鸞は飛び立とうと翼を広げた。

「――お願いします！」
ファンの声が辺りに響き、シンはファンの方に目をやった。必死の叩頭。ファンは膝を折り、ただただその場に頭を下げていた。その姿に鸞も同じように驚き、広げていた翼を元のように折りたたむ。
「……その子の方が、よっぽどものの頼み方を知ってるんじゃないの、龍。でも、態度の問題じゃない」
「頭を下げればいいってものじゃないのはわかります。おれは何の力もない人間だから、下げたところでたかがしれてます。でも、あなたにお願いが合って、おれができるのはこれだけなんです。……どうか、話を聞いてもらえないでしょうか」
「そうだな。俺もそうしよう。確かにまず頭も下げずに頼みごとをするのは、無礼だ。鸞殿、本当に貴女にしか頼めんのだ、俺からも頼む」
木の上で、鸞が居心地わるそうに枝を掴みなおす。枝は軋み、葉からこぼれる日差しが揺れた。
「……話せば。聞くだけなら聞いてあげる」
「すまない。……下の異界のことは、御存知だろう。そこの主である絵師に貴女の姿を描かせてほしい。奇怪に思うかもしれないが、道を取り戻す術がこれしかない」
頭を地につけたままの依頼に、鸞はしばらく応えなかった。
「無理。人の姿を見られるのも嫌なのに、絵に描かれるなんてもっと嫌」
その応えに、ファンがさっと顔をあげる。
「どうして、姿を見られるのが嫌なんですか？」
「わからないの？　自分の姿が醜いから。大っ嫌いなの」
「でも、その姿も、おれ、醜いとは思いません。それに、絵師のおじさんが言ってました。あなたのその姿は本当じゃないって」
ファンの言葉に、鸞の喉鳴りがころろ、と音を立てる。答える小鳥の喉はなく、しばらくして、鸞が呟く。
「そんなことない。これがあたしの姿だもん」

まるで言い聞かせるような声音に、シンも顔を上げる。ファンが見つめる先の大鳥を見返す。

「しかし、絵師の話も嘘とは思えぬ。それに、鸞殿。この絶え間なく流れる時の中で、貴女の姿だけ変わらぬのは妙だ」

鸞は沈黙し、こちらを見下ろしていた視線がそれる。それを見て、ファンが言葉を継ぐ。

「本当でない姿でいれば、きっと息が詰まると思うんです」

対してファンは鸞を見つめ、続ける。

「醜い姿に心を痛めるあなたが、自分でその格好をしているのはおかしいじゃないですか。本当の姿があるのなら、それが美しい姿だというなら、あなたが本当に恐れているのは、醜い姿を見られることじゃない」

ファンの言葉に、シンは改めて鸞の心情をはかった。そうだ。きっと、彼女は恐れてきたのだ。すべてに起こりうる変化に。鸞から答えはなかった。

沈黙の中に、鸞が翼を広げる。

「誰も彼も、大きなお世話よ。似合いの生き方なの。あたしはずっと、このあたしの姿を憎みながら、あたしと向きあうんだから」

地に這う二人に、羽ばたきが風になって当たる。

「話は終わったでしょ。もういいの。あたしに構わないで。帰って」

頭上から、灰を固めたような羽根が数枚ひらりと舞い落ちる。飛び立った鸞を見て、二人は深く嘆息した。

「戻ろう、ファン。ともあれ、イェンジーと話をしてみるしかない」

ファンは鸞の飛んで行った方を見ていたが、そういうと膝の砂を払い落し、頷いた。鳥の鳴く声は少しずつ遠ざかっていった。

花鳥を見る

異界に戻ると、イェンジーは起きて、外に出ていた。
「おう、お前らか。そういえば、この花を描いて花見もしてねぇと思ってよ」
花畑の中にどっかりと腰を下ろし、回りの花を見ながら、水差しの酒をぐいとあおる。手元には紙と筆が置いてあって、手遊(てすさ)びに鳥や蝶を描き出しては、眺めて笑う。一夜の夢のような光景に満足そうなその表情を見て、二人は妙に気が抜けてその前に腰を下ろした。
「鸞殿の件だが」
言いかけると、イェンジーは良い良いと水差しを振って見せる。
「どうせその顔だ、小娘に逃げられたんだろ。まぁ、気にすんな。何でか知らんが、今日は気分がいいんだ、飲んでるうちにころっと気が変わるかもしんねぇぞ。ってわけだ、ほら、兄ちゃんも酒に付き合え。飲めんだろ」
イェンジーは筆をくるくると回し、手元の紙に盃(さかずき)と銚子(ちょうし)を描く。瞬く間に花の上には一対の酒器が現れる。イェンジーに、小僧も飲むか？　と問われてファンが慌てて首を振った。イェンジーに対して座したシンは盃を手に取る。
「すまない。ならば、付き合わせてもらおう。仙の酒など久しぶりだ」
「おう、うわばみの親玉みたいなもんなら、兄ちゃんも相当いける口だろ？　飲め飲め。小僧もこっちに来て座れ！　食いてぇもんがあったら言え。酒だって飲みたくなりゃ飲みゃあいい」
手招きされて、こちらの後ろに座っていたファンが立ちあがる。が、外の林の方を見て、そのまま立ちつくした。
「どうした、ファン」
「あ、あの、師匠。えぇと、おいでになって、ます」
依然硬直しているファンが、林の方を示してみせる。その目が唖

然として見つめる先には、一人の少女。油煙（ゆえん）の色に汚れた手足。乱れたままに伸びる煙色の髪。服の裾を掴み、こちらを睨むように見据える少女は、唇を不機嫌に結んでいる。

「昼間から酒たかるなんて、良い御身分ね」

思わず盃を取り落としそうになって、シンはそちらに向き直る。

「まさかいらっしゃるとは」

「そっちが言いだしたんでしょっ、あたしを描きたいって！」

火のようにその頬を赤らめながら、鸞（らん）は言う。

「……何と？」

尋ね返すと、鸞はさらに裾を手繰（たぐ）り握りしめる。煤けた細い脚が見えて、少女はわめくように答えた。

「だからっ！　描かれてあげるって言ってるのっ！　早くしなさいよ、帰るわよ！」

気がつけばイェンジーが横で本当に水差しを取り落としていて、前にのめりながら鸞を凝視していた。そして、その手で何度も左目と右目を交互に覆って、呟く。

「お前が本当に、あの小娘なんだな……？」

そして、イェンジーは俯きながら手にしていた筆をぎゅっと握った。俯き、そして、顔をあげると、そこには先ほどのとは見違えるような、真剣な顔があった。

「小僧、水だ！」

ファンに水差しを投げ渡し、慌てながらもファンがそれを掴む。空にある間に酒は零れ、水差しは空（から）になってしまった。ファンは小川に浸し、水をくみ上げる。ファンから水を受け取ったイェンジーは水差しに口をつけ、水をぐびぐびと飲み干した。

「こっちだ、小娘！　庵（いおり）で描く！」

「小娘って言わないで！　あたしにはフーって名前が……」

「んなもん、後で聞く！」

イェンジーは鸞の手を引き、庵の中のただひとつあった椅子に座らせる。床に大きな紙を一枚敷くと二人に、退（の）いてろ、といった。

そして、その場の空気を張り詰めながら、筆を手にイェンジーはじっと鸞を見つめたのだった。

鸞（2）

イェンジーが筆をとってしばらく。上り始めていた陽は今やゆっくりと木々の間に沈もうとしている。視界から逸れる以外には自由だったにしても、その間ずっとイェンジーは鸞（らん）の姿を描き、鸞は椅子に腰かけ、その筆が進むのを見ていた。シンとファンはその間庵に立ち入れなかったため、外で体を休めながら絵の完成を待った。

虹に変化する筆を持ち、一心に紙に向かうイェンジーは書き始めてから一度も酒はおろか水一滴も飲まずに鸞の姿を描き続けた。額から顎へ伝う汗すら紙に落ちる前に渇くような気迫。陽が頭上を過ぎるほどの時間も、傍で見ていた二人にすら駆け足ですぎたように感じた。

「よし……出来た」

完成を告げる呟きに、外にいた二人は中に入り、床に広げられた絵を覗き込んだ。そして、息をのむ。そこに描かれていたのは、仙女とも飛天ともつかぬ、薄絹をまとう乙女の姿だった。金糸銀糸の織り交ぜられた薄紅の羽衣に、麓にいたころ遠くに見えた陽山の、その紅蓮を纏ったような韓紅（からくれない）の褥（じゅ）と深緋の裙（くん）を、槐色（えんじゅ）の帯で締めている。ゆったりとしたそれらから覗く肌は真珠のように、蘇芳（すおう）色の長い髪は艶やかに結いあげられている。髪に挿された簪には五色の玉でできた花の飾りがきらめく。そこにいる誰もが圧倒され、しばし言葉なく、ため息交じりにそれを眺めた。

「素敵……」

絵の正面に座る鸞が、小さく呟く。寝台に座るイェンジーは満足そうに、それに頷き返した。紙に描かれた自身の姿から目を離し、鸞は絵師の男を見つめる。

「もし、もしの話だけど、今の私の姿を好きだと言ってくれた人がいたとして、それが変わったら、嫌われるもの？」

問われて、イェンジーは香りだけは微かに酒気が残る水を含み、

飲む。

「何言ってんだ。誰だって、見た目が良くなりゃ喜ぶだろ。それが、取り繕ったようなもんでなければ、なおさらな」

ふうと息をつき、事もなげにイェンジーは答える。その答えに、鸞は再び絵に目を落とす。

「そう……良かった」

固く結ばれていた唇が小さく笑みをつくり、その頬がわずかに朱(あけ)に緩む。その瞬間。木々に呑まれようとする陽とともに、ざあっと音をたてて庵の中に風が吹き込んだ。風は外の花を吹き撫でて、薄桃の花弁を巻き込んでいる。目も開けてられないほどの花吹雪が庵の中の紙を巻き上げながら渦巻いた。

風が収まって、シンはゆっくりと目を開けた。そして、短く感嘆の声を漏らす。

「見事！」

そこに先まで絵を見つめていた油煙の少女の姿はなく、触れがたく高貴な出で立ちの仙女の姿があった。紙上の墨は消え、鸞の姿はあたかも絵から抜け出たように見える。残り風に揺れる袖をつまみ、鸞はくるりと回る。そうやって当人ですら変化に驚く傍らで、イェンジーは左右交互に目を覆って、納得したように頷く。

「よし、これで両目和したな」

満足気にそう言って、イェンジーはそのまま寝台に倒れ伏した。今度ばかりは、気力体力使い果たした、ということなのだろう。あの高いびきも今は潜んで、代わりに静かな寝息が聞こえてくる。

「それが貴女の本当の姿か」

「知らないわよ、この男が好きに描いたんじゃないの？」

問うと、鸞はつんとそっぽを向いて答えた。今や、煙のにおいはなく、吹き込んだ異界の花の香がその身を包んでいる。

「でも、顔も背格好も変わってませんよね。やっぱりそれが正しい姿で、イェンジーさんには、ちゃんと見えていたんですよ」

目の前で起きた霊(くし)びに目を輝かせながら、ファンが言う。その言

葉に、逸らされている真珠の頬が紅潮した。そして再び、今度は小さく、鸞は繰り返した。

「知らないわよ……っ」

寝台の上のイェンジーが寝返りをうち、こちらにその身を開いた。はずみで落ちた足を、ファンが上へ戻す。幸せそうな寝顔に、姿が変わってもなお真一文字に結ばれていた口をため息とともに緩め、鸞は微笑する。

「酔っていなければ似てるのに」

「誰にですか？」

微かに聞こえたその呟きを聞きとってファンが尋ねると、鸞はあわてたように振り返る。

「何でもない！　帰るから！　退いて」

広がる裾を持ち上げて、鸞は逃げるように庵の入り口へと向かう。止める道理もなくひょいと二人が退くと、鸞は入り口まで来てその足をとめた。わずかに漂う沈黙。

「あんたたち、あの、その……ありがとう」

その言葉に、シンとファンは顔を見合わせた。そして、笑う。

「我々は貴女に迷惑をかけたはずだが」

シンが応えると鸞はくるりと振り返る。

「いいから素直に応えなさいよ！　それに、急ぎなんでしょ、もたもたしてんじゃないのっ！」

言い捨てて外に駆け出て行った鸞を見送って、二人はその姿を再び見る。イェンジーの筆の墨に似て、虹に彩られる翼。理通りに整えられ、宵掛けの薄闇にその美しい姿は光るように映えた。

※褥裙（じゅくん）：着物に似た短い上着と筒袴。布帯で締める。古代中国の女性の服。

切り割りにて

イェンジーにはもう一仕事してもらわなければならない。が、神にも近い聖獣のその姿を変えるほどの術だった、行使した者は相当に疲弊したに違いない。起こすのはどちらにとっても良くない。何より、再び夜が来た。動くには明けてからのほうがいいだろう、と二人はまた散らかった庵を片づけ、眠りに就いたのだった。静かな夜だった。

明朝。物音で目が覚めると、すでに起きたイェンジーが寝台の下に手を伸ばしているところだった。筆が下に転がってしまったらしい。それをつかみだすと、とりついた埃を吹き払い、イェンジーが振り向く。

「おお、起きたか。小僧も起こしてくれ、飯にしようぜ」

「ありがとう。貴公はもう大丈夫なのか？」

「ん？　ああ、大丈夫だぞ。つうかな、もともと思い通りに描けねぇ間が不健康みたいなもんだからな。今はすっきりしてるぜ」

卓子（たくす）の上の白紙をつかみ取り、イェンジーは筆を走らせる。朝食を出そうというのだろう。それを見て、シンも横で未だに寝息を立てていたファンを揺り起こした。

顔を洗って戻ってみると、卓子の紙の上には現実になった膳が並んでいた。朝食は白粥や木の芽の炒めたもので、今までに描きだされたものに比べるとずいぶんとあっさりとしたものだった。こんなもんだろ、と筆をおいたイェンジーは顔を洗ってくる、と外の小川に出て行った。家主が戻るまでの間、シンとファンは定例で少し体を動かして、帰りを待った。

帰ってきたイェンジーはほつれ放題だった髪が結いなおされていて、無精髭も剃られていた。出て行ったときとまるで違うその姿に、二人は唖然として立ちつくす。

「なんだ、変なもんみたような顔してよ。さ、飯食ったら、さっさ

と描きに行くぞ」
庵（いおり）に入って、足りない椅子を手早く描いて家主が座る。ファンが何か言いたげだったが今は膳を勧められている、謝辞を述べるだけにして、二人は席に着いた。
朝食を終えてすぐ、荷物を負って三人は花の舞う異界を出た。筆を回しながら歩くイェンジーに合わせ、多少遅い調子で切り割りへ向かう。ファンがしきりにあたりをうかがいながら、それについて歩く。
「鳥の声が多いなと思って」
「そうか。なら、気付かないふりをしておけ。見送りに来てくれたのだろう」
なるほど、と頷いたファンは、今度はわき目も振らずに前へ進む。ただ、横で見ている分にはずいぶんとそわそわしているのがわかる。追いかけまわしてしまったことをファンはかなり気にしていたようだから、見送りに来てくれたことが嬉しいのだろう。それはシンも同じで、また同時に、旧知の者が過去から解放されたのを喜ばしく思った。
切り割りに着き、イェンジーは岩壁の前で紙を広げた。
「元通りに書き直しゃあいいんだな？」
頷き返すと、イェンジーは筆に砂色をにじませて、一気に紙上を滑らせた。今度はあっという間に描き終え、イェンジーは絵をもってぴんと張った。山肌を吹きあがる風に、目の前の壁は砂になってさらさらと消えていった。
「これで通れ……って、これは」
ファンは切り割りに向かって走りこむ。壁が崩れ去っても尚残る大岩。
「そりゃあ、俺じゃあねぇな。絵にも描いてねぇし、元からあった岩だろ」
道を塞ぐ巨岩は、切り割りに食い込み、飛び越えるには高すぎた。
「これを消すことはできないか？」

「俺が描けるのは絵だ。壁は自分で出したもんだから良かったけどよ、絵ってのは何もないところから何か出すほうにしか向かえねぇ。物を消すのは領分じゃねぇのさ」

あとは自分たちでどうにかしてくれ、とイェンジーは紙と筆をひらひらやって見せる。仕方なしに、来たとき壁に触れたように、岩にも手を触れてみる。これほどの巨岩、陽山の揺れがあったとしても、たやすく転がって、こうもうまく道を塞ぐものではない。そして、シンは触れてすぐ、何があったかを理解した。

「……檮？か。あいつも丈夫なやつだ」

ファンが驚いた様子でこちらに振り返る。

「大丈夫でしょうか……」

「何、俺が出てから結界は強めた。国には手出しできまい。それに、直接こちらを狙ってこないということは、向こうにも何か都合があるんだろう。なら今は、黄の地へ入るのが先だ」

はい、と小さな応えが返ってきて、シンは改めてそびえる岩を見る。ただ龍化した手足だけではびくともしないだろうし、完全に龍になることもできない。ふう、と息をつき、少し声を大きくして呟く。

「さて、まいったな。この岩さえなければいいんだが」

呟いて数瞬、鳥の声と藪のざわめきが大きくなる。何から手を煩わせてしまったが、ここはやはり世話になるしかないだろう。

「おお、小娘。居やがったのか」
今気がついたイェンジーがその姿を見つけて声を上げる。藪の中から、赤い裾を引きずりながら現れる乙女の姿。衣と同じように顔を赤らめながら、鸞はわめく。
「龍！　気づいてたんなら言いなさいよ！」
「すまない。気付かれたくないようだったので黙っていた」
笑って返すと、鸞は不機嫌な顔をしたが何も言い返さずに、つかつかと岩の前に進み出る。
「これがなくなればいいんでしょ？」
頷いて返すと、鸞はひらりとその腕を広げ、袖をはためかせた。鸞の方から微かに感じる熱気。
「下がらないと、死んでも知らないからね」
羽音と花の香とともに、乙女の姿は赤い巨鳥に変貌する。羽は、明るい炎色の朱雀に対して、鸞はつやのある緋色をしていた。翼は五色を交え、金銀の尾羽と冠羽は鈴のような音をたてて揺れる。ばさりと鸞は飛び立ち、岩の上へと飛び上がった。あっけにとられたように見ているイェンジーを引きずりながら、三人は林の影まで下がる。
「こんなものもどうにかできないって、不便な体ね」
鸞は呟き、くちばしの先に火球を生じさせた。火球は見る間に赤から太陽のような白に色を変えていく。羽ばたきは熱風となって林の中を通り抜ける。美しい鳴き声とともに、火球は放たれ、岩にぶつかる。
閃光と、猛烈な熱風があたりを通り抜ける。続いて、焼けた石の上で水が爆ぜるような高く短いさざめき。それがすべてなくなると、切り割りを塞いでいた大岩は跡形もなく消えていた。道や大岩に触れていた切り通しの岩壁が夕日色になり湯気を立て、冷えた部分は

黒々と金属のように固まっている。
「これでいいでしょ、龍」
降り立った鸞は再び乙女の姿に変じて問う。
「ああ、充分すぎるほどに。鸞殿、感謝する。イェンジー殿も」
切り割りに風が抜け、遠く続く木立の向こうに光が見える。
「いいから、さっさと行きなさいよ。その足じゃ大して進めないでしょ」
そうしよう、とシンとファンは岩の下になっていた道に足を踏み入れる。少し進めば、峰を越えて黄の地へ入る道だ。鸞とイェンジーに礼を言おうと振り返ると、イェンジーが筆先でこちらを払いながら言う。
「あー、礼なんざいい。足を止めたのはこっちだ。小娘の言うとおりさっさと行け」
鸞がイェンジーを小突いて、口をとがらせる。
「小娘小娘って、あんたね……」
「わかってら。ちゃんと呼びゃあいいんだろ、フー」
そういうと、鸞は顔を赤らめて俯いた。
「……気安く呼ばないで」
旅人二人は顔を見合わせて、小さく笑った。そして、道の先へ向かって歩き出す。この先は、天の　治める不可侵の土地。御柱のそびえる、ファンが生まれた地だ。

二人を見送り、イェンジーは庵に戻り筆をとった。小娘は二人の姿が見えなくなるなりどこかへ飛んで行ってしまったから、別段気にもせずにここに帰ってきたのだった。また描きたいものがある。
「また何か描いてるの？」
筆をとってしばらく、声に振り返ると、戸口のところで隠れるようにしてこちらを覗き込む少女いた。
「ああ、まあな。見てぇんなら、入っていいぞ」
入ってきた少女は油煙の色を纏っていた。

「なんだ、戻しちまいやがったのか」
「動きづらいんだもん。でも、もう自分の姿を忘れたりしない」
こちらへ近寄る少女に、わずかに視線をやる。見ても今度はもう、ここから逃げたりしないようだ。
「あいつらに聞いたぞ、火の山の神なんだってな」
「神じゃないわ、ただずっと住んでるだけ」
筆を止め、腕を組んで追想する。朱雀が火であるなら、この小娘は火の山そのものなのだろう。
「噴火か。前に一度、派手に噴いたのを見たっきりだ。行ってみっか」
「派手にって、前に噴いたのだって随分前だけど……なんだ、あの二人描いてたの？」
絵を覗き込み、小娘は首をかしげる。
「あの子、そんな恰好してた？」
「おれぁ見えたようにしか描かねぇ」
問いかけに応えながら、筆を進めた。そして、ふと思い立つ。この小娘に翼があるのなら、ああして壁を描いたところで用をなさなかったのではないか、と。苦笑していると、小娘にわき腹を小突かれた。

峰を示す線を踏み越えると、空気が微かにぴりりとしみる。それを越えて、切り割りを抜け、林が切れると目の前には金環山に囲まれる盆地が開ける。見晴らしのいい場所で足を止め、それを眺めた。金色の大地。緊張と感動とをない交ぜにして、ファンは御柱を見つめていた。
朝日に照らされ、金に輝く御柱はそびえる。こうして眺めれば近く見えるが、御柱は遠い。その根に届くまでは、まだまだ日数がかかるだろう。そのうちにファンも心の準備ができるだはずだ。
「行くぞ、ファン」
「はい！」

歯切れ良い返事とともに、下りの道を歩き出す。
「そういえば、師匠」
「どうした？」
「鸞さんが言ってた、イェンジーさんに似てる人って誰ですか？」
「ああ、あれはな……」
言われれば似ているかもしれないが、随分昔の人間を覚えているものだ。シンははるか後方になった絵師の男と聖獣の乙女を思い、笑みをこぼした。

——赤の国の章2、了。

降神の地、五行の源（前書き）

五行説の説明がありますが、若干、本話の為に曲解している部分もありますので、あらかじめご了承ください。
赤の国の章２の続きです。

降神の地、五行の源

秩序は唐突に訪れたという。その頃の中つ国は水泡（みなわ）のようであり、形なく揺れる泥濘（でいねい）のような場所であった。天と地の境なく、明と暗の区別なく、善も悪もなく、気は体を持たず、すべてが混ざり合った坩堝（るつぼ）のようなそこに、何の前触れもなく綺羅星（きらぼし）と共に降りたる剣が御柱とされた。それによって、天と地は分かれ、昼夜が繰り返し、泥濘は体に、気は魂に、それを繋ぐ心に善悪が生じた。

すべてが大地に広がり満ちた後、それらすべてを統制すべく降臨したのが御柱の主たる“天”だった。天は時間をかけ、無分別にものを生み出し続ける泥濘を固めた。そして、そこを覆う命の源たる気を陰陽に分け、四方へと配した。

厳しき陰は北の地で水行を生じ、激しき陽は南の地で火行を生じた。

柔らかき陽は東の地で風となり木行を生じ、優しき陰が西の地で金行を生じた。

そして、地に根付いたそれらの行から力を得、再び御柱の地、中央に集まった気が土行を生じたのだった。

天は中央土行を自らの膝元に定め、四方の均衡を取る調停者として君臨した。与えたる秩序は、国を、そこに生きる命を導いた。

天から四方に渡る力はそれぞれに神獣が受けて国を潤すが、土地から発生する五行の力は相生、相剋の関係を持って循環している。木が火種となるように、木行から火行の力が生まれる。火行から土行が、土行から金行が、金行から水行となり、水行から再び木行が生まれる。相手を強めるこの関係を相生（そうしょう）という。

一方、水が火を消し、金の刃が木を叩くように、火行は木行を、木行は土行を、土行は水行を、水行は火行を、火行は金行を押さえ弱める力を持っている。この関係を相剋（そうこく）といい、それぞれの力が大

きくなり過ぎぬように、抑える働きをする。
だから、どこかひとつが弱まれば、相剋によって押さえられていた他方が盛り、その地を押さえていた他方も相対的に強くなる。また、相生による力を得られなくなった他方は力が翳る。
近年では西の凶荒がそうだ。西の地に天変あって、火行が強まり、木行が強まった。力が強まった端的な例が、陽山の噴火である。この国はすべてが繋がり、巡っている。どこかに支障があれば、それは国全体を左右する。だからこそ、四獣や王のつとめは重い。
だから、本来神獣が国を離れることすら、傾国の大罪といえるのだ――。

「やっぱり難しいですね……」
ファンはため息交じりに呟いた。黄の地へ入って数日。道すがら、シンから五行について習っていたファンだが、考え始めると足元がおろそかになるのか、今もそれで道に出た木の根につまづいたのだ。
「先生にも教えてもらったんですけど、まだちょっとぴんと来なくて」
「順を覚えてしまえば、あとは慣れてわかるようになる。相生はこの旅と同じ順だ」
青の国を発って赤の国を訪れた二人は、陽山の噴火で塞がれた道を避け、黄の地にある御柱へ向かうことになった。黄の地は天の見そなわす場所で、ファンの出生の地でもある。この地には町がない。その代わりに点在する小さな無人の宿所で、旅人は雨を凌ぐことができる。何の守りもない簡素な宿舎だが、それでも、四方のような獣への心配はない。それこそが、ファンが特異な人間とされる理由だった。
黄の地へ入ってしばらくで、ファンもその奇異に気がついたようだ。あまりに濃い緑と、対して少ない動物の声。
「この場所は、気の力が強すぎるんだ。あまりにも力が強いから、木は花も実もつけず、生き物はつがいを作ることがない。だから、

獣はここにいることを避ける。ここではすべてが止まっているからな」

「生き死にのない場所、ってことですか？」

「そう考えていい。まぁ、実際は外から入ってくるものの死は普通に起こる。行き倒れもあれば、死に場所に選ぶ者もいる。ただ、それでもこの地で何かが生まれることはまずない。だから、お前は珍しく思われる」

そう言うと、ファンは少しだけ眉根を寄せた。何か考えているようだった。そして、しばらくして、一言だけ呟く。

「死も、止めてくれれば良かったのに」

シンはおおよそを察して、何も応えなかった。確かに奇異ではあるのだろう。生を潤してきた天の地でありながら、死のみが許された場所というのは。

見あげた御柱は近い。すでに柱というより壁に近くなっている。陽の光によって時折金に光るその天の座は、そして、その主はこちらに気付いているだろうか。天がただ一つ許した生と、許しを請いに来た生に。

湖上の道

「ここが、御柱……国の、始まりの場所……」

真上と言っていいほどに見あげて、ファンは感嘆の声を漏らした。空は晴れているが、一番上は金の霞みがかかったように見えなくなっている。

御柱は巨大な円形の湖の中島にある。橋はなく、一日の数度だけ水が引いて御柱へと渡る道ができる。巡礼その他、島への出入りはその道を使うほかない。物理的に道が無いだけでなく、御柱の結界はその時にしか解けないからだ。

来た道は殆ど人の姿を見なかったが、ついてみると数十人ほど、未だ現れぬ道の前に集まっていた。四方の他から来た巡礼者なのだろう。それなりの人数だということは、集団でここに訪れたのだろう。女子供を連れての旅に人は多い方がいい。

「道が出来れば巫子（いちこ）が来るはずだ。そうすれば中に入れる」

「え？　中に入れるんですか？　扉は……」

御柱を見ていたファンは驚いて、振り返る。

「ちゃんとある。ただ、継ぎ目がないからわかりにくいけどな」

「中には何があるんですか？」

「天社があるが、それは巫子が教えてくれる。案内してくれるはずだ」

なるほど、とファンは再び御柱に目を戻した。シンも一緒にそれを眺めた。その姿は一万年前と何ら変わりが無い。汚れ一つない御柱も、そこから溢れる天の気も。ただ違うのは、自分だけだ。天は降りてこないだろう。旅と自分の話は誰か他の者にしなければ。

「今いるのは――白澤（はくたく）か。バクだったら良かったんだが」

そう呟くと、ファンが興味ありげにこちらを見る。シンからすれば、バクが御柱にいないこともほんの一時だが、ファンにすればバクは東の町にいるのが当たり前だ。

「先生も、ここにいたんでしたね。神官長っていうのは……」
「天社の長で、御柱のすべてをまとめる役だ。ここ数千年はバクが務めてきた」
天意は獣人の、それも相応の力がある者にしか受けられない。中でもバクは「夢食い」と呼ばれたように、意思や記憶、気を読むのに長けていたから、神官長となってからはその座を動くことがなかった。ファンを連れて、御柱を出るまでは。
「偉い人だったんですよね、先生は。おれ、何も知りませんでした」
「バクは元々偉ぶるのが好きじゃない、気を使われるのもな」
それに他人に負荷を与えるのも好きでなかった。そのくせ、人の重荷は取ってやろうとする。確かに天意は只人（ただびと）には重すぎるが、それを自分の身の内ひとつに留めようとするから、昔も四方の王に諫められていたのだったか。優しすぎた、とシンは思う。だから、太極を――ファンを預かった時も、黙って御柱を出たのだろう。
「先生は、元気にしているでしょうか」
心配そうな呟きに、シンは大丈夫だ、と返す。
「バクは人の心配をしている時が一番元気だ。あれこれと考えて、人の倍は動く。だから、お前がこうして旅をしている間は何の心配もいらん」
そう笑ってやると、ようやくファンの表情も解けて笑みが浮かんだ。

近場の草地に腰かけて待つこと、しばらく。湖の水が風もなしに小さく波立ち始めた。波はさざめき、それに合わせて湖に一筋の道が現れ始めた。黄砂で出来た道は次第に広くなり、水が抜けるに従ってしっかりとした土台となった。続いて、こおん、と高い鐘のような音が響き、御柱の根元が滑るように開いた。開いた扉は壁の中に吸い込まれるようにしまわれ、入口はまるで最初から開いていたかのように口を開けている。遠いその入り口に、二つの人影が現れると、湖の前で待っていた人々は一斉に歩きだした。天社の巫子だ

ろう。
「俺達も行こう、ファン」
立ち上がって、道の方へ歩き出す。初めこそ後ろについていたファンも、楽しみなのか、シンに先んじて黄砂の道を踏み出す。その様子にシンも相好を崩し、同じように道の上に足を踏み出した。
その時。
道の上に入った体を弾き出さんばかりに、強い力がシンを押し返した。雷にも似た衝撃を伴って、差し出した手足には退いた今も痺れが残る。結界、というよりは、拒絶、という風に思えた。
――進めない。少なくとも自分は。
「どうしたんですか？　師匠」
振り返り、足を止めたファンが不思議そうに問う。
拒絶が天のものであるなら、話を受け付ける気が無いのか、あるいは話を聞く気はあっても中に入れる気がないのか。それとも……ファンを一人で寄こせ、というのか。その意は図れないが、入れないのは事実。シンは腹を決めた。
「――行って来い、ファン。俺は外で待つ」
心配もあるが、仕方が無い。シンは何も応えぬ御柱の方を見やって、そう言った。

ひとり、入る

突然のことに、ファンは一気に不安でいっぱいになった。確かに中を見てみたい気持ちはあるが、シンと一緒だからこそ僅かでも恐怖を覚える御柱も大丈夫だと思えたのだ。それが一人で回るとなると、“あの夢”が現実になりそうで怖い。独りで、と問うと、シンは申し訳なさそうに笑ったが、違う、と首をふった。

「案内は今御柱に入った者全員一緒のはずだ。巫子（いちこ）がつくだろうし、天社の中で滅多なことはない。ともあれ、俺は入れんようだ」

シンは湖の道から岸へと下がり、先に座っていた草地を指して、あそこで待っている、と言った。

「神獣だから入れないんですか？」

「そういうことなのかもしれん。まぁ、入れんということは誰かが気付いているということだ。そのうち人が来るだろう」

そして再び、行ってこい、と言う。御柱の入り口の方では人がどんどん中に入っている。その横で初めに現れた二つの影が、こちらを向いているような気がする。待っているのだろうか。入口とシンの顔とを見比べて、その場で足踏む。

「大丈夫だ、ファン。急いだ方がいいぞ、道はいつまでも出ているわけじゃあない」

再度促されて、ファンも意を決めた。

「わかりました。行ってきます！　師匠」

今こそ静かに凪いでいる湖面を見て、ファンは駆けだした。近づくほどやはり御柱は大きい。扉の横にいる人影がだんだんとはっきりする。自分より年下の子供に見える。扉の左右に一人ずつ、ファンが駆けて来るのを見ている。

中に駆けこむと、子供が声をかけてきた。発声は同時、同じ声が左右から響く。

「お連れの方はいいのですね。扉を閉めます、進んでください」

間に合った、と大きく息をついていると、背後からの光が無くなった。扉が閉まったようだ。音もなく閉まったそれははじめと同じように一切継ぎ目なく、ぴたりと壁に変わった。中には巡礼の人がたくさんいた。一人で来たのはファンだけのようだが、中には子供もいるようだった。

御柱の内部は外見よりも狭く見えた。円形に見えた外観に対して、入った場所が四角形だから、他に空間を余しているのだろう。扉は見えないが、きっと入り口と同じだ。陽の光ほどではないが、所々で灯る不思議な灯りで中はそれなりに明るかった。火ではなく、蛍のような光だ。壁は何で出来ているのだろう。くすんだ銀色で、金属にも陶器のようにも見えた。

「皆さま、お揃いでしょうか」

入口に立っていた子供二人が声を揃えて言う。改めてみると、二人はまるでお互いが鏡に映った像のようにそっくりだった。あまりに整った顔立ちのせいで、男女の別がつかない。その目は特徴的で、二人とも金と銀の違い眼をしている。服は祭りの時でしか見ないような童子のもので、片方は濃い黄色、片方は明るい灰色だ。童子二人はこちらを見渡して、互いに頷くと黄色の方が口を開いた。

「皆さまご存じでしょうが、ここが御柱、天のおわす社にございます。ご案内いたします、我々は金烏」

「玉兎と申します。天社の管理と皆さまの御案内を仰せつかっております」

灰色が続いて名乗って、よろしくお願いします、と唱和した。左目が金なのが金烏で、銀なのが玉兎のようだ。童子が近くの壁に手を触れると入り口と同じように、そこが開いて扉となる。

「御柱は広く、扉は我々にしか開けません。ですから、この中にいる間は、我々から離れませぬよう。天社には時折幻が現れますれば、それに心囚われて迷われる方がございます」

不安げに顔を見合わせた人々を見て、童子はにこりと笑む。

「失礼いたしました。迷うと言っても我々の目の届く範囲、他にも

官は居ります故、閉じ込められるということはございません。幻の語る間は我々も動きませぬ」

「ここは天社でございます。幻といえども天の御業。由(よし)あって、懐かしい人親しい人の姿を借りて、皆さま方に道を示すものにございます」

懐かしい人、と聞いて、もしかしたら、と思う。期待する心と恐れる心が交互に瞬いて、ファンの脳裏を駆けた。この場所で会えるとしたら。いや、会えるとしたらこの場所でだけだろうから。

こちらでございます、と童子たちが先導して、初めの部屋の右手に次の部屋への口が開ける。ぞろぞろと歩き出した人々に混じり、ファンもその歩みに加わった。

部屋に入るやいなや、近くにいた人が、虚空を見つめて驚いたように誰かの名を呟いた。どうやらさっそく幻が見えているようだった。まるでこちらが見えていないかのようで、しばらくして話が終わったのか、その人はうんうん、と頷いてまた列の中に戻った。それを見て、周りの人は嬉しそうに顔をほころばせた。自分の番が待ち遠しいのだろう。もしかしたら、彼らの巡礼も社よりは幻に会うためなのかもしれない。

その人を皮切りに幻は次々現れたようで、他の順列者もその後、懐かしさに頬を緩ませていた。

邂逅

次の部屋は、中心に大きな水晶板が据えられていた。白い綿靄のようなものがその中でゆっくりと回っている。その周囲には、天社の官だろうか、数人が水晶板を見ては傍の文机で何かを書き記していた。巡礼が来ても、その手を休めることはない。

「こちらは空の巡りを見る部屋でございます」

「白く見えるのは雲。長雨や天変の兆しがあれば、ここから四方へ伝えられます」

部屋に入って、金烏玉兎（きんうぎょくと）は説明を始める。それを聞く巡礼者は八割ほど、二割は別の方を感動したように見つめている。幻が見えているのだ。幻といっても、天の御業というのならきっとそれは託宣に近いのだと思う。身近な人の口で、天は何を語るのだろう。

空の模様を記す官は、よく見ればそれぞれの腕に四方の色を巻いている。担当する国なのかもしれない。青色を巻いた官も忙しく筆を走らせている。水晶板の上が北なら、東は白く霞んでいる。雨が降っているのかもしれない。

『故郷（くに）はどうなんだ、リリ。よくわからん』

人々の中から聞こえた声に、ファンは振り返った。帯刀した若い男。どこかの武官だろうか。その問いに、男の傍らの女性が苦笑しながら応える。そして、その女性を見た瞬間、ファンは驚きに息が止まりそうになる。同時に頭に奔（はし）る激しい痛み。

『もう、また話を聞いてなかったの、ウェイ。向こうは晴れているみたいよ』

女性は水晶板を指し示す。そうか、と応えながらも解っていなさそうな男の様子を見て、女性は困り顔ながらも微笑み、その大きな腹を撫でた。それはもうずいぶんと大きくて、お産は近そうだ。二人は夫婦なのだろう。旅歩きも辛いだろうその状態でここまで来たその女性は、人々の間でも特に目を引いた。

『ああ、どうか賢い子になりますように』
『おい、あてつけるように言うなよ』
夫婦は顔を見合わせて笑う。ああ、あの女性(ひと)は。間違いない。心臓の打つのに合わせて、痛みは脳を突く。悪夢の残滓(ざんし)がそれに乗って、暗く瞬く。
『お前の子なら、かしこいに決まってる。俺に似なければ』
『じゃあ、あなたの子なんだから、強い子になるわ。私に似なければ』
幸せそうな笑顔と声。目の前の幸福に逆らうように閃く情景は、鼓動を急かして呼吸に圧し掛かってくる。夢と幻とが頭で相対して、ファンはよろよろと壁にもたれて、そのまま膝をついた。
――あれは、幻影。母となる前の、母の姿。
そしておそらく、豹変する少しばかり前の姿だ。この先を映したのだろう悪夢こそ、これまでファンの心を喰ってきた影。夫婦はこちらには少しも気付かないようで、部屋を眺めている。周りの人の幻は、その人に語りかけているようなのに、二人は声をかけるどころかこちらを見ることもない。それはまるで過去を再演してみせるかのように。
天がこれを見せるというなら、こうも痛みを伴わせるのなら、自分はそれから何を受け取ったらいいのだろう。この二人を追い続ければ、見るものはもう決まっているのに。辛いとわかっているのに、目が離せない。いや、きっと目を離してはいけないのだ。
「――キミ、大丈夫？」
ようやく声を駆けられて、ファンは頭を押さえながら顔を上げた。夫婦ではなく、自分と同じくらいの少年だった。背はファンより少し高いくらいで、灰白の髪と相まって全体的に白く儚く見える。
「君は……幻？」
問い返すと、少年は違うよ、と首を振った。
「具合が悪そうだったからね。幻が見えるの？」
今度はファンが応えて返す。

「うん。だけど、見てたら苦しくなって、今も――あれ？」
幻の二人は消えていた。巡礼の人々の間にも、その姿は見当たらない。同時に、あれほどひどかった頭痛もどこかに行ってしまった。
「あまり酷いようなら、案内の人に言ったほうがいいよ」
「いや、もう大丈夫。立てるよ」
巡礼の列は次の部屋へ向かう所だった。扉はさらに奥へと開いている。壁をそれなら、と少年は言う。
「一緒に回らないかい。ボクと同じくらいの年の子がいて、ちょっと嬉しかったんだ」
屈託ない笑みに、ファンも固まっていた表情を緩め、頷いた。
「あ、でも、もしかしたらまた幻見て止まるかもしれないけど」
「それなら、なおさら誰かといた方が安心だよ」
少年は、行こう、と扉の方へ歩き出す。ファンもそれを追って歩き出す。
「そういえば、名前は？　おれはファンっていうんだ」
少年はぴた、と足を止める。そして、振り返る。
「――ジュジ」
「え？」
少年は微笑む。ただ、それはあまりにも妖しげで、空恐ろしいほどに美しい笑みだった。
「ジュジ、だよ。よろしく、ファン」
少年――ジュジは手を差し出してくる。握手かとファンが手を差し出すと、そのままジュジは手を引いて駆けだす。つんのめるファンに、ジュジは言う。
「御柱は広いよ。どんどん進まないと」
次の部屋の巡礼者の列の最後尾に追いつくと、待っていたかのように後ろで扉が閉まった。

夢と現と幻と

次の部屋に入って早々、再び幻は頭痛を伴って姿を現した。
『しかしまぁ、ここまで来ちまったんだな。なぁ、本当に大丈夫か？』
『何よ、まだ言ってるの？　もう。黄の地じゃあ生まれないんだから、大丈夫って言ってるじゃない。国境の村にはお医者様をお願いしてあるんだし、心配し過ぎよ』
強気な女性に対して、男は心配そうに言葉を重ねる。
『でも、お前、万が一ってのが』
『天下の武人がでも、とか、だって、とか言わないの』
幻の女性は咎めるように言って、男の手を自分の腹にあてがう。
『ほら、大人しくしてるでしょ』
『ああ。途中であれだけ蹴ってたのにな』
『お腹の子だって、ちゃんと大人しくしてるのよ。あなたがおどおどしないの。さ、神官長様に挨拶しないと』
女性は歩き出し、見えない群衆の中に混ざる。慌ててその横について歩く男は、それでも不安げな表情を崩さなかった。この幻が幻でなければ。これから起こるであろうことを、少しでも阻止できるのなら、どんなにいいだろう。
「ファン！」
ジュジの声にファンは現（うつつ）へと引きもどされた。気付けば、ジュジに体を支えられている。ふら付いたからかもしれない。
「本当に大丈夫？　その幻、普通じゃないよ。何が見えるの？」
「親、だと思う。初めて見たんだ。だから、ちょっと驚いてるだけなんだ」
笑ってみせたが、冷や汗が首を伝ったのがわかって、笑みもそう上手く作れていないんだろう思った。
「そう言うならいいけど。もう少ししたら次の部屋に移るって。こ

の部屋の説明は？」
「ごめん、聞いてなかった。……報せの鳥がいっぱいだ」
辺りを見回すと、天井の下には格子状の止まり木が掛けられていて、その間に槐色の鳥が留まっている。足首に付けられた紐は、飛んでいく先の国の色だろう。この部屋には、はじめから窓が開いていて、鳥が行き来できるようになっている。
「四方の王の崩御とか践祚を知らせたりするんだって。あと、化生の人が生まれてもここに知らせが来るんだそうだよ」
そう応えて、ジュジは支えてくれていた手を離す。そのまま、次の部屋の方へと歩き出すその横について、ファンは歩き出す。
「ジュジはもう幻を見た？」
「いや、見てないよ。もともと、ボクは幻が見たかったわけじゃないしね」
「そうなんだ？」
「来てみたかっただけなんだよ、御柱の中に。会いたいとしたら幻じゃなくて——天そのものと会ってみたい」
しっかりした声音に、天、とファンも思わず繰り返す。
「そう。この世の理すべてを整えた存在とは、一体どんなものなんだろうって。キミやボクをこの世に生みだしたすべての理が天に通じているのなら、知りたいと思わない？」
天そのものを見たいと憚らずに言うジュジは、まるでそれも可能だというような雰囲気を持っていた。儚げに見えるのは見た目だけで、鉄の塊のように確かで均一な印象だ。ジュジが言うと、本当に天が近いように思うから不思議だ。ファンは頷く。
「おれも思う。……やっぱり天は、本当にこの世のすべてを見ているのかな」
「わからないよ。でも、だから会って聞いてみたいのさ。それで、答えてほしい。でも、こういうのって、罰当たりって言われるんだっけ？」
ジュジは、くす、と笑う。そうだよ、と応えてファンも笑い返し

た。確かに、ジュジと回れて良かった。笑っている間は、幻の痛苦を味わわずに済む。ぞろぞろと人が動くのを感じて奥を見やる、と次の部屋への扉が開いていた。

「でも、あれは都合の悪いことは答えない。ずっと、これからもね」

先に見せたようなあの雪の華のような微笑で、ジュジは呟く。

「え？」

「ん？　どうしたの。次の部屋も幻が出るかもしれないよ、気をつけて」

聞き返したが、何ごともなかったような顔で、ジュジは先に歩いていく。引っかかりがあったが、ファンもそれを追い掛けて、次の部屋に入った。そこは、それまでの部屋に比べて縦に奥行きのある部屋だった。奥にあるのは、大きな机と椅子で、その回りの細々した物を除けば、殆ど何もない空間だった。質素で、殆ど装飾が無いことを抜けば、南王のところで見た謁見の間に似ている。巡礼者が全員入ったことを確認して、金烏玉兎は言う。

「この部屋は、神官長の執務室でございます、が」

「只今、長は席をはずしておりますので、ご了承くださいませ」

御柱の神官長、その言葉と同時に、再びファンは頭痛に襲われた。引っかくような雑音とともに、幻へと視界が繋がっていく。よろめいたのを、ジュジが支えてくれたようだが、それも随分と感覚が遠い。思わず瞑った目を開き、ファンは奥の椅子に座る人物に、驚きながらも声を絞った。

「先生……！」

衣装こそ違うが、幻の父母の前に気付いて上げた顔は、旅に出る前に送りだしてくれたあの顔と僅かにも違いが無かった。それは、大恩ある優しい仮親の、自分の知らぬ姿だった。

獏（1）

支えて貰った体を、今度は柱にもたれさせる。痛みは弱まったのか慣れたのか、最初のように吐き気を伴うようなこともない。声になっているかはわからなかったが、ジュジに聞こえるように、大丈夫、と呟いてみせた。

幻の先生は黒い上衣を纏い、中段の裳と帯を臙脂（えんじ）に揃えている。蔽膝（へいしつ）には麒麟印と一匹の獣が描かれていた。今までに見たこともないような獣だったが、きっとあれが幻獣、獏なのだろう。あの町にいた時、先生はいつも、長髪が邪魔になるからとひとつに結っていたが、ここではまっすぐ、流れるままにしている。

『ご機嫌麗しゅうございます、神官長様』

女性は大きな腹にも関わらず、器用に挨拶してみせる。それまで他の巡礼に挨拶する素振りをしていた先生は、それに軽く礼をして返し、応える。

『これはこれは。身重の方とはめずらしい。ようこそ、天社へ』

先生は立ち上がって、女性のほうへ歩み寄る。

『旅の道は大変だったでしょう、どうぞお座りになられてください。白澤（はくたく）、椅子を』

先生は見えない部下に指示を出し、にこやかに笑んだ。

『いえ、そこまでしていただく訳には。重そうに見えますが、ここまで来るだけ充分に動けるのです』

女性は丁寧に辞して、再び頭を下げた。そうですか、と先生は微笑をたたえて女性を見つめ返す。お手を、と二人と順に握手すると、先生は続けた。

『母親というものがどれだけ強いかは知っていますよ。でも、隣の御主人は、この旅の間ずっとあなたを心配してきたのです。差し出がましくてすみませんが、いくら黄の地と言えど、無理をしてはいけません。ここに来てから、少し息が苦しかったでしょう？』

先生の言葉に、二人ははっと顔を見合わせた。“夢”は記憶だ。先生は二人の旅の記憶を読んだのだろう。先生は別の方を見やって、声をかける。

『金烏（きんう）、玉兎（ぎょくと）。先に行ってください』

現実の金烏玉兎がいる方とは別だ。今焦点が合うのが幻のせいか、現実の人々は霞んで見える。声もこもって遠く聞こえる。

『御婦人、巡礼の列は急ぎ足ですから、私がご案内しましょう。ゆっくり回れば、それほど辛くないはずです。いいですね、御主人』

尋ねられた男は、それは、と恐縮そうに応える。

『有り難い話ですが、いいんでしょうか。家内のためにお手を煩わせるわけには……』

『いえ、ちょうど散歩しようかと思っていたんです。お気になさらず』

黒い衣を翻し、先生はゆったりと歩き出す。

『それに、ここまで来られたのも故あってのこと。思う所もありましょう。私でよければ、力になりたいのです』

優しい笑みに、困惑顔をしていた両親の頬も緩む。お願いします、と男は頭を下げ、女性の手を取って立ち上がらせた。その間に先生が次の部屋への入り口を空けたのだろう、歩き出した夫婦の姿は壁に吸い込まれてすぐ見えなくなった。先生もそれに続こうとしたが、ぴたりと立ち止まる。呼び止められたのか。

『……すみませんね。でも、ただ贔屓（ひいき）というわけでも、心配だというのではありません。はっきりとしませんが、あの二人、気にかかることがあるのです』

見えない部下に向かって、先生は難しい顔をしながら答えた。

『少し空けます。間（あいだ）、よろしく頼みますね、白澤』

その後、先生の幻も次の部屋へと消えていった。

気にかかること。先生は、この後起こりうることを予知していたのだろうか。幻が消えるとともに、ファンはゆるゆる頭を振った。あの表情は、どういう意味を持っていたのだろう。物腰は柔らかく、

心なしか町にいる時よりも言動も優しいように思えたが、その表情はどこか憂げで、少し疲れているように見えたのだった。

「ありがとう、ジュジ。もう大丈夫……」

体を立て直し、振り返るとジュジの姿はなかった。また部屋の移動があったのだろうか、人々は次の部屋に向かって移動し始めていた。ファンは再び最後尾になっている。ジュジの代わりに後ろに立っていたのは、閉扉（へいひ）の役を務めていた玉兎だった。

「お若い方。顔色がよくありません、大丈夫ですか」

幼い顔がじっとこちらを見あげていて、ファンは答えて頷く。金烏玉兎も、自分が生まれる前から居たのなら、先生のような不老の化生なのだろうか。お若い方、と言った金銀の目は姿以上の年月を感じさせた。

「幻を見て、少し。でも、大丈夫、平気です」

「強い幻に逢われたならなおのこと、それに心を寄せてはいけません。いくら幻が天のものとて、無理をして見れば心を蝕（むしば）みます」

はい、と静かに答え、ファンは次の扉の方へと歩き出した。ジュジは先に行ったのだろうか。後ろから玉兎がついてきているから、やはり自分が最後だ。近く使われた様子のない神官長の机を見て、ファンは黒衣の先生を思った。

「あの、玉兎さん」

振り返り、ファンは銀の童子に話しかけた。

「なんでしょうか」

「せん……いや、神官長はここを離れる時、何て言っていったんでしょうか」

童子は怪訝（けげん）そうに眉を寄せて、こちらを見返した。そして、間があって玉兎は静かに応える。

「少々、質問の意図をはかりかねますが」

その目がちらりと長の机を見やる。

「――別段何も。少々空けているだけでございますから。さ、次は聖堂です。お進みくださいませ」

先へ、と勧められてファンは慌てて次の部屋に駆けこむ。聖堂だという、そこはこれまでの部屋とはうってかわって、光にあふれていた。ファンは巡礼の列に紛れこんで、辺りを見回す。先に行ったはずの、ジュジを探さなければ。

※蔽膝（へいしつ）：上衣下裳の一部、裳（袴）の上に身につける、膝を覆う布。様々な文様が描かれている。

神体の麒麟

同じくらいの年の頃ならすぐに見つかるだろう、そう思ってファンは辺りをぐるりと見渡す。ジュジの雰囲気は、やっぱり他の人とは違うからそれもあってのことだ。一目だけでは見つからずに、ファンは集団の外に出るようにして、最後尾につき直す。見つけようときょろきょろしていると、人々が集団を緩ませるように後ろに移動してきた。ファンもそれに合わせて、充分に後ろに下がる。ジュジの姿は、まだ見当たらない。

聖堂はそれまでの部屋と比べてぐっと天井が高く、明るいせいか解放感に満ちていた。巡礼は参拝の列になり、部屋の中央を進んでいる。その奥には麒麟（きりん）の像がまつられていて、人々は順にそこに礼を行っていた。叩頭（こうとう）を含めて礼には決められた作法があって、ファンも小さな頃にバクから教わっている。

像は壁や床と同じで陶とも金ともつかず、内側から微かに光っている。天を示す獣、麒麟。四方の神獣がその国の象徴となるように、天の象徴は麒麟だ。四獣は常にその姿があるが、麒麟は世の転機にしか現れないのだと聞いた。数少なく現れた、そのうちのひとつは建国の時。現れるたびに国の危機を救っていくから、麒麟は天の具現と言われている。ファンはそう習った。

「裸（ルオ）を司る央の神が四足の獣なんて、おかしいと思わないかい？」

「ジュジ！」

声がするまで、横にいることに気がつかなかった。ジュジはいつの間にか隣にいて、同じように列に並んでいた。

「今、なんて？　四足とか、麒麟のこと？」

首を傾げて返すと、ジュジはええと、と苦笑する。

「ファン、君はどこから来た？」

「東の浅水（せんすい）って町だよ」

「護虫（ごちゅう）って聞いたことは？　東の護虫は鱗（リン）で、獣性もそれで定まる

んだ」

護虫。そういえば、東の関でシンがそのような話をしていた気がする。天の配した力の塊、獣人の力の源。もっと記憶を辿れば、シンは自分を――青龍を鱗の眷族（けんぞく）の長だと言っていた。鱗ある、魚やトカゲなどの容を持った気。リーユイやあの獅子の双子のように、そこで生まれたものに、見合う土地の気が結びつく。それが素養なのだと。わかる、と頷いて見せると、ジュジは続けた。

「東が鱗、南が羽（ユー）、西が毛（マオ）で北が介（ジェ）。そして、中央が裸（ルオ）。裸が司るのは――人だ」

「人間……じゃあ、麒麟は」

尋ね返すと、ジュジは微笑みながらも首を振った。

「さあね。ボクは麒麟という生き物がどういうものか知らないから、もしかしたら四方の気をすべて備えているのかもしれないし、あの容でも人を示すのかもしれない」

意味ありげにわからない、と言ってジュジは中途半端に話を止めてしまった。シンは以前、太極はすべての可能性を持つ、と言っていた。中央の地は四方を統べる所であるから、と。しかし、ジュジの言うように、中央の護虫が人の容を成すものだとしたら、自分の素養とは一体どう現れるのだろう。目の前の麒麟の像は、仄（ほの）明るく輝き、天の示す色に輝いている。

「ファン、前、前。順番だよ」

肩を叩かれて、ファンははっと顔を上げる。こうやって考え始めると周りに気が向かなくなるのは悪い癖だ。ファンは習ったように前に出て、麒麟の像の前で膝を折り、静かに叩頭する。

『そう、ファン……ファンがいいわ』

女性の声がして、今回は軽くうずくように頭痛が奔った。横に目をやると、自分の両隣に女性と男が、同じように叩頭して天へ礼を捧げていた。女性はゆっくりと上体を起こすと、にっこりとほほ笑む。

『この子の名前』

『ああ、いいな。たくさん良い意味を持ってる。ん、待てよ。まったくだめってわけじゃないけど、もし女の子だったらちょっと男っぽすぎないか？』

『大丈夫よ。きっと、男の子だから』

参った、という顔で男は苦笑を漏らす。女性はゆっくりと立ち上がりながら、後ろで控えていたバクに、嬉しそうに話しかけた。

『神官長様。ファン、という名前にしようと思うのですが、どうでしょう』

応えて、バクは優しく笑う。

『ええ、良い名前です。その子に輝ける未来が訪れますように』

三人の嬉しそうな顔。ふわり、と幻は消えて、頭痛もゆっくりと遠のいて行った。ファンの心が、陽が差したように温かくなる。やりかけにしていた礼を再開して、再度の叩頭からファンはゆっくりと頭を上げた。

やわらかく、あたたかい光を放ち、麒麟の像が微かに笑んだ気がした。

天社、御柱

聖堂を出ると、またいくつかの部屋に案内された。幻は、麒麟像（きりんぞう）の前で見た後からは殆ど現れなくなった。現れる時も、巡礼の人々の間に混じっていたかと思うと、見直すときにはもう居なくなっていることが多かった。その幻のどれもが笑顔で、初めのように痛みを伴うこともない。あの悪夢は、過去の出来事とは違うのかもしれない。何より、その光景は見ているはずがない。二人がここにきて、先生が居たその時は、自分は母の体の中にいたのだから。ならば、あの悪夢は、それこそ自分の頭にしかない幻だ。

御柱の高層にある、中で働く仙人や獣人の宿房や、そこへ続く、せりあがる床の部屋、大きな水盆鏡（すいぼんきょう）の置かれた部屋。御柱には四方と繋がり、かつ、御柱を特別なものとするものが集まっていた。御柱の人間は大抵にして長寿で、その長い生涯の間、あまり外には出向かない。四方の王と同じように、代わりを務める人間が稀にしかいないから、自然と長寿の、幻獣の化生や仙人が集まるのだという。もとより、強い力が無いと御柱の様々な業務や、扉を開ける、といった単純な作業も出来ないのだそうだ。

足りない物などない、きちんとした宿房の、その小さな窓から覗く空と黄の地の景色。たまに見える鳥は御柱に繋がれた報せの鳥で、その他の獣の声はない。静寂に包まれた、清浄な世界。それは降神（こうじん）の地に相応しく清く、四方に命の河を巡らす天の住まいにしては、寂しいほどに片付けられた場所だった。

窓から外を眺める、先生の幻。女性的な顔の、優しい笑みはどこか悲しげに、眼下に広がる黄の土地と湖を見下ろしている。

『ここはずっと、美しいまま変わらない』

先生は呟き、風に乗るようにふわりと消えた。

「――牢みたいだ」

呟くと、ジュジが相槌をうつ。

「御柱は、空から来た剣だって聞いたけど、ボクにはどうしても、ここが楔のように見えてしかたがない」

楔、と反復すると、ジュジは幻の先生と同じように窓に乗り出して、外を眺める。

「だとしたら、この楔に繋がれているのは一体誰なんだろうね」

「ここにいる人達……とかかな」

「ボクは、きっともっと色んなものがそうなんじゃないかと思う」

宿房のある階を見て回っている巡礼者に、金烏と玉兎が移動の意を伝えて回っていた。何もない箱のような部屋に入ると、行きでせり上がった床が、今度はゆっくりと沈み始めた。登るよりも緩やかに、井戸に掛けられた釣瓶のように下へ向かう。

それが滑らかに止まり、下に着くと、金烏玉兎は巡礼の人々を始めの部屋へと案内して、深く頭を下げた。

「御柱の、天社はご案内いたしました部屋と宝具、そして、我々巫子によって機能しております。皆さまの土地から遥か離れたこの場所に、四方と、そこにすむ皆さま方とのつながりを、知っていただけたら何より。——天はすべて、見守っておられます。あなた方の帰路の安全と、これからの健やかなる命を願って」

再度礼をして、金烏玉兎は顔を上げた。

「折よく、岸への道が現れております。良い巡り合わせも、皆さまの日ごろの善行のなせる業でしょう」

にこやかに笑う童子たちの礼に、人々も同じように礼を持って応えて、開いた入り口にむかって、ぞろぞろと歩き始めた。入ってどれくらい時間が経ったのだろう。“師”をあまり長く待たせるのもよくない。そう言えば、ジュジはどの集団と一緒に来たのだろう。時間の猶予があるなら、せっかくの友だ、シンに紹介したい。

「みんな、すぐ帰るのかな？　よかったら、外でもう少し話そうよ。師匠も紹介したいし……ジュジ？」

振り返ると、ジュジは入り口に向かって歩く人の中で、俯きながら立ち止っていた。

「どうしたの、ジュジ？　もしかして、幻を」
「――ファン。キミは本当に、大事にされているんだね。天はキミの心に平安を与えに、あの幻を見せたんだ」
灰白の髪の奥、夜空のように黒々とした瞳が瞬間的に血色に輝く。
「ジュジ……？」
「でも、それじゃあ困るんだよ。キミにはもっと強くなってもらわないと」
顔を上げたジュジは、凍てつくような微笑みでこちらを見つめる。
「何が、どう――」
「すべてを見るといい、ファン。偶像などない、本当の天社で」
陶磁器のような手がこちらに伸べられる。あの手は、取ってはいけない。本能的に、ファンはじり、と後ずさる。急いで走って、外に出なければ――
「落ちろ、御柱の真の社（やしろ）へ」
氷のように冷たく、綺麗な声だった。
足元に開いた、暗い地下への口。地を失くしたファンは、なすすべなくその闇の中へ落ちていった。

甦る悪夢

井戸や縦坑（たてこう）のような深い奈落。どこかにとっかかりが無いかと手を伸ばしたが、黒いばかりの空間は、どこまで続くのか手は届かなかった。ジュジの言葉は、シンや先生のように“ずっと”国を見てきた人の言葉に似ていた。自分が考えるような、知っているようなことよりもずっと多くを見て、多くを知る人のものに。

（すべてを見るといい――）

あの瞳、あの手、あの声。すべてを見ろ、というのだから、ジュジはすべてを知っているのだ。きっと、ファン自身のことも、ファン以上に。

『入口です。他の方々も、道が出るのを待っていたようですから、一緒に戻るといいでしょう。御無理は禁物ですよ』

不意に先生の声が頭の中に響いた。再び激しい痛みをもたらしながら、眼前の暗闇は幻影を明滅させる。どこまでも落下しながら、ファンの目には落ちた場所、入口の間の画が広がる。

『ありがとうございました、神官長様。リリ、帰り道は急がなくていいな？』

『ええ、せっかく気遣っていただいたんだし、ゆっくりと――あら、お腹が』

拍動と共に痛みは波のように押し寄せる。伸ばしていた手足を引っ込めて、ファンは、痛む頭を抱えるように縮こまった。この幻の行く末は――

「い、嫌だ、見たくない！　やめろ、やめろよ……！」

頭の中をつんざく叫喚。女性の――母の悲鳴。それに重なるように、痛みと光景にファンも絶叫していた。

『リリ？　リリ！　どうした！』

『どうなさったのです！　この気は……？　まさか！』

悲鳴は、次第に獣の唸りになり、獣とも人ともつかない声で、母

はいう。
『お腹の子に……獣が、憑いた。憑いていたら、死んでしまう、死んでしまう』
そして、母は呪文のような何ごとかを呟き、今度ははっきりした声音で告げた。
『なら、私が引き受ける……！』
『よせ、リリ！　いくら、お前でも体が持たない』
『おやめなさい！　御子(おこ)が無事でも、あなたが傷つけば同じです！』
先生が叫んでいる。目を閉じても、今度の幻は消えなかった。まぶたの裏に光が差すような、有無を言わさぬ幻影。まるでその場に居合わせたかのように、悪夢は鮮やかに続く。
『祓います！　離れて……』
先生の姿が獣性を帯びて、まわりに光輝を纏う。母はその場にうずくまり、腹を抱えるようにして、その身を抱き寄せた。続いて、地響きのように低い呻きがそこから聞こえてきた。
『待ちわびた……』
およそ女の声とは思えぬ、低く轟くような声。こちらを見る目は炯々(けいけい)と輝き、魔獣にあった時のような恐怖を感じた。先生の目が見開いて、踏み出した足を止める。
『とうとう、この日が来てしまったのですね』
先生は母を、否、その中の何者かを見て呟いた。きっと睨んで、再び足を踏み出す。微かにその手が震えているのを、ファンは精一杯の意識の中で認める。
「駄目だ、先生。行ったら、駄目だ……」
『いけません！　神官長様！』
唸りが止まり、苦しげだが母の声が戻る。リリ、と男がそれに駆け寄ろうとして、母はそれを制止した。
『来ては駄目よ、ウェイ。……神官長様、わかったのです』
呻きながらも、母は続ける。
『この子は天地、ともに選ばれてしまった。――よしんば天に差し

だそうとも、地に堕ろさせはしない。私の命を賭けて』

続く詠唱の後、母の周りでぱん、と光の輪が爆ぜた。ほっと、その表情が緩むと、すぐにその顔はさっきまでの魔の顔になり、ぐるぐると獣の声で唸る。

『獣性のない女と思ったが、こやつ仙だったか。子に結界を張りおった。小癪なことを』

先生は体を獏のように変えながらも、凄む。

『その人を解放しなさい、でなければ無理にでも――』

『払うか、夢食い。お前ごときが』

先生を夢食い、と呼んだその声に、先生はびくりと体を震わせた。再び止まる脚。先生は獣性を帯びた手を握りしめる。その横で、じっと妻の苦しみに耐えていた男は、とうとう逆上して腰の剣に手をかけた。

『お前が、リリを。てめぇ出てこい！　たたっ切ってやる！』

剣を抜き放って前へ進み出た男を、おやめなさい、と先生は止め、答える。

『何を。私はそのために生かされてきたようなもの。それが天社の長たる私の務めです。蚩尤（しゆう）よ』

建国の魔神の名を呼んで先生は、掌の光輝を床の上へと放った。継ぎ目のない床に葉脈のように光が奔り、母の周りを取り囲む。床に走った光は母の周りで文様を描き、強く光った。その瞬間、その中央に開いた暗い穴。一度ふわりと浮いた母の体は、吸い込まれるように地下へと落ちていった。

消えた妻を見て男は逆上し、先生へと掴みかかる。

『お前もか、神官長！　お前も、リリを助ける気なんざ』

『落ち着きなさい！　あなたが落ち着かなければ、奥方の覚悟が無になる！』

先生は声を張り、その手を取る。そして、正気に返すように肩を掴み揺すった。

『部屋を移しただけです。より天に近い、地下の――真の社（やしろ）へと』

先生の言葉に男はようやく落ち着き、悲しそうな顔で、リリ、と呟いた。安心させるように微笑を浮かべ、その手に再び光輝を纏わせた。壁に手をかざし、あの昇降する部屋を出現させる。

『お願いします、手を貸してください。あなたの力が必要です、御主人。奥方も、御子も必ず助けます、必ず』

必ず、とぎこちない笑顔で繰り返し、頭を下げた先生に、男も同じようにお願いします、と頭を下げた。抜き放った剣を収め、先生と男は壁の向こうへと消える。

幻と痛みが消えるのと同時、一定に落ちていたファンの体も急に速度が緩み、次いで静かに地面に横たえられた。体が床に触れたのを感じて、ファンは体を起こす。

広がっていたのは、無限に続くような鉄色の空間と、青白く仄かに輝く、無数の円柱が立てられた空間だった。

真の社、神剣、幻影（前書き）

※少々、血液描写があります。

真の社、神剣、幻影

上の階も確かに明るくはなかったが、この部屋はひどく暗い。御柱の中というには、墨色の闇が辺りを覆っている。灯りと言えば、仄明るく光る柱だけだ。ファンは周りを見渡したが、巡礼はおろか天社の人々の気配もなかった。

「誰か！　誰かいませんか？　ジュジ！　……ジュジは」

自分をここに落とした、あの少年。血の色に輝いた眼と、氷の声。魔獣にあった時のような、不可抗の恐怖をそれらから確かに感じた。でも、どこか違うと思うのはなぜだろう。自分と近い子供の姿だったからだろうか、いや、姿のせいじゃない。きっと、魔獣とは別のもの。

とにかく、ここを出なければ。あたりを見回し、ゆっくりと足を踏み出す。光る柱沿いに、奥か手前かもわからない部屋を進む。触れた瞬間、柱はぼうっと光を強め、また静かに弱くなる。強くなった光は床を筋となって、先へと走っていく。柱は光を発しているがひやりと冷たかった。

先へ進み、再び別の柱に触れる。柱から放たれた光は同じ方向へと走っていく。ファンの足は自然とそれを追っていた。触れては追い、十数本目の柱で、闇と柱の一様な光景は一つの変化を起こした。一定の間隔で立てられた柱の、その次の柱があるべき場所には別の物が据えられていた。柱と同じように儚げに、だが、金色の光を放つ、つき立てられた一振りの剣。よく見る直刀ではなく、両刃のゆるく弧を描くような大刀だった。手元の柱を離すと最後の光が剣へと吸い込まれて、剣の鼓動となって輝く。

ファンはゆっくりとその剣へと近づいた。そうして、はっと気付く。ここが、御柱の心臓なのだ。ここが、この剣こそが御柱の中心。要の石のようにそこに食い込む剣は、まるで意思を持つかのように、ファンが近づくと脈打つように発光する。

ファンは恐る恐る、だが引かれるようにその剣に手を伸ばした。柄も鍔も一様に同じ物で作られた金色（こんじき）の剣。唾を飲み込み、ファンはそれに触れ、柄を握り締めた。

《まだ、ならぬ》

爆ぜるような痺れと瞬間的に溢れた光。剣から逃げた光は周囲の柱へと返り、辺りを照す。聞こえたのは声ではなかった。ただ、その意思だけが頭の中でこだました。剣は目の前で、ゆっくりと呼吸するように静かになる。その様は上の聖堂で見た、麒麟像のようで、生きたような気配。

「――やはり、触れさせない、か」

少年の声。ファンは慌てて振り返る。当たり前のように柱にもたれる、白い少年。

「ジュジ！　どうして、それにここは――君は、一体」

「まだ、ならぬ。か。僕もそう答えておくよ、ファン」

ジュジは微笑する。

「ならば、やはり君は強くならないといけない。君は、選ばれたのだから」

「選ばれたって、何に――」

駆け寄ろうとしたファンの目の前で、ジュジの姿は闇に溶け、別のところに現れる。

「それは、君を生み、生かした者が知っている」

ジュジは上でやったように、氷の微笑を浮かべる。同じく伸べられた手は、まっすぐにこちらを指している。

「さぁ、これならどう出る？」

射られたように、頭を貫く痛み。この痛みは、幻を呼ぶのだ――

『リリ、リリ！　どこだ、どこにいる！』

あの男の声。その姿は光る柱の中を足早に進んでいる。先生と分かれて母を捜しているようだった。

『……どうして、リリが。選ばれたって、覚悟って。わからない……俺には、何も……っ！』

小さな呟きは困惑と、無念を含んで床へと零れた。苛立ち混じりに床を踏む音は柱の中に響き、柱を叩いた拳は震えていた。

『ウェイ！　こっちよ、私はここにいるわ』

母の声に、男ははっと顔を上げる。

『リリ！　大丈夫か、魔物は』

『大丈夫、もう大丈夫よ、手を貸して』

ああ、と晴れた顔で男は駆けだす。柱の向こうでは母がうずくまり、それを待つようにじっと見つめていた。その顔は母のもので、その目は――

「駄目だ……」

ファンは絞り出すように言うが、それは幻に届かない。男は柱の影の母に手を伸べて、ほっと笑みを浮かべる。

『大変だったな、リリ――』

『――ああ、大儀だった。この女が抵抗したせいでな』

『え……』

低く恐ろしく、答えるのは蚩尤（しゆう）の声。次いで聞こえたのは肉を裂く、鈍い音だった。

「やめろおおおっ！」

ファンは絶叫する。男の腹を貫く、母の細い腕。飛び散った血は柱に、床にかかり、ばたばたと滴った。男は何か言おうとしたが、口から溢れたのは血糊だけだった。腕が引き抜かれると、男はそのまま足元の血だまりの中に倒れ伏した。

「嫌だ、やめろ、嫌だ……」

それを冷ややかに見下ろす魔獣の目をした母。ファンは、駄々をこねる子供のように、ただその光景を否定して首を振るしかなかった。

狂気と

ファンは後ずさり、ぶつかった柱に持たれて座り込んだ。男の下の血だまりは広がり、すべての音が消えた。誰か、とすがるように呟いたが、それがどこにも届くものでないのはわかっている。

「助けて……」

この場の誰をでも。発した声は闇の中に吸い込まれて、溶けてしまうだろう。あの少年は何か行動を求めていたが、今は立ち上がれる気もしなかった。

ふと、微動だにしなかった男の体が動いた気がして、ファンは再びそれを凝視した。見れば、血だまりから立ち上る黒い霧。周りの闇よりさらに濃く、霧は男の体を覆っていった。

『どうして、俺はここで死ななきゃならない？　どうして、リリがこんな目に遭わなきゃならない？　俺は、リリは、何のために……何故だ！　何故だ！』

男の声。霧の色と同じになった血が、時間を遡るように再び男の体へと集まっていく。それがすべて収まってしまうと、倒れ伏す男から鼓動の音が聞こえた。

男は床に手をつき、ゆっくりとその体を起こす。

『選ばれた……？　腹の子が、天地に？　子が選ばれた、そのためだけに俺は、リリは死ぬのか？　死にたくない、まだ死にたくない……死ぬのか。なら』

立ち上がった男の腹から傷が消え、怨嗟と憤怒と、狂気に満ちた目で男はこちらを睨んだ。今まで、ちらとでもこちらを見なかった幻が、今確かにファンを見ている。男はその体に黒い霧を纏わせながらゆっくり歩み寄り、腰の剣を抜き放った。白刃は青い光に照らされて、鈍く輝く。

『俺を死に追いやった、何もかもを壊してやる。天も地も、子供――お前もだ！』

振り上げた剣を見て、幻とはいえファンはとっさに体をずらした。空を切る音と、鈍色に輝く太刀筋。そして、斬撃音。

「え……っ？」

背にしていた柱が音を立てて崩れ、ファンはようやくその異変に気がついた。青白い光を放っていた柱は、破片となって一度強く光るとすぐそれを失って黒い石に変わる。同時に、頬をはしる微かな痛み。触れてみてやっと、斬られていることがわかった。幻と思った声は、目の前の男が確かに発している。

「なぜ避ける。お前はあの時、死ぬべきだったんだ。なぁ？」

柱に食い込んだ剣を引き抜き、男はくつくつと笑った。

「俺達が死んだのに、何故お前が生きてる？」

泣き声にも似た笑い声をあげ、男は狂気に満ちた目でこちらを見つめる。

「お前のせいで、俺達は死んだんだ。親を死に追いやって、お前は生まれた。親を殺した子は、その罪を負って死ぬべきだ。そうだろう？」

床を擦って剣は音を立てる。頬の傷が微かに熱を持って、早鐘のような鼓動に合わせてうずく。男の問いには答えようがなかった。ファン自身が、今まで抱えてきた問いや思いと殆ど変らなかったからだ。今まで見続けてきた悪夢が――母が父を殺し、やがて母も死ぬこの光景と、それを自分のせいだと繰り返された罪悪感こそが、まさにその言葉だったからだ。それでも、体は恐怖によって殆ど本能的に後ろにさがっていた。生きようとして。壊れそうに早い心臓に、呼吸も短く高い音を立てる。

「逃げるな。死ぬ気がないなら……俺が殺してやるからよ」

握り直される剣。じりじり近寄る男の姿に、ファンは小さく頭をふって、いやいやをしてみせる。どういう意味とも定まらないまま、ただ、違うと答えようとした喉は短く、言葉にならない声を発しただけだった。

「う、あ……」

ファンは弾けるように逃げ出した。それを追う足音と、狂気に囚われる男の声が後からついて来る。柱の砕ける音と青白く光る柱のかけら。出口はどこにあるのだろう。背中を走る悪寒に振り返ると、存外に近く寄られていることに気付く。振り抜かれる剣をしゃがみ込んで避け、転がりながら二の太刀を避ける。

「違う、おれ……おれは」

「何が違う！　おまえは俺達の命を喰って生まれた子だ」

再び起き上がり駆けだしたが、すぐに壁にぶつかってしまった。広いとはいえ御柱の中、壁があるのも当然だった。首の横につきたてられた剣に、ファンは振り返る。頬に伝うのは、血だろうか。それとも。

「違うと言うなら、答えろ！　俺は何のために生きた！　天だ地だと訳のわからん道理に、こんなに容易くひきつぶされるようなものが、俺の人生だったのか？　何のために死ぬ？」

笑みと泣き顔とが、いびつに組まれた顔で男は訊ねる。

「お前はなぜ生きてる？　何のために？　お前の為に俺も、リリも……あいつも死ななきゃいけないのか？　俺達が死んで、お前が生かされる意味はなんだ？　答えろ！」

頬を伝ったものが、顎を伝って床に落ちる。男は首の横に刺した剣を抜き、振りかぶる。

「答えられないなら、お前は――」

振り下ろされる剣に、ファンはぎゅっと目をつぶる。さらり、と吹き込む風のような気を感じて、ファンは目を開けた。自分の意思のまったく外から引き出された青龍の力。竜麟にあたった剣は高い音を立てて砕け、対する男の体を朱雀の紅焔が撫でる。男のたけびに、ファンははっとしてそちらに駆け寄る。駆け寄ったのは、反射的だった。少なくとも、考えたことではない。

男の体に残る火を叩いて消し、ファンはその表情を窺った。気絶しているのか。自分の金の髪や顔つきは、男に似たのだとわかったが、ただ悲しいだけだった。涙が傷に沁みてひりひりとした。

雫が落ちたのか男の目が開き、すぐに組み付されてしまった。男は問う。

「そうか、そうやってお前は守られているのか。俺達を殺した天意とやらに」

ファンはただただ首を振って見せるしかなかった。ぽたり、顔の上に落ちた雫に、ファンははっと男の顔を見る。いびつな笑みこそあれ、その両眼から伝うのは――

「――とう、さん。父さん」

ファンはただ男を――父を呼んだ。死にたくなかった、もっと生きていたかった。そう伝わってくる心が痛くて、辛かった。

「答えろ。俺がお前やリリを守ろうとした、覚悟は、意志は無駄だったのか？　俺は居なくてもよかったのか？　答えろ。なぁ、教えてくれ……」

悔いの涙が降り、ファンはただ同じように泣くしかなかった。

父

「父さん、おれは」
ファンは呟くように答える。
「父さんや母さんに、会いたいと思ってたよ」
先生がいたから、特別寂しいと思ったことはなかった。でも、自分の父を、母の姿を追ったのは無意識だっただろう。夢にみるその姿が、痛苦に満ちたものであったからなおさらに。
「子供、俺の……俺は、俺は……！」
一度しっかりと合った瞳の、その焦点がずれる。そして、再び父の周りに黒い霧が漂い出し、吸い込みそうになったファンは、とっさに顔をそむけた。
「俺の子供、俺の、何のために、俺は……」
錯乱が言葉に現れて、父はファンの上から飛び退いた。がらん、とその手から、剣の柄が滑り落ちる。黒い影は苛(さいな)むように父の周りを取り囲んでいる。父をこの世に呼び戻し、繋ぎ捕える魔性の霧。
「殺して……俺は、あの時、死んで……リリ、あいつを守って、俺は、子供は、やめろ、やめろ……」
断片的な言葉がその口から零れては、苦しげに父は呻(うめ)く。頭を抱えてふらふらと後ずさり、砕かれて折れた柱にその体を預けた。ゆらりとその周りを取り囲んだ影は、人のかたちをとって、あざ笑うように揺れる。あの少年のかたちで。
ファンは足元に転がる剣の破片を拾い上げた。あの影が良くないのだ。刃を握った手から痛みが走るが、ファンは構わずしっかりとそれを握りしめた。そして、父のもとへと駆けだす。
ずっと、ずっと傷になるまで胸に刻み続けた思い。——父や母の、運命を歪めてしまったのは自分なのだ。だから、笑顔を見られず、その苦しみの最期を見続けたのは、その罰なのだろうと思ってきた。そして、その魂が、いのちがここで弄ばれると言うのなら、何が相

手でもそれを止めなければならない。
影のより濃いところへ向かってファンは剣の欠片を振りおろした。その刹那、確かに振り返った影は、紅くその口を開け嗤っていた。音もなくはじき返された、剣と自身の体。離れた床に投げ出されると、ファンは受け身も取れずに転がった。
影は再び父の体にまとわりつき、その口からは低い呻きが漏れる。傍に転がった血のついた刃を拾い上げ、その影がじりじりとこちらに向かってくる。そこにあるのはすべての負が宿った狂気の眼。
「おれには、何もできない……！」
一番に心を蝕んだ無力感が、どっと溢れる。やっと止まった涙が、また視界をじわり滲ませる。父は獣のような叫びを上げ、腕を振りかぶる。
「ごめんなさい……父さん、母さん」
謝罪だけが口をついてこぼれる。
「謝るな――ファン」
剣は振り下ろされなかった。その行き先は、父自身の鳩尾（みずおち）、母が穿った穴に違わぬ場所だった。
「誰のせいでもない。お前は謝らなくていいんだ、ファン」
父はそう言って、突き立てた刃を引き抜いた。その切っ先には何か黒い塊がついていて、空に触れると辺りに漂っていた暗い霧ごと霧散した。
「……案外、うまくいかないものだね。まぁ、いい。またね、ファン」
ジュジの声が辺りに響き、影は消え、真の社はまた元通りの闇に戻った。
「天か地か知らないが、死に方も、その先の生き方も選べなかったんだ。死後くらい俺が選ぶ」
父は毅然とした声でそう言った。手から零れた刃が床に落ちて鋭い音を立てる。影が消え去ると、消えていた傷は元通りに血をにじませたが、父はファンの前で膝を折り、嬉しそうに微笑む。

「大きくなったな……いや、違う。初めまして、だ。ファン」
「父、さん……？」
差し出された手を取り、ファンは体を起こす。その笑みはどこか照れ臭そうで、父親という言葉さえくすぐったがっているように見えた。ファンにもその姿は父と言うよりは、そうなろうと迷いながらも直向きな若い男の姿に見えた。
「こんな挨拶は、やっぱ変かな。俺な、結構考えたんだぞ、お前に会ったら何て言おうかって」
「おれも……なんて言ったらいいかわからないよ。でも、嬉しい。すごく嬉しいよ」
ああ、と応えて父はファンの肩に手をやる。
「俺は――悔しいのが一番だ。リリ、つまりお前の母さんとお前と、家族になって一緒に生きてやれなかった。……俺はな、ファン。リリがここに来たいって言いだしてから旅の間、ずっとどうやったら父親ってやつになれるのか、足りない頭使って考えてた」
父はそう言って、ファンを抱きしめた。そして、しっかりとした声で言う。
「結局、解らなかったよ。でも、だからこそ決めたんだ。お前が生まれたら、めいっぱい愛してやろうって。そうすれば、そのうちにちゃんとした父親になれると思ったんだ」
力強く温かい腕に、ファンは眼を閉じ、ただ抱きしめ返した。器に水が満ちていくような、静かで優しい感覚。
「これが偶然でも宿命でも、もういい。何だって構わないさ、俺の人生は無意味でも、簡単に意味づけされるようなもんでもなかった。なら俺は、すべてを受け入れるだけだ。これでいい、これでいいんだよ」
父は腕を解き、強い瞳で言う。
「ファン。お前の人生だってそうだ。どこにあっても、ひたすらに、善く生きろ。それで出来るなら、きっと幸せになれ。俺が残してやれるのは、この願いだけだ」

ファンはせり上がる思いに、言葉を詰まらせ、ただ頷いた。そして、ふと下に目をやってはっと息をのむ。少しずつ薄く透けていく父の体。父もそれに気付いたのか、困ったように笑って、言う。

「これが最期だ、聞け、ファン」

「待って、おれはまだ何も……」

父はゆるゆると首を振る。そして再度、聞け、と続ける。

「お前のせいで死んだんじゃない。お前のために、俺達は生きることができたんだ。お前のいのちこそ、俺の誇りだ。俺達はずっとお前と会えるのを待っていた。ファン、お前は――」

腰へ、胸へと消えていく父に、ファンは手を伸ばしたがその手は向こうへと突きぬけてしまった。父は一段と声を張る。

「お前は、確かに、愛されるために生まれてきたんだよ。じゃあな、俺の、大事な息子――」

音もなくその姿は闇に溶け、消えてしまった。ファンは茫然とそこに居尽くす。残るのは、確かにそこにあったという感覚だけだ。

「ありがとう、父さん……」

ファンは自らを抱いて、静かに呟いた。もう、足りないものなど何もない。

親愛

俯いていた顔を上げると、闇の中に金の光が強く輝いているのに気付いた。あの金色の剣からだった。砕けた光の柱で、まばらな闇の中、導かれるようにファンはそれに歩み寄る。まるで生きて呼吸をしているかのように明滅を繰り返す剣は、近づくとさらにその光を強めた。触れよ、とばかりに輝くそれにファンは恐る恐る手を伸ばした。

柄に指が触れると目を開けていられないほどの閃光が、部屋を包んだ。見回せば、折れた柱も傷んだ床も何もかも元通りになっている。そして――

再び現れた幻は、母が父を害したまさにその瞬間だった。また、とファンは顔を歪めた。何度見ようと辛い光景に、今度こそ目をそむけようとしたとき、父の声が聞こえた。水の溢れるような音を喉からさせながら、だが、しっかりとした声音だった。

『捕えたぞ、化物』

『貴様……！　何を』

自分の腹に突き刺さる腕を、さらに引き込もうとばかりに掴む父親。

『俺の子に手を出すな』

にぃっと笑って、父は叫んだ。

『……ここです！　神官長様！』

誰かが駆けて来る足音、先生だろう。察した魔は腕を引き抜こうと乱暴にその腕を動かしたが、苦痛に噛み殺しきれない悲鳴を上げながらも、父はその腕を離さなかった。その顔は、死に向かうものとは思えなかった。

『離せ、死に損ないが……っ！』

『ああ。俺はここで死ぬ。――わかってるよ、リリ。俺はお前を独りで死なせたりしない』

柱の影から現れた先生は呪を呟きながら、母の体に掌を押し当てた。社に轟き渡った咆哮は、じっとりと空気に纏わりながらもやがて怨嗟の声も残らず消えた。先生の乱れた髪の、その奥の頬には既に涙が伝っていた。かみしめた唇からはうっすら血が滲む。

『よかった。後を、頼みます。……先に逝ってる、リリ』

母の腕を引き抜き、父はその場に倒れ絶命した。満足そうな笑みを浮かべて。さっき見た悪夢だった過去を、正しく辿り直すような幻。

小さな呻きが聞こえた。母が意識を取り戻したようだった。目の前の父を見て、その目に涙を溢れさせた。そして、その冷えゆく頬をそっと撫でて言う。

『ごめんなさい、ウェイ。ありがとう、もう大丈夫。大丈夫よ』

そして、再び苦しげに呻く。幻が霞み、瞬くとそこには真っ赤な顔で産声を上げる赤ん坊の自分と、それを慣れない手で抱く先生がいた。先生は母に自分を手渡して、泣き笑いのような顔で告げる。

『奥方、あなたの言った通りの――元気な、男の子ですよ……』

『やっぱりそう。あなたは、ファン。私の子』

母の優しい微笑みの横で、力いっぱいに泣く自分。母は自分を先生に再び預けると、静かに頷く。

『神官長様、お願いがございます』

『何を、気を確かに持ちなさい、今人を呼びます！』

母はもう殆ど力が入らないのか、微かに解る程度首を振ってこたえた。

『いいえ、私は助かりません。そのように命を使いましたから。でも、これでこの子は当分魔から護られます。私はもう充分に生きました。これでいいのです』

『いけません、どんな子にも親が無くては……』

わかっています、と母は隣に横たわる父の手をとって握る。

『ふたおやを失くすこの子が不憫でなりません。ですから、神官長様。せめて護りの切れる十五の年まで、その子が、ファンが健やか

であるように、どうか取り計らってくださいませ』

何かを探すように、赤ん坊の自分は先生の腕の中で体をよじっている。母と自分とを交互に見て、先生は切なそうにその表情をゆがめる。

『十月も前から、ずっと掛けてきた母の最期の願いです。私の愛しい子。彼の父のように、優しい子であるように、真に大切なものを知り、守れる子であるように。――その心に、名にし煌めきがあるように』

母が不意にこちらを見た気がして、ファンははっとそれを見つめ返した。満足そうな笑み。その目が閉じられる前、微かに動いた唇に熱いものがこみ上げる。愛している、と告げたその人は、傍らの父と同じように笑み、同じところへ逝った。

こぉん、と高い音をたて、剣は輝いた。幻は暗転し、残響は社を通り抜けていく。それに合わせて響くのは安らかに眠る父母の言葉。生まれてきて、本当に良かった、と。ファンは膝を落とし、ただ心に任せるままに、声を上げて泣いた。

獏（2）

暫時消えた幻は、剣の明滅で再び現れた。赤子の自分を抱き寄せて俯く先生は、小さく息を詰まらせ、ぽたぽたと涙をこぼした。

『これが伝えられずに、何が夢食いと……』

先生は途切れた言葉を、咽(むせ)びにして吐き出す。

『これをどうやって伝えろというのです、こんなに強く大きな愛情を……！』

感動と後悔と、自らに対する憤りを両眼からあふれさせ、先生は崩れるように座り込んだ。

『この子に本当に必要なものを、私は伝えてやれない』

今ようやく聞くことのできた父母の言葉。本質は言葉ではなくそこに乗せられたものだと、今なら自分にもわかる。それに言葉を伝えることはこの場面を伝えることに他ならないから、先生は今までずっと黙っていたのだ。

眠っていたようだった赤子がふいにぐずりだし、先生は立ち上がった。赤子を羽織でくるみ、顔を上げる。

『ともかく、早く上に戻らなければ。ここでは産湯も何もない。彼らも……』

先生は出口に向かうのか、こちらに向かって歩いてくる。唇を真一文字に結び、真剣なまなざしの先生は、剣の前でぴた、と足を止める。まるで息も時も止まったかのような一瞬、すべてが動き出して先生は大きく息を突いた。

『――何をなさろうというのです。この子はもう、充分に酷な宿世を負ったではありませんか』

まるで身の内に語るかのように、先生は何かに向かって応える。

『天の、御意のままにありましょう。もとより、それは彼の親の願いなのですから』

先生は、冷えぬように布の内へと赤子を抱き直す。

『この社に入りてより数千年、主命を賜り、世をはかり、この国の夢を看てきました。この身が世の為になるのなら、喜ばしいこと』

先生は語調を強め、悲痛を帯びた声で続ける。

『しかし、私はもう耐えられません。千万に人の命はありましたが、命は星や真砂と違います。全てがその身に多くの思いを抱えた、私と同じ人間です。私とてどれほど生きようと、思い惑う一人の人間に過ぎないのです』

いえ、と先生は頭を振る。

『ただ一つの約束すら守れず、ただ一つの想いすら届けられぬような、何にも及ばぬ人間だったのです。来し方を知り、行く末を読んでも、目下を救えぬのなら、この力に意味などないでしょう。生まれ持ったこの獣性に、今はただ、座ばかりが高い』

こぉん、と再び神剣は鳴る。それは咎めたのか、認めたのか、答えるように明滅した。先生は続ける。

『その身に必ず命を負うのが人なら、ひたすらにそれを全うしましょう。それこそが仕合せであって、幸せとなるのですから。――私のすべきことはここにはありません。この小さな命の負った定めを、全うできるように尽くすこと。それが私の、新たな使命です』

澄んだ音が金色の光を連れて社に響きわたった。先生は赤子を抱いて、こちらに向かって真っすぐ進みだす。幻の体が、ファンを通り抜けていく。先生に抱かれた過去の自分と、すべてを知った今の自分とが交錯する。足音が背後になって、“過去”がはじけるように泣きだした。振り返ると、先生の驚く顔があった。

『どうして、この記憶を持って……これは辛い夢になる』

先生は赤子の額と自らの額を合わせて、静かに何か呟く。

『どうか健やかに。せめてこの約束は守りたい。大丈夫。その心に闇を巣食わせはしない。大丈夫。――あなたは必ず、私が守ります』

先生の顔には覚悟があった。ファンが今まで見てきたものと同じ、厳しくも優しい、敬愛する育て親の顔だった。

先生は壁に触れて、扉を開く。幻が消えると、剣はその光を収め

て静かになった。そこから走る一筋の光が先生の消えた壁に走り、扉を開いた。戻れ、ということなのだろう。昇降部屋に入ると、微かな浮遊感が体を包んだ。

再び扉が開くとそこは初めの部屋だった。今日の巡礼は終わってしまったのだろうか、巡礼者も案内の金烏玉兎の姿もない。足を踏み出すと、足元から進み出た金の光が、下の社と同じように入り口のあるべき壁にぶつかって、扉を開いた。外はまだ明るく、陽の光は眼を灼くように眩しい。目が慣れると、ちょうど道が現れていた。どのくらい中にいたのだろう。随分と師を待たせてしまったはずだ、きっとかなり心配させたに違いない。ファンは駆けだす。

『すみませんね。……少し空けます。間、よろしく頼みます。白澤(はくたく)』

先生の声。神官長の部屋を出る時と同じ言葉だ。旅支度の先生と、産着を着せられた赤子の自分。十五年前のその日。声を掛けられたその人は何と応えたのだろう。

『さぁ、行きましょう、ファン』

幻の声に頷き、それと共にファンは外に出る。自分に与えられたものを再び取り戻して、しっかりと胸に抱く。この身は今、何よりも確か。陽に照らされて煌めく道を、ファンはまっすぐに駆けだした。

紫眼の咎め

水の向こうで閉まった扉を見て、シンは重く息をついた。水面に映る御柱はゆらりと揺れて、その輝きを辺りに散らしている。万も昔のこととはいえ、御柱のことはおおよそ解っている。日に数度の湖上の道も、扉を開ける御柱の者のことも。遥か昔に、初代の王たちと他の神獣と見(まみ)えた日のことも、鮮明に思い出せる。なのに、何故だろう、あの時自分が何を話したのか露とも憶えていないのだ。木王と――東の初めの王たる乙女と、自分は何を語り、戦いに赴いたのか。どんな思いでそこにいたのかも。

青龍の座と力を与えられた時、最もふさわしいと選びだしたのが天で、もっとも力をやるのを躊躇(ためら)ったのが天だった。無理もない。四方の獣は往々にして荒神だったが、話もできぬほどに他を排した自分を、善き王と並びたてようというのだ。四凶ですら獄に封じたような龍を、神獣へと引きたてようとしたのだから、並大抵ではない。己のことながら、半ば賭けだったのではないかと思う。

何人も近寄らせなかったし、何人も近寄ろうとしなかった。只一人、後に木王となる娘を除いては。何もかもが懐かしい。懐かしい。思い出そうとすると胸を灼くほどに、記憶は遠く、光景だけが鮮やかに脳裏によぎる。ただ前を見て進めと残された言葉を、振り返り振りかえり何度も思い出している。この身の矛盾にシンは苦笑した。

シンは水辺から離れ、近くの草地に腰を下ろした。丁度よく突き出た岩に背を預け、御柱を見あげる。中に入れぬ理由を考えたが、いくつか思いついてどれとも付きかねた。

東の地の健全なるを願うなら、これ以上、土地が弱る前に天に故を問わねばならない。入れぬのならば、なおさらに話を聞いてもらわなければ。どの道、こうして天が拒むような獣は、四神に収めておいてはならぬ。

「やはり、俺では駄目なのだろうな。天よ」

上を見あげて独りごちる。御柱は黙し、風だけが耳朶（じだ）を撫でて過ぎていった。

湖上の道は、一日に数度現れるが、その時期は日によってずれがある。それは自然がなせるものなのか、天が意図して出すのかは知れないが、数刻もして次に道が現れるころには、おそらく巡礼の列も帰ってくるだろう。

ファンはその列に混じって回っているだろう。御柱とはいえ獣堕が出たことを思えば、目を放すことに多少の躊躇いはある。だが、十五年前のその一件を除けば、御柱の社は不可侵の神域、滅多なこともないはずだ。あの頃は西の荒れが特に激しく、中つ国一円に力が澱んでいたから、中の獣堕はそのせいなのだと思う。

そして、ファンには言えないが――おそらくその事象も天が許容したのだろう。中は天に許された事柄しか起きない。父母の死も、ファンの誕生も、すべてが天の意の中にあるのだ。天が望み、その意が適えられなかったことはない。万と続く中つ国の発展も、きっとそうなのだろうとシンは思ってきた。

不測の事などいつの時代だって起きる。ならば、自分は天の大枠に沿うように、最良の選択をすべきなのだ。

「――穢れた身で天に近づこうとは、随分と弁（わきま）えを失くしたようですね。青龍」

突然に掛けられた声に、シンは声の出所を探して辺りを見回した。常に何かを咎めるような厳しい声音、発した本人のその性質がよく出た声は、旧知の男のものだ。目をやれば、道もなしに湖上を歩き切った人物。呆れた様子で押さえた額の中央、その手の下には他の者と同じ双眸の他に、もう一つの目が開いていた。

「白澤（はくたく）か、直に会うのは初めてだな。結界を開けてきたのか」

「自分が通るくらいなら造作もないこと。……会えたはずもないでしょう。四獣は外を出ぬのが決まりです。何をしに来たのですか」

男はそう淡々と応え、額の手を放した。紫水晶のような瞳がこち

らを見定めるようにじろりと動く。白澤は白と藤の上衣下裳の上に、副神官長を示す衣を羽織っていた。裳の上に身につけられた蔽膝（へいしつ）には多くの角と目を持つ四足の獣が描かれている。この世の生物を全て知るといわれる、幻獣白澤。森羅万象に通ずる知識を持ち病魔を払うとされたそれの、化生として生まれたのが目の前の男だ。

「天に用があって来たのだが、弾かれた。弾いたのはお前ではないんだろう？」

後ろに撫でつけられた短髪の、その下の目が再びこちらを睨む。眼鏡をかけた揃いの目でも同じようにこちらを見て、白澤はため息をついた。

「確かに私ではありませんが、ならば、理由などその身に聞けばわかるのでは。死の穢れを負わぬ者などいませんが、貴兄の穢（え）は他の比にならない」

座るシンを見下ろして、白澤は言う。人は必ず生きていれば、誰かの死に立ちあう。しかし、それが己の業によるものだったとき、死の穢はその身に沁みついて、魂を汚すのだ。穢が強まれば、その魂は獄へと曳かれゆく。この身の穢はそれだけあるはずだ。

「最初の王を死なせたのは、貴兄だけです、青龍」

覚えている。深手を負って、腕の中で冷えゆく細い体。雨音に紛れた最期の言葉。

「ああ、そうだ。天の選んだ“最善”を、俺は死なせた。それが理由なら、こちらとて解っている。だから、来たのだ」

最初の務めを全うできなかったのは、自分だけだ。初めの王達は天の泰平を具現するための存在で、戦いでそれを失わないようにするのが、あの戦いでの四獣の役割だった。確かに四方いずれも無事では済まなかったが、大戦の後に王を残せなかったのは東だけだ。

「だから、とはどういうことです。知っているなら来られるはずがありません。貴兄の役目は東の地を護り、天の意を具現させることなのですから」

「……てっきりお前は知っているものだと思ったが。ここ数年、東

の力の巡りがおかしいのだ。天に言いつけられた役を全うできなくなったから、俺はその役を返上しに来たのだ。他にいくつか用もあったが、東を離れたのはその為だ」

その答えに、白澤の顔色が変わる。

「愚かなことを！」

荒げるわけでないがきつい調子で、白澤はそう吐いた。

「その身がどうだろうと天は貴兄を選び、その役を与えたのでしょう。それを投げようなど、不遜極まりない。業が元ならとうに天は貴兄を見離しているはず。今、変異があるとすれば、そのようなことを惟う貴兄の懦弱故だ」

それも然り、とシンはただ黙し応えた。しかし、と間をおいてシンは問う。

「不徳も承知の上だ、白澤。……ただ、一つ問いたいことがあったのだ。天ならご存知のことだろう」

「まだ、何を言うのです」

怪訝そうに、こちらを窺う三眼。

「陛下は――今上の我が君は、何者だ。俺が守れなかった初めの王と同じ顔をして、何も知らぬあの娘は」

今上が現れなければ、こうも自ら昔をえぐることもなかっただろう。偶然というには難い。由なしとは思えなかったのだ。

天黙し、水揺るる

白澤はしばらく黙っていたが、しばらくしてゆるりと頭を振った。

「預かり知らぬこと。近づけぬということは、天もお答えになるつもりがないのでしょう。つまりは、それが答え。急ぎ戻り、務めを果たしなさい」

そう言って、白澤こちらに背を向ける。同じように御柱を見やったが、扉はまだ開く気配がなかった。言わせてもらえば、と白澤は半身向き直る。

「獏といい貴兄といい、容易に大任を投げようとする者を天がどうして御認めになったのか、私にはわかりかねる。預けられた命は全うすべきでしょう。貴兄らにしか、出来ぬと預けられたもののはず」

それは語りかけというより、呟きや自問に似ていた。僅かににじませた困惑は、短く長い十五年を思うものだろう。俯いた顔を上げ、白澤は再び問う。

「何をしているのです、青龍。東都へ戻りなさい」

「悪いが、中に連れがいるものでな、ここを離れられん。――それに、やはり俺の意思は変わらん。東の安寧こそ天の意思なら、俺がその妨げになるようではな。四方の意をはかりたい」

「……勝手なことを」

吐き捨てるように言い、白澤は重く息をついた。額の紫眼がこちらを睨み据える。

「たとえ四獣とはいえ、この平穏を歪めるなら、決して許しはしない」

「全て覚悟の上だ」

そう答えると白澤は、張り詰めた力を抜くように、ふぅと大きく息をついた。

「……で、連れとは誰です」

「バクが連れ出した太極だ。頼まれて弟子にして連れている。俺は

弾かれたが、父母のこともあるから、一人で入れてやったんだ」
「その素養は」
短い問いに、シンは首を振る。
「まだ知れない。だが、王でなしに四獣の力を使う。他に例を見ぬから、素養のことならばその眼に敵うものはないと思い、連れてきたのだ。看てやってほしい」
「構いませんが、ならば獏はどうしました。まさか、子だけここにやって戻らぬ、ということはないでしょう」
白澤は続けて問う。長き生の中ではただ十余年とはいえ、それでも長の不在が長引けば、支障がでることもありうる。
「太極はここに置くために連れて来たわけじゃない。天に許された生の、その命を知るための道中に寄ったまで。旅が終われば、バクの下へ帰すと約束した。返して言えば、子がバクの下へ帰る時は、バクの命も元に戻るんだろう。……俺がその意を測るよりは、お前の方がわかるのではないか？　白澤」
そう訊ねると、白澤は不服そうな顔で応えた。
「……言わずとも。だから、困ると言っているのです。あの時とて、御柱に留め置く方が好いと言ったのを退けて行ったのですから、機が来るまで戻らぬつもりなのでしょう。貴兄と同じで、言っても聞かない」
シンはただ苦笑いして、それに応えた。ふと見やると、湖の水が波立ち始めている。遠目にも扉が開くのが見えた。
「帰って来たか。天から何か得て来たかどうか」
金に光を照り返す黄砂の道を巡礼の列が戻る。目を凝らして、その道に似た髪色の少年を捜す。全ての人が出たのか扉が閉まるが、遠目とはいえその姿は見つからない。
「……いないな。確かに入ったんだが」
「まさか。巡礼は必ず全員出るまで動きませんから、そんなことはありえません」
続々と人は岸まで着き、それを待って湖は再び波立ち始めた。シ

ンは白衣の副官と顔を見合わせる。人々は集まると、それぞれの国へと歩き始めた。そうこうする間に道は湖底へと消え、しばらく残っていた人々も四方への道へと向かっている。

道が完全になくなり、湖面が完全に凪ぐと白澤はその表情を険しくし、衣を翻した。

「中の者に訊いてきます。姿は」

「十五程で、金の髪を結った少年だ。一人で入った」

その言葉を背に白澤は、途中で見えない壁を押し開けながら、水上を足早に行く。何があったかは知れないが、ファンのことならば、ただ迷ったというわけではないだろう。白澤の姿が御柱に消えて、シンは遥か上を見あげる。先は雲か霞みか見えないが、天はそこにいるのだろう。ファンのことも、東だけではない中つ国すべてに起こりだした変相も、すべて見ていたはずだ。

「応えぬからとて、気付いていないわけではないだろう？　これだけ経ったのだ、放っておける歪みでもあるまい。何をしようというのだ」

しばらくして、同じように水上を歩き白澤が帰って来た。その表情は思わしくない。

「金烏玉兎によれば初めの部屋に戻るところまでは、見たと。それと――」

「何か見ていたのか」

何をかはわかりませんが、と白澤は置いて、答える。

「御柱を回る間、ずっと幻なりと話し続けていて、辛いものを見ていたようでもある、と。他の部屋にいないか、中の者全てに探させています。それでも見つからないとなると――気に入られたとしか」

白澤が眉間にしわを寄せると、間の目も困惑したように細くなる。シンは立ち上がり、水辺へと踏み出す。

「たとえ天とて、今はそういうわけにはいかん。捜す！　俺を中に入れろ、白澤！」

「できません！　その身をはじいたのは天です、私にはどうしよう

も」

「なら、多少無理をしてでも入るぞ」

龍の気を纏いながらさらに進もうとすると、白澤が行く手をふさいだ。心ならずも、という感ではあったが、決して揺るがぬ覚悟の顔だった。

「なりません！　天を貶（おとし）めるつもりですか！」

「それで罰されるというなら、元々だ！」

それでも引かぬ白澤と押し問答になり、ついには睨みあう形になった。

「御柱中で捜しています！　弁え、下がりなさい、青龍！」

白澤の言葉と、ほぼ同時。湖の前で立ちふさがる白澤の後ろで、湖面が波立ち始めた。次いで、現れる金の道。

「どういうことです、さっき現れたばかりだというのに……扉も」

開いた扉に現れた影は、今度こそ弟子の、太極の少年の姿だった。急いだ様子でこちらに掛けて来るが、見えてきたその顔つきは不安げに入っていった時とは、すっかり変わっていた。

「あの子供が、太極」

砂上を掛けて来るファンを、白澤は三眼でじっと見つめた。見立ての業の最たるが白澤。そして、紫眼にその姿を映すこと数瞬、その眼はかっと見開かれ、顔は驚きを映した。

「まさか、キリンジ……？」

「どうした、何か見えて――」

その呟きに、シンは見立てを訊ねようと白澤に近づいた。その瞬間、白澤は急な眩暈を起こしたかのように、前にのめり、額の目を押さえた。

「お戯れが過ぎる……！」

何かの天意を得たのか、まるで噛みつくような調子でそう言うと、白澤は駆けて来るファンに道を開けた。

「青龍、事情が変わりました。とはいえ、それは後にしましょう。彼に何があったか聞くのが先です」

駆けてくるなり深刻そうな顔の大人を見て、ファンは困惑したようにその顔を交互に見やった。近づいてみれば、怪我をしている。確かに、何があったか、聞かねばならないようだ。

シンはファンに、落ち着き、とりあえず座るように言った。気付けば道は消えていたが、風のせいだろうか、湖面は波立ち、ただ黙す御柱の姿を揺らしていた。

真命を知る

「遅くなりました、師匠！」
そういってファンは頭を下げる。そして、白澤（はくたく）の姿にも気付き、小さく礼をする。
「何があった、ファン。見当たらなくなったと聞いて、押し通ろうとしたところだ」
すみません、と小さく応えたファンに、白澤が続けて問う。
「君は、どこにいたのです。それに怪我など、徒事（ただごと）ではありません。話してください」
ファンは考えるように俯き、言いよどむ。そして、意を決するように大きく息をした。
「地下に、いました。父や母の……最期と、おれを見たんです」
ファンは確かな声で話し始めた。時々に言葉が切れるのは、隠しておきたいわけでも、今言い繕おうとしているわけでもなく、ファン自身もまだ困惑の中にあるからしかった。
「どのことから話していいのか、わかりません。何を見たのかも、何を意味するのかも。順に話します、おれが見たものは全部」
地下、と聞いて白澤は顔色を変える。地下など、シンも初めて聞いた話だ。ファンの頬の傷を治してやりながら、シンもそれに耳を傾けた。

話し始めてしばらく。ファンは、初めの部屋に戻ったところで、話を切った。
「ジュジは、おれに何かしてほしいようでした。いや、ジュジだけじゃないのかもしれません。先生は、おれが何か負っていると言っていました。……おれには、何かしなければいけないことがあるんです。父や母が命をかけておれを守ってくれたように、おれにも何かやるべきことがある」

話に聞き入るこちらを、ファンはしかと見やって言う。
「天や、ジュジもそうなのかわかりませんが、魔の者がおれにある何かを待っているから、というんじゃありません。父さんや母さん、先生が守ってくれた命だからこそ、おれは、おれの命を全うしたい。今は、もっと強くなろうと思います。師匠、善く生きるにも、力がいるんですね。与えられたものを守り、誰かに何かを与えられる人間になれるように」
ファンは、お願いします、と頭を下げた。
「もちろんだ。俺に教えられることなら全部教えてやる。……辛かっただろう、よく最後まで見た」
言葉を待って上げられた顔を見て、入る前と何が違うのかわかった。欠けていたものの充足と、受容に対する覚悟だ。この少年は幻を、過去を見て、今、そして未来の自分を見たのだ。不確かではあれ、大きくうねるその先を、受け入れる覚悟をした。わかっている。受け入れることは、耐えやり過ごすことよりも、酷な道になる。
「地下の剣は、何か君に伝えましたか」
じっと黙って聞いていた白澤が口を開く。地下の部屋の話から、その表情は厳しいものに変わっていた。急な問いと初見の男にファンは口ごもる。
「……私は白澤、あなたの言う“先生”の副官です。この場を預かる者として、その内容は知っておかねばなりません」
あなたが、と応えて、ファンは得心のいったように頷いた。
「幻の他には、何もなかったと思います。――あ、ただ、剣に触れた時、『まだ、ならぬ』って」
その答えに白澤は腕組みし、そうですか、とだけ返す。
「白澤。その剣とは何だ。地下など俺は初めて聞いた」
「それに答えるには、まず、君のいうジュジという少年について聞かなければなりません。――青龍。このことは御柱の中でも一部しか知らぬ秘事。わかりますね」
「了解した」

頷いて返し、ファンに話を促す。ファンがいうに、その少年はただ尋常でなかった、と。地下へ落とした時の恐ろしい気は、魔の者に感じるものに近かったらしい。

「どこかに、こんな印がなかったか？」

拾った石で地面に牛の角の図を描いて、訊ねる。この紋様はファンも見たことがあるはずだ。檮？（とうこつ）の腹や窮奇（きゅうき）の手の甲にあったもの、蚩尤（しゆう）の眷族を示す印だ。十五年前の魔が蚩尤だったのなら、大いにあり得る話だ。だが、紋様自体には頷いたファンも、それは見ていない、と答えた。

「感覚なんですけど、魔獣とはちょっと違うような気がしました。でも、人のような短命の存在じゃないと思ったのは確かです」

ならば何者だ、と呟く横で、白澤が腕を解いた。

「その影が剣を狙ったのではなく、また正体が解らぬのなら思案の意味はありませんね。私が気になったのは、その者が真の社のことを知っていた、ということ。ファン、といいましたか。君が見たのは確かに御柱の中心。獏と私、他は数えるほどもいない者だけが知る極秘の存在です」

周囲に人はいないが、白澤は声を落とし、続ける。

「天にその身体がないのは知っていますね、青龍」

「ああ。大戦の終わりだ。天の体は魔の者達を封ずるために使われた」

同意を求められて、シンは頷く。供物や呪具のように、天はその身体を中つ国の平穏に供した。神獣と王はそれを知っている。否、これは居合わせた初代の記憶と神獣にしか知り得ぬことだ。

「今、天はその身を地下の剣にて休めています。常に留まっているわけではありませんが、実質的な器はあの剣なのです。天の座ならば、あの剣こそ世界の礎ということ。それを護ることこそ、神官の真の務めなのです。よって、その部屋を知るものは少なく、また、開けられるのは長と、君が見たように天の意そのものだけ」

白澤は額の紫眼をファンに向ける。

「先見の力のない私にも、君のこの先に待つものが並一通りでないのはわかります。あなたの先生が天を護る命を放してまで君を護ってきた、君はその実相を理解していなければなりません。他は君の言うとおりです、意志は常に強く持ちなさい」

「……はい！」

そして、と白澤はこちらに向き直る。

「青龍。あなたの旅の意図は、私としては正直賛成しかねる。しかし、今、聞いていてわかったでしょう。事情が変わりました。今のあなたにはこの少年と共に四方を巡る役目がある。天はあなたの旅を許しました。進みなさい」

ああ、と答え、シンは青い巻き布の上から腕を握る。どうあれ、旅が許された。天はこちらの意を汲むつもりなのか、旅の間になんらかの事を伝えるつもりなのかは知れないが、これで進む大義は得たといえる。

話が一段落し、シンはそれまでの話に、昔を呼び起こされた。天に関する記憶だ。

「ファン。その子供は本当に、“ジュジ”と名乗ったのか？」

唐突な問いだったが、ファンはすぐに頷いた。思い出したのは名を聞いた時の懐かしい感覚の、その理由だ。

「天にまだ身体があった頃、天は自らを指してそう言った。古い言葉だ。意味は――」

話を聞けば聞くほど、知らずに名乗ったとは考えにくかった。しかし、あの時ならまだしも、何故今それを名乗るのか。

その答えも、この先にあるというのだろうか。

宿世のごとく、旅は続く

広大な獄の中央に、闇が凝ってできたような宮殿が据えられている。辺りは完全な闇ではないが、獄に陽の光など指すはずもなく、少し進めば何も見えなくなるような暗がりに燐光のような青い火だけが辺りを照らしている。青白い光の他に輝くのは、闇を往く有象無象の目だ。地上に出られぬ弱々しい力の塊が影となり、生き物を真似て動き回っているのだ。が、どれも粘菌のようにずるずると這いまわるものばかり、よくて餓鬼のような痩せたものが、そこの“今の主達”を恐れて逃げ惑うだけだ。

宮殿のもっとも奥、空の玉座の前で黒い霧が集まり揺れた。霧は次第に人の形をとり、再び散るとそこには銀灰の髪の少年が経っていた。口元にはうすく笑みを浮かべている。慈愛の笑みと言えばそう思えたかもしれないが、目はどこまでも冷たく、灯りのないその室内を見渡していた。

「今帰ったよ。いるんだろう、檮杌（とうこつ）、窮奇（きゅうき）」

ジュジと名乗った少年が、少し先の闇に向かって呼びかける。

「おかえりなさいませ。――御帰りは一人とは思いませんでしたが」

窮奇の声。暗がりが揺れて、影の逃げる鳴声がする。鬼火に照らされて、痩身の男と、その後ろの大男が姿を現す。

「つれてこれなかったよ。やっぱり難しいね」

ジュジが肩をすくめてみせたが、二人の反応は薄かった。

「……本当にできなかったのか？」

檮杌が短く問う。言葉少なのは不機嫌ゆえか。

「うん、駄目だったよ。キミたちができなかったんだし、大変なことだよ」

「俺達にできなかった、御柱への侵入を簡単にやっておきながらか？」

疑う声と剥き出しにされた下顎の牙に、気付かぬとばかりに無邪

気にジュジは笑みを作る。
「そう噛みつかないでよ、檮？。結構大変なんだよ。だから、結局殆ど何もできなかったんじゃないか」
ひらりと手を振って見せると、檮？はふん、と短く鼻を鳴らした。
「とはいえ、太極がこれ以上力をつけても困るでしょう」
窮奇は下で這う影を、鬱陶しげに指の先で払って言う。しぐさだけでも、払われた影は弾けて消える。ジュジはぐっと伸びをしながら答える。
「それなんだけどさ。別段焦る必要もないと思うんだよ。力をつけたとして、父さんが起きてしまえば、もうこちらのものだろうし。……あ、今まで通りに狙ってもらっていいんだけどね」
ジュジは目の前を舞う燐光を、蝶を取るように捕える。仄白い灯りは少年の顔を照らして、次には叩かれて消えた。
「まぁ、そういう算段は、窮奇、キミのほうが得意だと思うからお願いするよ。えぇと、次は饕餮の番だっけ」
「俺様の名前を勝手に呼ぶんじゃねぇ！」
別の方からの声に、三人は振り返る。そこ姿は無く、目を凝らせば空気の揺れのような靄が漂っているだけだった。
「いたのですか、饕餮。見えないのでてっきりいないのかと」
「てめーもだ窮奇。俺様の名前は俺様のものだ。おい、蚩尤様の子供だか知らねぇけどな、俺様を呼んでいいのは俺様と蚩尤様だけだ、わかったな！」
「そうだったね、ごめんよ」
呆れた様子の東、南の魔に対して、ジュジは靄に向かって微笑む。
「そうさ、俺様のものは誰にもやらねぇぞ。おい、その太極とかいう奴は俺様のもんにしていいんだな？　欲しいものは何だって奪ってやるよ。この世だってな！」
燐光を得て、靄が照らされると顔のようになったそれが、にぃっと笑って消えた。
「西は饕餮に任せましょう。まぁ、上手く奪ってきたとして、その

時に饕餮から太極を預かる方が骨が折れますけどね」
そう言って、窮奇は踵(きびす)を返す。微かに漂ったのは、煙草の匂いだろうか。
「私は蚩尤様の様子を見てきます。目障りな影がうろついているかも知れませんから」
窮奇が出るのに合わせて檮杌?もどこかに行き、玉座の前にはジュジだけが残される。
「――あの目、まるで信じるつもりはないらしい」
くすくす笑いながら、ジュジは玉座に腰を下ろした。闇しか見えぬ王座。かつてそこに座っていた主を待つ臣は、形ばかりこちらをその子息としておきながら、利なしと思えば切って捨てようという目をしていた。こちらがそれに気付いていることにも、気付いていながらだ。だが、今はそれでもいい。大人しくしていよう、こちらの真意に気付かれるまでは。
「ジュジ、か。天もなかなかに傲慢な名を名乗ったね」
その言葉が指すのは、救済。調停者として、天がそれを名乗ったのなら、自分もそれを倣って名乗ろう。同じように、機を待ちながら。ジュジは高く笑う。何に対するか知れぬその声も意も、すぐ闇の中に消えて行った。

湖のほとりに立てられた二つの墓標に、ファンは深く礼をした。身体はここに眠ろうとも、その心は今自分の中にある。
「行きます。父さん、母さん」
後ろで待っていたシンのところに戻りながら、ファンは自らに頷いて見せた。かつての自分がここから町へと旅立ったように、今また自分はここから旅立つのだ。今度は、太陽を追って西へ。見送りに立つ白澤(はくたく)に、シンは問いかけた。
「先ほど見ていて思ったが、バクがいない間はお前が長なのではないのか?」
問いに対して、白澤は淡々と答える。確かに、衣の背に描かれた

麒麟印には、副官を示す一重の輪。

「私は“間を頼む”と言われただけです。天に与えられた座ならば、それは容易に受け継ぎできるものではないでしょう。天命とはそういうもの、誰かが代わってくれるものではないし、それを全うすることが仕合せなのです。我らの長は一人だけ」

かつてバクが言っていたことと同じ言葉に、ファンは頬が緩むのを感じた。こうして通じるからこそ、先生は何も言わなかったのだろう。歪みのない信頼だ。

途中まで白澤に付き添われて、西に向かう道に立つ。逆行することになる西からの至黄の道は、この湖を元とする大河沿いに進む道らしい。河の名は湍水（たんすい）、名だけならファンも知っている。別れを言うために旅人二人は振り返る。

「騒がせて済まなかったな、白澤」

ファンもそれに合わせて再び礼を言う。白澤はそれに頷いて返し、口を開いた。

「貴兄らの旅の無事を願います。……青龍。西の地を見れば、かならず何か思うことになるでしょう。白虎と、白の王と話しなさい」

「ああ、もとよりそのつもりだ。践祚（せんそ）して顔も知らぬままだからな。見送り感謝する。天の安寧と、御柱の者たちの息災を祈る」

シンが歩き出したのについて、ファンも足を踏み出す。進めて数歩、白澤がシンを呼びとめた。忘れていました、と、シンに向かう。

「天が只一言だけ、あなたに言葉を。聞きますか」

「無論だ、聞かせてくれ」

「……天曰く“その剣の故を問え”と」

ファンには何のことか解らなかったが、シンはしばらく考えて、確かに、と答えた。使う所を見たことが無い、シンの持つ一振りの剣。見つめていると、シンは再び歩き出した。追って、ファンは急ぎ足に踏み出す。

少しして足を止め、振り返った御柱はやはり、悠然と高い。行く手へと傾く陽にその形貌（けいぼう）を照らされながら、湖に映える姿は黄金に

輝いている。
先で呼ぶ師の声に、ファンは同じ色の髪を風に流し、駆けだした。

剣の峰々（前書き）

黄の地、御柱の章の続きです。

剣の峰々

白の国の山々は、遥か昔より水に風に、その身を削ってきた。鋭く切り立った峰々には木々は少なく、滝と散る河の水を岩に張り付いた苔が吸う。水を止めぬ西の地は、起伏が激しく、耕作のできる僅かな土地に人々は集い暮らしている。至黄の道の途中にも、そうして出来た小さな村が点在している。朝霧に霞む山村は、さながら水墨の画のようだ。

初めこそ滑らかに傍を流れていた湍水（たんすい）は、国境を越える辺りから次第にその水量を増していった。辺りの山々は岩がちで、河は幾度も滝となり、繰り返し落ちる水は滝壺で白く砕ける。その湍水に離れては近づき、共に西へ向かう道も下りが多いとはいえ、荒々しい道ばかりだ。漂う狭霧にしっとりと黒ずむ岩の間を縫うように、道は続く。

草木に乏しい西は、その代わりに良い“かね”が採れた。人々の使う銅（あかがね）、鉄（くろがね）。所によっては、白銀（しろがね）、黄金（こがね）が出た。湍水の下流は、上で削られた岩が砂鉄となって積もり、陽山に近い南の方では硫黄（ゆわ）が採れるという。良いものが取れれば、自然とそれらを扱う優れた工匠が集まり、出来たものを広く中つ国へと売る商が盛んになる。商工の集う西は技の国であり、神獣である白虎の性から義の国とも呼ばれた。

険しい道の続く至黄の道の途中、峠の平地で二人は腰を下ろした。そこには岩に割り込むように生えた松の古木があり、それを目安に旅人は休息をとる。見回せば、そこで憩う旅人には行商の姿が多い。黄の地へ荷を運んだ帰りだろうか。ここまでで湍水の本流支流、大小合わせ五十の滝を過ぎた。名のついた滝は七十あるというから、街道と折り合う平地までの道もあと半分を切ったところか。

小腹塞ぎに干菓子をかじりながら、ファンは峠の下方を見やった。また河が近づいて来たからか、先は曇ってよく見えない。御柱を出

てしばらく。シンに聞こうと思うことは多かったが、道の険しさにこれまでの道中のように、話しながらというわけにはいかなかったのだ。宿を得れば、少しでも身体を休めるために休まなければならない。西は獣が多いと聞いたから、それにも気を張っていなければならなかった。

そして、聞けなかった理由はもう一つある。白澤から天の言葉を聞いてからというもの、シンは難しい顔で、何やら黙りこむことが増えた。何か遠いものを思うように、眉間にしわを寄せて。そうなると、時折返事を忘れることもあって、そこまで深く考え込んでいるのを遮るのも悪いとファンは質問を胸の内にそっとしまい込んだのだった。

“その剣(つるぎ)の故を問え”と、天は白澤の口を借りてそう言った。シンが持つ剣。東の町で会った時には、それはもう彼の腰に帯びられていた。ファンの目にもそれが相当のものなのはわかる。柄や鍔の細工も見事で、東の関で一度見たきりの刃は、遠目にもその鋭さを思わせた。けれども、それほどのものでありながら、シンはそれを使わない。いや、刃を凌ぐ鋭い爪を持っているのだ、使うところがないというのが正しいのか。ならば、何故。水筒の水を飲み、ふうと息をついたシンに、ファンはここぞと尋ねる。

「師匠、聞いてもいいですか？」

「どうした。何をだ？」

此度はすぐに帰ってきた返事に、言い出しておきながら、ファンは少ししり込みするような気持ちを覚えた。それでも、すぐにそれを押しやって、問う。

「その剣って、一体どういうものなんですか？　師匠には龍の爪がありますよね」

「ああ、これか」

シンは腰に下げていた紐を解き、胡坐(あぐら)をかいた脚の上にそれを乗せる。

「夙風(しゅくふう)、という。青の国の神器にして、重宝だ」

「東の、神器ですか」
ファンは驚き、シンの顔と剣とを忙しく見比べる。神器となれば、大抵が不出の国の宝のはずだ。かなりのものとは思っていたが、まったく意の外の答えだった。それを察したのか、シンが笑う。
「いいんだ。東の神器は陰陽一対で、これは陽の剣だ。陰の剣は春宵と言ってな、陛下が持っている。夙風は俺が持たねばならぬと決まっているから、こうして持ちだしたんだ」
シンは鞘から剣を僅かに引き出す。擦れる音も清浄に、覗きこむ二人の顔を映す刀身は金属か陶か、微かに青みを帯びていた。
「しかし、故を問え、と言われてもな。大戦の後に、天から下されたものだということ以外、思い出せん。何より、この剣は二つで一つのものだ、故を尋ねるのなら春宵も同じはずなのだが」
シンは再び、きちりとそれを収めて佩き直す。
「まあ、確かに、今それればかり考えているわけにもいかないな。天の言うことだ、すぐにわかるような答えではあるまい」
ファンは、遥かを思うようなその横顔を見つめる。やはり、シンはこの道の間ずっとそれを考えていたのだ。天が下した剣と言葉を持って、過去を手繰って。少しの沈黙の後、シンは立ち上がり、ぐっと伸びをした。
「そろそろ行くぞ。さっき旅の者の話を聞いたが、次の宿場は少し遠いらしい」
眼前で揺れた御佩刀に目を奪われながらも、ファンは弾けるように立ちあがり、荷を担ぐ。少し風が出たからか、下方の道がおぼろげにも見える。
「はい！　あ、師匠。おれ、もう少し急げます」
そう答えて、屈伸して見せる。下り初めこそ、宿に着く頃には膝が笑いそうだったが、今は慣れたのかそこまで辛くない。丈夫になったな、とシンは笑いながらも小さく首を振って応える。
「水際の道だ、急いで足を滑らせると大変だぞ。これまでの調子で、少し早く出ればいい」

それもそうだ。元々、自分は考え事をする度に足元がおろそかになりがちだから、剣のことを聞いた今で、苔むす西の道にあるなら、なおさらそれに気をつけなければ。ファンは靴が脱げてしまわぬように確かめて、シンについて歩き出す。

峠の松を後にして、二人は再び、一路至黄の道を下る。

柔和な青年

松の峠を出てしばらく。山の間の夕日は次第にその赤みを強めて、楕円に崩れながら沈んでいく。あと二つ三つ坂を上り下りすれば、次の村があるらしい。峠の下で流れていた湍水は今傍で轟々と流れている。あと少し、とファンは膝に力を入れて、道を蹴った。

「見えたぞ、ファン」

シンが坂の下の方を指す。六十といくつか目の滝を望む、小さな町が見えた。いや、町か村かはわからないけれども、これまでの山間にあったどの村よりも大きく、山間の集落にしては珍しく、塀で囲まれた場所だった。

「師匠、塀があるってことは、風水がかかったりするんでしょうか」

「わからん。昔は風水の張れるのは街道沿いの町だけだったからな。だが、西はどうかな、獣が多いなら山村でも封をするのかもしれん」

「急ぎますか？」

「いや、この調子なら、大丈夫だろうが……ん、あれは」

先を見ていたシンが、何かに気付く。ファンも下向きがちだった視線を上げると歩く二人の前にもまだ、町に入っていない旅人がいる。峠の時にはいなかったから、それより前に発った人だろう。

歩みを進めると、その人影はどんどん近付いて行く。こちらの足は別段速めてはいないから、旅人の足取りはずいぶんとゆっくりだ。よおく目を凝らして、ファンは微かな違和に声をあげる。

「師匠。あの人、脚が」

そのようだな、と応えて、シンもそちらを注視した。旅人は左足を引きずっているが、杖の助けは無く、慣れた様子である。だが、やはりその歩みは遅い。この調子で歩いて来たのなら、途中、野営になりそうなものだ。もしかすると、次の町も日暮れまでに入れないのではないか。

町まであと上り下りが一つとなった上りの道で、二人はその旅人

に追いついた。横に並ぶと、シンが旅人に声をかける。
「お一人で旅を?」
旅人は振り返る。若い男だ。二十を出るかどうか、というところか。険しい道だったはずが、青年の表情は晴れやかだ。青年はこちらをじっと見て、にこやかに微笑み、頷いた。
「ええ。僕にしかできない旅ですから」
ファンは旅人を挟むように、シンと逆のほうに並ぶ。青年は懐から除いていた紙を取り出して、満足気に眺める。
「これで、僕の大切な人は救われる」
横から覗き込んだファンには裏側しか見えなかったが、そこに四方の神獣印と麒麟印、そして“大赦”の二字が記されているのが見えた。シンは興味深げにそれを見ている。王府の使者でもなければ、王印などそうそう出回りはしないだろうし。それが四方揃っていて、天印まであるとなると、相当なものなのだろう。大赦、ということは、誰かを許すものだ。免罪符、というのだったろうか。彼のいう大切な人とは、咎人か。
紙を再び大事そうにしまい込んだ青年に、シンは続けて問う。
「どちらへ向かわれます」
「河伯(かはく)の渡(わたし)へ」
青年の答えに、シンが得心のいったように頷いた。シンには青年の言う大切な人がわかったらしかった。四方に許しを得ねばならないようなことだから、きっとシンも知っているのだろう。シンが一度、何か了解を得るようにこちらを向いてから、三度(みたび)青年に話しかけた。
「ご一緒しよう」
「でも、僕の脚はこの通りですから、お先へどうぞ」
青年は突然の申し出に困ったように笑い、応える。長袴(ちょうこ)の下だが、彼が示す左足は見てとれるだけたわみがある。それでもとシンは首を振り、言う。
「いや、私にはその書の行方を見守る義務がある」

その言葉に青年は驚いたように、シンの顔をじっと見る。そして、シンの身なり――青い巻き布を見て、わかりました、とそれを了承した。

傍の湍水が橙に染まり、滝は火を流すように赤く輝いている。町まであとは長い下りだけだ。ファンは青年の荷物を預かろうかと思ったが、やんわりと断られてしまった。坂の上で門が見える。陽はまだ見えている、間に合いそうだ。

「久しぶりに、屋根の下で眠れそうです」

青年の言葉に、シンとファンはぱっと顔を見合わせた。一人の旅で野営がち、その上、四方を巡ってここまで来たと言うのなら、それは運が良かったという話ではない。青年の旅の道具には特に、それを防ぐというものも見られないのに。獣に武器を持っているものと持っていないものの違いが解るとは思えないが、一人歩きとそうでないのはわかるはずだ。狙いやすいと思えば襲われる。現に、シンといたファンですら獣に襲われたことがあるのだ。

「失礼だが、何か術を？」

「いえ、僕は何も。ただ、旅に出る前にお守りを貰いましたから」

青年は首から下げた袋を見せた。中身はわからないが、そのお守りが一切の獣を寄せないとしたら、とても便利だとファンは思った。どんな旅でも、外野の獣の恐怖とは常に隣り合わせだからだ。全ての旅人が安全に旅できれば、どんなにか良いだろう。

あともう少しだ、と三人が表情を緩ませた時、滝の轟音に混じって、高く細く鐘の音が聞こえてきた。閉門すると言うのか。

「まだ、日は落ちてないのに！」

ファンが声を上げると、シンがしまった、と額に手をやる。

「ここは高いからな、他でもう沈んだ陽が見えていたのか」

慌てた様子の二人に対して、青年はのんびりと言う。

「お二人の脚なら、走れば間に合いますよ。おいて行ってください。雨も降らなさそうだし、門の横で寝ますから」

事もなげな青年の言葉に、ファンはシンを見る。同時にシンもこ

ちらを見たようで、二人は頷きあう。
「持ちます！」
半ばひったくるようにファンは青年の小さな荷物を預かる。何ごとかとまごつく青年をよそに、シンは腕や足を龍化させ、その身体をひょいと抱え込んだ。
「失礼する！」
とんとん、と軽快に坂を駆けていくシンを追って、ファンも龍化までではいかないが、気の巡りを意識して駆け下りる。閉門を告げる三つ目の鐘の音の中で、二人と抱えられた一人は門の内へと滑り込んだ。
門を閉めようと待っていた町人が驚いて、こちらを見る。
「そんなに慌てなくても、見えていたからすぐには閉めやしないよ。しっかし、速かったなぁ」
青銅の扉が閉められて、シンは青年を下ろす。何が起こったのかまだ飲み込めない様子で呆ける青年に、ファンはにっと笑って見せる。
「間に合いましたね！　えぇと……」
「……ジピンと言います。ありがとう、東国のお二方」
青年は立ち上がり、お礼を言う。
「礼を言われるほどのことでもない。ご一緒する、と言ったからには、これくらいは」
シンは手足を戻し、それに応える。
「それでも、出会ったばかりの僕にこうしてくれるのは、やはりあなた方がいい人だからですよ。思った通りの人でした」
青年は再び頭を下げる。宿まで一緒に、と言ったが、青年は用事があると言う。宿はどうやら町に一つらしいと聞いて、シンとファンは先に宿に向かうことにした。
青年と別れ、宿に着いてすぐ。ファンははっと、自分の持ち物を見た。あの青年の荷物を預かっていたままだ。彼もいずれ宿にくるだろうが、何か買いに出たのだとしたら、戻るのが手間になってし

まうだろう。届けなければ。ファンはシンに、その意を伝える。
「じゃあ、部屋を借りておく。入れ違いになるかもしれんから、一周りしたら戻ってこい」
「はい！」
シンの言葉にしっかりと返事をして、自分の荷物をシンに預けた。外はもう薄暗く、虫の声がしている。でも、まだ山の向こうの残光があるから、人の判別くらいはできるだろう。急ごう。
ファンは宿から、町へと走り出した。

風に染まる

家々から漏れる火の灯りがいよいよ明るくなってきて、遠く沈んだ陽の赤みは山河の群青に溶けていく。山の影に隠れていた月が顔を出すと、今度はそれが足元を照らしてくれた。ファンはとりあえず、と町の中央に出たあと今度は外壁沿いに歩く。滝の音が微かな水気と連れだって、町の中まで届いている。この先は、町でも一番滝に近い方だ。

暗がりに目を凝らすと、月光を呑みこんで僅かに発光する滝の前、立ち尽くしそれを見あげる者がいた。

「ジピンさん！」

声をかけると、青年は振り返り、柔らかく笑んだ。

「君は、さっきの。どうしました？」

「お荷物を預かったままで。もしかしたら、何か買うかもって思ったんです」

「ああ、そういうわけではなかったんだけれど。君には悪いことをしてしまったね」

荷物を返すと、青年は右肩にそれを背負った。

「この町はね、僕が生まれた町なんだ」

青年は懐かしげに滝を見あげる。

「家もこの近くにあって、夜はいつも滝の音を聴いていたよ」

「あ、じゃあ、御家族の方が」

そう言いかけると、青年はどこか済まなそうに視線を落とす。

「僕は、贅子だったんだ。凶荒の時に、湍水（たんすい）は荒れてね。僕は湍水へ投げられて、町もすぐに。さっき、聞いたら両親もその時だったらしくて」

宿へ行こう、と言った青年に、ファンは黙って頷いた。青年は問う。

「君はこの町がどう見える？」

「これまでの村に比べて、きれいだなって。家はどれも新しくて」
ファンの答えに青年は頷いた。
「そう。ここはもう新しい町だよ。あの時から立ち直ろうとするこの町は僕の知らない町で、あの時から生き残った僕をこの町は知らないんだ。ただ、変わらないのは湍水の、この滝の音だけ」
少年の足に合わせて、ファンはゆっくりと隣についている。日暮れたばかりの町はまだ人の声で賑やかだが、青年の探す声はなかったのだろう。滝を見あげていたあの顔がどことなく悲しげだったのは、そのせいだったのだ。
「西は、そんなに酷かったんですか？」
青年はその問いに答えない代わりに、静かに尋ね返す。
「君は、どこまで旅を？」
「ずっと、中つ国を一回りするんです。今は、西都に向かっています」
「それなら、僕の話を聞くよりも、実際にこの国を見る方がいい。僕は小さかったし、凶荒と共に育ったから、あの時もそう苦しいと思わなかったんだ」
宿の灯りが見えてきて、付き添わせてしまったね、と彼は詫びた。
「僕も、四方を巡って、ようやく西の国の惨状がわかった。でも、運が悪ければどこだって荷物を取られるし、雨にぬれなきゃならないよ。だから、きっとそこがどこで何が起こっているかは、あまり関係がないんだ。自分の有り様をそこでどうするかが大事なんだよ」
擦るように踏み出される左足は、決して速くない。でも、確かに地を踏みしめて、前へと進んでいる。彼自身の意志と、この国と同じように。
「君は東から来たって言ったね。優しくて、生き生きとしていて、君はあの国の風に似ているよ。……三年もかかってしまったけど、僕はやっぱりこの国に戻ってこれて、ほっとしてる。空気も人も、どこかなじみ深くて。それは僕がこの国の風を受けているからなんだね」

青年はにこりと笑う。その笑顔の向こうには強さが見て取れる。苦しさが解らなかったのではなくて、それを拒むことなく受け入れてきたから、こういう笑みを持てるのだ。不条理も何も許してきたから、優しい人になったのだ。

「強いんですね、ジピンさんは」

尊敬と感嘆を込めて、ファンは呟く。ファンより五つかそこら年上の、この若者が今までに見た千年を生きる人のように思えたのだった。そして、長寿の彼らと同じように、それを何でもないように言う。首を振って、困ったように笑って。

「まさか。人より鈍くて呑気なだけだよ」

宿に入ると、ファンを待っていた宿の主人が部屋の場所を教えてくれた。楼の上階、隅だ。青年は帳面をつけに行って、一階に部屋を取ったようだった。シンは部屋にいるらしく、宿の主人に、その人に湯屋はもう使えると伝えて欲しいと頼まれた。

階段を上がる途中、部屋に向かう途中の青年と会った。

「そういえば、君の名前を聞いてなかった。お兄さんにも」

「ファンと言います、一緒だったのは師匠です」

応えると、青年は、そうか、師匠か、と笑んだ。

「さっき、ふっとあのお兄さん、おじちゃんに似てるなと思ったんだ」

おやすみ、と言って、青年は扉の向こうに消えた。慌てて、挨拶を返したけれど、質問はできずじまいだった。

部屋に戻ると、シンは雨戸をあけて外を眺めていた。虫の声と滝の音がまた近く聞こえる。外は大分明るい、月を見ていたのだろうか。

「今戻りました、師匠」

ああ、と応えて、師匠は振り返る。

「西は、それでも、立ち直り始めているようだな」

同じ意味であるのに、ファンはその言葉にあの青年のそれとの微かな違和を感じた。だから、彼は見て回る方が早い、と言ったのか

もしれなかった。寝台の上に腰かけて、ファンは青年のした話を、シンに話す。

「そうか、彼が」

シンは、成程、といった様子で相槌を打った。

「似ている、と言ったのは、わからんでもない」

微苦笑するシンは、あの青年の言った“おじちゃん”を知っているらしかった。その人は、大赦の渡る先の、咎の人と同じ人だろうか。なら、似ている、と言われて得心がいったのは、何についてのことなのだろう。判じかねていると、今度はシンの方から話の口をきる。

「さっきな、宿の主人に、周りがこう険しい道では大変だろう、と言ったんだ。それに主人は、この地域の人間は岩にしがみつく苔のようなものですから、と答えた」

シンは苦笑を深める。

「俺は、しまった、と思ったよ。でも、それはただの自嘲ではなかったんだな。あの凶荒を耐えて、ここで生きているんだ。国を愛する、強い民だ。国と共に生きて、固い“かね”のような心を持った民だ。外を見ていて、まさしくそうだった白虎と白の初めの王を思い出した」

ファンは、シンのその言葉の裏に潜む微かな自責を感じた。きっとこの師なら、国が倒れるとなれば、そこに住む民に躊躇(ためら)いなく余所へ逃げろというだろう。国や自分に巻き込まれて、民が死ぬのには耐えられないと。しかし、ここで見たのは、国が民を思うように民が国を思う姿だったのだ。国の主に、そこに吹く風に民は染まる。

「なら、そうです。ジピンさんは、東の地は優しくて、生き生きとしてたって言ってました。そこで育ったおれも。きっと師匠や、初めの王様がそうだからなんですね」

ファンはシンをしかと見据えて、言う。だから、先生は四方から東の地を選んで、自分を連れだしたのだろう。

シンの笑みから自嘲が消えて、優しいものに変わる。ありがとう

な、とシンはファンの頭に手を乗せた。
「そうだといい。俺もそうであればと願う」
間違いなくそうだろう、とファンは師の、東の守護の顔を見て思う。
そうして、ファンは静かに頷いた。

白海を臨み

開門の鐘の音にファンは目を覚ました。辺りはまだ暗いが、鳥の声は夜明けを告げている。寝台がら下りて、雨戸をあけると狭霧と夜露を含んだ空気が部屋にさぁっと入ってきた。水気のせいか、少し肌寒く感じる。陽の光は山に切り取られて、山の稜線から日差しがこぼれ、辺りを疎らに照らしている。

朝の冷たい空気に、シンが寝台の上であおむけに寝がえりをうつ。腕で目を覆いながら、寝起きにこもる声で、こちらに尋ねる。

「もう、朝か」

「はい、まだ随分暗いですけど」

そうか、と答えたが、シンは身体を起こさなかった。

「悪い、少し休ませてくれ。変に寝付けなくてな。先に支度をしていてくれ」

「大丈夫ですか？　ずっと進み通しですし、今日はここで休んでも」

ファンは雨戸を閉め、シンの方に寄る。見れば、酷く寝汗をかいていたようだった。夜は特に暑くなかったから、夜気のせいではない。

「師匠、具合が悪そうですよ。やっぱり……」

「大丈夫だ、俺は病気とは無縁の身だからな。ただ少し夢見が悪かっただけだ。大丈夫だよ、ファン」

でも、とファンがその表情を覗き込もうとすると、シンは目にあてていた腕をのけ、薄く笑った。

「気にするな、もう半刻もすれば起きる。今日は山道から抜けるぞ」

はい、と返事をしたものの、心配はなくならなかった。しばらく荷物を整理しているふりをして部屋に留まったが、静かな寝息が聞こえてきたのを確かめて、ファンは部屋の外に出たのだった。外に据えられていた水盤で顔を洗い、いつもより急ぎで身体を動かしてから、また宿に戻った。客が次々に起きだしていて、宿は賑わいつ

つある。宿の客は殆どが商人だ。思えば、南の道が使えないのだから、白の国へは皆、黄の地を経由して至黄の道を下るしかないのだ。

ファンは辺りを見まわして、旅客の中にあの青年の姿が無いのに気がついた。宿の主人に尋ねると、鐘の鳴る少し前にもう宿を払ったという。ファンは人々の間を抜けて部屋に戻った。部屋に戻ると、シンは既に目を覚まし、旅の支度を整えていた。髪が濡れているが、その表情には先ほどの暗さは無い。

「もう大丈夫なんですか？　師匠」

「外が大分賑やかになってきたからな、湯屋を借りて水を被ってきたんだ。おかげで目が覚めた。もう出られるか？」

問われて、ファンは頷いて返す。開けられていた雨戸からは、朝靄に霞む、細い山々が見える。透けて見える空は青い。

町の食堂で朝餉を取って、二人は滝の町を出た。町を出てからもしばらく下りで、岩がちの道が続いた。途中に点在する、滝の傍に立てられた石碑にはその名前と黄の地から数えた番号が書かれている。それを数えて、ちょうど七十。ファンが顔を上げると、視界は一度に開けた。山道は緩やかになり、湍水の勢いこそ変わらないが、川幅はぐっと広くなった。

ファンは流れの先に地平に白い線を見とめて、目を凝らした。眩しい。何かが日を照り返して光っているのだ。足を止めたファンに、シンも足を止める。

「そうか。海を見るのは初めてか、ファン」

「えっ、あれが“うみ”ですか？」

そう答えると、シンはさも面白そうに笑った。ファンは再び、その光る線を見つめる。ここからではそれはただの白い地平にしか見えない。青の国は北の黒の国と接する北部の僅かしか海岸がなく、その上に町から離れたことのないファンは、その存在を言葉でしか知らないのだ。川や池と違って、果て無く広がる水。それは飲めないほどに鹹く、そこからいくら塩を取っても変わらぬという。

歩き始めて、遠くの海を眺めやりながら、

「とはいえ、俺も随分久しぶりに見た。やはり大きいな。……今日は海のものが食えそうだな」
「あ！　あの塩辛い魚とかですよね！　それなら、町にいた頃に食べたことがあります。やっぱり、水が鹹いと魚も鹹くなるんですね」
　声を弾ませそう言うと、シンは聞き取れなかったのか、ぱっとこちらに振り向いた。それを何かとファンが見返すと、今度は噴き出して笑い始める。ひとしきり笑うと、肩を震わせながら、シンは言う。
「あのな、ファン。魚は日持ちしないから、海のものは大抵、陸へ出回る前にきつく塩をするんだそうだ。傍で食べれば海の魚も鹹くはないんだぞ」
「えっ、おれ、てっきり泳ぐ間に塩がしみるものだと思ってました。じゃあ、海の魚は水の中で息をしないんですか？」
　町にいた頃、時たま行商が持ってくる干魚は焼くだけですぐ食べられるだけ味がついていた。焼いた時は滲む油に、塩が白く浮くほどだ。魚は水の中で息をするそうだから、塩水で泳ぐ海の魚はだからしょっぱいのだと思っていた。塩を抜いてもなお鹹い魚。思い出して、口の中が一気に乾く。食べ物を思うと、朝しっかり食べていても腹が空いてくる。
「どうなんだろうな、生きていて息をしないものはないだろうが……」
　今度はシンがううんと考え込む。
「浜のものなら知っているだろうか。こんなに生きていながら、考えたこともなかったな。今度聞いてみよう」
　二人して頭をひねった魚の疑問をひとまずおいて、歩き続けてしばらく。先に小さな小屋と、別の方からこの道にぶつかる道が現れた。
「あれが街道との分岐だろう。さすがに、向こうは人がいないな」
　山が切れたおかげで、ようやく遠くまで見回す事が出来る。今まで通ってきた至黄の道は、振り返って見ると山に当たって途切れて

見える。陽のある南のほうは、陽山からの煙がずっと雲のようにたなびく。風はこちらへ流れてきていたのか。向こうの空が薄暗いと言うと、シンが灰のせいだろうと応えた。

ファンは先へと目を戻し、湍水とその横の小屋を見やった。川岸には何か、細いものが並べられている。

「あれは、舟でしょうか」

問いに、シンは首を傾げる。

「そのようだが……湍水に渡せる舟があるのか？」

近寄ると、小屋の周りには人が集まっている。笠をかぶり、長い棒を携えた男の前に人々が列を作っている。通り過ぎる者もいるが、旅人の大抵がそこに止まっていた。

ファンはその中に、見覚えのある姿を見つけて、おおい、と声をかける。気がついたその人もこちらに気づいて手を振った。先に出たその旅人に、二人はようやく追いついたようだ。

船場（1）

「ジピンさん！」

駆け寄ると、その青年も顔をほころばせた。昨日はどうも、と青年はシンに頭を下げる。

「少し早めに出たんですが、やっぱり追いつかれましたね」

にこやかに笑い、列の前のほうへと詰める。先では船頭姿の男が、人の数を数えてはそれぞれに金子を預かっている。

「でも、昨日はゆっくりと休めたので、結構早い調子で来られたんですよ」

「そのようで。――ところで、ここはどういうところなのだろうか。湍水の渡し場と言えば、一つだけだと聞いていたが」

とりあえず列に並びながら、シンが青年に問う。

「ここは渡（わたし）ではなくて、下流へと下るための早船ですよ。河伯（かはく）の渡まで歩けば二日以上かかりますが、これなら今日中に着くことができるんです」

ファンは小屋と川岸の舟を見やった。細く長い舟が三艘ほどあり、その横には荷運びの為のものか、鉄の鋲がされた平たい大船が置かれていた。長い舟に乗れるのは一艘に五、六人だろう。前に並んでいた数人が、笠の男に連れられて、それに乗り込んだ。全員乗り込んだのを確認した船頭は、舫（もや）い綱を外し、長い棒で岸を突く。

「湍水に人が櫓（ろ）を繰るようになったのか」

岸を離れゆく舟を見やり、感心そうに呟いたシンに、青年は続ける。

「凶荒の大水で湍水もだいぶ流れが変わりましたから。僕が出る前はまだ試しの段階でしたけど、軌道に乗ってよかった。湍水の荒も悪いことばかりじゃありません」

青年は喜ばしげに、岸を離れていく舟を見つめる。早瀬に水棹（みさお）を差し進むその影を、見送る他の目も、誇らしげでやさしい。

再び、列の人数を数え始めた船頭は、こちらまで指差しで数えてその表情を曇らせた。
「参ったね、お兄さん方三人組かい。舟に乗れるのはあと一人なんだよ」
困り顔で腕組みした船頭は、改めて先頭から人数を数え始める。シンがこちらを見たのに気付いて、ファンは頷き返した。旅も始まってしばらくだ、師の言いたいことは、言わずとも弟(てい)に伝わる。シンが船頭を呼びとめて、青年を指して言う。
「我々は途中行き連れになっただけだ、この御仁は急ぎの様子。あと一人と言うなら、丁度いい」
何か言いだそうとする青年の裾を引いて、ファンはそれを制した。にっこりと笑ってみせると、青年も済まなそうに笑んで返す。船頭はなるほど、と言ったが、それでも困り顔は消えなかった。
「どうしたんですか？」
問うと、船頭は桟敷の方を指して言う。小屋の中に船人は残っているようだが、見ればいくつか並べられていた舟は残り一艘だけだ。
「今日はあんまり盛況だったもんだから、もう舟がないんだよ。舟は夜の間に荷馬車で戻すからね、これが行ったら今日はもう終(しま)いなんだ」
申し訳なさそうな船頭に、ファンは首を振って見せた。急流下りも面白そうだと思うが、山道でなければ徒歩(かち)でゆっくり西の国を見るのもいい。この先の道は中つ国に円を描く大街道だ、宿場もすぐにあるだろう。
「大丈夫です！　ね、師匠」
「ああ、問題ない。二日ばかりゆっくり景色を楽しむのもいい」
遠くなる舟を見ていたシンが、そちらから目を離して言う。
二人は躊躇(ためら)う青年をさぁと後押しして、一枠だけ開いた早瀬舟に乗せた。鈍く軋る音を立てて、彼を乗せた舟は川辺を離れる。湍水に乗った船体がゆらりと揺れ、乗り込む客がめいめいに船べりを掴んで、歓声にも似た声を上げた。船底を撫でていた水が、彼らを乗

せた舟を押していく。始めはゆっくりと、船頭の棹で流れに留められた舟も、碧(あお)い深瀬に着いて次第に勢いを増す。

最後尾に乗っていた青年が、船場に残るこちらに振り返って声を上げた。

「何から何までありがとうございます！　河伯の渡でお待ちしていますから！」

ファンはそれに応えて、大きく手を振った。流れに沿って丘を回ったその舟が見えなくなるまで、じっと見送った後、ファンは川沿いに続く街道に向き直った。

「さぁ、行きましょう、師匠！」

幾分か上がった意気でファンは師の方を見やった。それに応えてシンが頷く。早馬を呼ぼうかという船人の申し出を辞して、二人は河原を離れて街道の方へと踏み出す。街道はこれまでと違って平らに整えられた道だ、これなら思うだけ進める。

いざ先に進もうとすると、シンがふうと息をついた。先んじていたファンは、足音が止まったことに気付き振り返る。

「どうしたんですか？」

「いや、舟が随分速かったもんでな、面白そうだと思ったんだ」

小屋の船人から見えない向きで、口惜しげに笑う。船場でじっと下る船を見ていたあの表情を思い出す。そういう風にも見えなかったのに、シンも本当は乗りたいと思っていたのか。頬が緩むのを感じて、ファンは、おれもですと応えた。

ああ、と応えて、シンはちらりとだけ船場を振り返り、顎を撫でる。

「いや、惜しかったな」

遥けし年を生きるその人が見せた子供のような表情が、なんだか嬉しくてファンは見えないようにして小さく笑ったのだった。

改めて進もうかと荷を担ぎ直すと、ファンは微かな蹄(ひづめ)の音と車の音に気がついた。人影のなかった赤の国から来る街道からだ。足を

止めてそちらを見やると、遠目に荷馬車が見えた。複数だ、商隊だろうか。

「南からか。……まさか、陽山を越えてきたのか？」

ファンの見る先に同じく気付いたシンが、こちらへ来る荷馬車を見やる。二頭立ての、古く使いこまれた様子だ。

がらがらと車輪を鳴らし、幌（ほろ）がけの荷馬車が二台、早船の船場へと二人の横を通り過ぎていった。御者の男が降りていき、船場の前で止まった荷馬車の中から、ひょこひょこと顔がのぞく。子供だ。ファンと同じくらいの子もいれば、もっと小さい子もいる。こちらの視線に気づいたのか、中から呼ばれたのか、その顔はすぐに荷馬車の中に引っ込んでしまった。

「物売りって感じじゃないですね」

「ああ。それにあの印、どこかで見たような気がしないでもない」

幌の横には、斜交（はすか）いの剣と雲の模様が描かれている。文字が書かれているようだが、離れているせいか、こちらからは読めなかった。真っ先に降りていった御者は、船場の小屋の方へ入っていく。

しばらく様子を見ていると、そちらから何か言い争うような声が聞こえてきた。その声に、引っ込んでいた荷馬車の顔が再び現れる。今度は大人の姿もある。次第に大音声になるそれに、二人は顔を見合わせた。

「……行ってみるか」

ファンは頷き、シンについて駆けだす。荷馬車の横を通り過ぎる時、ファンは模様の下に書かれた文字に目を走らせた。

「雲海座……？」

南からやってきた、何人も人を乗せた奇妙な荷馬車。やおら大きくなる怒声に、二人は口論の続く船人達の小屋に飛び込んだ。

船場（2）

遠目で見た御者は、近づいてみると随分とがたいの良い、屈強そうな男だった。微かに白髪の交じる黒髪を逆立て、船人に食ってかかっている。しっかりした体つきとはいえ小柄な船頭はまるで吊り上げられるかのように胸倉を掴まれている。他の船人が息巻き、場はすぐにでも殴り合いになりそうな気配だ。

「どうされた。怒声が聞こえたもので参上した、双方気を収め、落ち着かれよ」

シンが戸口から声をかけると、周りを取り巻いていた船人の視線が集まる。が、その大柄な男は船頭を掴む腕を離さず、振り返りもしなかった。

「外野は黙ってろ！　……足元見やがって、義の国が聞いてあきれるぜ！」

そう吠えたてる男に、掴まれた船頭も負けじと言い返す。

「何、こっちだって商売だ、そうそう根なし草の為に慈善なんぞできるかい！」

そうだそうだ、と周りの船人もはやしたて、歯噛みした男は一層腕の力を込める。ファンはその男の腕に微かに腕力以外のものが滾るのを感じて、息をのんだ。鋭くなる爪――獣人だ。

シンもそれに気付いたのだろう、驚きと恐怖に静まる船人たちに割って入り、男の腕を掴んだ。爪こそ出さないが、見えるように手の甲に青鱗を現し、静かにかつ譴責を含む声で言う。

「事情は知らんが、その力の使いようは感心しない。――話を聞こう。外の者も心配しているようだ。そうがなり立てては何も好転しないぞ、座長」

座長、とシンが呼ぶと男はその腕から獣性を引かせた。船頭を下ろし、男は小屋の床にどっかりと腰を下ろした。

「じゃあ、好転させて貰おうじゃねぇか。どこの兄（あん）ちゃんか知らね

ぇがな、納得できなきゃあ、俺ぁこっから動かねぇぞ」
　男の興奮は未だ冷めず、またすぐにでも爆ぜそうな様子だ。
外の幌馬車は旅の芸一座か。ファンも小さい頃に見たことがある。
四方を旅回り、先々で演劇や曲芸を行うのだ。いくつかあると聞いたが、外の奇妙な一団とこの男はそれに属する者らしい。ふと気がつくと、ファンの後ろには、荷馬車から出てきた人々が小屋の中を心配そうに覗き込んでいる。
「まず、何があったかお聞かせ願おう。相手の時には口を挟まぬよう」
　男が座したのに合わせて、シンもその前に座した。船頭も向かい合う形で座り、男の方が先に口を開いた。
「兄ちゃんが言うとおり、俺ぁ旅一座の座長よ。旅一座ってのは普段なら好きに旅回るんだが、今回西王から特にお呼びがかかってな。急ぎの旅だってのに、火の山が噴いた上に、天の道は荷馬車を通せねぇ。それでなんだかんだ足止めを食っちまった。そこに、早船があるって聞いて来てみりゃ、それが今度は旅一座なんぞ乗せる船がねぇと来たもんだ！」
　そう言って、拳で地面を叩いた。後ろにいた子供たちがひっと息を飲むのがわかる。話が終わったのを確かめて、シンが頷いた。そして、船頭の方を見やると次は船人の方が話し始める。
「だから、本当に舟がないって言ったんだ。今日は舟が無くて終いだってのに、どうしても乗せろだなんて、無茶じゃないか。そうしたら、どの道荷馬車が大荷になるんだから、荷船に乗せろだなんて言い出す。元々人を乗せる舟じゃないから、責任が取れんといってるんだよ」
　外に一つだけ残る平たい大船を示して、船頭は言う。鉄の鋲や枠が取られた大船だ。確かにあれなら、馬以外の荷物も人も全部乗りそうだ。男はそれを苛々とした様子で聞いていたが、船頭の話が切れたかしないうちに吠えた。
「何が責任だってんだ、それなら荷船を出してやるから代わりに大

金を払えと言いやがる。全員分の乗り賃に、まぁあれだけあるからな、荷代を多めにと思ったら、それがふた開けりゃあ目玉の飛び出るような値を言いだしやがる」

「何を言ってんだい、元々荷船は運賃が割高なんだ、あれだけの舟をここに戻すのだって下で馬を何頭も借りなきゃならん。わたしらは西王様に免許貰って働いてんだ、それをまるで私らが面白がって値をつけたように言って。そんなこと言いふらされちゃあ、信用に関わるよ」

そう言って、船頭は小屋の壁に張られたそれらしき紙を指した。隅には確かに銀に縁取られた白い虎の判がある。白虎印だ。それを見た男は面白くない、という顔をして、鍋が焦げるような調子で言う。

「だから、下の町に着いたら興行やって、今足りねぇ分をそこで払うって言ったじゃねぇか。それを……」

そこから先は立ち消えたようになって、男は膝に肘をついて、がりがりと不精髭を掻いた。ぷい、とそっぽを向いたその顔は、苦いものを噛んだような顔をしていた。今になって、自分に分がないことを理解した、という様子だった。

「それで、互いを罵るうちにあの騒ぎ、というわけだな」

シンは呆れたようにため息をついた。

「どちらの仕事も西王の目に届くほどのものだ、立派な役だろうに。それがこのようなことで騒ぐとなれば、互いの信はおろか、西王の信も潰すことになるぞ」

シンがそう言うと、二者とも俯いて黙り込んでしまった。しばし沈黙が続いていたが、それを破ったのはファンの後ろに張り付いていた、荷馬車の子供たちだった。

「ダオレン、おいらたちもっと速く歩くから！　チビたち背負えばもっとだよ！」

頑張るから、と口ぐちに子供たちは叫ぶ。静まりかえっていた場は一転して、子供たちの甲高い声でいっぱいになる。その上に、何

ごとかわからないような小さい子がその声につられて泣き始めると、大きな子たちまで目に涙をためて、鼻をすすりだす。それまで、憮然として座り込んでいた男はそれを見るなり、強気な表情が消えて、おろおろと困り顔が浮かぶ。

「おまえら、火の山越えてきて大変だったろうが。俺だってそうまでして急がせたいわけじゃねぇんだよ」

急に優しい声を掛けられた子供たちは、とうとう堰が切れたように泣きだしてしまった。怒声が響いていたときのほうが返って静かな塩梅だ。子供の泣き声に船人達もうろたえて、泣きやませようと出した手が宙を泳いでいる。荷馬車の中から出てきた女性がそれをなだめようとするが、泣きだしている数が数だ、そうそう泣きやむようすでない。

その大音声の中、黙っていたシンが口を開く。甲高い声の中に大人の声が入ると、大きい子たちがしゃくりあげながらも、泣きやむ。

「船頭殿。もし、その荷船に人が二人増えたとして、半金ならばどのくらいになる?」

シンの言葉に、そりゃあ、と男と船頭が同時に言い出して、結局二人とも言葉を引っ込めた。

「俺と弟子も、同行させて貰おう。旅の者だ、西王の信に関わることもない」

シンはそう言って、こちらに振り返った。ファンはそれに頷いて返す。だが、流れを理解した子供が、わっと喜びそうになるのを制して、男は言う。

「そいつぁありがてぇけど、乗る気もねぇ舟に乗せて、金を払わせるほど、この雲海一座、落ちちゃあいねぇ」

「いや、元々乗るつもりだったのが、舟が無くて徒歩(かち)になったんだ。乗れるならそれに越したことはない。それに、下の町につけば、船代も間に合うのだろう?」

シンが笑みを浮かべ尋ねると、男は居住まいを正し、すまねぇ、と頭を下げた。

「船頭さんよ、そういうことになるんだが、今度こそ乗せてもらえねぇか。乱暴して悪かったな。もし、それでも駄目ってんでも、俺らは大人しくこのまま進むからよ」

男が頼むよ、と下げた頭に、船頭はゆるゆると首を振った。

「いや、わたしらも悪かったね。そういう話なら、責任もって下まで送るよ。子供たちに舟で騒がないように言ってくれるかい？　落ちたら大変だ」

今度こそ子供たちがわぁっと歓声を上げる。それなら、すぐに支度だ、とシンが立ち上がり、小屋から出る。それについてファンも外に出ると、シンはこちらを向いて、頬を緩めた。

「さて、急流下りか。まとめるほど荷物もないが、支度をしよう」

そう言ったその顔があんまりそわそわして見えて、ファンもことさら大きく、元気に返事をして見せたのだった。

雲海座（1）

荷船の舳先が水面を叩き、波は白く砕ける。飛沫がはぜると、舟の中央に寄せられた子供たちの歓声が上がった。じっとしているように言われた子供たちは、場所こそ動かなかったが時々飛びあがっては、船頭や他の大人たちをひやひやさせたのだった。

舟は急流を跳ねるように下る。遠くなった金環山より続く峰は滲むように遠くなり、陽山の煙は薄く遥か彼方でたなびく。対して、近影は風のように後ろへと流れていき、初めこそ細かった湍水の川幅は下るにつれ、徐々に広がっていった。目の前が少し開けると、ただ白く輝いていた海がその色味を増して現れた。

今は、早船の乗り場で雲海座という旅の芸能一座と乗り合わせ、下流にある河伯の渡とそこにある町に向かっている途中だ。舟は街道と共に、海へ向かって西に進む。荷船にはシンとファン、ばらばらにたたまれた荷馬車と中の荷物、一座の子供と女性、そして、あの座長の男が乗っている。一座の若い男たちの数人が、車を引いていた馬に乗り、急ぎ足に同じ目的地に向かっていて、後で落ちあうのだという。この速さなら馬よりも先に、舟が下へ着くだろう。

「にいちゃ！　にいちゃはなんのじゅうじん？」

気持ち良さそうに涼風にあたっていたシンに、一座の子供がすがって言う。小屋でのシンの様子を見た子なのだろう。シンはその子の頭を撫でてやって、微笑んで返す。

「蛟（みずち）というんだが、わかるかな。龍の仲間だ」

子供はきょとんとして、シンの顔を見返したが、しばしして腕を掴んでいた手を離して、わかんね！　と一言言い、行ってしまった。それに次いで他の子が言う。

「ダオレンはね、おおかみなんだって。だから、けものにおそわれないんだって」

「ダオレン？」

問うと、艫の方に座っていた男がちょいと手を上げて見せる。
「ダオレンってのは俺さ。一座の座長は代々、ダオレンを名乗る。俺は狼の獣人だから、ラン・ダオレンってわけだ。よろしくな」
それに応えて、シンとファンも名乗る。それを復唱すると、覚えたぞ、と男はにっと笑った。ちょっとして、あの小さい子の代わりにそれより年長の男の子がシンのもとへやってきて言う。
「おれ、龍ならわかるぞ！　強くて、でかいんだ。国に吹いていた風が、龍になったんだって。青の国は、青い竜が守っているんだぞ！」
「よく知っているな」
シンの答えに、子供は胸を張る。
「だって、おれ、東から来たんだぜ！　北の一番でっかい町の」
「とすると、塁杏か。遠いところだな」
応えると、他の子供たちが口ぐちに自分の出自を口にする。南の方の子もいれば、北の子もいる。子供も大人も多いが、同じ所から来た者というのはあまりいない。
「ぼく、どこで生まれたか知らないよ」
俯いて涙声の子供に、ファンと同じくらいの少女が言う。
「そんなの気にしないの。あたしだって知らなかったけど、素養が猫だったから西だろうって。ね、だから、あたしたちが生まれたのは、この一座。この一座に居場所があればいいの」
その言葉に、さっきまで得意げに自分の国を話していた子供たちが、ずるい、と言い始める。自分たちも、この一座で生まれたことにしてほしい、と言って、その少女に詰めよった。少女ははいはい、とその言葉をいなして続ける。
「今、どこにいるかだけわかればいいでしょ。みーんな、一座の子。いい？」
「うん！」
子供たちは揃えて返事をする。
「おれ、みんな兄弟なのかと思った」

ファンが言うと、ダオレン、と名のったあの男が笑う。
「いいや、みんな兄弟さ。ただ、腹や種が違うだけでな。俺の家族だ」
なぁ、と子供たちに問うと、皆揃ってそれに頷く。小首を傾げるファンに、男の横に座る女性が言う。真珠の耳飾りをした、綺麗な人だ。
「この人ね、親を亡くしたり、居場所のないような子見ると、黙ってられないのよ。それで、気が付いたらこう。いつだったかなんて、奉公先でいじめられた女の子を見て、そこの御主人殴っちゃって」
ふふふ、とささめくようにその女性は笑う。それに対して、うるせぇ、とそっぽを向いて、男は言う。
「好きなように生きたほうが良いに決まってるじゃねぇか」
「好きなようにって、半ばさらっていったようなものじゃない」
けっ、と首のかぎりに男は顔を逸らした。でも、と女性は続ける。
「今、“その子”は幸せだと思ってるわ。今の私があるのは、この一座のおかげ」
「そりゃあ俺が座長だからな」
ぶっきらぼうにそう応えた男の顔は向こうを向いていても、照れたように赤いのがわかった。家族だ、と何のためらいもなく笑ったこの男のおかげで、救われたからこそ一座の子供たちに何の影もないのだろう。家族、と呟くと、シンが応えていう。
「善いことだな」
ファンもそれに頷き、微笑む。
「そうですね。本当に」

下り始めてしばらく、日が海に向かって傾き始めた頃、町の影が見え始めた。途中、傾いだ大岩の横を抜ける時に、船頭が岩を示して、河伯の寝床だ、と言った。ということは、渡はもう近いのだろう。河は下流まで来たおかげか随分緩やかに見える。これなら河の渡もそう難しくないのではなかろうか。

だが、問うと船頭は首を振った。
「ゆるやかに見えて、水面から下は殆ど渦みたいな流れなんだよ。この下りだって、俺達は途中の岩にぶつからないようにちょいと調節しているだけさ。大きく繰れば、下手をすると途中の段差に舟が壊れてしまうんだよ」
再び、ぐい、と水に棹をさして、船頭は言う。
「だから、この河を渡せるのは、あの水妖だけなのさ。さぁ、そろそろ着くぞ、河伯の機嫌がいいといいねぇ」
「機嫌が悪いことがあるんですか？」
問うと、船頭は近頃しょっちゅうさ、と応えて苦笑する。
「なんでも、傍にいた人がどっかに行ったとかでね。おっかない妖獣だよ、逃げたのかもねぇ」
それを聞いて、ファンはシンの方を見やった。シンが頷く。
「問題ない。きっと、今日の機嫌は良いだろう」
船頭は不思議そうに首を傾げた。しばらくして、町がはっきりと見えて、川岸に大きな船がいくつも見えた。ここが河伯の渡だろうか。ついたぞ、という声に、ファンは荷物を持ち上げた。

雲海座（2）

舟を降りると、しばらく水の上だったせいか、脚がぐらぐらした。
「ここが河伯の渡ですか？」
問うと、船頭は首を振った。
「ここは渡より少し上流さ。渡し場はこの先にあるんだが、この先は浅くなったり深くなったり、岩が出ていたりするからね。舟を入れられないんだよ」
しばらく離れていた街道も町の傍になり川沿いにまで近づいた。馬に乗った若い衆はまだ来ないようだ。船上ではしゃいでいた子供たちは着くなり、先に下ろされ、ダオレンの渡す荷物を手分けして岸に運んでいる。騒いではいるが、仕事は我先になって手伝っている。重い荷もあったように見えたので、二人はそれを手伝うことにした。
馬の到着を待ってに、一行は街道沿いに荷を下ろし、馬車を組み始めた。仕事のない小さな子どもたちは、傍の平地で追いかけっこをしている。辺りは今までに嗅いだ事のない不思議な匂いがする。なんだろうか、と問うと、シンが海の匂いだと教えてくれた。河口が近いのだという。
「おい、兄ちゃんたち。こんな時間だ、今日はこの町に宿を取んだろ？　渡った先は町が遠いらしいしな」
手慣れた様子で荷馬車を組みながら、ダオレンは言った。幌を掛けられた荷馬車は、元通り、あとは馬をつなぐだけだ。残りの一台の幌がけを手伝いながら、シンが答える。
「ああ、そうするつもりだ。荷物も随分軽くなってきたからな、買い足さなければならないものもある」
途中の小さな町でもあるにはあったが、やはり長く歩くと靴も傷むし、大きな町の方が、買い出しが容易い。シンが向こうから投げた幌布の反対側を受け取って、ファンはダオレンに習いながらそれ

を台車の部分に結び付けた。
「俺達は今夜、そこの町で興行して、兄ちゃんたちが立て替えた分をそれで払う。で、どうするんだ？　俺達はまっすぐ西都へ向かうんだけどよ」
　ファンが結ったところをきつく締めて、ダオレンは更に問うた。どうする、と尋ねられたシンが、荷馬車の向こうからこちらを見る。今までずっと旅の道は二人で進んできた。細い道を通ったり、きつい山道が多かったからもあるが、二人旅の気安さに馴染んできたのもある。脚に何かが飛び付いたのを感じて、ファンは視線を下にやる。一座の中でも、一番幼い子だ。三歳かそれくらいだろうか。
「にいちゃ、つかまえた」
　腿のところにひしと抱きつかれて、ファンは頬を緩める。鬼ごっこの仲間になれ、ということだろうか、子供は離れようとしない。
「お、ちびに気に入られたか！　人見知りするんだが、よっぽど気にいったんだな」
ダオレンが子供を抱き上げようとすると、子供はファンに尚更ぎゅっとしがみついた。苦笑しながらシンの方を見やると、シンは息をつき、微笑んだ。
「なら、御一緒しよう。賑やかなのも良いし、貴殿が獣を遠ざけられるというのも好い」
　その応えに、ダオレンは歯を見せて笑った。
「そりゃあ良かった。金返すだけってのも、何か納得できなくてよ。もしよければ、今日の興行も見てってくれ」
　ああ、と返事をすると、向こうで遊んでいた子供たちがわっとこちらへ寄ってくる。
「ねぇ！　兄ちゃんたち一緒に行くの？」
　頷いて返すと子供たちはやった！　と飛び上がる。
「ね、ファン兄ちゃん、遊ぼう！　きっと馬が来るまで暇だもん。そうだよね、ダオレン」
　子供たちに周りを取り囲まれて、ダオレンは仕方ねぇなぁとこぼ

す。
「ただし、馬が来たらすぐに興行いけるように支度しとけよ！」
子供たちは揃って大きな声で返事した。途端に、ファンはぐいぐいと袖を引かれ始めたので、子供たちにちょっと待つように宥めなければいけなかった。向こうではシンが少し年長の男の子たちに、龍化を見せてくれるようにせがまれている。
「何でちびは俺を嫌がんだろうなぁ」
ダオレンはファンの足の子を見て呟く。ダオレンが触れようとするたびに、この小さな子は泣きそうに顔を崩す。
「だって、ダオレン怖いもん！　私も最初怖かったもん」
年少の女の子が小さな子の手を取っていう。女の子が来るとようやく小さい子はファンから離れた。女の子たちは、路傍の草花を摘んで、おままごとを始めている。ファンと同じくらいかの子たちは先に完成した荷馬車に荷を積んでいる途中だ。
「怖い？　俺がか？」
納得いかないという様子のダオレンを見て、子供たちをみていたあの女性がこちらへ来て言う。
「髭面で大柄の男がきて、怖がらない子の方が少ないわよ。ねぇ、ダオレン。興行はいいけど、町長さんに話を通さないと駄目よ。場所を借りないと」
いけね、とダオレンは頭を掻く。
「じゃあ、俺はさきに町に入って、場所を借りてくら。ユーリー、ちっとここを頼むな」
ユーリーと呼ばれた女性が頷き、ダオレンが町の方へと駆けだしていく。簡単に手足だけ龍化して見せていたシンがそれを見て、立ち上がる。
「町へ行くなら、俺もだな。宿を取ってこなくては」
そういうと、周りで龍化をせがんでいた子供たちが不満げに口を尖らせたが、女性にたしなめられて、大人しくなった。代わりに、皆、ファンのところへやってきて、ぐいぐいと平地の方へ引っ張っ

ていく。
「兄ちゃん暇になっただろ！　遊ぼう！」
それを見て、シンは笑って言う。
「お前も待ってろ、ファン。すぐに戻るから」
子供たちのあまりの勢いに、ファンもシンと共に行きたかったが、そうもいかなかった。シンに行ってらっしゃい、と言うにも一苦労、湍水の波のような勢いでやってくる子供たちと、ファンはそれだけでくたくたになるほど遊ぶことになった。
ふいに何かに見られている視線に気がついて、ファンははっとそちらを見やる。何か悪いものがいた時の間隔に似ていたが、周りには一座の子供たちが遊んでいるだけで、何も見当たらなかった。

開演

しばらくして、シンとダオレンが揃って戻ってきた。二人が戻る少し前に、街道の方から馬に乗った一座の若手が戻ってきて、今は駆けてきた馬に荷の中の飼葉を与えて、その毛をすいてやっている。鹿毛の馬が二頭と、葦毛と青毛が一頭ずつ、どれも足のしっかりとした馬だ。撫でてやってると、馬の世話をしていた青年が飼葉を少し分けてくれた。餌をやっていると、シンが向こうから呼んだ。

「ファン。宿が取れたぞ、買い出ししたら今日はもう宿に引こう」

「はい！　今行きます」

手に残っていた飼葉を葦毛の馬に全てくれてやって、ファンは手についた葉屑を払った。子供たちは少し前まで遊び疲れてうとうとしていたが、ダオレンが返ってくると小さい子以外は皆ぱっちりと目を覚ました。なにやら皆で集まって話している。聞き耳を立てると、どうやら今日の演目について話しているらしかった。ファンより小さい子もその中にも交じっているが、あの子たちも何かやるのだろうか。

「では、また後で会おう」

「おう、絶対来てくれよ！　町の広場だぞ。始まる前に太鼓を鳴らすからな！」

ダオレンは手を上げて、シンの呼びかけに応える。その後、すぐにまた一座の仲間に指示を出し始めた。はしゃぎまわっていた子供たちも今はきびきびとその指示に従っている。楽しみですね、と言うと、シンも応えて頷いた。

町に入る前に、シンが足を止めて懐から何か取りだした。小さな巾着だ。

「宿に行ったついでに、路銀を少し送ってもらった。もし足りないものがあるなら、きちんと揃えておくんだぞ」

シンが路銀の入ったそれをこちらに手渡す。ずしり、と重く、袋

の口から僅かに金色が覗いたのが見えて、ファンは慌ててシンの方を見た。町にいた頃に貯めた小遣いも確かにもう残り少ないが、多すぎないか。何より、シンが持っているお金というのは、バクがくれる小遣いとは違うはずだ。

「あの、これ……」

「出所は気にするな、王宮を出ないと小遣いも溜まるもんだ」

軽く小遣いと言っても、ファンの持ったことのないような大金だ。何度も巾着の中とシンとを見比べると、シンは笑う。

「俺が王宮にいても何もしないから、代々の陛下がたまには何か買えとくれていたものだが、結局こういうことでもないと使わん。金はやはり使わなければ意味がない。まぁ、無駄遣いしなければいいだけだ」

ファンは巾着を落とさぬようにしまうと、気をつけます、と答えた。慣れない重さに緊張していると、シンが、歩き方がおかしいぞ、と笑った。

保存のきく食べ物と手ぬぐいを新調し、傷んでいた靴を治してもらうと、二人は宿の部屋に引き揚げた。ファンは、干菓子や飴をいつもより余分に買い足した。これからあの一座と一緒に行くなら、子供にも少し分けてやれると思ったからだ。南や北からの砂糖が入らないとかで、甘いものはやや高かったが、その分塩気のものは海が近いおかげで安く手に入った。塩も、岩塩と海塩と両方が揃っていた。

買わなかったが、野菜や肉も東や南に比べて値が張った。陽山の噴火で、南のものが入りにくいだけでなく、聞けば、土地のものがまだうまく育たないのだという。鍬を下ろすと、石や凶荒の時の瓦の欠片に当たるし、草が少なければ野の小動物が減って、飢えた獣が家畜を襲う。大変ですね、と言うと、だからその分金を落として言ってくれ、と店主は笑った。そして、皆は口を揃えて言う。今は、王がいるから大丈夫だ、と。

宿で足を洗い、夕飯までの繋ぎに飴をひとつ舐めた。今日は舟で下ったからそうでもないが、ファンはこれまで歩き通しで固まった体をぐっと伸ばした。日暮れも近い、宿の窓からは海へと沈む夕日が見えた。暮れはじめれば、あっという間に夜に変わるだろう。下を行く人々が何か楽しげに話している。広場の方を指しているから、あの一座の話をしているのかもしれない。微かに楽器の音がする、試し弾きだろうか。

海が橙色に染まり、赤い火の玉だった陽が海へと沈んでいく。完全に沈む一瞬、海面を緑色の光が走った。それと同時に、閉門を告げる鐘が鳴る。真上の空は藤色で、東からは群青の夜が迫っていた。閉門からしばらく、広場の方から、太鼓の音が聞こえてきた。窓から外を眺めていたファンは、寝台で横になっていたシンの方に振り返る。少しうとうととしていたようだったが、ファンの視線に気付くと、シンはわかった、と体を起こした。

広場には随分人が集まっていた。人だかりの向こうには舞台が組まれていて、暮れるのに合わせて既に篝火が焚いてあった。伸びあがるようにして、眺めているとくん、と後ろから袖を引かれた。振り返れば、一座の子だ。

「席とっといたよ！」

舞台のすぐ前はござ敷きの席になっていて、すでに殆どが埋まっていたが、見れば一番前の中央が開けてある。周りの話を聞く限り、他より値の張る席らしいが、構わないから、と二人はそこに座らされた。

太鼓の音が再び成り始める。それは段々と早くなり、どろどろと辺りに響き渡ると、どん、とひと際大きい打音がそれを閉めた。舞台の裏から人影が現れる。ダオレンだ。不精髭はきれいに剃られ、渋い色の衣装に身を包んでいる。ダオレンはこちらを見やり、視線が合うと小さくだが嬉しそうに頷いた。そして、形式ばったやり方で、丁寧に一礼する。

「お集まりいただいた、皆々様。本日は急な興行にございましたが、見渡す限りの御来観、誠に有り難く存じます。我々、雲海一座。小さき一座にございますが、他では見られぬ業を揃えております。どうか最後までご鑑賞いただければ、幸い、幸い」

普段の荒々しい口調からは思いもよらない、口上を朗々と述べ、ダオレンは再び一礼した。歓声と拍手が巻き起こる。舞台の裏へ戻っていったダオレンに変わり、舞台の脇に、楽人が並ぶ。篝火がひときわ明るく燃える。幕上げだ。ファンは胸が大きくうつのを感じながら、演者の登場を待った。

藍女花舞

初めの演目は曲芸だった。見れば、あのファンと同じくらいの年の少女だ。体に沿う形の明るい色の衣装を身につけている。頭の上よりも高いところに張られた縄に、弾みをつけて、軽々と飛び乗った。

「あれ、今の」

歓声にまぎれて、ファンは呟く。すぐに、シンが指を立て、静かに、と合図して見せる。飛びあがる瞬間だけ、少女の手足が猫のそれに変わったのだ。猫の素養を持つ、と言っていたが、もう獣人なのだろうか。その間にも、少女は縄の上でぴんと手を伸ばし、すいすいと縄の上を歩いて見せる。縄のたわみを使って、まるで地上でやるように跳ねて見せる。会場が一斉に息を飲む。これは人の手足のままだ。少女は次いで、縄を足で揺らしてみせる。ひとつ、ふたつ、そして、みっつを数えると、少女は宙へと高く飛び上がった。空中で二転三転、再び縄の上に着地する。ひと際、大きな拍手があがった。明るく爆ぜる篝火に照らされながら後ろに前に、くるくると少女は飛んでみせる。飛びあがる度に、観衆からは大きな歓声が沸く。

少女の綱渡りが終わると、若手の男が筒の上に板を置いて、その上でいくつもの球を空中でやり取りして見せる。色とりどりの球が空で踊る華々しさと、その数が増えるたびに拍手は大きくなった。横に、いくつもの小刀を持った者が出てきて、球に交えてそれを投げた。球はだんだんと小刀と入れ替わり、火が刃に映って、まるでそれそのものが燃えているように輝いた。男は何周もそれをやりとりすると、全て高く投げ上げた。そして、足で足元の板を跳ねあげ、傘のように頭上に掲げて見せた。降ってきた刃がすべてその板の上に突き刺さる。どれもまがい物ではない、うっかりすれば怪我では済まない真剣だ。

軽業や、火吹き、皿回しなどがそれに続いて、それらが終わる度に、歓声と拍手が広場に高く鳴り響いた。昼間あんなに子供らしくはしゃいでいた子供たちが、今、目の前で見事な芸を見せている。自信を持って、観客に笑顔を見せるその姿は、実際よりもずっと大人びて見える。

三人で繰る獣の着ぐるみとそれと戦う英雄の剣舞が終わると、再び舞台裏からダオレンが姿を現した。

「我が雲海一座には、古くより伝わるものがございます。それこそが本日の目玉、天神降臨の唄と、我が一座きっての美姫、真珠御前による、藍女花舞にございます！」

童子の服を着た子供たちが、舞台の下に並び揃う。楽人がゆるやかな旋律を奏でると、子供たちが神話の一部を描いた歌を歌い始める。いくつもの声が重なり、幻想的で独特な空気を創りだす中、舞台の裾から青い衣装に身を包んだ、美しい女性が現れた。あのユーリーと呼ばれていた女性だ。

広げられた扇から、微笑みを湛えた彼女の顔が覗く。優しく美しい、天女のような笑み。元から彼女は美人だったが、白く塗られた肌、差された紅、薄絹を染めた青の衣に包まれた彼女は、真に神話の世界の人間を思わせた。まわりから、ほう、とため息が漏れる。手には鈴のついた扇と、銀に輝く短刀。それらは互いに藍の紐で繋がれていて、彼女の動きに合わせて揺れた。鈴や刃は灯りに煌めき、一層、観衆の目を神話の乙女へと惹きつける。

「陛下……」

シンの呟く声に、ファンはそちらを見やった。藍女、と言うのは、東の初代王の事を指すのか。薄く開いたシンの唇が、震えるように小さく動く。その表情は何とも表現をしかねた。

「師匠？」

シンが膝の上に置いている手に力が入ったのを見て、ファンはそっと声をかけた。シンははっとしてこちらを見る。どうした、と問われて、ファンはいえ、と口を濁した。東の初めの乙女、木王に扮し

た真珠御前が、舞台の上で扇と剣とを持って舞う。風の歌に舞い、木々の音に遊ぶ、青の乙女の舞。ファンは木王を知らないが、この舞と真珠御前の扮装が真に迫っているのだとしたら、木王と一度垣間見た今の王は、とてもよく似ていやしないか。

子供たちの歌が、木王の言葉をなぞる。青の国を歌う歌は、生命のへの讃歌だ。生きる喜びに、青い乙女が舞う。楽人の演奏がひと際高まると、子供たちの歌は天を称える言葉で締められた。舞い手の扇についていた鈴の音が、静まりかえった会場の空気を醒ますように鳴る。

静寂に包まれていた広場から、拍手がぽつりぽつりと聞こえ出す。それは地から湧くように、だんだんと大きくなっていって、広場は歓声と拍手と、称賛の指笛とに包まれた。シンとファンも、大きく拍手する。舞台の裏から、一座が出て来ると、それは一層大きくなる。ダオレンが終演の挨拶をしても、それを掻き消さんばかりに続いている。

一座は再び礼をし、拍手が引くのを待って舞台の裏へと引いていった。一座の演目の話をしながら、観客が満足気に帰っていく。二人は立ち上がると、舞台の裏へと顔を出した。

「すごかったです！　昼間と別人に見えました！」

ファンが感想を言うと、ダオレンがかっかと笑う。

「おいおい、別人って言われると、まるで昼間が駄目みたいに聞こえるぜ。とはいえ、ありがとな！　今日の演目はうちの一座のとっておきなんだ」

衣装から元の服に着替え、終わった者からどんどんと舞台の撤収にかかっている。

「藍女歌舞とは、初めて見たな。驚いた」

シンの言葉に、ダオレンは、そういやそうか、と呟く。

「四方での興業じゃあ、その国の初王の舞はやらない決まりなんだよ。決まりっつうか、まぁ崇敬と謙遜の意味でな。で、黄の地を挟んだ、反対側の初王の舞をやるのが通例さ。兄さんたちは東から来

たんなら、確かに初めてだろうな。良かったろう、藍女歌舞はうちの十八番さ」
「ああ、見事だった」
シンの応えに、ダオレンは笑みを深めた。よし、と呟くと、白い袋を持ってくる。
「これで、兄ちゃんたちに借りた分はあんだろ」
袋からは、じゃり、と金の擦れる音がする。
「少し多いな。どの道、これから一緒に行くんだ、返してくれるのは西都で構わん」
シンは白い袋をつき返し、それでも何とか寄こそうとするダオレンと何度か同じようなやり取りをしたあと、シンは引かないと見たダオレンが、済まなそうに荷の中に袋を戻した。
「宿にいるんだろう？　明日は、宿のところまで迎えをやるから」
ダオレンの後ろで、子供が、おれが行く！　と声を上げる。ずるいずるい、と声が上がるのを、後でな、と押さえてダオレンは近くの荷を持ち上げた。
「今日は俺達もゆっくり休む。また明日、会おうぜ」
ああ、と応えて、シンが歩き出す。ファンは子供たちに手を振って、その後について歩き出した。
宿の部屋に帰ると、眠気が全身を覆った。ファンはあくびをして、寝台に座る。それを見て、シンが言う。
「先に寝ていい、ファン。明日は河を越えてかなり歩くそうだ」
「はい。師匠は？」
問い返すと、シンが小さく苦笑する。
「後でちゃんと眠る。今はまだ、なんだか興奮してて寝付けそうにないんだ」
荷を手早くまとめて、ファンは頷いた。シンは窓から外を見ている。ファンが戻るのを見て、シンは灯りを消した。外の月は明るい。
挨拶を済ませると、ファンはそのまま倒れこむように眠った。

早朝

眠りに浸かる意識の向こうで、夜明けの鐘の音がする。胸の上を撫でる風はしっとりと冷たく、ファンは布団を上に引き上げた。高く澄んだ音の向こうに、低いさざめきが途絶えることなく聞こえる。あれがきっと、潮騒なのだろう。時々聞こえるのは、海鳥の声だ。山の鳥とは違う、長く尾を引くような声。

しばらくまどろみの中を漂っていたが、外の音に人々のざわめきが聞こえるようになって、ファンは目を覚ました。部屋を見回すと、シンの姿がない。荷物があるのを確認して、ファンは雨戸をあけ、見える範囲にその姿を探した。町に出ているのか、ただ階下に下りているだけなのか。

夜明けの町はまだ薄暗く、煮炊きの煙が、あちこちで細く上がっていた。潮の匂いと荷車をひく音が町を包んでいる。シンの荷物はいつでも出発できるようにまとまっているから、きっと先に下りて身支度をしているのだろう。ファンは重いまぶたをこすり、手ぬぐいを取って入り口の方へ向かった。

「ああ、起きていたか、ファン」

開けようとしていた扉が先に開いて、シンが部屋に戻ってきた。外に出ようとするファンと同じように手ぬぐいを持っているが、シンのそれは濡れて重そうだ。

「すみません、急いで支度してきます」

「いや、わざと起こさなかったんだ。まだ急ぐような時間じゃないから、しっかり支度してこい」

頷いて出ようとして、ファンは寝台に座るシンに振り返る。

「もしかして、師匠、寝てないんですか?」

どことなく暗く見えた表情は、朝の暗さだけではないようで。けれども、噛み殺すようにあくびをしたシンは、いや、とこちらを向いて頬を緩めた。

「充分寝たよ。それでも明ける前に目が覚めたから、町の端まで散歩してきたんだ。帰りがけに渡の方を見てきたが、もう人が集まっていた」

町の朝は早い。陽は東の山からまだ完全に顔を出していないというのに、町には人々であふれている。荷売りの声がする、市ももうすぐ始まるだろう。

「そういえば、一座の迎えが来るんだったな。支度して来い、朝餉を頼んでおく」

ファンは頷き、それでもやはり、急ぎます、と応えた。階段を駆け下り、水場の方へ下りていく。外はもう来た時のような活気が覆いつつある。これだけ朝が早いから町が復興したのか、こう早くなければ復興しないということなのか。伸びをしながら少し考えたが、ファンにはどちらとも判じかねたのだった。

水場から戻ろうとすると、道の向こうから子供が走ってくるのが見えた。よく見れば一座の子のようだ。あの、東の町から来たと言った子。向こうもこちらに気がついたのか、ぱっとその顔を明るくすると、倒れこまんばかりに体を倒して走ってくる。

「ファン兄ちゃん、おはよう！　もう出られる？」

「おはよう。ちょっと待って、師匠に聞いてみないと」

朝餉もまだだ、と応え、少年を待たせて階上へあがる。迎えが来たことを告げると、シンはやはりか、と頷いた。

「すぐに出ると言ってくれ。飯は持って出られるものを頼んだ。じきに来るだろう」

返事して、ファンはシンと共に荷を担いで、少年のところへ向かった。こちらへ朝餉を持って上がってこようとした宿の者から、それを受け取って、シンが宿を払う。

「本当はもっとゆっくりのつもりだったんだけど、ダオレンが兄ちゃん達呼んでこいって。何かね、おっかないのが河渡してくんないんだ」

少年の応えに、シンは首を傾げながらも、わかった、とだけ応えた。シンは昨日、今なら渡しの番人の機嫌は良いと踏んでいた。河とは何かと縁がないと、ファンは受け取った饅頭をかじりながらぼんやりと思った。

町を出て、少し歩けば河伯の渡がある。円を描く街道の、西の要。急流である湍水を渡せるのは、一匹の水妖だという。道連れになったあの青年が言っていたものだろう。

渡しにつくと、ダオレンは再び船頭姿の男と揉めていた。離れたところに、一座の荷馬車と馬が控えていた。馬は何だか様子がおかしかった。怯えているものと、妙に気を立てているもの。馬には何かわかるのだろうか。ダオレンが相手にしているのは、今度は渡河するための船人だ。今度は前のように怒鳴っていないが、小さな袋を覗き込みながら、困った顔をしながら頬をかく。

「今度は何だ」

シンが問うと、ダオレンはようやく表情を緩ませた。

「ああ、よかった、来てくれたか。いや、何、渡しの金が上がったらしくて、今度は払えるんだが、兄ちゃんたちに返す分からまた少し借りるかもしれねぇんだ」

「何だ、そんなことか。それなら構わん。西都についてからでいいと言ったろう」

ありがとよ、とダオレンは笑んだが、またすぐその表情が曇る。

「あとは、これは兄ちゃんに行ってもどうなるかわからんのだけどな、渡しの水妖が、舟を出そうとしないんだとよ。何でも、もう仕事をしなくていい、とか言ってよ」

ダオレンは渡しに使う大船の先を指差した。馬に付けるような引き綱がついているが、今それを引くものは見えない。重そうな舟だ、これをたった一匹の水妖が引くのだろうか。シンは、言う。

「ああ、そうか。責が解かれれば、河伯が仕事をする理由もない。とはいえ、ここの渡を失くすようなことは四方どの王もしないだろう」

そこまで話すと、ダオレンとシンの間に渡しの男が割って入った。
「何はともあれ渡るなら、先にお代を払ってもらおうか。何、ちょっときつく言えば、河伯の野郎も舟を――」
男が嵩にきた様子で言う間に、シンが河の中を指した。
「奴も近くには来ているようだぞ」
男はひっと言葉を飲み、黙りこむ。見れば、なだらかながらも、表面に渦を巻く湍水の流れの中で、きらりと何かが朝日を照り返している。魚のようなひれが見える。こちらが視線をやると、それは再び水の中に沈みこんだ。あれが、水妖だろうか。ふと、ファンはこちらに急ぎ来る足音を聞いて、そちらを見やる。左右で調子の違う、特徴のある足音だ。
「もういらっしゃってたんですね。もう二、三日かかるかと思ってました」
「ジピンさん！」
明るい声音に、ファンも応えて声をあげた。ジピンは町の方から来たようだ。横を見ると、ジピンの姿に船頭は苦々しげに顔を歪ませていた。互いに軽く挨拶を済ませると、シンが舟を指して言う。
「河伯と話ができないか。舟を出さなくていい代わりに、四方が、特に西王あたりが何か言っていると思うのだが」
「そうなんです。そうじゃないと街道がここで切れちゃいますからね。で、昨日から言ってるんですけど――おじちゃん！」
青年が呼びかけると湍水がざわりと波立った。波間に消えたあのひれがまた現れる。
「とりあえず、出てこないと。ちゃんと話をつけないと、駄目だよ」
水音ばかりが続いてしばらく、低い声が返ってくる。
「面倒だな」
水面から音もなく人の頭が浮かんだ。続いて、剥き出しの上半身があって、その下に碧の鱗に覆われた獅子のような下体が続く。魚のような尾が河原の石を叩き、飛沫を飛ばした。ファンの二倍はあろうかという巨体。水かきのある手で、藻色の髪を上げ、水妖はこ

ちらを見回して言う。
「――何だ、見た顔があるな」
思わず身構えたファンに、シンが小さく大丈夫だ、と呟いた。水妖のほうへ青年が駆け寄る。かの青年が大事な人、と言い示した水妖は、皆が恐れるだけ恐ろしく見えて、青年が慕うだけ美しく勇壮に見えた。
足元を濡らしながら、水妖がこちらに歩み寄る。なるほど、これならあの大船を引けるのが、彼だけというのも頷けようものだ。

河伯の渡

「あまり変わらんようだな、冰夷（ひょうい）」

そう声をかけ、シンも水妖の下へと寄る。対して、船頭と、ダオレンまでが数歩その場から退いた。ファンはその場に留まったが、シンがそこにいるからこそだ。青年も水妖の傍らに平然と立っている。

馬が高く嘶いて、飛び上がるように地面を強く叩いた。馬は水妖に怯えているようだった。一座の若者が、どうどう、と馬を軽く叩いて落ち着かせている。集中せずとも、水妖の気がぞくりを背筋を撫でる。魔、というわけではないが、威圧感のある空気だ。シンの言葉にやや首を傾げながらも、水妖が口を開く。

「それは俺の名前か。呼ばれんから忘れた。ずっと同じことの繰り返しだ、変わるわけがねぇだろう」

河原の砂利の上に大きな体を横たえ、水妖は応えた。若い男の上体がだるそうに腕を組む。水妖が動くと、辺りには魚のようなにおいが漂う。悠久の時を生きる水妖は、青白く鋭い爪で頬を掻き、続ける。

「この餓鬼の取りなし程度で、罪が許されるのかと思ったが、てめぇが来たってことはそうか」

水妖はちらりとシンの腰のものへと視線をやった。

「やっと俺を殺しに来たか、龍。元々、てめぇはそうしたがっていた」

静かな言葉に、青年が驚いたように水妖の体に触れる。ファンも同じように、シンの表情を窺う。その眼はまっすぐに、見定めるように水妖に据わっている。大赦がもたらされた水妖は、このシンが殺めようと思うほどの罪業を負っていたというのか。水妖はそう言いながらも、落ち着き払っていた。僅かに沈黙があって、ようやくシンはゆるりと首を振り、応えた。青年が何か言おうと口を開いた

ときだった。
「四方すべてが許したなら、それが俺の答えでもある。世の意はその許状の通り、他意はない」
「何を罪と取るかすら、俺はわからんままだぞ。それでもか」
続く水妖の問いに今度は頷く。
「お前の為に、人の子が命を賭けて許しを得に来た。充分だろう」
シンの応えに、青年の顔が明るくなった。そして、言葉のない河伯の代わりに何度も礼を繰り返した。シンは幾分か表情を緩め、河の方を指した。
「向こう岸に渡りたいんだが、手はないか」
問いに、水妖は自らの手を見つめて、ぐっと立ち上がった。見あげるような青磁色の体は、上ってきた朝日に照らされて、つやつやと光る。鱗一枚一枚が、翡翠の細工のようだ。
「俺が本当に許されたなら、渡るのに舟は要らん。河を止めてやる。歩いて行け」
「それはいい、馬も渡るに容易いな」
ファンは、この河を、と小さく呟く。海の近い河はまるで、陸の果てのように広く、対岸は遠い。それを事もなげに止める、と言って見せた水妖は、先ほどまでの威圧的な気も多少和らいだように感じる。
「ダオレン！　渡れるようにしてくれるそうだ、支度を――」
おう、といつのまにか荷馬車まで下がっていたダオレンが声をあげる。馬も今は落ち着いているようだ。
「ちょっと待った！」
水妖とシンの間に、中年の船頭が割って入る。手が震えているから、まだ水妖が怖いのだろう。水妖が許された、と聞こえた時、その男の顔が蒼白になるのをファンはしっかりと見ていた。とはいえ、男は舟の櫂を突っ張って立ち、声を震わせて怒鳴っている。
「こちとら渡しの仕事で、お飯(まんま)食ってんだ、そう勝手なことをされちゃ堪らないね！　自由になったってんなら賃金やるから、河伯、

あんたはこれまで通り、働いてくれなくちゃ……」
「俺にてめぇらの金など何の価値もない」
水妖の応えに男は口ごもる。そこにジピンが進み出て、船頭に対して諭すように笑みを浮かべた。
「船頭さん、あなたの仕事はこれまでずっとおじちゃんの罪を利用してきただけでしょう。ひとの償いをお金にするのは、よくないことです。ここが潮時ですよ」
優しいが毅然とした声。それでも、船頭は食い下がる。相手が青年だからだろうか。
「じゃあ、これまでの舟の維持費を出してもらおうか。ずっとこの船を守って――」
「守る？　この船をか？」
船頭の言葉に、水妖が鋭い犬歯を見せて哄笑した。水妖の笑いは不機嫌に凄むより圧倒される。
「この船は、北の王が術をかけて贖いの為に充てた舟だ。放っておいたところで、壊れん。逆を言えば……見ていろ」
水妖が大船を示す。ぎし、と初め小さかった軋む音が次第に舟全体を包んで、悲鳴のような大きな音に変わる。水妖が役を終えたから、舟も役目を終えたのだ。たちまちに舟は木切れの山になると、船頭はがくりと膝を折った。
「そんな……これじゃあ、仕事は」
「西王様は、ここに橋をかけるおつもりです。どんな流れにも持っていかれない強い橋を。ここの通りが確かになれば、もっともっと国は富む。誰かの犠牲で食わなくてもいいように」
青年は優しく微笑み、水妖を振り仰ぐ。
「でも、この流れに橋をかけるのは大変だよ。だから、おじちゃん。ここに人が橋を渡す間、湍水を宥めているのが西王様が出した大赦の条件」
その言葉に、水妖はぷい、とそっぽを向いた。
「もう許されたんだろう。なら、俺がそれを聞く義理はない」

「困ったな。じゃあ、僕はそれをまた西王様に伝えにいかなくちゃ」
青年がそういうと、水妖はぶすっとした顔で青年を見下ろす。そして、ため息をついて、苦々しげにいう。
「舟を引くよりはましだ」
一同は頬を緩め、頷いた。見れば、向こう岸に渡ろうという旅人が、かなり集まってきている。河伯の姿にこちらに寄ってはこないが、舟が無くなっているのをみたせいか、どことなく不安げに見える。
水妖は川辺に進み出て、その水かきのついた手を湍水へと向けた。海へ向かって流れていた水が平らぐと、次にはもう水は壁となり、対岸へと続く川底の道になった。水に逃げそこなった魚が、砂の上で跳ねている。大きな岩が所々顔を出していて、小舟の残骸やかつての家々がそれにひっかかっていた。水妖は言う。
「行け。さっさと渡らんと、歩いている間に水を戻すぞ」
ジピンが旅人達の方へ歩いて行って、進むように声をかける。ファンも一座の方に振り返って、その道を指差してみせる。向こうで、ダオレンがわかった、と合図するのが見えた。
青く深い湍水の水が、陽に照らされてきらきら輝く。底の砂も鉄があるのか黒々と、つやめいている。きっと、ここにかかる橋は立派なものになるだろう。いつかまた、見ることができたら、とファンは思った。
人々が恐る恐る道を行き、支度の出来た一座の荷馬車ががらがら音を立てて、河原を進んでくる。子供たちは大人の影に隠れながら、じっと水妖の姿を見ている。それに気付いた水妖がそちらを見やると、子供たちはわっと叫んで隠れたが、しばらくするとまた顔を出す。足を引きながら、青年は水妖の横でそれを楽しそうに眺めていた。
「では、俺達も行こう」
シンが歩み出して、ファンもそれに続く。
「おい、龍」

水妖の声に足を止め、振り返る。
「さすがの龍も、牙が抜けたか」
その言葉に、シンは微かに笑み、短く応えた。
「互いにな」
シンが再び歩き出す。ファンは後ろを振り返り、ジピンや水妖に手を振りながら、硬く締まった湍水の底を、対岸へと進んだ。

後ろを見ると、全ての人が渡りきったのか、川底の道はどっと音を立てて、再び海へと流れ出す。溜まっていたのを一度に、というのではなく、たわみを直すように少しずつ元の水量に戻していく。流れが元に戻り、ファンは前方へと視線を戻した。

河原から街道の道へあがると、雲海座の荷馬車が止まっていた。待っていてくれたのだ。呼ばれて二人は前の一台に寄る。御者として乗るダオレンが、後ろの荷馬車を指して言う。

「後ろのやつに乗ってくれ。前は殆ど荷物だからな。がきどもが嫌でなければ、そっちの方が楽なはずだ」

こっちこっち！　と子供たちが後ろの荷台で呼んでいる。シンが微笑む。

「ありがたい、そうさせてもらう。何かあれば言ってくれ、手伝おう」

頷くのを見てから、ファンは今行く、と子供たちに手を振って見せた。馬の方がやはり徒歩よりは早いし、きっと疲れにくいだろう。荷馬車に乗るのは、小さな頃に隊商の車にこっそり乗ったとき以来か。あの時は、乗った馬車が町を離れていって、その町影があんまりに小さくなったから、いくらもしないうちに怖くなって飛び降りたのだった。歩いて町まで帰って、帰ってバクの顔を見るなり、泣いた覚えがある。町が見えなくて泣いたあの頃に比べて、今はずいぶん遠くへ来たと思う。育った町は今、黄の地を越えて、中つ国の反対側にある。

「途中で寄りたい町はあるか？」

ダオレンの問いに、シンがない、と応える。ちび、と呼ばれている子が荷馬車を下りて、こちらに駆けてきたのをあやしながら、耳をそちらにやって聞く。抱き上げてやると、子供はきゃっきゃと嬉しそうに笑った。

「俺達は日中、馬車で出来る限り進んで、夜は街道脇で休む。この人数だしよ、宿は取らねぇんだ。まぁ、野営ってわけだが、俺がいりゃあ獣は来ねぇし……」

「こちらは乗せて貰うわけだ、そちらの則に沿うつもりでいる。気兼ねなく色々してもらって構わん」

そりゃあ良かった、とダオレンが表情を和らげる。後ろに乗ると、子供たちと、ユーリーというあの女性、御者の交代をするであろう若手がもう一人乗っていた。賑やかな荷台だ。は、と馬を進める声があって、荷馬車は少しずつ動き始めた。初めはゆっくりと、そして、勢いがつくと確かに歩くよりずっと早かった。

陽はすっかり山影からのぞき、幌の隙間から頬に当たる光が温かい。ちびは片時もファンの傍を離れようとしない。今も、横にちょこんと座って、こちらの指をぎゅっと握っている。シンの方は、御者の若者や年長の男の子たちにすっかり囲まれている。やはり龍化の話らしかった。困り顔で応えるシンの姿を見て、町にいた時に自分が同じようなことを聞いた時も、やはりああいう顔をしていた、と思いだす。そうしてやはり、遠くへ来た、と思うのだった。

指が自由になったのを感、見るとちびは今度は腕にすがっている。ぎゅっと腕を抱き、言う。

「にいちゃ、ぼくの」

小さく頷いてやって、その頭を撫でてやるとちびはにいっと歯を見せて笑った。揺られて少しすると、ちびはうとうととし始めて、そのうちに寝てしまった。手足を投げ出して眠るちびの体を、ユーリーが抱き上げる。

「この子にはおにいちゃんでもいたのかしらね。早く、西都につきたいわ」

「ちびはどこから来たんですか？」

問うと、今度はユーリーがファンの横に座る。

「陽山を越えて、この国に入った頃、街道の脇に一人で立ってたのよ。人もいなかったし、町も遠かった。都にいたというから、きっ

と置いていかれてしまったのね。ダオレンはうちの子にしたらいいと言うけれど、出来ることなら親の傍に返してあげたいの」

ユーリーの細い膝の上に頭を乗せて、ちびは静かに眠っている。ここにいる子供たちのように、ちびも何か事情があったのだろうか。きっとこれくらいなら、親の顔も解るはず。一座のみんなと一緒だからだろうか、それでも親を捜して泣いたりしなかった。

幌の左手、街道の西側はしばらく海が見えていた。今日は天気が良いから空の青と同じように海も青く広がっていた。青色も一様ではなく手前は浅い色、水平線は紺に、所々緑がかって、一所に同じ様子のところが無い。時々に休みを入れながら、午後には次の町が見えた。いつもならここで宿を取って、翌日の歩みに足を休めるところだが、今日は町を横目にさらに街道を進んだ。

途中で何回も歩きの旅人を追い越して、荷馬車はがらがらと調子よく街道を進む。海に沿って北上していた街道も、徐々に海岸を離れ、再び山の方へ向かう。まだ勾配を感じることはなく、まだ平原だ。所々に人の姿が見えるのは、そこに畑を起こそうとする耕人だろう。地表には時々白い粉が覆っているようなところがあった。足で擦ってみて塩だとわかる。こんな所まで海が上がったのだろうか。土に塩気があると、何かを育てるのは大変だと聞く。硬く乾いた大地に、鋤や鍬を入れて、水を引く。言えば容易いが、きっと手間も時間もたくさんかかるだろう。

街道の途中で、野の獣の声がした。近くに群れが来ているのだろうか。ファンが不安を感じていると、子供たちがだいじょうぶ！と笑った。獣の声に応えるように、今度はずっと近くから、遠吠えが聞こえる。ダオレンのものらしい。しばらくして帰ってきた声はずっと離れていて、もう心配ないのだとわかった。

「みんながこうやって、獣の心配なく進めたらいいのになぁ」

ファンは呟く。凶荒の憂き目にあったのは人だけじゃない。木も獣もみんな等しく苦しんだはずだ。時折見えるひどく曲がった若い木も、飢えに吠える野の獣も、もっと大地が生気に満ちれば、穏や

かに過ごせるようになる。旅の道が穏やかになれば、離れて思う四方も、もっと近くなるだろう。

白く見えるほど海を照らしていた陽が、傾いて直に見ても眩しくなくなってきた頃、荷馬車は止まった。街道の脇に荷馬車を止め、木に馬を繋ぐ。ファンは、馬の世話を手伝った。今日一日、車をひいた馬を労り、毛をすいてやった。

子供たちは火を起こす準備をしている。みんなはそれぞれに木切れを拾ってきて、徐々に大きくなる火の中に投げる。時々炎の色が揺れるのは、枝が塩気を含んでいるからだろう。荷の中の食料を皆でそろって食べて、ファンは自分の荷から、子供たちに菓子を少し分けた。

完全に暮れてしまうと、外は冷えて火の熱から離れられなかった。夕飯を済ませて、少し休むと子供たちが一斉に立ちあがった。片づけか、寝る支度だろうか。ファンも立ち上がり、何をするのかと問う。

「練習！」

一斉に声が返ってくる。小さい子たちは火の傍で、ユーリーと一緒に歌詞をさらいはじめ、大きい子たちは体の柔軟を始めた。曲芸の練習だろうか。自分も、何かやろうか。柔軟している少女の横で、ファンも座って体を伸ばす。芸の練習はできないけれど、いつもやっている組み手の練はできそうだ。

体を動かせば火を離れても温かい。それに少しでも疲れれば、夜はきっとよく眠れるだろう。

夢うつつに遊ぶ

熾き火の爆ぜる音に、シンは完全に目を覚ました。深く寝ていたわけではなく、水のような眠りの上をただ漂うようなまどろみだった。ここしばらくずっと深く寝付けない。何か夢を見ているようなのだ。それから目覚めると、どれだけ寝ても妙に疲れていて、どことなく気分が良くない。心臓が早鐘のように打ち、夜明けがどれだけ冷えてもじっとりと汗をかいていることが多かった。

目を覚ますと、夢はまた自分の頭の中に急いで逃げ隠れてしまう。まるでこちらの手を恐れているかのように。微かに掴み取れるのはいつも、懐かしさと困惑と、後悔とが混ざった、微かな残滓のみ。きっと、建国の時の夢を見ているのだ。内容が知れずとも、それだけはわかる。王を死なせた罪を、無意識が指で掻く。その悲鳴を毎夜聞いているのだ。

シンは深くため息をついた。御柱からここまでの道に、気付いたことがある。あれだけの、あれほどのことであったのに、忘れることなどできようもないのに――自分は建国時の事を確かには覚えていないのだ。朧に霞むように、虫が食ったように。砂像のように、触れれば崩れるような記憶。

「何故だ……」

額の汗を拭うと、シンは体を起こした。微かに頭が痛む。辺りには人々の寝息と、火の燃える微かな音だけしかない。彼らにあるのは安らかな眠りだ。傍らで眠る弟子である少年。この少年は悪夢から逃れ得た。夢の元となる過去を見たことによって。自分も悪夢と過去と向き合わねばならないのに、向こうはこちらの指をすり抜けて逃げてしまう。小さく笑いながら。

「おう、起きたか」

男の声に、シンはそちらを見やった。ダオレン、一座の座長だ。昔、東都に来た一座の座長も、きっとこの男の遥か何代も前だが、

その名を名乗っていた。刃、という名を。
「どうした、寝付けねぇか？　顔色が悪いぜ」
「いや、少し悪い夢をみただけだ」
応えて、シンはその横に座る。初めほどの勢いはないが、火はやわらかにこちらの体を温める。夕日に似た火の色に、隣の男の、髭が伸びかけた頬が照らされている。
「どんな？」
その問いにシンは首を振る。
「殆ど覚えていない」
そうか、とダオレンは火の中に新たな薪を放りこんで、火の根を起こした。そして、小さな器をこちらに寄こして、頷く。
「飲むといいや」
微かな酒の匂い。薄酒だろうか。シンも躊躇わずそれを受け取った。
「ありがとう。座長は、眠らなくていいのか。明日もあるだろう」
「おれぁ昼間荷箱の間でけっこう寝てたんだよ。それに、獣が来たら、追わねぇとな」
かっかと笑って、ダオレンはこちらの器に酒をついだ。
「異国にくると、大抵変わった夢を見るもんだ。――俺達は、ずっと旅のし通しだからな。俺はもう慣れちまったが、小さいやつらはまだ時々、これは夢かと尋ねてくるよ。故郷にいて親といる夢なんざ見た日にゃ、こっちのほうが夢のようなもんだ」
含むように注がれたものを飲み、シンは小さく息をついた。
「そうかもしれん。……俺はまだ時々、今自分がいるのが夢か現(うつつ)か、わからなくなるときがある」
それに応えて、ダオレンは笑う。
「現実生きる時は、これきりしかねぇ命だ、当人の好きに生きるのがいい。夢だと思ったら、それこそ自由だ。好きにやるのが一番だ。おれぁそうしているぜ」
笑い声に、酒に、火の温かさに、僅かにも強張っていた心が緩む。

「東にいたころに、この一座の西の舞を見たことがある」
そう言うと、ダオレンは、ほっと小さく、驚いた声をあげた。
「『白獣娘々（はくじゅうじょうじょう）』か。娘役と男役の剣舞でな、娘役は長槍、男役は剣で舞うんだよ。今の、男役は俺がやってる。兄ちゃんが見たのは、数代前のだろう」
「ああ、おそらく」
「そうだろうなぁ。幻獣種の人間に会うと面白いんだ、遥か昔の舞と、今の舞が比べられる」
ダオレンが自らの器に酒を注ごうとして、シンはさきに瓶子を取った。器に酒を注ぎ返し、笑んで返す。
「変わらぬものもあり、変わるものもある。変わっていると思っても、変わらぬものがあるのが、また面白い」
「長生きしたときの楽しみ、ってわけだな。って、おお、そういや」
注がれた酒に少しだけ口をつけ、ダオレンは器を下ろす。
「変わったって言やぁ、神獣様だ。今回のお召しはな、新しい白虎様に会うためのもんなんだよ。今あるのは先代様の舞だしな、新たな舞を作らねぇと。そうすると、『白獣娘々』も、次には見られねぇかもなぁ」
俺の仕事が減る、とダオレンは酒をぐいと飲み干した。
「そうか、それは惜しいな。あれはよく出来ていた。貴公のも見てみたいが」
「そう言ってもらえりゃ嬉しいね。おし、じゃあ、いっちょ舞ってみっか」
膝を押して、ダオレンが立ち上がる。少し離れて、剣は持ったふりで、どん、と踏み出す。シンはその姿に、昔東都で見たその舞を思い出す。娘役の舞は軽やかに、男役の舞は雄々しく鋭く。互いに離れて寄って、白い衣の男女が武器を手に舞う。
「剣を貸そうか」
声をかけ、シンは携えていた剣を差し出した。
「おい、こりゃあ上等なもんだな」

「何、舞の間だけだ」
応えやると、ダオレンは、では、とぴしりと姿勢を正して舞い始めた。ぼんやりとした炎の灯りに、夙風がその青白い刀身を光らせる。先代の白虎は男神（おがみ）だった。代々の王に仕え、国に仕え、揺るがぬ意思を持っていたあの神獣に、何がその心を揺るがしたのだろう。何が彼の獣を死に追いやったのか。
「おっと」
ふっと、意識を戻すと、ダオレンが姿勢を崩していた。平らに見えたが、石が出ていたらしい。がらん、と音を立てて剣が転がる。
「悪い、傷はないと思うが」
急いで拾いあげ、ダオレンはこちらに剣を返した。
「構わん、それくらいで傷はつかん。見事な舞だった。……待て、腕を」
見てやると、ダオレンの手の甲が少しばかり切れていた。見れば、刃にも薄く血がついている。刀身のを指で拭い、シンは剣を収めてその傷をみやる。ダオレンはうっすらと浮いた血をさっと拭いて笑う。
「こんなもん、すぐ治らぁ。朝にはかさぶたになってるぜ」
シンがほっと息をつくと、不意にめまいに襲われた。眠気にも似た、重みのあるよろめき。
「少し、酒にあたったかな。すまない、休む」
言うと、ダオレンはおう、と応えて笑う。
「ゆっくり休んでくれ。道で疲れたら、気兼ねなく寝てくれて構わんぞ。ちびたちがいて、うるさいかもしれねぇが」
礼を言って、シンはもとの寝床に戻る。剣が疼くように騒いでいる。目の前が重い。それでも、眠れぬよりはいいか。シンは横になると、そっと目を伏せた。

夢病み

海からの狭霧は平地を山へと駆けていく。借りた夜具に微かに重みを感じてファンは目を覚ました。布の上とはいえ地面で寝たからだろうか、手足に軋むような痛みがある。まだ辺りは暗いが、きっともう朝だ。いつもは町で鐘の音があるが、外にあっては夜明けの手掛かりが少ない。それでも鳥の声は朝を告げている。高く行く鳥には朝日が見えるのだろう。

周りの子供たちはまだ小さく寝息を立てている。少し離れたところにいるシンはこちらに背を向けていて、顔はわからない。ちゃんとよく眠れているだろうか。大丈夫だ、と繰り返しはするが、その顔に浮かぶ疲弊の色に気付かないわけがない。旅の道、弟子は師の顔をずっと見てきた。人の為に無理をしても、己の身を後にまわす。そういう人の顔は、生まれた時から見てきたからわかる。

冷え冷えとした夜の名残の中に体を起こし、ぐっと伸びをする。焚火はすっかり灰がちになっていて、残る火も星のような散らばりでしかない。火のそばでは、ダオレンが座ったまま寝ていた。吹き寄せる風はひやりと冷たい。皆起きたら、火にあたった方がいい。まだ温かくなるまで時間がかかるだろうから。ふうと焚火を吹くと、灰が舞って顔にまでかかった。

それから数日。白の国の道を西都に向かって北上している。西都は高い岩山の中にあるらしい。さらに町をいくつか過ぎた頃、そこへ向かう街道の勾配もきつくなり、皆は荷馬車から降りて歩くことになった。ちびや他の小さい子は乗っているが、他の皆は馬の負担を減らすために担げる荷をそれぞれに負っている。ファンも衣装の入った袋を、手伝って背負った。

「ファン、飲み水は残っているか？」

「充分に。……大丈夫ですか？　師匠」

「ああ、今日は少し喉が渇く」

平気な風な答えが返ってきたが、変わらずシンの顔色はあまり良くない。ファンは水筒を手渡し、持っていて欲しい、と告げた。本人は元気だと言うが、もうファン以外にもそれを心配する者が出てきた。以前シンは、自分は病気とは無縁の体だ、と言ったが、いくら神獣の体で、人より気の巡りに優れても、生きている限りは何もなしとはきっといかないはずだ。もし、具合が悪いなら、一座を離れてもどこかで休ませたい。シンの様子を見ていると、ふと別からの視線に気付いた。大きな荷を負い、しんがりとして歩くダオレンのものだ。見返すと、ダオレンは深く頷いた。シンのことだろう。ちょうど、山道の途中、沢の音のする開けた場所に出たところだ。

「よし、ここらで休むぞ。ここなら車が下に転がる心配もねぇしな。水も近い」

ダオレンが、一座全体へと声を張る。子供たちがわっと、草地の方へ駆けていって荷を下ろして座り込んだ。皆も旅慣れた様子ではあっても、勾配と荷物が一度に二つでは辛い。止められた荷馬車の車輪にもたれて、シンが座り込む。剣を支えにして、前にのめる。ファンは再び、ダオレンの方を見やった。そして、顔を見合わせ、頷く。

「……おい、兄ちゃん。具合悪いんだろ、前の荷馬車が少し空いてる。横になったほうがいいぜ」

「いや、充分に歩ける。問題は」

「ねぇわけねぇさ。人一倍鈍い俺が気付いてんだ。兄ちゃん、倒れる寸前って顔してるぜ。頼むから、少しでも寝てくれ」

シンは傍に立つダオレンを見あげて、難しい顔をして黙り込んだ。その手が、夙風を握りしめる。

「邪魔になるなら、置いて行ってくれて構わんぞ。西都も近い、すぐに追いつく」

答えたその声には、微かな苛立ちが込められていた。ファンははっとしてダオレンの方を見やった。さすがに少しばかり腹を立てた顔だ。何か言いたげに唇がふれている。ファンはシンにすがるよう

に、その間に割り込んだ。
「おれが頼んだんです、師匠。邪魔だからじゃありません、これからも旅を続けるのに――道はまだ半分なのに、倒れるわけにはいかないじゃないですか。師匠のことですから、きっと少し休めば随分楽になりますよ。お願いします」
シンはやはりさっきと同じ顔をして、こちらを見ていたがしばらくしてふっとその表情を緩めた。夙風を支えに立ちあがり、小さく息をつく。
「すまないな。なら、少し厚意に甘えさせてもらおう。一刻ばかりで構わん、起こしてくれ」
シンの様子に、はしゃいでいた子供たちが心配げに視線を向ける。シンは微笑み、大丈夫だ、と応えた。幌を閉ざし、その向こうにシンは入っていった。ファンはダオレンに礼を言ったが、ダオレンはただ、何もしてねぇさ、と笑った。
出発して、再び西都までの山道を登る。ファンは少しだけ足を速めて、シンが休んでいる荷馬車の横についた。シンのこの状態が、疲れや病気でないのはわかっているが、今はこの眠りでその体が、心が少しでも休まるといい。
夕刻、街道から少し逸れた山間の林に一座は野営を張った。子供たちは、ダオレンと山の中に薪を取りに行っていて、残った幾人かは夕餉の支度をしている。ファンは残って馬の世話を預かって、まず止められた荷馬車に寄った。シンを起こすためだ。
「師匠、そろそろ夕餉……」
幌をくぐろうとして、ファンは呻くような声に気付いた。寝言だろうか。そっとシンの顔を覗き込むと、表情は苦悶そのものだった。夢を、見ているのだろうか。薄く開いた唇が動き、零れるように言葉が出る。
「シェ……ラン」
切なそうに、眉根が寄せられる。
「すまない、すまない……！」

誰かへの深い謝罪の言。うなされながらも、シンは幾度もそれを繰り返した。まだシンは辛そうだが、躊躇いながらもファンは起こそうと手を伸ばした。きっと、この夢がシンの心を食うのだろう。父母の夢がかつて自分の心を食ったように。過去の夢がすがりつくから、今の歩みが重くなる。

「師匠、師匠！」

ぱっとその目が開き、弾けるようにシンが体を起こした。ぐっと深く覗き込んでいたから、急に起き上がるのを避けられなかった。

「でっ！」

したたかに額同士をぶつけて、しばし二人揃って悶絶する。そして、互いの顔を見合わせて、ぷっと吹き出した。ぶつけたところがじんわり赤い。

「おはようございます、師匠。具合はどうですか」

「あまり変わらんが、目は覚めたよ。……もう夜なのか？　すぐに起こしてくれて構わんと言ったのに」

シンは幌の向こうの暗さを見て、ふうと息を吐いた。

「みんな上るのに必死で。明日の昼には、西都へ着くそうですよ。もうすぐ夕餉です」

そうか、と応えて、シンはさきに荷馬車の外に出た。ぐっと伸びをして、中に残るこちらに振り返る。

「ファン、紐か何か持っていないか？」

「あ、結い紐で良ければ！」

ファンは外に飛び出て、置いてあった自分の荷から旅に出た頃の結い紐を引き出した。赤の国で変えてから、使っていなかったものだ。渡すと、シンは夙風の鞘と剣とをそれでぎゅっと結わえた。そして、口元に柄を寄せ、何ごとか呟く。

「ずっと同じ夢を見ているんだが、これが騒ぎだしてから少し酷くてな。これで多少は和らぐか。使わんから、これでいいだろう」

再び、腰にそれを帯び、シンは大きくなり始めた火の方へ歩き出す。

「座長に少し当たってしまった、謝らなければ」
子供たちと薪を抱えて戻ってきたダオレンを見て、シンは申し訳なさそうに頬をかいた。そちらへと歩いていくシンを、ファンはふと呼びとめる。
「あの、師匠。……シェランさんってどなたですか？」
驚いた顔で、シンが振り返る。
「……俺が言っていたのか？」
頷くと、シンはこちらへ戻ってきた。
「それは、陛下の名だ。……他に何か言っていたか？」
「いえ、他はただ、すまない、とだけ」
応えると、シンはそうか、と俯いた。
「最近、組み手もあまり相手できずにすまないな。少し考えていることがある」
大丈夫です、と応えて、ファンはシンを見つめ返した。向こうで、ダオレンが呼んでいる。二人は、揃って返事をすると、皆の輪に加わった。

雲上の西都

翌日、雨はないが空の高いところを雲が覆っていた。随分上ってきたせいか辺りは霞か雲か、白いもやが浮かんでいる。ここまで車を引いて来た丈夫な馬もその足を止めるような勾配に、最後には皆で荷馬車を押すようにしながら、西都前の坂を登りきった。坂の上まで車を押し上げ、皆で足を止める。ようやく西都に着いた。見えた西都の全体図に、ファンは嘆息する。眼前に広がるのは、ため息の漏れるほどに壮観な都だった。

「すごい……」

立ち上る蒸気と並ぶ雲とが街を包み、都はまるで雲間に浮く、空の城だった。

大平原の中にあった南都とは異なり、西都は岩山の平らな部分に家を重ね建てたような、山そのものを城にしたような造りになっている。いくつも並び立つ尖った山にそれぞれ散らばる町々を、大小問わずのつり橋が繋いでいる。外壁はなく、王宮を含む最も大きな山にある大手門から渡された白く太い縄が街を囲んでいる。封を結ぶと縄が壁の役割を果たすという。

あちこちで上る蒸気と、谷間にこだまするかねを打つ音。地を揺るがすような、低い雷のような唸り。まさしくここは西国、白の国の都なのだ。大手門への広く大きな吊り橋を、高さに怯える馬を引いて渡り、門の衛士の調べを受けて一行は西都へと入った。

入ってすぐ、ごぉん、と地響きがあった。加えて、あちらこちらで蒸気の噴き上がる音がしている。家の後ろには、水車のような大きな鉄の歯車が回っている。からくり箱の歯車の集まりだ。それが回るのに引かれて、別の山へと谷に渡された縄が回っているのが見えた。手桶がついていて、荷がやりとりされていた。中に入ってしまうと、都はまるで大きなからくり箱のようだった。

谷底から吹く風は冷たいが、通りに入ると時折温かい風が通る。

通りに面した家を覗くと、奥で赤々と燃える炉が見えた。高く響く鎚の音も、ここからのものだろう。他にも同じような家があって、鍛冶屋の多い道らしかった。

「兄ちゃん達、ほれ」

ダオレンが渡し場の町で寄こそうとしていた白い袋を投げ寄こした。銭の詰まった袋はずしりと重い。

「こんなに貸したつもりはないが」

こちらが袋を抱え直したのをみて、シンはダオレンの方を困ったように見て言う。

「見物料は小銭だからな、細かいだけで確かに借りた分だけさ。いや、本当に助かったよ」

「何、こちらも道中随分助けられた。それに思ったより早い到着だ。……だからこそ、こんなに返してもらうわけにはいかん。それに、これから歩くには、これでは重いな？　ファン」

シンがこちらを見て、同意を求めるように笑う。ファンも解るように袋を持ち直してみせた。これを抱えて、また山の上り下りは大変だ。

「そうやってっと、こっちは恩も金も返しそびれちまう。重いったって、天下の技の国、西の都だぜ？　両替屋がいくらでもあらぁな。銀にでも金にでもしてもらえば、ちゃあんと懐に収まるさ」

ダオレンは大きく口を開けて笑った。再び、シンとファンは顔を見合わせ、小さく笑う。今度はこちらが折れる番だろう。大人しく、懐具合を元に戻すべきか。

「さて、とな。俺達はこれからまず王宮へ向かわねぇと。興行と、寝起きの場所を借りにいくさ。兄ちゃん達は、宿を取るんだろう？　その袋も小さくしてこねぇとな」

「我々もいずれ王宮へ向かうが、そうだな。ここで別れよう。……雲海座の一行には、大変世話になった。感謝して足りない」

シンが頭を下げて言うと、ダオレンや一座のみんなが笑いあって応える。

「なぁに言ってんだ。そりゃこっちの台詞さ。俺は気が短ぇからな、兄ちゃん達に会わなけりゃ、早船のところで今頃縄を喰ってるぜ。……すぐ先に行っちまうこたぁないだろ？　新しくここの舞が出来たら、見てほしいんだよ。だから、ここはひとまずの別れってことにしようぜ」

それがいい！　と子供たちの声が揃って応える。

「にいちゃはぼくの！」

ちびがひと際大きく声を上げる。ファンはそれに頷いて、またね、とちびに微笑みかけた。ではひとまず、とこちらも繰り返して、宿のあるという谷の向こう側へと、二人は足を向けた。

「おっと、その前に銀座によらないとな。これだけあってもな、宿に着いたら水盆鏡で陛下に預けよう」

「……シェランさんに？」

そう言うと、シンはわかるほどに頬を赤くして、照れたように微かに俯いた。やられた、と言わんばかりにこちらを見て、ほんの少し咎めるような調子で言う。

「あんまり陛下の名を出してくれるな。呼び捨てにしていたことは、絶対に人に言うなよ。確かに朱明はああだったが、本来、王は神獣の主なんだ」

はい、と含み笑いに返事すると、シンに軽く肩を小突かれた。

「今度寝る時には、口を結わえておく」

悔しげな口ぶりに、ちょっとばかり得意になって、ファンは頬を緩めたのだった。

宿を取って荷物を預けて、二人は再び王宮のある山へと戻る。あちこちに高低差があるから、階段が多い。山と山との間を渡されている吊り橋は、丈夫な縄で掛けてあるが大勢が歩けばやはり大きく揺れる。橋のたもとには渡る人を数える衛士がいて、一定の数以上が通らないように、渡り人の調整をしていた。無数にある小さいつり橋はその限りではないようで、主ではない橋の多くは往来が自由

だ。そこは人々が互いに譲り合って、橋を保っていた。都の人々は子供も大人も慣れた様子でさっさと橋を渡るが、他所からの旅人はどんなに勇んでも元より住む人に比べれば、その歩みは遅い。ファンは渡された縄を掴んで、なるべく下を見過ぎないように足を踏み出す。なにしろ、谷は雲もあってだが、底が見えないのだ。風や人の往来に橋はよく揺れるし、踏み出せば助からないだろうから、やはり怖い。

「大丈夫か？　案外こういうものはさっさと渡ったほうが揺れんものだぞ」

「わ、わかっているんですけど、やっぱり……」

先に行くシンが振り返って言う。町人ほどではないといえ、シンは殆ど怖じる様子もなく足早につり橋を渡っていく。こちらの答えにシンは笑った。

「お前、朱明に力を貰っていただろう？　落ちても飛べる、大丈夫だ」

そうですけど、と不確かな足元を見ながら応える、龍化ですら意のままには遠いというのに、谷底までに真っ逆さま、の状態で朱雀化出来るとは思えなかった。きっと、頑張っているうちに底に着くだろう。どうせなら気を失って落ちたいと思う。

やっとのことで渡りきり、二人は大通りへと出た。街を行き来しながら気付いたのは、獣人の多さだった。数がいるかどうかではない、それが街で当たり前のように人前で力を使っているのがめずらしい。獣人自体は普通の人に比べればずっと少ないし、大抵がみだりに力を使うことを嫌がる。大抵が力作業や高所作業、手足に獣性を纏わせた人が、あちらこちらで作業している。目を凝らせば、彼らの手足には白い巻き布がある。問うとシンが顎に手をやりながら応えた。

「おそらく、臣である獣人を街に出しているのだろうな。確かに人には出来ぬことも、容易くできることが多い」

屋根から屋根へ、人によっては谷の間を渡された縄でさえ、それを

足場にとんとんと渡っていく。ファンにとって獣人は大抵が役人だったから、この光景は不思議だった。

城へ渡るにも、つり橋と階段を行かねばならなかった。城の前のつり橋が衛士の詰め所になっていて、謁見を求めるために行くと、ダオレンとユーリーの姿があった。

「なんだ、随分早い再会だったな」

ああ、と頷いてシンが衛士へつめる。衛士はこちらをじっと見て、問う。

「貴殿らも謁見か？」

「ああ。東都より参った。弟子と共に西王へ見(まみ)えたい。東より来(きた)る、有足の蛇だと」

「確かに伝えよう。しかし、今、陛下は城を空けておられる、夕方頃戻られるゆえ、謁見もその後が良いだろう」

ダオレンが、その通りなんだよ、と言わんばかりにこちらを見て肩をすくませる。シンとファンも顔を見合わせた。城を空ける王とは、どういうことか。しかし、いないとなれば、衛士の言うとおり来るのを遅らせなければ。詰め所を出て、またダオレン達と別れる。夕刻、きっとまた会うことになるだろう。

西の王、西の守護者（1）

その後、二人は一度宿に戻り、仮眠をとった。目が覚めると、外は暮れ始めて金色になっていた。なんだか、体が軋むような感覚がある。久しぶりに寝台で寝たからだろうか。関節がわずかばかりに痛い。

「やっぱり他のものに慣れると、体が痛みますね」

「骨が痛むか？」

問われて、その通りだと頷く。シンはこちらをじっと上から下まで眺めて、意味ありげに笑んだ。

「ちょっとこっち来てみろ」

手招きに従ってシンの元へ行くと、まっすぐ立つように言った。

「やはりそうだ。伸びたな、もう肩を越すのもすぐだ」

ファンははっとして、やはりまだ高いシンの顔を見上げる。確かに、旅を始めたときは、もっと遠く見えていた。実際の背でも、気持ちの上でも。にじむ様に湧く嬉しさと感慨に、ファンは頬を緩めた。

「同じくらいに伸びたらいいです」

呟くと、シンもそれに微笑んで返した。

「かもしれん。俺はもとより人型はこの格好から変わらんから、もしかするとお前のほうが高くなるかもしれんぞ。あとで、バクに教えてやれ、喜ぶだろう」

ファンは頷いた。そう聞くと、今まだ微かに感じる痛みも、喜ばしく感じる。この旅が終わるころに、自分はどうなっているだろう。少しでも、今より成長しているだろうか。旅を始めたころと、今がすでに違っているように。

城に向かって歩き始めて、ファンはシンの夢のことについてたずねた。まだ夢を見ている感はあるらしい。が、夙風（しゅくふう）に封をかけてからはひどくそれに病んだりはないという。ずっと身に着けてきた剣

が、自国の什宝が国の守護に苦を与えるというのは、やはり何らかの意味があるのだと思う。そしてそれは、天が言う“剣の故”にかかわってくるのだろう。

いよいよ暗くなる前に再び吊り橋を渡り、城門前に着いた。聞けば、まだ西王は戻っていないらしい。だが、暗くなってきているから、そろそろ戻られるだろうと中へ通された。白の国の王宮には、南のような華美な装飾が一切といっていいほどなかった。多少凝ったつくりのものがあっても、邪魔になりそうなものは端に除けられている。臣や官が行き来する以外、城はまったくの空の箱だ。覗き見えた部屋は、文机と明かり、書棚くらいで、不要なものがないというより最低限必要な物しかない。

「ここに、王様がいるんですよね？」

問うと、シンはもちろんだ、と答えたが、その答えも後におそらく、と付け足されるほどのものだった。

王座のある謁見の間の、その前室に通されて、二人は勧められた長椅子に腰掛けた。

「あの、ここで聞くのもどうかと思うんですけど、どうして先の白虎様は亡くなったんですか？　神獣は天のある限り健やかで、よほどのことがない限りって……」

シンは小さく息をつき、その表情を曇らせて、応えた。

「俺から言うのもな。ただ、よほどのことがあった、としか言いようがない。白の国の王と神獣は、酷な定めを負ってきた。――白虎は自刃したのだ」

「――神たる者の死をそう易々口にするか、青龍」

ぴんと張られた若い声に、二人は振り返った。勢いよく開けられた入り口から、颯爽と白い衣の若い男が、前室から謁見の間へ向かって歩きぬける。じっと見やれば若い、どころではない。もしかすれば、ファンよりほんの少し年上というだけかもしれない。

「なぜここまで来たかは見当もつかんが、入れ。用件を聞こう」

謁見の間の扉を押し開け、その若い男は中へ声をかけた。

「今帰った。どこだ、紫晶（ししょう）」
ファンはシンの顔を見て、男の正体を問おうとした。が、息の音に止められて、それを口にするのをとどめた。尋ねずとも、すぐにわかることになった。その若者は、まっすぐに玉座へ進むと、そのままどっかりと腰を下ろした。
この青年と呼ぶかも考えるような若者こそが、中つ国の西域、白の国の国主にて、白虎の獣人たる人間なのだ。数年前に即位した、ということは今のファンよりも歳幼くして就いた、ということになる。浅黒く焼けた肌に、深い銀の髪と瞳。挑戦的で自信に満ちた眼差しは、この者が王であり、自分が民であることを認識するのに余りあるほどの輝きだ。身に着ける衣は、多少丁寧な仕立てと良い生地であることを覗けば、あまり民と変わらない、動きやすい服。誰かを探して、西王が口を開くと、八重歯が覗いた。
「いないのか」
王の声に答えて、玉座の裏からひとつ影が現れる。
「いえ、御前に。お帰りなさいませ、陛下」
女官姿の若い女が玉座の横に控えて、かしずく。ひらひらとした袖の部分には、虎模様の染め抜きがあり、たわわな乳房を止めるように、胸には白い玉の飾りが光る。若き王からこちらへと視線を移した女性は、わずかに驚いたような表情を浮かべたものの、清廉な様子でそこに立ちつくす。
シンに倣って、そこに平伏したファンは、王の許しを待って顔を上げた。
「お初にお目にかかる、西王陛下。東の地より践祚（せんそ）の言祝（ことほ）ぎと、二三、お願いがあって参上した」
座したまま、シンは用向きを告げた。お願いとは何のことだろうか。ふと考えて、ファンははっとした。そのお願いこそが、シンの旅の目的ではないのか。
そうだ、シンは初めから何か目的があって、旅を続けていたはずだ。南の地でそれを済ませたのかはわからないが、今までずっと自

分は旅こそが目的だと思ってきた。が、国や民の想うシンが、あれほどに国を離れることを自戒し、他に咎められながらも旅を続ける理由。太極を――自分を連れることになったのは、ほとんど成り行きだ。

「ほう。守護の責を投げてまでの用件か。では、東の女の言っていたこととは、当然違うのだな？」

あまりに当然のように話すから、彼の言う東の女が東王陛下だと気づくまでに少し時間がかかった。

「そのように考えていただいて結構。……まさか、貴下が即位されるとは思わなかったが」

シンの応えに、西王は鼻を鳴らして笑った。

「俺もわからぬが、何も問題あるまい？　確かに、天を恨んだ孤児（みなしご）が王になり、兄の死を止められなかった獣が、跡を継いで白虎と変わる。西の地ほどに天に弄ばれた国はないな」

背もたれにどっと寄りかかり、見下ろすようにして、西王は続ける。

「まぁ、それも今はどうでもいい話だ。――とっとと用を言え、西の地はお前の地と違って、いろいろ忙しいのだからな」

シンに先を急がせて、西王がこちらをじろりと見た。微かに笑ったように思ったのは何故だろう。ファンは落ち着かなさを感じながら、シンの用に耳を済ませた。

西の王、西の守護者（2）

「まずは何より、西の鎮守の新しきを祝いたい。……幾千の昔にお会いしたきりか、先代の妹御。なんとお呼びすればよろしいか」

シンは、西王の傍らの女性に呼びかけ、再び深く拝した。この女性が、新しい白虎だというのか。神獣が死ぬというのも驚きだが、新たに神獣と化すというのも思いもよらぬことだ。しばし見とれてその唇が動かないかと見ていたが、シンが頭を下げていることを思い返し、ファンはあわてて叩頭した。涼やかで儚げな声で、女性は答える。

「構いません。兄と同じように、蓐収（じょくしゅう）、と。……人の姿では、初めてお会いいたします。青龍様」

「ならば、こちらも句芒（こうぼう）、と。貴女が兄上の跡を継がれたか。相応しきかな、西の地もこれで安らぐというもの。……後で先代殿の御霊屋（みたまや）を参りたい、教えていただけるか」

顔を上げたシンがそう応え、尋ねると、女性――白虎蓐収は顔を曇らせた。ややあって、蓐収は俯き加減に小さく首を振る。

「墓などあろうはずがありません、句芒殿。四獣とは神霊にして、国の力たるもの。死せばその身は地にとけ、天に還ります。そうでございましょう、お忘れですか」

「――そうだったな。すまない。兄上は国の一部となられたか……それも、国を思われるあの方らしき在り方ともいえるな」

シンもがそれに顔を伏せがちに応えると、蓐収が小さく、貴方は、と呟いた。シンが顔を上げ、その言葉の先を待っている。神獣の妹、という新たな国守りの獣。今は女性の姿をしているが、この人も本性は獣なのだろう。西を守る、新たな白い獣の。僅かに漂った沈黙に、西王が割って入って声を上げた。

「いつまで実のない挨拶を続ける気だ、青龍。俺は用件を言え、と言ったはずだぞ。……紫晶、下がれ。お前は想うばかりで、事を先

に進めぬから駄目だ。いくつかある、と言ったな、順を追って話せ。つまらん世辞はいらん」

僅かな躊躇もなく発せられる声に、ファンはやはり身が縮こまるような思いがした。時折辛辣に感じる西王の言葉は、あるべき優しさを欠いているように思う。兎にも角にも国を再興するとなると、こういうふうになるのだろうか。悠々と玉座に座り、こちらを見下ろす王は、むしろ彼の方がよほど獣のようだ。偉そうに、と思ったが、相手は王だ、当然のごとく偉いに決まっている。ならば当たり前の姿なのに、どうもそぐわなく思うのは、王とは優しく、和を尊ぶものと思っていたからか。女性の王ばかり見てきたから、この若い王の刺さるような鋭さは少しばかり怖い。

「ならば、こちらも遠慮はしない、国を旅した王よ。――子の生まれぬはず黄の地の、御柱の社で生まれた子がいる。どうも、天に気に入られてしまったようでな、天意により国を見せて回ることになった。我が弟子としている、ファンだ」

紹介されて、ファンは改めて玉座に向かって頭を下げた。ぽい、と投げるような、よい、という言葉に、顔を上げて西王の顔を見つめ返す。そこにあったのは、先ほどのような薄い笑み。

「おい、小僧。国を見て回って、楽しいか？」

大して年も違わないだろうが、こちらのことを小僧と呼んで、西王は問うた。ファンは頷いて返し、口を開く。シンはさっき、旅した王、と言った。この人も四方を巡ったのか。王は四方への挨拶を必要としないが、ならば、何故の旅だったのだろう。

「はい、楽しいです。大変なこともいっぱいですが、師匠もいます。すべてが新しく、学ぶことはたくさんありますから、旅して良かったと思っています」

そうか、と応えて、西王は一層その片笑みを深めた。楽しい、と言うのは嘘ではない。南都の騒動も、黄の地の夢も、今となればすべて力になった。広がる山野は雄大で、四方それぞれに美しい景観がある。見えて来る中つ国は出会った人々であって、優しく強い大

地だったからだ。
　ぐっと前に乗り出して、西王は口を開く。
「俺は、旅の間が苦痛で苦痛でたまらなかった。何の力も財もない餓鬼が、一人で巡るこの国は、実に険しいものだ。お前は、路傍の草の味もひび割れた足に沁みる泥の色も知らぬと見た。お前の旅が良いのはな、師が見るように、お前も同じ目で国を見るからだ。真の国の姿が見たければ、誰にも頼るな。天意があるなら、国を回る前に死ぬこともなかろう。……まぁ、旅して良かったというのは本当だな。俺もそう思っている」
　舌鋒鋭く、というのがまさに適当な王の言葉のあと、ファンはただ圧倒されて、その場に居尽くした。西王はそれでも事もなげに、蓐収に向かって、何か言う。水、と言ったのだろうか。神獣であるのに、まるで従者のような扱いだ。
　王は運ばれた杯の水を飲み干し、続きを、とシンを急かした。
「で、この小僧が何なのだ」
「素養の知れぬ身にして、王と同じく神獣の力を扱う。ひとつと言わず、馴染む限りどれもな。今は俺の力と、朱明――朱雀の力を借りて宿している」
　ほう、と西王は面白そうに、こちらを見やる。見せてみろ、という言葉を恐れたが、案の定それは飛び出してきた。ファンは深く息をつき、まずは青龍の気を引き出してみせる。そして、しばらくそれを見ると、次、と急かされた。若干不安のあった朱雀化もなんとかやり遂げる。久しぶりの赤い羽根は心の内を映してか少しばかり陰りが見える。
「面白く、まぁ、便利な力だな。力はその身にひとつと聞いたが、それなら色々できそうなものだ」
　まるでものを使うように獣性を話し、西王は、戻していい、と言った。ふっと力を抜くと、今度はまるで力が抜かれたように体が震えた。青龍の気を支えに、再びしっかりと座する。
「なるほど、それで白虎の獣性も与えてみろ、という話か」

西王は肘掛に肘をつき、椅子深くにどっかりと腰を据えた。
「断る。たとえ力がただの道具とはいえ、白虎の力は俺が旅の先に、こいつと出会って手に入れたものだ。そう易々と人にくれてやる気はない。小僧、本当に力が欲しければ、もう一度一人で回って、ここに来い。そうすれば考えてやらんでもない」
肩すかしをくらったような気持ちで、ファンは思わずシンの方を見た。唇を真一文字に結んだ、師の顔。怒っている時に多い顔だが、それ以上にははかりかねた。今何を思うのだろう。もともと力を目当てに来ているわけではないし、シンの謁見のついでであるから、西王の言とこちらの意には多少なりずれがあるが、妙にあてが外れたような落胆を覚えた。
「さて。いくつかある、と言ったな。あとは何だ。後がつかえるから、急げ」
「――こちらが本筋だが、今ここでは話せん。別に時間を頂戴する約を取り付けたいのだ」
シンの目が一瞬こちらを見たのに気がつき、ファンははっとする。それを読んだように西王は応えた。
「いいだろう、後で時間をくれてやる。ここに残って待っていろ。弟子に出来ぬ話があるなら、初めから連れて来なければいいだろうが」
シンの用事は、自分には話せない内容なのだ。太極とは言え、ただの人の子が関わってはいけない話。国の事なら、ファンは出過ぎたまねはできない。だけれど、国とシン個人、旅のことは違うとわかっていても、何故か胸のうちに空寂しい風が吹いた。こちらの表情に気付いてか、シンの唇が微かに振れた。すまない、と言っているように見えたが、どうだろう。
「そういうことか。わかった」
玉座から立ち上がり、西王はこちらに寄って続ける。
「なに、お前の用件のことじゃあない。そっちはまったくわからん。――西がこの有様で、国が倒れぬ由のことだ」

シンの目の前にしゃがみ込み、その顔を覗き込みながら言う。
「紫晶が戸惑っているのもそれだろう。……日和ったな、青龍。この頭に叩き入れられた初王の記憶が確かなら、随分と耄碌したものだ。四方が均等を持って保たれるなら、西が弱ったと同時に、東も弱っていたと見える。なら、今この国があるのも、青龍、貴様のおかげかな」
西王はそう言って立ち上がると声を上げて笑った。嘲笑じみた皮肉に、ファンは立ち上がろうと膝に力をやる。が、立ち上がる前に、シンが袖を引いてそれをたしなめた。
「その通りかもしれん。が、若輩の王よ、そろそろ礼儀を覚える時だぞ」
低く冷たい声でシンは応え、こちらを立たせながら、自身も立ちあがる。
「ならば、弟子は宿へ引かせてもらおう。あまり、覚えさえたい居振る舞いでないのでな」
「おお、そうするといい。若輩結構。こちらも変える気はない」
先に戻っていてくれ、とシンが戸口に向かってこちらの背を押した。ファンはただ頷いた。ほんの少しのけ者にされたこともあるけれど、これ以上、師が蔑まれる姿を見たくなかった。玉座の間の扉が閉まり、ファンは短く、だが重たく息をついた。

西の王、西の守護者（3）

玉座の間の前室、控えの間にはもう既にダオレン達が待っていた。こちらの姿に驚いたように顔を上げる。

「なんだ、先客はファン達だったのか。一人か？　兄ちゃんはどうした？」

後ろで閉まった重たい扉と、見知った者の顔と声に胸の内がこぼれそうに湧き立った。目鼻の奥がぎゅっと締まるような感覚に、その下の口までがふるふると震えた。

「師匠は、まだ、残って話があるみたいで……」

やっとそう絞りだしたが、その先を言葉にしたら別のものが溢れてしまいそうだった。ぎゅっと拳を握りしめ、込み上げたものをせき止める。

「……どうしたの？　大丈夫？」

先にダオレンと一緒に来ていたユーリーが、こちらの様子の変化に気がついたらしかった。泣きそうになるのを首を振って堪え、大丈夫です、と応えて見せる。

「先に宿に戻ることになったんです。大事な話だそうですから」

「大事な話なら、なおさらお前が聞いてなくてもいいのか？」

ダオレンの問いに、ファンは頷いた。

「きっと、聞かれたくない、いえ、聞かないほうがおれにとってもいい話でしょうから。無理に聞いたら良くないんです」

そう応えて、言い聞かせるように頷いたが、ユーリーがそれに首を振った。

「でも、あなたは納得していないわ。そうでしょう」

化粧映えしそうなさっぱりとした美しい顔が、痛ましげにくもっている。納得しかけた心が引きもどされて、ファンは俯いた。そうだ。国や天に関わることは、ファンにはきっとわからないし、わかっても何もできないだろう。だが、師が旅をするきっかけになって――

おそらく、今心を痛めている理由に関わるなら、何か力になりたかったのが本心だ。何も出来ぬだろうと思われていることも、まず知ることから拒まれていることも、寂しく悔しかった。かつて持っていた無力感に似た、胸に開いた穴。

「しっかし、ずっと旅してきたのに、ここで蚊帳の外ってなぁちっとばかし兄ちゃんも薄情だな」

続いたダオレンの言葉に、ファンは慌てて首を振った。それでも、あの人は。

「もし蚊帳の外にされたのだとしても、ちゃんと理由があるんです。おれが知ったら自分以上に、おれに何か負担があると思っているんだと思います。おれがそれを構わないと思っていても、師匠はそう言う人だから」

そうだ。考え方の違いなのだ。苦しいなら分かちたいとファンは思うが、シンは苦しいからこそ負わせたくないと考えているのだろう。なら、いつかシンが分かとうと思う時まで自分を鍛えて待ち、潰れてしまう前に助けられればいいのだ。ファンはしっかりとした目で二人を見つめ返した。

二人はしばし黙っていたが、扉が開いて、一座の呼びがかかってダオレンは、そうか、と息をついた。

「お前がいいってんならいいさ。まぁ気を詰めるのもよくねぇしな。お、そうだ。もし夕飯まだなら、一座に寄っていってくれ。一人で喰うよりはいいし、ちびたちも喜ぶ」

西の端にいるぞ、という言葉にファンは礼を言って、明るく頷いた。扉のところで呼びに来たのは、蓉収と呼ばれたあの白虎の女性だ。一座の二人が玉座の間へ入ったのを見て、ファンも外へ出ようと踵を返した。

「待って」

呼びとめられて振り返ると、すぐ傍まで彼女は来ていた。

「気を悪くしたならごめんなさい、陛下はあなたや青龍を傷つけたくて言ったわけではありません。ただ、あの人はこの国の暗い部分

ばかりを見てきてしまった」

深い紫の瞳を揺らし、蓉収は俯く。王が今のファンより年若くして王となったなら、王がした旅も子供の足で、何の頼りも支えもなく進む険しい道程だったはずだ。そこから見た中つ国は、彼の性情を変えたのだろう。その国の風に馴染む前に、吹きつけられて傷ついて。

「巡り合わせが悪かったのです。陛下がかつて羨み、そして許せなかったものを、今のあなた方から感じてしまったから。それはどちらが悪いというわけではありません。ただ、そうとわかっていてもあの人はああいう言い方しかできないのです。本当に、ごめんなさい」

蓉収が小さく頭を下げるのを見て、ファンは慌てて首を振った。

「いいんです。でも、西王様が見たこの国も、おれが見てきたこの国も、どちらも同じ国ですし、どちらも間違いなくこの国だと思うんです」

蓉収は微笑み、頷いた。

「ええ、そうです。ただ見た部分が違うというだけ、あなたが見る国も陛下が見た国も正誤なくありのままの国の姿なのです。私が見た国も、誰が見る国も、違いながら同じ国」

見る人が違えば、国はまったくその様相を変える。西王が見た険しく厳しい国の姿も、ファンが見てきた美しく雄大な国の姿も、どちらもこの肖像である。ただ向きが違っただけだ。山間の町でジピンが、自分の目で見るようにと言ったのは、その人が見た姿でしか、そのものは存在しえないから、ということだろう。ファンは今まで見てきた国が今思うような善い国でよかったと思う。それは辛いものを見ずに済んだ、というわけではない。この善い世界を、愛おしく思うことができる。人に、土地に、感謝できることの、心地よさを抱いて生きられる。

「何をしている、紫晶！　お前がいなければ、話にならん！」

控えの間で立ち尽くしていると、厚い戸を徹す大音声で、西王が自

身の守護獣を呼んだ。そういえば、一座が中にいるのだった。
「すみません、陛下。今すぐに」
こちらの声は徹るか分からないが、蓉収は慌ててそれに応える。押し開けようと扉に触れた蓉収の、その細い背をファンは呼びとめる。
「あなたが彼を王と認めたんですよね」
蓉収は振り返り、少しばかり困った顔で微笑んだ。
「ええ。そして、同時に、私を彼が選びました。私たちは共に、何も知らぬ状態で王と神獣になりました。彼は人の上に立つ王としての振る舞いを、私は人と共に生きる神獣としての振る舞いを覚えていかなければいけないのです」
金の髪留めをきらめかせ、蓉収はこちらへ向き直る。
「私が小間使いのようなことをしているのは、人の生活を覚えるためなのですよ。ついこの間まで、四足で歩いていたのですから。同じことは、あの人にも言えます」
蓉収は辺りを見回し、小さく残った壁の飾りを指して言う。
「この城に何もないのは、陛下がしたことではなく、凶荒中に困窮した官が仕方なく払ったからなのです。今はまだ戻せませんが、陛下はああいうものが好きなのですよ。そうでなければ、旅の芸一座を呼ぶこともないでしょう」
確かにそうだ。頷き、互いに小さく笑うと、その後ろで扉が開いた。苛立ちをその顔に浮かべた西王その人だ。
「いつまで待たせる気だ……なんだ、小僧。まだいたのか。お前の師はしばらく帰らぬ、さっさと宿へ戻って寝るがいい。道がわからんわけではあるまい」
ファンは大丈夫です、と応えて、出口の方へと少し足を下げた。この気を張ったような態度も、もしかしたら蓉収の言うような、“それらしい振る舞い”のうちなのだろうか。そう思うと、さっき感じていたような怖さはもうなかった。
去ろうとすると、蓉収が口を開いた。

「あなたも、青龍に何が起きたのかは知らないのですね。確かに、人の子は図れぬほどに長い年月の間のこと。なら、私が話を聞き、私からも彼に語りましょう。国の根幹にかかわることですから教えられることは少ないと思いますが」

ファンは足を止め、返事と共に深く一礼した。扉を閉め際に、ふん、と小さく鼻の息の音がする。

「礼義を教わっていて良かったな。それなら化物じみて長生きの、城の官どもに何も言われずに済むのだろうが」

扉の向こうになった若い王に、ようやく自分と同じ、人らしさを感じてファンは幾分か軽くなった足で、城の外に向かった。西の方だと言っていただろうか、一座の皆に会いに行こう。

石の魔像

玉座の間から城の正門までは直線、特に迷うことはない。シンの帰りが遅くなるなら、宿の人にもそれを伝えておいた方がいいだろう。もともと外で食べるつもりで夕餉を頼まなかったから、戻りが遅いことだけ伝えればいい。

本殿を出て、暮れがけの淡い月明かりに照らされる、前庭の石畳を早足に進む。石畳の目はまっすぐで、切りだした石工の腕の良さを感じた。左右に延びる別の道は、おそらく文官と武官それぞれの詰め所で、それぞれに渡り廊下で玉座のある本殿と繋がっていた。見えないが、本殿の向こうは王と神獣の安らう宮があるはずだ。王宮を示す塀の内に他いくつか建物があるが、ファンにわかるのはそれくらいだった。客人をもてなすための屋もあるのだろうが、灯りのあるのは左右の殿と本殿、衛士の居る角楼くらいだ。

門の前まで来て、ファンは来た時との違いに足を止めた。門が閉められている。日中は王宮へ出入りする者のおおよそが通る正門だが、今は大戸がぴたりと閉じられて、門の上の衛士も街の方を向いていた。

昼間は王も謁見を願う旅の者も都の者も皆、同じ門を通る。それは王が民の中から選ばれる存在であって、一系の血ではなく善なる心によって国が治められているという証だ。王は地に生まれ、天が選ぶ。その門が今は閉じられている。守りの為だろうか。都に風水による封が為されるのと同じく、王宮も外と隔てられている。

どこから出ればいいのだろう。ファンは辺りを見回した。山間の都は平地のものに比べて多少規模が抑えられているとはいえ、国の要、王宮は広い。おそらく聞けばわかろうものだが、あいにく出歩く姿が見当たらなかった。門の上の衛士に声をかけるべきか。

踏み出して、ファンは妙な風が背を撫でたのに気がついた。温いのに、ぞくぞくするような風だった。これまでの旅で何度か感じた、

悪い気配だ。ファンは風の来た方を見やる。薄闇に眼を凝らすと、広い庭の、建物の影に小さな堂がたてられている。町の隅にある鎮守の堂のような、八角の建物だ。しかし、ここが西の王都ならば、鎮守の土地神は、国の守護と同じく白虎のはず。そのものが住まう王宮なのだから、堂が建てられるわけもないし、立てられるとしたらあのような質素な堂では済ませられないはずだ。唾を飲み、恐る恐るファンはその堂の方へと近づいていった。

近づくと、ますますその堂の異様さに気がついた。風は止まっているが、それでも禍々しい気が漂い出している。他と同じように月に照らされた場所であるのに、暗く見えるほどだ。獣化に慣れてきたファンには、その堂がただの祠堂でないのがわかる。そして、さらにゆっくり近づいて、その堂の手前に出た。扉は鋼で出来ているようで、格子窓のついたそれは二重に閉ざされていた。いくつもの頑丈な錠が下ろされ、白縄がそれをさらに締めている。封をする札が何枚も貼られていて、おそらく封を成しているのだろう楔が四方に打たれていた。ここは神を祭る堂ではない。何か、とてつもなく悪いものを封じている囹圄（れいご）なのだ。

何が封じられているのだろう。ファンはじり、と堂の方へ近づく。あまり近づくと、封を踏んだり、下手をすれば外してしまうだろうから、中が見える程度にだ。

よく目を凝らして、ファンは中を窺った。そして、思わず息を飲んだ。

「魔獣……？」

見えたのは、牛のような怪物の大きな頭だった。人より少し大きいくらいの、石の像だ。一対の太い角は、くねり曲がりながら天を衝き、牛面の口元からは尖った牙が覗いている。格子の隙間から半分だけ覗く人のような体と、何かを睨み据える、人間によく似た目。今にも動き出し、咆哮しそうな悔しげな表情と体勢で、堂の内でも幾重に縄を掛けられていた。

西国の名工による作である、と言われれば、こうして対面してい

なかったなら、それを信じただろう。しかし、ここまでの厳重な封と、そうまでされていても尚漂うこの邪な気は、それがただの石像でないことを覚えさせるに充分だった。牛面の左目下にはあの、蚩尤の眷族を示す印が、まるで岩に出来た染みのように浮かんでいた。これが西国に封じられた魔なのだろう。

その禍々しいものが、何故王宮のここに据えてあるのだろう。魔が封じられたのは建国の頃だと神話に聞いたから、この像は一万年、僅かな風化もなくあるということになる。壊すことも、地に埋めてしまうこともなく、像は堂の内に据えられている。ともあれ、それがここにあるということは、西の地の魔は復活していないのか。なら、きっと東の地の檮杌や南の窮奇のように、何か仕掛けて来るということもないはずだ。

「誰だ！　そこで何をしている！」

背後からの声に、ファンは驚きながらも、姿勢を正して向き直った。松明を持った、警邏の役の衛士だ。何と応えるのが良いのだろう。こうまでも厳重に封を掛けられた場所だ。気配に気づいたとは、自分のこのなりでは言いづらかった。

「すみません、正門が閉まっていたので、どこから帰ればいいのかわからなくなってしまって」

堂の事を置いて、自分の現状だけを応えた。火の明かりがさらに、堂の中を照らしている。闇の中で見たよりもはっきりと、像の影が映る。

「それならすぐに門の衛士に声をかければいいものを。向かって右手、正門の東に通用門がある、そこで出られる。……行け、というのも容易いが、まぁいい、案内しよう」

来い、と衛士に導かれて、堂を背にする。後ろにするとさらにその嫌な気が強くなったような気がした。衛士はあれが何か知っているだろうか。ファンは衛士の横に歩き寄る。

「さっきの御堂は、何が祀られているんですか？　西都の鎮守は白虎様だと聞きました」

衛士は一瞬面倒そうな顔をしたが、小さく息をつくと答えてくれた。

「あれは、建国様が先代の白虎様と押し縮め、封じた魔獣饕餮（とうてつ）だ」

西の魔は、名を饕餮というらしい。人の目をした牛には、そぐわないほどの多くの牙があった。

「像の中に封じられているんですか？」

さらに続けて問うと、衛士は困ったような顔になる。

「俺とてただの衛士だ、詳しいことは知らん。だが、あれが饕餮の体そのものなのだと聞いたぞ。……魔のものなら壊せばいいものを。あの周りを見回るのは、いつも気分が悪くなる」

半ば愚痴のような調子で、衛士はそう言った。石にその身を封じたのではなく、その身そのまま石とした、ということだろうか。松明の燃える小さな音と虫の音を聞きながら、衛士について歩いてしばらく。衛士の立つ東の通用門に出た。夜番の衛士が半分開けられた門の内に立っていて、ファンは引き渡されるように、そこをくぐりぬけた。

「今回は、迷子だということにしてやるから、すぐに家に戻れ。あまり王宮をうろつくな。お前がもし大人なら、不審な者と上に突きだすところだぞ。もう子供という年でもないだろう。次は気をつけろよ」

あの見回りの衛士が語気を強めて言う。ファンは、すぐに頭を下げた。

「すみません、ありがとうございました」

出たところは、大通りから外れた裏手の道のようだった。塀沿いに行けば、大通りに戻れるだろう。そこからなら来た道だ、目印にした建物を辿ればわかる。宿は東にあって、橋を渡った別の山だが、ファンは逆の方へ足を向けた。シンの帰りが遅いなら、西の端にいる一座のみんなとしばらく話もできるだろう。遠い地で一人で待つのは心細い。

歩きはじめて、その横を温い風が抜けたが、門の内で感じた邪気

はなく、かねを鍛える鍛冶場からのものだった。ファンはふと門の内を思って王宮を見やる。代々の王達は何を思いながら、あの像を残したのだろう。そして、それを今あの王がどう扱うのか。そんなことを考えながら、ファンは宵の道を歩いた。

帰る場所

西都は南北に伸びた楕円状の深くくぼんだ谷に、そそり立ついくつかの山を基盤に街を成している。先のとがった山を途中で切り均(なら)したような形で、その上に家々が並び、一部は岩山を掘りこんで住居や工房がつくられている。町の入り口である大手門とそこへ架かる一番大きな吊り橋、そして王宮を含む街の中枢を抱えるのが、谷の中心にある山だ。道を尋ねて聞いた限り、町の人はここを本山と呼んでいるらしい。本山にある町だから王宮のある町は本山町と呼ばれている。そこから放射状に比較的大きな吊り橋がかかり、周囲にある他の山へと道が続く。南から続き、南西から都へ入る街道は本山を通り、西の離れ山から北西へと抜ける。荷馬車が通れそうなのはそこにあるつり橋くらいで、馬も高さを恐れるからか街の中には厩(うまや)が見当たらなかった。

本山の西の端、兌山(だざん)と呼ばれる西の離れ山へ向かう橋の手前の広場に一座のみんなは集まっていた。小さな焚火を囲んで、荷馬車の横に身を寄せ合って座っている。声をかけると、皆は少し驚いた顔をしたが、すぐに火の近くに迎え入れてくれた。

「どうしたんだ、ファン。一人か？　シン兄さんは？」

小刀使いの青年が、火にかけてある鉄瓶から茶を空き茶碗に注いで寄こした。同じく差し出された問いに応えながら、ファンは温かい茶椀を手で包みこんだ。

「師匠は王様と話があるって、遅くなるらしいんだ。途中でダオレン達に会ったら、みんながここにいるって。一人で待つのも寂しいから来たんだよ」

応えると、皆はそうかそうか、と頬を緩めた。無造作に入れられた茶でも、火の温かさを感じられれば、その香りもひと際快いものだ。

「火はこれ以上焚けないのかな」

呟くと、若手たちが苦い顔をしながら、橋のたもとにいる衛士達を指した。

「ダオレン達が戻らないと、俺達はまだ流人扱いさ。これもちび達が冷えるからって、粘ってなんとか許してもらったのさ。薪だって俺達のもんだし、これだけ離れて家が燃えるかってんだ、けちだよな、まったく」

相槌を打ち、橋のたもとを見やった。衛士達は絶えずこちらに視線を送っている。町の風水を掛けてしまったから、彼らは今内側で何やら起こりはしないかと気を揉んでいるんだろう。離れていても、ぴりぴりしているのがしぐさから見てわかる。

「ダオレン達はおれと入れ替わりに入ったから、たぶんもうすぐ戻ると思うけどなぁ。……そういえば、ちびは？」

問うと、火の向こう側であの綱渡りの曲芸をしていた少女が小さく手招きして、自分の膝の上を指した。ちびはどうやら眠っているらしい。

「さっきまで、ダオレン達とお城に行くって聞かなくてさ。さんざん泣いて、今やっと疲れて寝たところ」

少女はちびの髪が鼻にかかるのを避けてやりながら、言う。

「ユーリーは明日にもちびの両親を捜そうって言ってるけど、あたしはあんまり気が進まないんだ。ううん、できるならお父さんお母さんと一緒にいる方がずっといいと思うよ。でも、あたしみたいに捨てられた子だったら、帰る場所はもうないと思う」

少女の言葉に、他の子や若手が何人か頷く。悲しそうな顔がいくつかある。皆、同じような昔があるのだろう。

「もし、親が見つかったとして、俺達がここを離れたあとにもう一度捨てられないとも限らないんだよな。そうしたら、今度こそちびは死んじまう。だったら、このまま俺達と一緒にいた方がいい。俺達だって、一座に拾われたのは運が良かったからだ」

よく馬の世話をしている青年がそう言って、茶の器を差し出した。火の近くにいた子がそれにおかわりを次いで、鉄瓶を元に戻す。火

はもう炭火のようになっていて、谷からの夜風が随分と冷えた。皆の間でしんみりとした沈黙が漂う。

「おれは、それでも親を探したほうがいいと思う」

次いでもらった茶を飲み干し、器に残った温かさを掌で確かめながら、ファンは口を開いた。

「みんながいるんだ。もし親が見つかったら、みんなで見ればいい、話を聞けばいい。ちびが残るかどうかは、きっとそれからでも遅くないよ。まず、いるなら会えるほうがいい。おれは、生まれた時に父さんも母さんも死んでしまったし、みんなにとっての一座のように、これまで大切に育ててくれた人がいる。だから、特別寂しいということはなかったけれど、御柱で幻だとしても会えたとき、すごく嬉しかったんだ」

頷くように、応える息の音がある。皆の目が優しく、小さく寝息を立てるちびに注がれる。皆の頷きに応えて、一座で一番活発な少年が声を上げる。

「よし！　じゃあ、もしちびが一座に残ることになったら、今度はちゃんと入ったお祝いしようぜ！」

それがいい、という賛同する声があがる。話が一息つくと、誰かが遠くにダオレン達の姿を見とめたらしい。やっと来た、と安堵した声が漏れる。

「今日は屋根のあるところに泊まれるかな。この時期の西は寒いよ」

子供たちが腕の辺りを擦りながら、火のほうへと寄る。

「ま、ちびが一緒に行くなら、泣かなくてもお城にも寄れるんだけどな。俺達も上演の前に昇化の礼をあげに王宮に行くんだろうし」

「昇化の礼を？」

ファンが問うと、あの少女が得意げに笑って答える。

「あたしが獣人なの、もう知ってるでしょ？　今の王様が就いたばっかりのころ、あたしは礼を上げて、猫の獣人になったの。ダオレンはもちろんだし、ユーリーも兄達の何人かも獣人だよ」

「せっかく四方を回るんだし、獣人がいる方が旅の道は安全さ。ま、

ダオレンが居れば、戦うこともないけどなー」
そう若手が答えるころには、ダオレン達が近くに戻ってきていた。自分の名前が出たのが聞こえただろう、不思議そうな顔をしている。ファンは少なからず驚いた。彼らはこれまでに会った獣人たちとは違って、獣化に対して責や命をあまり感じていないように思えたからだ。
「何のために？」
我ながら呆れた質問をしたと、ファンは言ってから思った。何も思わず、覚えずに獣人になったわけがないのだ。傍に寄って、何の話をしているかわかったらしいダオレンが、かっかと笑いながら応える。
「他の偉い獣人たちに比べりゃ、俺らは呑気に見えるかもしれないけどな、ただ無駄に力持ってるわけじゃねぇんだ。出た先で村を襲う野盗が出れば戦うし、生まれた国以外で獣化する術を編み出したのは俺達のずっと先代さ。それに、俺らが芸をすりゃあ、誰かが喜ぶ。それに少しでも役立つなら獣化だって必要さ」
芸こそ我らが命なれば、と誰かが呟く。それに応えて、皆が同じ言葉を唱和する。どこかで聞いたと思ったら、前の町で聞いた一座の歌にそういう節があったことを思いだした。集まった一座の仲間を見回して、ダオレンは声を張った。
「西王陛下から、宿と上演の許可を貰った。が、新しい舞の披露は七夜の後、と言われてな。急いで、だが、いっとう良いやつを作らにゃならん。他の芸もやるんだ、気を締めてかかるぞ！」
おう、と皆の声が宵に響き渡る。で、宿は、と尋ねる声に、ダオレンはにやりと笑って言う。
「すげぇぞ。王宮の中の宿舎を使っていいんだとよ。根なし草の俺達が、一時とはいえ王宮住まいだ！」
歓声が上がる。若手から子供たちまで揃って、はしゃぐなかにユーリーがあきれ顔でため息をつく。
「明日の夜から、でしょ？　今日はここで野営、火は使っていいそ

うだけど、町中では大騒ぎしないようにって言われたんだから」
皆の動きがぴたりと止まって、嘆息が聞こえた。皆がしぶしぶ野営の準備を始めた中、ユーリーはこちらに向かって微笑んだ。
「今日の私たちはいつも通りよ、だから、あなたもこれまでと同じようにゆっくりしていってね」
ファンは頷く。なんだかんだ言いながらも、夕飯の支度をする皆は楽しそうだ。ちびがその騒ぎに目を覚まし、目をこすっている。たとえ、元の家族に戻れなくても、ちびはきっと、寂しい思いをすることはないだろう。皆が帰る場所を作ってくれるから。

白砂の間

どこまでも続くような、白い砂利の敷かれた清廉な空間。ダオレン達が玉座の間に入るとき、ここで待つように通された。天からの力が配される、西の神域だ。東の地に聖樹が在り、南の地に聖火が燃ゆるように、西の地にも国の要石たる天の造物がある。西の地はかねの柱だ。地下の鉱床が伸びたような六角の柱の集まりが、白い空間の真ん中に据えられている。所々で伸びる細いそれは竹のように、中央で集まって据わるそれは白い海原に現れた島のように、白い砂地を分けて立つ。岩山のように見えるからとかねの柱は聖山と呼ばれた。実際に、この空中の楼閣のような都を支えるのがこの柱だという。

シンは腰に帯びていた剣を外し、中央の柱の前に座した。剣を捧げるように置いて、静かに黙祷する。御陵がない、となれば、ここが彼の魂に一番近いように思ったからだった。忠義と矜持の塊のようだった、気骨ある男神の。

「安らかにあれ、蔣収。自刃を選んだのは、やはりその性分のせいかな」

シンは呟いた。

自分にも他人にも常に厳しく、曲がったことを嫌った。それでいながら、命には忠実。自らの死ですら、天や王に許されなければ死なぬとすら思ったのに。

「兄は、何を思った。ただ辛いからとて、軽々しく死ぬような御仁でなかったのは、知っているが」

静かな問いに、聖山は答えない。俯けていた頭を下げ、剣を佩き直す。西の前王の崩御と白虎の登霞はすぐさま他方の王や神獣へ伝わった。報せの鳥が東王宮に舞い込む前に、魂を揺すり、心を貫くような悲しい音がそれぞれの身に響いたのだ。シンも現王と共にすぐさま、救難の手を出した。白の国から最も遠い東の地にすら、二

度も天嶮を越えた民が流れてきた。南や北には新王が当極した今も西よりの民が残っているという。

「待たせたな、青龍。感謝しろ、この部屋ならば弟子はおろか、臣下の誰も入らぬ。……砂は掻くな、血が残っているか知らぬぞ」

冗談だろうが、笑んで応えることはできなかった。迎えるために立ちあがったシンに座るようういい、自身は聖山の前にどっかりと腰を下ろした。

続けて入ってきた蓐収――先代白虎の妹であり今の白虎である女が、その横で元の姿に戻る。白い流れるような毛並みの、美しい白い虎だ。雄々しく勇壮であったかつての白虎に比べ、多少小柄であるとはいえ優美ながら壮麗たる巨躯だ。王は紫晶と呼んでいたか、瞳は確かに宝玉のような美しい深紫だった。白虎は尾で聖山を撫で、その横に体を横たえた。

「旅の間、国から金を貰っているだろう」

「ああ、必要な分は」

問われて、シンは頷き応えた。

「あとは書状くらいか？」

更に問われて、シンは頷いた。水盆鏡は、話をするためのもの。元より物を届けるためのものではないから、書状や金子などが送れる限度だ。

「いやな、北の王に、もっと大きなものは送れぬか、と聞いているが、好い返事がなくてな。美徳か知らぬが黙ってばかりだ」

人が送れるくらいがいいが、と続けて呟き、さて、と膝を打った。

「話してもらうぞ、青龍。何のようだ、国を捨てたか」

挑戦的な笑みを残したまま、西王は問うた。何を言いだすか、と楽しんでいるような節もある。きっと、彼にとっては気に入らぬ話だろうと思いながらも、シンは西の王と神獣を交互に見やって、口を開いた。

「さっき、貴下がおっしゃられたな、耄碌（もうろく）した、と。そう言われればそれも真だ。用というのは他でもない。もう俺では青龍の役を務

めきれん故、近くこの力を天に返そうと思う」
　王と白虎は揃って眉を寄せた。何より白虎の表情は暗く曇る。
「国護の任を捨て、死のうというのか」
「……力を放して死するというなら、それも腹の内にある。だが、ただ返すと言ってもな、この身はこれでも神獣、その座が空けば国は揺らぐ」
　長い目で見ればしばしばある王の空位よりも、神獣の不在は祟る。彼らにとってこの言葉はどこの国よりも身近であって、看過できぬものだと思う。
「なるほど、今度は東が荒れるから、佑助の手を出せというか」
　変わらぬ声音でそう西王は応えた。座する膝の上に肘をつき、こちらを見据えている。風はないが、傍らの白虎の髭がそよいでいるように見える。
「断る。そんなもの貴様が変に動かねば済む話だろうが。青龍の役を務められん、だと？　そう思っても放っておけ。天が貴様を不適だと思えば、断る間もなく青龍を別に据えるだろうよ。天は勝手なことを嫌うようだからな」
　つまらんと言わんばかりに、西王はため息をついた。そっぽを向いた若すぎる王の、その横顔はひどく幼く見えた。二十歳にもならないだろうその男を前に見たのは、東王宮でだ。王宮に忍び込んだと、衛士に捕えられた痩せた子供。王や、面白いから来いと呼ばれたシンを前にしても、怯むことなくこちらを鋭く睨んでいた。恨みや憎しみはあっても、その眼はただただまっすぐだった。どこから来て、何をしにきた、と問うたのはこちらが初め。その問いに子供は、西から来て、ただ王の顔を身に来た、とだけ言った。そのときは、別段害もなかろうと飯を与えて追い返したのだったが。それが、こうして王となるとは。そして、同じ問いが今こちらへと投げられている。再び息をつき、西王は続ける。
「この国はな、何もかもが天の意の中になければならないのだろう。抗ったのが、この国だ。天の断りなしに事を起こせば、必ずそれに

対して裁が下る。生き死にすらも天のうちだ。俺はな、青龍。主が欠けただけで、国がこうも荒れるとは思わん。天の信を曲げて、勝手に死を選んだからこそ西は酷い時を過ごした」

「天が、国を荒らしたというのか？」

問うたが、さすがに西王はそれ以上答えなかった。頷けば不遜、だが、それでもなお頷くような気配が王からはした。

「天の動きを待つ、か。待ったよ、それこそ千で足らぬほどの年を。が、答えはなかった。ここ数十年この身が弱るばかりで、ようやく動いたかと思えば、それも別の意があってのことのようだ」

もう、待てぬ。西王が目に見えて天への不満を抱えるように、シンもずっと、ささやかにでも天への不信を抱えていた。天は、国の為でなく何か別の意を持っているのではないか、と。そして、それはファンのことで確証に近づきつつあったのだ。西の道の中で、シンは自身の弱化の原因がわかった。白虎が口を開く。

「何故です」

まだわからぬこともある。だが、答えねばなるまい。シンは腰の剣を、ぎゅっと握りしめた。

忘却と責と

「初王の命を守れなかった故に」

蓐収の問いに、シンはとりあえずと短く応えた。

知らず知らずに病んできたのだ。一万年もの昔から、ただ一つの事だけが胸に残っていた。そして、ずっと忘れようとしてきた。忘却の海の底に沈めたはずのものでも、やはりことあるごとに岸に流れ着いて、戻ってきてしまう。その都度、もっと遠くへ、もっと深くへと投げ返しても、いずれはこうして手元へ帰ってくる。

「俺はもう、俺自身が許せない。魔獣を倒すよりも、何よりも神獣は初王の身を守らねばならなかったのに、俺はそれを成せなかった。魔獣たちすら手を焼いた獣を神獣と成し、他の命と生きる術を教えてくれたのは、木王陛下その人だ。ただ一つ、陛下を守れなかったことが、悔しく許せない。ただ一人の王すら守れない獣であって、そして、それに心囚われてしまっている俺だから、もう青龍であってはならないと思う。国の主ではいられない」

西王は不機嫌そうに、鼻を鳴らしてそれに応えた。蓐収は黙っていたが、応えるための言葉を探しているように見えた。

「まず天のことを置いておいても、そういうよくわからん、お前の都合以外に理由は？　ただ、出来るできない、やりたいやりたくないで務める仕事でないのはわかるだろうが。今のところの支障はあるのか」

「俺から国へ力が回らん。今は、聖樹と鏡の術で代わりにしているが、国へ戻ればまた俺の状態が国を揺する」

「実害もあり、か」

西王が呟き、座りをさらに崩す。気に入らん、と思っているのは見てわかった。

「ただその人が忘れられないが故に、ですか」

小さな声で、蓐収が問う。静かな声だが、水面下の渦を思わせる

声音だった。シンは頷いた。きっと、彼女にも自身の兄の記憶が継がれているのだろう。四方代々の王達が、初王の記憶を継いでいくように、力と共におそらく先代の白虎の記憶を継いだはずだ。何を見聞きし、思ったか、つまりは、先代の死すまでの思いもまるで自身の事のように思い出せるはずなのだ。

だというのに、自分は。

「ああ。そして、矛盾するようだがな。大恩ある木王陛下のことも、あれだけの戦いのことだというのに、細かなことがすべて抜け落ちているのだ。誰がいて、結果どうなったかだけがおぼろげにあって、その他何が起きて、何を語り……何を思っていたのかも。木王陛下のいまわの言葉も何から守れず死なせたのかも、抜けたように忘れてしまった。殆どを忘れてしまったのに、ただ守れなかった、という記憶ばかりが刺さって残っている。ここまできてようやくわかった。俺は一万年前から、稚児のようにそれにぐずっていたのだと」

遠ざかるほど記憶がぼやけていくのも、薄れていくのも常のことだが、あの始まりの記憶だけはその常にあってはならないのだ。忘れることは国というものから遠ざかるということ。否、いまわの言葉も死せる理由も、覚えていたらきっと辛いことばかりだ。失われている記憶は初王と関わるものばかり、忘れさせられているのか、自ら強いて忘れたのかはわからないが、忘れるべくして忘れているのかもしれない。そして、それを責めるように、今上が現れたのだと思った。この現状を象徴するような姿で。

「今の陛下は、初王の記憶を持たれず、だと言うのに、木王陛下と同じ姿形で、登極から十数年少しも姿を変えずにいらっしゃる。まるで、俺の記憶を映したように」

あの少女の姿のまま、少しも姿を変えず、歳をとらず、王としてい続ける今の青の国の主は、静かにだが東の地の異変を示しているのではないか。王が変わらぬとしたら、自分に——神獣にその責があるのではないか。

黙し、聖山越しに遥か東の地の聖樹を思う。変わらぬのは、聖樹

の枝ぶりばかりだ。そこで、それまで殆ど語らず、控えていた蓐収が口を開いた。深い色の瞳が、燃えるように輝く。

「王が何故短命かは、知っていますね、青龍。いくら善き魂を持つと言っても、所詮長命の者には短命の者のことなどはかれません。短命の民の為の世だからこそ、王も短命でなくてはならないのです。それを長命の聖獣や化生の官が支える。それでようやく善い国が続けられるか、という推量です。

たしかに、陛下がかつて見たという王と、今の東の王が少しも変わりないと聞いた時、東の地にも何や天変がありうるやと思いました。しかし、それを自身の心の揺れと結ぶのはいけません。それはただ、自身の心の弱るのを王に故を押し付けているだけでしょう。

たくさんの王に仕え、国を維持する。それが神獣の役です。だというのに、あなたはただ一人の王の死に耐えられぬと言うのですか？　そして、他の王の死は耐えられると？　分け隔てなく多くの死に耐えることこそ、長命の者の負った定め。重く背負わず、軽くあしらわず、命の行く末を見ていかねばならないはずです。

青龍、あなたは知っていますね。先代は遥か初王より、王殺しの命を負いました。それはあの戦いの後に饕餮（とうてつ）の呪いを喰ったこの国を、守るための厳しく、重要な責でした。王に異変ありしとき、王が国に仇なす前に討つ。それは神獣であり、何よりも忠を重んじた兄にしか出来ぬこと。これまでの全ての王を弑（しい）し、心を砕きながらも耐えてきました。いえ、この先もまだ耐えねばならなかった。

兄の見た記憶が確かなら、今の王から初王を強く思ってしまうのは詮無き事、ですが、それに心囚われて自国を滅ぼすと言うなら、私はあなたをここから帰すわけにはいきません。これは国を揺るがした先代の罪を贖（あがな）うためであり、西の地を立て直さねばならぬ白虎としての意です」

黙していたのは、自らの意をまとめるためか。まっすぐにこちらを見つめ、咎め説くように、蓐収は語った。眼差しは、先代と変わらず強い覚悟と意志を帯びていた。

「国を滅ぼすために青龍を返すというのではない、病んだ獣を据えていれば国が倒れると思った故だ」

勢いの出ぬままに応えて返すと、傍らの白虎の言葉を聞いていた西王が立ち上がり、声を上げた。

「貴様はこの旅で何を見た！　俺は見たぞ、飢えで死ぬ子供も、病に倒れる老人も、奢侈（しゃし）に溺れる大人も。そして、ただ一柱の神獣の為に、死んでいく民を。たくさんの民が死んでも、それでも世界は揺るがぬ。下らぬと思わんか。だが、滅べばよいとすら思った世界にも、守らねばならぬものを見た。だから、俺はこの命を受けたのだ！　貴様が守るという世界はどうなんだ。億の民の命でも変わらぬ世界を、一人の王とお前の命で壊そうと言うのか！」

先代の白虎が死して、次代が就くまで二十年ばかり。長き暦の上では、僅かな時だが人にとっては遥けし時だ。元々、良い言葉はないと思っていたが、返す言葉はない。

顔を上げるとかねの柱に映る自分が見えた。驚くまでもなく当然なのに、弱々しく映る自分が、まるで他の者のように見えたのだった。

若き者の音（1）

聖山は鋼や銀に似て、他と紛れもない自分を映して輝く。記憶も力もどんどん遠ざかっていく。きっと自分の歩みが止まってしまっているから。先へ進むそれらに、ついて行けなくなったのだ。

目の前の王も神獣も、かつては古い霊獣であり、西の凶荒に咽ぶ一人の人の子だったはずだ。今、こうしてその姿をこうも変えたのは、彼ら自身が前に進んでいるからだ。ならば、どうだ。自分の姿は変わったか。きっと大いに変わっただろう。しかし、それは前に進んだからではない。本来追いついているべきところより、後ろにいるからだ。否、変わったかもわからない。以前の自分――神獣となる前、暴れるが故、魔獣たちに獄へと繋がれた、一頭の龍はどういう姿をしていただろうか。自分の青鱗は、神獣と化す前はどのような色をしていたのか。

「返す言葉もない。俺はただ浮世を離れようとしているだけなのかもしれん」

嫌だから逃げよう、とは子供のすることだ。わかっている。逃げた先のほうが、よほど辛いこともわかっている。今対峙している状況にいっぱいになっていて、先のことを思いやれないだけだ。だが。

「だが、やはり俺はもう、聖樹の根を枕にして寝れんよ。もはや、己がどうかすら見えていない。弱ったと言われて認めるだけは弱ったのだから。俺は――」

ふと自分の前に影が差し、俯けた顔を上げた。そこには、人の姿になり、手を振りかぶる蓐収の姿があった。布を張るような、高く乾いた音。強かに頬を張られて、シンは座ったまま、突き飛ばされるような形で後ろに肘をついた。

「あなたと言う人は！　……治癒の術がなければ、爪で裂いてやりたいくらいです！」

こちらを思い切り叩いた手をぎゅっと握りしめ、蓐収はそう言っ

た。目にうっすらと涙が浮いているのが見えた。
「……すまない」
「謝らないでください！　あなたは弱ったのではありません。もともとの怯弱(きょうじゃく)が顔を出しているだけのこと、意気地のない姿があらわになっているだけです。あなたは、あなたは――」
鼻をすすり、うっすらと赤い目で、王の後ろに控えた蓐収を見つめる。きっと西の地が前の白虎のままだとしても、今と同じように殴られただろう。小さなため息が聞こえて、王へと視線を戻す。若い王は、呆れ笑いを浮かべていた。
「紫晶のだけで勘弁してやろう。おい、青龍。貴様、初めから誰の意も聞くつもりはなかったな。意を曲げる気なく人の意をはかるとはおかしな話だ。まったく。相談の体(てい)で、断れんような頼みをするとは、大したものだ」
王は足を崩し、胡坐(あぐら)を組み替える。
「悲劇に酔うなよ、青龍。神の身で、安酒に浸るな。さて、とすれば、誰に言われて始めた旅だ？」
元より、まっすぐ天へと向かおうとしていたのだった。それが、こうして四方を巡るには、東王宮での絶え間ない言葉の投げ合いがあった。
「現東王陛下の命だ。破れば、そのまま青龍を続けるように、という約をつけてな。今自分が思うことを、四方の王の前で開けと」
東王宮を飛び出そうとするシンの袖を引き止めた、細い指、白い手、磨き上がった玉のような瞳。答えると、なるほど、と西王は頷く。
「まあ、あの女の計らいも、貴様がそれでは無駄になりそうだ」
そう言って笑い、西王はぽん、と膝を打った。
「まぁ、いい。西の地は王、神獣共に若輩、押しつけられた記憶でしか、過去を知らぬ。俺達が何を言ったところで、貴様は曲がらんな。北へ行け、もともとそのつもりだろうが、北は御柱より過去に知悉(ちしつ)している。貴様が探している、貴様以外に犠牲の出ぬ死に方と

やらもあるかもしれん」
　続いた乾いた笑いに、シンはただ頷く他なかった。続く道は北へ、神獣の中でも最も古参、玄武の治める地へ伸びた。失くした部分の記憶を、北の知は埋めるだろうか。
「すまない」
　頭を下げると、西王は言う。
「おお、もっと謝るといい。うちの神獣を泣かせた分は謝っておけ」
「泣いていません！」
　蓐収が慌てた様子で応え、こちらを見た。
「青龍――句芒殿。あなたはいつか、あの少年にもきちんと話してやるべきです。人の子とはいえ、旅の伴、あなたが弱るのは、彼の心をふさいでしまうでしょう。天の欲した子なのでしょう？」
「そうだったな。あの小僧、天が気にいったとはどういうことだ？　天は人を愛でることなどないだろう。何か目的があるはずだぞ、青龍。言われた通りで構わんが、あの小僧の行く末、心した方がいい。貴様の言う、近頃の天変は俺も思うところがある」
「――承知した。いろいろと、すまない。西王、蓐収」
　そういうと、西王はつまらん時間だった、と吐いた。重ねてすまない、と言って、シンはおもむろに立ち上がった。そういえば、ファンはちゃんともう宿に戻っているだろうか。この部屋でどのくらい時間が経ったかは知れないが、夜もずいぶん更けたはずだ。
「では、時間を取っていただいたことを――」
「待て、青龍。棋戯は出来るか」
　不意の問いにシンは頷いた。随分前の代の王に教わって、共に打った覚えがある。通則が変わっていなければ、まだ出来るだろうが。
「なら、付き合え。つまらん言い合いに今日を終えたくない。官どもは忙しがって、赤子のように見える俺とは遊ぶ暇がないらしいからな」
　立ち去ろうとしたシンの横を通り過ぎ、西王が先に神域の扉を内より叩く。向こう側から、控えの衛士の応えがあって、扉が開かれ

た。
「居室のほうにある。紫晶、茶だ。あまり熱くするなよ」
こちらが立ちつくしていると、西王は振り返り、急かした。
「何をしている、開け放しておくわけにはいかぬ部屋だぞ」
シンは蓐収と共に慌てて部屋を出る。どうすればいいかと、戸惑うこちらを見て、蓐収は小さく微笑んだ。
「お願いします。少しの間だけ」
シンは頷いた。詫びだと思えばいいか、否、詫びとしては足りないだろうが、若い王の退屈を除けるなら好いことだ。通されたのは、王の居室。駒の過不足はないらしい。シンは王の対面の席に静かに座した。
「一万も昔の戦いも、今や盤上にしか残らん」
西王が呟く。
「貴様の王が、魔獣が復活したと言ったとき、俺は西に手のないことに気付いた。西だけではない。どこもそれと戦えるのは、神獣と王くらいだ。その上、西は俺が王となってしまった。なら、少しでも駒が無ければ駄目だろう」
天は軍を排したが、それは恒久に平和だと言われたからだ。しかし、今は違う。確実に、魔獣達は動き出している。ぴしり、と棋戯を打つ小さな音。
「俺は、若い以前に、本当に物を知らん。紫晶もな、大きすぎる神獣の力をこなすにはまだ時間がかかろう。とすると、青龍。いつ死のうが構わんが、お前が抜けた穴が小さいと思うのは、愚かなことだぞ」
小さな灯りに、若い王の顔が照らされる。シンはただ頷いた。言葉として応えるには、胸の内は絡まりすぎている。代わりに、小さな駒が、応えるように鳴った。

白影（1）

夜もだいぶ深くなり、ファンは一座の子供たちに混じってあくびをした。そろそろ宿に戻ろう。随分一座のところでお世話になったから、もしかすると、もう師匠は戻ってやしないだろうか。ファンは、一座の皆にお礼を言って姿勢を直す。

「おれ、そろそろ宿に戻らないと。師匠帰ってきてるかもしれないし」

「お、そうか？　暗いから気をつけろよ、送っていくか？」

ダオレンの申し出に礼を言い、ゆるゆると首を振った。

「大丈夫だよ、街の中だから。あ、でも、つり橋には気をつけるよ」

もう小さな子ではない、留守居もおつかいも充分に出来るのだから。一度起きてからはこちらの膝の上で寝ていたちびをユーリーたちに預け、ファンは立ち上がった。宿は東の離れ山にあるから、戻るには本山町を横断して、つり橋を渡らなければいけない。道は大まかにわかるし、細い道はなかったから、明るい道を選べば戻れるだろう。

「じゃあ、また！　新しい踊り、楽しみにしてるよ」

まかせろ、と応えがあって、ファンは歩き出した。ダオレン達は、神獣の代替わりを新しい舞で祝うために、西都に呼ばれたんだそうだ。実は楽器の引き手たちはここに来るまでにある程度曲を作ってしまったらしい。あとは実際の白虎様に見（まみ）えて、舞と共に細かに揃え直していくという。だけれど、ダオレンの話で白虎様が女神だと聞いて、引き手のにいや達は驚いていた。虎だと知っていたから、かなり雄々しい曲にしたというから、きっと直すところはいっぱいあるのだろう。

人が出歩く時間も過ぎ、夜の道は人通りが少ない。たまに人が通ると、むしろそちらの方が驚くし、少しばかり怖かった。人の声が絶えると、街を包むのは谷を吹き上がる風の音と火を落とせない工

房窯の低く唸るような音だ。たまに混じって虫の声と、夜通しで打っている鎚の音がした。

大通りを跨いで、本山町の東の端。東の離れ山は南に伸びた形をしているから、巽山（そんざん）と言うらしい。衛士のいる大きな吊り橋がそちらへと繋がっていたが、見ると入り口が閉められてしまっていた。衛士もなく灯りも落とされているから、ここを渡ることは出来なさそうだった。王宮の正門と同じことだろうか。ともあれ、他の道を探さなければ。つり橋は他にもいくつかあったはずだ。

町を少し下ると、東への別のつり橋を見つけた。細いつり橋だ。途中で行き交わなきゃならないとしたら大変だ。師匠なら、ならもっと早く渡るべきだ、と言うだろうが、大きいつり橋よりよほど細くて揺れるから、ファンは向こう側に誰かの気配がないかじっと確かめて、そっとわたり始めた。

夜だというのに、谷の風は昼間より温い。半分ほどわたったところで、止せばいいのにふと下を見てしまった。雲に霞んで見えない日中よりも、まったくの闇である夜のほうが谷の深さを感じてしまう。もしかしたら、どこまでも落ちて、獄まで届くのではないか。魔獣達が封じられ、潜むという暗い世界へ。

東も南も、魔獣が現れた。どちらも人の心に付け込んで、その土地に強く爪を立てた。傷ついた人は多い。だから、西の地でそれが起こらないか心配だった。ただ、饕餮（とうてつ）は王宮で封印されていたから、もしかしたら何も起こらないかもしれない。それでも不安はじっとりと背を這うように残る。

師匠は何か感じていないだろうか。そうだ。もしかすると、師匠は魔獣達が動き出したという話をしているのではないか。一万年前に天とはじまりの王達と揃って魔獣を封じたように、今回もきっと四方で協力するはずだ。それをお願いに行ったのだろう。とすると、師匠の旅の目的は、中つ国を繋ぐこと――

「青龍の事が気になるかい？　ファン。どうして旅をしているのか」

温い風と突然の声にファンは、縄を掴みながら慌てて振り返った。

聞き覚えのある声で、思いもよらない人だったから。後ろに立っていたのは、御柱で出逢った少年。

「……ジュジ？」

夜の闇に浮かぶような白い肌。血のような深紅の瞳。腕にはあの時、御柱の社で会ったときにはなかった、不思議な紋様が描かれていた。言葉だろうか？　だが、ファンには見たこともない文字だった。

「どうして、こんなところに……ううん、違う。なんで、ジュジが師匠のことを――」

「知っているよ、君が生まれるずっと前から。ボクが彼を知らないわけがない。彼は……きっと忘れてしまっただろうけど」

優しい微笑みに、あの時感じることのできなかった邪気を乗せて、ジュジは優美に微笑んだ。自ら、救済、と名乗った少年。否、少年の姿をした“何か”だ。ジュジはかつてのシンを知っている。シンがどういう存在であるかも含めて。ならば、訊ねるべきことはたくさんあっても、まず問うべきは。

「ジュジ、君は」

誰だ、何なんだ、と言いかけた言葉を制し、ジュジは面白そうに笑う。

「なんだ、ボクのことが聞きたいのかい？　違うよ、キミが知りたいのはもっと別のことのはずだ。さっき、思っていただろう、キミの師匠がどうして旅をするのかって」

微かにつり橋を揺らし、ジュジはこちらに歩み寄る。同時に、ファンは後ずさりした。つり橋の縄を確かめながら、少年と距離を取る。

「彼はね、青龍を辞めたくて仕方がないんだ。また失うことが怖いから。守れないことが怖いから。だけれど、彼は今もう、天から預かった青龍の力で生きている存在だ。つまりは、わかるね」

深まった笑みとその言葉が示す意に、ファンは戦慄した。シンはずっと――

「死ぬために、旅をしているのさ」
風の音が止まった気がした。シンは、師匠は。ジュジの言葉を嘘だと思えれば、良いのに。信じたくない言葉ほど、頭のどこかが強く肯定する。そうに違いない、と。
ああ、だから、シンは言わなかったのだ。知れば自分は、驚き悲しむだろう。今のように。そして、すぐにでも止めようと思うだろう。旅の先を急かした自分を悔いながら、それでも彼の気を変えようとするだろう。シンもそれを読んでいるから、言わなかったのだ。
「死なずに済めばいいとも思っているけれどね。止めたいかい？ファン」
ファンは顔を上げた。何を言わんとしているのだろう、この少年は。
「まぁ、今のキミにはどうにしても無理だろう。気も力も足りないよ。もっと強くなってくれないと」
「強く……？」
よく考えてね、とジュジは笑う。
「とりあえず、饕餮相手に死んでもらったら困るよ。捕まっても駄目だ。気をつけてね、キミはキミのお父さんに似て優しいから」
優しいから、という言葉に甘いという意を感じて、ファンはハッとした。父の死を知っている。やはりあの場に居合わせたのは、ジュジだったのだ。父の魂を弄んだのは。
「ジュジ！」
「キミはまだ何も知らない。四凶が何故天に刃向かうか、まず、天とは何か」
よく考えてね、とジュジは再び繰り返した。そして、ふわり、と浮かぶように、ジュジはつり橋の縄に飛び乗った。
「また、会いに来るよ。饕餮によろしく。旅一座のみんなにも」
細い体が宙に泳ぐ。ファンはとっさにそれを掴もうとした。掴み損ねた腕の向こう、微笑むその少年の目は、まるでこちらを試しているように光った。

風の音が戻ってくる。ジュジはずっと、見ていたのだ。そして、きっとこれからも見ているだろう。足元から崩れそうになるのを必死でこらえ、ファンはつり橋の終わりへと向き直る。足も手も震えている。

ファンは急いで宿へと戻ったが、シンはまだ戻ってきていなかった。話が長引いているのだろうか。もしあの話が本当なら。ファンはぶんぶんと首を振って、それを打ち消した。

シンが遅いのを宿人へ告げ、夜食を断って寝台へ飛び込む。まるで小さな子供のようだった。見えなくなることを逃げたと思うような。それでもすぐに、眠りの中へもぐってしまいたかったのだ。

うすら寒いのに、じっとりと汗をかいた。ただただ朝が待ち遠しくて仕方がなかった。

若き者の音（2）

遠く明けの音が聞こえてきて、シンははっと顔を上げた。数局打ったら帰ろうと思っていたのが、もう朝になっていたのか。対面の西王もそれに気づいたらしく、ぐっと伸びをして、やめるか、と呟いた。傍で給仕をしながら控えていた蓆収が窓を空けると、冷えた空気が足元を這った。

神域を出でて後、西王は夕餉を居室に運びこませてまで、棋戯を続けた。相手をするシンもあと一局、あと一局と思ううちに酒を出されてそのまま付き合っていたのだった。西王は飲まなかったが、こちらも別段酔うこともないので、棋戯はほぼ休むことなく続いた。腕はそこそこ、打って浅い王と久方ぶりのこちらが丁度つり合って、勝ち負けはほぼ同じ数だったろう。

打つ間、西王は今国として取りかかろうとすることをぽつりぽつりと口にした。何でも黒の国の王とは、頻繁に連絡を取っているらしかった。西には腕の良い技師もそれに取り組む材料も、凶荒以前から揃っている。だが、技術はあってもそれをどう使うかの知識は北の方が格段に有しているのだった。いくつか思案していることがあるが、それを実現するだけの知が欲しいのだという。神域に入ったときに話していたのは、物の輸送に関わることだった。馬よりも早く、場所を問わず、物や人を動かす事が出来ないか、西王はそれを求めている。他にもいくつか、自ら見てきたものから、国を富ますための方策を練っているという。それまでささやかにとはいえ政治に関わっていたシンにとって、西王の策は突飛と言えば突飛だった。だが、確かに実際に見てきた者にしか気付けぬ、困窮の元へと向けられた合理的で実のあるものばかりだ。日中、王宮を離れて出歩くのも、それらの進みを自分の目で確かめるためらしい。

「官共がうるさく言わねばもう少しできるがな」

そう、西王は口惜しげに言ったが、それでも殆どの施策は動いて

いるらしい。
「古い古いと言っても奴らのほうがよほど政(まつりごと)を知っている」
西王の言葉を聞く蓐収が、終始楽しそうに笑んでいたのが印象的だった。そういえば彼女は、それまで人里から離れて獣として静かな生を送っていたはずだ。それが一転、今は最も人間たる者の傍にいる。人の間に死した兄の記憶を持って。棋戯の間にふと思い出し、シンはその微笑を喜ばしく、そして、どこか羨ましく思ったのだった。
部屋の端へと棋盤を退け、西王は立ち上がった。
「夜明かしするつもりはなかったが、まぁいい。棋戯は楽しめたぞ、青龍。長く付き合わせてすまなかったな。あのつまらん話は次にはもう少し面白くしておけよ」
こちらも立ち上がって、蓐収の開けた扉から廊下へと出る。もう既に官が動いているようだった。こちらを見る官の目は、確かにこちらを気にしているようだったが、別段言もなく素知らぬ風で過ぎていった。
「そういえば、西王。蓐収のことをこうして使って、官に何か言われないか」
問うと、西王はふん、と鼻を鳴らして応えた。
「気に入りの女官だと言ってある。まぁ、気付いて何か言う奴もいたが、神をどうだのと理由が下らんから突っ撥ねてやった」
「流石、気鋭の西王陛下は他とは違う」
そう笑って応えると、当然だ、と西王は凛と応えた。
「しばらくこの町にいるつもりでいる。貴下の呼んだ一座と懇意になったものでな、西の新たな舞を見てから発とうと思う」
好きにするがいい、と素っ気なく短い返事が返ってきたが、慣れるとその態度も別段不快ではなかった。夕餉と美酒の礼をいい、シンは大門の方へと足を向けた。
若き王と神獣に見送られて、王宮を出る。ファンは先に寝たとは思うが、きっと心配させたに違いない。目が覚める前に宿へ着けばい

いが、目が覚めたときに居なかったら不安になるだろう。朝鐘が鳴ったとはいえ、山間の都はまだ暗い。町中まで深く立ちこめる霧の間をシンは急ぎ足で過ぎた。

遠ざかる東国の神獣の背を見つめ、蓂収は呟いた。

「兄の記憶を以てしてもまだわからないのです。初めの王を失うことがどれほど大きなことなのか」

傍らの白衣（しらえ）の若者は僅かに首をこちらに向ける。頼もしくも心細くも見えるその背は、時折寂しげに揺れる。そう言う時に振り返って見せる顔は、実際の年よりもずっと幼く見えるのだ。いつも、老巧なる官たちに囲まれながら、擦れたふうに檄を飛ばしている顔とは別人のように見えるのだ。

「考えても仕方ないだろうが」

王の短い応えに、そうですね、と同じように頷いてみせる。しかし。

「私も、貴方を失えばあれだけ弱るのでしょうか。いえ、私は貴方を、必ず失わなければなりません。兄がこれまで王を失ってきたように」

かつての神獣が死んだとて王が絶えたわけでも、まして国が絶えたわけでもない。だから、白虎に課された務めはまだ続いているのだ。いつになるだろう。数年では早い、数十年はあるだろうか。しかし、百年（ももとせ）を待つことなく、その日は必ず訪れるだろう。

まだ歴代の王の聖所には参ることができなかった。兄も死す直前まで、王宮の一角にあるそこには近寄らなかった。否、近寄れなかった。自ら手にかけた者の墓に参るなど、できようはずもない。そちらから風が吹くだけで、何か聞こえやしないかと耳をふさぎたくなる。

「紫晶、お前は弱っている暇などないぞ。俺が死のうがその先も国はある」

沈黙をもって、その言葉に応える。ああ、そうだ。兄は弱りなど

していなかった。ただひたすらに、初王の言葉、それだけを守ろうとしていた。国を守る神として、主に従う獣として。兄が残した記憶の、そこに乗せられた思いはまだ読み解くに時間が必要だ。いずれ兄と同じようになれば、わかるものなのか。

俯いていると、襟首の辺りを掴まれ、ぐいと引き寄せられた。微かに感じた乱暴に、反射的に体がこわばる。引き寄せられるままに額が辿りついたのは、白衣と焼けた首筋が際立つ、鎖骨の上。しなやかな皮膚の下にしっかりとした骨と若い肉と、確かな鼓動があるのを感じた。

「腑抜けてくれるな、紫晶。王権を崇り、この身についた貪婪（たんらん）の呪いもきっとなんとかして見せる。俺は、王という名の囚人（めしうど）にただ成り下がったつもりはないぞ。必ず、必ずなんとかして見せる。だから、安心しろ」

下に向けられたままの頭では、上にある表情を窺いようがなかった。でも、見えないほうが良かった。自分の今の表情も、あまり見られたいものでなかったから。

「必ず、でございますね、陛下。その盟は、必ずや果たしてくださいまし」

ああ、きっと。自分はこの人を失えば、大いに弱るだろう。それを退けて、兄のように絶えまない風雪に耐えていけるのか。青龍を殴ることなど、本来出来ようはずもなかった。神獣でありながら、まだ神獣たることがままならない自分には。

心の内を知ってか知らずか。王は繰り返す、必ず、と。確かなその身を通して、言葉が伝わる。耳に肌に届く鼓動は何を語り得るか。

「だから」

西王が一層、こちらの頭を抱き寄せて、言う。

「だから、お前は俺から離れてくれるな。傍にいてくれ、紫晶」

応えは言葉にならなかった。ただ、頷くように額を胸に寄せるしかできなかったのだ。

解ける朝

微かな物音に、ファンは重たい頭を上げてそちらを見た。シンが帰ってきている。

「起こしたか。まだ寝ててもいいぞ」

申し訳なさそうに笑う師の顔に、安堵と当惑とを同時に覚えた。

「遅くなって悪かったな。心配かけた。……どうした？　寝てないのか」

こちらの顔色を見て、シンが尋ねる。

「少し。色々と考え事をしていて、寝付くのが遅くなったんです」

少し、ばかりではなかった。昨夜のことがずっと心に残って、殆ど眠れなかったのだ。暗闇に溶けていったあの氷の微笑と言葉とが、事あるごと瞬くように戻ってくる。こんな時間まで、シンはどんな話をしてきたのだろう。表情を見る限りは、機嫌は良さそうで、難しい話をしてきたようには見えなかった。あの少年が言ったような中身の話には。ファンはぐっと体を起こし、掛け布団の上に足を出した。

「あ、でも、大丈夫です。師匠は？」

「ん？　俺は何ともないぞ。いや、西王に棋戯（きぎ）に付き合えと言われてな、ずっと打っていたんだ。眠れてはないが、気分はいい」

棋戯、とファンは呟く。話のせいで遅くなったわけではないのか。こちらの呟きに頷いて、シンはぐっと伸びをすると、荷物から手ぬぐいを出した。顔を洗いに行くのだろう。微かに風が吹き込んできて、そちらを見やると窓が僅かにだけ開けてあった。薄く見える朝まだきに、ファンは先ほどまで聞こえていた朝鐘がまだ頭の中で響いているのを感じた。

「ここしばらく怠けていたからな。少し体を動かそうと思うが、一緒にくるか？」

「はい！　お願いします！」

問われて、ファンははきと返事をした。飛び上がるように、寝台から降りて自分の荷物をあさる。荷物の中で絡まっていた手ぬぐいを引っ張り出して、戸口で待つシンの方へ振り返る。

「あの、師匠――」

そこまで言って、ファンは言葉を止めた。口を開くまでは、昨日の話をしようと思っていた。でも、ジュジが現れたことを話せば、同時にシンがこれまで隠してきた、旅の理由をも聞くことになる。もしあの言葉が――死ぬための旅というのが本当なら、答えがどちらでもきっと、わかってしまうだろう。違えばいいと思うほど、確かめるのは躊躇われた。あの出来事ごと胸にしまえば、これまで通り旅は出来る。否、あれが真だったとしても、今知ったところで何もできやしないのなら、今は黙し旅を続けるほかないのだ。

「どうした？」

心配そうに覗き込むシンに、ファンは首を振って応えた。何でもない、と。訝しげながらも、そうか、と応えて、シンは外へと歩き出す。旅が終わったら、シンは東王宮へ帰り、自分はバクのところへ戻る。その間に自分の素養が知れればいい。ぐっと成長して帰られれば上々、そうずっと思ってきた。でも、今胸の中にある予感は、それを上から塗りつぶすように心を覆う。シンのこともそうで、自分のことだってそうだ。今もなおわからないことばかりだ。

水場について、釣瓶から借りた桶に水を移す。結ったまま乱れていた髪を解き、水で頬を張るかのように、顔を洗った。今わからないことを逐一考え始めたら、どこまでも際限なくそれは続くだろう。まるで何もないところに立たされたかのようだった。桶の上から顔を上げて、首にかけていた手ぬぐいで水気を拭う。朝の空気がひやりと、濡れた肌に沁みた。

そうして、思う。自分はまだ何も成長していないのではないか。借りた力で強くなった気になって、歩いた道の長さだけ、色々知った気になっているのではないか。くっ付いて旅をして、シンの目を借りてものを見る。ならば、旅に出る前と何が違うのか――

「ファン！」
シンの声にはっとして、ファンは俯けていた顔を上げた。シンは少し向こうに立っている。何度も呼んでいただろうに、今まで気付かなかった。
「中庭を借りた。……来い」
急いで髪を結い、そちらへ駆けだす。中庭のほぼ中央で、シンは手ぬぐいを植木に掛け、立っていた。言葉はない。ファンはその傍へと駆け寄る。
「すみません、師匠――わっ」
急に掌打が飛んできて、ファンは慌てて受け身をとった。痛みは殆どないが、体重の乗ったそれに構えはすぐに崩されて、よろめきながら後ろへと下がる。自分が気を抜いていたとしたって、今のは不意打ちだ。組手なら向こうが受けるのを確かめて打たなければならないのに。ファンは少しばかり腹が立つのを覚えて、シンの方へと弾かれたように向かう。間合いはこちらの方が狭いが、懐へ飛び込んでしまえば関係ない。先に打たれたのと同じように、ファンも掌底を繰りだした。
突き出した腕を体の横に払い避け、シンがこちらの後ろへ回りこむ。続く後方からの素早い殴打をファンも予期して受け、しばらくそれの応酬が続いた。次いで、額の方へ来た掌打を避けて、しゃがみ込んだファンは、空いていた胸から顎に向けて、少しばかり勢いをつけて、掌を突き返した。終始無言、互いの呼吸をはかるような、短い息の音と鈍い打音だけが辺りに響く。体重を乗せて前へ突きだした腕をシンは避け、それを掴んでファンの前方の方へとぐいと引っ張った。元々前に向けていた体の均衡が崩されてファンは転ぶ時のように前へのめる。前へ転がるだけだ、受け身を取るのは容易いが――
ファンは素早く地面に手をつくと、後ろの方へと避けたシンに向かい、足を延ばすように蹴りだした。シンは構えて受けてはいるが、みしり、と充分な手ごたえが返ってくる。

「随分強くなったな。今のは避けられなかった。が」
シンがこちらの足をとって、ぶん、と横に払う。前後へ意識して取っていた均衡が別に向けられて、ファンは投げられるまま、受け身もそこそこに地面へと打ちつけられた。痛みに呻きながら、ファンは師の方を見あげる。
「一度攻撃したら、次を考えておかなければな。相手も当然返してくる」
打ちつけられて引っ込んだ息を取り戻して返事をすると、シンはひと段落した、とばかりに息をついた。そして、こちらの横に腰を下ろし、口を開く。
「何があった。隠していることがあるなら言え、俺に言いたいこともな」
紺青の瞳がこちらをじっと見つめている。出逢った時から憧れた、精悍な眼差し。ここしばらく見ることのなかった目の光だ。迷いのない輝き。
いや、ないわけがない。ただ、見せないだけだ。幾度も王宮を離れたことを悔いながらも、尚も続ける旅の道に、迷いがないわけがない。ファンは体から、心からすうと力が抜けるのを感じた。秘めている必要などないではないか。
「ずっと、聞こうと思ってたんです。いや、ついこの間までは気にもしなかったことですけど」
尋ねれば良かったのだ。聞かずに秘めているところで、結局悩むことになるのだから。どの道悩むなら、少しでも進んだところで悩めばいい。
「師匠は、何のために旅に出たんですか？」
やはりな、とその表情がすまなさそうに緩む。こちらも小さく笑い返したが、きっと眼の前のシンと同じような、自分に向かって呆れているような、そんな笑みになっただろう。シンは少し間を置いた後、ゆっくりと口を開いた。
「すまないが、まだ、言えない。いや、前まではこれにお前を巻き

込むのが忍びなくて言えなかったんだが、今はここにきてその望みも由も揺れて、自分でもこうとわからないから、言えないんだ。そうだな。やりたいことは変わらないが、ただそれに辿りつく前に、やらなければいけないことができたという感じか」

「その、やりたいこと……が目的ですか？」

問うと、シンは静かに頷いた。

「蓉収に平手で打たれて、西王と棋に向かって、やっと自分が見ていなかったものに、少しばかりだが目をやれたんだ。どうも俺は事に対して及び腰の上に短慮らしい。元が解らぬままに、先の方だけ手を打っても駄目だと気付いた。目的は、その由を知ってから果たす方がいい。……だから、陛下は俺を四方へとやったのだな」

きっと、昨日のことが無ければ、今シンが話していることは、煙を捕まえるような、要領をえないものだっただろう。でも、この口ぶりならおそらく、あれはどういう意図を持って語られたにしても、真実なのだ。ただ、今はもうそれを恐ろしいとは思わない。猶予のためではない。今こうして、向かい合って話が出来たからだ。

シンは続ける。

「お前が生まれた時を知って悪夢から逃れたように、俺も俺が神獣となった時を尋ねなければならない。失くした記憶を取り戻してな。それがきっと、天の言う“剣の故を問え”ということなのだと思う。もう一度、自分の目的を浚い直して、定めたい。きちんと定まったら、その時は必ずお前に話そう」

はい、とファンは頷き、それに応えた。きっとそれを聞くときには今のような気持ちで、きちんと正面から聞くことができるだろう。

「お前は充分、俺の信用に足りているよ。旅の伴に、お前がいて良かった」

これ以上の言葉は必要ない。二人が口を開いたのはほぼ同時、出てきたのも同じ言葉だった。ただ一言、心よりの礼だった。

問うる朝

中庭の端のほうから、陽のあたる場所が増えていく。それに合わせて、空気が少し温んできて、ファンは座り込んだまま手ぬぐいで汗を拭った。

「昨日、王宮からの帰りに、またジュジに会ったんです」

「御柱で会ったという者か。何者だ？」

頷き、そして、首を振る。その問いには、彼も答えなかったから。只人ではないことだけがはっきりしている。

「わかりません。でも、そこで言われたんです。師匠がどうして旅をするか知りたいかって。おれはまだ何も知らないって」

知らないと言うだけで、その口はそれ以上の事を教えてくれなかった。きっと全て知っているだろうに。こちらがそれに悩み苦しむのを楽しむかのように、薄く笑みを浮かべて、ただこちらの動くのを見ている。

「そのものは、俺の旅の理由を知っているのか」

ファンは俯く。確かに聞いたが、今となっては真偽のほどがわからない。こちらが一番に心を揺らすだろうとわかってそう嘘をついたのか、それとも、いつまでも答えに至らないからと口にしたのか。だが、真実は機が来れば、シンがきちんと教えてくれると言った。ならば。

「聞きました。でも、いつか師匠が話してくれるなら、ジュジが言ったことは真偽を確かめる必要なんてない。どっちにしたって、おれがそれで戸惑うのを面白がっているんでしょうから」

シンは、そうか、と言って微笑する。何か言いたげに、口が振れたが零れたのは深い息だけだ。何を言ったか問うても、それの肯定否定はきっとできないだろうから。

「ジュジは何者なんでしょうか。御柱の中で、おれは親切にしてもらったし、直接何かされたこともないんです。おれが一人だった時

はいくらでもあったのに」

「だが、天社の官にしか開かぬ扉を開け、地下でお前に何かしただろう？　会って見たわけではないが、俺にはどうにも魔の者に思える。お前を狙うとしたら、やはりその線が一番強い」

シンは難しい顔で腕組みした。そういえば、そうだ。今、直接ジュジの姿を見たのは自分だけで、それに心のどこかで彼は自分の前にしか現れないのだ、と思った。

やはりジュジは、シンの言うように魔の者なのか。確かに、四凶や天のことを、ああも軽々と口にする。でも、御柱の中、地下の社、そして、昨日橋の上で見た姿はそれぞれ多少なり違っていたけれども、どこに蚩尤の徴を持っていなかったように思う。

「どこまで知っているんでしょうか。ジュジは、おれがこれまで一座といたことも知っていて、それにこの先の――」

そこまで言って、ファンははっとシンの方を見つめた。あの言葉が真なら。

「饕餮（とうてつ）！　師匠、昨日ジュジはおれに“饕餮にやられるな”と言ったんです。もし、それが本当なら、ここにも魔獣が現れるかもしれません！」

そう勢いよく言って、同時に王宮でのことを思い出した。幾重にも封ぜられた、石と化した魔獣を。

「あ、でも、饕餮の体は王宮にあるんですよね。なら、どうやって……」

ファンは腕組みして、じっと地面の小さな草を見つめた。体が無い者に、どうやって捕えられるというのか。代わりにシンが腕を解き、言う。

「確かに、東王宮には饕餮の体があると聞いた。が、西王は意識のほうは取り逃がしたというぞ。相手は四凶だ、体を取られたとて意識が残ればまだ何かやりかねん。神獣も魔獣も、体と意識のその二つに区別はないんだ、どちらも力が凝ってできたものだからな」

「なら、早く知らせないと……」

もしかしたら、饕餮は自分の体を取り返しにこようというのかもしれない。東や南で魔獣が目を覚ましたように、一万年の時を経て動くため、元の体を欲して。シンが頷く。

「そうしよう。西王陛下もまだ動かれはしないだろうから、早い方がいい。……ただ、体を取られれば、力の大部分を取られたに同じだ。出来ることなどそう無いだろう。来るとすれば必ず、何か兆しがあるはず」

互いに頷きあい、二人は長跨についた砂を払って立ち上がった。中庭のほぼ真ん中まで、日向が迫ってきて日が高くなったのがわかる。辺りから、朝餉に粥を炊く匂いと、来た時のような工房からの金を打つ音がする。

浮いた汗を拭い、途中朝餉を頼みつつ、一度再び部屋へ戻る。手ぬぐいをしまい、荷の中から最低限持ち歩く物だけ寄り分けると、ファンは寝台へと腰を下ろした。

「聞いていいのかわからないんですが」

同じように荷を確かめていたシンがこちらへと振り返る。

「どうした。そういえば、まだ何か言われたんじゃないのか」

「おれは、知らなきゃいけないって。四凶がどうして天に刃向かうのか。そして、天はそもそも何なのかって」

シンが眉を寄せた。ファンも言ってから、しまったと思った。天を探ろうなどというのは、不遜極まりないのではないか。否、まず、不遜だと思うところから、天とは何か考えなければいけないのかもしれない。とはいえ、シンがこちらを見て黙ったままで、ファンは慌てて、いえ、と口を濁した。シンは立ち上がり、自分の寝台に腰かける。

「そういえば、そうだ。俺はそれも忘れている。覚えているのは、あの戦いの時には奴らは敵で、おれは神獣になる前奴らに捕えられていた、ということだ」

「捕まって……？」

「ああ。獄にな。で、天が俺を神獣にするとかで、そこから逃がし

た。それで、初王と会って――駄目だ、はっきりとは思いだせん」
ため息をつき、シンは寝台の上で仰向けになった。
「天は……そうだ、俺は天と何か約束したはずだった。初王のことか？　いや、違う。もっと別のことだったはずだ。まったく、嫌な忘れ方だな。斑に記憶が抜けている」
天井を見つめ、シンは自問自答し、呟く。
「そもそも、俺は何故獄に繋がれていた？　いや、俺と四凶が対峙していたのはわかる。永い幽囚に、俺はずっと腹を立てていて……」
「師匠？」
声をかけると、シンはこちらを見て、ふっと笑み崩した。
「すまない。だが、そうだな。その答えは今俺には無い。お前が、もしその答えを探すというのなら、俺も付き合おう」
シンは体を起こす。
「天は、気がつけばそこにいたように思う。それで、魔獣を倒すというのと、善き世を作ろうと言ったのは覚えている。だが、そうだ。国を興す前から俺はいた。なら、天が出て来る前も知っているはずなのだが」
駄目だな、と言ってシンは深く息をつき、また寝台へ倒れ込む。
「まだ時間がかかりそうだな。それとも、北に着けば、王や玄武が何か知っているか」
「黒の国の、ですか」
「ああ。あの国には中つ国全ての知識がある。建国からの記録だけでなく、ともすればこの世の開闢、世界の黎明も知る者がいるかもしれない」
再びシンは起き上がり、こちらを向いて頷く。
「旅の道はまだ長いな。言うまでもないと思うが……ついてきてくれるか」
ファンは頬が緩むのを感じた。それなら、問われるまでもない。
「もちろんです。だって、旅の始めだって、おれが師匠にせがんだんですから」

シンが声を上げて笑う。
「そうだったな。それで一度断ったんだった。それで、お前は飛び出していって」
「それは！　その時は師匠だって、自分が化生だって嘘をついたじゃないですか」
まるで遠い昔のように思える、旅の始めのこと。あの時から、シンはずっとひとつの目的を持ってここまで来た。自分は途中で、父母と育ての親と、自分のことを知ったのだった。
知らないことはまだ多い。だが、あの町にいた頃知らずにいて今知っていることもたくさんある。今わからないことばかりに思うのは、知らないことすら知らなかったものの、その存在を知ったからだ。
「それに、今はお前の旅にも目的があるだろう。そのジュジとかいう者も、天も、お前の存在とその成長を待っている。どちらもおそらく、ただ愛でるのとは違うだろう。心しなければ。そうか、俺は、それを見届けるのも命のうちだったな」
ファンは頷き、じっと掌を見つめた。太極という命、天の懐で生を得たこの身の行く末。何が待っているのだろう。そして、自分はそれにきちんと立ち向かえるのか。シンのほうを見ると、シンは静かに頷いてくれた。大丈夫だ、というように。
戸の向こうで、宿の者が朝餉の支度が出来た、と声を張る。礼を言って、二人は立ち上がる。食べたら、すぐ王宮へ向かおう。とりあえずは今、目の前にあるものから、解いていかなければ。

白蓮亭の話

支度を済ませ王宮へ向かうと、大門の向こうにすでに雲海座の皆がいるのが見えた。そういえば王宮に宿を得たと言っていた、今から荷を詰めて、舞と芸を完成させるのだろう。不思議がっているシンにそう伝えると、成程、といって門の衛士に用向きを伝えにいった。謁見を得るまでは、きっとまた待たされるだろう。門の前で衛士に止められていると、一座のほうから、子供のぐずる声が聞こえる。ちびの声だ。

「駄目ったら、ちび！　勝手に動いちゃ怒られちゃうの！」

それに対するあの猫の少女の声が聞こえて、ファンはそちらを見やった。ちびは少女に抱きあげられてなお、手足を振りまわしてばたばたと暴れている。

「マオシャ！　どうしたの？」

少女に声をかけると、少女はその手を抜けだそうとするちびを必死で捕まえながら、こちらへ来た。周りの衛士達は直に何か言ったりはしないが、煩わしそうな目でそれを見ている。ちびが大人しくならないと、彼らも気を揉むだろう。

「見て回るんだって聞かないの。迷子になったら困るし、お城の人達に迷惑をかけたら、あたしたちいられなくなっちゃう……痛っ」

少女が小さく悲鳴を上げて、その拍子にちびが逃げ出す。返事は待てなかったが、衛士に短く断りを入れて、ファンは門の中へ飛び込んでちびを掴まえた。どうやら少女の手を噛んだらしい、押さえている下がうっすらと赤くなっている。ちびはばたばたと暴れたが、めっ、と小さく叱ると少しばかり大人しくなった。

「ここではちゃんとしてないと駄目だよ、ちび。それに、ひとりで騒いだら危ないからね」

抱き上げたちびの口がへの字に曲がって、じっとこちらを見る。

「ここ、おもしろいのあるの。にいちゃ、さがそう」

面白いもの？　と問い返したが、その前に少女がちびを預かりに来て、門の中へ入りこんだファンも衛士に戻るよう言われた。ちびはもうぐずったりしなかったが、宿房のある奥へと連れられて行く間、むすっとしていた。

「どうした？」

シンが戻ってきて、離れていく二人のほうへ目をやりながら尋ねた。

「ちびが王宮を探検したがったみたいで。でも、きっと王様に怒られちゃいますよね」

「王の耳に入る前に、官たちが咎めるだろう。王宮は広いし、確かに走り回られたら大変だな」

それに、あの饕餮の堂に近づくのも良くないだろう。鍛練を積んだ衛士達すら、あの場所では悪寒がすると言っていたし、面白がって札のひとつでも剥がしたら大変だ。まぁ、ちびからしてみれば、ここまで広大な建物は珍しいだろうから、動き回ってみたくなるのもわかる。

どうやら朝儀が開かれているらしく、門を通され中庭の、池泉に面した亭に通された。亭は八角の建物で、柱と手すり、上のほうに透かし彫りの欄間がある他は、庭を見渡せるよう開けていた。白蓮亭と名があったが、もう大分涼しいからか薄赤くなった丸葉が浮かんでいるだけで花はもう終わってしまったらしい。亭の中心に据えられた卓につき、二人はしばらく庭を眺めた。手入れはされているが、きっとここ数年愛でる者はいなかったのではないかと思うほど、閑散としていた。池の水は風に吹かれて、さざ波を立てる。映る空は秋の透るような青を鱗雲が覆う、明るい曇天だ。

しばらくして、侍女が茶を持ってきて、もてなしてくれた。果物に似た淡い香りの茶で、色も淡い。温かい茶に息をついていると、池に架けられた橋を渡り、向こうから西王と白虎とがやってきた。朝儀を終えて官もそれぞれ仕事に入るのか、官舎から声が聞こえ、人の動くのが解った。西王は亭につくと、それまでいた侍女を下が

らせ、充分に人を払った。
「待たせたな。とはいえ、青龍、どこの王宮とてこの時間は朝儀だろうが、もう少し後でくればいいものを」
颯と椅子に座り、西王は言う。残された茶器で蓉収が手ずから王の分の茶を淹れている。慣れたような手つきに、ファンは昨日蓉収が言っていたことを思い出した。現王が登極するまでは、彼女も獣だったというから、これも随分と練習したのではないかと思った。
「東王宮では、朝寝を趣味にしていたものでな。いや、疾く耳に入れておきたいと思って、昨日のように出掛ける前にと参上した」
今日は出ん、と短く応え、西王は茶器にゆっくりと口をつけた。おそるおそる、という感じで、少しすすって再びそれを置く。
「で、今日は何の用だ」
「弟子が、ファンが太極だという話をしたが、昨日、妙なことを聞いたというのでな。それがどうも、饕餮に関わるらしい」
蓉収の顔がさっと曇ったが、西王はなお平然として話の続きを促した。
「ここに来る前に御柱に寄ったのだが、それより天とも魔ともつかぬ者に付けられているようだ。それが、昨日現れて、近いうちに饕餮が出るというようなことを言ったらしい」
シンの言葉を聞いて、西王がこちらに鋭い視線を向けた。
「本当か、小僧」
「は、はい！」
上ずりかけながらも答えると、西王はふん、と鼻を鳴らして応えた。
「小僧の言葉に嘘がないとして、そのよくわからん者の言うことを鵜呑みにするのもな」
ずず、と茶をすする音。横で温まった茶器を手で包んで、蓉収が俯けていた顔を上げた。
「……陛下」
「わかっている。そういう話なら何の備えもしないわけにはいかんが、いくら近くとはいえ“饕餮が来る”などというのは、今に限っ

た話ではない。あれがここにある限り、奴はいつだろうとここにくる。来るだろう、というほうが常だ」

「……どうして、饕餮の体を置いておくんですか？」

思わず尋ねていて、ファンは慌てて口をつぐんだ。ほんの少し嫌味に笑みを浮かべながら、西王はこちらを見た。

「黙っている者を置いておいたところで、茶がもったいないだけだ。小僧、言いたいことは言え」

ファンは閉じていた口を少し緩めた。西王の笑みは、きっとこういう言い方、態度が彼の常ゆえなのだろう。再び、同じこと尋ねると、西王は空になった茶器を蓐収のほうにやって答える。蓐収は王のものと同じく空になっていたシンの茶器を寄せて茶をついでいる。

「あれを見たのか」

「……はい。あの石の像は本物なんですよね。邪気も出ているみたいでした」

新旧問わず幾重にも封印のかけられた堂とその中身。さっき西王は、饕餮が来るとしたら体がここにある故だと言った。饕餮は体を取り返そうと、ここにやってくるのだ。なら、その危険を何故、代々の王達は残してきたのか。王宮の一角、自らの懐とも言えるところに。

「小僧、饕餮という怪物がどういうものか知っているか？」

その問いには、ファンは首を振った。元より、ファンの認識は、四凶と言えば天に背いて人を襲ってくるもの、くらいでしかない。

「饕餮は欲の権化だ。全ての欲の固まったのが力を得たのが饕餮と言っていい。全てを欲し、全てを抱え得ようとする」

過去の王の記憶だが、と置いて西王は続ける。

「西の初王は、戦いの末に饕餮の体をああして封じることに成功した。すぐさま砕くつもりだったようだがな。思いとどまった。理由を知るか、青龍」

注がれたものを飲んでいたシンが、いや、と首を振る。

「止めた覚えはうっすらとあるが」

「初王があれを残したのはな。西が他方に比べて、恐ろしく貧しい土地であったからだ。最も人の好まぬ土地を預けられて、西王はあえてあれを残した。――饕餮の身は富を呼ぶのだ」

西王はふうと息をつく。その目にあの魔獣の目と同じ向きを、僅かに、ほんの僅かに感じながら、ファンは西王の言葉に耳を傾けた。

貪婪の呪

饕餮（とうてつ）の体は、富を呼ぶ。そう言って、西王はこちらを見た。ほんの少しばかり、得意げな顔で。

「人の身で、魔獣を御そうというか」

シンは湯飲みを置き、静かな口調で言う。

「おい、青龍。それではまるで、奴らの味方のようだぞ」

西王は笑うが、目だけはしかとシンを見ていた。

「御せていないから、この惨状だろうが。とはいえ、領分を超えてでも成さねばならぬと、うちの初代は腹を決めた。先代の白虎もそれを飲んだぞ」

西王はふうと息をつく。

「この地は、貧しい。ここで生まれて、他所を見た俺がいうのだ」

ファンはその言葉に、これまでの道を思い出す。確かに、草木は乏しかったが、それは凶荒のためではないのか。それに西は良いかねが取れると聞くのに。商いとて、他所の商人よりも上手いし、西の隊商たちは野盗も恐れるほど屈強だ。

こちらの考えを読むように、西王はこちらを見て、にっと笑う。

「今、この国を潤す富は、探せばどこの地にもあるものだ。それを見つける、運というかな。富に対する鼻の良さをあれは与えるのだ。今、西が技の国と言われるのも、それを満たす資材があってこそ。欲というのものは、物を呼び、技を育てる。国が繁栄するには、どうしても必要だ。あれがなければ、凶荒など無くても西は吹けば倒れるほどに困窮したかもしれん。代わりに強い律法を立ててでも、初王は欲の元手を残したのだ」

良いかねも、熟練の技師たちも、老獪（ろうかい）な商人たちも、皆欲のなせる業、そう西王は苦笑じみた笑みを浮かべて、茶をすすった。

「まぁ、欲だけの力とは言わん。一万年だぞ、長い時だ。民はそれに流されず、各々厳しい掟を課して、自らを保ってきた。日ごろの

節制あってこそ、この二十年、西は乗り切れたようなものだ。職人たちの技の継ぎようも時には酷なもので、牙?(がかい)の連中の狡(こす)いやり方にも良心はある。西は義の心で己を律することで国を保ってきた」

なるほど、ファンは思う。時々鋭く感じる西の人達の言動も、自他ともに律するが故のものなのか。そして、仕事をする誰にも自負があり、誇りがある。

「だから、饕餮の影響を受けずに、国は富んできたんですね。確かに、饕餮の心がいつ来るかってのは心配ですけど……」

「まだ実害がないと思うか? 小僧」

「えっ?」

聞き返し、西王と白虎の顔を見た。西王は皮肉じみた笑みを、反対に白虎は目を伏せ、悲しそうな顔をしていた。そして、シンの顔を見る。シンの表情は険しく、無言で、西王から話を聞くようにと促している。

「その代償こそ、西の凶荒の原因よ」

西王は身を乗り出し、こちらに指を差す。知っているか、良く聞け、と言わんばかりに。その眼が、ぎらり、と光ったような気がした。

「饕餮の欲が、民が律せる程度のもので済むわけ無いだろうが。“どこか”がそれを引き受けているのだ」

「まさか」

呟くと、目の前の白衣(しらえ)の王は笑みを深める。

「貪婪(たんらん)の呪(じゅ)と言ってな、王はあれの強欲をもっとも受ける。王は国を統べるもの、欲が過ぎれば一転して国を滅ぼす。凶荒ほどではないにしろ、欲に溺れ国を傾けた王は、過去何人もいるぞ。その王どもの末路の記憶も、俺の中にある」

末路、とファンは繰り返す。王とは、善なる獣人達の頂点であって、それならば人の中でも、もっとも善きものであるはずだ。天が認め、神獣が選んだ、優れた者だ。だから、今までファンは無条件に、彼らは無上の幸福を手にしているか、それがその魂の先に待っ

ているものだと思っていた。それが、末路、と言われねばならないような死を迎えたというのか。

「欲深の王がどれだけ民を苦しめようとも、王宮にいて神獣の加護を受ける間は死なぬ。貪婪の呪は王の身を病みやしないから、放っておけば寿命まで、王はその強欲の狂乱に置かれることになる。そうとなれば、すべきことは一つだ」

白虎が唇を噛むのを見てとって、ファンはその言葉の意味することを察した。そして、どうして先の白虎が死に至ったのかも。長い長い時の、一つの結果があふれ出たのが西の地なのだ。

「必要なら、全ての王の最期がどうだったか教えてやろうか」

「陛下！」

白虎が悲鳴にも似た声を上げて、それを制した。ファンも首を振り、王の底深い目に潜む、鋭い光から目を離す。その光は、西の王達が王権と共に継いできた、国の闇そのものではないか。

「“王に狂変の兆し有るとき、白虎は何を持ってしても、それを誅せよ”　それが、先代の白虎に、初代の王の命じた、ただ一つの命だ。その命の中の王には当然、自分自身を含めてな。……知っているか、小僧。それを命じた時初代は、お前くらいの歳のまだ破瓜も迎えぬ小娘だった。それが、易々とは順わぬ先代白虎、つまりは無双の武と揺るがぬ義勇を誇った、紫晶の兄に頭を垂れさせ、頷かせたのだ」

自分と同じくらいの女の子が大戦を乗り越え、倒した魔獣を国のために残し、自分を含めた王に、酷な宿命を負わせたのだ。すべては国を栄えさせるため、民に安住の地を、豊かな暮らしを与えるために。そして、一方が貧すれば影響を受けるのがこの国なのだから、それは中つ国全てを慮っての決断だといえるだろう。ならば、白の王とは――

「西の王は、国の為に与えられる贄よ。豪奢な檻に入れられた囚人よ。西は当然、他方も、その向きの多寡はあろうが、およそそうだろうな。長命の王の出ないのは、王自身の為でもあるだろう」

一人が長く苦しまずに済むように。そうか、と納得しそうになって、ファンはふと思いとどまった。病むのが短くとも、それが短命な人の寿命のうちにあれば、結局長き苦しみではないか。それに苦しい時ほど、時は長く感じるものだ。

ふと、横に目をやって、白虎の辛そうな表情に気付いた。血が出そうに噛みしめた唇と、痛みに耐えるときのような細められた眼に。先代の白虎が負ってきた命を、これからはこの人が耐えねばならないのか。

「王達は、揃って国の色を着る。民が慶弔の時にそれを着るならば、きっと王の服は死装束だ。いつとて、国の為に死ねよとて、纏わされる重責そのものだ。俺はそれを覚悟して着ている。たとえ、この先神獣に殺されようとも、その前に死のうともだ」

乗り出していた身を椅子の背に預け、西王はふう、と息をつく。初代の王が自分と変わらないなら、今目の前のこの王とて、大して違いはない。

「とはいえ、見てわかるだろう、俺は若い。そして、ついこの間まで国というものに、苦しめられ恨んできた。それがいきなり国を保てと言われて、御意のままにとはいかん。目の前に死をつきつけられて、平然としていられるほど俺は老いてはない。あがいてやろう。国を保って、その先、他の国に自慢してやるまではな」

なあ紫晶、と西王は湯飲みを差し出して、言う。結ばれていた唇が、僅かに緩んでほんの少しだけ笑みを作る。茶を注がれた王は、湯が充分に冷めたからだろう、それをぐいと飲み干し、舌打ちして椅子の背にもたれかかった。

「何の話をしているんだ、俺は。……饕餮が来る、という話だったな。青龍」

「ああ、注意されよ、若き王。きっと饕餮ごとき、貴下が苦にすることはなかろうが」

シンは確と西王を見つめ、頷いた。当然だ、と西王は応えて立ち上がる。

「俺はまだ、仕事がある。旅に遊べる貴様らと違うからな。用が済んだら、すぐ出ていけ」
失礼した、とシンが立ち上がり、ついてファンも慌てて立ち上がった。
「おいとまする。では、今の件重々留意されよ」
シンが少し高くなっている亭の石段を下りて言う。ファンも椅子を戻し、王と白虎に礼をすると、それについて駆けだした。
「そうだ、小僧！」
不意に呼びとめられて、ファンは振り返る。
「さっきの話、得意げに余所で話す事はまかりならんぞ」
「はい！」
ファンは、しっかりと返事をし、再びその足を進めた。

力

王宮を出て、再び宿へ引く。水盆鏡を借りてそれぞれに話をすることになり、シンが話をしている間、ファンは宿の中庭で、朝の組み手をさらうことにした。水盆鏡での会話は、どれだけ気を操れるかによるから、この旅で獣化を覚えた自分はまだそれほど長く話していられない。逆に、シンは操気にも年季がいっているから、きっとしばらく話しているだろう。

シンが水盆鏡を使おうとして、何か言いたげにこちらを向いたのを見て、慌てて外に出たのだ。東王へだと言っていたから、この先の旅の話や、西王と白虎と話をしたことを話すのだろう。国の関わる用向きならば、自分が聞くのは確かに分が違う。だが、きっとそれならばはっきりそう言うはずのシンが何も言わずにいたということはきっと。この前呼び捨てにしたその人との話を聞かれるのも、話している自分も見られるのに気恥かしく思ったのだろう。ファンは小さく笑う。そういう師匠を見てみたいとも思ったけれど、こちらが立ち上がると、用が済んだら呼ぶ、と外に出されてしまった。その分、それまでは集中してやれるか。

充分に体をほぐして、今朝の動きを思い出す。相手の意表を衝くこと、先まで考えて動くこと。師が相手だと仮定して、頭の中で一つずつ反復しながら、一通りさらう。強くならないと。そうジュジは言い、それ以前に、御柱の父母の墓前で自分はそう誓った。体はかなり丈夫になったし、きっと東の町にいた頃の自分では、今の自分の相手にならないだろう。

でも、きっと、皆が言う強くなれというのは、きっとそういうことではない。鍛えられる身体の内に収まった、この意思や心に向けられたものなのだ。国を見て回ること。そして、知ること。そこから自分が何かを得て、得たものがまた自分になる。きっと、求められているのはそういうことなのだ。

西王は、自らの目で世界を見ろ、と言った。目で見るだけなら、とうにそれは為されているけれど、その言葉の意味するのは、見た先に覚える意思が独自のものたれ、ということだろうと思う。自らの意を持て、ということ。諾々とした意ではならぬ、ということ。つきだした拳をぴしりと空に張り、ファンは深く息をついた。

強いとは、そういうことなんだろうか。頑なたることが、強いということなんだろうか。迷うことは、弱いということなんだろうか。問いばかりがあって、ファンは拳を静かに下ろした。風が吹いて、首のあたりの汗を冷やした。

「ファン！　もういいぞ、いけるか？」

シンの声がして、ファンはそちらを見あげた。中庭に面した窓だ。返事をして、庭木に投げていた手ぬぐいを取る。そういえば、何を話すかまとめてなかった。それに、話をするにはまず獣化できていないと駄目だ。

身の内を探りながら、中庭を出ようとしてふと、ファンは足を止めた。いつも組み手と言えば、自分素のままでやっていたが、もしこれが獣化した手足だったらどうなるのだろう。思い立ち、獣化の予行、と手足を龍化させた。やはり、獣化している時は、普段と比べ物にならないほど力が漲る。ほんの一回だけ。そう思ってファンは中庭の空いたほうへと空を蹴った。

微かな空を切る音、だけと思っていたファンの耳に、突風を押し詰めたような鋭い風の音が届いた。そして、庭木の葉がざわざわ鳴る。

「おい、どうした、ファン――」

来ないのを訝しんだシンが、窓から乗り出してこちらを見下ろした。龍化した足を下げ損ねたまま、ファンは庭木を指差した。ざん、と音をたてて、間合いの何倍も先のその太い枝が落ちる。その向こうで見える壁の違和は、もしかすると亀裂か。シンはそれと、唖然と立ち尽くしているだろうこちらを見て、ため息交じりに目を覆った。

「早く来い、ファン。それは、俺も一緒に謝ってやるから」
ファンは逃げるように部屋へと向かい、もちろんその後、こってりと叱られた。

町へ出て、観光がてら買い出しに出た。魔獣への警戒は解けないが、一週の後という雲海座の演目まで、ずいぶんと時間が出来た。買い出しと言っても、渡のある町で大抵のものは揃えてしまったし、買い足すと言っても食糧くらいだ。

あの後、落としてしまった庭木の枝と壁のことを、弁償を含めて宿の主人に謝った。

「獣化していれば、普段より力があることはわかっていただろうに」

シンが歩きながら言う。叱られている時にも言われて、これを聞くのは何度目かだ。ファンは何十回目かのすみませんで応えて、その横でうなだれた。

「いや、獣化して力を使ってみたいというのはわからんでもない。近々、させてやろうと思っていたんだが、色々たてこんだからな。……俺の力だぞ、あれだけで済んでよかったな。下手すれば宿が消えた」

その言葉に背筋を強張らせながら、ファンは消え入りそうな声で返事をした。シンの力が尋常でないのは知っていたが、まさか借りうけているだけの自分で、ああもなるとは思わなかったのだ。

説教のあとで久方ぶりに話した先生は、もう西の都にいることに驚き、背が伸びたことを喜んでくれた。そして、今さっき怒ったばかりのことを話して、同じように叱られたのだった。きちんと師がいるのだから、その指導の中で成長しなさい、と。見ていないところで勝手をすれば、どちらにもよくないのだ、と諭された。そして、獣化してでの会話がそろそろ怪しくなってきた、と思う頃、やっぱり先生はそれに気付いて、怪我のないようにと優しく笑ってくれたのだった。

「さてな。そうだな、時間がある。一度、都の外に出るか？　それ

なら、さっきの続きをさせてやれるが」
　是非に、と思う心の内のどこかに、さっきので充分懲りたと思うところがあって、ファンは返事をし損ねた。シンや朱雀から借り受けている力は、御柱での一件のように、時としてファンの意の外で強力にこの身を守ったが、使おうとしたさっきまで、それがああも強いものだと思わなかった。王でもない身には、強い力だ。それとも、太極というのは、これら御せるようになることすら、そのうちにあるのだろうか。
「どうする。それとも今日は凝りたか？　それでも、いずれは教えるぞ」
　シンの問いに、どうしようか、と答えあぐねていると、その眼の前を見覚えある人が走り抜けた。一座のにいや達だ。向こうもこちらに気づいたらしく、ひどく慌てた様子で駆け寄ってきた。二人は、それまでの話を一度置き、そちらに耳をやる。
「シンさん、ファン！　丁度いいところに！」
「どうした、何があった」
　息を切らし、こちらに呼びかけたにいやは、息を整える間もなくそれにその問いに応えた。
「ちびがいなくなったんだ！　今、総出で探してる。王宮と、もしかしたら町に行ったんじゃないかって。二人は、どこかで見てないか？」
　ファンが首を振ると、にいやはやっぱりか、と肩を落とした。
「王宮の中も探してるんだけどさ。町に出て――もし、谷に落ちでもしてたら」
　その言葉に、二人は顔を見合わせ、そして、頷いた。
「手伝おう。手は多い方がいい。いずれにせよ、急いだ方がいいな」
　ファン、と呼ぶ声に頷き、にいやに揃って、探索に加わる。シンはそこで別れ、別の方へと走り出す。小さい子が歩いていれば目立つはずだ。きっと、見た人がいるだろう。ひどく慌て、疲れた様子のにいやを励まし、ファンはまず近くの人へと聞き込みを始めた。

結界と、堂の

日暮れが近い。シンと分かれ、一座のにいやと共にあちこちを探しまわったが、本山を含め、いくつかある離れ山を巡ってもちびは見つからなかった。大きな吊り橋を渡れば衛士が見ているはずだが、それもない。大通りまで出ると、別の方から見て回っていたシンと落ちあった。やはり見ていないという。

「王宮から居なくなったのか？」

続々と集まってくる一座の若手たちに、シンが尋ねる。この人数でここまで探したのだ、町の中にはいないのかもしれない。にいや達は顔を合わせ、頷く。

「昼過ぎに演目の練習に取りかかって、昼寝してた年少連中がちびがいないって言いだしたんだ。寝かしつけるまではあいつらと一緒だったから、探し始めた頃ならそう遠くへ行っていないはずだったんだけど」

晩鐘が町を包みこみ、薄い橙色が空を染める。谷の外へ伸びる吊り橋へは行っていないと聞いたから、町の外にはいないはず。ならば、あとはどこが残るだろうか。

「少なくとも泣けば誰か気付きそうですけど」

ファンは鐘の中の、町の音に耳を澄ます。誰だとしても、子供が泣いてやしないか。しかし、聞こえるのは来た時と変わらぬ、都の人々の生活ばかりだ。一様に俯いて考えていると、馬番のにいやが顔を上げ、口を開いた。

「とりあえず、王宮に戻ろうぜ。俺らはずっと町の中にいたわけだし、もしかしたら見つけたけど連絡が無いだけかもしれないぞ」

そうだな、と相槌があって、皆は頷きあう。

「座長ならすぐ見つけられそうなものだがな」

シンが呟き、にいや達は一層に、そうだ、と声を合わせた。

「そうだよな、ダオレンはにおいはするから、近くにいると思うっ

て言ってたんだ、案外もう戻ってるかもしれないよな」
ならば、門の前で集まっているのも意味がない。皆、王宮の中に戻ることになった。大門の衛士達が、入るなら入れと急かすようにこちらをじっと見つめていたこともある。ちゃんと帰っているだろうか。そう考えると、何故か吊り橋から眺めた谷の深さを思った。大丈夫そうだと宿に帰ろうとしたシンに頼み、見つかったかどうかだけ確かめようと、ファンは彼らについて行くことにした。
門を通ってすぐ、後ろで大扉の締められる低い音がした。夜が来る。一人で夜を迎える不安は耐えがたいものだ。異郷ならば尚更。そう思って、ファンはふとユーリーがしていた話を思い出した。もしかしたら都にはちびの家族がいるかもしれないと言っていた。とすると、家族が一人で歩いているちびを見つけて、連れていったとも思えた。
王宮に残っていた仲間に、状況を聞いたにいやが声をあげる。駆け寄って聞いてみると、王宮の中でもまだ見つかっていないという。話を聞いていると、奥からダオレンがやってきた。王宮の衛士に、何か話していたようだった。こちらに気付くと、ダオレンは、ほんの少しだけ笑みを浮かべた。
「ファンも探してくれてたのか、すまねぇ、ありがとな」
「いえ。ダオレンの鼻でも、見つかりませんか？」
礼の言葉に応えて、ファンは問うた。狼の鼻ならば、仲間の居場所がわからないか。ダオレンは鼻をひくつかせると、困った顔をして言う。
「ちっとはにおいが残ってるんだが……妙に鼻が利かねぇ。いつもなら、歩いたあとを充分追えるんだがよ。ただ、王宮から出てねぇはずだ」
王宮にいるならば。昼間会った時、ちびはここに面白いものがあると思っていた。何か、他とは違う面白いものが。夜に先駆けたぬるい風が吹いて、ファンは自分の嫌な予感がすべて繋がったように感じた。きっと、いるに違いない、あの場所に。今ならばきっと。

「もしかしたら……！」

もう一度王宮内を回ろうと話す皆の間をすり抜け、ファンは駆けだした。ダオレンが呼びとめ、場所を問う声がしたが、早く着こうと思う気ばかり急いて、応えられなかった。夕闇がここを覆う前に早く。駆けだしてすぐ、こちらを追って、誰かが走ってくるのがわかった。

向かうのは、王宮の中でただ一つ禍々しく建つ小さな堂。昨日の覚えを頼りに、ファンは王宮のいくつもある建物の角を曲がった。それらの陰になっている堂は一足早い夜を纏いながら、まるで生きているもののようにそこにあった。そして。

「ちび！」

堂の前に立つ小さい影にファンは呼びかけた。やはり、いた。ならば、封は何も変わっていないだろうか、札が剥がれたり、綱が抜かれたりしていないか。ファンは堂を注意深く見ながら、幼い子を後ろから抱き上げた。

「大丈夫？　ちび。何も、何もしてない？」

泣きもせず、怪我のないのを確かめて、こちら向きに抱き直す。じっとこちらを見る瞳。にいちゃ、と応えがあって、そして、ちびは今までに見たこともない顔で、にぃっと笑ったのだった。

「こっちを何とかしようと思ったが、そっちが独りで来るたぁな。――身体は後回しだ！　貰ったぞ、太極！　俺様のものだ！」

その目は堂の中の、獣に似て。饕餮は、その意識はもうここへ来ていたのだ。招かれた客の中に、招かれざる客が混ざっていたのだ。低い声に驚き、手を離す間もなく、ざらりと音をたてて現れた暗い靄に、ファンはふっと意識を失った。

『ファン！』

闇に溶けた思考の中、温かく優しい声がこちらを呼んだのに気付いた。ああ、あの声は。玻璃の砕けるような高く清浄な音をたて、身体の中を光が駆けた。

暗転は急激に解け、動かない身体に対して、音だけはしっかりと

聞こえた。まず聞こえたのは、舌打ちとあの低い声。
「何だ！　何が起きた？　くそ！　どっちにも結界なんぞ掛けやがって、くそ！　なら、どっちも壊して手に入れてやらぁ！」
苛立ちに吼えて、小さな足音が遠ざかっていく。いけない、止めなくては。そう思っても、身体がまだ動かなかった。ちびは、ちびではない。封を掛けられた己の体も、手に入れようとしたこちらの体も、手に入らずに怒り狂う魔獣だ。止めなくては――
「キミのお母さんに感謝だね、ファン」
少年の声に、ファンは身じろぎも、声を上げることもできなかった。白い、闇夜へと消えた、あの少年。
「だから言ったのに。捕まってもいけないって。今回は結界があったけど、人の忠告は聞かないと、ファン」
――結界。この身に掛けられ、魔獣の侵を弾き返したそれ。そして、あの声は。
「母さん……？」
絞り出すように、やっと出た声にジュジは小さく笑う。
「もうお母さんに助けを求めちゃあ駄目だよ、大きいんだから。でも、まぁそれが駄目でもと思って来たけど、結局ボクの助けはいらなかったね」
「助け？」
ささめくような笑いだけが返ってきて、ファンは未だに明けぬ視界に、動かぬ身体に苛立った。早く、早く伝えに行かなければ。強からぬ自分には、どうにもならないこの事態を。
「そうだね。――でも、まだ眠っていて。誰かが君を起こすまでは」
ぐらりと目の前の闇が揺らぎ、ファンは再びそこに落ちていった。

夢のように、暗闇に明けて見えたのは、自分の後を追いながらも、見失って辺りを見回すダオレンと、そこに歩み寄る小さな影。
「ちび！　どこにいたんだ、やっと……」
「この際てめーでも構わねぇ、無欲のくそ野郎。その体、俺様が貰

った！」

溢れだす暗い靄は一度、石の像と同じ形の巨大な影を形づくって漂う。目を見開くダオレンと、魔獣の嗤い声。辺りに夜をまき散らしながら、ダオレンの体に吸い込まれていった。

「ファン！　しっかりしろ、ファン！」
目を開けると、師匠の顔があった。肩を揺すられていて、視界がゆらゆらと振れる。見えるのは夕闇の迫る空、外だ。どうして外で寝ていたのだろう。
そうぼんやり思ったところで、記憶が全て戻ってきた。慌てて跳ね起きて、辺りを見回す。どの姿もない。
「ちびが、饕餮（とうてつ）が！　あと、ジュジが、母さんのが」
「落ちつけ！　……饕餮が居たのか」
激しく鼓動が鳴る。しっかりと肩を押さえられて、ファンは短く息をしながら頷いた。外で待っているはずのシンがいる。周りにいる一座のにいや達が呼んでくれたのか。
「ちびに、饕餮が憑いていたんです。で、おれ、乗っ取られそうになって、母さんの結界が働いて。ジュジが来て、また意識が飛んで――」
記憶を辿りながら、一つずつそこまで上げて、ファンは再び辺りを見回し、声を上げた。
「ちびは……ダオレンは！」
後ろのにいや達に尋ねたが、にいや達は顔を見合わせ、そして、首を振った。
「真っ先にファンを追っていったと思うんだけど、俺達がここに来た時にはいなかったよ。で、お前が倒れてるから、シンさん呼びに行ったんだけど」
「ああ、その時にも、ここにまた来る時にもいなかった」
あの夢が現実のものなら。急がなければ、早くしなければ。大丈夫か、と問うシンに応えて頷き、ファンは立ち上がった。何の騒ぎか、と衛士達が集まってきていた。遠巻きに他の官の姿もある。
「早く捜さないと！」

駆けだそうとした腕を掴まれ、ファンは後ろに倒れそうになる。
シンは、前に言ったろう、と厳しい目でこちらを見て、言う。
「ああ、饕餮が来たというなら、陛下に伝えなければ。来い、ファン。俺から離れるな」
王宮の方へ向かおうとすると、にいや達に呼び止められた。
「なぁ、ちびが憑かれてるってどういうことなんだ、ダオレンはどこへ」
その問いを掻き消して、子供の泣き声が辺りに響いた。ちびの声だ、少し門の方へ戻ったところか。一時辺りに広がった緊張を破るように、二人は互いに頷き、走りだした。
暗がりで立ち尽くす、小さな影。駆け寄ると、ちびは怯えたようにこちらを見て黙ったが、すぐまた泣きだした。
「かかぁ……ととぉ」
今まで一度も呼ばなかった父母を探して、けたたましく声を上げる。
「これは、たぶん……」
まずシンが駆け寄って抱き上げたが、ファンが見てももうその目の奥にあの魔獣の影を見つけることはできなかった。まず、これまでシンには絶対に抱かれなかったちびが、泣き続けているとはいえ抱きあげられているのだ。念のためにシンが獣化した手で背中の辺りに触れてみるが、祓い出されるものはなかった。
「もう、この子は大丈夫だ。饕餮はいない。……とすると」
宿舎のある方から、声を聞きつけてユーリー達が駆けてきた。シンは泣き続けるちびを預け、座長を見たか、と問うた。やはりユーリーも首を振った。
「急いだ方がいい。座長は力があるからな。そして、奴もおそらくそれを知っている」
心配そうな一座の若者たちを伴って、宮殿の方に向かう。途中、衛士に何ごとか止められたが、シンが、急を要する、と言ってそこを押し通った。すぐに武官が現れたが、正体を知る僅かな者と、そ

の伝えなければならないその内容に、さらに奥へと通される。本殿の前に出た頃には、辺りはすっかり夜になっていた。満月の頃合いだから明るいはずだが、鋭い山の向こうに隠れて辺りは暗い。

「またお前たちか、何ごとだ！」

本殿に駆けこむ前に、篝火の焚かれた殿中から、白い衣の青年が出て来る。気にいりの女官を伴い、こちらをじっと見て、そして、成程と笑みを浮かべた。

「もう来たのか。否、来ていたのだな。立て込んできたものだ」

紫晶、と傍らの女性に呼びかけ、西王は辺りを見回す。

「来ます、陛下。お下がりください」

女性――白虎は遠く東の空を見つめて、そう低く呟いた。同時に響き渡る、狼の遠吠え。野のものとは明らかに異なる、力強く、そして、今は禍々しい気に満ちた声だった。ファンは、魔獣の気に身体を強張らせた。悪意と害意とを押し詰めたような、圧倒的で強力な邪気だ。それに対して、傍らのシンと白虎とが、自身の気に身を包むのがわかった。二人の気は差異はあれ、清浄な気が辺りの空気ごと、饕餮のそれから人を守る。炯々（けいけい）とこちらを照らしだす、美しくも恐ろしい月だった。

「居たな。やはり、そうか」

シンが呟く。月と山の陰に、ぽつんと出た黒い点。目を凝らすとそれが異形の者であると気付いた。再びの遠吠えに、にいや達の呼吸が、不揃いに短くなるのがわかった。ダオレンの体は、とられてしまったのだ。

集まってきた衛士や官をも巻き込んで、緊張する空気を開いて、西王が声を張る。

「シーヤー！　イーホウ！」

呼びかけに応じて、武官と文官が一人ずつ、王の前に膝を屈し、平伏する。

「シーヤー、獣化できる武官を集め、支度させろ。身体を取る魔獣だ、一瞬たりとも気を抜くな」

は、と短い声がして、武官が礼の後に、左手の官舎の方へと駆けていく。次いで、王は残った文官にも令をだす。
「戒厳令だ、すぐに布達を出せ。風水の強化も急げよ。面倒だ、家から出るなと言え」
そう言って、自身は宮殿へと踵を返す。文官が官舎へと走っていく。
「お待ちください！」
一座のにいやが声を張り上げ、段を上がろうとする西王の後ろで、叩頭した。
「一座の者です。我々には、何が起きているかわかりません、皆が魔獣と指すあの者は、我らの座長のように思うのです」
西王がぴたりと足を止め、ため息交じりに振り返った。
「黙っていればよかろうに。……ああ、そうだな。あれはお前らのところの座長だ。魔獣に身体を取られた、な」
顔を上げたにいやの顔が篝火にわかるほどに青ざめる。しばらくの沈黙の後、にいやは再び深く叩頭した。それに合わせて、一座の他の若手も一斉にひれ伏した。
「お願いです。悪しき者に身体を取られたとて、それは座長の本意ではございません。どうか、どうかご容赦を！」
武官たちの声がする。微かに聞こえる剣や弓支度の金属音を、にいや達は不安に交じった気持ちで聞くのだ。
「知らぬ。身体が座長とて、饕餮を相手に容赦などできぬ。俺は王だ、民を守るために、それに害をなすものは全て排さねばならない。俺のやることは、変わらぬ」
そんな、と誰かの嘆息するのが聞こえる。西王は歩き出し、宮殿の入り口に向かう。にいやが叩頭したまま呟く。ざり、と額が地面を擦る。
「俺達は、ああ、確かに俺達は民じゃない……どこの民でもない。でも、こんな、こんなことってあるかよ……！」
噛みしめる唇からは血が出そうに見える。そこに、一度は本殿に

消えた西王の声が返ってくる。
「おい、小僧、その師！」
シンの正体を伏せて、西王が言う。
「貴様らは俺の臣ではないからな。勝手に動くがいい。だが、邪魔をするなよ」
ファンはシンと顔を見合わせ、頷いた。本意はどうあれ、好きにしろ、と言うならば。するべきことは一つだ。
「皆と固まっていてくれ。俺とファンは、座長を助ける術を探す」
シンの言葉に、にいや達は滲む眼でこちらを見た。ファンも、それに頷き返し、拳にぐっと力を込める。まずは、山の陰から消えた、座長であり饕餮の影を探さなければ。

揺れる

王宮の奥、王の執務室の扉が勢い良く開かれる。白い衣を翻し、颯爽と西王は先へと進む。それに従い、紫晶も王に続く。国の大事だ、ここでし損なえば全てが水泡に帰す。だというのに、なぜ。どうして、そうも楽しそうなのですか、陛下。少しも怖じずにいられるのです。

問いたくなる心を飲み下し、紫晶は兄の対峙した魔獣を思った。欲の獣。王達の心を蝕んだこの国一番の災禍。そして、この国を潤す富の要（かなめ）。何ごとにも代償が必要だったのだ、だから、兄は。しかし、できるなら私は。

目の前の若い背を見つめ、紫晶は小さく息をついた。

「紫晶（ししょう）！　天秤だ！」

天秤、と言われて、咄嗟には反応できなかった。聞こえなかったか、と振り返る目は確と、所望のものがこちらの思うもので間違いないことを告げている。この場で、天秤と言えばひとつしかない。初王の残したそれ一つだ。神獣によって守られる神器。

先代が呪（まじな）いをかけてしまっていたそれを引きだすと、紫晶は椅子に座した王の目の前に置いた。天秤は少しばかりゆらりと揺れたが、すぐにつり合いをとって止まる。正鵠（せいこく）の天秤は、白の国の要のひとつだ。だが、これは物の重さを量るためのものではない。この天秤が教えるのは、事柄の有無と物事の是非だ。

全てが金属（かね）で出来た天秤は少しの狂いもなく左右の腕を伸ばし、先に下げられた皿には是と否とがそれぞれ書かれている。

「問うぞ。答えろ、天秤」

中心で天を指す針が頷くように小さく左右に振れ、ともなって揺れた腕はすぐにぴたりと止まった。この天秤は人の知り得ぬ未来を、過去を知っている。それにこちらが聞きたいことを問うてやって、それに対して天秤は有るか無いかだけを答えるのだ。是か否かで答

えられるように問うのが決まりだ。これの腕は二本しかないのだから。

だが、是と否だけで答えられることなら、天秤は何でも知っている。その物事に対して、有ると、是と思えば天秤は左に傾く。無しと、否と思えば右に傾く。答えはそのどちらかだけで、応答の後、良しと言えば元に戻る。代々の王は有事の際、この天秤にその判断を委ねてきた。そして、神獣もただ一つの問いをこれに委ねてきたのだ。

紫晶、と西王が振り返り、指の先で扉の方を指す。

「衛士長とシーヤー……いや、武官なら誰でもいい。呼んでこい」

「しかし、陛下……」

「いいから、すぐにだ」

渋々頷き、扉に向かった。出来ることなら、陛下の傍を離れたくはない。今は有事も有事、建国以来の魔との戦いだ。戦を前にして平然と笑む王だからこそ、傍を離れたくなかったのだ。目を離せば駆けだしていってしまいそうで。

急ぎの時に限って王宮はやたらに広く感じてしまう。武官の官舎はずっと右手で、衛士の詰め所は王宮の門の方だ。ああ、今こそ四足に戻ってしまいたい。人の足のなんと不便なことか。人間の女という姿のなんと脆弱なことか。与えられた力にたいして、自分がどれほど似つかわしくないか。

角を曲がったところで丁度、ひとりの武官と衛士長とが話しているところに会った。衛士達の配置についてのことだろうか。ともあれ、これならすぐに戻れる。ほっと息をつき、陛下がお呼びです、とだけ告げた。すぐに、と小走りに出た二人について、紫晶も執務室に向かう。あの天秤に、王は何を問うているのだろうか。

扉の前に来ると、中から薄いかねのぶつかる音がした。武官が内へ声をかけると、入れと声が返ってくる。西王はやはり、あの天秤の前で出た時と変わらず座っていた。

「何だ、早かったな。途中、もう一つ聞こうと思ったが、まぁいい」

何と尋ねたのだろうか、大きく左へと傾いた天秤に、良し、と呟き、王は立ち上がる。それに対して武官と衛士長は跪く。合わせて紫晶も膝をついたが、王は微かに笑うと、お前はこっちだ、と自らの後ろへと呼んだ。そして、西王は武官に近寄り、言う。

「お前から、武官全てに伝えろ。さっきの命令を実行しろ、とな」

は、と応ずる声があったが、それには多分に戸惑いがあった。僅かな沈黙と、踏み直した足の擦れる音。それを聞きとって、王は言葉を重ねた。

「いいからやれ。元が丈夫そうだ、大抵のことでは死なん。何かあったところで、責任を取るのは俺だ、お前たちは言われたようにやれ」

また同じように答えがあったが、今度のそれに迷いはなかった。続いて、西王は衛士長に向き直り、顔を上げるように言った。が、そこで不意にこちらに振り替える。

「紫晶、あの男の獣性がなんだか確かにわかるか」

問われて、紫晶は答えようとした言葉を飲んだ。ここでそれに答えれば、自分がどういう者かが、衛士長に伝わるだろう。それは、王がこれまで隠させてきたことではないか。じっと見つめ返すと、王は短く息をついた。

「それはもういい。頃合いだ。……で、貴女の眷族か、と問うている。白虎殿」

その言葉に衛士長の表情が変わる。それを視界の端に認めながら、紫晶は頷いた。

「眷族であるのは、間違いなく。ですが、それが何かかはわかりませぬ」

答えてやると、そうか、と西王は満足気に笑んだ。

「ならば、当ててやる。――狼だ、どうだ?」

衛士長、と呼んで、お前はわかるかと西王が続けて問う。衛士長は眉根を寄せ、戸惑った様子でこちらと西王とを見たが、暫時、間をおいて口を開いた。

「一座の子供が、そう言っていたように思いますが……」
そうか、と応える西王の笑みは絶えず、同時に宵の口の空気を割いて、獣の声が響き渡る。屋の内まで、陶の茶碗や硯の石を鳴らすような大音声。その声を確かめて、西王はこちらへ振り返った。この場に不釣り合いな、無邪気にも思える顔で。
「合っていたな。よし、衛士長。お前に命を下す。良く聞き、良く働け」
はっ、と張りのある声が返る。何なりと、と続く声に西王が頷く。
「まずは、すぐに使いを走らせ、外橋の衛士に“鍵を開け、合図を待てと”と伝えろ」
外橋の。山々を渡る橋ではなく、谷を越え、都と外とをつなぐ橋だ。
「陛下、何を……」
小さく上げられた手に、その問いは制された。
「できることは一つだ、迷うまい。合図はそうだな、火矢でも上げるか」
確かに、と衛士長の声があって、あとは、と西王は続ける。
「まだ王宮内にいるだろう？　一座の人間を捕えろ。いいな、一人残らずだ」
「陛下！」
こちらが驚いたのと同時、衛士長も応えかけた息を引っ込めた。頼りの長を欠き、またその長が意の外とはいえ都を襲うという、不安の中にある彼らを。
「口出し無用」
厳しい口調で、その先の言葉を止められた。衛士長と自分とが抱えた言葉を、西王はなぞり、続ける。
「彼らは何もしていない、か？　これから何かされたら困るだろうが。場所ならずっと牢が空だろう、入れておけ。子供もだぞ」
腕を震わせ、衛士長が立ち上がる。都を守る衛士のその長だ、体は明らかに西王よりも大きく、屈強そうに見える。睨むように西王

を見据え、声を上げた。
「いくら陛下といえども、その命令には承服しかねる！」
「ならば、お前をここで更迭し、これを聞きうる奴を呼ぶまでだ。いいか、こうしている間にも、この国は魔に犯されつつあるのぞ。俺が今果たそうとするのは、国を、民を守ることだ。それ以外の事柄は受け付けぬし、するつもりもない。お前達への命令も例外なくな。……いいか、衛士長。お前の命はなんだ」
衛士長の拳がかたく結ばれ、そして、すぐ僅かに緩んだ。
「……仰せのままに。西王陛下！」
「では、もう一度言う。一座の者を捕え、全員を王宮の牢へ入れろ。いつ奴が来てもおかしくないぞ、急げ！　先に言ったことも忘れるなよ」
返事はなく、踵の鳴る音だけがそれに答えて執務室から出ていった。
「さて。俺に言いたいことは山ほどあろうが、紫晶」
西王がこちらに振り返る。そして、こちらへとまっすぐに手を述べる。強い瞳がいるように向けられる。
「来い。いくつか行かねばならぬところがある。まだやることは山積みだ」
その手を取れずに俯く。
「陛下、私は貴方を――」
この人は強い。この人は鋭い。この人は、それゆえ危うい。それはまるで刃のようだ。だから、恐ろしい。何よりも信の足るこの人が、建国の魔を前にして怯まず王たろうとするこの人が恐ろしい。その手を取るのにこちらの手を出せば、きっと震えているだろう。いつかくるであろうときが、まるで今来てしまったかのような。
「紫晶」
呼ぶ声に顔を上げる。いつか見たような、儚く揺れる、少年の面影。そして、自分は王たろうとするこの人に、どうしようもなく惹かれている。

「来てくれ。お前がいなければ、何も始まらない」
「御意のままに。我が主――」
自分の手が示された鍵の束を取り、王は壁に掛けてあった白柄の長槍を取る。そして、足音は二人分、揃って執務室を出た。

西の禍霊（1）

シンとファンはダオレンの、そして、饕餮（とうてつ）の姿を探すため外に駆け出た。町では、衛士や武装を済ませ、獣化した武官たちが家々の間を駆けまわっている。戒厳の布達だ、家々は扉から雨戸から全てぴたりと閉じられ、夜の間も止まることのなかった鉄を打つ音もぴたりと止んでいる。都の中央の鐘楼から、淡い真っ白な光が広がっていくと町を囲う縄が応えるように光った。死霊や獣避けの風水を強めたのだろう。まず、外にいる饕餮を内へ入れぬ守りを固めたのだ。

「町人か！　家に入るように言われたはずだろう！」

見回る衛士達に呼び止められ、二人は足を止めた。シンがこちらをちらりと見たので、ファンは頷いて見せた。

「紛らわしくてすまない。青の国の者だ。助力を申し入れたところ、好きにしろとのこと。僅かながらに心得がある。……それに、知り合いの体が取られているのだ、出来る限り救いたい」

シンがこちらを見る時は、大抵何かその後の言葉に、方便や差し障りのない嘘があるときだ。黙っているか、口裏を合わせろということだ。今は前者。衛士はじろりとこちらを見たが、シンの腕の巻き布を見て、頷いた。

「だが、何かあってもこちらでは保証しかねる。その少年もそうか」

問われて、ファンは確かに返事をしてみせる。衛士は怪訝そうな目でこちらを見たが重々気をつけられよ、とまた駆けだして、人々に外に出ぬようにと声を上げ始めた。

「明るい月夜だが、面倒だな。こういう夜は獣も騒ぐ」

シンが呟いた。人の体が月の動きにその働きを変えるように、獣たちもその輝きに引かれて動き出す。まだ空の低きにある月も、上れば煌々と地上を照らすだろう。人の心も獣の心も惹きつけて。

東の山に見えていた饕餮は、今はその姿をくらませている。だが、

きっと。

「饕餮は、こっちにくるんですよね。封を抜けてくるんでしょうか」

問うと、シンがああ、と頷いた。

「あいつが狙い欲するものは王宮か、ここにしかない。お前も狙われているのを忘れるなよ。……風水の封は外の獣や弱い死霊を防ぐくらいのものだ。無いよりはいいが」

そう言えばそうだ。ついさっき襲われたばかりだというのに。詰まった息を吐き出すと、とん、とシンが肩を叩いた。

「大丈夫だ。俺もいるし、西王も饕餮を倒すために何らかの策を打っているだろう。少しくらいなら、獣化していられるな？　攻撃しなくても、あの状態なら充分に身を守れる」

頷き、じっと体の内の力に意識をやる。きっと大丈夫だ。人が、揺るがないことを強さというのは、こういうとき動揺すれば思うように力が出せないからだろう。何より、ひとりじゃない。それだけ忘れなければ、自分だって何か力になれる。

「やれます。おれも何か力になりたい。ダオレンを助けたい」

遠くを見渡すために、鐘楼へと辿りつくとそこには数人の武官が付いていた。鐘楼の中には風水を張るための羅盤があるというから、それを護るためだろう。近くにいた一人に事情を話し、楼の上に上がる。近くには家々が複雑に並び、その途切れるのを以て谷を示している。遠くには連なる山々が見える。月は、先ほどより高くなりその赤みは僅かに薄らいだ。その反面、小さく見えるに従って明るさは増していく。見つめれば夜目に眩しいほどの満月だ。

不意に冷たい風が肌を撫でた。谷から吹きあがる風とはまた違う、魔獣の気を含んだ、体の内を震わせるような風だ。下の武官たちも同じように体を強張らせている。

「来るぞ」

シンの呟きに間を置かず、狼の咆哮が辺りをつんざいた。その音声に、空気は震え、月明かりすら砕けて褪せる。特に耳朶を打つ方へとファンは頭を向ける。さっきとは反対側、西の山だ。まだ遠く

小さく見えるが、今度ははっきりとその居場所をこちらに示していた。

二度目の咆哮。先ほどのが自らの場所を晒すものなら、今のは開戦の烽火（のろし）のような。近くの家から、微かに人の悲鳴が聞こえる。屋の内に籠る町人も、今日は眠れないだろう。気を感ぜられずとも、魔獣の恐怖は誰しにもある。西の峰に銀色に見えていた小さな影が動く。こちらからでも見えるような大きな跳躍だ。こちらに来る。

「行くぞ、ファン。どうせ来るなら、迎えるまでだ」

シンがその足を気で満たし、青い竜麟を纏ったそれで鐘楼の石壁を蹴った。軽く、だが力強く、あの禍々しく大きな気に平然と、敢然と立ち向かう。ファンは唾液をぐっと寄せて、飲み下した。緊張にひどく喉が渇く。だが。ファンは息を整える。夜気が冷たい。師に倣い、体を龍化させ前へと踏み出した。もう既に、シンの姿は遥か先だ。肌を刺すような張り詰めた空気。

本山町の西の端まで来て、ファンはシンの横で足を止めた。一座のみんなが野営していた広場だ。足元を見れば微かに地面に炭の跡がある。

「外に出たのは……座長の意思だろうな」

シンはその腕を龍化させながら、静かに呟いた。そうか、饕餮はあの時すでに王宮の中にまで入っていた。なのに、それが外の山に出たのは何も、こちらに警戒と準備の時間を与えるためではないだろう。皆から離れて、外へ。なるべく遠くへ。

「ダオレン……」

絶対に。ファンは拳にぐっと力を込める。今、饕餮の器と化した彼が戻るのは、そこに彼の意思がないからだ。今その意志は、彼（か）の身のどこに眠るのか。兌山（だざん）の向こうからごう、と風が吹く。

「来たぞ！」

ファンはきっ、と顔を上げる。月光の元に躍るのは、元が人の身であったとは思えない、隆々たる巨躯。銀灰の体毛は鋼の針のように、光をこちらへ差し返す。手足は獣のそれながらに二足で立ち、

狼の頭にぎらつく双眸は狂気がのぞく。
「あぁぁ？　何でてめぇが居やがるんだぁ？　青龍よぉ！」
元の主の声とは似ても似つかぬ声で、饕餮がそう問うた。
「檮杌（とうこつ）？のくそ野郎め、あぁ、あと窮奇（きゅうき）の野郎もか、めんどくせぇ奴残しやがってよぉ！」
「……変わらんな」
シンが言う。向こうには聞こえたかわからないほど、微かな声だ。
「まぁ、いい！　貰うぞ！　貰っていくぞ。全部、俺様のものだ！」
けたたましい笑い声を上げ、目の前に巨体が降り立つ。
「太極も、俺様の体も、この土地も、全部だ。貰っていくぞ！　俺様のものだ！」
向けられた鋭い爪に、ファンは身構えた。

西の禍霊（2）

饕餮（とうてつ）はこちらを見て、にやりと笑った。目の前を全て覆うような巨大な人狼だ。

「おい、太極、面白い格好じゃねぇか、その体寄こせ！」

ぶんと繰りだされた腕を避け、ファンは地面を滑るように後ろに下がった。饕餮の爪のあたった部分は、地がえぐれている。いくら龍化していると言ったって、あれをまともに食らえば、ひとたまりもない。ふらつきそうになる自分の体を支え、ファンはきっ、と饕餮を睨み据えた。

「欲のねぇのは気にいらねぇが、具合はいいぜぇ！」

太い腕に力を漲らせ、饕餮はまるでそれを楽しむかのように、いたずらに腕を振りまわす。何条も地面に走るひび割れはこの山をも崩さんばかりに深い。

「ダオレンの体を返せ！」

絞り出すようにそう叫ぶと、饕餮の目がぎろりとこちらを向いた。

「くそ餓鬼が、返せだぁ？　“これ”はもう俺様のもんだ、返すも何もねぇ」

とんとん、と自らを指で差し、饕餮は高く笑う。そして、こちらの握った拳ににやり、牙を剥いて見せる。

「……おおっと、そうだなぁ？　代わりの体をくれりゃあ、返してやるかもしれないなぁ？」

こちらを指差して、饕餮が下卑た笑い声を上げる。口元から零れる黒紅（くろべに）の靄（もや）が、ざらりと音を立てた。

「お前が他人にものをやるなど、ありえない。大概にするんだな」

シンが間に割り込み、庇うように前に立った。吐き捨てるような、短い息の応え。

「大概にするのはてめぇの方だ、青龍！　いっつも邪魔しやがってよぉ！」

空を切る音と鋭く軋むような金属音。饕餮の力任せの攻撃を、シンが龍化した腕で防ぐ。師匠、と声をかけると、シンは大丈夫だと繰り返した。

「もうこの地上に、お前等のものなど何一つないぞ、饕餮」

シンの言葉に、饕餮が歯噛みするのが見えた。互いに弾かれるように距離を取り、饕餮は吠える。

「俺様の名前は俺様のものなんだよ、勝手に呼んでんじゃねぇ！」

「それは悪かったな、何も持たざる者。与えられた獄に収まりやれ」

声にならない怒号が辺りに響き渡る。衝撃は空に地に、全てを揺るがしながら、広がり伝わっていく。ファンは腕をそれの盾にしながら、横目でシンを見やった。幾度も見てきた横顔だ、饕餮を見据える目は精悍に、ただ、これまでに気付けなかった何かを潜ませていた。静かながらも底知れない怒り、憎悪。

「あの体から出さんことにはどうにもならんな」

シンの言葉に、ファンは頷く。攻撃の際に見えた、饕餮の腕は自ら繰りだす攻撃に耐えられず傷んでいた。奴はあの体を自分のもの、と言ったが、自分のもの、は己が身とは違うのだ。普通ならば人はそれを大事にするが、やつにとっては代えの利く道具のひとつにしか過ぎないのだろう。ならば、どうやって。

「――撃(て)ぇ！」

饕餮と対峙する二人の後方から号令と、矢の雨が降った。

「……馬鹿な！」

驚きと苛立ちを込めたシンの言葉。後ろを見ると、弓に二の矢をつがえる武官達の姿があった。饕餮に――座長の体を有するそれに、向けられる意には少しの遠慮や躊躇いもない。射かけられた饕餮に、いくつもの矢が刺さる。

「今の西王も容赦ねぇなぁ！　こいつを捨てるか」

濡れた犬が水を振るうように、饕餮は刺さった矢を振り払った。鋼のような体毛に防がれて、傷を与えるまでには至っていないらしい。にやりと笑みを浮かべ、武官たちに向けられる。次いで、剣や

自らの腕を以て、何人も獣化した武官たちが駆けて来る。四足の獣を宿す彼らは、月にその目、その爪を光らせながら、しなやかに力強く、大地を蹴る。

「待て！」

先頭を往く、獅子髪の武官を止め、シンが吠える。

「あの体を攻撃したとて、何にもならん！　奴の本体にただの攻撃など」

「そんなことなど、とうに知れている！　これも西王の命である。下がりやれ、東国の武人よ！　邪魔立て無用と言われたはずだ」

腕を掴むシンの手を払い、武官は饕餮を睨む。

「王命であり、我らが命だ。我らはあれより、この国を守らねばならんのだ！　我らが命を差し、罪なき者の身を以ても、あれを止めねばならんのだ！」

愚かな、とシンが呟く後方で、饕餮が嘲り笑う。

「そうだ！　そいつらの言うとおりだぜぇ、俺様を護るのに、こんな野郎の命一つを護るって方がよっぽど愚かじゃねぇか！　好きに傷つけやがれ、代わりの体を持参でよ！」

饕餮は再び暴れ出す。ファンやシンはそれを避けて下がったが、命を賭して挑む彼らは退くことがない。攻撃をされれば、躊躇わず刃で受け、返すそれで打って出る。だが、それで傷つくのは饕餮の持つ体だけだ。本体はきっとあの靄なのだ。ちびの体からわいて出たあれが。饕餮が傷むことはない、だから、あのように笑いながら戦っているのだ。

「このままじゃ、ダオレンは」

西王は、饕餮に痛みを覚える体のないことを知っている。ならばどうして、彼らの命を魔獣に晒してまで、攻めるのか。彼らの行動が、護国の命と王の言葉の元にあるのなら、いくらダオレンを守ろうと止めても、彼らにとっては魔獣を庇うものにしかなりえない。

「どうすれば」

呟いた途端に、シンも同じことを口にしたのに気付いた。気ばか

りが急いて、打つ手が浮かばない。ただ地を踏み直すばかりで、その場から動けなかった。

剣戟の音と彼らのたけりを貫いて、澄んだ鐘の音がその場を止めた。響くこと数度、熱を冷ますような音色が王宮の方から響いた。

「総員引け、合図だぞ！」

獅子髪の武官が声を張る。退くこと無し、と思われた彼らが、一度に饕餮から距離を取る。切りつけられ、射かけられた饕餮はかなりの血を流していたが、鐘の音のする方にその鼻先を向ける。饕餮を止めたのは、鐘の音ではない。鼻をひくつかせ、喜びを圧したような声を上げる。

「この、感じ。あぁ、間違いねぇ！　俺様の体だ！　封を解きやがった！」

谷を越えたあの跳躍で、遥か頭上を超え、一跳びに王宮へ向かった。武官たちもそれを追い、王宮へと退き始める。

「封を解いたって、まさか。師匠」

「王は何を考えている……追うぞ、ファン！」

二人も追って、王宮へ。確かになるばかりの饕餮の気配に、ファンは震えだしそうな足を打った。

白刃の王達

自分の中の青龍の気が揺れた気がして、ファンは先に進むシンに声をかけた。たぶん、もう龍化していられない。また龍化するには、今の不安定な精神を、落ちつかせなければ駄目だ。シンも走りながらこちらを見て、それに気付いたようだった。その足の速度が少し落ちる。

「師匠、構いません、先に」

「行けるか！　狙われている人間が独りになってどうする」

案の定話しているうちに、龍化は解けてしまった。合わせて、シンが龍化を解く。

「ここにいるのが饕餮（とうてつ）だけとも限らん。座長の身を思えば急ぎたいが……これぱかりは西王の意次第か」

静まりかえる町の中を走り抜け、王宮へ向かう。家々に家人の気配はあるが、皆じっと息をひそめている。町を壊されるようなことがないだけいいが、町に被害がでるようなら、確かに武官たちの言い分のほうに道理が通る。

王宮についたが、もはや衛士に止められることはなかった。中へ駆けこむと、門が閉ざされた。衛士達はこちらの着くのを待っていたらしかった。衛士達、というよりは、おそらく王が。瞬間、上空を薄い光の走るのが見えた。

「封を掛けたか。これはかなり強いな」

中に魔獣を閉ざしこみ、王宮は都から切り離された。中央を走る石畳を掛け、本殿へと向かう。シンが先導するのについて行く形だが、そうでなくても先からはあの堂の前で感じた嫌な空気の、ずっと濃いのが流れてきている。そして、すぐあの巨体が目に入った。本殿へのあがりに座する西王が、それと対峙している。傍には白虎が侍し、先に行った武官たちも左右に分かれてついていた。饕餮が吠えている。

「てめぇが今の西王かぁ？　ありがとなぁ、あの封印を解いてくれてよ！」

饕餮が凄んでみせても、西王はなお平然と、薄く笑ったままそれを見ている。

「何、貴様の為にわざわざ解いたわけなかろう。それに、最後の封はかかったままだぞ、わかりきったことだ」

西王の背には一条の長槍があり、月と篝火の灯りに、二色の光が刃に映えた。

「じゃあ、それもてめぇに解かせて終いだ！　餓鬼が、そいつをよこせ！」

「餓鬼とは随分だな。これでも王だぞ、控えろ魔獣め。やらんぞ、これはもうこの国のものだからな。壊すも自由だ」

立ち上がり、長槍を器用にまわしてみせる。止まった刃は饕餮の石像の上でぴたり、と止まる。慌てた饕餮がそれに突進したが、白虎の女性が袖を振ると、西王の前に障壁が生じた。饕餮はそれにぶつかり、不格好に転げた。西王は笑みを深めはしたものの、ただそれを見下ろして、刃を戻した。

「おい、貴様。ここにくるのに、手をいくつ用意してきた？　こんな簡単な罠にかかるほどだ、わざとだろう？　ええ？」

石像の肩に手をやって、にやり、と笑みながら西王は問うた。怖じるどころか、時に侮りに感じるほどの、余裕の表情だ。饕餮もそれがわかるのか、いたずらに足で、石畳に傷を付けている。

「この石の塊も、そこにいる小僧の身も、俺の首さえ取れると思ってきたのだろう？　なぁ、そうだろう？」

西王の言葉にぎり、と饕餮が歯噛みする。王が、本殿の階段をゆっくりと下りる。

「お、おっと、それ以上来てみろ。この体の持ち主は死ぬぜ！」

西王は、一瞬足を止めたが、すぐにまた下り始める。

「おい、いいのか？　てめぇが大事にしなければならん民じゃねぇのかぁ？」

「構わん、好きにするがいい。それだけ傷めつけている意味が解らんか？　ああ、確かにその男は憐れだな、が、どうした。俺が守るのはこの国無数の民だぞ。比べるまでもなかろうが。それに、そいつを殺したところで、ここにお前の入る器はない」

鋭く風を切る音を立て、くるりと回った刃が饕餮へ向けられる。

西王は本殿に白虎を侍させたまま、饕餮に寄る。

「質（チ）とは、相手の取られたら困るものを取るものだぞ。そんな曖昧な脅し、東の軟弱にしか通用せん。なぁ、まだ手はあるのだろう？　なぁ、おい」

銀に飾られた白い柄の長槍は、月の光に似て、明らかな全貌を晒している。西王の様子を見た、シンが傍らで息をつくのが聞こえた。まだ事態は殆ど動いていないのにも関わらず、この場の空気は。饕餮は爪でがりがりと地を掻いた。

「そんなに見たいなら、見せてやるよ！」

饕餮が腕を振りまわし、西王は軽く後ろに飛んでそれを避けた。

「この封が解けなくても、都の封なんざ俺様にとっちゃねぇようなもんだぜ、西王！　その無数の民とやらを守って見せるんだな！」

饕餮が上を向き、高らかに吠える。旅の途中にダオレンがやっていたような遠吠えだ。が、遠ざけていたあの声とは違う。間があって、それに応えるのは都の周り全ての方から聞こえる、別の遠吠えだ。今までに聞いたことのないような、何千という狼の声。

「獣だらけのこの国で、便利な業だなぁ？　先代の王のおかげで、やつらもみんな飢えてると来た！　俺様の力を貸してやったんだ、都の奴らの腹を残らず喰い破っちまえ」

上ずった笑い声をあげ、饕餮はどうだ、と言わんばかりに西王を睨んだ。辺りにこだまする遠吠えは、都の空を覆っている。

「誘われて手の内を見せるな、愚か者め」

西王が鼻で笑うと、饕餮の笑いが止んだ。

「火矢を……いや、いい。丁度いいのがいるな。小僧！」

唐突に声を掛けられて、ファンは慌てて返事をした。

「南のに貰ったろう。上に向けて火を放て、よく絞れよ」
「何を」
饕餮の問いに、西王は笑う。
「その男の素養がしれれば、それに手を打つのも当然だろうが。見ているがいい。ここから出られぬ以上、貴様ができることはない。……おい、小僧、急げよ」
戸惑いながらも、息を整え朱雀化する。辺りで息を飲む音がする。
「出来るか？　落ち着いてやれ」
シンに問われて、ファンはしっかりと頷いてみせた。こちらへ走ってくる饕餮の前にシンが立ちふさがる。
もう一度息を整える。弓を引くように、空を仰ぎ、掌に生じた温かさを放った。南王が、南の地でやったように。火は空を駆け昇って、爆ぜた。
地響きのような音と共に、聞こえていた狼の声に悲鳴のような高い声が混じる。
「餓鬼どもがっ！　何をしたぁ！」
「お前の侮った先代はな、外橋に仕掛けを付けた。動かせば、橋が落ちる。封が効かずとも都が守られるようにな」
西王は続ける。
「毒で殺された、十五代程の前の王。いつか貴様が来たときに、都に害が出ぬよう王宮にこの封を仕込んだ。この石の像を抑える封印は、自ら死した二百代ほど前の王が、代々の王にのみ解けるよう掛けたものだ。俺に至るまでの全ての王が、貴様ひとりと対峙するために手を尽くしてきた。初王の言葉を護りながらな」
饕餮に刃を向け、西王は声を張る。
「だから、問うただろう。お前はいくつ手を用意してきたか、と。三百続く、この国の王達と向きあうだけの手を用意して来たか！」
それは、怒気にも似て、ぴりりと空気を揺るがした。代々の王達は背負わされた業となど戦いはしなかった。ただ一点、いつか来る魔に対してだけ、ずっと永久にも思える時を戦い続けてきたのだ。

西王が向けた銀槍の先で、饕餮が吠える。それは空をも震わしたが、王宮の結界は破れなかった。

「奪うことばかりで、何も持たずに来たお前が、勝てると思うなよ、饕餮！」

饕餮は低く唸る。爪で、胸をかきむしると、それまでの爪痕や刀傷から、血が飛び散った。ざわ、と辺りがどよめいて、ファンも足を踏み出したが、シンに止められた。それと同時に、朱雀の力が火の消えるように引っ込んだ。

「お、お、俺様の名を呼ぶな……！　俺が何も持たねぇだとっ！　これから奪うのさ、てめぇらに奪われた分も全部取り返してなぁ！」

血走った眼で西王や白虎をねめつけて、饕餮はそう言った。この状況だからだろうか、奪われた、という言葉が頭に残る。西王に奪われた、というのはあの石と化した体のことだろうか。なら、全部とは。あの体一つではなく、まだ何かを奪われたと言うのか。天の選んだ王達に。

「あいつらを憐れむなよ、ファン」

思っていることがわかったのだろうか。シンが静かな口調で言った。振り向かず、ただ饕餮の方を見据えて。そうか、シンも知っているのだ。あの魔獣の言う、奪われたものが何なのか、何故奪われているのか。

「問題あるまい。お前が、こちらから奪ったものを返すつもりがないように、こちらも返すつもりなどない。公平だろうが」

西王はぶん、と槍を向け直す。

「さあ、その体で死ぬか？　初王の記憶が確かなら、お前はどんな体でも取れる、が、体が死ぬ前に出ぬと、その本質も死ぬのだそうだな」

饕餮の――ダオレンの体の周りでうっすらとあの暗い靄がざわめ

く。砂の擦れる音。舌うちと共に、饕餮は強く地面を蹴って、王の頭上を飛び越えた。鋭い音は、王がその攻撃を受けた音だった。虎の足で、その衝撃を受けて西王は王宮の別のほうへ逃げた饕餮を目で追った。白虎が西王に駆け寄る。

「陛下、お怪我は」

「あるわけなかろうが」

ふん、と鼻を鳴らし、西王は長槍の柄で、どんと石を突く。シンとファンも、饕餮の方を見やりつつも、そこへ寄る。

「西王、追わんのか」

シンが問う。

「追う。が、ここからは出られん。そう急ぐこともない」

「王宮にいる他の人は大丈夫でしょうか。一座の皆は――」

ファンの問いに、西王は小さく息をついた。

「屋の内にいる奴には手を出せんようになっている。奴らも屋の内だ」

ファンは良かった、と表情を緩ませた。きっと、ダオレンのあの様子を見たら、みんなは傷つくだろうから。それに、西王が今のように、容赦のない態度をすれば、飛び出していってしまいかねない。ファンですら、もし本当にダオレンごと饕餮を滅そうとしたら、やはり飛び出すのではないかと思うのだ。

「おい、小僧。お前は饕餮に体を取られかけたそうだな」

問われて、頷いて返す。

「どうやった。取られても、少しは意識があるのか」

微かに獣化して、虎の目でこちらを向いた王にファンは少し戸惑った。目はやはり、白虎と同じ、美しい紫だった。饕餮に体を取られた時。ファンは思い返して、首を振った。

「わかりません。気が付いたら、師匠に起こされていましたし……きっと、防いだのも母の結界があったからで」

そうか、と西王が小さく息をつく。

「参考にならんな。まぁ、いい。お前も狙われてるなら、下手に動

かれても面倒だ。青龍！　お前等はもう動くなよ。ここに追いこむまでが手だ。ここにいろ」

「今はそうしていよう。だが、あの体の主と、貴下に何かあったと思えば勝手に動くぞ」

シンの答えに、西王は笑みを深めた。

「俺に何かあったら、か。いいだろう、そのときは勝手にしろ」

西王は待機を続ける武官たちに向き直り、声を張った。

「お前等も、この場から離れるなよ。独りで動いて、体を取られたりしてみろ、その時は容赦なくあれ諸共滅するぞ。いいな！」

は、と低い返事が返ってくる。酷な言いようだ、とファンは西王を見る。そして、その首筋に汗の這うのを見止めた。激しく動いたわけではないだろうし、この寒さだ。じっと見ていると、西王と目があった。睨まれたように思って、すぐ視線を逸らす。

「疲れるな、これは。――行くぞ、紫晶。用意はいいな」

自らの白虎に呼びかけて、西王は饕餮の言った方へ向きを変える。駆けだそうとしたその前に、宮殿の中から、文官らしき影が走り出てきた。

「へ、陛下！」

「どうした、屋の内にいろと言ったはずだが」

「一座のものが、牢から抜け出した、と！」

牢、と聞いてファンはぎょっと西王とそちらを見比べた。少しばかり、困惑した表情を浮かべて、西王は応える。

「全員いて、確と封を掛けたはずだが」

「いえ、まずあの場にいたものが、全てでなかったらしく……女官たちが、見慣れぬ女官姿のものがいたというので、詰めたのです。そうしたら」

「なるほど、口を合わせて隠していたというのか。大した芝居一座だな。これだから、ひとりも逃すなと。急ぎになっただろうが！」

紫晶、と呼びかけて、西王は走りだす。ファンもできることならそれを追いたかったが、止められて留まった。牢、と聞いて驚いた

が、もうここまでくると、西王の行動にそこまで動じることもない。きっと何もかもが故あってのこと。

疲れるな、と呟いた顔に、妙にほっとした自分がいる。待とう。

今は、動かぬことが彼の手の内だから。

白影（2）

王宮の瓦を踏み割り、体勢を崩しながら饕餮（とうてつ）は王宮の建物の影に転がりこんだ。新しい体がいる。これは使える体だが、この体の男は“元手”が足りない。何にもまして体を動かす情動が、欲がない。自分そのものであって、力の元になる欲が、この男には足りない。半端なやつだとあのくそ餓鬼の王に殺される。もっと欲の強くて、力の強いやつを――

「また、ずいぶんと苦労しているね」

「誰だっ！」

饕餮は弾けるように振り返る。壁にもたれて立つ少年。背後に立たれてようやくその気配に気づく。

「てめぇか。何しに来やがった、これは俺様の獲物だぜ」

「知っているさ、邪魔をする気はないよ。ただ、ちょっとだけ手伝ってあげようかなってさ」

にっこりと笑い、少年はこちらへやってくる。こいつの気配なんてなかった。今の今までは。だとしたら、こいつは今この封の中へやってきたのか。

「力を貸そうってのか」

「貸してあげてもいいけど、ボクが力を貸すほど、キミは無力じゃないしね。貸すのは、そうだね、知恵かな」

饕餮はじっと少年――ジュジを見つめた。こいつは、あの人の子供だと言った。父の復活まで俺達に力を貸したい、と。有り余るほどの力を以て。

「知恵、だぁ？」

「そう。せっかく、キミは人の体を取れるんだ。それに、西王はあんなに手掛かりをくれたじゃないか」

手掛かり、と言われて首を傾げる。たたみ込むようなことばかり言われた覚えしかない。ジュジはこっちを見て、笑みを深めた。自

分たちとは異なる、白い相貌。
「その体でもいいけどさ、もっと良い体があるよ。彼が言うように、この場で最も、向こうが取られたら困る体がさ。それも、強い欲に塗れている」
近づく美麗なその顔。緋色の瞳がこちらを覗き込む。
「あれを奪えれば、キミはぐっと有利になる。考えてもごらんよ、ここにいるのは、高慢な王に、未熟な神獣。それに手を貸すのも、病んだ龍とただの子供だ。全部獲れたっておかしくない」
揺れる赤色は、出がけの月よりも遥かに強い色。
「ボクが言ってること、わかるね？」
饕餮は頷いた。ああ、ああそうだ。そして、今はわからずとも、頷かねばならない時だった。
「それに、あの王。大事の為に小事を切れるのが王なら、あれは、一番王たらざる王だよ。惑わされたら駄目だ」
離れたジュジを目で追って、饕餮は言わんとすることを充分に理解した。確かに、少しのきっかけさえあれば、それも容易いだろう。目の前を行く白色を見て、饕餮はふと思う。こいつの体を取ったら――と。そう思った瞬間、少年は振り返った。
「饕餮」
何よりも自分のものであるそれを口にして、ジュジは微笑んだ。名前は己だ、普段なら怒るところ、体が少しも動かせなかった。心も同じく、射すくめられたように。絶対的な差を示す、美しい笑み。これには、逆らってはいけない。他の四凶の知らぬ目の前の“何か”の。
「誰か来るね、その体の人の知り合いかな」
逸れた視線に安堵をおぼえて、饕餮は力のない返事をした。
「……さぁ、丁度いい駒も揃う。頑張ってね」
王宮の濃い影に白い影は馴染み、霧となって解けた。ジュジの示した方をみやると、女官の服を纏い、こちらへと駆けて来る女がある。饕餮はにやりと笑みを深める。一座の舞い手だ。内に押し込め

た体の主が、ざわざわと騒ぐ。
「来るな、ユーリー！」
口が勝手に動いたのに気付いて、内側のもう一つの魂を押しつぶすように力を込めた。西王が余計なことを言ってから、こちらごと自死を図ろうと抵抗する男。女はびくりと足を止めたが、こちらが動かないでいるとまたその足を踏み出した。
「ラン――ラン・ダオレン！　あなたなんでしょう？　ねぇ、応えて、魔獣に体を取られたって本当なの？　その姿……」
本当に体を取られていたら、その問いこそ無駄になるだろうに。また、別の方から足音がする。二つ。これは西王と、白虎か。小僧はともかく、あの娘姿の神獣。饕餮は込み上げる笑いを押し殺した。どうなるだろうなぁ。饕餮は聞こえて来る足音に、ぞくりと背筋を震わせた。楽しみだ。
ならば、まずは。
「一座の女か！　止まれ！」
駆けこんできた西王が、声の限りに吠える。こちらに呼びかけていた女が、怯えたようにそちらを見やった。その視線が西王の銀槍をなぞる。
「西王様、私たちも、彼も、何もやってはいないのです……！」
じり、と砂利を踏み、女は少しずつ、こちらにやってくる。ダオレン、とこちらに呼びかけながら。
「動くな！」
西王が怒鳴る。その表情に先ほどまでの余裕はない。ああ、白影の言っていたことはこれか。心の内で笑み、饕餮はつとめてこの男の声色で、応えてやった。
「頼む、ユーリー。お前らだけでも逃げてくれ」
女の瞳が潤み、西王とこちらとをみる。
「西王様、彼は――」
女がこちらに踏みこんできたのを見て、饕餮は女のほうに飛びかかった。西王が舌うちをし、傍らの白虎に呼びかける。

「紫晶！」
白衣の影が二つ、目にもとまらぬ速さで駆ける。ああ、やはり。
饕餮は笑った。
白虎が人狼の振るった腕を受け、その後ろで西王が女をかかえて、そこから退く。辺りに漂うのは、ざらりとした黒い靄。
「兄に代わり、あなたを滅します。饕餮、容赦は――」
白虎がそこまで口にして、はっと後ろを振り返る。そして、“饕餮”はにやりと笑った。女の顔で。西王がそれに気付いたが、この距離だ、間違いはない。
「獲ったぞ、西王！　さぁ、容赦しないってのを見せてもらおうか、白虎さんよぉ！」
西王の体を黒い靄が包む。
「陛下！」
響いたのは、悲鳴にも似た白虎の声。そして、新たな体を得た、饕餮の哄笑だった。

王の体、欲の獣

「ああ、本当だなぁ、おい！　こりゃあいい体だ、欲に染まったいい体だぁ！」

歓喜と祝勝の声色で、饕餮（とうてつ）は高く笑う。気絶した女を無造作に投げ出し、西王の体をもって、饕餮は立ち上がる。動き良い体。元々の強さも、獣人としての気もたまらないが、何よりもこの体は欲に満ちている。

欲は初めから何も持っていないものにはわかない。得て、失うから強く欲するのだ。ならば、こいつの欲は相当。ただ当たり前の生活から、国やおよそ人に与えられるべきでないものまで全て、こいつは欲している。そして、得られると思っている傲慢。堪らない、これはいい体だ。

手にするこの長槍。これも懐かしい、あの忌々しい小娘が使っていたものだ。向けられればやはり忌々しいが、自ら振るえばこれほど愉悦を覚えるものはない。どう、と音を立てて倒れた、さっきの体の前で立ちすくむ虎の娘。こちらを見据える目は、睨むとはまた違う、不安定な揺れをもっている。

「なんだぁその目。悔しいか？　ああ、そうさ！　てめぇがもう少ししっかりしてりゃあ、こんなことにならなかったかもなぁ？」

白虎の娘が唇をかむ。次第にざわざわと波立つ、その気。ああ、堪らない。大事なものを奪ったときの、この酔いに似た快感。

「前の白虎が兄だって？　なるほどなぁ！　あの野郎の後釜なら、弱いわけだ！」

あの石と化した自分の体を、死の間際までおいつめたあの神獣。猛虎としか言いようのなかったあの、男神。

「壊せばよかったのになぁ？　俺様の体をよ。はっは、欲はやっぱり俺様のものだ」

人の身に余る欲は狂疾となった。虎のごとき勢いを持つ欲を、人

の体で御そうとしたから、西の王達は次々と死んだ。
「みじめな野郎どもだな、この頭につまった王達ってのも」
新たな体の主の、その銀髪の下を示してみせて嗤う。代々の王に課せられた苦しみの記憶とやらも、これが自分の為だと思うと愉快以上のなにものでもない。
「お前になど、わかるまい。その、記憶のもつ真の意味など……！」
老練の獣に多い語り方で、白虎の娘は呟く。記憶が記憶であることに、意味の真偽があるものか。悔し紛れか、と笑みを深める。
白虎は拳を握りしめていたかと思うと、次の瞬間には獣の姿を取り戻して、もとの王宮前へと走りだし始めた。間断なく、饕餮もそれを追う。
「何だァ？　逃げるのか！　そうだよなぁ、傷つけられないよなァ、王の体は！」
王の体にある白虎の気を使って、軽く高く跳躍して見せる。ああ、単なる獣人とは違う、何もかもに溢れた王たる者の体。追いつくたびに、白い毛並みのその雌虎に、長槍で少しずつ傷を付ける。自分が許し、認めた人間の体で、自分が与え、共に闘うための力を、魔獣に奮われる――どれだけ悔しいだろう、それを思うだけで背筋がぞくぞくするほどに喜びが走った。
もとの場所に戻ってきて、白虎が先に、あの元の体の前に滑りこむ。青龍と餓鬼がそこを守っていたが、駆けてきたこちらを見て、少なからず驚いたようだった。
「蓐収、決めたことだ手を出すぞ！」
青龍が、その人の姿の全身を龍に寄せながら、こちらを見て言った。出来るものならやるがいい。同じ穴のむじなが。あつらえたように馴染む西王の体は、この魂と容易にひきはがせるものではない。身体の方の元の魂は、まだ目覚めぬのかもうこちらのもとに下ったのか、ぴくりとも動かない。なんとあつらえ向きか。
「王との約とは別だ、手出し無用ぞ、東の。この場の約は我の方が先だ」

小さな傷にまみれた白虎が応える。納得いかぬ、と言った顔で青龍は下がり、あの餓鬼はどうしたらいいのかわからないのだろう、ただ辺りの人間の顔を見回すばかりだ。その尾で、石と化したかつての体を持ち上げて、吼えた。

「これで、対等な交渉ができるというもの。この体と、その王の体。価値を比べてみないか。取引をしたい」

白虎の言葉に、初めこそ戸惑ったが、それを言いだした白虎の目にあざけりも何もないのを見て、哄笑した。なるほど、それだけこの王の体が大事か。代々の王がこちらに渡らぬように守ってきたそれを返してでも。そんな相手が望んだ結果など出すか。

「全部俺様のもので、取引だと？　交換なんざしねぇよ！　てめぇが手出しできないこんな便利な体を、古いその石なんかと比べられっか」

当然のようにそう応えてやると、白虎は静かな口調で呟いた。

「ならば、この石の像、奪ってからはこちらのもの。お前はこれを取り返す機会を失ったぞ！」

何も動く間もなく、白虎が尾に取っていた石像を石畳にぶつけ砕いた。今はこの体があるとはいえ、己の体。

「てめぇ、何しやがる！」

白虎の娘は応えた。

「もし、自分の体が、あの石像よりもその価値を上にしたら、先にあの像を壊せ。それこそ饕餮の欲に、こちらが勝ったあかしだと、陛下はおっしゃられた。こんな元手など要らぬ。そして、白虎の命を思い出せと」

牙をむき、白虎はこちらを睨み据える。

「饕餮、貴様を倒す事だけが西の存在意義。王の体を取ろうとて、ここの”誰の”体を取ろうとて、全て殺しても貴様を滅す。兄も私も、王殺しの命を持つ国護の獣だ。なめるなよ。貴様ごと殺されるなら、その王こそ西の興王よ！」

こちらに向けられた瞳に、気に入らない色が混じる。それは主人

を取られて惑う娘のものではない。殺意すら信頼と覚える、あのかつての男神と同じ眼差しだった。

「命を果たせ」

奪われた主の体を睨み、紫晶は白虎としての責を自分の心に押し込んだ。これは為さねばならぬこと、何よりも“私が”為さねばならぬことだ。

「青龍、為す事がないなら今、我がいた方にいけ。貴方が守ろうとしたものが倒れている」

ざり、と砂利を踏む音。躊躇いを覚える音。

「いいのか、蓐収。――否、わかっている。その心に違うことなきよう」

少年を呼び、青龍は向こうへと駆けていく。自分はゆるりと人型を取り戻しながら、国の守護と王とが対峙する場面に、戸惑いただ立ち尽くす官たちに声を張った。

「気を確かめろ、官共。よく見届けよ、この国とはどういうものなのか！」

返事も疎らに、だが、その視線がこちらにそそぐ。王や私が一万年前を、王たる者が何かを知らず、模索する以上に、彼らはずっと安寧の中をまどろんできたのだから。

「おい、てめぇ、どういうつもりだ？　王の体だぜ？」

笑みこそそのままだが、狼狽の気配で饕餮（とうてつ）はこちらに問うた。どうするつもり、など初めから知れている。

「ああ、それは王の体だ。我が君の体だ。私はその方のために働き、その方の意志を何よりも優先せねばならない。正しい道を歩ませねばならない」

あの笑み。紫晶は小さく息をつく。長い裾や袖を引き裂き、払う。

「その御方は、否、その御方に続くこれまでの王は、貴様を倒せとおっしゃった。西のはじめの使命を果たせと。その意志は私の心よりも強く、彼の命より重い！」

紫晶はその人の体の手足に、白虎の力を行き渡らせた。しなやか

に動く脚も、鋭い爪も、そして、何より――剛健たるのが白虎の徴。刃に血が舞う戦場の、その先陣を任せられた身。

「使命は何にもまして、果たされなければならぬ」

紫晶は繰り返すように呟き、強く地を蹴った。鈍い金属音と激しい打音。鋭く踏み込んで、紫晶は西王の体へと爪を向けた。

国の初め、四方はそれぞれに、その土地の魔獣を倒すよう天に命(めい)を賜った。それと引き換えに与えられたのが国であり、蚩尤が率いたそれらが四方に封ぜられた時、それは果たされたはずだった。しかし、この国の王や神獣はそれを良しとしなかった。封とはいつか解けるもの、またその災厄が後の世に先送りされたにすぎない、と。

あの場は、もう封ずるだけでも限界だった。だが、ならば後の王は封を守るのではなく、それを完全たる勝利へと持っていくべきだ。相手を滅して。順(まつろ)うことなき相手を生かしておいて、その先に利などない。初王は封を為したあとも、そこからあるべきと思うように働き、その記憶を継いだそれからの王たちも、そうあるべき、と自らの命を賭した。

饕餮の体は富を生む。国を潤す。そして、饕餮の体は饕餮のものだ。きっと奴は取り返しに来る。体を取りにここへやってくる。その時こそ、好機。今度こそ、完全に滅してやる。そこではじめて、西はすべてから解放されるのだ。はじめの命を全うできるのだ。

長槍の刃と白虎の爪とが、激しく交錯を繰り返す。懐に入りこんでしまえば、長槍に利はない。繰りだす手足が空を揺らす。蹴り脚を確と西王の、饕餮の腹にくれてやって、ふーっと整えるように息をついた。

西王の体が、敷石の上を滑り、ついた指や爪の食ったところから血しぶきが飛ぶ。この身とて無事ではない。頬や脇腹が熱い、きっと切れているだろう。こちらが頑強ならば、その力を預けた王の身もそう。饕餮が使おうとも、ここは白虎の力を持つ者同士の戦い。同じ力量で無ければ、こともなく砕けるような場。

「なんでだよぉ！　躊躇わねぇのか？　王なんてそうそう出るもん

じゃねぇだろうが！」

「王なら、この国だけでも三百は居た」

静かに応え、紫晶は口の中にたまった血を吐きだした。

「犠牲にしようってのか、そうまでして俺様を殺してぇのかよぉ！」

弾けるように、饕餮が向かってくる。主の姿で。ああ。

「その御方は、そんな余裕のない表情を私に見せたりはしない。ただでは死なぬといいながら、何かの為なら自らの命も手札にできるそういう人だ」

乱暴に繰りだされた白刃を避け、白いその柄を払った。西王の手を離れた槍は、弧を描いて宙を舞う。饕餮がただ憎いというだけなら、このような長きにわたって、王達は苦しめられなかった。これは命なのだ。命とは果たされるべきものなのだ。全ての生けるものに与えられたのがそれなら、最も人たる王が、獣たる神獣が、それを守らずして何が国だ。世だ。それこそが道理で、人を前へと進める力。

長槍を追って跳んだ白衣の体を、再び地上へと蹴り落とす。そして、紫晶は叫んだ。

「この国の王に、誰ひとり犠牲者などいない。皆、彼らは自分を全うしたのだ！」

犠牲というのは、何もせず殺された者の名だ。それは不幸であり、憐れまれるべき者たちだ。降りかかった災厄に、抗することのできないままに死した者だ。しかし、王達は違う。その災厄すら望んで向かい、それに激しく抗し、そして、何ごとかを為して死していった。災厄の首を取ろうと、幾世にわたり爪痕を残した。

着地して、向こうの饕餮を見やる。主の体。しなやかなる若い背。頬に別の温さが伝った。私は何をしているのだ、目の前をこうも滲ませたら、戦えないではないか。

地面にたたきつけられた饕餮が呻く。

「なんだ、言っていたことと違うな、紫晶。容赦などない」

饕餮が――否、西王が言う。紫晶は顔を上げた。寸時見えたその

笑みは、嫌味なほどに余裕があって。その笑みを掻き消し、饕餮が舌打ちをする。

「もう起きやがったか、くそ餓鬼がっ！」

「くそ餓鬼？　ああ、そうか。貴様は……俺よりもずっと子供だったものな」

同じ口で二者が話し、饕餮が頭を抱えた。紫晶は不意に緩んだ表情を慌てて引き締める。ああ、そうだ、この人は。ただでは死んだりしない。私を“残す”ようには死んだりしない。

暗渠の座

「ダオレン！　……ユーリー！」

白い砂利の上に倒れる二つの人影に、ファンは声を張った。ダオレンはやはり人狼の格好のままで、ユーリーは女官服だったが、間違いなく二人だった。西王は一座の皆を牢に入れたと言っていた。ならば、それは何のために。そんなことをすれば、王がこの騒ぎの元凶を一座に見たことになるだろうし、自分たちまでが捕えられたとなれば、みんなはまさに魔獣と一体となっていた座長の身を心配するだろう。だから、ユーリーは外へ飛び出したのだ。弁明と大赦の為に。

「ファン、お前は彼女の方を見てくれ。俺は座長の傷を看る」

シンの言葉に頷き、ファンはユーリーを助け起こす。見たところ大きな傷はない。手のひらに少しばかり、砂利で掻いた傷があるだけだ。

「ユーリー！　しっかりして！」

「ファン……？」

うっすらとその目が開く。そして、急に体を起こそうとしたが、すぐにまたこちらの腕の中へ倒れ込んだ。

「無理したら駄目だよ！」

「ねぇ、あの人は……あの人は無事なの？」

目を覆い、ユーリーが呟く。あの人、と言われて、寸時戸惑う。そして、すぐに隣を見やって答えた。

「ダオレンもきっと、大丈夫だよ。今、師匠が見てるから」

応えると、ほっと頬を緩めユーリーは微笑んだ。その目には、薄く涙が滲んだ。

「どこまでも暗くて、底がなくて、広い場所。自分の中ってあんなに寂しい場所だったのね。外の世界がこんなに明るいから、心や体から切り離された場所があんなに寂しい場所とは思わなかったの。

彼もあの化物と戦って、それで体を奪われたのね……」
体の内に据えられた魂の座。暗渠の中にぽかりと浮いたただ一つの場所。饕餮に一度体を取られた者ならばわかる。あの場所があんなに寂しいから、人はまず人を求めるのかもしれない。人間として知覚する初めての欲。
「あの人を失ったら、私は――私たちはどうしたらいいのかわからなくって。牢でなんか大人しくしていられなかったの。きっと、西王陛下からお咎めを受けるわ。でも、彼が元よりそれを受けるとするなら、私たちもそれについていきたい」
咳きこむ音がして、ファンはそちらを見やった。ダオレンが意識を取り戻したのだ。大きな体が見る間にもとの、只人の姿に戻る。こちらはすぐに跳び起きる。
「ユーリーは！」
「動くな、座長。まだ傷が癒えていない！」
「いい！　動ける」
ダオレンがこちらに駆け寄ってユーリーを抱きかかえる。
「大丈夫か？　俺はお前に何かしたか？」
問いに、ユーリーはゆるりと首を振る。
「戻ってきてくれたなら、それでいいの。――私たち、西王様に謝らなければ」
「大人しくしていた方がいい、二人ともだ」
シンがこちらに来て言う。
「魔獣に体を取られていたのだぞ、あの子供もずっと今は寝たままのはずだろう。心も体も傷んだはずだ、牢の方なり、ここで待つほうがいい。……それに、今西王は話ができぬ」
シンは咆哮の響いてくる本殿の方を見やる。やはり、あれは見間違いではなかったのか。本来の姿の白虎と対峙する、嫌な笑みを浮かべた西王。饕餮に体を取られたのだ。ユーリーとダオレンが顔を見合わせ、俯く。
「ファン、戻るぞ。白虎の、彼女のすることに俺達は手を出せんが

……万が一のことがあってはな」

ファンは頷き、立ち上がった。シンの言う、白虎がしようとしていることを、精一杯に考えながら。

饕餮がその場で膝をつき、紫晶はその場で逡巡した。今こそ、饕餮を滅する好機。饕餮の体はすでに壊した上に、控えさせた武官たちまでは距離がある。本体を晒す危険を冒してまで、住みよい、と言った体を容易に離すことはないだろう。こちらの肝だと思うから、奴はあの体を選んだのだ。だが、それは浅はかな思い込みだ。奴は西の地を見くびった。我らは己が使命を何より尊ぶ者。

なら、ならば何故この脚は動かないのか。歓喜としかいいようのない震えに、こんなにも身を任せている場合ではないのに。陛下が内より魔獣を留めている間に、私はそれに止めを刺すべきなのだ。抜け出す間もなく、体を仕留めなければ。

「何をしている！　紫晶！」

咎める声は、陛下のもの。その身の内で、魔獣と対峙する人の子の。ただ力と魂の身があるその場で、強大なる者に挑む一つの魂の。私は、誓いの通りに為さねばならない。私は。

ああ、でも。ならばやはり、彼は私を呼ぶべきではなかった。私の名前を呼ぶべきではなかった。白虎なり蓐収なり、彼が知る、彼のみが知るもの以外で私を呼ぶべきだった。彼がそこに在ると思わなければ、もう少し、ほんの少しでも躊躇いは少なくすんだはずだ。彼は私の王。互いに、認めてここまで来た人。人間の為になることが未だに解らぬ私が、唯一その望みの為に手を貸してやりたいと思う人。手のひらから爪が引く。

「急げ、俺を殺せ！」

慕わしい声。ああ、駄目だ。膝をついてしまいたい。

――私に、この人の首は取れない。

できない、と口にする前に、饕餮が声を上げた。彼の気配が薄らぐ。

「ああ、くそ！　しぶとい野郎だ！　こんな魂くらい潰してやる…！」

“饕餮”がぎりりと歯を噛みしめる。点滅するように、饕餮と西王の気配が入れ替わる。完全に体を取り戻せずとも、その動きを封じているのだ、現に饕餮は立ち上がれない。

「出来るものならやりやれ、魔獣め。こんな小僧くらい潰せずに何が西の災厄よ」

同じ口で、西王がその口元を吊り上げる。声色を探ればそれが容易ならないのは解る。だが、それでも彼は抗する。

「暗がりに閉じ込められて泣き喚くほど、俺は幼くないぞ。――内に入ってわかった。貴様は、俺よりもずっと子供なのだ。その性情も本来の姿も」

「――黙れ、くそ餓鬼！」

饕餮が自分の体を殴り、爪で掻き毟る。白衣に細かに血が飛び散る。

「餓鬼は貴様だ、饕餮！　あれも欲しい、これも欲しいと暗がりで駄々をこねる子供。何を欲せばいいのかも解らぬままに、見えるものだけひたすら欲する、ただの子供なのだ、貴様は！」

西王の、力の拮抗に痙攣する腕が、靴のかかとに触れる。震えの見える足が、石畳を踏んで強く立ち上がる。その手には薄く、月明かりに照る白刃。彼が幼いころから、ずっと衣を改めても残していた暗器。

「やはり、できないか。紫晶。甘さと優しさは違うとずっと言ってきただろうに」

西王の瞳がこちらに注ぐ。愛（かな）し横顔。兄の記憶の、無数の王達の

最期の笑みによく似たそれ。饕餮から体の支配を取り返し、身の内にとどめたまま――

「おやめ下さい、陛下！」

悲鳴にも似た自分の声に、ようやく脚が動く。言われたことの逆を、自分はしようとしている。これなら、こうも動けるのに。そうだ。兄も、私も、命を尊ぶ以上に、認めた王を、殺すでなく守るために存在したかったのだ。

「西王！　蓐収！」

風の合間に聞こえた青龍の声。自らの喉元に向けられた、西王の手の中のものを止めなければ。白虎の気に身を包み、刃そのものを掴もうと急ぐ。今自分がしていることは、饕餮をも救うことになる。それでも、それでも。

「おやめ下さい！」

どちらの笑みだろう、その人は笑った。お願い、届いて――

「――先が思いやられるぞ、紫晶。まぁ、今はそうだな、助かった」

伸ばした手がかろうじて刃を捉える。僅かに首に刺さった薄い刃の先に、玉のような血が滲み、膨らんで、滴った。その目は間違いなく、西王のものだ。そして、ここになくなった饕餮の気を追って、二人は空を仰いだ。

「逃げたな、饕餮」

ざらり、と上空に夜闇とは違った色の、暗きが漂う。饕餮の本質の。帰る体を失くした靄が、惑うように宙を泳ぐ。

「うるせぇ！　心中なんてしてたまるか！　ちくしょう、他の、他の体を寄こせ！　俺を呼ぶな、畜生、体を！」

転がっていた長槍を拾いあげ、西王はどん、と石畳をついた。

「なるほど、こうやって初王は体を取ったか。お前はやっぱり子供だぞ、饕餮。奪ったもの、得たもの、手に入れたものは、それを保持しなければ何の価値もない。どんな玩具も使い捨てにする者には次のものなど、手に入らん」

饕餮の答えは声にならぬ、砂塵の咆哮。散ることもどこかに映る

こともままならず、王宮上を旋回する魔性。
紫晶、と西王が自分を呼ぶ。目で示された先には、こちらを饕餮に警戒する東の守護と、天恵の子。
「二極封にする。小僧にあれをやれ。足止めは俺がやる。……すまないな」
聞きとるのも難しいほどの、ささやかな謝罪。彼が謝る必要などない。そもそも彼は何に謝るのだろう。否、意味など解っているが、それよりもこの身を染めるのは何よりの忠誠と歓喜だ。微かに頬を緩め、紫晶は声を張った。
「御意のままに、我が君！」
駆けだした後ろで光輝が走る。代々の西王に継がれる、饕餮の為の仕掛け。辺りの光と共に生まれた風が、白い砂利を吹き飛ばし、その下に刻まれた円陣を浮かび上がらせる。
「さぁ、他に手を用意して来たか？　無いなら、こちらから出るぞ。百と少し前の王に代わってな」
「嫌だ……やめろ…！　嫌だぁぁあ！」
円陣の上で渦巻いた風が、黒い靄を絡め取りその内に抱きこむ。
「――初王と、俺に苦戦するような魔獣だ、きっとお前は四凶の中でももっとも弱い。違うか？　……捕えたぞ、饕餮！」
紫晶！　と西王の声が届く。急がなければ。封印の類は大抵が、そういう術に長けた王が掛けたもの、今上が王とて得意不得意がある。彼はそう言う類が苦手なのだ。
「手を貸すか、蓐収」
問うてきた青龍のもとに駆け寄り、頷く。
「青龍、二極封をやります、できますね？」
まさか、と驚きを見せる青龍をしり目に、少年の方に向き直る。
「やるしかありません。それに、貴方ならきっと出来るでしょう」
何ごとか、と戸惑った様子の少年の額にそっと手を触れる。
「あなたに、白虎の力を預けます。借り受けた三柱の神獣の力を以て、青龍の補佐をしてください」

白い光が少年の額に吸い込まれていく。瞬時、白虎の力が少年の体に溢れたが、すぐにそれは内側で静かに収まっていった。さぁ、これで準備は良い。

「蓐収！」

西王のもとに駆け寄ろうとして、青龍が呼びとめる。

「――良き王だな。己が“初王”を守りたまえ、新しき白虎」

返事の為には振り返らなかった。西の獣は、今ようやく王を守るために存在できたのだ。

西国は来たり、又進む（前書き）

※前話の視点違いの部分があります。

西国は来たり、又進む

ここに来るまでも、こうして西王達の方へ戻る今も、シンの表情は険しかった。万一のこと、とシンが言うのが、まるで本当になってしまうような色を含んでいたからだ。昼間の西王との話が甦ってくる。その時の話よりもこの場はもっと慌ただしく、必死の様相を呈していた。

「俺達は、助けてやれなかったのだ。ずっと、西がどういうことを続けてきたか、知っていたのにな」

達、というのはシンを含む他三方の神獣か。微かに向こうから聞こえて来る声の他には、王宮内は静まり返っている。ただ、神獣魔獣の気が満ちているから、音の方へあまり気がいかないだけなのかもしれない。本殿前へと駆けもどりながら、シンは呟くように続ける。

「あの御仁が死ぬまで、俺達は気付けなかった。何も西が特別だったのではないと」

そうか。前の白虎が、そして、代々の王達があまりにも当然のように、弑し、弑されてきたから、西とはそういうもので、それも当たり前のことだと、皆思いこんでしまったのだ。その中で押し込められてきた西の歪は、凶荒となって中つ国に溢れだした。

夜気に呼吸がふと白くなる。きりりと冴えた空気に、どろりと流れる饕餮の気配。

「あの御仁だからこそ、今までもったのだ。俺達は、自分のところの安寧にそれを忘れていた。急ぐぞ、今度こそ西は助からねばならん」

ファンは黙って頷いた。そうして、思う。天下は一万年、泰平だったのではないのだと。西の地のように、所々に歪みを生みながら、あたかも泰平のように取り繕われてきたのだ。そこで生きる無辜の民に、善なる王と臣達に、国の守護たる四柱の神獣に——天に。皆、

今は平和なのだ、と思いこんで生きてきたのだ。戦いは終わった、もう起こることはない。辛い記憶を忘れ去ることこそ、そこから逃れる術だと思ってしまったのだ。

踏みしめた砂利に、微かに夜露が混じる。その音は重たい。飛びこんですぐに聞こえたのは白虎の悲鳴、見えてきたのは西王が自刃しようとする姿だった。西王は、その身ごと、饕餮を滅ぼそうとしているのだ。白虎がそこへめがけて走る。

「西王！　蓐収！」

シンが叫ぶ。見守るしかない状況に、ファンもじっとそれを見つめた。

――緊張に、止まったように感じる時。

自らに振り下ろす刃よりも、僅かに白虎の手がその先に届く。急速に動き出す時間に、何ごとか交わされる会話。シンが横で息をつくのが聞こえた。

ほっとする間もなく、そこから逃げ、沖する黒い靄をねめつける。饕餮の本体。人の体を奪い、我がものとする魔性の獣。西王は、いつもの余裕ある笑みでそちらを見据えて、魔性と語らう。

「西王は、どうするつもりだ。体から離せば、誰も死なんがあれも死なん」

沖する黒靄（こくあい）と西王が何か言い合い、西王の手にする長槍の先、饕餮の足元で光が溢れた。目をこらせば光の線で描かれた円には、何か文字が刻まれている。旋風と閃光。饕餮がそれに引きこまれ、悲鳴を上げた。

ふと見やると、白虎がこちらに掛けてきている。傷だらけで、ひらひらとしていた衣も、裂けて酷い様子だ。

「手を貸すか、蓐収」

シンが問うと彼女は頷いた。白虎がちらりとこちらを見やる。彼女が頷くので、とっさに頷いてしまった。

「青龍、二極封をやります。できますね？」

「まさか」

シンの言いかけたのを遮り、白虎がこちらに向き直った。
「やるしかありません。それに貴方にならきっと出来るでしょう」
覗き込む紫の瞳が美しい。だが、初めて会った時のような戸惑いと不安はもうそこになかった。自分が何をすればいいのだろう、シンが驚くような何か。解らぬままに見つめていると、彼女がそっとこちらの額に触れた。じんわりとした温かさ。
「あなたに、白虎の力を預けます。借り受けた三柱の神獣の力を以て、青龍の補佐をしてください」
その瞬間自分の中を、白い光が駆けた。高く澄んだ鐘の音のようなものを伴って。白銀の毛に覆われた手足と、それまでなかった尾の感覚。西王や目の前の人から感じる匂いと同じもの。僅かな間に力の溢れのように出たそれも、すぐに収まって元の姿に戻った。
「荷が重いと思うかもしれません、ですが、貴方は大丈夫。彼もそう思っています」
何をすればいいのかはちっとも解らないまま、頼みます、と彼女はこちらの肩に軽く手を置いて微笑んだ。その足で、また西王の方へと戻る。
「蓐収！」
シンが呼び、白虎が足を止める。
「――良き王だな。己が“初王”を守りたまえ、新しき白虎」
シンの言葉に、ファンもはっとする。彼女にとって、今の西王こそが初王で、真に相対した唯一の王なのだ。彼女は振り返らずに、応える。歓喜に満ちた声で。
シンがこちらに振り向く。
「ファン。本当はゆっくり教えたいところだが、急ぎだ。龍化して、俺の前に立っていろ。言うとおりにして、気を抜かなければ、きっと大丈夫だ」
「な、何をするんですか？」
シンが西王達の方、饕餮を捉えた円陣の方へ足を踏み出して、ファンもそれを追う。

「饕餮を封印する」
「えっ」
短い応えに、思わず問い返したが、シンは答えなかった。自分に、神獣の掛ける封を手伝えという。向こうはおそらく西王がやるのだろう。
無茶だ。戸惑っても安心に足る答えはない。そして、円陣との距離はあっという間詰まってしまった。とにかく、言われた通りに。ファンは自分の中に吹く青い風に身を預けた。

二極封

シンに勧められるままに、ファンは円陣の端を踏み、前へ向かって手を差し出した。

「小僧、しくじるなよ、といっても俺達はしくじりようがないが」

円陣の向こう側で、白虎化し、同じように手を突きだした西王が言う。風に髪が巻き上げられてなびく。見あげると、風壁に閉じ込められる饕餮が、雷雲のように形を変えながら渦巻いていた。呻きも砂利の鳴る音にかき消され、そのほとんどが聞きとれない。

「お前等だ、神獣！　しくじるなよ」

「誰に向かっていっている？　西王！　貴下に心配されるほど、落ちてはいないぞ」

すぐ後ろでシンが応える。

「陛下、始めます」

西王の後ろで、白虎が声を上げた。それまでにあった円陣が崩れ、神獣の二人の足元に新たに光の円が広がる。自分と西王はその円陣の内側に抱きこまれている。巻き起こっていた風が止み、饕餮が円陣の外に逃れようとその形を平たく崩す。

「そんな出来合いの封印になんざ、捕まって――」

壁の消えた円の上から、ざらりと靄が動きだす。

「出来合い結構。もともと、この封印は使う機会のなかったものだ。だが、効は身を以て試せ！」

西王の言葉と共に、円の中心から液体のような光が溢れだす。それは意志を持つように空へ空へと、その腕を伸ばし、掴みようのない饕餮の靄を掴み捕えた。

「なんだっこの光、放せ！　何で掴めるんだよぉお！」

振り切ろうと様々にその形を変える饕餮を、沸き立つ流体の光が次々と捕え、地へと引き留める。

「元々この封は、相対する国の神獣が揃わねば出来ぬもの。建国以

来、四散した我らにはもはや無用の術だった」

白虎が静かに呟く。八の字に開かれた腕が少しずつ上へ差しあげられる。円の外側を淡く白熱し、王宮前を照らす。

「だが、四神の双柱を揃えたこの術の効は、お前等を捉えたあの封に次ぐぞ」

対するシンも同じように手を上げると、円の内側に青く灯が走る。

「理に背きし、魔性の者よ。凛冽なる導（しるべ）によりてその身を照らせ――顕（しろ）に」

凛とした白虎の呪言に、西王の足元に小さな円が生じる。中央から沸き立つ光にからめとられ、饕餮はじわりじわりと地面へと引き寄せられている。もう、跳び上がれば届きそうなほどに地表近い。

白虎の呪にならい、シンが明朗に声を上げる。

「叫喚に言祝ぐ、災禍の者よ。永久の底へとその身を溶かせ――漠（あお）に」

自分の下でより光が増したのに気付く。きっと、西王の足元と同じものだ。

「陰陽の路となる東西の礎の名のもとに、ここに封ずる。鎮まれ、饕餮！」

双神の唱和に、外円の二点からそれぞれに弧を描きながら中央へと光が走る。饕餮はもうファンの目の前まで、押し固められ、引きずりおろされていた。封印に照らされる黒紅の靄は表情の解るほどに凝集し、悲鳴にも似た音を立てる。

「や、やめろ……嫌だ、そこには何もない……」

微かな饕餮の声に、ファンは靄を見つめた。揺らぎ、時々はあの石像と同じ姿になりながらも、そこにあったのは十かそこらの、影で出来た子供の姿。

「嫌だ、嫌だ……！」

人の形に揺れる靄の、あるはずのない目がこちらを見る。そこにあるのは恨みや怒りや――

「小僧！」

西王の声に、ファンは慌ててそれから目を離した。見るな、聴くな、思うな。紫に輝く瞳が、無言のままにそう告げる。迷っては、いけない。

外から内へと向かっていた光が、ひと際輝き紋様を為す。太極図だ。

「二極封！」

白虎と青龍の声に、辺りが見えなくなるほどの閃光が走る。鋭く高い音と、耳をふさぎたくなるような饕餮の悲鳴。咆哮を上げていたあの低く恐ろしい声ではなく、小さな子の泣き叫ぶような、頭の芯に残る声。

光が収まると足元の模様はなく、中心だったところに、掌に乗るほどの黒い球体が生じていた。泡のようで、玻璃の玉のような、中にあの黒い靄を揺らす球体。饕餮を内に封じた球。

ほっとした瞬間、脚に力が入らなくなった。後ろに転がるように、ファンはどすんと砂利の上に腰を下ろす。手も足も、今になって震えが来ている。ああ、なるほど。確かに最中にこうなれば封印どころではない。

「上手くいったか。――殺せなかったが」

西王が小さく呟いたのを聞きとる。見えた八重歯が唇を噛んでいる。

「いいのです、陛下。この国は、まだ続きます。大丈夫です」

白虎が笑みを湛えてそれに応える。紫晶、とそちらを見た顔は、どういう表情だったのだろう。振り向いた顔はまたいつもの西王の表情だった。

「どこに置いておくかな。いっそ、御柱に持っていっても――」

中心に転がったそれに、西王が手を伸ばす。途端に、背筋に走る寒気、心臓を掴まれたような重たい空気。

「西王様、駄目だ！」

ファンは弾けるように声を上げた。西王の手にはもう既にあの球が握られていたが、禍はその下からだった。光を生んでいたあの中

心は、今や地を這うような夜にも暗い闇を生じていた。暗い穴のような底から、白い腕が伸び、西王のその手を掴んだ。

「何！」

身構える双神と、再び緊張する空気。細く白い腕は、その闇に引きずり込まんばかりに西王の腕を引く。彼の踏みしめる足が、砂の上を滑り、体が徐々に暗闇の方へと近付けられる。ファンは、その白い腕を凝視した。月のようなその肌に、刻まれた紋様。導かれるように明滅する記憶。谷へと消えたあの微笑。

「ジュジ……？」

脚は未だに動かない。白虎が鋭い爪でその腕を裂こうとして、見えない壁に弾かれる。白虎が空を叩き、シンもそれに気付いて、壁を確かめる。あの円があった内に、残るのは西王と自分と、あの見覚えのある腕だけ。ただ引かれるままの、西王にファンは声を張った。

「西王様！　それを、それを手放してください！」

「何を、これは――」

時間がない。這ってでも、と体重を前にやると、ようやく抜けた腰が戻ってきた。転がるように、前へ。

「この国に今必要なのは、これじゃない。あなたなんです！」

ファンはかたく握りしめられていた西王の指を乱暴に解き、球をその手のひらから剥がした。空に転げたそれを追い、手は西王の腕を離した。西王は弾みで、後ろへと体勢を崩し、座りこむ。黒い球は弾む。二回三回弾み、転がったそれを掴むと、手はまるで別れを告げるように、ひらひらと闇の中へと沈んでいった。そして、確信する。あれはジュジで、間違いなくこちらの敵なのだと。

収束

闇が完全に消えて、西王が吠えた。
「小僧！　何故、あれを渡した！あれがなければ、この国はまたいつかあれを相手にせねばならなくなる！　先の世に――紫晶にそれを負わせろと」
その言葉を遮り、白虎が西王のもとへ駆け寄った。
「陛下！」
壁が消えたのか、西王の身を確かめるように触れて、その場にへたりと座りこむ。
「いいのです、私は戦えます。貴方に言われたように、強くもなりましょう。だから、今は貴方がいなければ困ります」
今すぐにもこぼれんばかりに、瞳を潤ませる白虎に、西王は言葉を詰まらせた。ファン自身も、僅かにでも、これが奪われることの危険を思った。けれども、それ以上に、西王は意地でも饕餮を離さないだろうと痛感した。己が身を捨ててでも、彼は国の為に、そして、自らの神獣の為に。
「すみません。でも、あのままだと、西王様ごと球も持っていかれてしまうと思ったんです。なら、もしこれから取り返す機会がくるとしても、西王様がいないと困ると思いました」
西王が捨てるようにため息をつく。苦々しい表情。
「ファン、あの腕はお前が言っていた者の腕か」
シンが問い、ファンは頷いた。
「ならば、あれはきっと、そう遅くなくまた現れるだろうな。……西王。二極封を言いだして助かった。俺にもあの腕がどういうものかは解らんが、そう破れる封ではないし、下手に破れば饕餮の方がもたんだろう。ならば、ここにおいて一番恐れるべきは、貴下がいなくなることだ」
シンの言葉に、西王は外を向き呟いた。

「お前らは、俺を買いかぶりすぎている。知らんぞ、後に何があっても」

再びのため息。

「西王、蓐収。手負いだろう、すぐに治して――」

シンが膝をつき、緋に染まった白衣に手を伸ばす。

「いい！　やめろ、青龍」

手を払い、西王はじっとシンを見据える。

「傷でも残らねば、俺はきっと忘れてしまうだろう。今夜のことも、どれだけ忘れずにいようとも、薄らぐのが記憶の常だ。貴様ら長命を見るといつも思うのだ、どれほど大切なことも、長い時はきっと忘れさせてくれるだろう。これは、人に与えられた、幸せであって、とてつもない不幸だ。だから、申し出はありがたいがな、青龍。俺は、このままでいい」

そうか、と呟き、シンは傍らの白虎にも視線を送る。彼女は微笑み、ゆっくりと頷いた。

「私も、そうしようと思います。今日のことは忘れたく、ありませんから」

その笑みに、シンは竜麟を纏った手を引いて、応えるように頷いた。

事態の収束に、宮殿内の官たちが騒ぐ気配がある。一時でも、とゆったりと白虎に体を預けていた西王が、はっとその体を起こす。

「まだ、仕事がある。町に害はないか、宮殿内の損壊は、ああ、そうだ。おい、牢の者を離してやれ。元の部屋も、開けてやって――」

「陛下、今は」

西王の言葉に、隣に座した白虎が静かにそれを制した。そして、それに応え西王は深く息をついた。

「そうだな。駄目だ、頭が回らん。二晩も起き続けるものじゃない」

陛下、と獅子髪の武官が、少し離れたところで膝をついた。

「御命令を。皆、殆ど仕事らしい仕事をしていないので、力を余しております。如何様にもお命じください。さすれば、少しでもお休

みになれましょう」
「……先に下したあの命令に、力を尽くさなかった、ということか？」
西王がにやり、と笑み、顔を上げた武官が気まずそうな顔でまた下を向く。
「いえ、そのようなことは……」
「わかっている。お前らもよく務めた。もう明けが近いが、戒厳令を解いて、町を見回れ。獣がまだ引いていなければ、橋も戻せん。あとの小事は――シーヤー、お前の方がよく知るだろう。俺は、この通りの餓鬼だからな」
いえ、と小さく笑み、武官は深く礼をした。
「御意のままに。それと、牢番にはもう言いつけておきました。ですが、お話は、陛下がなさるだろう、と何も言わずにおきました故」
「ああ、好い。起きたらやる。――他の者にも伝えてくれ、子供が寝損ねてぐずっているから、しばらく放っておけと」
は、と短い返事があって、武官はまた慌ただしく動き出した王宮の人の中へと消えていった。見回した臣や官は、急がしそうにしていたが、その表情は明るい。
「さて、と。ほら見ろ、俺が命じずとも、殆どのことは動くぞ」
閃かせた手の上で、赤かった月はすっかりと白く、王宮を照らしている。傷を押さえて息を整えると、西王が長槍を杖のようにして立ちあがった。
「俺はもう戻る。貴様らも……と思ったが、令を解いたばかりで宿に戻るのもな、大抵の者は貴様らがどういう人間かは解るだろう、適当にここで部屋を借りろ。客人だと話を通しておく」
「有り難い。ああも大がかりな術は久しぶりだったからな、歩くのも気だるい」
白の神獣と王が歩きだし、ざり、と白砂利が音を立てる。
「厚意には甘えさせて貰おう、ファン。お前も、休んだ方がいい。よくやった」

「いえ、あの……」
褒められたのが妙にそぐわない気がして、はっきりと返事をしかねた。何が大きく動いたわけでもないし、今思えばあれはあっという間だったから。俯いていると、シンがぽんと頭に手を乗せ、笑った。
「実感がないか？　だがな、あの封の軸になるだけの人間はそういないぞ、本来王と神獣で行うものだからな。落ちつけば、自分がしたことがよくわかるはずだ。だから、今は、よく休め。……俺も疲れた」
今度は、はい、とファンも笑って答えた。さぁ、王が言うには、夜明けは近いらしい。だが、まだまだ空は夜の色、寝付くには充分に暗い。立ち上がったところで、向こうから小僧、と呼ぶ声があった。王だ。ファンは、上ずった調子で返事をして、手招きの下に参じる。
「ついさっきのことを、忘れていた。――お前に、白虎の力をやったんだったか」
「はい！　蓐収さんから。あ、そうですね、お返ししないと」
どうしようか、と思う間もなく、西王は声を上げて笑った。初めて見る、快い笑い方だった。傷を押さえ、ほんの少し眉尻を下げながら、西王は言う。
「やったものを返せと言うほど、俺はしみったれちゃいない。くれてやったんだ、ありがたく使え。だが、本当は俺だけのものだ、見せびらかすな。それだけだ」
その言葉と同時に、体の中の白光が再び全身を駆ける。白色が体になじむ。
「え、は……はい！　ありがとうございます、西王様！」
踵を返した王に慌てて礼を言い、ファンはじっとその背を送る。
「……クーフェンと言う。ファンといったか？　大義だったな、礼を言う」
振り返ったのはほんの数瞬、しかし、その顔は今までに見たどの

ような表情よりも、穏やかで。これまでに見た王達と同じく。なるほど、きっとあれが王の顔なのだろう、と思った。頭を下げたのは無意識だった。

そういえば、話していたあの呪いはどうなったのだろう。体が消えて、呪いも消えたのか。それとも、本体が消えない限りはあの呪いは続くのだろうか。きっと、彼らは乗り越えうるだろうと思う。でも、できるなら、あの二人が見合わせたあの優しい笑みがいつまでも続けばと思った。

獄の主

どこまでも果てしない暗渠の底に、さらに暗く、霧が人の形を成す。凝集した黒い霧から、白い手足が伸びる。青い燐光に照らされる、少年の白皙。優美にたわめられた口元は、歌いだしそうなほどに上機嫌だ。その手の上では、橙ほどの玻璃の珠が遊ばれている。中には、暗褐色の靄がゆらりと揺らめいている。

「いやあ、助かったぜ、ジュジ！　あの餓鬼どもに壊されるところで……」

「ねぇ、饕餮」

玻璃の珠を覗き込み、そこから聞こえた声に少年は応えた。

「ボクはさ、キミのこともう少し賢いかなと思ってたんだ。だから、せめて、西王の首か白虎の首くらいは取って来られると思ってた」

ぽん、と上に投げ出され、珠から短く悲鳴が漏れる。

「まぁ、思った通りではあるよ。勝てはしないだろうって。でも、これはすこし、ひどすぎるね」

「だってよ、西の奴だけならまだしも、東の龍まで」

玻璃の中でくぐもる声を、上に下に投げながらジュジはとん、と玉座に腰を下ろした。他の四凶の姿は無い。獄は広い、別の場所にいるのだろうか。周りにあるのは、小さな闇を食む魍魎（もうりょう）の姿だけだ。

「好きに喋ってて。ボクは疲れた。だから、うっかり珠を投げ落とす、ってこともありえるね」

「や、やめてくれ……！　中に入ってるだけじゃあねぇんだ、今、俺様の体はこれになってて壊れたら」

ぱし、と音を立てて、ジュジは珠を掴んだ。

「ああ、知ってる。ねぇ、饕餮。ボクが、どうしてキミを西王の手から取ろうとしたかわかるかい？」

「そ、そりゃあ、仲間だから――」

その言葉に、ジュジの笑みがより深められる。

「仲間？　何それ」
緋色の瞳が、玻璃にうつる。全てを溶かしゆくような鮮やかな赤。
「下手にとられるよりは、壊してやろうと思ったのさ。力だけの馬鹿は要らないんだ。……でもさ、ボクは今機嫌がいい。ボクの手伝いをしてくれれば、引っ掻いて遊ぶくらいには、してあげるよ」
白い指が玻璃の面を撫で、爪が小さな高い音を立てて滑る。
「わ、わかった。でもよ、こんな体じゃあ、手伝いもなにも……」
ジュジはこつ、と爪が珠を叩いた。そして、指は泥に沈むように玻璃の中へと入りこんでいった。饕餮が悲鳴をあげる。
「流石に、地上へは出せないけれどね。まぁ、キミはこれで充分でしょ」
指先がするりと黒い靄を掴み、煙から引き出す。もやの一端はジュジの手にしている珠へと繋がっているが、黒靄はすぐさま人牛の形に歪むと、ざらりと音を立て、ジュジへと詰め寄った。
「はは！　出してくれて、ありがとよ！　ただ、俺様を馬鹿呼ばわりしたことは、死んで償え！　糞餓鬼が」
靄は近くの魍魎に入りこむと、その小さな体を膨れ上がらせ、爪を向けた。白い喉元に、刃のような爪が食う。
「やっぱり、キミは。――愚かだな、餓鬼はどっちだ」
冷たく、低く声を発し、ジュジは手にしていた珠を指先ではじいた。珠は白光をはじめ、黒い靄を再び吸い込む。あの術が再現されるような、光と風。術が溢れさせた光が、周りの魍魎達を消し、灯っていた燐光を明滅させる。
「な、どういうことだ、こんなこたぁ、蚩尤様も――」
「魔の者の術だろうと、天の者の術だろうと、ボクには何も関係がない。さて、死にたいか、饕餮」
ジュジは手のひらの珠に力を込めた。細い指に力が入り、その下で玻璃の珠はまるで泡のように歪になり始める。
「お、お前は……俺達魔獣とも違う。蚩尤様の、子なんかじゃねぇ。何なんだ、お前は！　嫌だ、やめてくれ、死にたくない！」

珠は今にも爆ぜそうで、中の黒靄は雷雲のように渦を巻く。
「キミが欲しがるものは全部与えないことにしたんだ。だから、その答えもね。ただ、まぁ違いがわかっただけでも、お利口じゃないかな」
ジュジは空へと珠を放り、また手のひらでそれを受け止めた。ジュジは珠から目を離し、広々と続く闇へと目を向ける。誰かがこちらを窺っている。――窮奇か。が、出てこないところをみると、また向こうも何か思惑があってのことだろう。面白い。
「二度目はないよ、饕餮。――この獄の、西側。キミのすみかのどこかで、東の怪物が封じられているよね。それを起こしてきて欲しいんだよ」
「な、あんなもん、起こしたら――」
「頼むね、饕餮。うまくいけば、今度はこの封印も解けるかもしれないし」
にこり、と笑い、ジュジはまた珠のなかから黒い靄を引き出した。そして、出てきた饕餮に玻璃の珠を渡す。
「はい。ちゃんと守っていれば、割れないさ。さぁ、行ってきて、饕餮」
笑みはやわらかいが、有無を言わせぬ気色。気付けばこちらを窺っていた視線が消えている、饕餮がこうしてかりそめとはいえ姿を取り戻したからか。それとも、こちらからの視線に気づいたからか。ともあれ、誰がどう動こうとも、この先どうなるかなど、もう決まっている。ずっと、長い長い時の上で、一つの意志の元に動いて来たこの世界。そう、誰が、どれだけ抗おうとも。誰が、どれだけその意の主に近づこうとも。何も変えられやしない、この自分以外は。
「さて、と」
肘掛を掴み、黒曜の玉座から立ち上がる。ぐっと伸びをすると、宮殿の隅から、新しく魍魎達が王座の間にやってきた。ジュジはほほ笑む。
ここは、捨て場だ。上の世界で、あれが気に入らないものを全て

追いやった、不要なものたちの空間。ここを作り出した、建国の魔たちも、初めに封じられたあの一柱の神も。

「そろそろ、“青龍”が邪魔だね。動こうかな」

ジュジはその足元を霧状に霞ませる。彼らは今、どうしているだろう。僅かに得られた勝利に酔っているだろうか。残った不安に惑っているだろうか。ジュジは笑みを深める。太極は育っている。もう、最も優れたる人間、王達に並ぶほどに力を付けて。あとは、心を、意志をこちらに向けてやればいい。

「待っているよ、ファン。キミが、ここに来る日を」

白影は揺れ、黒い霧に解けて消えた。

裁定

目が覚めると、日はすっかり高かった。シンは布団を跳ねのけ、寝台から起き上がる。今は何時なのだろう。力を使ったことを考えると、下手をすれば丸一日寝ていた、ということもあり得る。

饕餮を封じ、西王を見送った後、部屋を借りるのに誰に声をかけたらいいか、と辺りを見まわした。すぐに、女官が進み出てこの部屋に通してくれたが、その後はもう倒れこむように眠ってしまったから、後のことは定かではない。

気がつくと、横で眠っていたはずのファンの姿はない。先に起きたのだろうか、起こしてくれて良かったのだが。解けていた額の布を締め直し、封をされたままの夙風を帯びた。支度はもう殆どが出来ているはずだが、北への道はまた今までの道とは趣が違うと言う。誰かに聞いて、旅の道に不便が無いようにしたい。いつ発とうか。本当ならば、一座の公演を見てから出るつもりだったが。

扉が開いたのに気付いて、そちらを見やる。ファンだ。

「あ、目が覚めましたか、師匠！」

ああ、と頷き。少しの疲れも見えない弟子の姿をじっと見やる。

「お前が起きた時に、起こしてくれても良かったんだぞ。……あれからどれくらい時間が経った？」

問うて、部屋の窓を開けた。確かに、空気も秋風とはいえ日中の温みを帯びている。

「おれも今朝やっと目が覚めたんです、丸一日寝ていて。あれが、昨日の明ける前で、一日半もう経っています」

「そんなにか。許しがあったとはいえ、さすがに甘えすぎたな。そういえば、宿は」

「聞いたら、もう王宮の人が既に引いてくださっていて。荷物を預かっておいてもらいました」

「ありがたい話だ」

応えて、しかし、と頭をかいた。改まって礼を言われるのは、あの王の好むところではなかろうが、言わなくては。それに、二極封の件がある、少しでもそれがもつ危うさについて話しておきたい。息をついて、夙風を見やる。特に、自分がこんな状況であれば。

「そういえば、どこに行っていた？」

「ダオレン達のところに。水盆鏡を借りたんです。ちびのことについて、先生ならもしかして何か見えないかなって思って」

「バクにか。……鏡を通して、きちんと見てもらえたか？」

ファンがしっかりと頷いた。そういえば、三柱の神獣をの力を得たというのに、ファンは随分と落ちついて見えた。否、力を得たからか。不思議なものだ、とシンは頬を緩め、寝台に再び腰を下ろした。

「見える限りでは、ちびのお父さんもお母さんも、もういないだろうって。しばらくは、辛い夢を見るかもしれないって。――でも、俺はきっと一座の皆といれば、大丈夫だと思うんです」

きっと、親を失った子だからこそ、子が親を求める力を饕餮がここへ来るために使ったのだ。それを思えば、饕餮の足になったとはいえ、そのことは結果的に幼子の命を伸ばした。

そして。水盆鏡が、互いにやり取りできるものは、その術者同士が良く知るかどうか、また、互いの力関係に大きく左右される。最低限出来るのは会話だが、小さな物のやりとり、ましてや水面を通して、術や力のやりとりをするなど、よほどの者同士でなくてはできない。おそらく、バクは相当に驚いただろう。数日前とまるで違うこの姿に、この姿にきっとあの仮親は、自らの予感に不安すら抱くはずだ。

「あの座長なら、悪いようにはしないだろう。……そういえば、座長の処遇はどうなる。もう沙汰は出たのか」

「いえ、それはまだだって聞きました。でも……」

ファンが俯いた。ただ人から見れば、魔獣の収まった子をここまで連れてきて、座長その身を魔獣に渡して都に危険を及ぼした者に

見えるだろう。
「あの童のことはな、一緒にいて気付けなかった時点で、俺にも責任があるだろう。うまく減刑できればいいが」
話していると、扉を叩く音とともに、こちらを呼ぶ声がした。
「お目ざめだろうか、東の御客人は」
返事をしてやると、そこには文官の長らしき男が立っていた。イーホウ、といっただろうか。
「西王陛下がお呼びです。あの一座への裁定にお立ち会い戴きたいと」
「すぐに向かうと、御返事願いたい」
願ってもないことだ、元よりそうしようと思っていたところなのだから。

二人が着くと、謁見の間には座長とあの舞子、幾人かの若手が通されていた。西王の姿はまだない。座長はこちらに気付くと、苦々しげに笑って見せた。もうとうに観念している、といった顔だった。他の者の顔には緊張が張り付いている。
「陛下がおいでです」
誰とも付かぬ声に、皆揃って平伏した。颯爽と頭上を通り過ぎる白い衣と風。足音は二つ、白虎もいるのか。好い、の言葉で顔を上げると、西王は正装していた。大抵、国の重要な儀式ほどしか王の正装は見る機会がない。それにこの王はよく動く、邪魔になる格好は好まぬように思ったが。
「数刻寝れば充分、昨日の朝儀に起こせばいいものを。おかげで沙汰がこんなに遅れてしまった」
西王は口を開き、一座とこちらとを見回した。
「よく眠れたようだな、青龍。……逆に、眠れたか？　雲海座の」
好い、と言われても未だに顔を上げられずにいるダオレンに、西王はにやり、と笑んで問うた。ダオレンは、ただ一言強張った声で、いえ、と応えた。

「さてな。座長。沙汰、と言ったくらいだ、どうなるかはわかっているな」
「は、ですから。此度の罪科はすべて私の上に――」
「そうもいかぬ」
　粛々と応えるダオレンの言葉を、西王が遮った。そこでようやく、ダオレンははっと顔を上げる。きっと、一人で罪を被るつもりで来たのだろう。
「黙っていれば解らぬものを、魔獣の憑いた貴様を見て、お前の後ろにいるそのもの達は、口を揃えて自分達の座長である、と言った。それに、貴様らが連れてきた子供。あれが魔獣をここに持ち込んだのだ。罪を犯した者が何かに属するなら、その場の者も少なからず罪を負うのが道理だろう。一人の為に長が罰を受けるのなら、長の為には皆が罰を受ける。間違っているか？」
　異論があっても、ここで王に対して違うとか言い難い。当然ながら、反する声はなかった。黙っていれば、良かったのに。唇は確かに、声は微かに、ダオレンが呟く。
「此度の件に関しては、一座全てで罪を負え」
　くっ、と詰まった息が零れる。どれほどの罰が下るというのだ、王の身をも危ぶめた罪が軽いはずがない。
「西王、そのことだが」
　ならぬ、とシンは声を上げた。が、それは西王の手によって制された。
「口を出すな、青龍。貴様らを呼んだのは、どうせこの者たちの沙汰を気にして、聞いてくるだろう、と思ったからだ。二度も説明するのは面倒だからな」
　そして、西王は衣の裾を払い、玉座の上で片膝を組んだ。そして、悠々と肘かけに肘をつく。
「しかしな、この国の法が及ぶのはこの国の民だけだ。口惜しいことに、流呆（りゅうぼう）の貴様らを好きには裁けん。俺は、貴様らをこの国の民と思ったことがないからな」

一座の全員が下げていた視線を、西王に注いだ。いつものように、にやり、と笑いながら、西王は続ける。

「その上に、参ったな。一座の何もしていない者まで、俺はまとめて牢に入れてしまった。王とはいえ、自分で招いた旅一座を、解らぬままに捕えたとあれば、恥だ」

少しもその言葉の意を含まぬ声色でそう言うと、西王は前へと姿勢を屈めて、指を立てて見せた。

「どうだ、取引といかないか、座長。罪は消せぬが、俺は裁けぬ。また、罪人は居たが、そうでない者も捕えてしまった。ならばどうだ、俺の罪と貴様らの罪、双方量った上で相殺するというのは」

感嘆の息の音と共に、皆の目が開かれた。

「いや、少しばかり甘いか。ならば、民達への公演は無料で行うというのはどうだ?」

傍らでずっと心配そうな顔だったファンがその顔を明るくするのがわかった。音がしそうなほどに勢いよく、ダオレンは床に頭を付けた。

「ありがとうございます、それが罰だというならば、謹んでお受けいたします。元より、首を置いて行く覚悟にありました。ならば、それしきのこと、苦ではございませぬ」

西王は短く息を吐く。

「人の首など貰っても金にならぬ。生きてなければ金は生まれぬ。――それよりも」

西王が立ち上がり、ひらめく衣の裾を見ながら言った。

「新たに舞を作ると聞いて、しばらく経った。そういえば、平服ばかりでいたからな、他所で行う舞に俺の姿が貧相ではたまらん。だから、わざわざこうして、着替えてきてやったのだぞ。いつできるのだ、舞は」

「明日の夕刻にも!」

ダオレンの発した声に、一番に驚いたのは控えていた一座のものだった。しかし、できねぇこたぁねぇだろう、と言うと、困り顔な

がらも皆笑って頷いたのだ。
「ああ、そうだ。罰を一つ足しておく。四方の王には絶対に見せぬと言う、その土地の王の舞――ここのは『白獣娘々』と言ったな、それも演目に加えろ」
その言葉に、ダオレンが目を丸くする。が、にこりと笑うと平伏しつつ答えた。
「それは、酷な罰にございますね。――確かに」
西王は頷く。
「約束したぞ、明日の夕刻だ。……さぁ、沙汰は以上だ、手抜かりは許さん、送れることもな」
はい、と一座の皆の声が朗と応えた。シンはファンと顔を見合わせ、ほっと胸をなで下ろした。何のことは無い、無用な心配だったではないか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2419s/

四神獣記

2011年12月13日06時49分発行